粕屋郡粕屋町

to bara mugi o

戸原麦尾遺跡(III)

—福岡市多々良浄水場建設に伴う緊急調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第217集

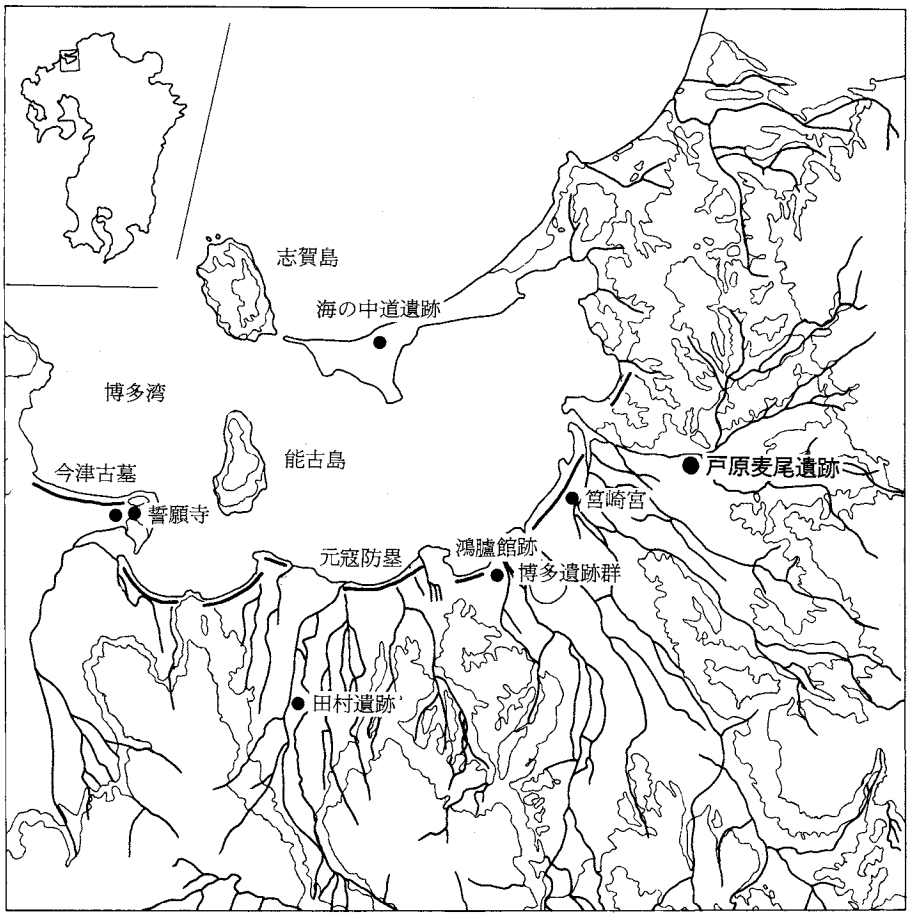
1990

福岡市教育委員会

粕屋郡粕屋町

to bara mugi o site

戸原麦尾遺跡(Ⅲ)



遺跡調査番号8403

遺跡略号　ＫＴＭ

1990

福岡市教育委員会

KTMⅢ c 区SD61出土絵馬

KTMⅢ c 区SD61
下部大溝絵馬出土状況

KTMⅢ c 区SD61内
杭列西端部（南から）

序

福岡市では、昭和53年の大渇水の経験以来、水資源の安定的確保と供給を目指して、各種の渇水対策事業を進めてきております。その一貫として粕屋郡粕屋町内において多々良浄水場の建設を計画し、昭和59年度に着工、63年度に完成の運びとなりました。

この建設工事に並行して、あしかけ4年にわたる埋蔵文化財の発掘調査が実施されました。

本報告書は、昨年度刊行の第Ⅰ区の調査報告に引き続いて、第Ⅱ～Ⅳ区の調査の成果について報告するものであります。

この4年間の調査において、鎌倉～室町時代にかけての館跡や集落跡が確認され、また当時の対外的な交易の一端を窺い知ることのできる貴重な輸入陶磁器や青銅製の鏡、また平安時代まで遡る絵馬などが出土し、たいへん重要な成果を得ることができました。

本報告書が、埋蔵文化財に対する理解と認識を深めるために、広く活用されることを願いますとともに、発掘調査から資料の整理にいたるまでの、多くの方々のご協力に対しまして、心から感謝の意を表します。

平成2年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　佐　藤　善　郎

例　　言

1．本書は、多々良浄水場建設に伴い昭和59年度から62年度にかけ、福岡市教育委員会が調査を行った、福岡県粕屋郡粕屋町大字戸原に所在する戸原麦尾遺跡の発掘調査報告書である。

2．遺跡の発掘調査は、福岡市水道局が事業主体として計画した多々良浄水場の建設にともなって実施されたものである。

3．調査報告は、昭和62年度に第Ⅰ～Ⅳ区全般の概要報告である「戸原麦尾遺跡（Ⅰ）」を刊行し、昭和63年度に第Ⅰ区に関する報告「戸原麦尾遺跡（Ⅱ）」を刊行した。本報告書は、第Ⅱ～Ⅳ区についての調査報告（Ⅲ）であり、本書をもって、昭和59年度から62年度にかけて実施された発掘調査の報告は完了する。

4．本書に使用した地図は、Fig，2に国土地理院発行の「福岡」・「篠栗」（1／25000）を用いた。

5．本書に使用した方位はすべて磁北である。真北との偏値は、西偏6°40′である。

6．掲載した遺構の呼称には下記の略号を便宜的に用いた。通し番号は、調査時の番号を再整理し、通し番号順に掲載した。調査時の番号との対比は各遺構毎の一覧表で、対比が可能である。

SA○○　；杭列・柵列　　SK○○　；土壙・木棺墓
SB○○　；掘立柱建物　　SP○○　；柱穴
SD○○　；溝状遺構　　SR○○　；旧河川
SE○○　；井戸　　SX○○　；性格不明の竪穴遺構

7．掲載した遺物には遺物の種類・材質・出土遺構の別を問わず通し番号を符した。

8．本書に収録した遺構の写真・実測図等の記録は、池崎譲二、田中壽夫、荒牧宏行、白石公高、竹下弘美、が分担して撮影・実測等を行った。製図にあたっては田中克子・田崎博之・入江のり子・撫養久美子・久保寿一郎・浜石正子各氏の協力を得た。

9．出土遺物の実測および写真撮影は田中が行なった。

10．本書は、田中が編集・執筆した。

11．付論として、福岡大学助教授佐伯弘次氏と、糸島高校講師久保寿一郎氏に玉稿をいただき、巻末に掲載した。

12．戸原麦尾遺跡に関わる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。

調査番号	遺跡名	遺跡略号	調査地地籍	開発面積	調査面積
8403	戸原麦尾	ＫＴＭ	福岡県粕屋郡粕屋町戸原麦尾他	80000㎡	32670㎡

本文目次

頁
Ⅰ．はじめに……1～2
(1) 調査に至る経過 ……1
(2) 調査の体制 ……2
Ⅱ．戸原麦尾遺跡の位置と歴史的環境 ……3
Ⅲ．調査の概要 ……9
(1) 調査の経過 ……9
(2) 各調査区の概要……10
Ⅳ．第Ⅱ区の調査 ……13～130
(1) 遺構各説……13
1) 柵列・杭列（SA03・04・11） ……13
2) 掘立柱建物（SB51～100・121～134） ……15
3) 溝状遺構（SD01～04・11～18・22～60・68） ……40
4) 井戸（SE01～30・32） ……45
5) 土壙（SK01～09） ……55
6) 竪穴遺構（SX01～100） ……58
7) 水田址……76
8) 旧河川……76
(2) 遺物各説……78
Ⅴ．第Ⅲ区の調査……131～161
(1) 遺構各説 ……131
1) 杭列（SA10） ……131
2) 掘立柱建物（SB101～120） ……131
3) 溝状遺構（SD05～10・19～21・61～67） ……140
4) 井戸（SE31） ……142
5) 土壙（SK10～28） ……142
6) 竪穴遺構（SX101～155） ……144
(2) 遺物各説 ……155
Ⅵ．第Ⅳ区の調査……162～166
(1) 遺構各説 ……162
1) 柵列・杭列（SA10） ……162
2) 竪穴遺構（SX156～158） ……165
(2) 遺物各説 ……166
Ⅶ．おわりに……168
付論１．　佐伯弘次　「中世の糟屋郡と筥崎宮領」 ……179
付論２．　久保寿一郎「古代の絵馬小考」 ……187

挿 図 目 次

頁

Fig, 1　粕屋平野を臨む(西から) …… 1
Fig, 2　粕屋平野における緊急調査された遺跡分布図(1/40000) …… 折り込み
Fig, 3　戸原麦尾遺跡調査区設定位置図(1/3000) …… 8
Fig, 4　戸原麦尾遺跡遠景(北東から) …… 10
Fig, 5　第Ⅰb区調査風景(南から) …… 10
Fig, 6　第Ⅰ区出土青銅製鳳凰文柄鏡(左)と六花鏡 …… 10
Fig, 7　第Ⅱ区調査風景(東から) …… 11
Fig, 8　第Ⅱ区調査風景(西から) …… 11
Fig, 9　第Ⅲa区調査風景(南西から) …… 12
Fig,10　第Ⅳ区調査風景(東から) …… 12
Fig,11　第Ⅱ区遺構分布全体図(方形区画溝内部分・1/300) …… 折り込み
Fig,12　溝状遺構(SD11・12)土層断面図(1/40) …… 14
Fig,13　第Ⅱ区掘立柱建物平面および断面図(SB51～53・56)(1/100)その1 …… 25
Fig,14　第Ⅱ区掘立柱建物平面および断面図(SB57・59・62・65)(1/100)その2 …… 26
Fig,15　第Ⅱ区掘立柱建物平面および断面図(SB63・67・68)(1/100)その3 …… 27
Fig,16　第Ⅱ区掘立柱建物平面および断面図(SB69～72)(1/100)その4 …… 28
Fig,17　第Ⅱ区掘立柱建物平面および断面図(SB73・74・76・77)(1/100)その5 …… 29
Fig,18　第Ⅱ区掘立柱建物平面および断面図(SB78・79・81・82)(1/100)その6 …… 30
Fig,19　第Ⅱ区掘立柱建物平面および断面図(SB84～・87)(1/100)その7 …… 31
Fig,20　第Ⅱ区掘立柱建物平面および断面図(SB88～90)(1/100)その8 …… 32
Fig,21　第Ⅱ区掘立柱建物平面および断面図(SB91～94)(1/100)その9 …… 33
Fig,22　第Ⅱ区掘立柱建物平面および断面図(SB95～97(99))(1/100)その10 …… 34
Fig,23　第Ⅱ区掘立柱建物平面および断面図(SB100(98)・121・122)(1/100)その11 …… 35
Fig,24　第Ⅱ区掘立柱建物平面および断面図(SB124(123)・126)(1/100)その12 …… 36
Fig,25　第Ⅱ区掘立柱建物平面および断面図(SB125・127～129)(1/100)その13 …… 37
Fig,26　第Ⅱ区掘立柱建物平面および断面図(SB130・131・133)(1/100)その14 …… 38
Fig,27　第Ⅱ区掘立柱建物平面および断面図(SB55(132)・134)(1/100)その15 …… 39
Fig,28　第Ⅱ区溝状遺構土層断面図(SD22・41・59)(1/20) …… 40
Fig,29　第Ⅱ区溝状遺構(SD11・12・22)部分平面図(1/100) …… 41
Fig,30　第Ⅱ区溝状遺構・畦畔土層断面図(1/40) …… 43
Fig,31　第Ⅱ区井戸平面および断面図(SE01～03)(1/40)その1 …… 46
Fig,32　第Ⅱ区井戸平面および断面図(SE04～08・17)(1/40)その2 …… 48
Fig,33　第Ⅱ区井戸平面および断面図(SE09～13)(1/40)その3 …… 49
Fig,34　第Ⅱ区井戸(SE14～16・18～20)、竪穴遺構(SX80)平面および断面図(1/40)その4 …… 51
Fig,35　第Ⅱ区井戸平面および断面図(SE21・22・24～28・30)(1/40)その5 …… 52
Fig,36　第Ⅱ区井戸平面および断面図(SE29・32)(1/40)その6 …… 53
Fig,37　第Ⅱ区土壙平面および断面図(SK01・02)(1/40)その1 …… 56
Fig,38　第Ⅱ区土壙平面および断面図(SK03～09)(1/40)その2 …… 57
Fig,39　第Ⅱ区竪穴遺構平面および断面図(SX01)(1/60)その1 …… 59
Fig,40　第Ⅱ区竪穴遺構平面および断面図(SX03～06・09～11)(1/40)その2 …… 60
Fig,41　第Ⅱ区竪穴遺構平面および断面図(SX12～19・21)(1/40)その3 …… 62
Fig,42　第Ⅱ区竪穴遺構平面および断面図(SX20・23～27・48)(1/40)その4 …… 64
Fig,43　第Ⅱ区竪穴遺構平面および断面図(SX28～35)(1/40)その5 …… 65
Fig,44　第Ⅱ区竪穴遺構平面および断面図(SX36～41・43・49)(1/40)その6 …… 66

Fig,45　第II区竪穴遺構平面および断面図(SX44～47・50・51・55・56)(1/40)その7 …… 67
Fig,46　第II区竪穴遺構平面および断面図(SX52・53)(1/60)その8 …… 68
Fig,47　第II区竪穴遺構平面および断面図(SX58・59・61～65)(1/40)その9 …… 69
Fig,48　第II区竪穴遺構平面および断面図(SX66～69・71・72)(1/40)その10 …… 70
Fig,49　第II区竪穴遺構平面および断面図(SX75・76・78・79・81・84・89・90)(1/40)その11 …… 71
Fig,50　第II区竪穴遺構平面および断面図(SX86～88・92・94・98～100、SE23)(1/40)その12 …… 72
Fig,51　戸原麦尾遺跡旧河川分布概要模式図(1/5000) …… 76
Fig,52　旧河川(第IIc・d区)内土層断面図(1/80)および第IIb区南壁土層断面図(1/20) …… 77
Fig,53　第II区柱穴出土遺物実測図(1/3)その1 …… 79
Fig,54　第II区柱穴出土遺物実測図(1/3)その2 …… 80
Fig,55　第II区柱穴出土遺物実測図(1/3)その3 …… 80
Fig,56　第II区柱穴出土遺物実測図(1/3)その4 …… 81
Fig,57　第II区柱穴出土遺物実測図(1/3・1/2)その5 …… 83
Fig,58　第II区柱穴出土遺物実測図(1/3)その6 …… 84
Fig,59　第II区柱穴出土遺物実測図(1/3・1/2)その7 …… 86
Fig,60　第II区柱穴出土遺物実測図(1/3)その8 …… 87
Fig,61　第II区柱穴出土遺物実測図(1/3)その9 …… 88
Fig,62　第II区柱穴および溝状遺構出土遺物実測図(SD01・18・19)(1/3) …… 89
Fig,63　第II区溝状遺構出土遺物実測図(SD04・11)(1/3・1/2)その1 …… 90
Fig,64　第II区溝状遺構出土遺物実測図(SD11)(1/3)その2 …… 91
Fig,65　第II区溝状遺構出土遺物実測図(SD11)(1/3)その3 …… 92
Fig,66　第II区溝状遺構出土遺物実測図(SD11)(1/3)その4 …… 93
Fig,67　第II区溝状遺構出土遺物実測図(SD11)(1/3)その5 …… 95
Fig,68　第II区溝状遺構出土遺物実測図(SD11)(1/3)その6 …… 96
Fig,69　第II区溝状遺構出土遺物実測図(SD12・13・16・22)(1/3)その7 …… 98
Fig,70　第II区溝状遺構出土遺物実測図(SD22)(1/3)その8 …… 99
Fig,71　第II区溝状遺構出土遺物実測図(SD22・25・33)(1/3)その9 …… 100
Fig,72　第II区溝状遺構出土遺物実測図(SD47・52・53・55・58・59)(1/3・1/4)その10 …… 101
Fig,73　第II区井戸出土遺物実測図(SE03・07・09)(1/3)その1 …… 102
Fig,74　第II区井戸出土遺物実測図(SE05・06・09)(1/3)その2 …… 104
Fig,75　第II区井戸出土遺物実測図(SE09・11～13)(1/3)その3 …… 105
Fig,76　第II区井戸出土遺物実測図(SE12～15・17・19)(1/3)その4 …… 106
Fig,77　第II区井戸出土遺物実測図(SE17・21・28・32)(1/3)その5 …… 107
Fig,78　第II区土壙出土遺物実測図(SK02・06)(1/3) …… 108
Fig,79　第II区竪穴遺構出土遺物実測図(SX01・03・06・08・18・23・26・33・37・38)その1 …… 110
Fig,80　第II区竪穴遺構出土遺物実測図(SX40・52・53)(1/3)その2 …… 112
Fig,81　第II区竪穴遺構出土遺物実測図(SX54～56・58・62・66～68・71～73・78・84)
(1/3・1/2)その3 …… 114
Fig,82　第II区竪穴遺構出土遺物実測図(SX78・84・92)(1/3)その4 …… 115
Fig,83　第II区旧河川出土遺物実測図(SR03)(1/3) …… 117
Fig,84　第IIb区整地層出土遺物実測図(1/3・1/2) …… 117
Fig,85　第II区包含層出土遺物実測図(1/3・1/2)その1 …… 120
Fig,86　第II区包含層出土遺物実測図(1/3)その2 …… 122
Fig,87　第II区包含層出土遺物実測図(1/3)その3 …… 123
Fig,88　第II区包含層出土遺物実測図(1/3・1/2)その4 …… 124
Fig,89　第II区表土出土遺物実測図(1/3・1/2) …… 125
Fig,90　第IIIa・c区遺構分布全体図(1/200) …… 折り込み
Fig,91　第IIIb区遺構分布全体図(1/200) …… 折り込み

Fig,92　第Ⅲ区掘立柱建物平面および断面図(SB101～104)(1/100)その1 …… 135
Fig,93　第Ⅲ区掘立柱建物平面および断面図(SB105～108)(1/100)その2 …… 136
Fig,94　第Ⅲ区掘立柱建物平面および断面図(SB109～112)(1/100)その3 …… 137
Fig,95　第Ⅲ区掘立柱建物平面および断面図(SB113～117)(1/100)その4 …… 138
Fig,96　第Ⅲ区掘立柱建物平面および断面図(SB118～120)(1/100)その5 …… 139
Fig,97　第Ⅲ区溝状遺構(SD61・62)土層断面図(1/40・1/60) …… 140
Fig,98　第Ⅲ区溝状遺構(SD19)、石組遺構(SX118)平面および断面図(1/40) …… 142
Fig,99　第Ⅲ区井戸平面および断面図(SE31)(1/40) …… 143
Fig,100　第Ⅲ区土壙平面および断面図(SK10～17)(1/40)その1 …… 146
Fig,101　第Ⅲ区土壙平面および断面図(SK18～21)(1/40)その2 …… 147
Fig,102　第Ⅲ区竪穴遺構平面および断面図(SX101～110・117)(1/40)その1 …… 148
Fig,103　第Ⅲ区竪穴遺構平面および断面図(SX111～116・119・122・124(1/40)その2 …… 149
Fig,104　第Ⅲ区竪穴遺構平面および断面図(SX120・121・125～127)(1/40)その3 …… 150
Fig,105　第Ⅲ区竪穴遺構平面および断面図(SX128・132～137)(1/40)その4 …… 151
Fig,106　第Ⅲ区竪穴遺構平面および断面図(SX138・142・146・155)(1/40)その5 …… 152
Fig,107　第Ⅲ区溝状遺構出土遺物実測図(SD61)(2/3) …… 155
Fig,108　第Ⅲ区柱穴、溝状遺構(SD07)、井戸(SE31)、土壙(SK12)出土遺物実測図(1/3) …… 156
Fig,109　第Ⅲ区竪穴遺構出土遺物実測図(SX102・103・105・110・120～123・126)(1/3) …… 157
Fig,110　第Ⅲ区竪穴遺構出土遺物実測図(SX106・107・111)(1/4・1/3) …… 159
Fig,111　第Ⅲ区表土出土遺物実測図(1/3) …… 160
Fig,112　第Ⅳ区遺構分布全体図(1/200) …… 163
Fig,113　第Ⅳ区竪穴遺構平面および断面図(SX156～158)(1/40)(その1) …… 164
Fig,114　第Ⅳ区竪穴遺構平面および断面図(1/40)(その2) …… 165
Fig,115　第Ⅳ区溝状遺構断面図(1/20) …… 165
Fig,116　第Ⅳ区表土、溝状遺構(SD71)、竪穴遺構(SX157)出土遺物実測図(1/4・1/3) …… 166
Fig,117　戸原麦尾遺跡掘立柱建物分類図 …… 173
Fig,118　多々良川下流域の条里の復元 …… 175
Fig,119　遺跡周辺の字名と条里の推定復元 …… 175

写真図版目次

図版扉　調査作業風景
PL,1　戸原麦尾遺跡とその周辺遺跡(航空写真)
PL,2　(1)　戸原麦尾遺跡遠景および粕屋平野を臨む(西から)
　(2)　戸原麦尾遺跡遠景および多々良川河口を臨む(東南東から)
PL,3　(1)　第Ⅰb区完掘状況(東から)
　(2)　第Ⅰb区掘立柱建物検出状況(東から)
　(3)　第Ⅰa区遠景(西から)
PL,4　(1)　第Ⅱa区完掘状況全景(北から)
　(2)　第Ⅱa区完掘状況東側部分(北から)
PL,5　(1)　第Ⅱa区完掘状況西側部分(北から)
　(2)　第Ⅱa区部分拡大(掘立柱建物・柱穴群)
PL,6　(1)　第Ⅱa区完掘状況部分拡大(掘立柱建物群)
　(2)　第Ⅱa区完掘状況部分拡大(掘立柱建物群)
PL,7　(1)　溝状遺構(SD02・03・16・17)完掘状況(南から)
　(2)　溝状遺構(SD20)完掘状況(南東から)
PL,8　(1)　第Ⅱa区西側溝状遺構(SD02・03・16・17)完掘状況(北から)
　(2)　第Ⅱa区北側溝状遺構完掘状況(西から)
　(3)　溝状遺構(SD20)遺物出土状況(西から)
　(4)　溝状遺構(SD16)遺物出土状況(西から)
PL,9　(1)　杭列(SA03)検出状況(北西から)
　(2)　杭列(SA04)検出状況(東から)
　(3)　杭列(SA04)取り上げ作業風景(東から)
PL,10　(1)　竪穴遺構(SX01)完掘状況(南から)
　(2)　井戸(SE01)遺物出土状況(北東から)

(3) 井戸(SE01)基底面遺物出土状況(北東から)
(4) 井戸(SE02・03)完掘状況(西から)
(5) 井戸(SE04)完掘状況(北から)
(6) 井戸(SE04)井筒内遺物出土状況(北から)
(7) 井戸(SE05)完掘状況(北から)
(8) 井戸(SE15)完掘状況
PL,11 (1) 井戸(SE16)完掘状況(北から)
(2) 井戸(SE32)完掘状況(北から)
(3) 竪穴遺構(SX03)完掘状況(南から)
(4) 竪穴遺構(SX11)完掘状況(北から)
(5) 竪穴遺構(SX12)完掘状況(西から)
(6) 竪穴遺構(SX13)完掘状況(南から)
(7) 竪穴遺構(SX16)完掘状況(南から)
(8) 竪穴遺構(SX18)完掘状況(北から)
PL,12 (1) 竪穴遺構(SX19)完掘状況(北から)
(2) 竪穴遺構(SX23)完掘状況(西から)
(3) 竪穴遺構(SX28)完掘状況(西から)
(4) 竪穴遺構(SX32)完掘状況(西から)
(5) 竪穴遺構(SX34)完掘状況
(6) 竪穴遺構(SX36)完掘状況(北から)
(7) 竪穴遺構(SX37)完掘状況(西から)
(8) 竪穴遺構(SX37)完掘状況(東から)
PL,13 (1) 竪穴遺構(SX37)遺物出土状況
(2) 竪穴遺構(SX38)遺物出土状況(北から)
(3) 竪穴遺構(SX38)完掘状況
(4) 竪穴遺構(SX39)完掘状況(北から)
(5) 竪穴遺構(SX40)完掘状況(北西から)
(6) 竪穴遺構(SX41)完掘状況(北から)
PL,14 (1) 第IIb区完掘状況(北から)
(2) 第IIb区完掘状況(北から)
PL,15 (1) 第IIb区西側完掘状況(北から)
(2) 第IIb区完掘状況(西北西から)
PL,16 (1) 第IIb区完掘状況(北側部分・西北西から)
(2) 第IIb区西側部分遺構検出状況(東から)
PL,17 (1) 第IIb区中央西側部分掘立柱建物(東から)
(2) 第IIb区中央部遺構分布状況(南東から)
(3) 第IIb区北東部遺構分布状況(南から)
PL,18 (1) 第IIb区南側掘立柱建物(北から)
(2) 溝状遺構(SD11・22)遺物出土状況(北から)
PL,19 (1) 溝状遺構(SD22)完掘状況(南南東から)
(2) 第IIb区東側部分遺構分布状況(東から)
PL,20 (1) 井戸(SE07・17)完掘状況(南から)
(2) 井戸(SE07)床面褐釉合子出土状況(東から)
(3) 井戸(SE08)石組状況(東から)
PL,21 (1) 井戸(SE08)石組・および井側(曲物)(南から)
(2) 井戸(SE09)土層堆積状況(東から)
(3) 井戸(SE11)完掘状況(東から)
PL,22 (1) 井戸(SE12)遺物出土状況(南東から)
(2) 井戸(SE12)完掘状況(西から)
(3) 井戸(SE13)完掘状況(西から)
PL,23 (1) 竪穴遺構(SX52)検出状況(西から)
(2) 竪穴遺構(SX52)完掘状況(南から)
PL,24 (1) 竪穴遺構(SX53)検出状況(南から)
(2) 竪穴遺構(SX53)遺物出土状況(南から)
PL,25 (1) 竪穴遺構(SX53)西北部炭化木出土状況(南から)
(2) 竪穴遺構(SX53)完掘状況(南から)
PL,26 (1) 第IIc区完掘状況(西から)
(2) 第IIc区完掘状況(南東から)
PL,27 (1) 第IIc区北側部完掘状況(西から)
(2) 第IIc区中央～東部分完掘状況(南から)
PL,28 (1) 柵列(SA01)完掘状況(南から)
(2) 溝状遺構(SD39)完掘状況(北から)
PL,29 (1) 溝状遺構(SD46)完掘状況(西から)
(2) 溝状遺構(SD25)完掘状況(西から)
(3) 旧河川露呈状況(南から)
PL,30 (1) 井戸・竪穴遺構完掘状況(南東から)
(2) 井戸(SE18)土層堆積状況(南南西から)
(3) 井戸(SE19)完掘状況(北から)
PL,31 (1) 竪穴遺構(SX83)・土壙(SK06)完掘状況(南から)
(2) 土壙(SK07)完掘状況(南から)
(3) 土壙(SK08)遺物出土状況(北から)
PL,32 (1) 竪穴遺構(SX65)完掘状況(北から)
(2) 竪穴遺構(SX66)遺物出土状況(西から)
(3) 竪穴遺構(SX68)完掘状況(西から)
PL,33 (1) 竪穴遺構(SX66・67)完掘状況(西から)
(2) 竪穴遺構(SX69)礫出土状況(南から)
(3) 竪穴遺構(SX70)完掘状況(南から)
PL,34 (1) 竪穴遺構(SX71)遺物出土状況(西から)
(2) 竪穴遺構(SX75)完掘状況(南から)
(3) 竪穴遺構(SX78)完掘状況(東から)
(4) 竪穴遺構(SX79)完掘状況(西から)
PL,35 (1) 竪穴遺構(SX81)完掘状況(東から)
(2) 竪穴遺構(SX82)完掘状況(南西から)

(3) 竪穴遺構(SX84)遺物出土状況(北から)
PL,36 (1) 第IId区完掘状況(南から)
(2) 第IId区完掘状況(東から)
PL,37 (1) 第IId区畦畔検出状況
(2) 第IId区遺構検出面下部旧河川露呈状況(東から)
PL,38 (1) 旧河川内土層堆積状況(西から)
(2) 溝状遺構(SD73)完掘状況(南から)
(3) 竪穴遺構(SX92)完掘状況(南から)
PL,39 (1) 杭列(SA11)検出状況(東から)
(2) 杭列(SA11)部分拡大(北東から)
(3) 杭列(SA11)中央部直交軸の土層堆積状況(北から)
PL,40 (1) 井戸(SE21)土層堆積状況(南から)
(2) 井戸(SE28)井側検出状況(南から)
(3) 井戸(SE29)掘り下げ状況(南から)
PL,41 (1) 第IId区西南部遺構分布状況(南から)
(2) 第IId区北東部遺構分布状況(南から)
PL,42 (1) 第IIIc区完掘状況(西から)
(2) 第IIIb区完掘状況(東北東から)
PL,43 (1) 第IIIb区南側部分完掘状況(東から)
(2) 第IIIb区中央部分完掘状況(東から)
PL,44 (1) 溝状遺構(SD19)完掘状況(東から)
(2) 井戸(SE31)完掘状況(東から)
(3) 井戸(SE31)石組み状況(東から)
PL,45 (1) 土壙(SK10)完掘状況(北から)
(2) 土壙(SK14)完掘状況(東から)
(3) 土壙(SK45)完掘状況(南から)
PL,46 (1) 竪穴遺構(SX102)完掘状況(北から)
(2) 竪穴遺構(SX104)完掘状況(北から)
(3) 埋甕(SX106)完掘状況(西から)
PL,47 (1) 埋甕(SX107)完掘状況(南から)
(2) 埋甕(SX111)遺物出土状況(北から)
(3) 竪穴遺構(SX126)遺物出土状況
PL,48 (1) 第IIIc区完掘状況(南から)
(2) 第IIIc区中央部分完掘状況(東から)
PL,49 (1) 溝状遺構(SD61)完掘状況(東から)
(2) 溝状遺構(SD61)掘り下げ作業風景(東から)
(3) 溝状遺構(SD61)内土層堆積状況(東から)
PL,50 (1) 溝状遺構(SD61)内杭列(SA11)検出状況(東から)
(2) 溝状遺構(SD61)内杭列(SA11)検出状況(南から)
(3) 溝状遺構(SD61)内板絵出土状況
PL,51 (1) 溝状遺構完掘状況(北西から)
(2) 溝状遺構(SD63～65)完掘状況(南東から)
PL,52 (1) 竪穴遺構(SX135)完掘状況(南から)
(2) 竪穴遺構(SX138・153・154)完掘状況(北東から)
(3) 竪穴遺構(SX155)完掘状況(北東から)
PL,53 (1) 第IVb区完掘状況(東から)
(2) 溝状遺構(SD70・71)完掘状況(南東から)
PL,54 (1) 第IVb区西南部竪穴遺構分布状況(西から)
(2) 竪穴遺構(SX156・157)検出状況(西から)
(3) 竪穴遺構(SX157)遺物出土状況(西から)
(4) 竪穴遺構(SX158)完掘状況(北東から)
PL,55 (1) Aトレンチ完掘状況(南から)
(2) Aトレンチ西壁土層断面(東から)
(3) Bトレンチ完掘状況(南から)
PL,56 (1) Bトレンチ西壁土層断面(東から)
(2) Cトレンチ完掘状況(南から)
(3) Dトレンチ西壁土層断面(西から)
PL,57 出土遺物写真(その1)
PL,58 出土遺物写真(その2)
PL,59 出土遺物写真(その3)
PL,60 出土遺物写真(その4)
PL,61 出土遺物写真(その5)
PL,62 出土遺物写真(その6)

表　目　次

Tab,1 戸原麦尾遺跡調査経過表 …… 9
Tab,2 第II区掘立柱建物計測値表（その1） …… 23
Tab,3 第II区掘立柱建物計測値表（その2） …… 24
Tab,4 第II区溝状遺構所見表　その1 …… 44
Tab,5 第II区溝状遺構所見表　その2 …… 45
Tab,6 第II・III区井戸所見一覧表 …… 54

Tab,7　第II区土壙所見一覧表 …… 56
Tab,8　第II区竪穴遺構所見一覧表　その1 …… 73
Tab,9　第II区竪穴遺構所見一覧表　その2 …… 74
Tab,10　第II区竪穴遺構所見一覧表　その3 …… 75
Tab,11　第II～IV区出土土師器（坏・皿）所見一覧表　その1 …… 127
Tab,12　第II～IV区出土土師器（坏・皿）所見一覧表　その2 …… 128
Tab,13　第II～IV区出土土師器（坏・皿）所見一覧表　その3 …… 129
Tab,14　第II～IV区出土土師器（坏・皿）所見一覧表　その4 …… 130
Tab,15　第III区掘立柱建物計測値表 …… 134
Tab,16　第III・IV区溝状遺構所見一覧表 …… 141
Tab,17　第III区土壙所見一覧表 …… 145
Tab,18　第III区竪穴遺構所見一覧表その1 …… 153
Tab,19　第III区竪穴遺構所見一覧表その2 …… 154
Tab,20　戸原麦尾遺跡出土遺物種類別出土状況表 …… 169
Tab,21　掘立柱建物棟方位グラフ …… 174
Tab,22　検出遺構の時期区分表 …… 178

付図目次

付図1　戸原麦尾遺跡第Ⅰ～IV区遺構分布全体図（1/1000）
付図2　戸原麦尾遺跡第Ⅰb区遺構分布全体図（1/300）
付図3　戸原麦尾遺跡第II区遺構分布全体図（1/200）
付図4　戸原麦尾遺跡第II区旧河川および杭列（SA11）（1/100）
付図5　戸原麦尾遺跡第III区溝状遺構（SD61）および杭列（SA10）

I　はじめに

(1)　調査に至る経過

福岡市においては、近年の都市化の進展と人口の急激な増加に対して水資源の安定的な確保と供給が緊急の課題とされて来た。特に昭和53年の異常気象による大渇水の経験以来、行政施策上の重要な懸案の一つとなっている。この施策の一環として、東区香椎字長谷に貯水ダムの建設が予定されるとともに、浄水施設として多々良浄水場が多々良川左岸の粕屋町内に建設されることとなり、昭和59年度から着工される運びとなった。

一方、福岡市教育委員会では、公共事業および民間開発の各種開発行為に対しては、開発予定地内における埋蔵文化財の有無の図面審査、現地踏査、試掘調査などの事前審査を行ない、埋蔵文化財の保護に努めているところである。今回の長谷ダムと多々良浄水場の建設計画事業についても、福岡市域外ではあるが本市の主体事業であるということから事前審査の対象となった。

多々良浄水場建設予定地は、事業の計画段階では、周知の遺跡としては未だ認知されておらず、分布地図にも記載はなかった地点である。しかし建設予定地の周辺には、多々良川の左岸に展開する古代条里を始めとして、多々良遺跡、多々良込田遺跡、内橋廃寺推定地などの、古代から中世にかかる遺跡が点在しており、これらと関連する何らかの遺跡が存在することが予想された。また古代官道である西海道の推定線上にも位置するということから、十分な現地踏査を要すると図面上で判断された。

埋蔵文化財課では昭和59年７月上旬に現地踏査を行い、建設予定地内において古代から中世にかかる遺物の散布を確認した。これに基づいて、建設予定地内における遺跡の範囲、遺構・遺物の遺存状況などを明らかにするために、同年７月24日から８月10日にかけて試掘調査を行った。調査の結果、建設予定地内には開発面積（約80000m²）の約30～35％にあたる25000m²前後の広さにわたって、鎌倉時代を中心とした時期の遺構・遺物が認められ、浄水場建設工事に先立っては発掘調査等のなんらかの保存上の措置を要すると判断された。

これらの事前審査の成果を踏まえて、教育委員会と水道局間とで遺跡の保存上の問題も含めて協議を重ねたが、工事着工の時期、建設工事計画の内容がすでに実施段階であることから、やむを得ず発掘調査を行い記録保存に代えるということになった。

発掘調査は昭和59年10月16日から緊急に実施することとなり、以下の調査体制で行うこととなった。なお発掘調査にあたっては地元の方々からの多くのご協力を得ました。記して感謝の意を表します。

(2) 調査の体制

多々良浄水場建設主体	福岡市水道局	前事業管理者	出口末人
		現事業管理者	小田一郎
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	佐藤善郎
調査総括		埋蔵文化財課長	柳田純孝
		埋蔵文化財第一係長	折尾　学
事前審査		文化財主事	山崎純男
調査事務担当		埋蔵文化財第一係	松延好文
調査担当		(昭和59年度)	池崎譲二
		(昭和59～62年度)	田中壽夫
		(昭和60～62年度)	荒牧宏行

調査補助員(昭和59年度)　白石公高　竹下弘美

調査整理　(昭和59～62年度)　櫛田猷子　花井祝子　大坂静子　田鍋町子　戎崎喜久美
森本満里子　山田スミ代　出口三千代

(昭和63年～平成元年度)　池見恭子　安部国恵　田中聖子　馬場イツ子　酒井紀子
田村妙子

調査作業　(昭和59～62年度)　入江英美　松永茂　長　勝伸　森山恭介　高浪信夫
熊本義徳　山本一夫　三留清馬　長　義人　長孝一
神尾順次　黒木伸一　岩隈史郎　伊藤末　本田直裕
千種　務　河野裕之
安部国恵　安部サエ子　因　弘子　池見恭子　尾畑信江
黒木良子　黒木澄子　薙野弥恵子　長　武子　長とし子
西村康子　田村妙子　田鍋勝代　松永一枝　大歯ミツ子
長　サト　高木京子　長　福代　藤スエ子(故人)
松尾フタエ　長トモエ　森山タツエ　菩提道子　長嘉鶴子
長　絹子　柴田スマ子　田鍋ヤサノ　山野キヨカ
西村きくえ　安増綾子　田中聖子　馬場イツ子　川添佳子

II　戸原麦尾遺跡の位置と歴史的環境

当遺跡の位置および周辺の歴史的環境については、既刊の戸原麦尾遺跡(Ⅰ)・(Ⅱ)において述べているので、重複をさけるためここでは割愛する。巻末に佐伯弘次氏の付論1を掲載しているので、既刊の歴史的環境の項と合わせて参照されたい。この項においては、多々良川流域を中心とした粕屋平野における、最近の埋蔵文化財の緊急調査の状況を概観する。

粕屋平野における緊急発掘調査

粕屋郡は南北に長いことから、黒田長政入国以来、表裏の2つに分けて呼ばれてきた。その南にあたる表粕屋は、粕屋平野を中心とした多々良川流域にあたり、広義の福岡平野の最も東北端に位置している。この地域は、福岡都市圏に含まれ、都市近郊型農業と住宅供給地域として、また都市型工業地域などとして位置づけられ、各種の開発が盛んに行なわれており、福岡市近郊における流通拠点化、あるいはベッドタウン化がここ数年来急速に進行している。

この地域での緊急調査の端緒は、昭和40年代半ばの、九州縦貫自動車道の建設に伴う調査であり(25)、それと平行して計画された、流通センターの整備に伴う調査である(2・10)。九州縦貫道関連の調査のピークは昭和47年度で、調査件数は51ケ所、延調査面積は52,512㎡にも及んだ(26)。さらに山陽新幹線の建設に伴う調査(3〜6・22)も実施される。こういった大規模な公共事業の後を追って、宅地造成を主とした民間開発や、これらに連動して需要が高まった真砂土採取が各地で盛んに行なわれ、これが原因で消滅してしまった遺跡は数多い(粕屋町大隈井山古墳群・福岡市博多区桜ケ丘古墳・東区湯ケ浦古墳群などの月隈丘陵周辺の古墳)。

昭和50年代にはいると、福岡市では地下鉄工事に伴う調査が始まり、さらに数年遅れて早良平野部の開発の増加を見るようになる。特に地下鉄沿線からその周辺の交通網の発達した西部地域(早良区〜糸島郡)が顕著であり、それは現在も継続している。一方、粕屋平野の場合幸いなことに、基幹道路の整備が立ち遅れたため、結果としては開発の急増は西部ほどではない。しかし、規模の差はあれ各種開発は継続して行なわれており、それに伴う調査が散発的に行なわれている(16・17・40・41など)。

Fig. 1　粕屋平野を臨む（西から）

最近では、特に福岡市の人口増加に伴い、宅地供給の促進と、道路整

備が急務の課題とされており、それに伴う調査(20・21)や上下水道の処理等に伴う調査(31)なども行なわれている。しかし、調査件数は早良平野や糸島平野における件数と比べるとかなり低い状況である。その原因に立ち入るゆとりはないが、基本的には、保護に立つ主体側の対応がどれほど整備されているか、ということに帰結すると思われる。道路や、上下水道等の社会基盤の整備が進む中で、これからの粕屋平野は、開発のスプロール化が現在以上に進むことが予想され、それとともに遺跡が虫食い穴状に消滅していくことが懸念される。早急な保存体制の充実が望まれるところである。

粕屋平野調査遺跡一覧 (遺跡NOは、Fig,2の分布図NOと同一)　(1989年12月末現在)

No.	遺跡名	所在地	調査年月	遺跡の時代・性格	文献番号
(福岡市域)					
1	名子道遺跡	東区大字土井名子道	1970年11月	弥生終末～古墳前期墳墓	9
2	多々良遺跡	東区多々良宗原	1971年7月～9月	中世集落	10
(山陽新幹線関係)					
3	多々良地区				
	多々良込田遺跡1次	東区多々良込田	弥生終末～古墳前期		
	多々良蔵ケ元遺跡	多々良蔵ケ元	1972年11月～1973年5月	奈良～平安時代	
	多々良古川遺跡	多々良古川	竪穴式住居・官衙的建物群		
4	津屋地区				
	津屋井田遺跡	東区津屋井田			
	津屋方才田遺跡	津屋方才田	1972年11月～1973年5月	奈良時代条里遺構	14
	津屋楠田遺跡	津屋楠田			
5	箱崎地区				
	箱崎2地点の調査	東区箱崎大坪他	1972年12月	遺構は未検出	
6	名子地区				
	名子4地点の調査	東区土井字名子	1972年9月～10月	近世以降の杭列など	
7	蒲田遺跡				
	蒲田古墳群(1・3号墳)	東区蒲田字北熊他	1972年4月～1973年8月	旧石器～中世の墳墓、集落	15
	蒲田A・B・D～F				
8	湯ケ浦古墳群	東区土井湯ケ浦	1974年10月～11月	古墳4基の調査(日本大学調査)	未
9	蒲田水ケ元遺跡	東区蒲田水ケ元他	1976年1月～5月	旧石器～奈良の集落、墓址	23
10	多々良藤田遺跡	東区多々良字藤田1627	1978年7月		
	多々良込田遺跡2次	東区多の津2丁目1151-1他	1978年2月		
	多々良込田遺跡3次	東区多の津2丁目	1979年3月～6月	古墳前期　竪穴式住居跡 奈良～平安　官衙的建物群	30
	多々良込田遺跡4次	東区多の津2丁目	1979年9月	瓦・越磁・ガラス・鍔帯など	
	多々良込田遺跡5次	東区多の津2丁目	1980年6月		
11	箱崎遺跡群第1次	東区馬出5丁目地内	1982年4月～9月	古代末～中世	48
12	多々良込田遺跡6次	東区多の津2丁目	1983年9月～1984年2月	古墳集落址・古代官衙跡	41
13	蒲田部木原遺跡	東区蒲田部木地区	1984年11月～1985年1月	古墳時代集落址	42
14	名島古墳1次	東区名島4丁目970-1他	(1981年3月)	前期前方後円墳・三角縁	51・70
	名島古墳2次	東区名島4丁目970-1他	1986年11月～12月	神獣鏡出土	
15	三留池1次	東区土井字奥三留	1986年7月～9月	後期古墳(詳細不明)	未
16	箱崎遺跡群第2次	東区箱崎1丁目18-32他	1986年11月～1987年1月	古代末～中世	45
17	箱崎遺跡群第3次	東区箱崎1丁目273他	1989年1月～2月	古代末～中世	未
(篠栗町域)					
18	和田部木原遺跡	粕屋郡篠栗町和田部木原	1974年10月～1975年3月	弥生～奈良時代の集落建物群	24
19	隈遺跡	篠栗町乙犬字隈	1980年7月～8月	後期古墳3基	33
20	津波黒頭の尾遺跡	篠栗町津波黒・高田	1985年7月～1986年3月	弥生時代集落址	未
21	高田・塚元遺跡		1987年		未

Fig. 2　粕屋平野における緊急調査された遺跡分布図（1/40000）

(久山町域)					
22	久山条里確認調査	粕屋郡久山町山田	1972年5月～6月	条里遺構は未確認	11・16
(粕屋町域)					
23	平塚古墳	粕屋郡粕屋町大隈	1951年6月	箱式石棺墓、内行花文鏡	58・64
24	酒殿遺跡	粕屋郡粕屋町酒殿字宮崎	1953年	弥生時代箱式石棺墓2基	77
25	駕輿丁遺跡	粕屋郡粕屋町大字仲原991	1969年11月	駕輿丁廃寺関連遺構・遺物	7
26	西尾山古墳群	粕屋郡粕屋町大隈西尾	1972年8月～12月	後期古墳２基の調査	29
27	辻畑遺跡	粕屋郡粕屋町大隈辻畑	1972年10月～11月	弥生時代甕棺・土壙墓	29
28	脇田山古墳	粕屋郡粕屋町大隈字脇田山	1974年	後期古墳1基の調査	12
29	古大間玉造遺跡	粕屋郡粕屋町大隈字大間	1976年3月～4月		25
30	古大間池遺跡	粕屋郡粕屋町大隈字大間	1976年8月～9月	弥生時代集落址	25
31	戸原麦尾遺跡	粕屋郡粕屋町戸原字麦尾他	1984年10月～1987年10月	中世集落址　湖州鏡 絵馬(古代)	47・50
(須恵町域)					
32	篠堀遺跡	粕屋郡須恵町大字旅石	1970年8月	弥生時代集落址(内容不詳)	17
33	一の浦遺跡	粕屋郡須恵町大字一の浦	1970年8月	古墳～奈良時代集落址	17
34	乙植木古墳群	粕屋郡須恵町植木字山城戸	1972年6月～8月	後期古墳4基の調査	26・44
35	ヲシガ浦古墳	粕屋郡須恵町植木字ヲシガ浦	1981年8月	後期古墳(円墳)	36
(宇美町域)					
36	観音浦遺跡群	粕屋郡宇美町井野字観音浦 岩長浦	1978年12月～1979年10月	弥生時代竪穴式住居(3軒) 後期群集墳(49基)	31
37	神領古墳群(１次)	粕屋郡宇美町宇美字西明寺	1978年	後期古墳・箱式石棺墓	37
	神領古墳群(２次)	粕屋郡宇美町宇美字西明寺	1987年1月～2月		46
38	塔ノ尾遺跡	粕屋郡宇美町塔の尾1502番地	1980年11月～12月	古代～中世墓址	32
39	湯湧古墳群	粕屋郡宇美町炭焼字湯湧	1984年2月～5月	後期古墳２基の調査	38
40	ウソフキ遺跡	粕屋郡宇美町井野ウソフキ	1986年7月～11月	後期古墳4基	43
41	川原田・供田遺跡群	粕屋郡宇美町井野供田・川原田	1988年5月～6月	弥生時代中期集落址	49
(志免町域)					
42	七夕池遺跡	粕屋郡志免町田富七夕谷505-1	1973年11月～1974年1月	後期古墳(円墳)１基の調査	13・61
43	萱葉古墳群	粕屋郡志免町志免字萱葉	1981年2月～4月	中期古墳(方墳・帆立貝式・円墳)、四獣鏡	39
(その他採集、確認など)					
44	天神森古墳	東区蒲田字天神	1970年4月～8月	前期前方後円墳、三角縁神獣鏡	62
45	部木八幡古墳	東区蒲田字坂本762	1971年2月	前方後方墳の測量調査	8・60
46	八田	東区八田		銅剣鋳型の採集	62・63・71～75
47	箱崎遺跡群	筥崎宮境内(東区箱崎１丁目)	1989年7月頃	古代瓦経の採集	未

粕屋平野関係文献一覧

文献については、遺跡・遺物に関する一次資料としての各自治体、大学、研究機関、個人などが行なった発掘調査、資料調査の報告に限定して取り上げた。また調査されたもので未報告の遺跡については、資料館などで刊行された図録等の紹介、関連する報告書中で取り上げられたものなどを、参考資料として載せた。

対象とした地域は、粕屋郡志免町・宇美町・須恵町・粕屋町・福岡市東区のうち、須恵川流域以西～多々良川下流域に限定し、今回は志賀島は含んでいない。

1、調査報告書関係（刊行年代順）

1 島田寅次郎 「築造年代の明らかなる経塚」 福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書 2 1924
2 長沼賢海 「大野城及四王寺遺蹟」 福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書 6 1931
3 川上市太郎 「昭和七年発見の四王寺経筒写経と四王瓦」 福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書 8 1933
4 島田寅次郎 「筑前に於ける鎌倉時代の遺蹟遺物について」 福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書 8 1933
5 島田寅次郎 「福岡県に於ける中世の墳墓」 福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書12 1937
6 島田寅次郎 「石器と土器・古墳と副葬品」 福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書13 1939
7 福岡県教育委員会 「第4.粕屋地域関係遺跡 駕与丁遺跡」 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 1 1970
8 福岡市教育委員会 「福岡市埋蔵文化財遺跡地名表 総集編」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第12集 1971
9 田坂美代子他編 「名子道遺跡－福岡市大字土井名子道所在古式墳墓の調査」 岡崎工業株式会社刊行 1972
10 福岡市教育委員会 「多々良遺跡調査報告書」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第20集 1972
11 福岡県教育委員会 『X、第 8 地点（久山条里遺構）の調査』 昭和47年度 山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報 1973
12 福岡県教育委員会 「佐谷・脇田山古墳・調査報告」 1974
13 志免町教育委員会 「七夕池遺跡群発掘調査概報」 志免町文化財調査報告書第 1 集 1974
14 福岡市教育委員会 『多々良・津屋地区の遺跡、箱崎・名子地区の調査』
「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第32集 1975
15 福岡市教育委員会 「蒲田遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第33集 1975
16 福岡県教育委員会 「IX、久山町下山田地区の調査」 山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第 1 集 1976
17 福岡県教育委員会 「昭和45年度調査概要 篠堀遺跡・一の浦遺跡」
九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査概報 総輯編 1977
18 三島格 「70 名子道遺跡」
19 後藤直 「71 天神森古墳」
20 塩屋勝利 「57 山陽新幹線関係調査、津屋地区・多々良地区・名子地区」
21 山崎純男 「66 多々良遺跡」
22 二宮忠司 「67 蒲田遺跡」
23 折尾学 「68 蒲田水ケ元遺跡」
24 柳沢一男 「69 和田部木原遺跡」 18～24は特設展図録『緊急発掘された遺跡と遺物』所収
福岡市立歴史資料館刊行 1977
25 粕屋町教育委員会 「古大間池遺跡」 粕屋町文化財調査報告書第 1 集 1977
26 福岡県教育委員会 粕屋郡須恵町所在遺跡群の調査 『乙植木1～4号墳の調査』
「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」第10集 1977
27 福岡県教育委員会 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査概報（総輯編） 1977
28 福岡県教育委員会 福岡県遺跡群等分布地図（粕屋郡編） 1978
29 福岡県教育委員会 粕屋郡粕屋町所在辻畑遺跡・西尾山古墳群の調査」
「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」第30集 1979
30 福岡市教育委員会 「多々良込田遺跡II」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第53集 1980
31 宇美町教育委員会 「宇美観音浦 福岡県宇美町井野所在の観音浦岩長浦遺跡群の調査
宇美町文化財調査報告書第 1 集 1981
32 宇美町教育委員会 「塔ノ尾遺跡 福岡県宇美町障子岳所在遺跡の調査報告」 宇美町文化財調査報告書第 2 集 1981
33 篠栗町教育委員会 「隈遺跡」 篠栗町文化財調査報告書第 1 集 1981
34 三島格 「名子道遺跡」 日本考古学年報21・22・23 1981
35 福岡市教育委員会 「海の中道遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第87集 1982
36 須恵町教育委員会 「ヲシガ浦古墳 福岡県粕屋郡須恵町所在古墳の調査」 須恵町文化財調査報告書第 1 集 1982
37 宇美町教育委員会 「神領古墳群 粕屋郡宇美町字西明寺所在、神領 2 号墳の調査」
宇美町文化財調査報告書第 3 集 1984
38 宇美町教育委員会 「湯湧古墳群 福岡県粕屋郡宇美町大字炭焼字湯湧所在古墳の調査報告」
宇美町文化財調査報告書第 4 集 1984
39 志免町教育委員会 「萱葉古墳群 福岡県粕屋郡志免町大字所在古墳群の調査」 志免町文化財調査報告書第 2 集 1984
40 宇美町教育委員会 「湯湧古墳群について」 宇美町町立歴史民俗資料館No.6 1985
41 福岡市教育委員会 「多々良込田遺跡III」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第121集 1985

42 粕屋町教育委員会 「蒲田部木原遺跡 福岡市東区大字蒲田所在遺跡の調査」 粕屋町文化財調査報告書第２集 1985
43 宇美町教育委員会 「ウソフキ遺跡 福岡県粕屋郡宇美町大字井野字ウソフキ所在遺跡の調査」 宇美町文化財調査報告書第５集 1986
44 須恵町教育委員会 「乙植木古墳群Ⅱ 福岡県粕屋郡須恵町大字植木所在遺跡の調査」 須恵町文化財調査報告書第２集 1986
45 福岡県教育委員会 「箱崎遺跡」福岡県福岡市東区１丁目所在遺跡の調査 福岡県文化財調査報告書第79集 1987
46 宇美町教育委員会 「神領古墳群Ⅱ 粕屋郡宇美町字西明寺所在の神領１号墳・神領遺跡の調査報告」 宇美町文化財調査報告書第６集 1987
47 福岡市教育委員会 「戸原麦尾遺跡Ⅰ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第189集 1988
48 福岡市教育委員会 「博多－高速鉄道関係調査（４）－」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第193集 1988
49 宇美町教育委員会 「川原田・供田遺跡群 福岡県粕屋郡宇美町大字井野字供田所在遺跡の調査」 宇美町文化財調査報告書第７集 1989
50 福岡市教育委員会 「戸原麦尾遺跡Ⅱ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第201集 1989
51 池崎譲二、後藤直他「名島古墳の調査報告」 福岡市立歴史資料館研究報告14 1990

２、遺跡・遺物関係論文

51 高川鉄馬 「福岡県下に於ける貝塚について」 筑紫史談第１集 1914
52 武谷水城 「多々良以東に於ける元寇防塁の有無について」 筑紫史談第24集 1920
53 武谷水城 「多々良以東に於ける元寇防塁の有無についての補足」 筑紫史談第25集 1921
54 中山平次郎 「九州北部に於ける先史原始両時代中間期間の遺物に就いて２」 考古学雑誌7-11 1917
55 鏡山猛 「福岡県下の条里遺跡」福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第12輯 福岡県教育委員会 1935
56 鏡山猛 「高塚古墳の源流」 史淵5-8 1953
57 中原志外顕・渡辺正気「福岡県粕屋郡駕与丁池池畔の石器文化」 九州考古学５・６ 1958
58 森貞次郎 「福岡県粕屋町上大隈平塚古墳」 九州考古学11・12 1961
59 蔵田 蔵 「経塚論」 ミュウジアム181 1966
60 国平健三・井上直樹「福岡県部木遺跡出土の石器」 考古学ジャーナル70 1972
61 上野精志 「七夕池遺跡群の調査」 ふるさとの自然と歴史33 1974
62 下條信行 「考古学・粕屋平野－新発見の鋳型と鏡の紹介をかねて－」 福岡市立歴史資料館研究報告第１集 1977
63 後藤直 「福岡市八田出土の銅剣鋳型－資料の観察」 福岡市立歴史資料館研究報告第6集 1982
64 森貞次郎・西健一郎・高倉洋彰 「上大隈平塚古墳出土の蝙蝠座鈕内行花文鏡」 九州考古学№58 1983
65 西村強三 「佐谷観音谷経塚と埋経について」 須恵町立歴史民俗資料館館報第１号 1984
66 横田義章 「正中二年（一三二五）銘の読経記念石碑」修理略記 須恵町立歴史民俗資料館館報第１号 1984
67 九州歴史資料館編 「筑前粕屋若杉山の仏教遺跡」 九州の寺社シリーズ８ 1986
68 八尋和泉 「若杉山の仏教遺品」 「筑前粕屋若杉山の仏教遺跡」 九州の寺社シリーズ８ 1986
69 八尋和泉 「運慶九代作文明七年銘大日如来像－筑前粕屋寺浦大日堂－ 九州歴史資料館研究論集13 1988
70 柳沢一男 「福岡県の古墳時代」 福岡県地域史研究第８号 1988
71 熊野正也 「本館所蔵の銅戈鋳型について－鋳型の郷里を訪ねて－」
72 下條信行 「銅戈鋳型の変遷－伝福岡市八田出土明治大学蔵銅戈鋳型について－」
73 岩永省三 「伝福岡県福岡市東区八田出土銅戈鋳型をめぐって－」
74 近藤喬一 「明治大学博物館購入の銅戈鋳型」
75 乙益重隆 「伝福岡県粕屋郡粕屋町出土の銅戈鋳型」 71～75は明治大学考古学博物館館報№５ 1989
76 平ノ内幸治 「福岡県粕屋郡粕屋町戸原遺跡出土の旧石器」 福岡考古第14号 1989
77 「酒殿遺跡」「上大隈平塚古墳」／「古大間池遺跡」／「佐谷経塚」／「駕与丁遺跡」／「四王寺山経塚」／「多々良遺跡」／「長者原廃寺」／「名子道遺跡」／「和田部木原」／「萱葉古墳群」／「光正寺古墳」／「七夕池古墳」等の記載あり。 福岡県百科事典上・下 西日本新聞社 1982

Fig. 3　戸原麦尾遺跡調査区設定位置図（1/3000）

III　調査の概要

(1)　調査の経過

発掘調査は、昭和59年(1984)10月11日から同62年10月15日までの約３年間にわたって実施した。この間には、建設工事区域との調整や埋蔵文化財課の調査体制の組み直し、あるいは他の開発事業に係わる緊急調査の実施のために中断せざるを得ない期間があった。したがって実質的には約1年10ケ月ほどの期間を要したことになる。調査経過の大まかな流れについてはTab.1を参照されたい。

調査区の設定

試掘調査の結果により、浄水場建設予定地内(80000m²)における遺構・遺物の分布状況は、大きく４つの地点にまとまって分布していることが確認された。遺構・遺物の遺存の程度、現況地形などからみて、必要とされる発掘調査面積は全体で約23600m²と予想された。４つの遺構のまとまりの範囲をもとに設定された調査区は、北東部から南側へ向かって便宜上第Ⅰ～Ⅳ区と呼称した。調査の進展によって当初予想されたよりも遺構の分布が広がり、実際の調査面積は第Ⅰ区が約18000m²、第Ⅱ区が約10700m²、第Ⅲ区が約2700m²、第Ⅳ区が約1300m²で、総面積は約32600m²である。

調査は、建設予定地内の建造物の位置、建設工事と調査工程との競合を調整して、第Ⅰ～Ⅳ

調査区		調査実施面積(m²)				総面積(m²)	調査期間	備考
		59年度	60年度	61年度	62年度			
Ⅰ区	a	7,000				18,000	S59.10.18～60. 3. 1	(調査着手)
	b		2,000	6,000			S61. 1.27～61. 8.12	
	c			1,000			S61. 7.15～61. 8.12	
	d				2,000		S62. 7.13～62. 9.30	(調査終了)
Ⅱ区	a	2,000	2,500			10,700	S60. 2. 5～60. 4.30	
	b		2,000				S60. 4. 9～60. 6.27	
	c		2,000				S60. 8.22～60.10.30	
	d				2,200		S62. 4.23～62. 8.30	
Ⅲ区	a	200				2,650	S59.10.16～59.10.22	
	b	1,500	150				S60. 2.15～60. 4. 5	
	c			800			S61. 8.25～61.11.22	(A～Cトレンチを設定)
Ⅳ区	a	70				1,320	S59.10.19～59.10.29	
	b				1,250		S61. 9. 3～61.11.22	
総面積m²		10,770	8,650	9,050	4,200	32,670		

Tab, 1　戸原麦尾遺跡調査経過表

区を調査年度ごとにさらに細分して行った。昭和59年度は第IIIa区と第IVa区から着手し、第Ⅰa区・第IIIb区の調査へ移り、第IIa区で終了した。各年度ごとに数地点で同時に工事が進められたために、それに先行してそれらの地点の調査を実施したが、結果的にはまとまりのある遺構群を寸断しながらの調査となってしまった。特に第II区においては一つの屋敷地を4つに分割し調査したために掘立柱建物の復元や屋敷地全体の遺構間の関連は図面上でしか出来ない部分があるなど、若干の支障が生じた。

Fig.4　戸原麦尾遺跡遠景（北東から）

(2)各調査区の概要

ここでは多々良浄水場敷地内における発掘調査の成果について、各調査区(第Ⅰ区～第IV区)毎にその概要を述べる。なお第Ⅰ区の詳細については、昭和63年(1988年)度および平成元年(1989)度刊行の報告書を参照されたい。

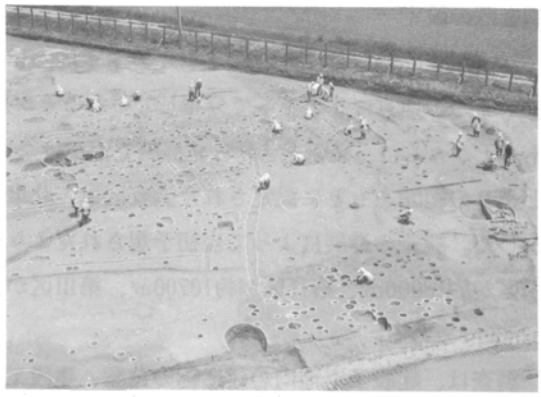


Fig.5　第Ⅰb区調査風景（南から）

第Ⅰ区の概要

第Ⅰ区は浄水場敷地の北東部にあたり、多々良川左岸に近接する地点に位置している。調査区の面積は約18000m²である。調査はa～dの4つの小調査区に分けて昭和59・60・62年度にかけて実施した。

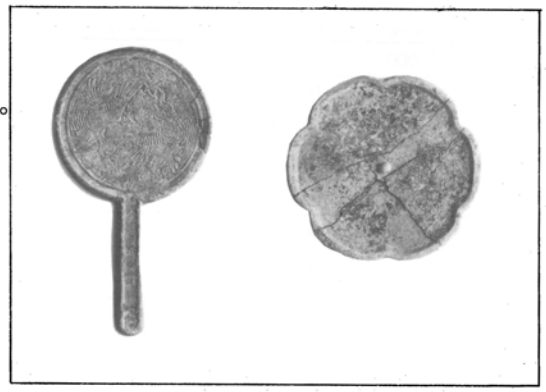


Fig.6　第Ⅰ区出土青銅製柄鏡(左)と六花鏡

調査の結果では、第Ⅰ区のほぼ中央に、多々良川の氾濫によって形成された、砂礫層を基盤とする沖積微高地があり、標高5.7～5.9mほどの高さで北東から南西へ緩やかに弧を描きながら続いていることが確認された。またこの微高地をはさんで、北側(第Ⅰb区)と東南側(第Ⅰa区)に、形成時期および埋没時期が異なると思われる2本の旧河川(SR01・02、SR3723)が検出された。

第Ⅰ区における遺構の分布状況はおおまかに３つの群に分かれる。旧河川SR01・02の東側（第Ⅰa区東側）の微高地、先述した調査区中央に位置する微高地の北東部（第Ⅰb区中央から東南部）および同微高地の西南側（第Ⅰa区西側～第Ⅰd区中央から北東部）である。これらのうち最も遺構の分布密度が高い地点は、中央に位置する微高地の北東部（第Ⅰb区）の遺構群である。特にこの地点では掘立柱建物や井戸、竪穴遺構などがみられ、さらにそれらの回りを２条の溝状遺構が、一辺約50mの長さで三方に巡ることが確認された。また第Ⅰb区では湖州六花鏡、ガラス製小玉、白磁碗・皿を副葬した墓址（SK10）なども検出された。旧河川SR01・02の東側（第Ⅰa区東側）の遺構は、第Ⅰb区比較して、やや少ないが、掘立柱建物が一定のまとまりをもって分布し、調査区域の外へさらに広がっていることが認められた。なおこの地点では、出土例が極めて少ない青銅製鳳凰文柄鏡と青磁碗を副葬した墓址（SK36）なども検出されている。

これらの遺構の遺存状況は各地点で少しずつ異なった状況であるが、おおまかにいえば東側から西側にかけて残りの程度が悪くなっている。柱穴などは５～10cmほどの遺価状況のものが多い。また第Ⅰd区西南に見られる溝状遺構は、後世の営田による削平が顕著でわずか5cmほどしか残っていない。

第Ⅰ区の調査で出土した遺物は、土師器（皿・坏・碗）、土師質土器（土鍋・擂鉢）須恵質土器（甕・片口鉢）、瓦器（碗・皿）、瓦質土器（釜・三足釜・鉢）、輸入陶磁器（白磁碗・皿、青磁碗・皿、青白磁皿・合子、陶器甕・壺・鉢、天目碗）、滑石製品（石鍋）、鉄製品（釘・刀子・紡錘車・鉄滓など）、土製品（土錘）、銅銭、青銅製鏡（柄鏡・六花鏡）などである。主体を占めてるのは、やはり土師器、土師質土器などの供膳、調理形態のもので、出土土器の約2/3～4/5の量を占めている。輸入陶磁器は約８％弱（破片の占める割合）の量である（Tab, 20）。

Fig, 7　第Ⅱ区調査風景から（東から）

第Ⅱ区の概要

第Ⅱ区は浄水場建設地の中央部に位置する。浄水場施設の管理本館棟の前庭部にあたる。多々良川左岸から250mほど離れた地点で、周辺の標高は約5.6～5.80mを測る。調査面積は約10700m²である。調査はa～d区の４つの小調査区に分けて、昭和59・60・62年度にかけて実施した。出土した遺構・遺物は掘立柱建物、井戸、土壙、木棺墓、竪穴遺構、杭列、溝状遺構などで、生活関連の遺構が主である。遺構の組み合わせは第Ⅰ区とほとんど変わらないが、墓址と思われる土壙の数は、第Ⅰ区と比べて少ない。第Ⅱ区の特徴

Fig, 8　第Ⅱ区調査風景（西から）

あげられるのは、上記の遺構群を取り囲んで長方形の区画の溝状遺構が巡る点である。ただし第Ⅰ区の屋敷地が２条の溝であったのに対して、ここでは１条である。溝状遺構は東南隅部が削平のため消滅しており、やや不正確であるが、一辺の長さが東西に約100m、南北に約50mの長さを測る規模のものである。またこの区画は多々良川左岸に展開している条里の坪並に合致するものであり、中世鎌倉期の集落の営みと条理との関連について考える上で貴重な事例となった。

第Ⅲ区の概要

第Ⅲ区は浄水場敷地の最も西側に位置し、広田の集落の東側に隣接している地点である。多々良川左岸からは南へ約300m離れた沖積微高地上に位置している。標高は約5.50mを測る。調査はa～c区の3つの小調査区と、3ケ所のトレンチを設定し、昭和59年から61年にかけて実施した。調査面積は約2700㎡である。検出された遺構・遺物は第Ⅰ・Ⅱ区と同様に掘立柱建物、井戸、溝状遺構などである。第Ⅰ・Ⅱ区で検出されなかった遺構として、埋甕や、厠跡とも思える竪穴などが挙げられる。これらは中世鎌倉時代のものと、江戸時代のものがある。第Ⅲc区の北端では少なくとも幅が５ｍ以上はあると思われる大溝が確認された。この溝の位置と方向性は復元条理と一致しており、出土遺物からみて、少なくとも古代末には当該地周辺には条理地割りが施行されていたことを物語っているものとして注意された

Fig，9　第Ⅲａ区調査風景（南西から）

出土遺物は少ない。土師器や瓦器の日常雑器を中心とした土器が出土している。先述の大溝からは馬の描かれた板絵が出土している。平安時代後期のものと思われ、古代祭祀の一端を知る上で貴重な出土例である。

第Ⅳ区の概要

第Ⅳ区は浄水場敷地の西南部に位置する。多々良川左岸からは南へ約400mほど離れた地点に位置する。調査面積は1320㎡で、a･b区の２つの調査区に分けて調査を行った。検出された遺構・遺物は少ない。南西隅に性格不明の竪穴が確認された以外は水田に伴う溝状遺構が４～５条認められた。

Fig，10　第Ⅳ区調査風景（東から）

Fig. 11　第Ⅱ区遺構分布全体図（方形区画溝内部分　1/300）

Ⅳ　第Ⅱ区の調査

（1）遺構各説

概要　第Ⅱ区は浄水場建設地の中央部に位置する。字名「麦尾」の範囲にほとんど含まれる。東側は一部が「五寸田」にかかっている。多々良川左岸から250mほど離れた地点で、周辺の標高は約5.6～5.80mを測る。地形傾斜は東南から北西へ緩やかに傾斜している。

調査は西からａ～ｄ区の４つの小調査区に分けて、実施した。検出した遺構は掘立柱建物、井戸、土壙、木棺墓、竪穴遺構、杭列、溝状遺構などである。遺構の組み合わせは第Ⅰ区とほとんど変わらないが、墓址と思われる土壙の数は、第Ⅰ区と比べて少ない。第Ⅱ区の特徴としてあげられるのは、上記の遺構群を取り囲んで長方形の区画の溝状遺構が巡る点である。ただし東南隅については溝状遺構は未確認である。第Ⅰ区の屋敷地が２条の溝であったのに対して、ここでは１条である。また第Ⅰ区では土塁があったことが推定されたが、第Ⅱ区ではその痕跡は認められなかった。溝状遺構が取り囲む範囲は、一辺の長さが東西に約100m、南北に約50ｍの長さを測る規模のものである。またこの区画は多々良川左岸に展開している条里の坪並に合致するものである。

１）柵列・杭列

第Ⅱ区では、調査区北側を東西に流れている溝状遺構（SD11・12）に平行に、杭列SA03を、また旧河川を横断する形で、SA04・05・SA11を検出した。この他に旧河川の中に杭列があったと思われる痕跡が数箇所あったが、旧河川内の堆積物中に杭の残片が見られたのみである。列をなして確認されたのは以上の４つの杭列であった。

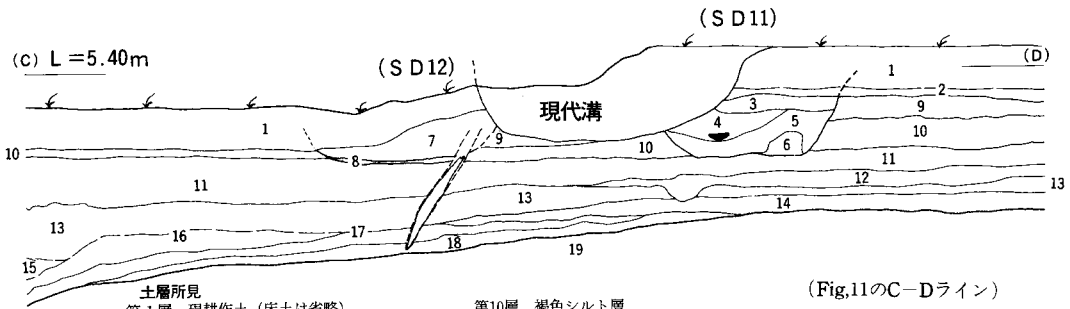
SA03　この杭列は近世以降の、もしくは近代以降の杭列と思われる新しい時期のもので、溝状遺構（SD11・12）を切っている。また現代のコンクリート製三面側溝の真下に位置している。用途としては灌漑用水路の護岸のための杭と思われる。残りは悪く、現代の水路建設時にかなり削平されており、杭先が10～25cmほど残っていた。（図示していない）

SA04　第Ⅱａ区の南側に検出されたもので、方形区画外に位置している地点である。旧河川内土層を掘り下げる過程で確認した杭列である。出土した杭は11本である。杭先は基盤の砂礫層に届いてはおらず、最も古くみて旧河川がほとんど埋没した段階以降から後に打たれたものと判断された。杭の遺存状況はあまり良くない。長さが30～40cmほどである。杭としての有効深度を、杭の全長の少なくとも３分の１から２分の１と考え、杭先のレベルから判断すると、現水田面の高さあたりに杭の頭がくる。新しい時期の所産のものと考えられた。

SA05　この杭列は、第IIｃ区の東側に検出された旧河川内で確認されたものである。第Ｉ区から延びる旧河川（SR01・02）の南側延長部に位置しており、SA01とは約30m離れている。方向はこの旧河川を横断している。検出された杭は５本のみである。本来は河幅全体にわたっていた井堰とも思われるがその痕跡はない。時期的にはSA01・02と同様に、旧河川（SR01・02）が、埋没して行く過程の時期（平安時代後期）に打たれたものと考えられる。

SA11　この杭列は、第IIｄ区の中央から南西にかけて確認された旧河川を掘り下げて行く過程で確認されたものである。この旧河川は、SR01・02のさらに南側にあたっており、この第IIｄ区の中央付近で流路を西へ大きく変えている。SA11はこの流路変換点から南西へ30mほどいった地点に位置している。打ち込まれている杭は、全部で33本である。杭と杭間は、長さ2〜3mほどで、径が3〜5cm前後の横木を組んで這わしている。杭は、残りの良いものは杭頭が残っている。杭の長さのおよそ２分の１が、基盤層である砂礫に打ち込まれている。杭列の平面形は、アーチ式ダム状に弓なりになっており、流れの方向（北東から西）に向かって孕んでいる特徴がある。また完全に塞き止めるのではなく、南側〜西側へ行くにつれて杭の方向は、旧河川の南岸に徐々に平行となっており、ある程度流れを塞き止め、水位を高くし、水を供給するためのものであったことが考えられる。杭列の時期は、黒色土器（Fig,83）が、杭列の間から出土していることから、SA01・02・05などと同じ時期のもの（平安時代後期、11世紀代）と考えられる。埋没したのは中世の遺構検出面である明褐色粘質土が堆積する以前と考えられる。遺物などの積極的な根拠はないが、12世紀前半ごろまでには旧河川とともに埋没したものと思われる。

SA13　杭は検出していないが、杭列状に第IIｃ〜ｄ区にかけて５〜10cm大の柱穴が南北に連なっていることが確認された。旧河川が埋没した後の打ち込みである。第IIｄ区では溝状遺構に伴って見られたことより、これもSA05同様護岸用の杭列と思われる。近世以降のものか。



土層所見
第１層　現耕作土（床土は省略）
第２層　褐色〜暗褐色粘質土（遺物包含層）
第３層　暗褐色粘質土
第４層　暗褐色砂質土
（木炭片、砂礫、焼土等を多く含む）
第５層　褐色粘質土（砂礫混じり）
第６層　砂礫ブロック
第７層　暗褐色砂質土（砂礫が多い）
第８層　灰褐色砂層
第９層　明褐色シルト層（上面は遺構検出面）
第10層　褐色シルト層
第11層　明褐色シルト層
第12層　明灰褐色シルト層
第13層　暗灰色粘土層
第14層　暗灰色シルト層
第15層　暗灰色細砂層
第16層　黒灰色粘質土〜粘土層
第17層　灰色シルト層
第18層　暗灰色〜黒灰色粘土層
第19層　灰色〜暗灰色砂層〜砂礫層

Fig,12　溝状遺構（SD11・12）土層断面図（1/40）

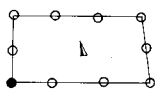
2) **掘立柱建物**（Fig,11・13～27、PL,5・6・17・18・26・27、Tab,2・3、付図３）

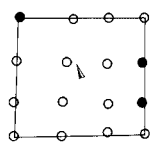
概要　第Ⅱ区では、溝状遺構によって方形に区画されている屋敷地内に、多数の柱穴が検出された。調査現場、および図上の操作によって確認された掘立柱建物は60棟である。建物の柱間取からみた種類は、２×2 間が１棟、２×３間が50棟（うち庇付建物が７棟）、２×４間が４４棟、３×３間が３棟、３×４間が１棟、４×５間が１棟である。

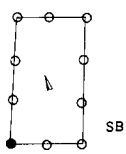
これらの掘立柱建物の分布は、方形区画内においては、特に７ヶ所にまとまって分布しており、さらにこれらの地点において、掘立柱建物の建変えが数回にわたって行なわれている。最も建変えが煩雑な地点は、第Ⅱａ区のSB87などが位置する地点で、５回ほど、またＳＢ67・SB74などが位置する地点で３～４回ほどの建変えが認められた。

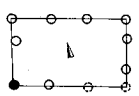
これらの建物の時期は、柱穴からの出土遺物からみると鎌倉時代にあたる13世紀の半ばから後半を中心とする時期で、14世紀に一部がかかるものもある。

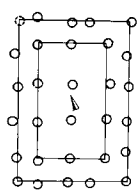
●は柱根痕跡
○は柱穴掘り方
◌は未確認











SB51　２×３間の東西棟。北桁行長が南側に比べて短いために、東北角がややいびつである。棟方向はＮ－77°－Ｗ。柱穴は25～48cm。柱穴埋土は焼土を含む。深さはいずれも25～30cm。東西の両妻の棟柱、桁行の側柱の柱間隔は均等。西側妻に間仕切柱と思われる径15cmの小さな柱がある。

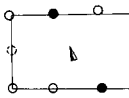
SB52　西もしくは、南側に庇が付く２×３間の総柱の東西棟。平面形は端正な長方形。棟方向はＮ－77°－Ｗ。柱の大きさは庇部が20～25cmで、身舎の側柱が30～45cmである。深さは20～35cm。柱穴埋土はわずかに焼土・木炭を含む。柱の配置は比較的均等な間隔で配されているが、北西隅の柱間をやや広く取っている。柱根痕跡が見られたのはSP1278・1624・1483である。

SB53　２×３間の南北棟である。棟方向はＮ－16°－Ｅ。柱穴は径25～45cm。深さは25～35cm。柱根痕跡が見られたのはSP1297のみ。柱はほぼ均等な間隔で配されている。南妻側に間仕切柱と思われる柱がある。柱の切り合いから、３回ほどの建変えがあった可能性がある。

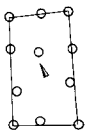
SB54　２×３間の東西棟である。南東隅の柱は未確認である。復元では、北側の側柱は均等な配列であるが、東西の妻側の柱は不均等である。柱は径30～35cmで、深さは25cmほど。

SB55・132　２×３間の総柱の建物（SB55）を身舎とする、４面庇付の建物である。南北棟で、棟方向はＮ－16°－Ｅ。庇部の側柱の配列は主体部の柱筋にほぼ正確に合わせて配列している。ただし北側の庇部

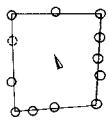
の北西隅柱は未確認。また北東と南西角部の柱の配列は、身舎の柱筋からずれている。主体部と庇間は約110cmの幅を取っている。柱根痕跡は約20cm前後。


SB56

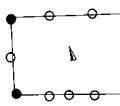
SB56　2×3間の東西棟である。西側妻の棟柱は未確認。梁行中央からやや北寄りに位置する柱穴が棟柱に該当するか。柱穴は径30～40cm。北東隅の柱と北側柱に根石がみられた。柱根痕跡は径15cm。


SB57

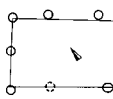
SB57　2×3間の南北棟。北側妻側に間仕切柱がある。東西の側柱のうち南妻側の柱は東西が対称的に柱1本分の幅で内側に入っている。棟方向はN－17°30′－W。柱穴は径30cm。柱根痕跡は20cmほどでやや小さい。


SB58

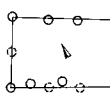
SB58　2×3間の東西棟である。平面形は北側桁行がやや長い、ややいびつな長方形である。棟方向はN－72°－W。南北の桁行の柱の配置は東西両妻側に寄っている。柱穴は、四隅の柱が40cm前後で大きい。他の柱は25～30cm。柱根痕跡は径15cm前後である。SB59と重複している。


SB59

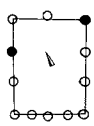
SB59　2×3間の東西棟。平面形は端正な長方形。SB58と重複しているが、切合い関係は不明。棟方向はN－74°－W。柱穴は30～40cm。柱間は均等に配されている。東西両妻の棟柱は柱穴1本分の幅で外に張り出す。


SB60

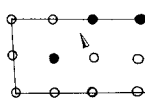
SB60　2×3間の東棟である。棟方向はN－68°30′－E。柱の配列は西側妻の棟柱が1本であるのに対して、南側は2本である。南北の側柱は対称的に中央の柱間を広く取り配されている。柱穴は径20～40cm。


SB61

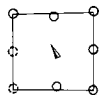
SB61　2×3間の東西棟である。平面形はややいびつである。西側妻には、棟柱は確認できていない。南側柱はSP1036 1本のみの可能性がある。北側柱は2本が中央に寄った配列である。棟方向はN－21°30′－E。柱穴は30～50cm、深さ25～35cm。


SB62

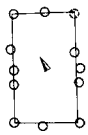
SB62　SB62・63・64はまとまって重複しているが、切合い関係は不明。2×3間の南北棟である。棟の方向はN－21°30′－E。南側妻は、棟柱と隅柱間に1本づつ補助的な柱を配している。


SB63

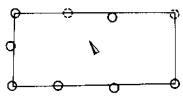
SB63　SB62・64に対して直交に重複。2×4間の東西棟である。総柱の建物である。桁行が南の方がわずかに短い。柱の配列から見て、東側に庇が付く2×3間の建物の可能性もある。柱穴は35～50cm。柱根痕跡は20cm。


SB64

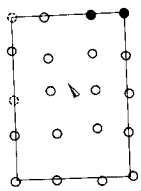
SB64　2×2間の東西棟である。平面形は正方形。西南隅柱と西側妻の棟柱は未確認。棟方向はN－67°30′－W。南北両側柱は、柱1本分内側に配されている。柱穴は25～40cm前後。深さ20cm。柱根痕跡は15cm弱。


SB65

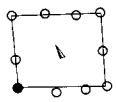
SB65　2×3間の南北棟である。東西の側柱は中央に3本の柱が寄る配列である。また、南側妻の柱配列は隅柱と棟柱間に1本の補助柱を配している。棟筋の床中央に柱が1本配されている。棟の方向はN－21°30′－E。柱は径20～30cm。柱根痕跡は10～15cm。


SB66

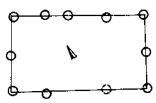
SB66　2×3間の東西棟。棟方向はN－21°30′－E。北東隅柱は未確認。柱の配列からみて復元にやや無理があるかもしれない。柱穴は径30～40cm、深さ20～30cm。


SB67

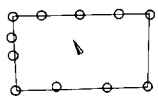
SB67　3×4間の総柱の建物である。柱の配列は整然としており、建物平面形は長方形である。桁行の間隔が一定であるのに対して、梁行の間隔が不定である。西側もしくは東側が庇部になる可能性がある。SX52から西側側柱を切られている。柱穴は径35～50cm、柱根痕跡は15～20cm。他の建物でこの間取りに類似するものはない。


SB68

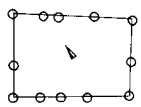
SB68　2×3間の東西棟である。西側妻には2本の柱を棟筋に寄せて配している。南北側柱は非対称で、北側が比較的整然としているのに対して、南側は統一性がない。柱穴は25～45cm、深さ25～30cm。柱根痕跡は15～20cm弱。


SB69

SB69　2×3間の東西棟である。SB70と重複しているが、切り合い関係は不明。SB70から切られている可能性がある。柱穴が密集しているため柱穴の抽出が難しい。東西妻の柱は対称的に整然としているが、南北側柱は、特に南側の配列、柱間隔が不均等である。棟方向はN－65°－W。柱穴の大きさはバラつきがある。径20～50cm。柱根痕跡は15cm前後。

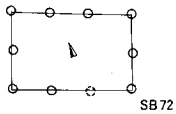

SB70

SB70　2×3間の東西棟である。SB69と重複している。SB69を切っている可能性がある。平面形は端正な長方形。西側妻には2本の棟柱、また北側の桁行は4間の側柱を取っている。柱根痕跡は15～20cm。

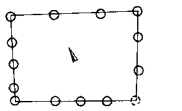

SB71

SB71　SX53の南側に位置する。2×3間の東西棟である。棟の方向はN－68°－W。ほとんど同じ規模のSB71・72・73が少しずつ位置を変ながら重複している。SB71の位置から、SB72、SB73へと展開していったことが予想される。平面形は端正な長方形であるが、西側の梁

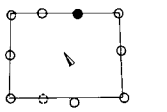
行が長い。西側妻の棟柱はもう一本あった可能性があるが、未確認。


SB72

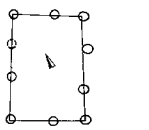
SB72　2×3間の東西棟である。棟方向はN－70°－W。柱の配列は整然としており、柱間隔も均等である。平面形は端正な長方形である。棟柱は東西ともに、妻の中央に位置しているが、梁筋からやや内側に入っている。南北の側柱のうち東妻側は確認できていない。


SB73

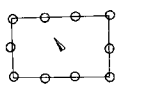
SB73　3×3間の東西棟。棟方向はN－69°－W。南東隅柱は未確認である。平面形は南東隅がやや歪んだ長方形。基本形は2×3間の間取りであるが、両妻には2本づつの棟柱を配している。南北の側柱はそれぞれ桁行の中央に補助的な柱がある。柱穴は径35～45cm。柱根痕跡は15～20cm。


SB74

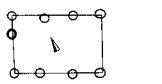
SB74　SB71～73と重複している2×3間の東西棟である。棟方向はN－70°－W。南側側柱は東西隅柱を除いて1本しか確認していない。棟柱は小さい。柱根痕跡は北東と南西隅柱で確認。径は13cm。


SB75

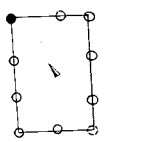
SB75　SB70～74とは棟方向が直交して西側に隣接している。2×3間の南北棟である。柱の配列は西側側柱は均等な間隔で配されているが、他は規格性に欠ける。南側妻の棟柱は2本が中央に寄せて配されている。


SB76

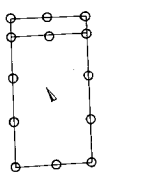
SB76　第IIa区の北東部に位置する。2×3間の東西棟である。棟方向はN－66°30′－W。柱の配置は対称的に、ほぼ均等な間隔で配されている。平面形は長方形で、床面積の狭い建物である。西側妻の棟柱は未確認。


SB77

SB77　2×3間の東西棟である。床面積はSB76と同様狭く、規模は小さい。柱の配列は対称的で間隔も均等。西側妻の棟柱は1本であるが、中央から西北隅柱へ寄っている。柱穴は径25～46cm。深さ20～36cm。

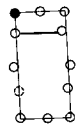

SB78

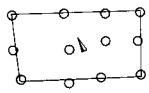
SB78　2×3間の南北棟である。棟方向はN－23°－E。北側妻は2本の、南側には妻中央に1本の棟柱が配されている。東南隅柱は未確認。東北隅柱には根石がみられる。

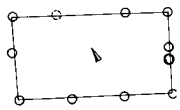

SB79

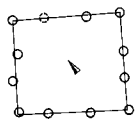
SB79　北側に狭い庇のつく2×3間の南北棟。柱の配列は対称的で、柱間隔も均等である。庇の幅は90cmで、梁行に平行に柱を配している。柱根痕跡は15～20cm。南西隅柱には根石がみられる。SB80と重複しているが、切り合い関係は不明。

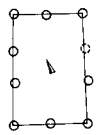
SB80　SB79と同様に、北側に狭い庇のつく2×3間の南北棟である。棟方向はN－24°－E。柱の配列は対称的で、柱間隔もほぼ均等で

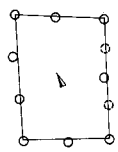

SB80

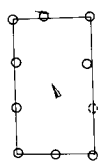

SB81

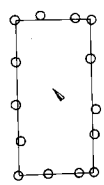

SB82

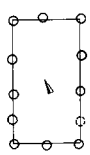

SB83


SB84


SB85


SB86


SB87


SB88

ある。庇の幅は70cmで、SB79と比べやや狭い。SB80と重複している。柱穴は径20～40cm、深さ20～35cm。柱根痕跡は13～18cm。

SB81　総柱の２×３間の南北棟である。平面形は北西隅柱が張り出し、やや歪んだ長方形。棟方向はN－68°－W。柱の配列は対称的であるが、桁行の長さは、西側妻へ行くほど長い。棟筋上の間仕切柱の並びはやや雑。

SB82　２×３間の東西棟である。棟方向はN－65°－W。東側妻は２本、西側には妻中央近くに１本の棟柱が配されている。南側柱には小さな柱が補助的に配されている。

SB83　３×３間の東西棟である。棟方向はN－68°－W。平面形はわずかに歪んだ正方形。床には間仕切りと思われる柱が東側妻寄りに１本見られる。柱の配列は規則性に欠けるが妻間は対称的な配置。柱根痕跡は14cm。

SB84　２×３間の南北棟である。棟方向はN－27°－E。平面形は端正な長方形である。東南隅柱は近接する２つの柱穴があり何れか決めかねるが、同時に２本の柱が使われていたことも考えられよう。東側柱には根石がみられる。柱穴は径15～30cm、深さ15～30cm。

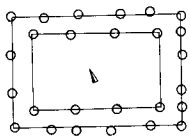
SB85　２×３間の南北棟である。棟方向はN－25°－E。西側柱は、隅柱間に２つの補助柱が配されている。東側柱は、桁行の中央に１本あるのみである。西北隅柱には根石がみられる。柱穴は径20～30cm。

SB86　２×３間の南北棟。棟方向はN－25°－E。北東隅柱と、東側柱のうち、南妻に近い柱は未確認である。北側妻の隅柱が図示したものであるとすると、北側妻の長さは68cmほど短くなり、かなり歪んだ平面形となっている。柱穴は18～61cm、深さ35cm前後。

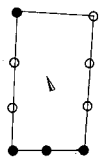
SB87　２×４間を基本形とする南北棟である。棟方向はN－25°－E。柱は整然と対称的に配列されている。西側柱はSB84と同様、補助的な小さな柱がある。柱穴の大きさは25～45cm。

SB88　２×３間の東西棟である。SB84～87、SX01等と重複している。これらの遺構との切り合い関係はSB84→SB87→SB88→SX01、SB85→SX01となる。柱の配列は対称的である。東西側柱には、小さな補助柱が配されている。柱穴は径10～60cm。柱根痕跡は東南隅柱で確認。径14cm。

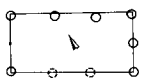
SB89　四面庇がつく、２×３間の東西棟。東側妻は棟柱が２本、西


SB89

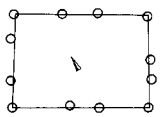
側妻は西南隅にかなり寄ったところに配されている。南・北側柱はともに対称的に配されている。庇は幅が平均100cmで、身舎の桁・梁行の長さの約２分の１である。庇部中央は間取りが長い。庇部の柱穴は径20～40cm。身舎の柱は、径28～60cm。根石は南西・北東隅柱のほか２つの柱で検出。SB95を切っている。


SB90

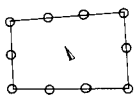
SB90　２×３間の南北棟である。棟方向はN－22°－E。平面形は南東隅柱がわずかに内側に入った長方形である。柱の配列は対称的で均等な間隔で配されている。北妻側の長さは南妻側よりもわずかに長い。棟柱は未確認。桁行の中央に１本あるのみである。北東隅柱以外の隅柱には根石。


SB91

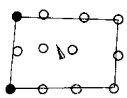
SB91　２×３間の東西棟である。棟方向はN－65°30′－W。平面形は細長い長方形である。西妻側の棟柱は未確認。また南側柱は東西の隅柱以外は未確認である。柱穴の大きさはバラツキがあり、径20～65cm。


SB92

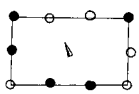
SB92　２×３間を基本形とする３×３間の東西棟である。棟方向はN－67°－W。平面形は端正な長方形。柱の配列は対称的で、四隅の柱間の側柱が、西妻側以外は中央にそれぞれ寄って配されるという特徴をもっている。SB95を切っている。


SB93

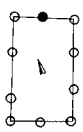
SB93　２×３間の東西棟である。棟方向はN－68°－W。平面形は東南隅柱がわずかに張りだした長方形である。東西両妻の棟柱はほぼ中央に配されている。柱穴の大きさはほぼ一定で、径30～45cm、深さ35cm前後。


SB94

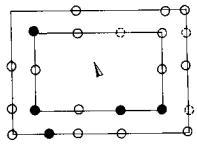
SB94　２×３間の東西棟である。西南隅柱はやや張り出している。柱の配列は、南側柱が西隅柱側に１本しか検出されていない。棟筋に沿って、２本の間仕切柱がある。ただしSP551は仕切柱かどうかは不明。柱穴は径25～45cm。深さ15～35cm。


SB95

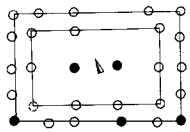
SB95　２×３間の東西棟である。棟方向はN－65°－W。平面形は東側妻がやや短いが端正な長方形。柱の配列は対称的で、柱間隔は均等。西妻側の棟柱には根石がみられる。北東隅柱と棟柱がSB92から切られている。


SB96

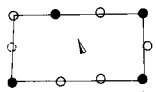
SB96　２×３間の南北棟である。棟方向はN－20°－E。平面形はやや細長い端正な長方形である。柱の配列は　南北妻側と東側柱は柱間隔も均等に配されているが、西側柱は西南隅柱側に大きく幅を持たせ配されている。棟筋に沿って、北妻側に１本の仕切柱が配されている。


SB97・99

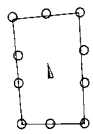
SB97・99　四面に庇がつくと思われる、２×３間の東西棟。柱の配列は対称的で、柱間隔は均等に配されている。庇部（SB99）のは北西隅柱は未確認。身舎との幅は平均150cmで、SB89と比べると長い。庇部の柱穴は径25～45cm。身舎の柱は、径28～61cm。


SB98・100

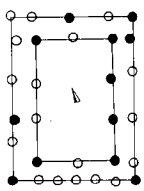
SB98・100　四面に庇がつく、２×３間の東西棟である。身舎は総柱である。棟方向はN－68°－W。柱の配列は対称的に均等な柱間隔で配されている。南西隅柱は未確認。竪穴遺構SX38によって切られている。北側柱のうち、北東隅柱側の１本は確認されていない。庇はSB89と同様に、幅が平均100cmで、身舎の桁・梁行の長さの約２分の１である。庇部の柱穴は径20～40cm。身舎の柱は径28～60cm。根石は西側仕切柱で検出された。


SB121

SB121　２×３間の東西棟である。平面形は西南隅柱がわずかに張り出した端正な長方形。柱の配列は対称的。西側妻の棟柱は未確認。東側棟柱は柱１本分幅外に出ている。柱穴は径35～45cm、深さ20～30cm。

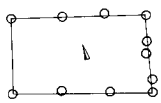

SB122

SB122　２×３間の南北棟である。棟方向はN－10°－E。平面形はやや細長く端正な長方形である。南東隅柱がわずかに張りだしている。柱の配列は、南北妻側と東側柱は柱間隔も均等に配されているが、西側柱は中央に寄せて配されている。棟筋に沿って北妻側に１本の間仕切柱がある。

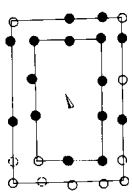

SB123・124

SB123・124　四面庇がつく、２×３間の南北棟。身舎は北妻側に間仕切柱がある。庇の幅は約110～120cmで、身舎の桁・梁行の長さの約２分の１である。庇部の柱の配列は、身舎の柱に対応している。庇部の柱穴は径20～40cm。身舎の柱は径28～60cm。柱根痕跡は20～23cm。

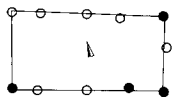
SB125　２×３間の東西棟。棟方向はN－68°30′－W。柱の配列は対称的。西妻側の棟柱は未確認。西側の桁行がわずかに長い。西側棟柱は未確認。柱穴は径35～55cm、深さ22～34m。

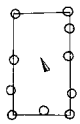

SB125

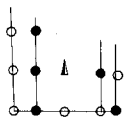
SB126　四面に庇がつく２×３間の南北棟。身舎は南妻側に間仕切柱がある。棟方向はN－18°－E。柱の配列は対称的で、均等な柱間隔。庇の幅は約110～120cmで、身舎の桁・梁行の長さの約２分の１である。庇部の柱の配列は、身舎の柱に対応している。庇部の柱穴は径20～40cm。深さ15～35cm。身舎の柱は、径28～60cm。根石は身舎のすべての側柱でみられた。柱根痕跡は20～23cm。

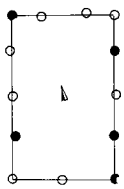

SB126

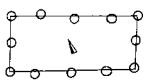
SB127　２×４間の東西棟である。柱の配列は、南側柱がほぼ均等

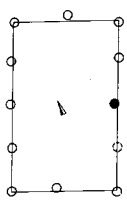

SB 127

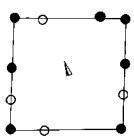

SB 128


SB 129


SB 130


SB 131


SB 133


SB134

な配列であるのに対して、北側柱はやや不規則である。柱穴は径35～55cm、深さ22～34m。竪穴遺構SX53から切られている。

SB128　2×3間の南北棟である。平面形は長方形。棟方向はN－24°－E。柱の配列は、全体的にやや不規則である。北妻側の棟柱は2本である。柱の間取りの基本形は、隅柱に寄せて側柱を配すものと思われる。

SB129　東西に庇を持つ、おそらく2×3間の南北棟である。平面形は長方形。棟方向はN－3°－E。確認された建物のなかではもっとも棟方向が磁北に近い。東側庇の幅は80cmで、西側の幅は118cm程である。身舎の側柱は大きく、掘り方は径30～55cm。庇部の柱穴の径は25～30cm。

SB130　2×4間の南北棟である。棟方向はN－15°30′－E。平面形は端正な長方形。柱の配置は、対称的で、柱間隔も均等であり、非常に整然としている。北妻側の棟柱は2本、南妻側は中央に1本の柱が配されている。

SB131　2×4間の東西棟である。柱の配置は対称的である。柱間隔は均等であり、整然としているが、南北の側柱は並びがやや乱れている。東西の棟柱は中央に1本づつ配されている。柱根痕跡は径16cm。

SB133　床面積の大きな2×4間の南北棟である。棟方向はN－28°－E。平面形は端正な長方形。柱の配置は対称的である。柱間隔は均等で、整然としている。東側柱の東隅柱側の柱は未確認。柱穴は径23～45cm、

SB134　3×4間の東西棟である。棟方向はN－70°－E。平面形は桁行がやや短い正方形。北側柱は竪穴遺構SX52の壁に平行してほぼ等間隔で配されている。南側柱のうち東南隅柱側の柱は未確認。柱穴は径30～45cm。

建物番号（SB）	規模（×）	長軸（棟・cm）桁行（平均値）	短軸（cm）梁行（平均値）	長軸（棟）の方位	床面積（㎡）	柱穴数	柱番号
SB 51	2×3	北 677 / 704 / 南 730	西 367 東 / 363 | 370	N－77°－W	25.83	10	SP 1259、1426、1512、1643
52	2×3	北 668 / 676 / 南 684	西 640 東 / 646 | 634	N－77°－W	43.14	12(16)	SP 1278、1504、1505、1483、1423、1401、1469、1454、1439、1464、1418、1312、1473、1499、1645、1299、1420
53	2×3	北 683 / 682 / 南 680	西 380 東 / 392 | 368	N－16°－E	25.84	10	SP 1315、1289、1297、1404、1279、1424、1279（1280）、1418、1438、1472、1500
54	2×3	北 607 / 565 / 南 522	西 438 東 / 432 | 444	N－74°－W	25.84	12(14)	SP （782）、1654、1154、1213、1203、1206
55・132	2×3	北 630 / 628 / 南 626	西 360 東 / 358 | 362	N－16°－E	22.53	10	SP 784、1001、975、1188、1208、1195、660、782 1183
	4×5	西 870 東 / 874 | 866	北 584 / 583 / 南 582	N－16°－E	50.83	17(18)	SP 1181、1182、1632、1208、1178、1024、124、1205、1211、1661
56	2×3	北 710 / 699 / 南 688	西 403 東 / 398 | 408	N－78°－W	28.95	10	SP 1192、1210、1211
57	2×3	西 600 東 / 580 | 620	北 324 / 336 / 南 348	N－17°30′－E	20.10	10	SP 1227、1233、1229、1231、(1664)
58	2×3	北 668 / 657 / 南 646	西 373 東 / 380 | 366	N－72°－W	24.57	12	SP 4334、4325、4328、4321、4327、4403、4315
59	2×3	北 618 / 620 / 南 622	西 418 東 / 408 | 428	N－74°30′－W	25.98	11	SP 4334、4321、4401、4328、4403
60	2×3	北 706 / (698) / 南 (690)	西 388 東 / 380 | 396	N－21°30′－E	27.04	10(11)	SP 1093、1095
61	2×3	北 576 / 591 / 南 606	西 367 東 / 375 | 358	N－64°－W	20.33	9	SP 1041、1044、1049、1036、1130
62	2×3	西 500 東 / 486 | 514	北 382 / 375 / 南 368	N－20°－E	18.69	10	SP 1086、1031、1108、1085
63	2×3	北 882 / 869 / 南 856	西 392 東 / 394 | 390	N－71°－W	33.89	12	SP 1094、1091、1100、1101、1106、1081
64	2×3	北 432 / 432 / 南 (432)	西 (406) 東 / (398) | 414	N－67°30′－W	(17.58)	6(7)	SP 1079、1071、(1091)
65	2×3	西 611 東 / 618 | (604)	北 336 / (336) / 南 336	N－25°－E	(20.53)	9(10)	SP 807、805、1141、812、1112、817、1119、822、1068
66	2×3	北 (858) / 863 / 南 868	西 (390) 東 / 398 | (382)	N－69°－W	(50.39)	6(8)	SP 1110、1161、819、824、1121
67	3×4	西 873 東 / (870) | 876	北 (604) / (604) / 南 604	N－24°30′－E	52.77	12(14)	SP 892、882(881)、879 867、878、1067、860、876、1065
68	2×3	北 482 / 476 / 南 470	西 389 東 / 386 | 392	N－62°30′－W	18.49	10	SP 823、939、826、487、479、478、828
69	2×3	北 706 / 712 / 南 718	西 410 東 / 420 | 424	N－65°－W	29.24	10	SP 892、867、862、890、874、878、885、1134、1135
70	2×3（4）	北 722 / 710 / 南 698	西 400 東 / 404 | 396	N－68°30′－W	28.55	10	SP 866、834、877、876、893、863、860
71	2×3	北 632 / 627 / 南 622	西 428 東 / 444 | 412	N－68°－W	28.73	10	SP 895、849、903、902
72	2×3	北 640 / 642 / 南 643	西 408 東 / 416 | 400	N－70°－W	25.20	9(10)	SP 909、898、855
73	3×3	北 672 / 655 / 南 638	西 475 東 / 468 | 481	N－69°－W	29.00	11(12)	SP 908、898、1124、904、905、906
74	2×3	北 572 / 587 / 南 602	西 463 東 / 464 | 462	N－68°30′－W	27.30	9	SP 1123、861、900、890
75	2×3	西 683 東 / 692 | 674	北 386 / 395 / 南 404	N－30°－E	26.96	9	SP 920、936、912、915、944、835
76	2×3	北 510 / 506 / 南 502	西 326 東 / 320 | 332	N－66°30′－W	16.30	10	SP 484、488、527、511、528、483、485、492、478、480
77	3×3	北 478 / 473 / 南 468	西 311 東 / 312 | 310	N－63°－W	14.68	11	SP 845、839、831、512、928、931、932
78	2×3	西 (611) 東 / 612 | (610)	北 414 / 406 / 南 398	N－23°－E	25.04	10(11)	SP 922、836、838、830、889
79	2×3	西 788 東 / 792 | 784	北 400 / 401 / 南 402	N－23°－E	31.42	13	SP 765、509、508、473、472、471、680、490
80	2×3	西 770 東 / 770 | 770	北 378 / 379 / 南 380	N－24°－E	29.27	8(9)	SP 743、502、692、510、494、770
81	2×3	北 680 / 662 / 南 644	西 361 東 / 364 | 358	N－68°－W	23.80	9	SP 427、431、691、503

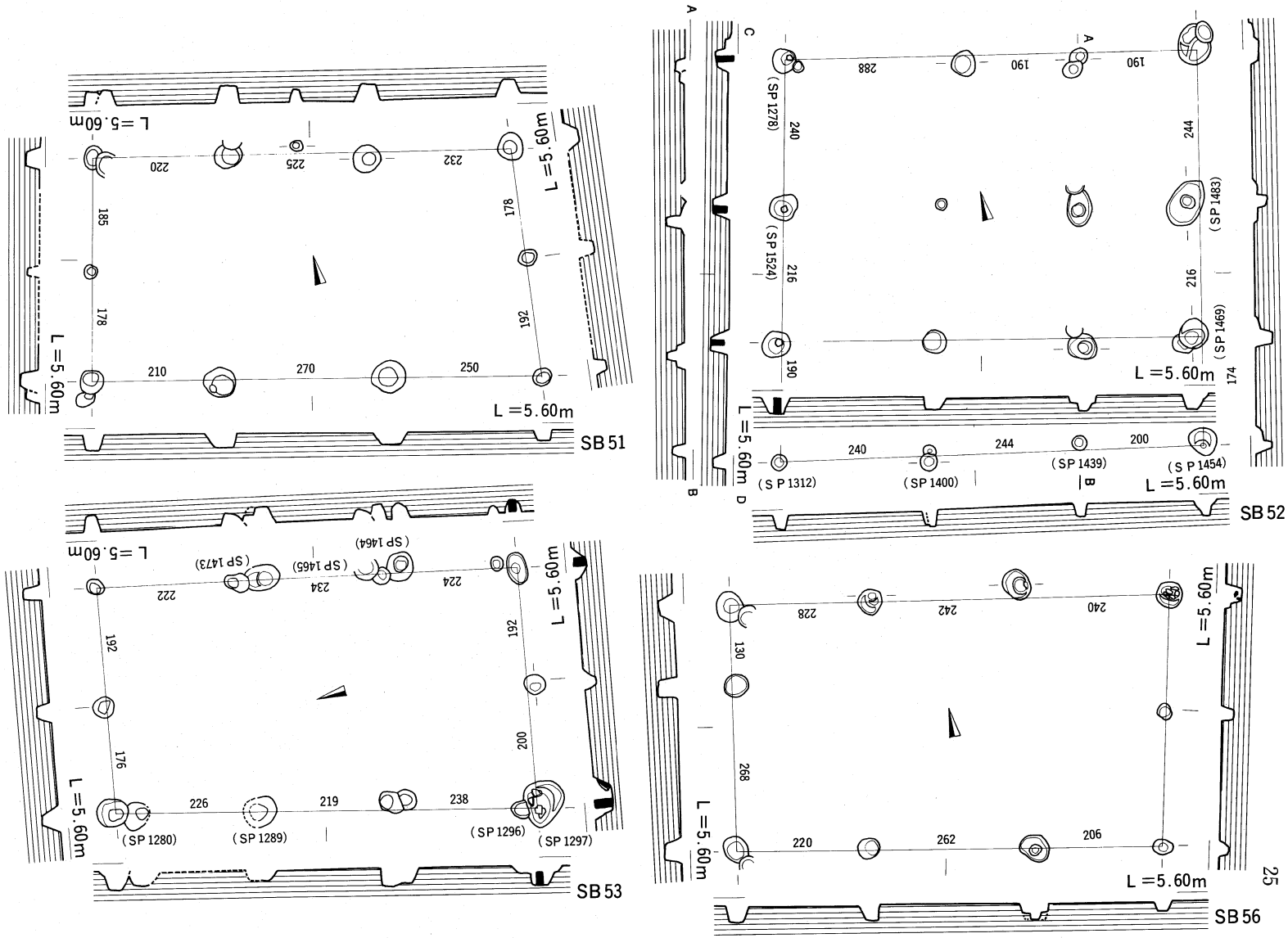
（（ ）内の数値は推定値）

Tab. 2　第Ⅱ区掘立柱建物計測値表（その1）

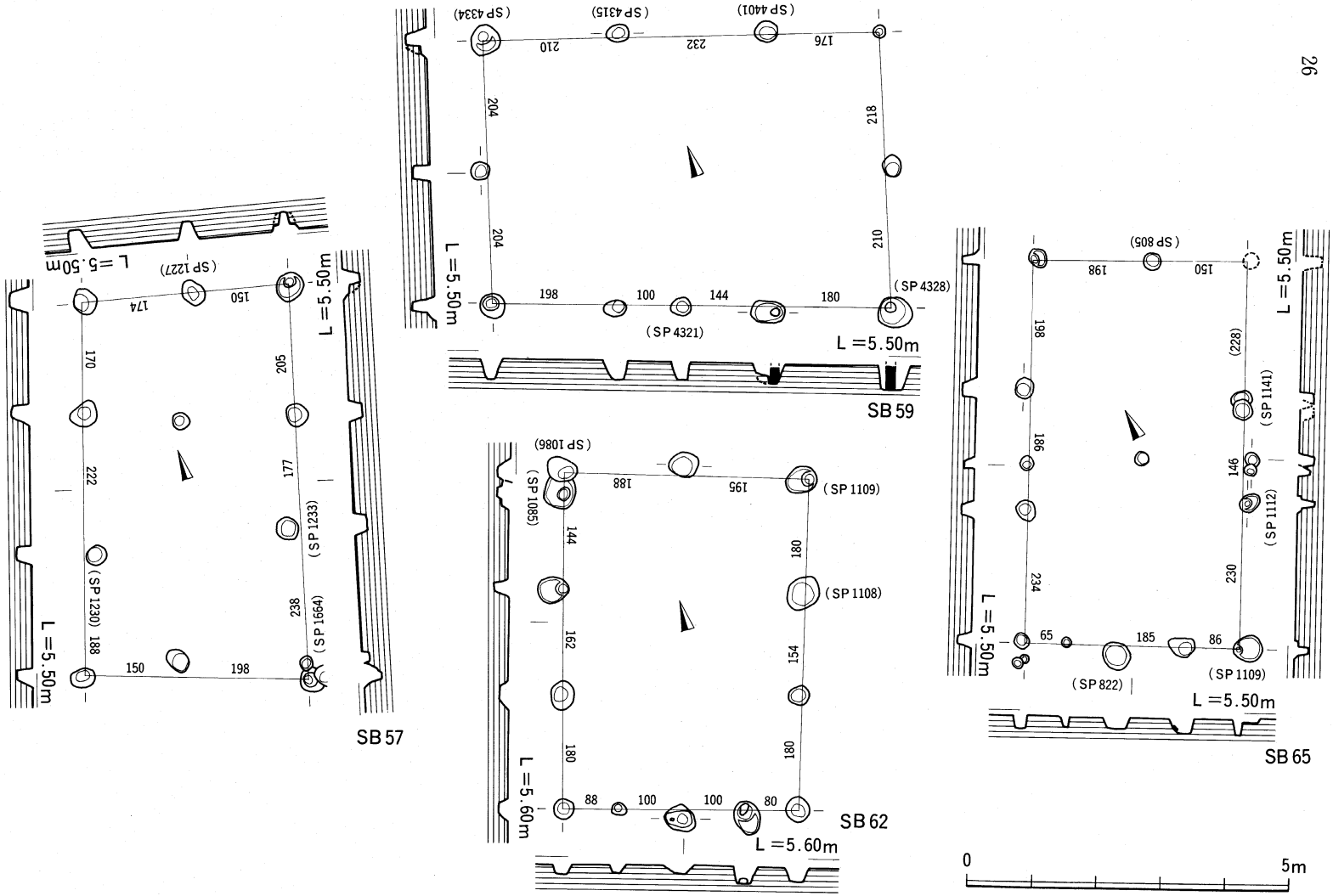
建物番号（SB）	規模（×）	長軸（棟・cm） 桁行（平均値）	短軸（cm） 梁行（平均値）	長軸（棟）の方位	床面積（㎡）	柱穴数	柱番号
SB 82	2 × 3	北 826 — 820 南 814	西 437 東 442 | 432	N－65°－W	35.79	10	SP 747、529
83	3 × 3	北 580 — 585 南 590	西 509 東 498 | 520	N－68°－W	29.64	11	SP 418、423
84	2 × 3	西 597 東 590 | 604	北 374 — 378 南 382	N－27°－E	22.66	9	SP 627、452
85	2 × 3	西 656 東 670 | 642	北 478 — 472 南 466	N－25°－E	28.21	9	SP 723、450、422、599、626
86	2 × 3	西 733 東 727 | (738)	北 (418) — (417) 南 416	N－25°－E	30.62	9(10)	SP 629、439
87	3 × 4	西 824 東 828 | 819	北 397 — 399 南 400	N－29°30′－E	32.75	14	SP 736、623、774、448、750
88	2 × 3	西 663 東 664 | 662	北 364 — 362 南 360	N－27°－E	23.90	10	SP 756、774、625、753、603、453
89	2 × 3	北 886 — 886 南 886	西 601 東 602 | 600	N－64°30′－W	53.19	18	SP 604、605、685、538、534、551、539、564、568、574、583、738、615、612、611、537、687、565、713、737
90	2 × 3	西 732 東 746 | 718	北 404 — 394 南 384	N－22°－E	28.91	9	SP 739、761、567、701、577、760、613、754、575
91	2 × 3	北 640 — 641 南 642	西 314 東 310 | 318	N－65°30′－W	20.24	7	SP 610、536、762、524、544
92	3 × 3	北 706 — 718 南 730	西 497 東 502 | 492	N－67°－W	35.66	12	SP 540、543、545、558、563
93	2 × 3	北 608 — 610 南 612	西 388 東 365 | 410	N－68°－W	23.58	10	SP 546、555、559
94	2 × 3	北 531 — 541 南 550	西 381 東 390 | 372	N－70°－W	20.47	9(10)	SP 541、548、554、560、564、539、551
95	2 × 3	北 610 — 610 南 610	西 362 東 368 | 356	N－65°－W	22.18	10	SP 700、732、581、757、572、578
96	2 × 3	西 557 東 562 | 552	北 314 — 318 南 322	N－20°－E	17.78	10	SP 665、660、729
97・99	2 × 3	北 670 — 669 南 668	西 422 東 422 | 422	N－67°－W	28.27	9(10)	SP 639、657、644、671、707、648、652
		北 920 — 922 南 924	西 669 東 672 | 666	N－67°－W	61.67	10(12)	SP 643、699、706、650、767、672、669
98・100	2 × 3	北 876 — 873 南 870	西 559 東 526 | 592	N－68°－W	48.64	17(18)	SP 640、697、698、649、654、764、672、669
		北 678 — 674 南 (670)	西 404 東 (402) | 406	N－68°－W	27.50	8(9)	SP 638、709、658、673、670
121	2 × 3	北 681 — 691 南 700	西 360 東 360 | 360	N－72°－W	24.73	9(10)	SP 1511、1521
122	2 × 3	西 579 東 564 | 594	北 356 — 344 南 332	N－10°－E	19.96	10	SP 1504、1589、1710、1600、1720、1567、1589、1573、1522、1543、1508
123・124	3 × 3	西 892 東 892 | 892	北 644 — 642 南 640	N－16°－E	57.33	?	SP 1456、1469、1483、1504、1587、1582、1608、1723、1515、1595、1605、1609
	2 × 3	西 661 東 660 | 662	北 410 — 415 南 420	N－16°－E	27.53	10	SP 1650、1582、1586、1459、1552、1587、1513、1481、1478、1613
125	2 × 3	北 706 — 719 南 732	西 417 東 406 | 428	N－68°30′－W	30.03	9	SP 1257、1282、1425、1705、1477、1475、1470、1416、1251
126	4 × 5	西 874 東 870 | 878	北 588 — 583 南 578	N－18°－E	77.76	15(18)	SP 778、792、964、965、952、1126、1000、992、793、1062、955
127	2 × 4	北 806 — 799 南 792	西 422 東 436 | 408	N－69°－W	33.60	12	SP 964、791、792、1132、793
128	2 × 3	西 546 東 540 | 552	北 292 — 297 南 302	N－24°－E	17.01	10	SP 944、948、1125
129	2 × 3		— 南 412	N－ 3°－E		6	SP 1641、1642、1640、1639、1673
130	2 × 4	西 877 東 876 | 878	北 542 — 541 南 540	N－15°30′－E	59.80	13	SP 1311、1298、1272、1418、1496、1402、1715、1447、1466、1510
131	2 × 4	北 665 — 662 南 660	西 303 東 310 | 296	N－70°－W	20.04	12	SP 1228、1232、1240、1229、1230、1666
133	2 × 4	西 908 東 908 | 908	北 558 — 556 南 554	N－28°－E	60.58	11(12)	SP 630、723、447、453
134	3 × 4	西 602 東 604 | 600	北 588 — 588 南 588	N－70°－E	35.35	11	SP 827、833、1066、869

Tab, 3　第Ⅱ区掘立柱建物計測値表（その２）

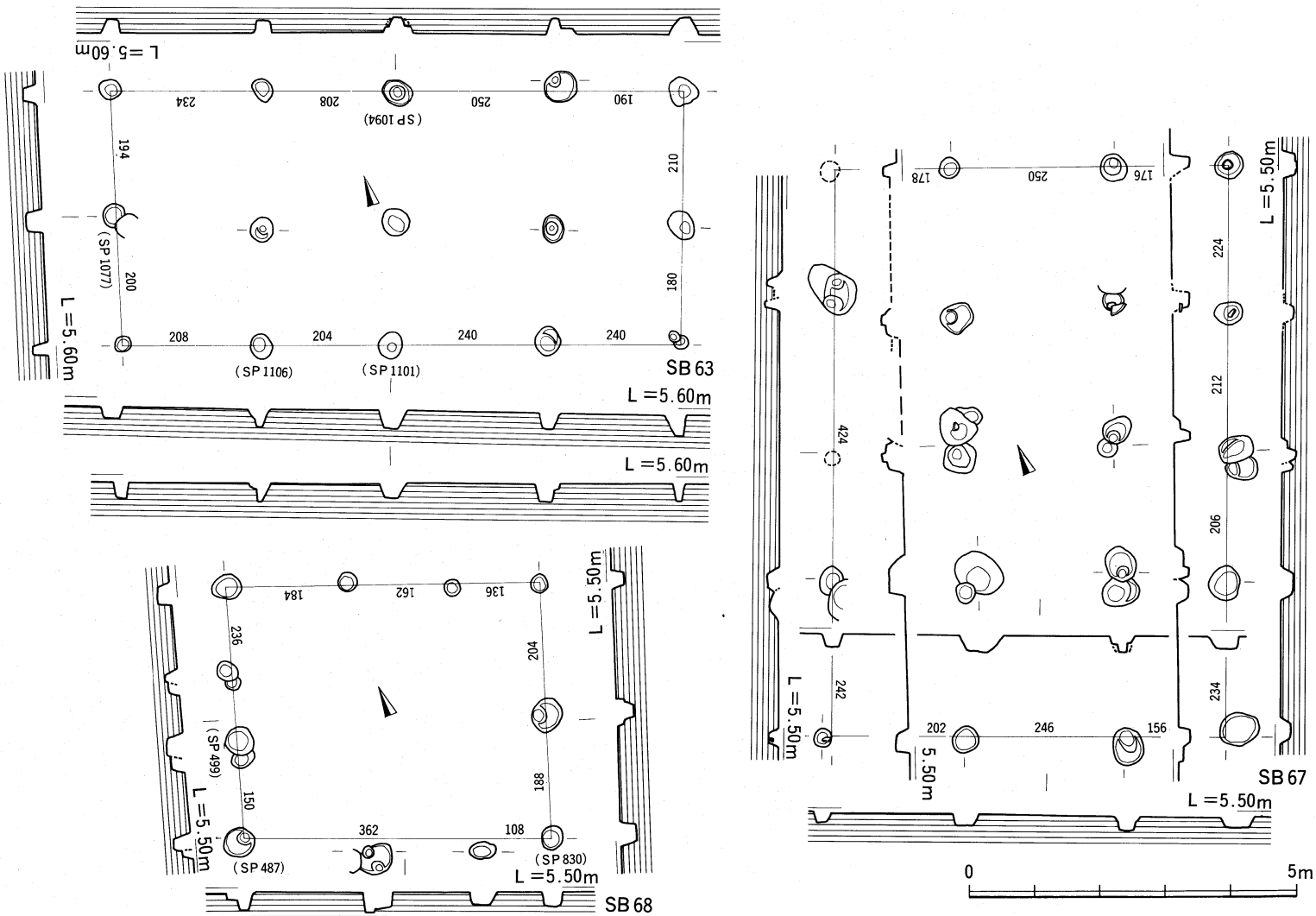
（（　）内の数値は推定値）



Fig, 13　第Ⅱ区掘立柱建物平面および断面図（SB 51～53・56）（1/100）その 1



Fig,14　第Ⅱ区掘立柱建物平面および断面図（SB 57・59・62・65）（1/100）その２



Fig, 15　第Ⅱ区掘立柱建物平面および断面図（SB 63・67・68）（1/100）その 3

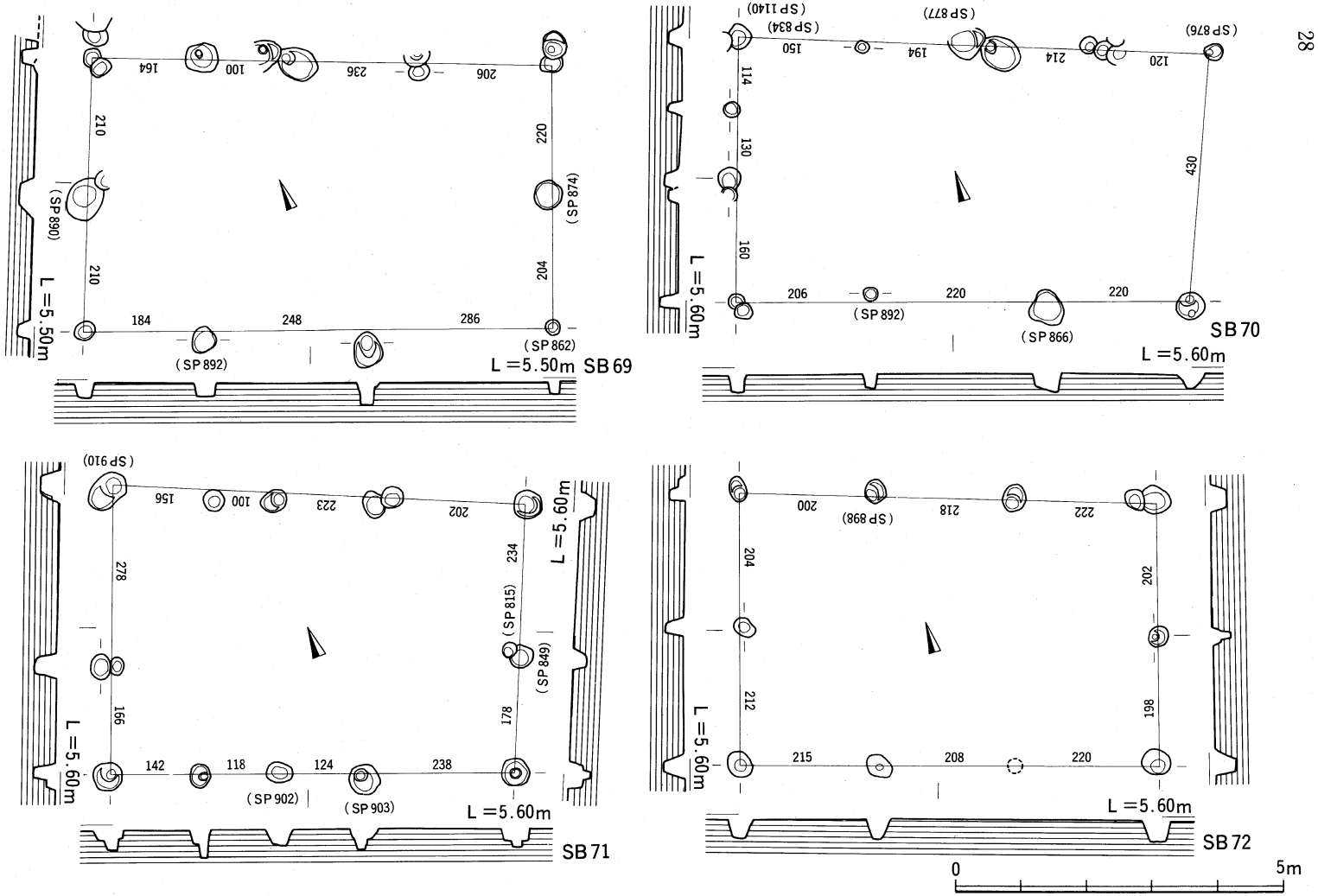
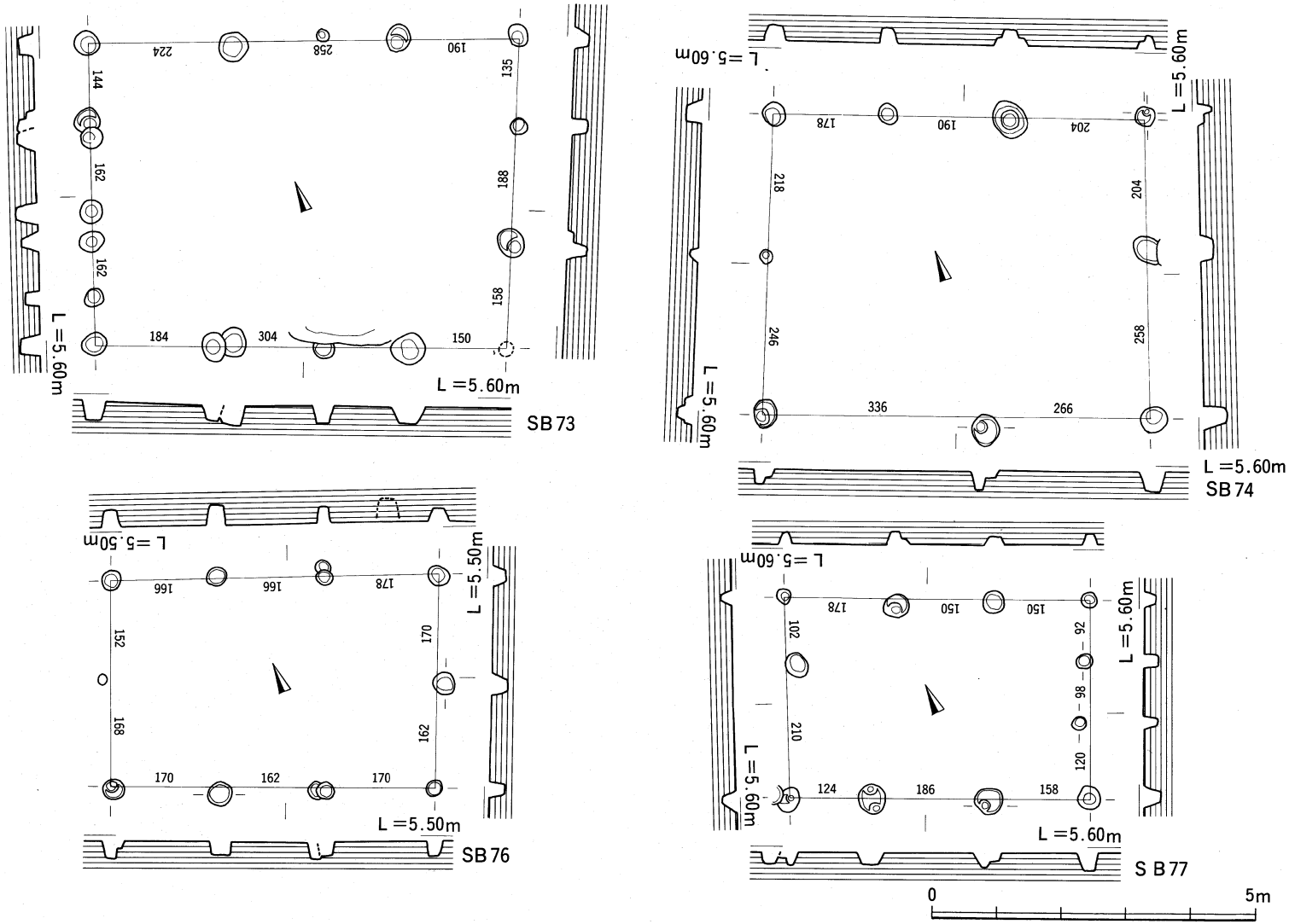


Fig. 16　第Ⅱ区掘立柱建物平面および断面図（SB 69～72）（1/100）その 4



Fig,17　第Ⅱ区掘立柱建物平面および断面図（SB 73・74・76・77）（1/100）その5

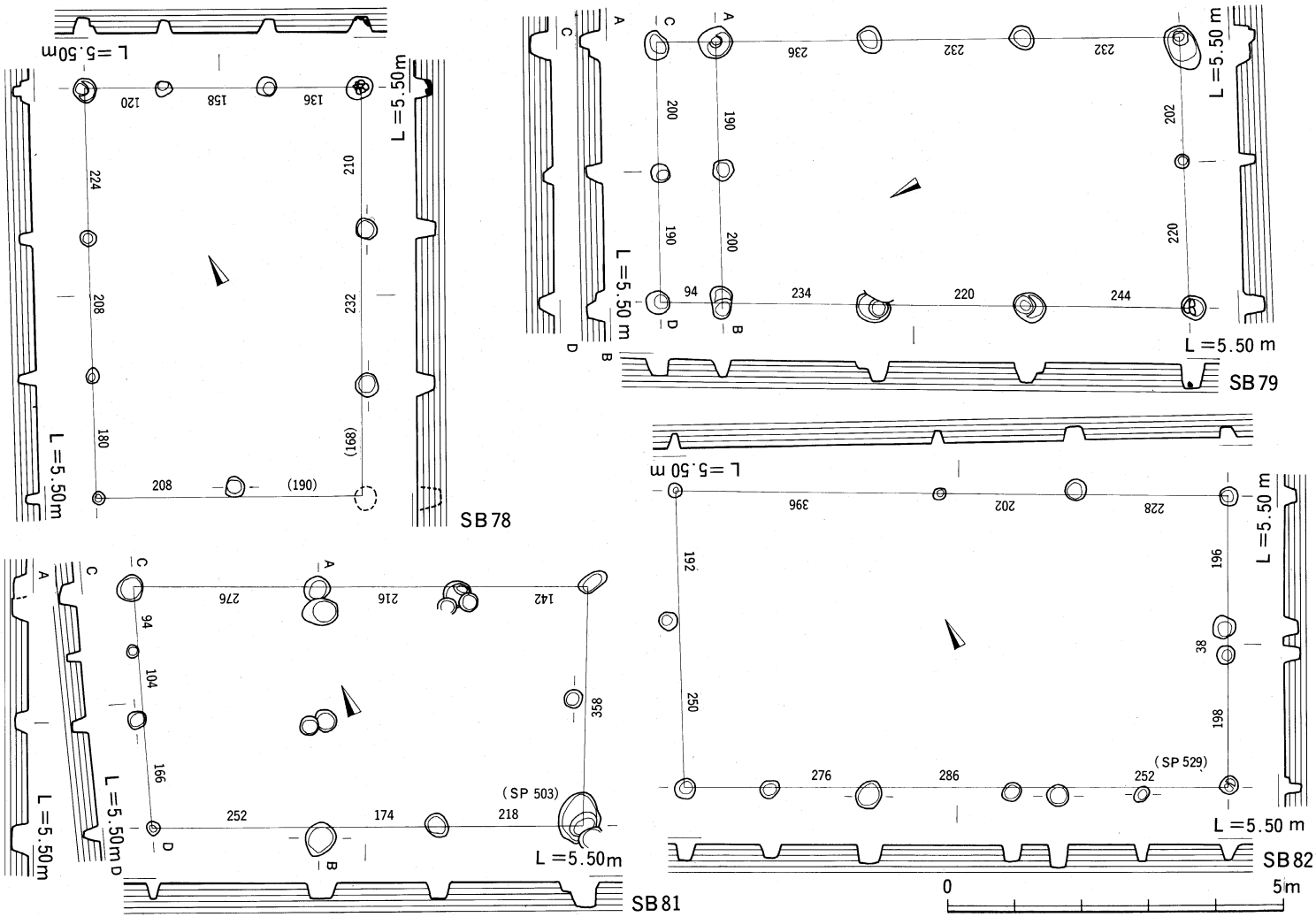
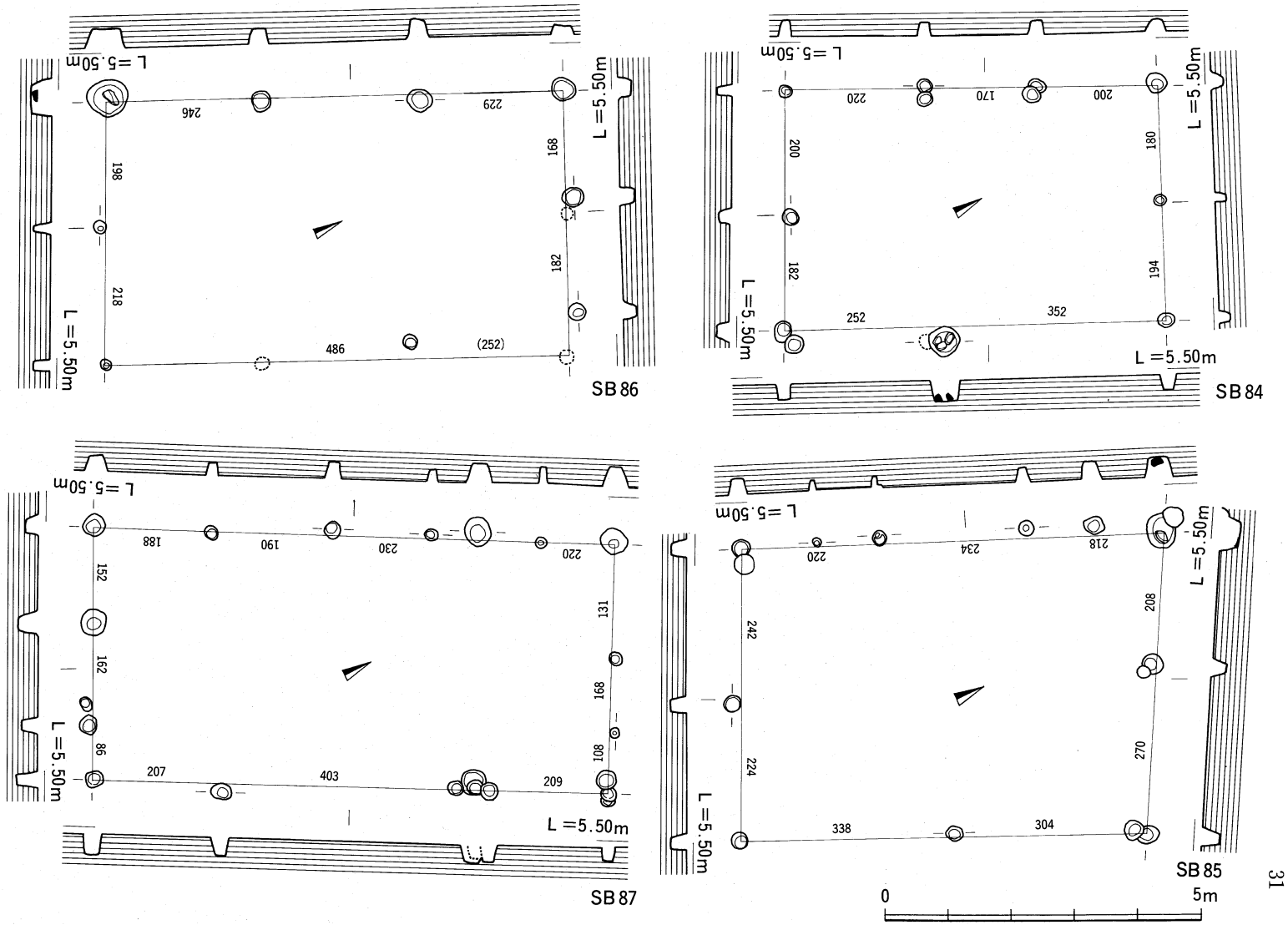
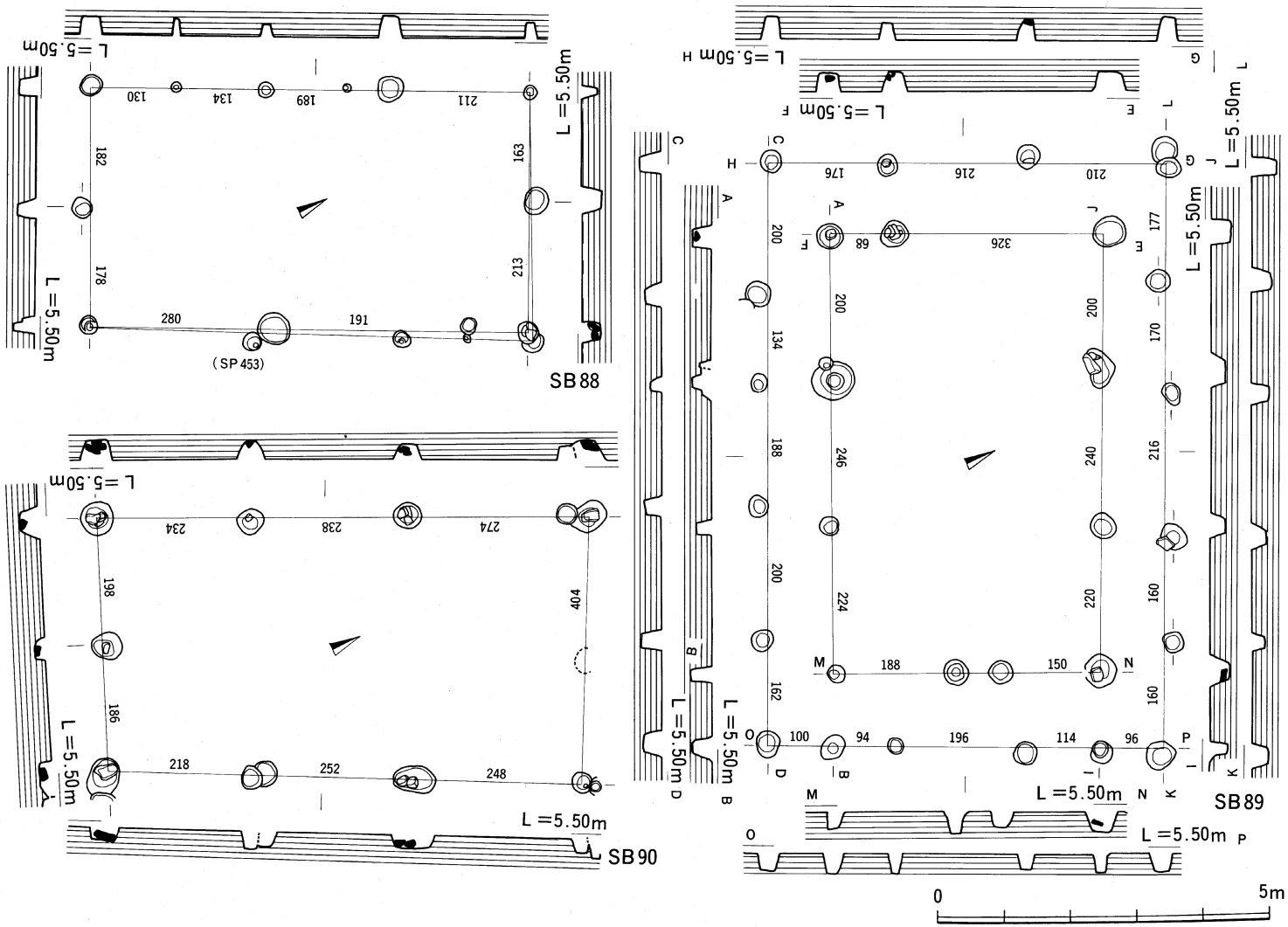


Fig.18　第Ⅱ区掘立柱建物平面および断面図（SB 78・79・81・82）（1/100）その 6



Fig, 19　第Ⅱ区掘立柱建物平面および断面図（SB 84～87）（1/100）その 7



Fig, 20　第Ⅱ区掘立柱建物平面および断面図（SB 88～90）（1/100）その 8

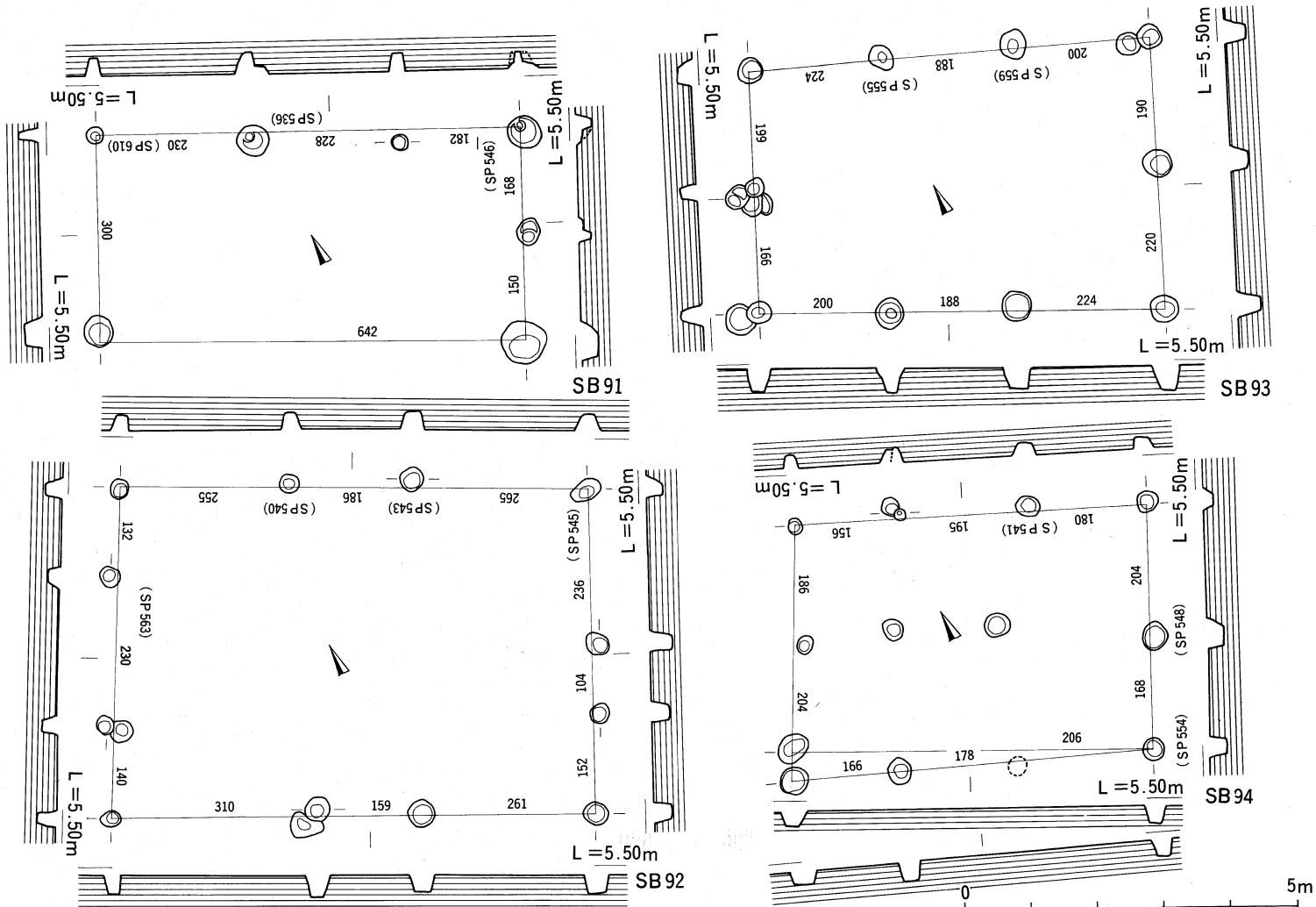
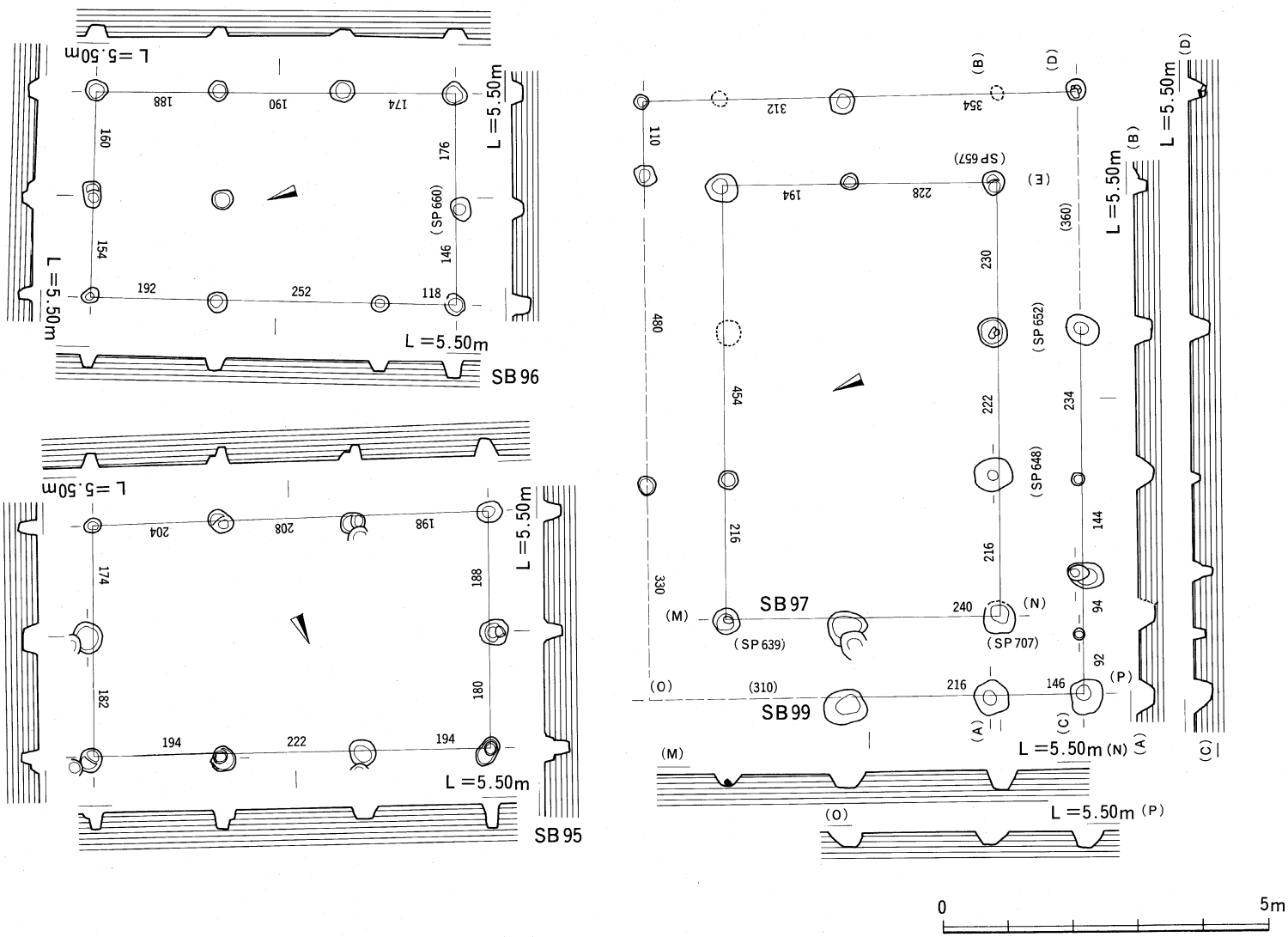


Fig.21　第Ⅱ区掘立柱建物平面および断面図（SB91～94）（1/100）その9



Fig,22　第Ⅱ区掘立柱建物平面および断面図（SB 95・97・(99)）(1/100) その10

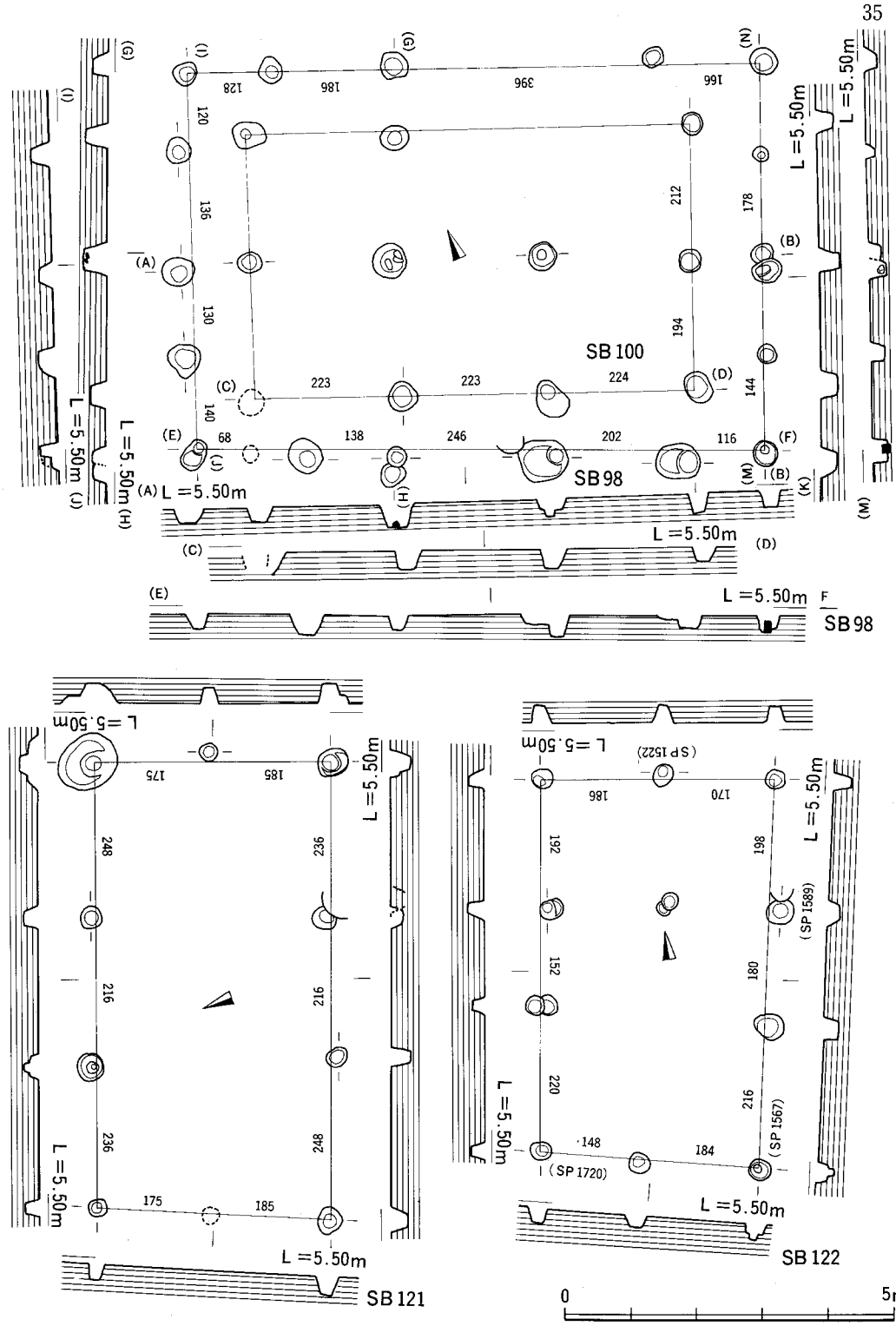
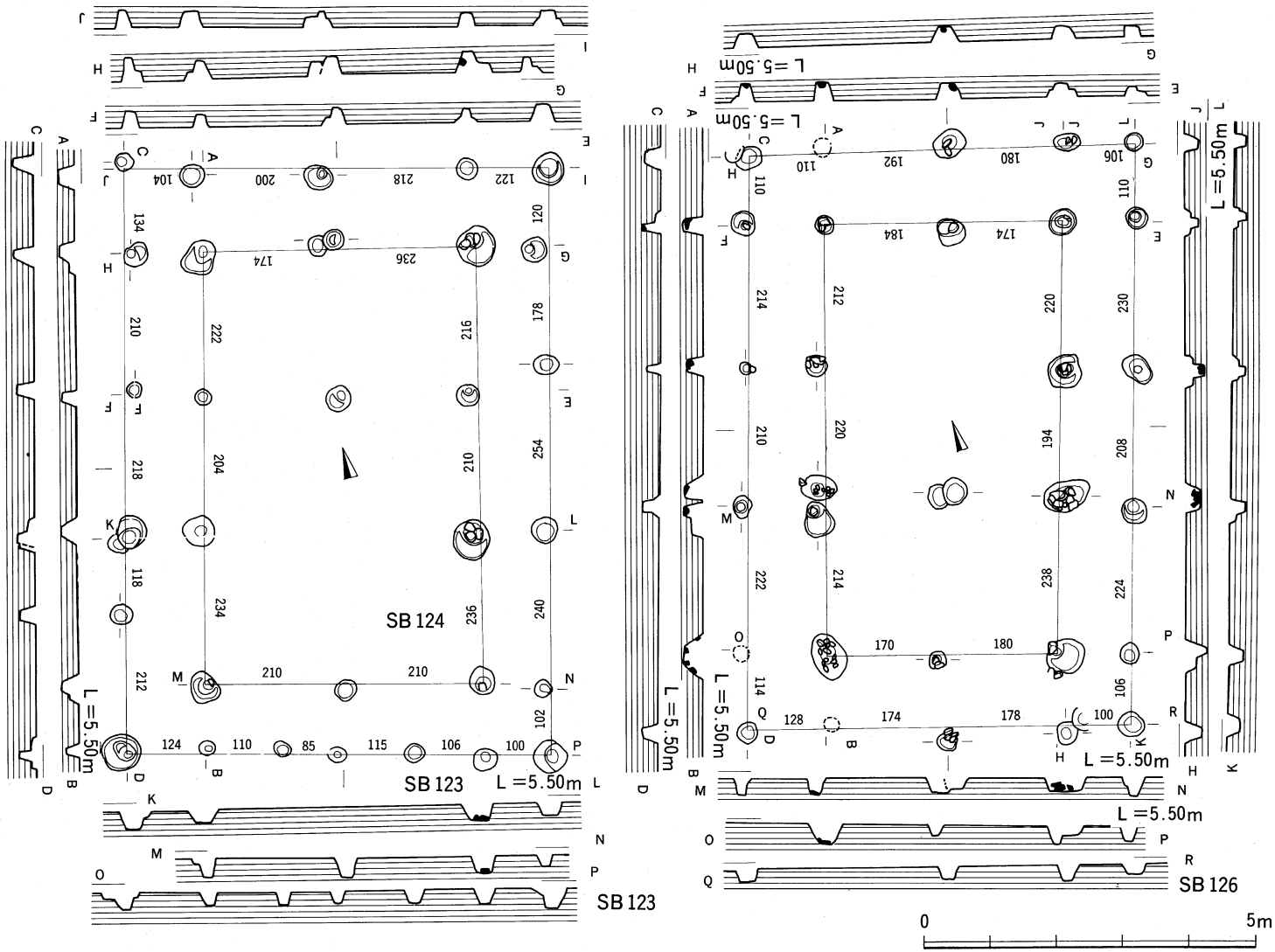


Fig.23　第Ⅱ区掘立柱建物平面および断面図(SB100(98)・121・122) (1/100) その11



Fig,24　第Ⅱ区掘立柱建物平面および断面図（SB 124(123)・126）（1/100）その12

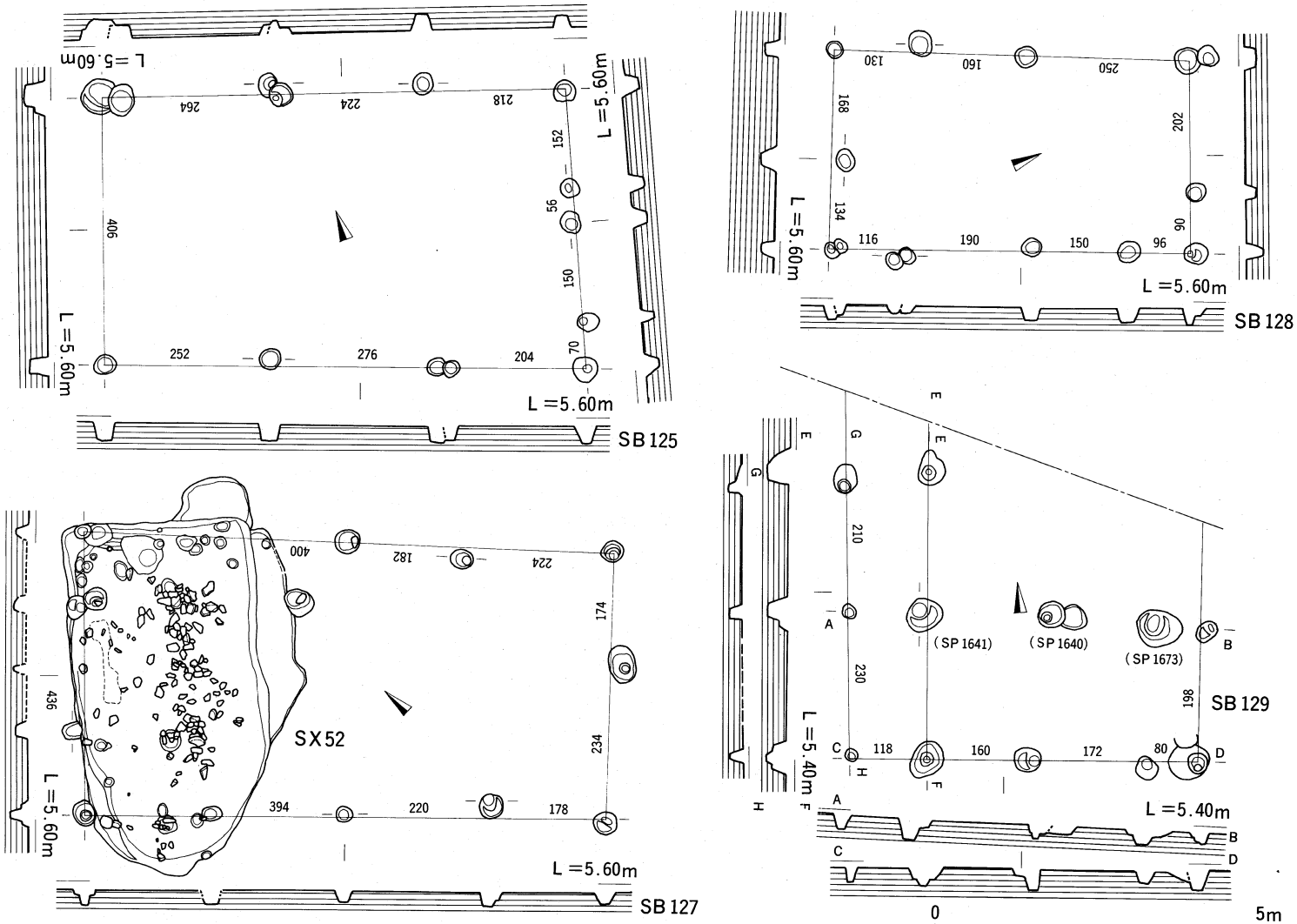
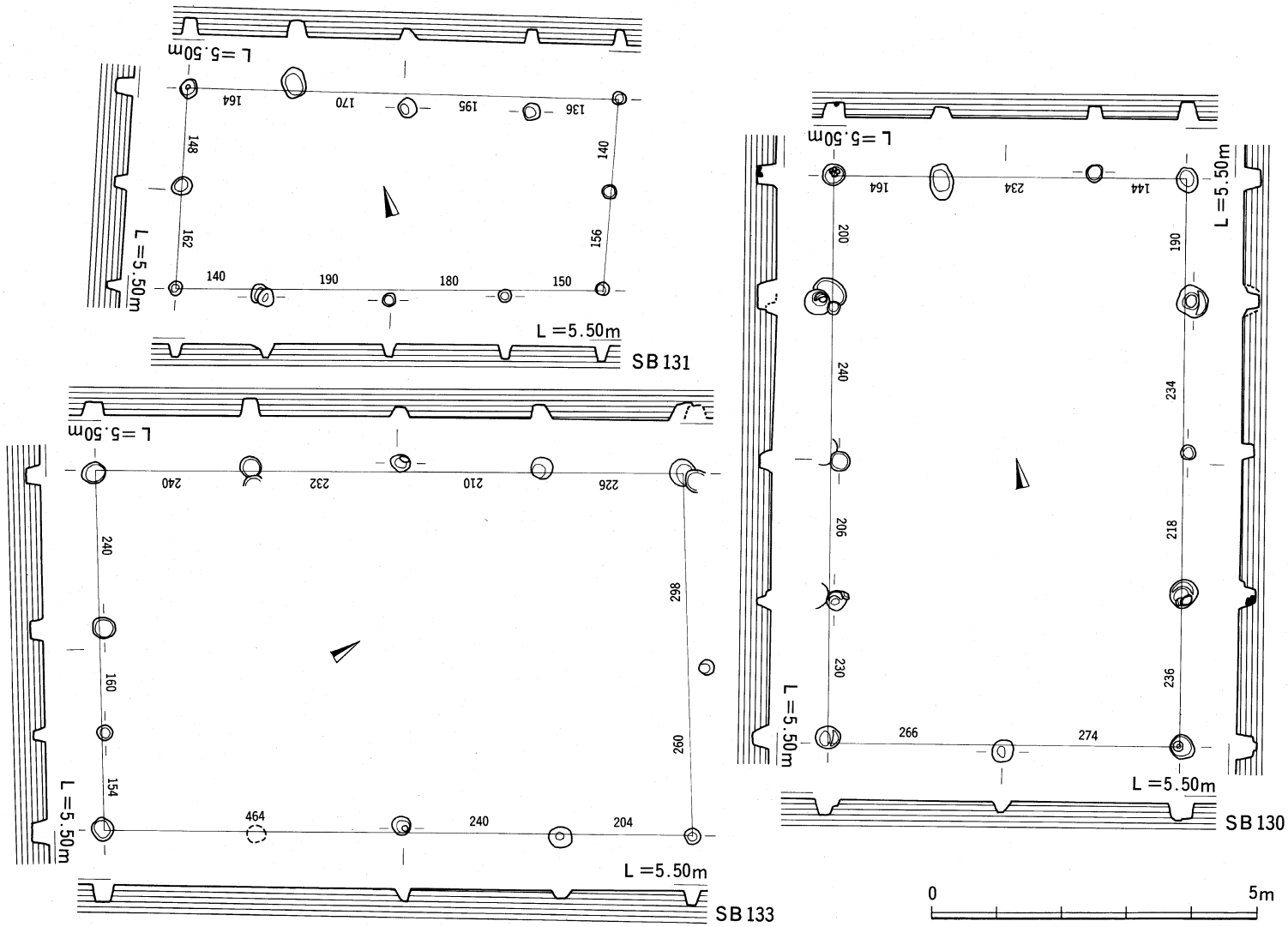


Fig.25　第Ⅱ区掘立柱建物平面および断面図（SB 125・127～129）（1/100）その13



Fig,26　第Ⅱ区掘立柱建物平面および断面図（SB 130・131・133）（1/100）その14

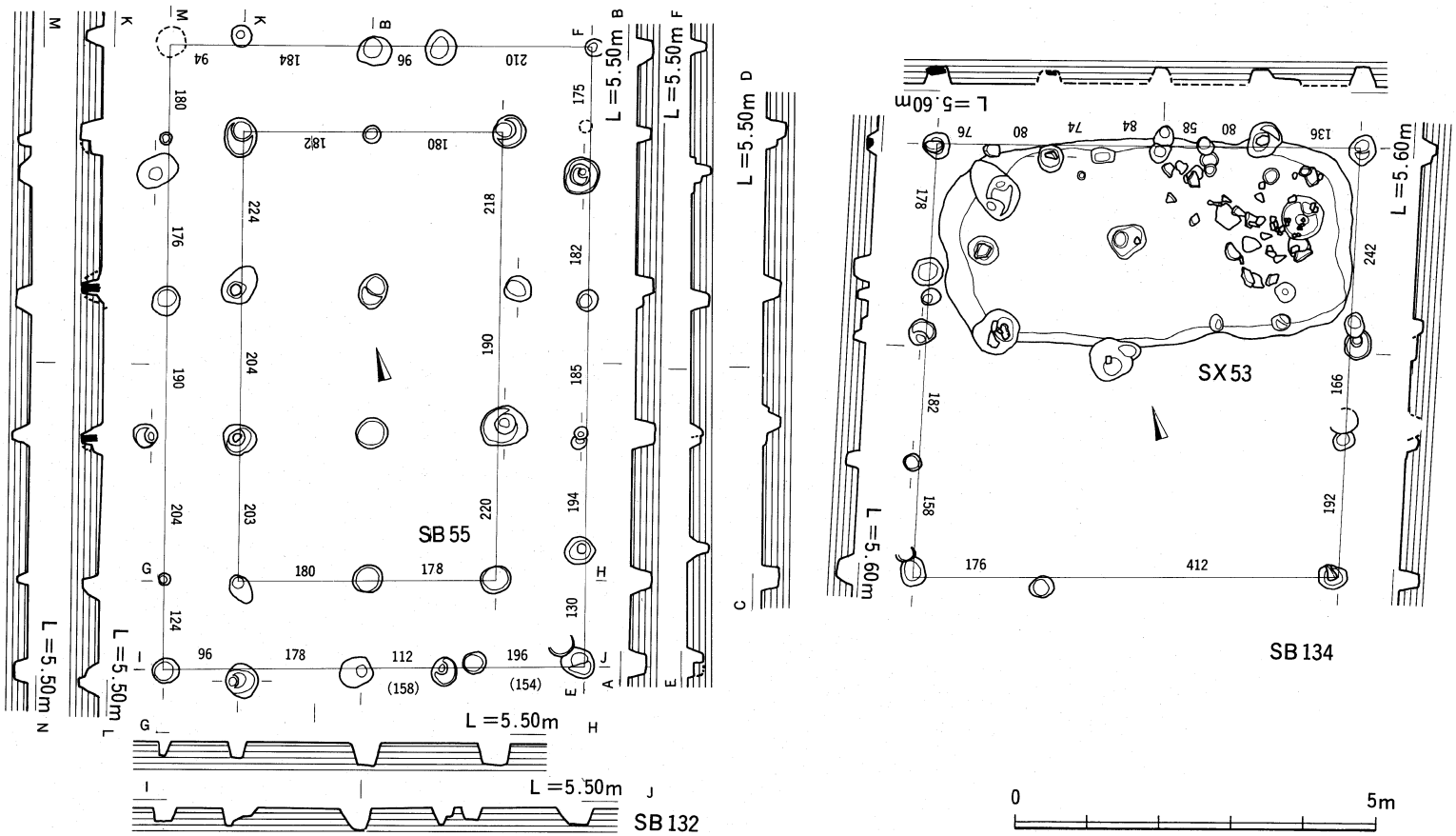


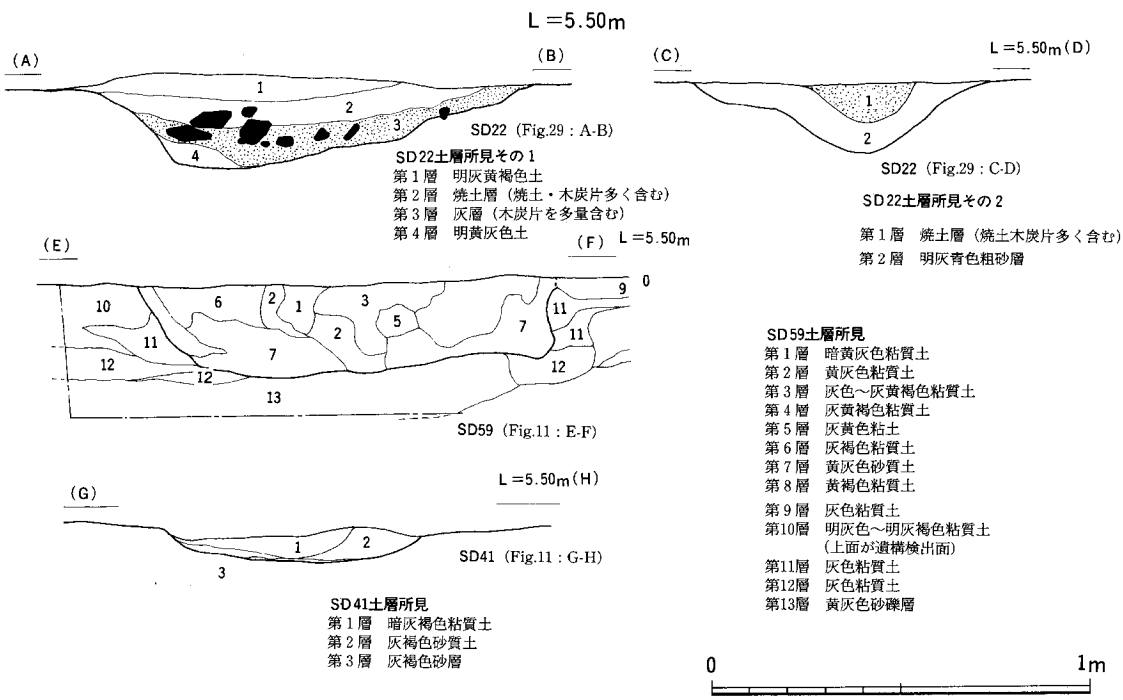
Fig. 27　第Ⅱ区掘立柱建物平面および断面図（SB 55 (132)・134）（1/100）その15

3) 溝状遺構（Fig,11・28・29、Tab,4・5、付図３）

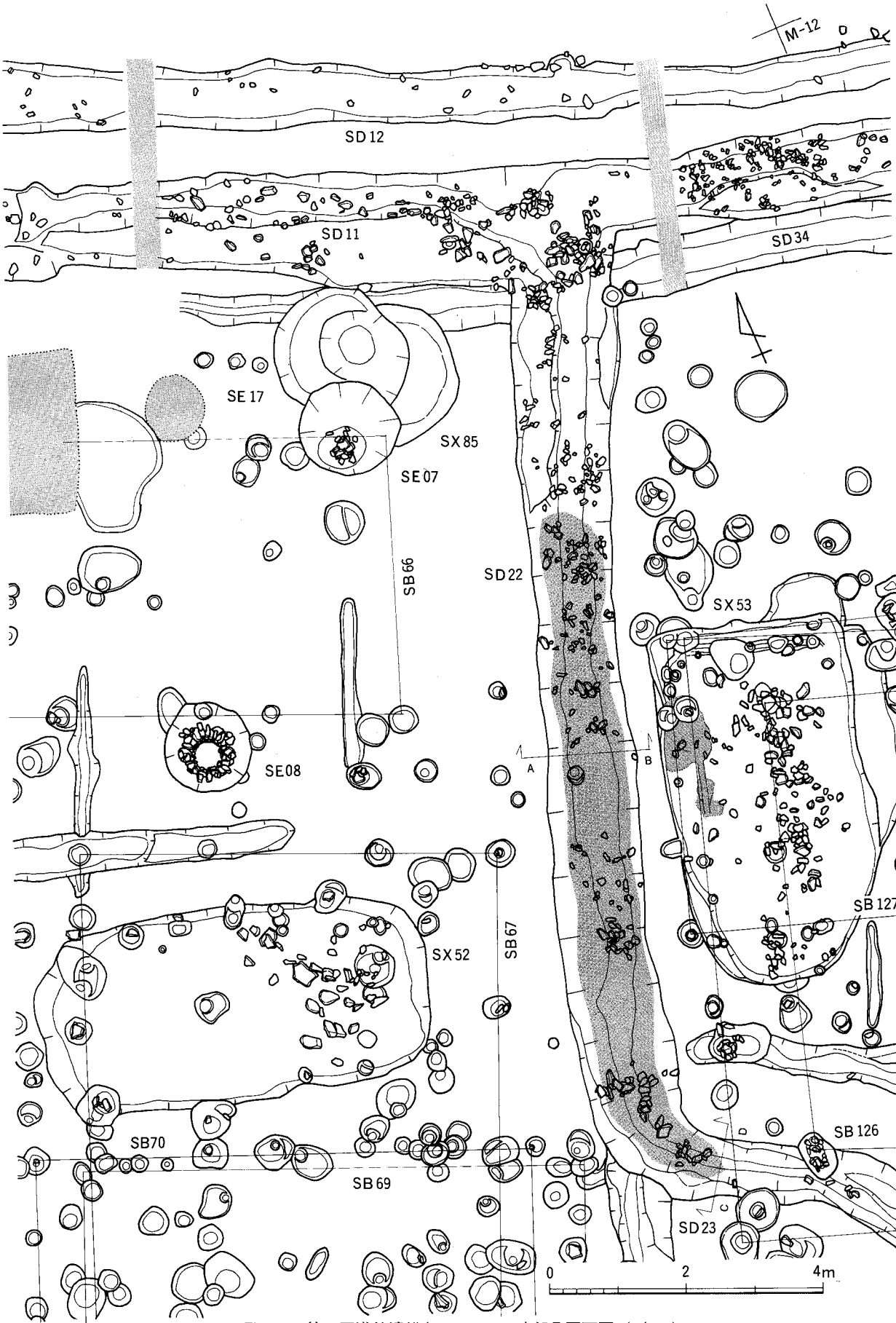
概要　第Ⅱ区では、溝状遺構はSD01～04・11～18・20・22～60・68の53条が検出された。これらのうち、近現代の溝状遺構は、SD01・02・17・18・29の４条である。他は第Ⅱ区を構成する主要な遺構である掘立柱建物群・井戸などと同時期もしくは相前後する時期のもので、おおよそ13世紀を中心とした鎌倉時代に含まれる。

他の遺構との関係では、まず掘立柱建物群・井戸等を取り囲んでいるものは、SD11・16・22・23・75である。またSD22・23・24・25・33なども建物群を区画する溝状遺構と考えられるもので、時期的には先のSD11・16・22などとほぼ同じ時期のものである。また建物に付属する雨落ち溝や、排水用溝と考えられるものは、SD04・13・14・31・46・49などがある。これらの遺構よりも後出のものと思われるものは、SD28・29・39・41・42・43・56～59などで、水田に伴う畦溝と思われるものである。時期は明確でないが水田に伴うこれらの溝状遺構は、時期的には掘立柱建物などの時期とはそう離れていないものと思われる。

なお溝状遺構と他の遺構との分布上の関係で注意されるのは、SD11～16に沿って３～６ｍ幅の遺構の空白帯があることである。明確ではないが土塁状の高まりが、溝に沿ってあった可能性もある。以下、主な溝状遺構について個別に説明するが、遺物の出土状況などの詳細はTab,4・5を参照されたい。



Fig,28　第Ⅱ区溝状遺構土層断面図（SD22・41・59）（1/20）



Fig,29　第Ⅱ区溝状遺構（SD11・12・22）部分平面図（1/100）

SD03　現代の溝状遺構であるSD01に切られている。SX02の東に弧を描くように位置している。長さ6m、幅20～25cm。断面形はU字状である。埋土は暗褐色粘質土で、焼土片を若干含む。

SD04・52　ふたつは同一の溝と思われる。SD13を切っている。SB82・83の間に位置する。南端はSB89まで延びている。断面形は浅皿状。埋土は焼土・木炭片を含む暗褐色粘質土。

SD11、SD12とともに調査区の北側にかかって検出された。現代の灌漑用水路によって上半分以上を削平されている。また近代の杭列SA03によって切られている。SD12との切り合い関係は不明。出土遺物からは、時期的な差はほとんどないが、SD12はやや新しいものと思われる。しかしいずれも13世紀後半以降のものである。SD15・16・20などとは一連のものであり、これらの溝とともに、SD11は、建物群の北側を画している溝である。底部の幅は最も広いところで1.5m。深さは20～30cm。溝状遺構の本来の幅は約2～2.5m、深さは1mほどはあったものと思われる。

SD12　SD11と平行して調査区の北側に検出された。出土遺物はSD11と比べて少ない。SD11の埋土が粘質土を主としていたのに対して、SD12は砂質土が主である。

SD13　非常に残りが悪い。SD04に切られている。幅50cm前後で、深さ15～20cmである。この溝は、SD11、SD12と平行しながら、東側から断続的に続いている、SD20・34・68とは同一の溝状遺構の可能性がある。時期の把握できる遺物が出土していないために明確ではないが、北辺のSD11～13などの溝状遺構の在り方を見ると、少なくとも3回から4回にわたって、屋敷地を囲う溝の位置の変更があったことがわかるが、最も古い時期の溝の可能性がある。

SD14　屋敷地の南西側に位置している。SD15に平行して約9mの長さで検出された。幅は60～80cmほどで、断面形はU字形である。深さは30cmほど。建物SB98・99に隣接しており、何らかの関係を持っていたことが考えられる。SB99、SX34から切られている。

SD15　調査区の南側に位置している。SD11・16とは一連のものであり、屋敷地の南側を画する溝状遺構である。長さは約40mにわたって確認された。幅は基底面で0.6～1.6mを測る。現存の深さは最深部で20cmほどで残りは悪い。本来の溝の幅は少なくとも1.5～2mほどはあったと思われる。削平の状況からみて本来の深さは0.7～1mほどか。

SD16　この溝状遺構は、残存条里の坪境に合うもので、また、既に述べたように、古代官道の推定線上に位置しているものである。SD11・15などとともに屋敷地の西側はこの溝状遺構によって画されている。SD11の場合と同様に砂礫、焼土がやや目立つ暗灰褐色粘質土を埋土として、小礫や遺物が床面から多く出土しているが、小片が多く、磨耗している。最大幅1.5m。

SD22　第Ⅱ区の中央に位置している溝状遺構で、コの字型に張りだしている。幅は

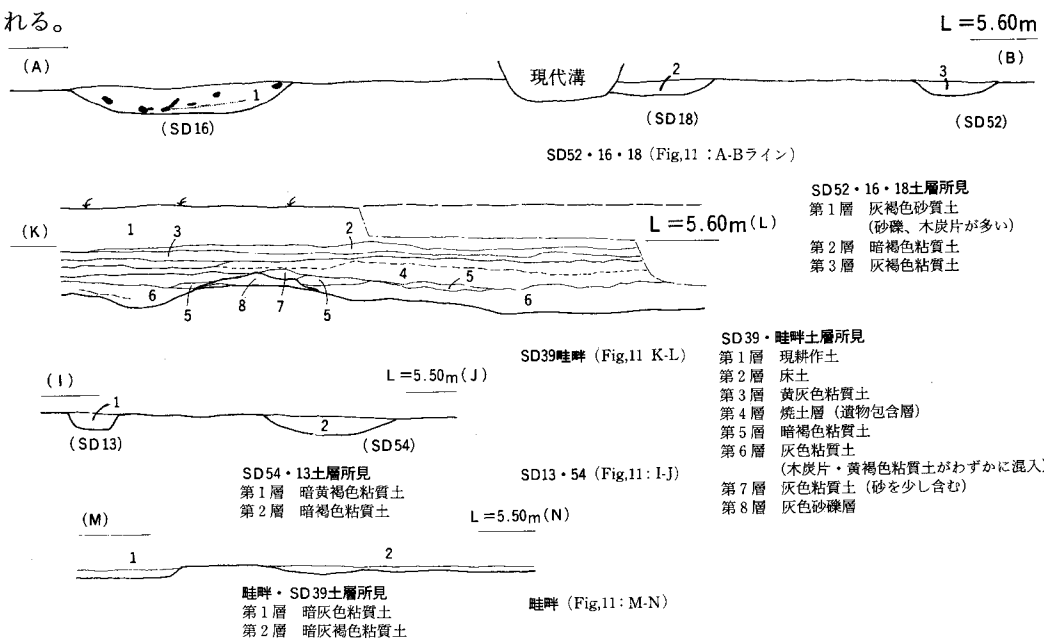
1.4～1.8mほどで、深さは0.4～0.5ほどで遺存していた。比較的残りは良好である。大量の遺物が溝の床面から中位ほどの深さに堆積しており、また焼土・木炭層などが層をなして見られた。この溝状遺構周辺での切り合い関係は特に顕著で、SD24→SD22、SD23→SD22→SD33→SE13、SD33→SE09、SD22→SB126、SD30→SE12、といった先後関係となっており、屋敷地が東側に徐々に拡大していった過程がわかる。なおSD22のコの字形に張り出した中に、2×3間の掘立柱建物SB128が建てられている。この溝状遺構の張り出し（長さ10m、幅4m）と、建物の機能については、屋敷地全体の平面的な構造の中で考察する必要があると思われる。

SD27～29・39・43～44・56～59　先述したようにこれらは、おそらく水田に伴う畦溝、あるいは畝状遺構と思われるもので、南北に遺存しているものが多い。SD43・44・49以外は、いずれも屋敷地に伴う遺構を切っており、屋敷が放棄された後の土地利用が、水田もしくは畑だったことを物語っている。また逆にSD43・44・49などは掘立柱建物によって切られており、水田ないし畑を整地して居住区を西に拡げたことが予想される。なおこれらの溝で区画されている田圃の形状は、条里の一坪の北半分に、南北に長い6列の水田で構成されている。条里における屋敷地の配置と水田の構成が、一定の計画性の下で行なわれたことは否めないであろう。

SD31　SB67・SD27から切られている。掘立柱建物SB134と竪穴遺構SX52の主軸とほぼ平行している。幅は40cm、深さ20cm。埋土は暗褐色粘質土で焼土・木炭片を含む。

SD46・48・53・55　これらはいずれも、掘立柱建物の側柱に平行に隣接して位置する溝状遺構である。壁の立ち上がりは弱く、掘り方も明確ではない。溝内からの遺物は少なく二次的な堆積である。

SD42　この溝状遺構はSX70と同一の可能性がある。沖積地特有の微地形の窪みとも思われる。



Fig,30　第II区溝状遺構・畦畔土層断面図（1/40）

Fig.No	PLNo	調査区	遺溝No	調査時No	出土遺物	出土遺物 Fig.No	備考
11 付図3		IIa	SD01	SD15	青磁――壺、平底皿、碗II類　合子 土師器―坏、皿、小片　染付（近世～現代） 須恵――捏鉢　輸入陶器 瓦質――甕、火鉢　弥生土器	62－206	近現代の溝
〃		〃	SD02	SD16	白磁――碗IV・IX類　土師質土鍋 青磁――碗I・II類　須恵質捏鉢 土師器――坏、小片　石鍋、粘土塊 輸入陶器―鉢・壺		SD16→SD02 18 ↓ SD01
〃		〃	SD03	SD17	土師器―坏、皿		SD01から切られる。
〃		〃	SD04	SD18	土師器―皿　粘土塊 白磁――小片　染付 瓦器――小片 土師器土鍋	63－209～210	SD52と同一か。 SD13を切る。$
11 付図3 30		IIa、b c	SD11	SD25	土師器―碗、坏、皿　瓦器―碗　瓦質―甕、擂鉢 土師質―土鍋、鉢、甕　陶器―褐釉壺水注 須恵質―捏鉢、皿、甕、坏、小片　擂鉢・甕 常滑、石鍋、磁石、木炭、粘土塊　盤・鉢・壺 白磁―小碗(IX)、碗(VI)(VII)(IX)その他の白磁碗、口ハゲ 皿(II)(VI)(VII) 小片 青磁―(龍泉)碗(I)(II)(IV・V)、小碗、平底皿 (同安)碗(I)(II) 不明、皿(II)、不明片	63－211～257 64－201 65－259～271 274～280 66－281～288 67－289～304 68－305～311	
〃		IIa、b	SD12	SD26	土師質―土鍋　須恵質―捏鉢　瓦質―捏鉢・瓦 輸入陶器―甕、擂鉢、壺　近世染付、弥生土器、石鍋 白磁―碗(IV)(VII)口ハゲ 青磁―碗(同安II) 碗(龍　泉)I、II、平底皿 土師器―坏、皿、小片　瓦器―碗	69－312	
11 付図3		IIa	SD13	SD27	常滑　石鍋　弥生土器　炭 青磁―(同安)碗I・II、平底皿 (龍泉)碗I・II、皿I 土師器―坏、皿　土師質―土鍋　瓦質―甕　近世染付	69－313	SD04に切られている。
〃		〃	SD14	SD28	土師器―坏　白磁碗―VI　土師質土鍋　輸入陶器 粘土塊		SB99に切られる
〃		〃	SD15	SD29	輸入陶器　近世染付　弥生土器　粘土塊　炭 青磁―(同安)碗II (龍泉)碗I・II、平底皿 土師器―坏　土師質―土鍋　瓦器―碗　須恵質―捏鉢		SD11・16と同一のもの。
〃		〃	SD16	SD30	輸入陶器―壺　近世染付　粘土塊　合子　弥生土器 白磁―碗VI、VII、IX、小片 青磁―(龍泉)碗I、II (同安)碗I、II、皿I　木製品 土師器―坏、皿　瓦器―碗　石錘片　炭　瓦	69－314	SD11・15と同一時期、同一のもの
〃		〃	SD17	SD31	遺物なし		
〃		〃	SD18	SD32	白磁―碗IV　須恵質捏鉢 青磁―(同安)碗II　瓦質―こね鉢、甕 (龍泉)碗I・II　陶器―鉢壺 土師器―坏、皿　弥生土器、瓦 土師質土鍋、石鍋、粘土塊、炭	62－207	SD01・02から切られ、SD11・12を切っている。
〃		〃	SD20	SD34	陶器片　青磁―(龍泉)碗 須恵器片　(同安)皿 石鍋　合子　土師器―碗、坏		SD34・68と同一のものか。
〃		IIb	SD22	SD36	石鍋　合子蓋、身　刀子（?）　土錘　粘土塊 炭　常滑甕　弥生土器　瓦器碗 土師質土鍋　須恵質―捏鉢、甕　瓦質―甕、捏鉢 白磁―碗IV・VI・VII・IX 皿III・VI・VII、口ハゲ 青磁―(龍泉)碗I・II、平底皿　褐釉水注片 (同安)碗II、皿I・II　水注、盤、壺 土師器―碗、坏、皿、小片	Fig 65－272～273 69－315～350 70－351～356 358～373 71－374～378	SD23を切る。
〃		〃	SD23	SD37	青磁―(同安)碗II、皿 (龍泉)小片 土師器―坏、小片　甕片　粘土塊　弥生その他		SD22から切られる。
〃		〃	SD24	SD38	遺物なし		SD22から切られる。
〃		〃	SD25	SD39	白磁―碗VI・IX類　須恵質捏鉢　瓦質 青磁―(同安)皿上　甕　輸入陶器 (龍泉)碗　弥生土器　釘 土師器―坏、皿　土師質土鍋　粘土塊　炭	71－379～382	
〃		〃	SD26	SD40	青磁―(同安)碗II 土師器―碗　土師質土鍋		
〃		〃	SD27	SD41	遺物なし		SD31を切る。
〃		〃	SD28	SD42	土師器　土師質土鍋		
〃		〃	SD29	SD43	土師器―皿、坏　陶器―甕　土師質土鍋 青磁―(龍泉)碗		
〃		〃	SD30	SD44	土師器―皿、坏　須恵器捏鉢　粘土塊		SE12から切られる。

Tab.4　第II区溝状遺構所見表（その1）

Fig.No	PL.No	調査区	遺溝No	調査時No	出土遺物	出土遺物 Fig.No	備考
11 付図3		IIb	SD31	SD45	白磁――皿（IV）　土師質土鍋 青磁――(同安)碗II　須恵質―捏鉢、坏 (龍泉)碗I　輸入陶器―鉢、壺 土師器―坏、皿　瓦器―碗　粘土塊、炭		
〃		〃	SD32	SD46	遺物なし		
〃		〃	SD33	SD47	土師器―皿、坏　青磁―(龍泉)碗I	71－383～385	
〃		〃	SD34	SD48	陶器捏鉢　土師器―小片　弥生土器		
〃		〃	SD35	SD49	遺物なし		
〃		〃	SD36	SD50	遺物なし		
〃		〃	SD37	SD51	遺物なし		
〃		IIc	SD38	SD52	土師器―坏、皿、不明小片　土師質土鍋　弥生土器片		
〃		〃	SD39	SD53	青磁―(龍泉)碗　土師器―小片 (同安)碗　弥生土器―甕		柱穴、建物を切っている。畦溝。
〃		〃	SD40	SD54	青磁―(龍泉)碗II　土師器―坏、皿、小片 (同安)碗　陶器――壺　甕		
〃		〃	SD41	SD55	青磁―(同安)碗　土師質土器―小片 土師器―坏、皿、小片　瓦質―甕　粘土塊		
〃		〃	SD42	SD56	陶器―壺　土師器―坏　青磁―(同安)碗		
〃		〃	SD43	SD57	遺物なし		
〃		〃	SD44	SD58	遺物なし		
〃		〃	SD45	SD59	土師器―坏　土師質土鍋		
〃		〃	SD46	SD60	土師器―坏、小片　土師質土鍋片		
〃		〃	SD47	SX120	遺物なし	72－389	
〃		〃	SD48	SD62	遺物なし		
〃		〃	SD49	SD63	青磁―(同安)碗II 土師器―小片　土師質土鍋　粘土塊		
〃		〃	SD50	SD64	土師質土鍋　土師器―小片		
〃		IIa	SD51	SD65			
〃		〃	SD52	SX41	白磁―皿（VII）　土師質土鍋　瓦質―甕 青磁―(龍泉)碗I　弥生土器　鍋 土師器―坏、皿　瓦器―碗	72－386、391、394	
〃		IIb	SD53	SX117	土師器―坏、皿　弥生土器　不明小片	72－390、392	SD54と平行。
〃		〃	SD54	SX118	遺物なし		SB132から切られる。
〃		〃	SD55	SX132	青磁―(同安)碗不明、皿　粘土塊 土師器―坏、不明小片　土錘 瓦器―碗　土師質土鍋　輸入陶器―壺	72－387	浅いたまりか？図なし。
〃		IId	SD56	SD4304	土師器―皿、坏　青磁―(龍泉)碗I 土師質土鍋　瓦器片　陶器片		
〃		〃	SD57	SD4329	青磁―(同安)碗II　土師器―小片		
〃		〃	SD58	SD4330	青磁―(龍泉)碗　瓦器―碗　土師質土鍋 土師器―碗、坏、皿　粘土塊		
〃		〃	SD59	SD4284	黒色土器―碗　瓦器―碗　土師質土鍋　土師小片 弥生その他	72－393	
〃		〃	SD60	SD？ 4345	遺物なし		
〃		IIc	SD68	SD61	遺物なし		SD11・39から切られる。

Tab.5　第II区溝状遺構所見表（その2）

4）井戸（Fig,31～36）

概要　第II区では、井側、石組などが遺存していることから、井戸と明確に判断されたのは、6基である（SE 01・04・08・19・22・29）。また井側に用いられたと思われる桶のタガや、曲物の破片や石組の一部が出土し、井戸と考えられるものは11基である（SE 07・09・11・12・13・16・17・21・27・28・32）。この他、掘り方の形状、土層堆積の在り方などからみて井戸と推定されるものは、19基である（SE 02・03・05・06・10・14・15・18・20・23・24・25・26・30、SX 03・13・23・25・71）。

井側に曲物を用いているのはSE 01・04・08・19・22・29、曲物の可能性があるものはSE 07・09・17・21・27・28である。桶を使ったと推定されるものは、SE 32である。残りのも

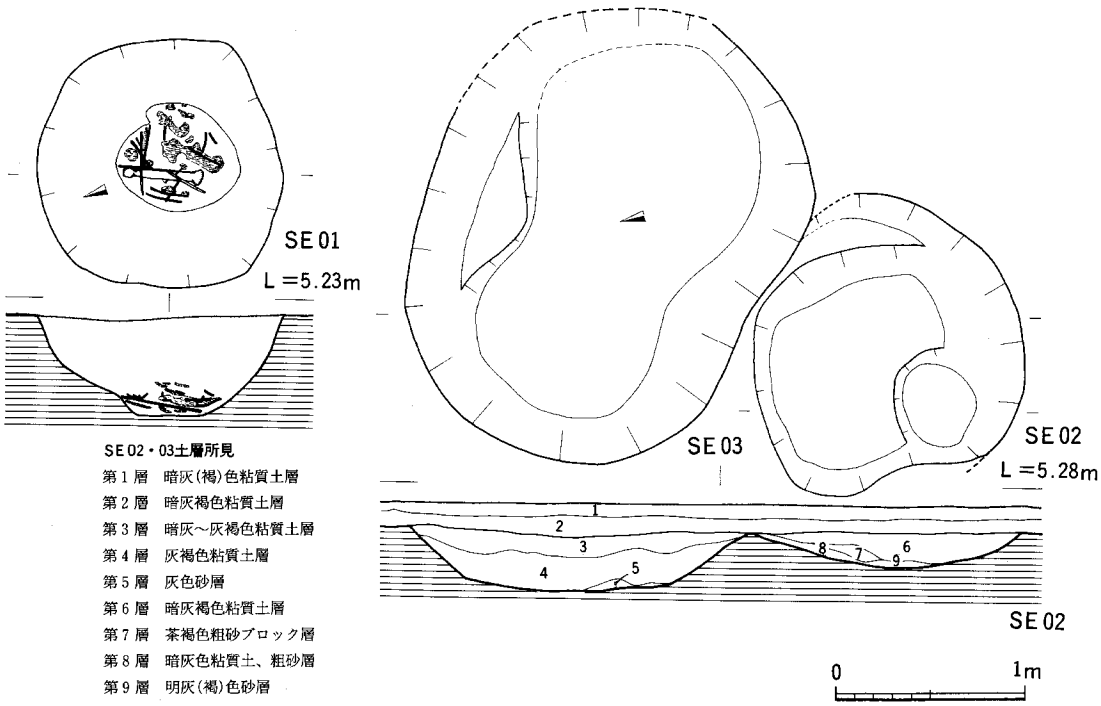
のについては、井側の種類は不明である。

これらの井戸は分布地点が３つに大きく分けられる。またそれらの分布の在り方と異なり、屋敷地内において、他の遺構に隣接して散発的に点在するものがある。

SE01 (Fig,31、ＰＬ,10) 埋土上層は明灰褐色シルト層で、一時的に埋まった感がある。井戸基底部は、直径30～40cm程の浅い窪みとなっており、この部分に井側があったと考えられる。基底面から約５cmほど浮いて、筵と思われるワラ灰が薄く一面にみられ、またその上面に小枝、土師器皿片、木製品がみられた。井戸を埋め戻す際の、なんらかの祭祀行為の証左と思われる。基底面の標高は4.63m。

SE02・03 (Fig,31、ＰＬ,10) ＳＥ02と03との切り合い関係は隣接しているものの不明。埋土はいずれも木炭片を若干含む、灰～暗灰褐色シルトで徐々に埋没した状況である。ＳＥ02の基底面には井側跡と思われる直径30cmほどの浅い掘り込みがある。ＳＥ03は井戸と断定する積極的な証左はないが掘り方の形状から井戸と考えた。基底面の標高は4.95m。ＳＥ03の標高は4.8m。

SE04 (Fig,32、ＰＬ,10) 曲物が２段組の井側。井戸基底面から約10cm浮いた状況で横櫛、土師器皿(糸切り底)、木杭の先端部、竹管、石４点が出土した。井戸を埋め戻すにあたって



Fig,31　第Ⅱ区井戸平面および断面図（ＳＥ01～03）(1/40) その１

何らかの祭祀が行われた可能性がある。曲物については現場で出土した状況で取り上げた。基底面の標高は4.42m。

SE05 (Fig,32、PL,10) 井戸かどうか明確でないが、掘り方の形状から井戸と判断した。石組井であった可能性がある。井側は何を用いたかは不明。基底面の標高は4.354m。

SE06 (Fig,32) SE01の南東側に位置する。暗褐色シルトを埋土とする。井戸かどうか明確ではないが、掘り方の形状からみて、井戸と考えた。井側は曲物の可能性がある。基底面の標高は4.89m。

SE07 (Fig, 32、PL,20) 遺構の切り合いからみた先後関係はSX131→SE17→SE 07である。埋土は石組に用いていたと思われる自然礫を多く含む。規模はSE08とほぼ同じ。井側は遺存していないが、曲物の可能性がある。基底面の標高は4.50m。

SE08 (Fig,22、PL,20・21) 第II区でもっとも残りの良い井戸である。井側は二段組の曲物で、直径は35cm、高さは35～40cmを測る。井側の裏込めには灰色粗砂、礫を用いて曲物の固定を図っている。井側の中には本来石組に用いたと思われる自然礫が、基底面直上から検出面まで埋没していたことから、石組を破壊して埋め戻したと考えられる。基底面の標高は4.52m。

SE09 (Fig,33、PL,21) 埋土は灰青色シルトが主である。8層に細分でき、層の変化が明確で、漸移的でないことから一時的に埋め戻されたものと考えられる。基底面の中央から東南側に井側の痕跡と思われる直径40～45cmの浅い窪みがある。埋土下部および、基底面から土師器皿(ヘラ切り、糸切り)・木片が出土している。井側は不明。基底面の標高は4.73m。

SE10 (Fig, 33、PL,21) 先後関係はSE10→11→12である。かなり削平を受け、本来の形状は不明。規模はSE07・08と同じ程か。基底面の標高は5.03m。埋土は砂礫層。

SE11 (Fig, 33、PL,21) SE11はSE12から切られている。埋土は木炭片を多く含む灰青色シルトが主となる。カケヤ状の木材片や小枝が井戸基底面から出土している。井側に何を用いたかは不明。基底面の標高は4.85m。

SE12 (Fig, 33、PL,22) SE12はSE10・11を切っている。平面形はやや不定形であるが、曲物の破片が基底面にみられたため、井戸と考えた。SE13と同様に埋土上層に焼土・木炭を多く含む層がみられる。焼土(27層)がSE12を覆っている。基底面の標高は4.89m。

SE13 (Fig, 33、PL,22) 砂礫、焼土、木炭片を多量に含む粘質土を埋土とする。桶の底板と思われる板材が基底部にみられた。石組に用いられたと思われる自然礫が埋土中位に多量にみられた。桶を井側とする石組井だった可能性がある。基底面の標高は4.83m。

SE14 (Fig,34) SE11の北側に隣接する。上部をかなり削平されており遺存状況はあまり良くない。木炭を多く含む暗灰褐色土を埋土とする。曲物片が出土している。基底面の標高

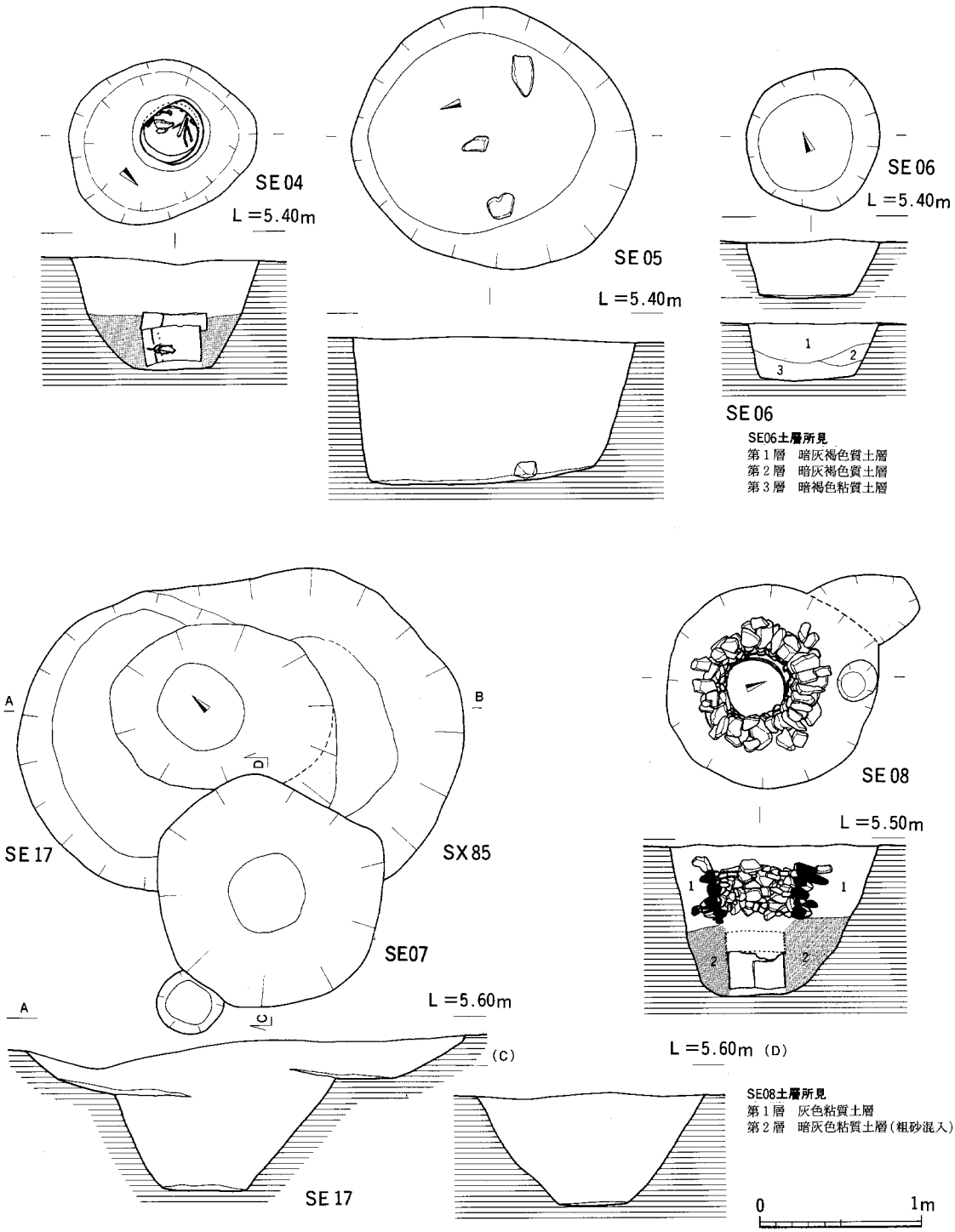
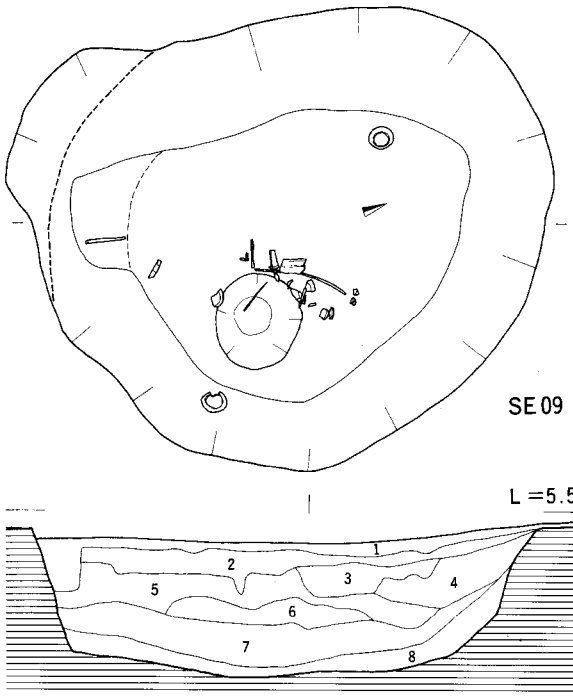
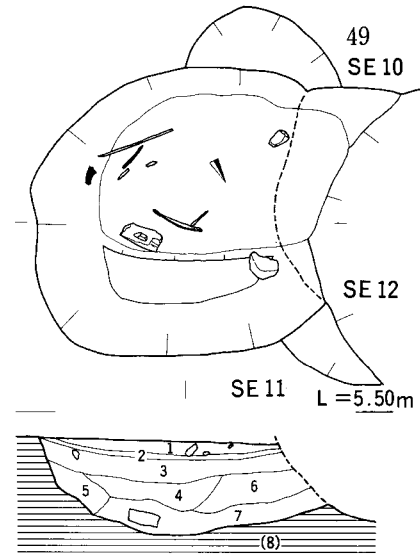


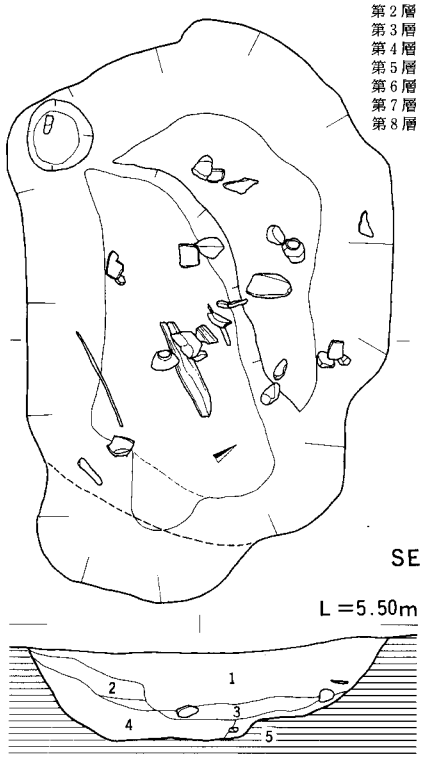
Fig.32　第Ⅱ区井戸平面および断面図（SE 04～08・17）(1/40) その2



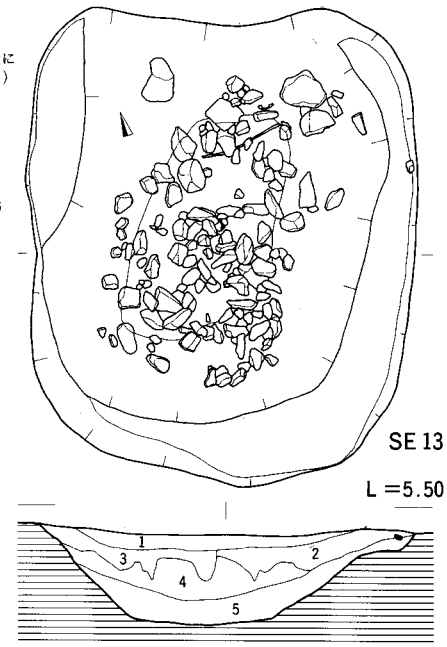
SE 09土層所見
第1層　赤い焼土と炭を多量に含む（整地層に似る）
第2層　明黄灰色粘質土層
第3層　酸化鉄を少量含む
第4層　砂質の灰黄色土層
第5層　灰青色粘質土層
第6層　灰青色粘質土層
第7層　暗灰色強粘質土層
第8層　灰青色礫混り粗砂層



SE 11土層所見
第1層　焼土塊と炭の層
第2層　炭の層
第3層　灰青色粘質土層
第4層　炭を含む灰青色粘質土層
第5層　暗灰青色粘土層
第6層　灰青色砂質粘質土層
第7層　灰青色砂質粘質土層
第8層　礫層



SE 12土層所見
第1層　焼土層
第2層　明灰青色土層
第3層　暗灰青色強粘質土層
第4層　暗灰青色粘質土層
第5層　粗砂層



SE 13土層所見
第1層　赤褐色焼土層
第2層　黄茶白色粘土層
第3層　粘質土
第4層　赤褐色
第5層　灰青色砂質粘質土層
第6層　砂礫層

0　1m

Fig,33　第Ⅱ区井戸平面および断面図（SE 09～13）（1/40）その3

は5.08m。

SE15 (Fig,34) SE02の南西部に位置する。井戸掘り方は二段掘りだった可能性がある。井側は何を用いたかは不明。井戸基底面から約10cmほど浮いた状況で土師器（坏・碗）の破片、木枝片が出土。基底面の標高は4.54m。

SE16 (Fig,34) 掘り方の規模は比較的大きい。埋土は青灰色シルトが主である。一時的に埋まった可能性がある。掘り方中央に井側部分と思われる直径70～80cm、深さ10cmの窪みがある。井側は何を使ったかは不明。基底面の標高は4.25m。

SE17 (Fig, 32、PL,20) SE07からその南半分を切られている。SD34を切る。掘り方は二段掘り。規模はSE07よりやや大きい。埋土は自然礫を多量に含む灰色砂質土。礫の堆積の仕方から、破壊されて埋め戻された可能性がある。基底面の標高4.53m。

SE18 (Fig, 34、PL,30) 第IIc区の南東部に位置。屋敷地全体の位置関係では、もっとも東に分布するグループに属する。掘り方は二段掘り。楕円形の大きな掘り方の中に、大小2つの井側部分と思われる掘り方がある。大きい掘り方は直径100cm前後、深さ34cmで、SE01と同様にワラ灰が薄い層でみられる。木杭が出土。井側は不明。基底面の標高は4.70m。

SE19 (Fig, 34、PL,30) 切り合い関係はSX80→SE19。埋土は暗灰～暗灰褐色粘質土で、木炭を多く含む。一時的に埋没したもの。井戸基底面からほぼ直立させて、直径3cm程の1本の竹管が立ててあるのが確認できた。また笹竹・曲げ物・焼けた自然礫などが投棄された状況で埋土中位に出土。これらは、井戸の埋め戻しに伴う祭祀行為の痕跡と思われる。基底面の標高は4.47m。

SE20 (Fig,34) 埋土は暗灰褐色粘質土。木炭を若干含む。一時的に埋もれたと思われる。比較的掘り方は大きい。基底面には中央部にわずかな窪みがみられ井側の存在が考えられる。基底面の標高4.82m。

SE21 (Fig,35、PL,40) 27層下面で検出。埋土は10層に細分できる。4～7層にワラ灰が薄く堆積している。一時的に埋め戻されたもの。井側は曲物の可能性がある。7～10層に遺物が多く見られる。SX4289（水田土壌）を切っている。基底面の標高は4.85m。

SE22 (Fig,35) 検出面は木炭層(27層)下に薄く(4cm厚)堆積している暗褐色粘質土下面。掘り方上面はかなり崩落。原形を止めていない。基底部には曲物が二段に組んであった痕跡が見られた。井側の直径は28～35cmほどで、高さは20cm以上はあったと思われる。図の12層から上層は一時的に埋め戻されたと思われる。基底面の標高は4.71m。遺物は二次堆積。

SE23 (Fig,50) SE22と同様検出面は木炭層(27層)下に薄く(4cm厚)堆積している暗褐色粘質土下面。平面形は円形。基盤は粗砂層上。切り合い関係はSX97→SX88→SX87→SE23。埋土は8層に細分される。一時的に埋没したものか。基底面の標高は4.98m。

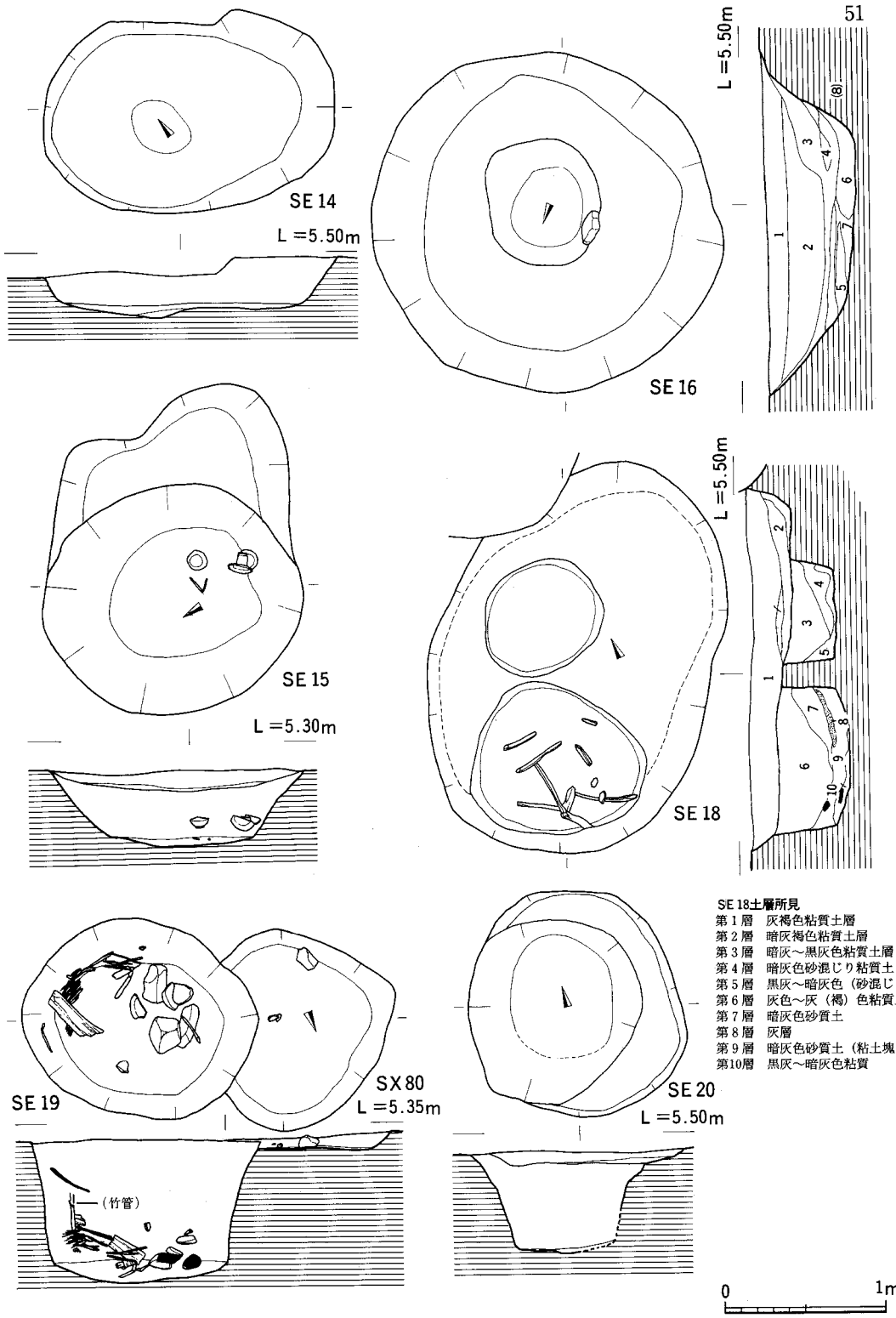
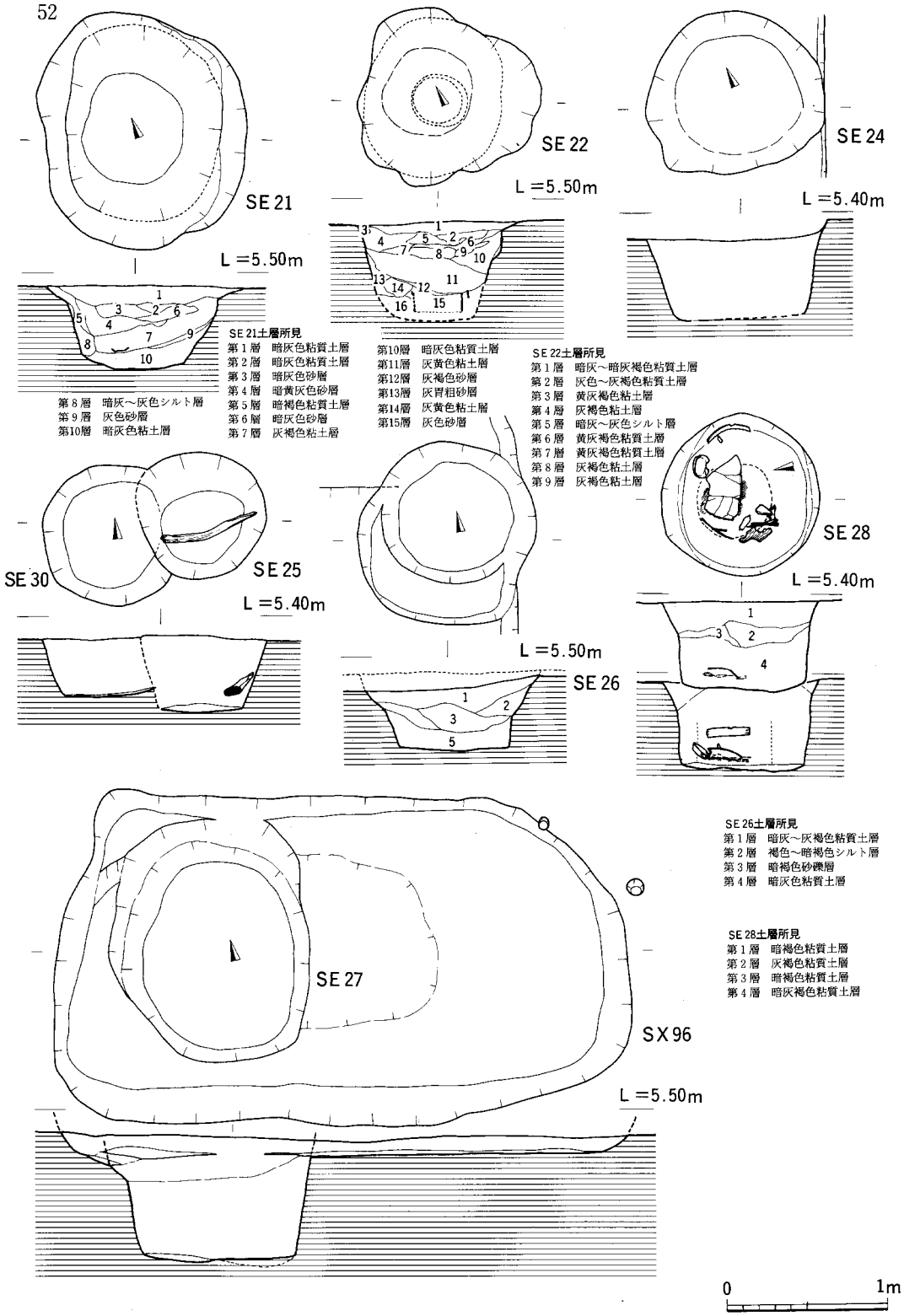


Fig.34　第Ⅱ区井戸（SE 14～16・18～20）、竪穴遺構（SX 80）平面および断面図（1/40）その4



Fig,35　第Ⅱ区井戸平面および断面図（SE 21・22・24～28・30）(1/40) その5

SE24 (Fig,35) 平面形は円形。埋土は暗灰色シルトの単純層。一時的に埋没した可能性がある。井側は不明。現湧水面は4.87m。基底面の標高は4.98m。

SE25 (Fig,35) 切り合い関係はSE30→SE25。井戸と考えられる中では最小のものである。平面形は円形。埋土はSE23・24と同じ暗灰色層で一時的に埋没した可能性がある。井側は不明。杭が掘り方内に1本出土。基底面の標高は4,86m。

SE26 (Fig, 35) SE26はⅡb～d区に広がっている水田よりも後の時期のものか検出時の上面は砂礫を多く含む暗灰褐色土で、水田と同じレベルで下げているうちに輪郭がはっきりとしてきた。平面形は円形。現湧水面は5.05m。基底面の標高は4.90m。

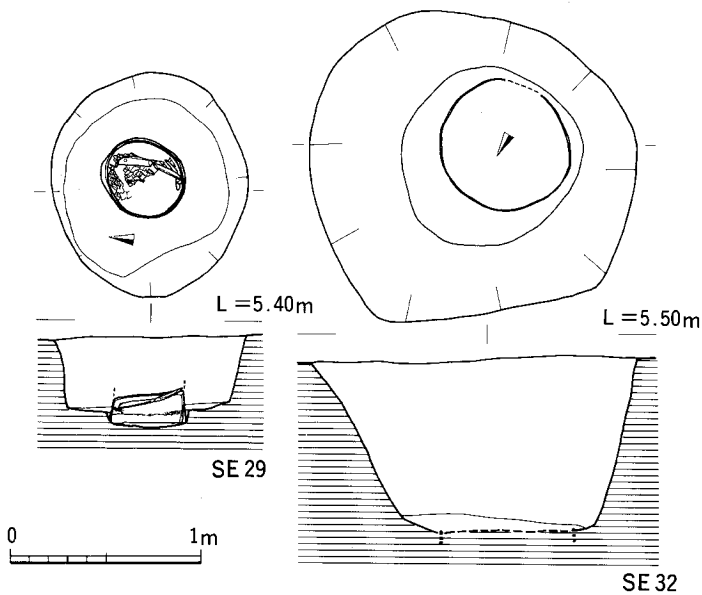
SE27 (Fig, 35) SE27はSX96 (SX4349) との切り合い関係は不明。同一の遺構の可能性がある。床面まで掘り下げた段階で平面形を確認できた。埋土は軟質の青灰色粘質土。基底面の標高は4.57m。

SE28 (Fig,35、PL,40) 埋土は4層に細分されるが、ほとんど同質の灰褐色土。床面から5cmほど浮いた面に土師皿・甕・ワラ灰・木片などが層をなしてまとまって出土した。埋め戻しに伴う祭祀の跡か。井側は曲げ物。基底面の標高は4.75m。

SE29 (Fig, 36、PL,40) 平面形は円形。埋土は6層に分かれる。井側内にある程度土が堆積し、使用されなくなった段階で一時的に埋没している。井側の直径は38～40cmで、二段組である。井側の底には竹製の編物が敷かれ、1本の杭が17～20cmほど浮いて出土。現湧水面4、96m。基底面の標高は4.78m。

SE30 (Fig, 35) SE30はSE25に切られている。平面形・規模ともにSE25とよく似る。埋土は灰褐色粘質土で砂がやや目立つ。一時的に埋没したもの。基底面の標高は4.91m。

SE32 (Fig,35) 掘り方は比較的大きい。砂礫層を掘り窪めている。桶組井の可能性がある。井戸基底面に桶のタガが残る。基底面の標高は4.34m。埋土は砂礫が多く混入する灰色シルト層。一時的に埋没した状況を示している。



Fig,36 第Ⅱ区井戸平面および断面図 (SE29・32) (1/40) その6

Fig.No	PLNo	調査区	遺構No	調査時No	形状・寸法(長×幅×深さ)	出土遺物	出土遺物Fig.No	備考
31	10	IIa	SE01	SX81	1.32×1.30×0.28 (No 1) 1.23×1.13×0.10 (No 2)	土師－坏　小片	73-395	645
31	10	〃	SE02	SX85	1.44×1.59×0.23	青磁－碗（同安II）、須恵器－捏鉢、土師質土鍋 土師器－小片、弥生土器－小片		647
31	10	〃	SE03	SX86	2.34×2.18×0.47	白磁－碗（IV. VI）、青磁－碗（同安Ⅰ）（龍泉Ⅰ）・皿（同安Ⅰ）、輸入陶器－小片・、土師器－坏、瓦器－碗、土師質土鍋、須恵質捏鉢、弥生土器	73-396～398	647
32	10	〃	SE04	SE04	1.17×1.02×0.70	遺物なし	73-401	634
32	10	〃	SE05	SX92	1.76×1.63×0.91	青磁－碗（同安II)(龍泉Ⅰ）、土師器－坏、土師質土鍋、須恵質カメ、輸入陶器－壷・小片、白磁－壷・小片、弥生土器	74-402	638
32		〃	SE06	SX 160↓165	0.88×0.83×0.35	弥生土器片、青磁－碗（同安Ⅰ）		644
32	20	IIb	SE07	SE07	1.41×1.40×9.50	白磁－碗（VI）・平底皿、青磁－皿（同安Ⅰ）・碗（龍Ⅰ. II）、土師器－坏、皿、土師質土鍋、須恵質－甕・坏、輸入陶器－壷・小片、合子身、常滑片、炭、粘土塊	73-399 74-403	652 653
32	20・21	〃	SE08	SE08	1.31×1.27×0.94	土師器－坏・皿・小片、青磁－碗（龍泉）、白磁－小片、弥生土器－小片、粘土塊		654
33	21	〃	SE09	SE09	2.68×2.47×0.83	白磁－碗（IV）、青磁－碗（同安II）（龍泉Ⅰ. II）・皿（同Ⅰ）、土師器－坏・皿・小片、瓦器－碗、弥生土器・石鍋、土師質土器、須恵質捏鉢瓦質－甕・捏鉢、輸入陶器－壷小片、近世染付、粘土塊	73-400 74-404～429 75-430	655
33	21	〃	SE10	SE10	0.87×0.83×0.15	遺物なし		657
33	21	〃	SE11	SE11	1.57×1.52×0.50	土師器－坏・皿、瓦器－碗、青磁－碗（龍泉Ⅰ）土師質土鍋、須恵質－捏鉢、瓦質－甕、輸入陶器－壷、弥生土器	75-431	656
33	22	〃	SE12	SE12	3.09×2.03×0.57	青磁－碗（同安)(龍泉）・皿（同安II）、土師器－碗・坏・皿、瓦器－碗、土師質土鍋、合子、粘土塊、須恵質捏鉢、瓦質－甕、輸入陶器－壷、甕常滑甕片、弥生土器	75-432～450 76-457、467	657
33	22	〃	SE13	SE13	2.53×2.08×0.54	青磁－碗（同安)(龍泉）・皿（同安）、土師器－坏・皿、瓦器－碗、土師質土鍋、須恵質－捏鉢・坏、瓦質－甕、褐釉陶器－甕、陶器－捏鉢・壷、炭、常滑陶器、弥生土器、石鍋	75-456 76-458～465	658
34		〃	SE14	SE14	1.80×1.40×0.28	青磁－碗（龍泉Ⅰ）、土師器－皿・坏又は皿・坏 土師質土鍋、弥生土器	76-466	193
34		IIa	SE15	SK75	1.44×1.59×0.23	青磁－碗（龍泉Ⅰ）、土師器－坏、白磁－皿、弥生土器、近世染付	76-471 77-472～475	635
34		〃	SE16	SX87	2.19×2.12×0.57	遺物なし		648
32	20	IIb	SE17	SX130	2.78×1.95×0.98	土師器－皿・坏、土師質土鍋、瓦器－碗、陶器－碗、陶器－捏鉢、壷、土師質土鍋、青磁－碗（同安II）	76-470 77-476	191
34	30	IIc	SE18	SX138	2.42×1.89×0.59	青磁－碗（龍泉Ⅰ. II)(同安. 不明小片）、土師器－坏・皿、瓦器－小片、須恵質－捏鉢、輸入陶器－壷、弥生土器、木炭片		670
34	30	〃	SE19	SX152	1.47×1.26×0.90	須恵－坏、土師質土鍋、土師器－皿・坏・小片・甕、弥生土器、粘土塊	76-469	679 164 173
34		IId	SE20	4285(SE)	1.42×1.37×0.64	土師器－皿・坏・坏又は皿・小片		684
35		IId	SE21	4286 (SE)	1.50×1.32×0.53	青磁－碗（龍泉Ⅰ. II）、土師器－碗・坏・皿・小片、土師質土鍋、輸入陶器、弥生土器、粘土塊炭	77-477～483	686
35	40	〃	SE22	4288(SE)	1.15×1.13×0.49	瓦器－碗、土師器－坏・小片		688
50		〃	SE23	4290(SE)	1.09×1.09×0.44	土師器－坏、青磁－碗（龍泉）		689
35		〃	SE24	4313(SE)	1.12×1.03×0.63	遺物なし		691
35		〃	SE25	4341(SE)	0.82×0.79×0.48	土師器－坏・皿、土師質土鍋		693
35		〃	SE26	4344(SE)	1.15×1.12×0.50	土師器		694
35		〃	SE27	4346(SE)	1.17×1.39×0.54	遺物なし		695
35		〃	SE28	4347(SE)	1.03×0.99×0.52	土師器－坏	77-484	696
36		〃	SE29	4348(SE)	1.20×1.04×0.49	土師器－坏・壷、瓦器－碗、土師質土鍋、合子		697
35		〃	SE30	4414(SE)	0.89×0.80×0.38	土師器－坏		693
99		III	SE31	SX47	2.34×1.87×1.16	土師器－坏・皿・小片、弥生土器、近世陶器、その他の白磁（SK37と接合）	108-701, 702	271 715 717
36		IId	SE32	SX59	1.74×1.64×0.93	青磁－碗（龍泉Ⅰ. II）、弥生土器、土師器－坏皿、土師質土鍋、輸入陶器、弥生土器、石鍋、粘土塊、炭	77-485	637

（備考欄の数字は原図番号）

Tab. 6　第Ⅱ・Ⅲ区井戸所見一覧表

5）**土壙**（Fig,37•38、Tab,7）

第II区では、竪穴遺構が109基確認された。その内、出土遺物や形態的な特徴から、墓址または地鎮などに関する掘り方と思われるものについては土壙（SK）として類別した。109基に関する分類については、6)竪穴遺跡(58頁)を参照されたい。ここでは土壙とした9基について説明する。第I区では副葬または供献と思われる遺物の出土があったが第II区でみられなかった。これらはいずれも鎌倉時代の所産である。なお法量や遺物の出土状況についてはTab,7を参照のこと。

SK01　屋敷地の南西隅で検出された。平面形は端正な長方形で、明確な掘り方をもつ。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面は平坦で北東隅近くに扁平な自然礫が見られた。出土遺物は土師器破片などが二次混入で出土。埋土は暗褐色粘質土。墓址の可能性がある。

SK02　同じく屋敷地の南西部に位置する。平面形は北東部が少し張り出した長方形である。掘り方は明確で、壁の立ち上がりは垂直に近い。床面は平坦である。北東部は柱穴によって切られている。遺物は二次混入によるもので土師器破片が主である。埋土は暗灰褐色土。

SK03　屋敷地の南西部に形態的によく類似した竪穴が比較的集中している。SK01～03はその分布に含まれる。平面形は長めの不整な長方形。SP743・735から切られる。釘の破片が出土している。断面形は台形である。床面は平坦。

SK04　屋敷地の北西部で検出。掘立柱建物SB80の西側側柱の柱筋中央に位置している。遺存状況は良くない。平面形は隅丸の不整な長方形である。埋土は暗褐色粘質土。SB80から切られている。

SK05　SK04の北西に隣接する。掘立柱建物SB81の北東隅部に位置している。平面形は不整な隅丸の矩形。掘り方は比較的明瞭。埋土は木炭片を多く含む暗褐色粘質土。遺物は二次的な混入による。床面は平坦。

SK06　屋敷地の東端に位置する。この周辺は竪穴遺構を始め、遺構が集中している地点である。平面形はやや大きな隅丸長方形である。床面はやや凹凸があるがほぼ平坦である。遺物は土師器小片が二次堆積で出土。埋土は暗灰褐色粘質土。

SK07　SK06よりやや小さい。掘立柱建物SB52の北西隅部に位置している。端正な長方形である。SB53を切る。埋土は3層に分かれる。第2層は木炭層である。床面は平坦である。

SK08　掘立柱建物SB55・132の南東部にかかっており、SB132を切っている。平面形はやや歪んだ長方形。断面形は逆台形。床面は平坦。砂礫がやや目立った。埋土は暗灰褐色。

SK09　屋敷地の南東部に位置する。竪穴遺構SX93の南側に隣接している。平面形は南東部がかなり張りだした矩形である。残りは悪く、深さは約8cmほどしか残っていない。埋土は暗灰褐色粘質土で、木炭片を多く含んでいる。遺物は二次的混入である。

Fig.No	PL.No	調 査 区	遺構No	調査時No	形状・寸法(長×幅×深さ)	出 土 遺 物	出土遺物Fig.No	備考
37		II a	SK01	SX102	1.82×0.36×0.10 隅丸長方形	青磁－碗（同安II）、白磁片、土師器－坏、皿 土師質土鍋		248
37		〃	SK02	SX108	1.46×1.17×0.17 不整な方形	白磁－碗（IX）、瓦器碗、青磁－碗（同安）、土師器－坏・皿、土師質土鍋、瓦器碗、陶器、粘土塊	78-486、488	236
38		〃	SK03	SX111	1.46×1.17×0.17 不整な長方形	遺物なし		27
38		〃	SK04	SX53	1.46×1.17×0.17	遺物なし		20
38		〃	SK05	SX54	1.46×1.17×0.17	遺物なし		222
38	31	II c	SK06	SX155	1.46×1.17×0.17	青磁－碗（龍泉I，II）、土師器－皿・坏、土師質土器、弥生土器片	78-487	681
38	31	〃	SK07	SX156	1.46×1.17×0.17 隅丸長方形	土師器－坏・皿、坏又は皿、瓦器－小片、土師質土鍋、弥生土器、粘土塊		675
38	31	〃	SK08	SX160	1.46×1.17×0.17 台 形	青磁－碗（同安I）、弥生土器		182
38		II d	SK09	4331(SE)	1.46×1.17×0.17 不整矩形	瓦器－椀		186

（備考欄の数値は原図番号）

Tab. 7　第II区土壙所見一覧表

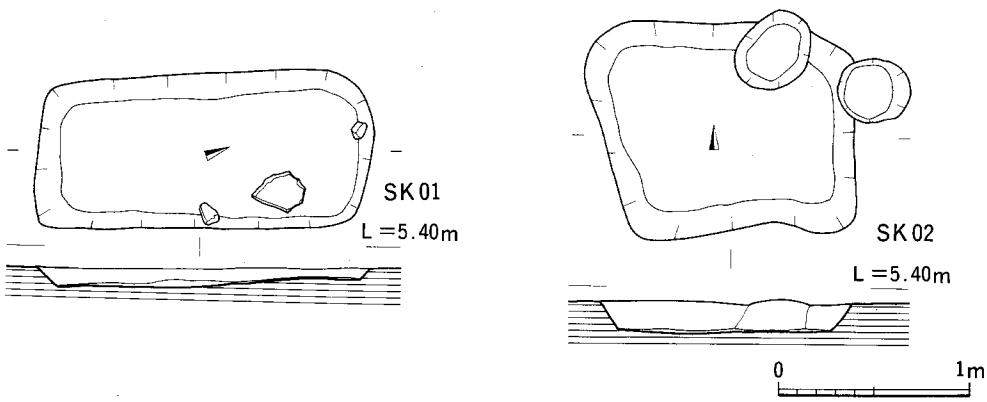
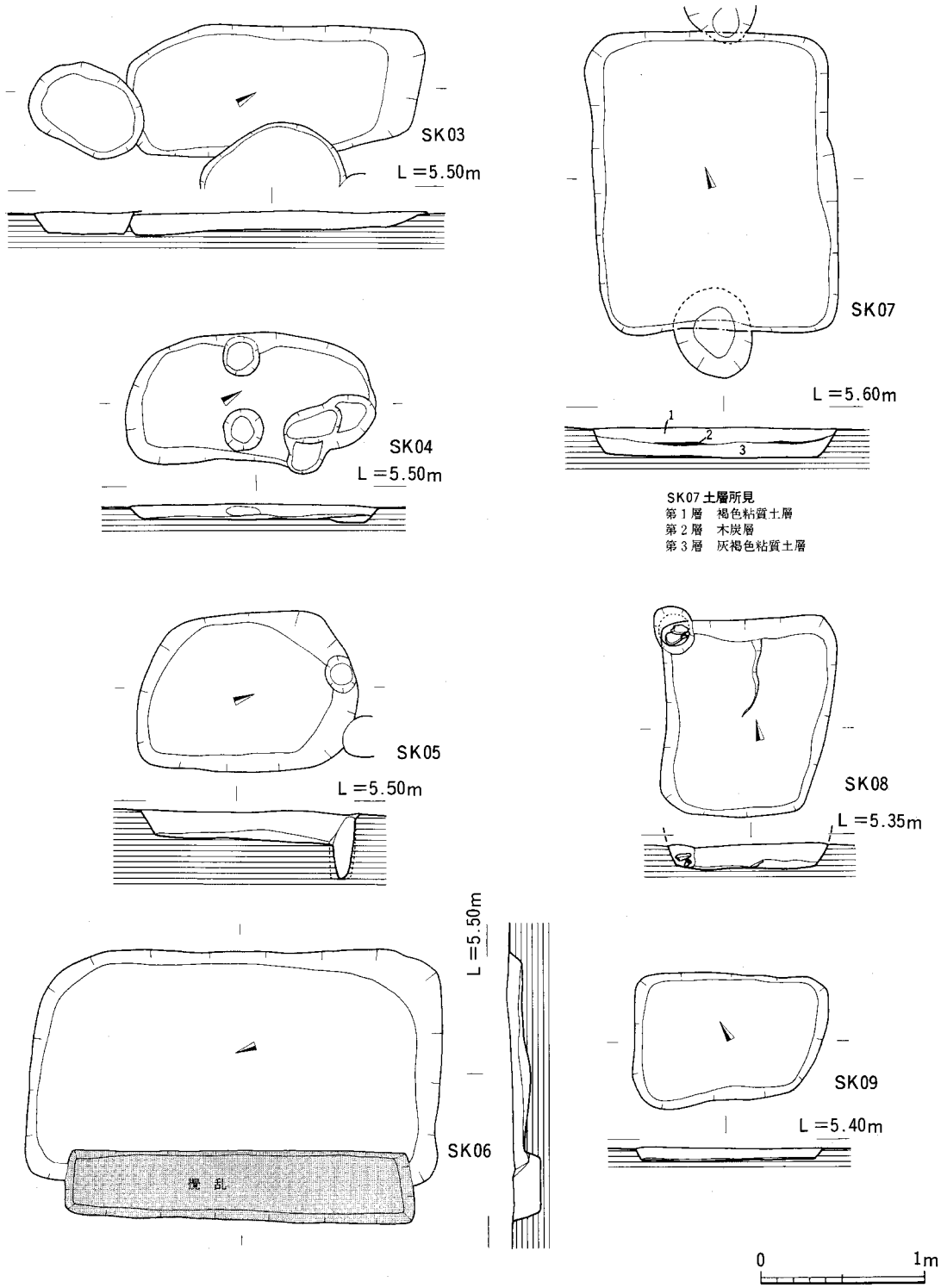


Fig. 37　第II区土壙平面および断面図（SK01・02）（1/40）その1



Fig,38　第Ⅱ区土壙平面および断面図（SK 03～09）（1/40）その２

6) 竪穴遺構（SX） (Fig, 37～50、PL, 11～13、23～25、31～38、46・47、Tab, 8～10、付図1・3)

概要 第II区からは大小様々の竪穴遺構が140基検出された。そのうち、すでに述べた井戸31基、土壙9基以外の100基については、その性格・機能が明確でないものである。これらは形態、規模において多様であり、平面形は方形、長方形、円形、楕円形、あるいは不定形で、掘り方の断面形は浅皿状、船底状、逆台形状などとなる。また規模はおおよそ長さが1m前後から約5mほど、幅が0.5mほどから3m前後ほどを測る。

これらの竪穴遺構の分布は先に述べた建物群を囲う方形区画の溝の内にあるものと、外に分布するものとがある。区画溝の内側では、どちらかというと建物群の周辺に、溝に沿って分布する傾向がある。分布上の偏りは特に際立ってはいないが、区画内の南西部と東北部にまとまっている。

形態的な種類の違いによって若干の分布上の異なりがある。建物に隣接して、建物の一部、もしくは建物と何らかの関係を持っていると考えられるもの（SX01・53・53など）や、また畦畔に沿っている長大な竪穴遺構もある。これらの分布の形成過程、竪穴遺構間、および他の遺構との関連については項を改めて述べる。

ここでは100基の竪穴の形態的な特徴や遺物の出土状況等から第I区の報告時に行なった分類基準に沿って以下のように分類を行い、性格づけにあたっての目安とし、遺構所見については種類ごとに概括的に述べてゆく。なお個別の遺構所見、遺物の出土状況、他の遺構との切り合い関係などの詳細についてはTab, 8～10を参照されたい。

1類 (Fig,47・50)

SX 64・100の2例がある。

平面形は長楕円形で、断面形は逆台形や浅皿状のもの。長さは1.5～2m前後で幅は狭い。第I区と比べて検出例は少ない。第I区では遺物が多量に出土するものと、少ないものとがあったが、第II区ではいずれも遺物の出土は少なく、出土状況は二次的な流れ込みによるものである。溝状遺構が部分的に残存したものとも考えられる。特にSX100は、SD41もしくはSD49の南側延長部の可能性がある。

2類 (Fig,41・42・43・45・47・49・50)

SX 15・17・19・22・24・31・32・34・45・46・47・62・63・89・90の15例がある。

平面形は隅丸長方形、もしくは不整楕円形で、掘り方の規模は小さく、法量は長さ0.7～1.0m、幅0.5mほどである。柱穴よりも一回り大きい掘り方である。木炭片・焼石・焼土を多く含むもの（SX19・24・62)、竪穴内壁が火を受け赤く変色し、固くしまっているもの（SX40)などが特徴的なものとしてあげられる。他はほとんどが焼土・木炭片をわずかに含む暗褐色を

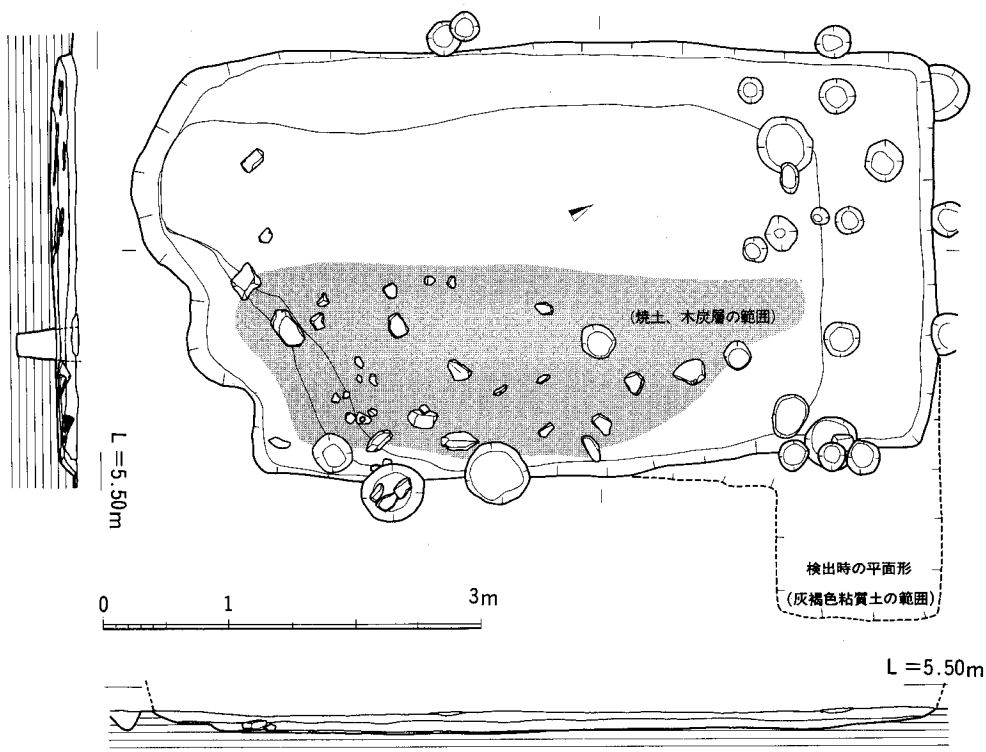
埋土とするもので、遺物も二次的な流れ込みによる堆積のものが多い。第Ⅰ区では、焼土・木炭片を多量に含むもの、鉄製刀子を納めているもの、土師器の坏ないし皿の完形品や青磁碗が埋置されるものなどの例がみられたが、第Ⅱ区では、意図的な遺物の埋置が窺われる検出例はない。

この2類のうち溝状遺構の区画外のものは、SX15・17・19・22・31の5例で、その他は区画内に分布している。区画外のもののうち、SX31以外は、井戸等の他の遺構とともに西隣にまとまっている。区画内のものは散発的であり、分布的なまとまりはない。SX45～47・62・63などは掘立柱建物の側柱の柱筋に位置しており、建物に伴っている可能性がある。ただし構造物として建物の付属施設のような大きさのものでないために、その性格は不明である。建物の建設や解体に伴う地鎮などの祭祀行為の証左とも思われる。また、図示していないが、柱穴と見なした中で、同じ規模のものがあり、数的に多かったことが考えられる。

3類　(Fig,37・38・44・45・50)

SK　01～09の9例と、SX37・38・41・50・(82)・94の6例がある。((　)内の番号の竪穴は図示していない。以下同じ)

平面形は、長辺がやや短な寸づまりの長方形、もしくはやや長めの長方形である。いずれも



Fig,39　第Ⅱ区竪穴遺構平面および断面図（SX01）(1/60) その1

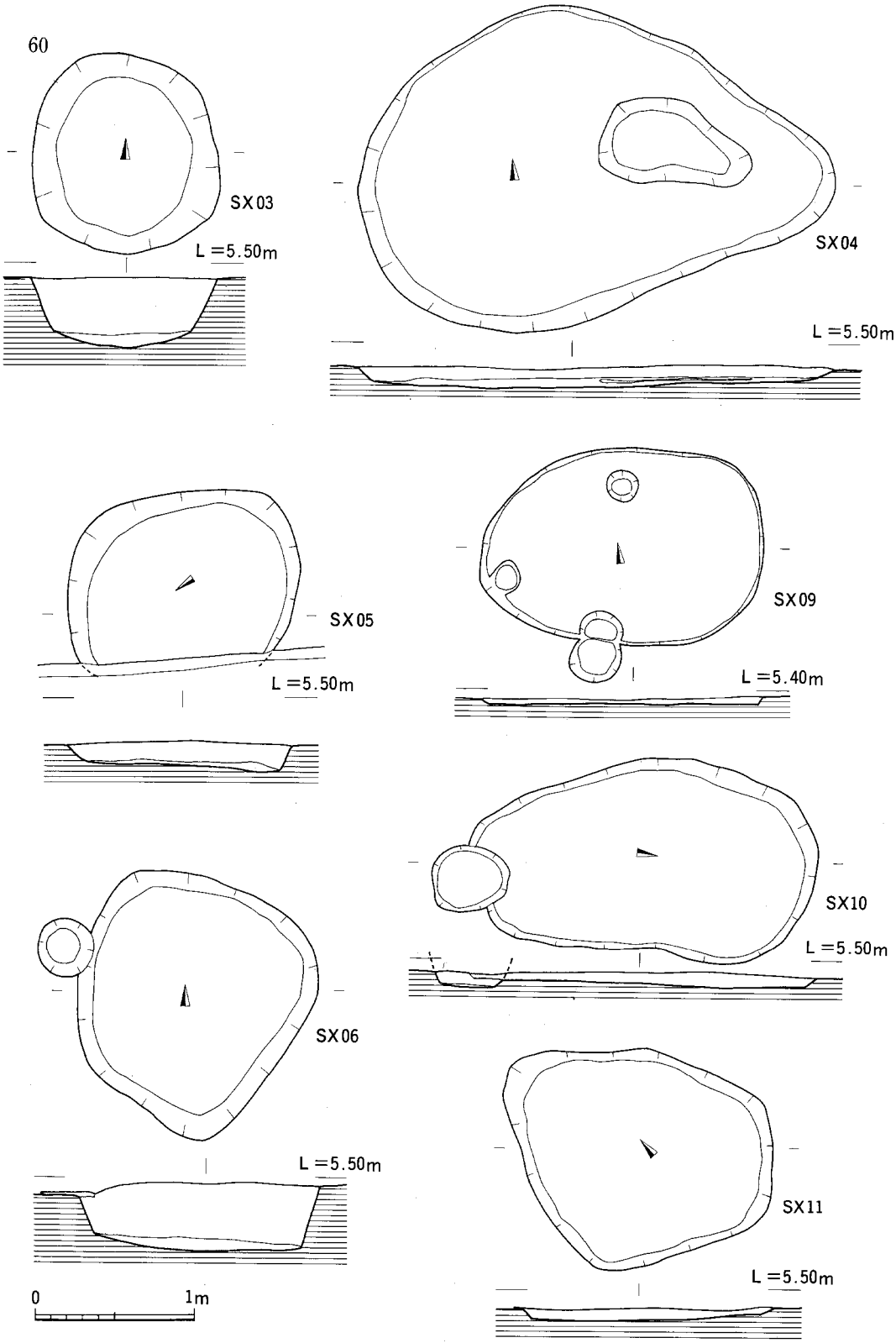


Fig.40　第Ⅱ区竪穴遺構平面および断面図（SX03～06・09～11）(1/40) その2

明確なきちっとした掘り方を持ち、壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。長さが1.2～1.7m前後、幅が0.7～1.0mを測る一群と、長さが1.8～2.3m前後、幅が1.2～1.5mほどのやや大きなものとがある。

第Ⅰ区では、土師器皿・坏や青磁碗、青銅製鏡などを埋置しているものはほとんどがこの種類のものである。すなわち木棺墓または土壙墓などの墓址、あるいは地鎮などの祭祀用竪穴と推定されるものである。しかし第Ⅱ区では、副葬品もしくは供献と考えられるような遺物の出土例がないために、土壙墓・木棺墓などの墓址かどうか積極的に断定できない面がある。また、釘が出土したことにより、木棺墓と予想された中には、平面形がやや不整な長方形のものもあり（SK53など)、竪穴の形態のみでは、当然ながら性格を判断できない面がある。しかし次に述べる4類などとは、総じて掘り方、遺物の出土状況などが異なっていることが指摘でき、この種の竪穴遺構のもつ特性と考えられる。

区画内のものは、SX37・38・82・94で、先に述べた土壙も伴わせてその分布をみると、区画内の南西部に多く集まっており、密度が高いが、掘立柱建物と重複しながら散発的に、区画内全体にみられる。埋土は木炭片、焼土を含む暗褐色粘質土のものが多い。

4類　(Fig,41～43・45・47・49・50)

SX　02・03・05・12・13・14・23・25・27・29・30・33・35・36・39・40・(42)・40・44・48・49・51・65・66・67・68・69・71・76・78・79・80・81・84・86・99の35例がある。

これらは平面形が不整な円形または楕円形になるものである。

また同じく平面形が不整な円形または楕円形で、やや大きなものは、以下の11例ある。

SX　06・09・10・11・26・75・85・87・88・97・98。

これらはいずれも、生活残滓物の廃棄用の穴として掘られたものと考えられるもので、埋土中には炭化した木片、焼けた礫石、焼土等が投棄された状態で出土する例が多い。ただしそれらの出土量は多量ではないが、土器類は土師器の皿、坏の破片が主である。陶磁器は概して少なく、出土した場合でも、二次的な流れ込みによる出土例がほとんどである。また礫のみが多量に出土しているものもある。

なお4類とした中で、掘り方の形態から考え、井戸と考えられるものが数例ある（SX03・13・23・25・71)。井戸の項で述べたように、これらは、井戸と確定できるものではないが、平面および断面形態や、土層断面などの共通性から井戸と推定できるものである。いずれも埋土は一時的に埋め戻されたものと考えられる。

分布をみると、区画内の北東部～東部、南西～西部と、区画内の西隣に比較的まとまっている。建物群との重複はあまりなく、むしろ意識的に距離を保ち分布している点は、遺物の出土

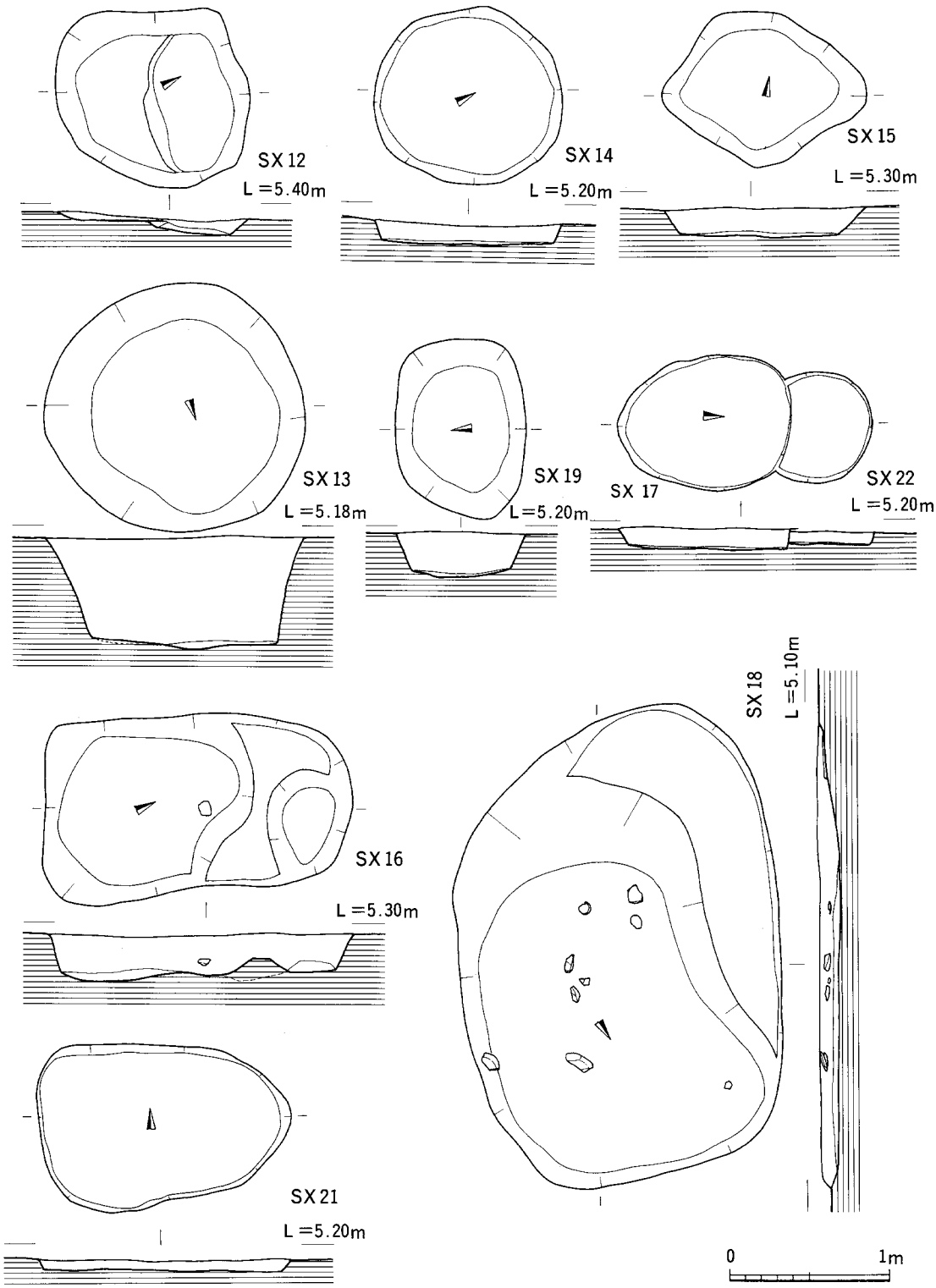


Fig.41　第Ⅱ区竪穴遺構平面および断面図（SX 12～19・21・22）(1/40) その3

状況もあいまって、この種の竪穴遺構を生活残滓物の廃棄用竪穴と推定する根拠の１つである。また、こういった在り方は３類と異なっている点である。

５類　(Fig,41～43・45・47・49・50)

ＳＸ　(08)・16・21・43・55・(57)・58・59・61の９例がある。

平面形は不整な方形や長方形が主で、やや不整な楕円形のものもある。規模はやや大きく長さが２～３ｍ、幅は1.7～2.5mを測る。比較的しっかりした掘り方を持ち、床面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は量的にやや多いものと無遺物のものとがある。出土遺物はいずれも二次的な堆積のものである。

第Ｉ区では、遺物の出土の在り方で、拳大から人頭大ほどの礫石を床面に敷きつめたものや木炭が層をなしているものがあったが、第II区では見られない。埋土で特徴的な遺物の出土をみたのは、焼土・木炭層がブロック状に見られたＳＸ43と、ＳＸ58ぐらいである。

第II区の場合は、分布的なまとまりはなく、形態的にもやや画一性がない。第Ｉ区においてはこの種類のものは、第Ｉｂ区の屋敷地の南側に位置するやや高くなった地点や、調査区の東側などに、比較的整然とした配列で、まとまっていることが確認された。形態的には似るが、遺構の性格は異なっているかもしれない。

６類　(Fig,40～42・45・47・49・50)

ＳＸ　04・07・18・20・28・54・56・70・72・73・74・77・83・93・96の16例がある。

平面形は不定形で、比較的大きな竪穴である。断面形は浅皿状で床面は平坦なものと、凹凸が顕著なものとがある。遺物は投棄もしくは二次的な混入の状況で出土する。

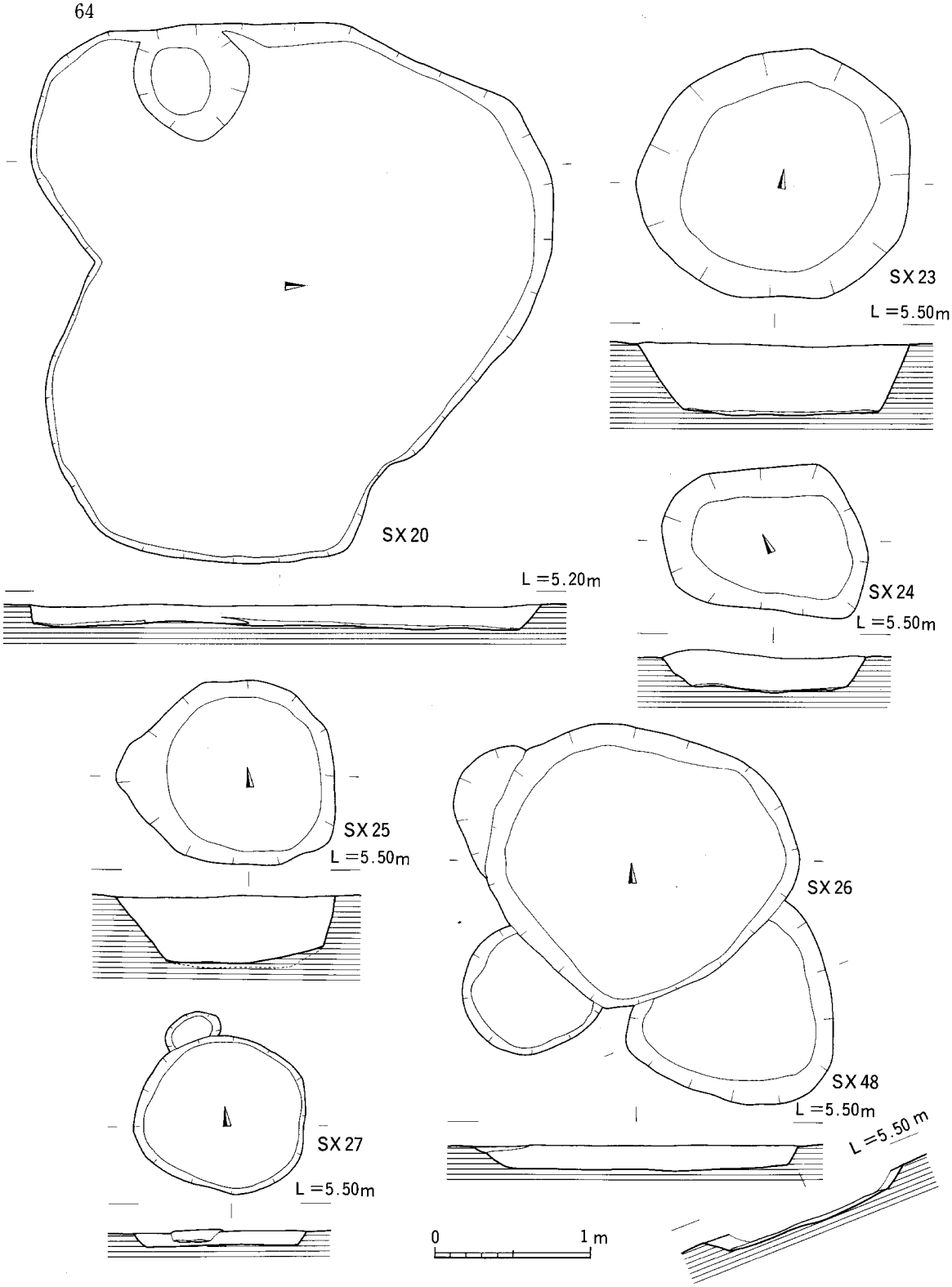
この種のものは、必ずしも人為的に掘りこまれた遺構と断定できない要素がある。凹凸に富む微地形を水平的に掘り下げていった場合に、平面形が不定形の掘り方様になる場合がありうるからである。特にＳＸ04・20などは、壁の立ち上がりが非常に弱く、形状も一定でない。第Ｉ区でもこれに類するものがあったが、傾向としては、沖積地における凹凸面の微堆積土の可能性があるものがほとんどである。

しかしＳＸ72の場合は壁の立ち上がりも比較的明瞭で、遺物もまとまって出土するという傾向があり、人為的な遺構の可能性が高いようである。また、ＳＸ28は、遺構の検出確認の当初は平面形が矩形となっており、削平等によって上部が削られ、本来の形状をほとんど留めていないものもあることが考えられる。

７類　(Fig,42・46・45・47・49・50)

ＳＸ　01・52・53・(60) の４例がある。

平面形は隅丸の長方形で、長さは４～５ｍ、幅は2.5～４ｍの長大な竪穴である。床面は平坦で、断面形は逆台形。遺物は比較的多く出土するが、ほとんどが破片で投棄または二次的な混入によるものである。



Fig,42　第Ⅱ区竪穴遺構平面および断面図（SX 20・23～27・48）（1/40）その 4

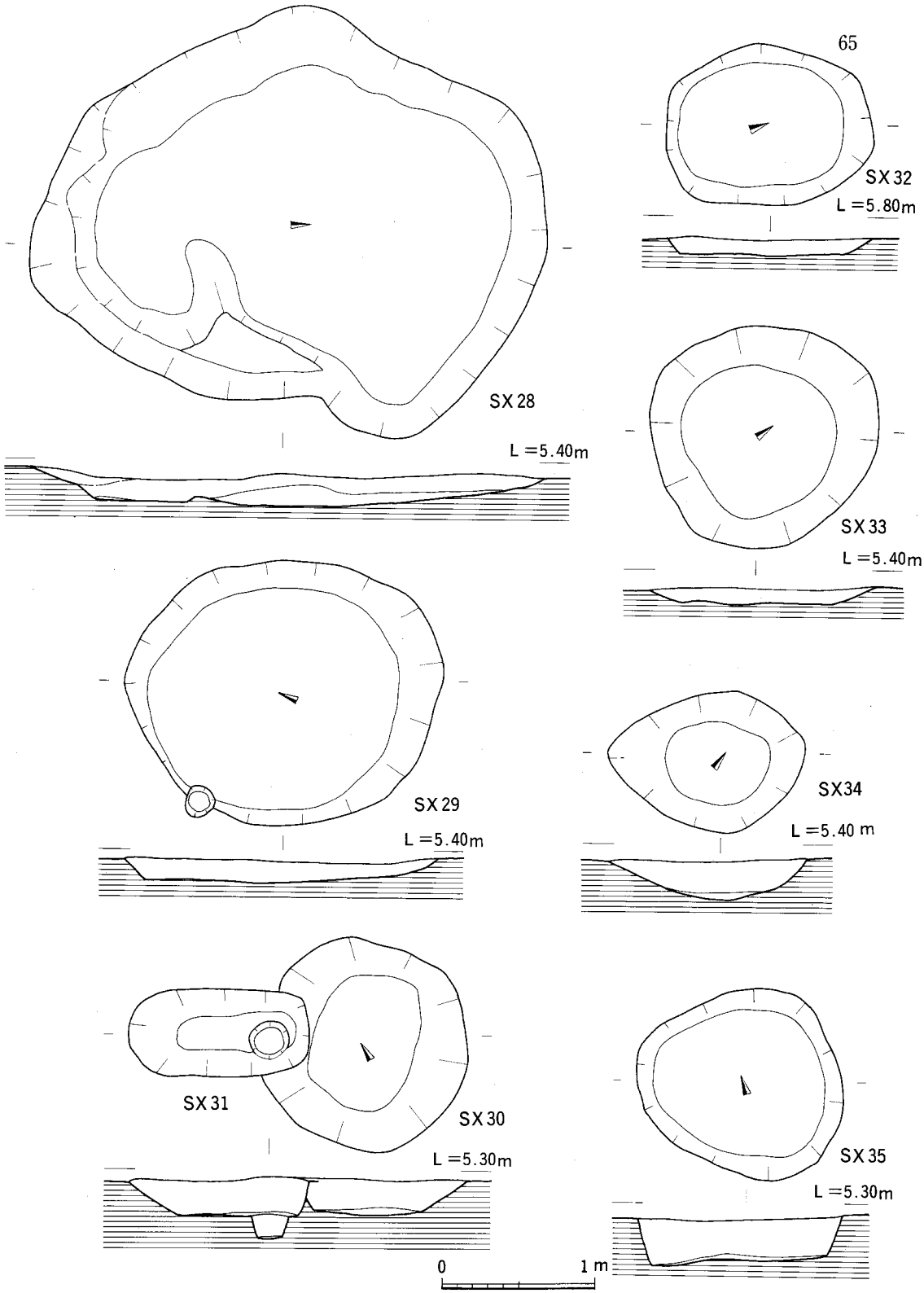


Fig.43　第Ⅱ区竪穴遺構平面および断面図（SX 28～35）（1/40）その5

これらの他に、遺構検出の当初に確認されたものを屋敷地の西側からあげると、遺構番号を付していないが、SB95とSB98の間と、SB82とSB91の間の矩形の土層の溜りがある。これらは非常に残りが悪く、平面形や他の遺構との関連などについて、十分な調査ができないまま消滅してしまったが、建物の「土間」もしくは7類とした竪穴遺構の床面部分だった可能性

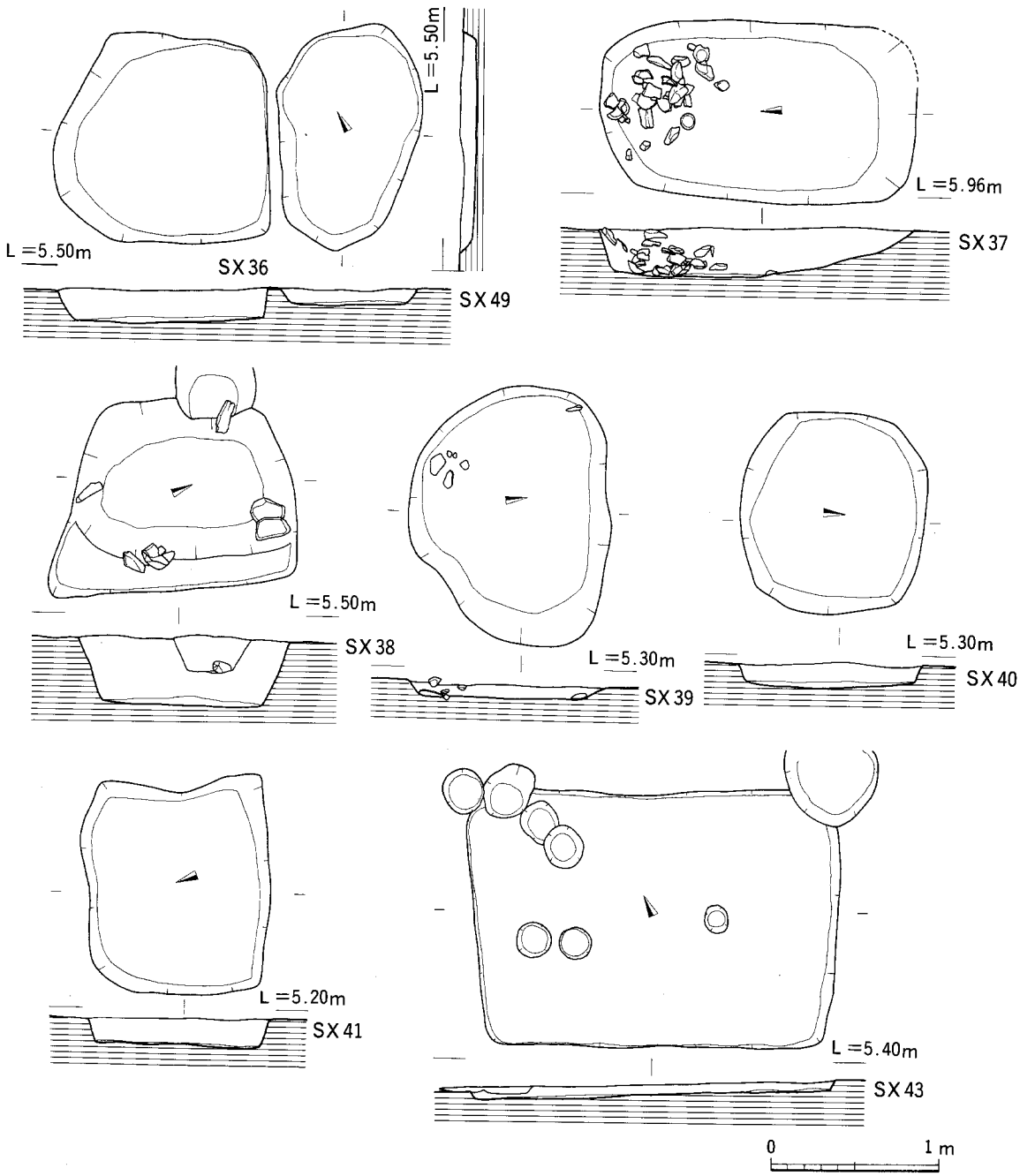
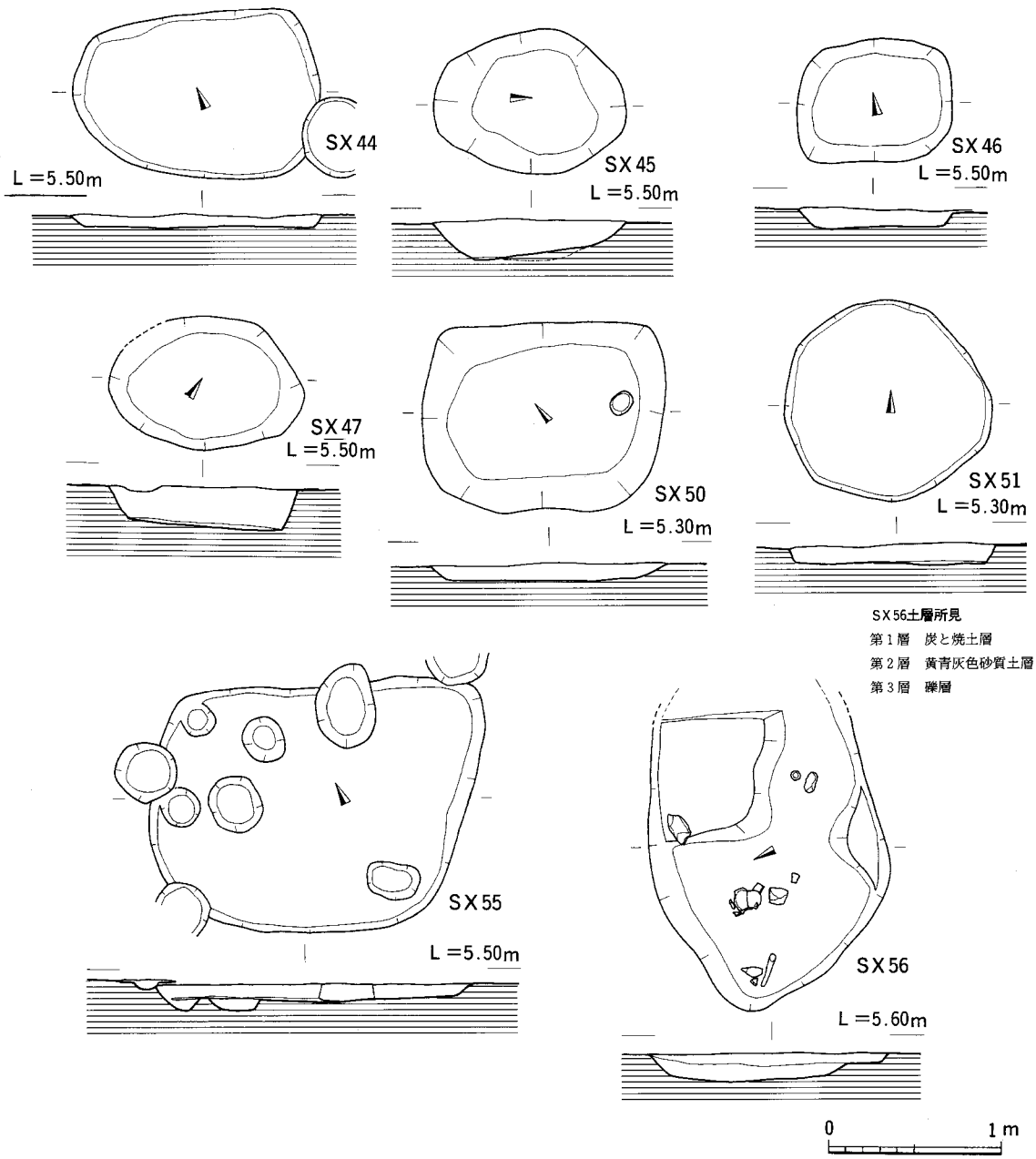


Fig. 44　第Ⅱ区竪穴遺構平面および断面図（SX36～41・43・49）(1/40) その6

が十分ある。広がっていた土層は木炭・焼土を含む暗灰褐色土で1～2cmほどの厚さであった。

ところで掘り方が確認できた4例についてみると、上部構造として、上屋があった可能性を遺構として留めるものはSX53である。北西部床面直上に、直径が10cmほどの丸太材が、竪穴西壁にほぼ平行に炭化して倒れた状態で出土した。その周囲には赤黄褐色の焼土や木炭片が層をなして、北西部から中央にかけてみられた。焼土は粘土状のキメの細かな素地土に砂・小石・スサ等を混入したものであり、やや短絡的であるが、竈体もしくは壁に用いられていた可



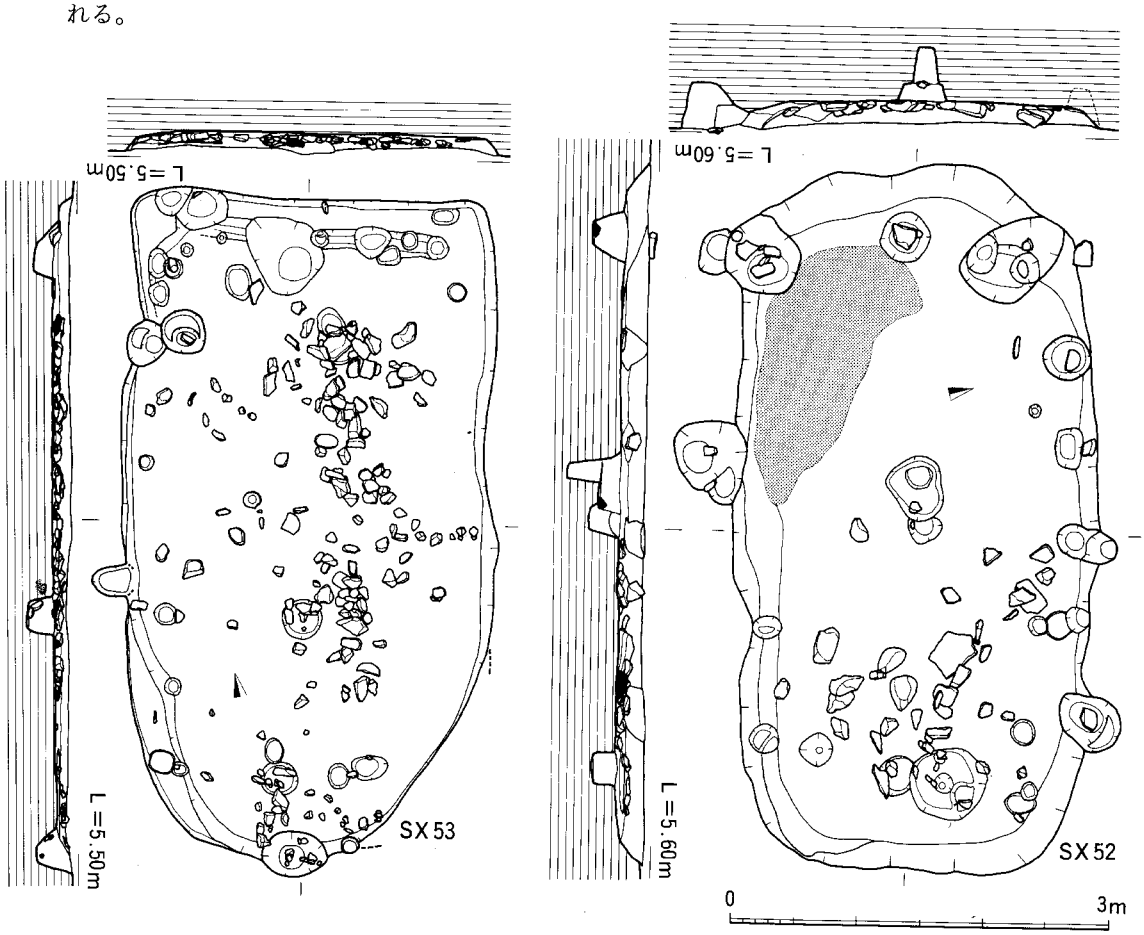
Fig,45　第Ⅱ区竪穴遺構平面および断面図（SX44～47・50・51・55・56）(1/40) その7

能性がある。またSX53の西壁と北壁に平行に、幅5㎝、深さ3～7㎝ほどの溝状遺構が付設されている点は注意される。これは、弥生～古墳時代の竪穴式住居によく見られるような壁溝と同様な性格のものと思われるもので、おそらく竪穴の壁部分の補強板壁の痕跡か、排水用の溝かと思われる。柱が伴う可能性はあるが、明確にわかるものはない。可能性として、SX52の場合は、掘立柱建物SB67もしくはSB134との関係が、またSX53の場合は、SB127との関係が、さらにSX01の場合は、SB88を始めとする建物群との関係が注意される。

すなわちこの種の竪穴が、上屋構造を持って単独でなんらかの機能をもつものであったか、あるいはなんらかの建物の付属施設としての半地下式の構造物なのかといった問題があるようである。これについては他の竪穴遺構と建物との関係をも含めて検討を要する。

8類　(Fig,50)

SX　91・92・95の3例がある。平面形は長大な長方形で、長さ4～5m、幅2m前後のものである。断面形は浅皿～逆台形である。あまり深くない。上記以外にはSB61の南側によく似た溝状遺構が見られた。遺物の出土量は多くない。SX91はワラ灰と思われる灰層と焼土層が北側に見られた。SX91と92は直交している。またSX95は畦畔と平行している点は注意される。



Fig,46　第Ⅱ区竪穴遺構平面および断面図（SX52・53）(1/60) その8

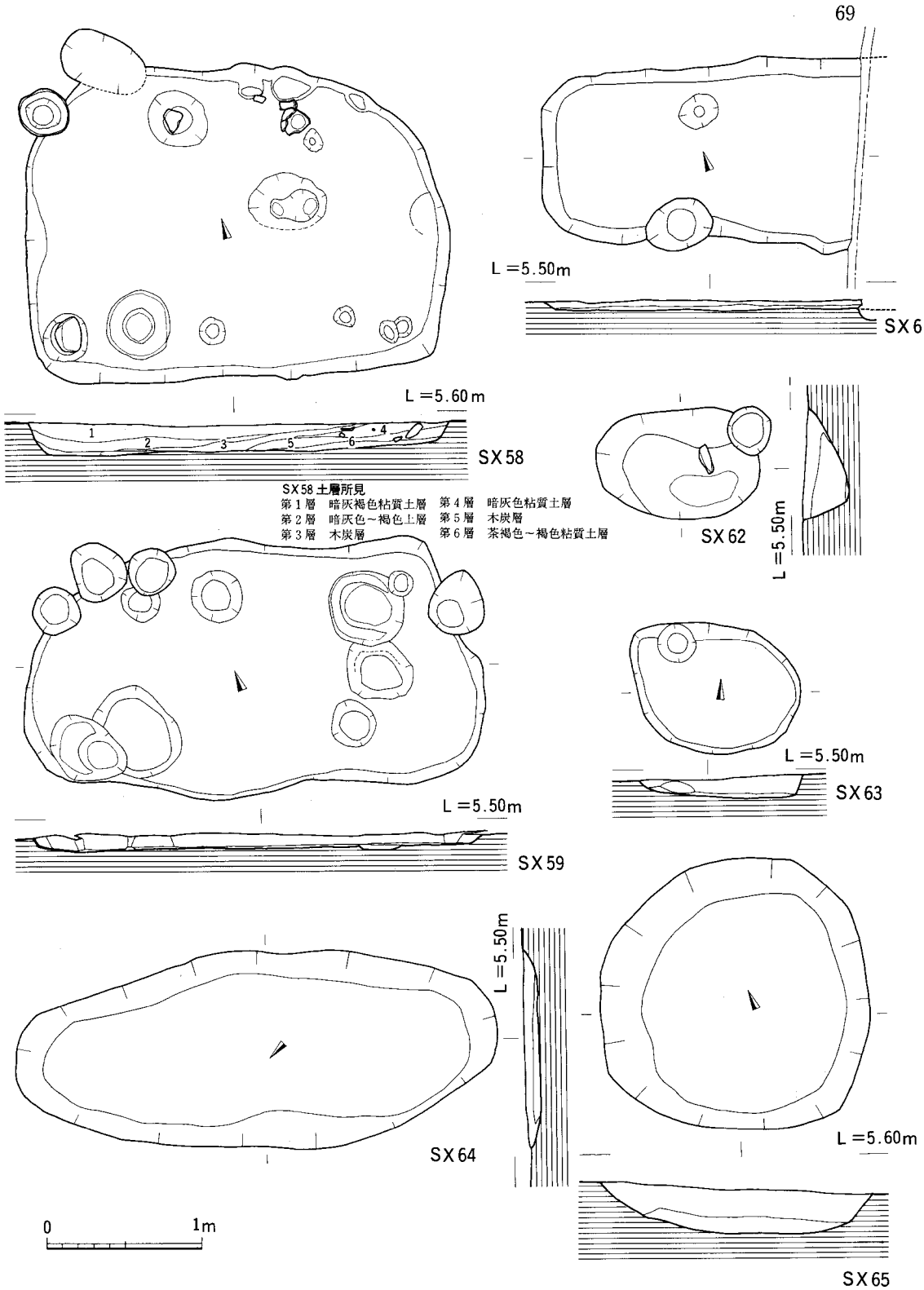
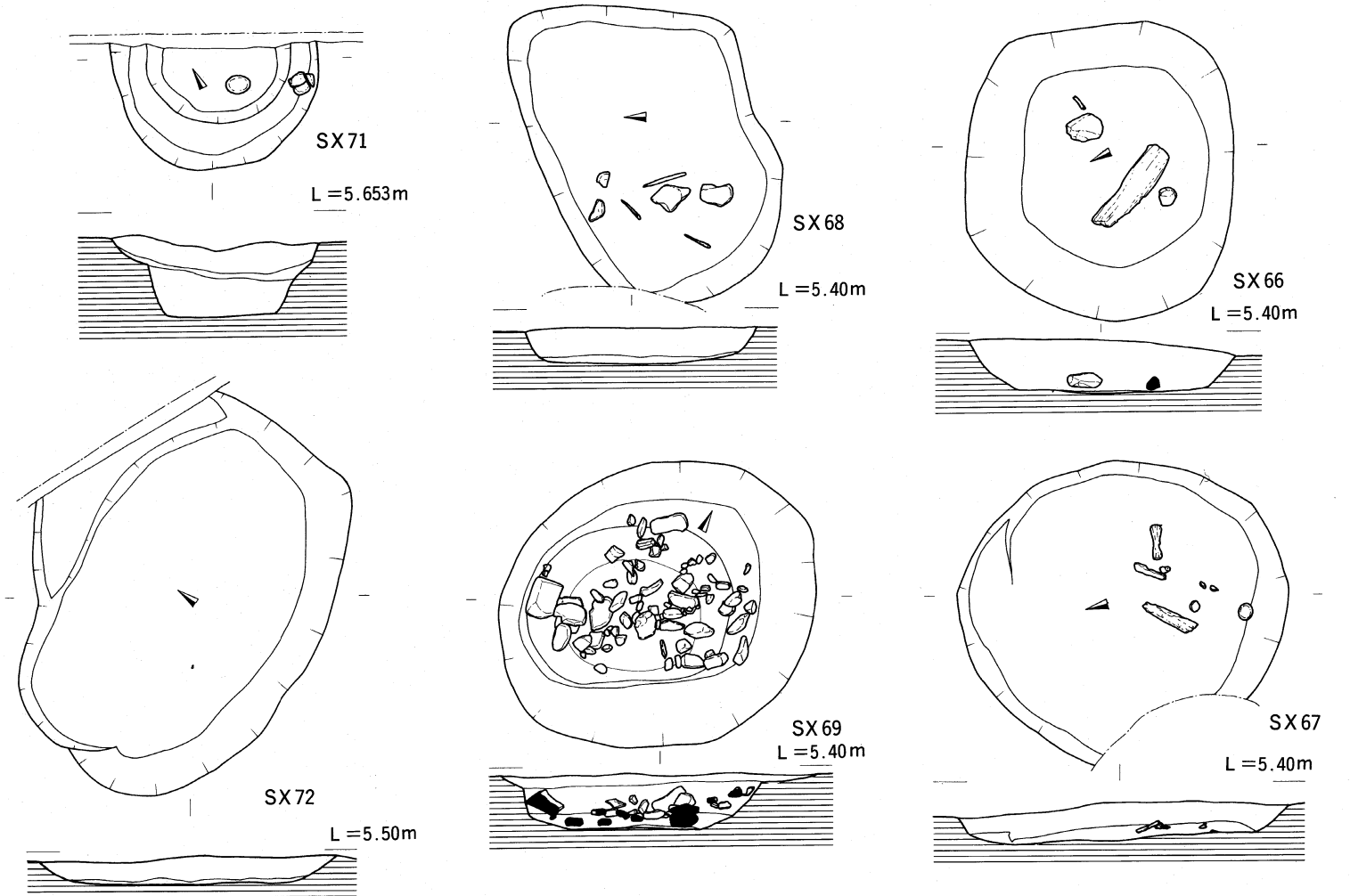
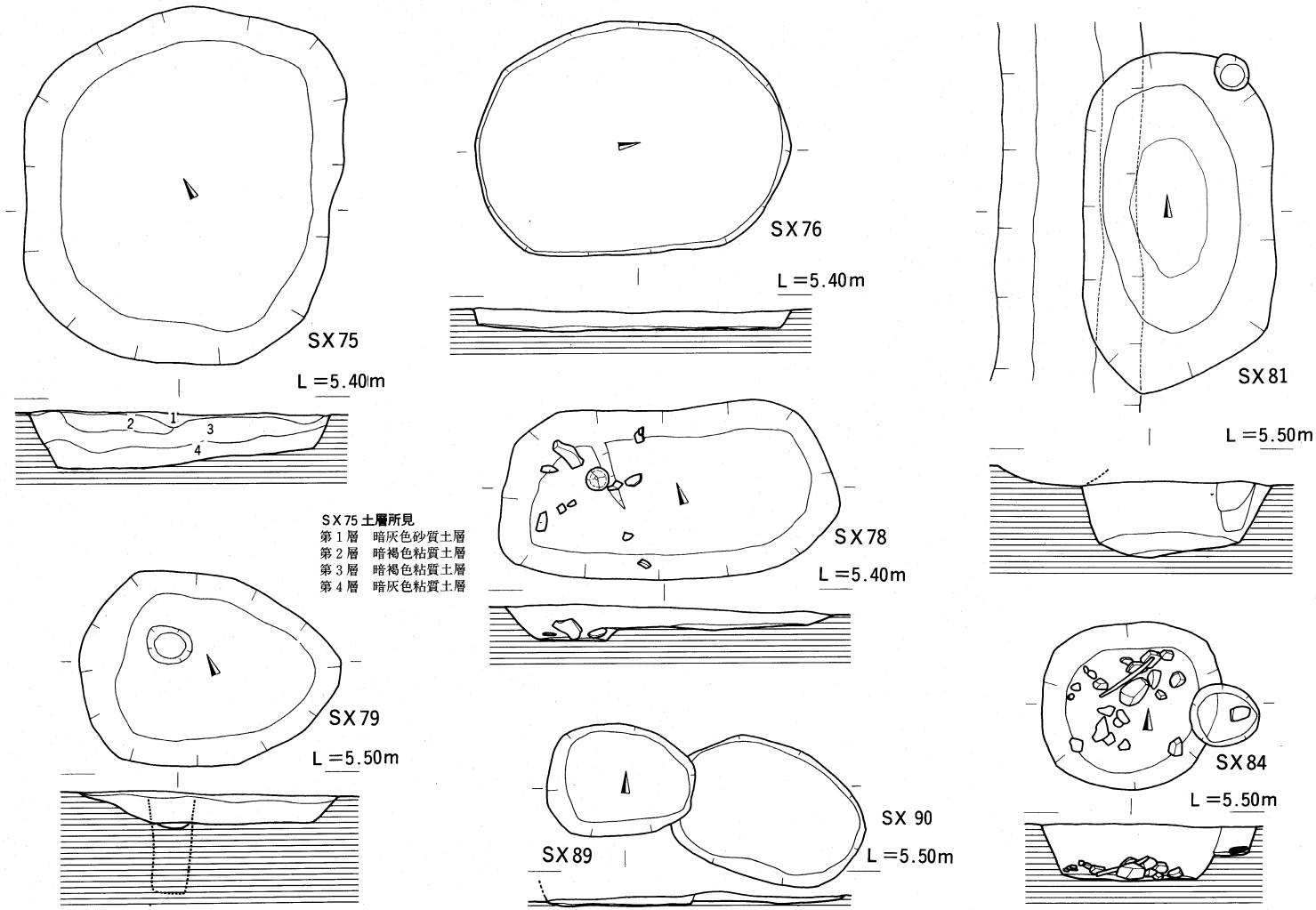


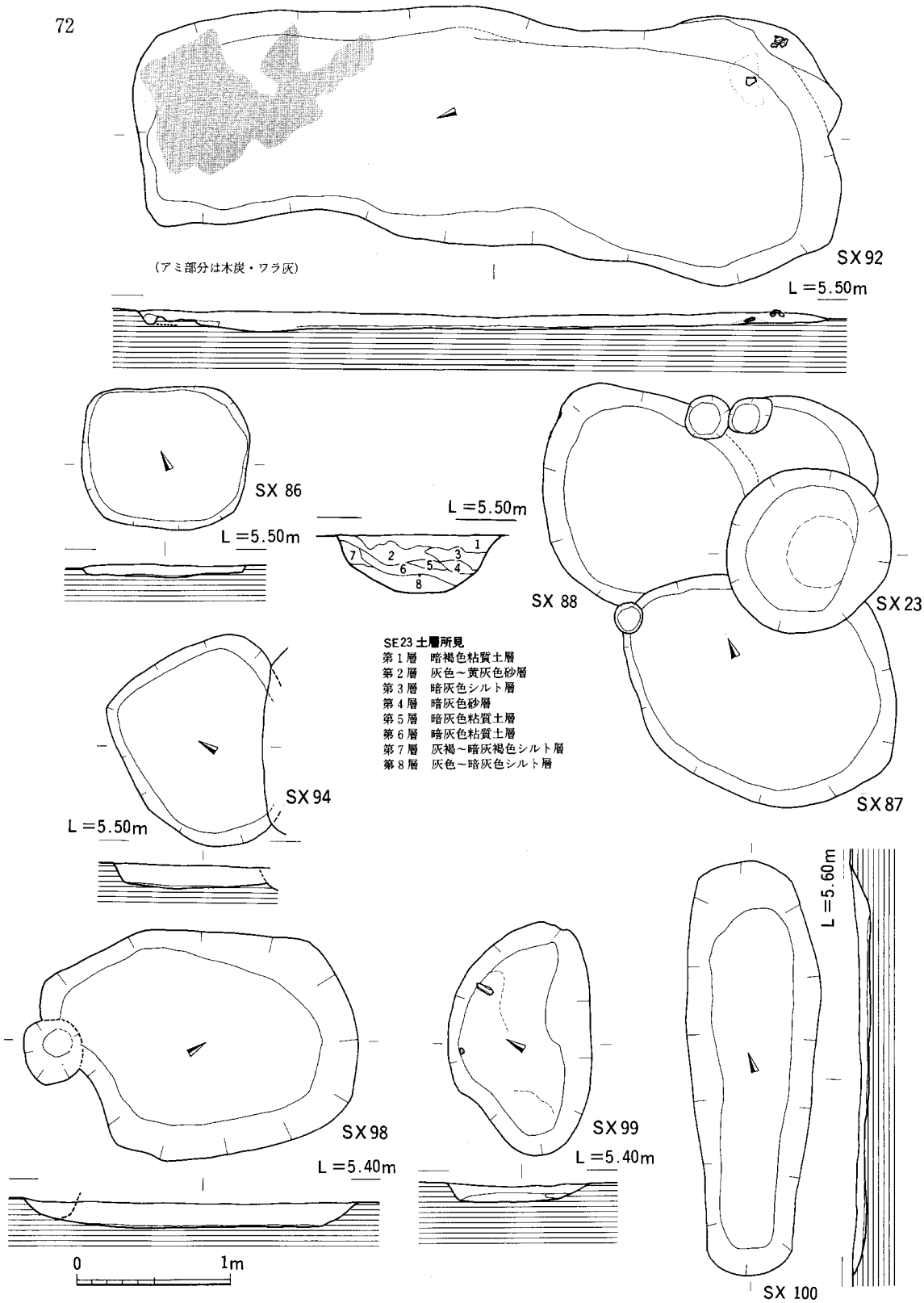
Fig.47　第Ⅱ区竪穴遺構平面および断面図（SX58・59・61～65）（1/40）その9



Fig,48　第Ⅱ区竪穴遺構平面および断面図（SX66～69・71・72）(1/40) その10



Fig,49　第Ⅱ区竪穴遺構平面および断面図（SX75・76・78・79・81・84・89・90）（1/40）その11　0　1m



Fig, 50　第Ⅱ区竪穴遺構平面および断面図（SX 86～88・92・94・98～100、S E 23）(1/40) その12

Fig.No	PL.No	調 査 区	遺構No	調査時No	形状・寸法(長×幅×深さ)	出 土 遺 物	出土遺物Fig.No	備考
39	—	IIa	SX01	SX40	(m) 7類 6.46×3.50×0.20	白磁－碗III、青磁－碗（同安II）・皿（同安II）碗（龍泉）、瓦器－碗、土師－碗・杯・皿、土師質－土鍋、須恵質－捏鉢・甕、瓦質－甕、陶器、弥生土器、木炭	79-489～492	234 235
—	—	〃	SX02	SX42	4類 1.47×0.71×0.14	青磁－皿（同安I）・碗（龍泉I）、土師器－坏皿、瓦器－碗、土師質土鍋、陶器－鉢		
40	11	〃	SX03	SX43	4類 1.27×1.18×0.45	土師器－坏・皿、土師質土鍋、須恵質－坏・甕、陶器－甕、染付	79-493～494	
40	—	〃	SX04	SX44	6類 3.04×2.08×0.16	土師器－坏		233 234
40	—	〃	SX05	SX45	4類 1.45×1.11×0.18	土師器－皿・坏、土師質土鍋、青磁－碗（同安）陶器		
40	—	〃	SX06	SX46	4類 1.71×1.54×0.43	青磁－碗（龍泉I）(同安I，II）、土師器－坏・皿、土師質土鍋、須恵質－甕、弥生土器、石鍋輸入陶器	79-495	
—	—	〃	SX07	SX65	6類浅いたまりのため計測不可	遺物なし		
—	—	〃	SX08	SX61	5類 3.38×2.17×0.10	土師器－坏・皿、土師質土鍋、白磁－皿（VI）、青磁－碗（龍泉I）、輸入陶器－壺、石鍋	79-496	
40	—	〃	SX09	SX62	4類 1.80×1.26×0.05	遺物なし		
40	—	〃	SX10	SX63	4類 2.24×1.31×0.10	白磁－碗（VI）・口禿皿、青磁－碗（龍泉I）碗（同安II）皿（同安I）、土師器－坏・皿、瓦器－碗、弥生土器、土師質土鍋、輸入陶器		
40	11	〃	SX11	SX64	4類 1.72×1.42×0.09	青磁－碗（同I）・皿（同I）・碗（龍泉I，II）、瓦器－碗、土師質土鍋、須恵質－捏鉢・坏輸入陶器、弥生土器、土師器－坏・皿		
41	11	〃	SX12	SX66	4類 1.24×1.13×0.13	土師器－皿・坏、青磁－碗（龍泉）、瓦器－碗、石鍋		
41	11	〃	SX13	SX72	4類 1.62×1.56×0.70	遺物なし		639
41	—	〃	SX14	SX73	4類 1.20×1.12×0.15	遺物なし		
41	—	〃	SX15	SX76	2類 1.30×0.98×0.18	遺物なし		
41	11	〃	SX16	SX77	5類 1.93×1.21×0.31	遺物なし		640
41	—	〃	SX17	SX78	2類 1.10×0.86×0.14	遺物なし		
41	11	〃	SX18	SX79	6類 3.04×2.06×0.14	遺物なし	79-497～498	642
41	12	〃	SX19	SX80	2類 1.12×0.82×0.27	土師器－坏、陶器－壺		643
42	—	〃	SX20	SX82	6類 3.54×3.36×0.17	青磁－皿（同安）、須恵器－坏、土師器－坏、陶器－壺		
41	—	〃	SX21	SX83	5類 1.59×1.05×0.08	須恵質－捏鉢、土師質土鍋		
41	—	〃	SX22	SX84	2類 0.71×0.61×0.09	青磁－碗（龍泉I）、陶器－壺		
42	12	〃	SX23	SX88	4類 1.78×1.60×0.47	青磁－碗（同安I，II)(龍泉）、土師器－坏・皿土師質土鍋、須恵質－捏鉢、輸入陶器、弥生土器壺、盤	79-499～500	
42	—	〃	SX24	SX89	2類 1.35×1.00×0.28	青磁－碗（同安II）、白磁－皿（VI）、須恵器－坏、土師質土器、土師器－皿・坏、弥生土器		
42	—	〃	SX25	SX90	4類 1.43×1.20×0.45	土師器－坏、瓦質－甕		
42	—	〃	SX26	SX91	4類 2.06×1.83×0.16	青磁－碗（同安II)(龍泉平底皿）、白磁－皿（平底）	79-501	
42	—	〃	SX27	SX93	4類 1.12×1.03×0.09	遺物なし		
43	12	〃	SX28	SX96	6類 3.39×2.81×0.20	青磁－碗（同安II)(龍泉I，II）・皿（同安I）土師器－坏・皿、瓦器－碗、土師質土鍋、須恵質坏蓋、輸入陶器、染付、弥生土器、石鍋、釘		
43	—	〃	SX29	SX97	4類 2.09×1.74×0.16	遺物なし		
43	—	〃	SX30	SX100	4類 1.39×1.34×0.24	遺物なし		
43	—	〃	SX31	SX101	2類 1.17×0.58×0.25	遺物なし		
43	12	〃	SX32	SX103	2類 1.37×1.05×0.11	青磁－碗（龍泉I)(同安II)		
43	—	〃	SX33	SX104	4類 1.51×1.44×0.12	青磁－碗（龍泉I）・皿（同安）、土師質土鍋	79-502	

（備考欄の数字は原図番号）

Tab.8 第II区竪穴遺構所見一覧表（その1）

Fig.No	PL.No	調査区	遺構No	調査時No	形状・寸法(長×幅×深さ)	出土遺物	出土遺物Fig.No	備考
43	12	IIa	SX34	SX105	1類 1.30×0.92×0.26 (m)	青磁－碗（龍泉Ⅰ）、白磁－碗、土師器－坏・皿 土師質土鍋	79-502	
43	－	〃	SX35	SX106	4類 1.36×1.25×0.30	青磁－碗（龍泉Ⅰ）、白磁－碗（IV）、瓦器、土師器－坏・皿、陶器片		
44	12	〃	SX36	SX107	4類 1.30×1.26×0.20	土師器－坏・皿、青磁－皿（龍泉）、陶器片		
44	12・13	〃	SX37	SX109	3類 1.90×1.10×0.28	青磁－皿（同安Ⅰ）・碗（龍泉Ⅰ，Ⅱ）、白磁－皿、土師器－坏・皿、瓦器－碗、土師質土鍋、須恵器片、輸入陶器－甕・壺、石鍋	79-503～507	649
44	13	〃	SX38	SX110	3類 1.50×1.21×0.42	青磁－碗（同安Ⅱ）、土師器－坏、弥生土器、石鍋、炭	79-508	
44	13	〃	SX39	SX112	4類 1.56×1.21×0.10	遺物なし		641
44	13	〃	SX40	(SP725) 162	4類 1.20×1.12×0.16	土師器－坏	80-509	650
44	13	〃	SX41	(SX161) SX166	3類 1.33×1.14×0.18	青磁－碗（龍泉Ⅰ）		651
－	－	〃	SX42	SX81 の東隣	4類 0.75×0.73×0.63	遺物なし		
44	－	〃	SX43	(SX110) SX163	5類 2.26×1.57×0.24	青磁－碗（同安Ⅱ）、土師器－坏、石鍋、弥生土器		
45	－	〃	SX44	SP437	4類 1.46×1.00×0.07	土師－坏、陶器		
45	－	〃	SX45	SP446	2類 1.13×0.24×0.23	須恵器・小片、土師器・小片、粘土塊		
45	－	〃	SX46	SP642	2類 0.91×0.72×0.12	土師器－坏・皿		
45	－	〃	SX47	SP645	2類 1.15×0.79×0.25	青磁－小片（同安）、白磁－碗、須恵器－坏蓋、土師器－小片、土師質土鍋、弥生土器、粘土塊		
42	－	〃	SX48	SX91 の東	4類 1.36×1.32×0.17	遺物なし		
44	－	〃	SX49	SX107 の東	4類 1.38×0.87×0.10	遺物なし		
45	－	〃	SX50	SX82 の北	3類 1.45×1.12×0.10	遺物なし		
45	－	〃	SX51	SX80と SX81との間No.1	4類 1.23×1.18×0.12	遺物なし		
46	23	〃	SX52	SX115	7類 5.44×3.19×？	土器器－坏、青白磁香炉脚	80-510～526	660
46	23	〃	SX53	SX116	7類 5.35×2.99×？	白磁－碗（VI）口禿碗、青磁－碗（同安Ⅱ）・碗（龍泉Ⅰ，Ⅱ）・皿（同安Ⅰ）、土師器－坏、皿 土師器捏鉢、合子、輸入陶器、石鍋、瓦器－甕、粘土塊	80-527～539	662
－	－	〃	SX54	SX119	6類 2.28×1.76×？	青磁－碗（龍泉Ⅰ）・皿（同安Ⅱ）、土師器－皿 土師質土鍋	81-540	
45	－	〃	SX55	SX121	5類 1.97×1.48×0.11	青磁－小片（同安）、土師器－皿・坏、粘土塊	81-541～542	
45		〃	SX56	SX122	6類 1.80×1.41×0.16	青磁－碗（同安Ⅱ）・碗（龍泉）、土師－坏、瓦器－小片、坩形合子蓋、土師質土鍋、須恵質捏鉢 弥生土器、粘土塊	81-543～545 547～548	663
－	－	〃	SX57	SX126	5類 1.58×1.58×0.12	土師器－坏		
47	－	〃	SX58	SX127	5類 2.75×2.07×0.22	青磁－皿・碗、土師器－碗・坏・皿・坏又は皿、土師質土鍋、炭、粘土塊、瓦質－甕、弥生土器陶器－壺、常滑陶器	81-552	664
47	－	〃	SX59	SX128	5類 3.03×1.72×0.10	土師器－皿・坏、土師質土鍋、粘土塊		
－	－	〃	SX60	SX164	7類 2.95×2.56×0.06	遺物なし		
47	－	〃	SX61	SX128 南側土壙	5類 2.10×1.28×0.08	遺物なし		
47	－	〃	SX62	SP891	2類 1.09×0.73×0.30	青磁－皿（同安）・碗（龍泉）、土師器－坏・皿 土師質土鍋、弥生土器、天目陶器		
47	－	〃	SX63	SP911	2類 1.13×0.86×0.16	土師器－坏・皿、粘土塊		
47	－	IIc	SX64	SX133	1類 3.11×1.30×0.11	土師器－坏・皿、土師質土鍋、粘土塊		678
47	32	〃	SX65	SX134	4類 1.77×1.76×0.35	白磁－不明小片、青磁－碗II（同安）、土師器－坏、瓦器－碗、土師質土鍋、陶器－壺片		666
48	33	〃	SX66	SX135	4類 1.77×1.60×0.33	青磁－皿小片（同安）・碗Ⅰ（龍泉）、土師器－坏・皿・小片、土師質土鍋、須恵質小片、輸入陶器		676

（備考欄の数字は原図番号）

Tab. 9　第Ⅱ区竪穴遺構所見一覧表（その2）

Fig.No	PL.No	調査区	遺構No	調査時No	形状・寸法(長×幅×深さ)	出土遺物	出土遺物Fig.No	備考
48	33	IIc	SX67	SX136	4類 1.97×1.80×0.25 (m)	青磁－碗（龍Ⅰ）、白磁－碗（Ⅴ）、土師器－皿 瓦器－碗、土師質－甕	81-554	
48	32	〃	SX68	SX137	4類 1.77×1.63×0.22	青磁－皿（同安）、土師器－坏・皿・小片、瓦器－小片、土師質土鍋・擂鉢、景德鎮小片	81-555	669
48	33	〃	SX69	SX140	4類 1.88×1.70×0.28	青磁－碗（龍Ⅰ）、弥生土器、土師器－坏、瓦質土器－甕、陶器片、須恵器片		671
－	33	〃	SX70	SX142	6類 3.18×3.14×0.34	白磁－皿（Ⅱ）、青磁－皿（同安Ⅱ）・碗（龍泉Ⅰ）、土師器－坏・皿、土師質土鍋、須恵質捏鉢 弥生土器、炭		
48	34	〃	SX71	SX143	4類 ？×1.22×0.50	白磁－碗（Ⅶ）、青磁－碗（同安Ⅱ）・碗（龍泉Ⅰ，Ⅱ）、土師器－坏・皿、瓦器－碗、須恵質捏鉢、甕、輸入陶器、弥生土器	81-556	672
48	－	〃	SX72	SX144	6類 2.40×1.93×0.16	青磁－碗（同安Ⅱ)(龍泉Ⅰ）、土師器－坏、瓦器－碗、土師質土鍋、須恵質捏鉢、青白磁－壺	81-557	673
－		〃	SX73	SX145	6類 2.97×2.34×0.13	白磁－皿、土師器－坏・皿、土師質土鍋	81-558	
－	－	〃	SX74	SX146	6類 2.23×1.70×0.25	青磁－碗（龍泉Ⅰ）、白磁－碗（口禿）、土師質土鍋、土師器－坏・皿、瓦器片、須恵捏鉢、粘土塊		
49	34	〃	SX75	SX147	4類 2.11×1.92×0.40	白磁－碗（Ⅵ）、青磁－碗（同安Ⅰ，Ⅱ）・碗（龍泉Ⅰ，Ⅱ）土師器－坏、輸入陶器、須恵質捏鉢粘土塊、石鍋		667
49	－	〃	SX76	SX148	4類 1.90×1.40×0.14	土師質土鍋、土師器－小片		
－	－	〃	SX77	SX149	6類 測定不可	遺物なし		
49	34	〃	SX78	SX150	4類 2.04×1.08×0.22	青磁－碗（同安Ⅱ)(龍泉Ⅰ）、土師器－碗・坏・皿、瓦器－碗、土師質土鍋、須恵質捏鉢、弥生土器、粘土塊	81-559～562 82-568	674
49	34	〃	SX79	SX151	4類 1.55×1.16×0.20	土師－坏、須恵－小片、土師質土鍋、弥生土器、粘土塊		677
34	31	〃	SX80	SX153	4類 1.08×1.26×0.10	瓦器－皿、土師器－皿		679
49	35	〃	SX81	SX154	4類 2.01×1.15×0.46	青磁－碗（同安）、土師器－坏・皿	81-563	680
－	35	〃	SX82	SX157	3類 1.60×1.29×？	青磁－碗（龍泉Ⅰ，Ⅲ）、瓦器－小片、土師質土鍋、弥生土器		
－	－	〃	SX83	SX158	6類 4.55×2.37×0.21	青磁－碗（同安)(龍泉Ⅰ）、土師器－坏・皿、土師質土鍋、須恵質捏鉢、輸入陶器－擂鉢、壺、弥生土器、粘土塊、炭		
49	35	〃	SX84	SX159	4類 1.08×1.00×0.34	土師質土鍋、土師器－坏、石鍋片、粘土塊	82-565、569 570	
－	－	II	SX85	SX131	4類	遺物なし		
50	－	IId	SX86	SX4287	4類 1.10×0.95×0.08	土師不明小片		687
50	－	〃	SX87	SX4296	4類 2.03×1.50×0.76	土師器－皿、土師質土鍋、須恵捏鉢		689
50	－	〃	SX88	SX4298	4類 (1.67)×1.39×0.10	土師質土鍋、土師器－小片		689
49	－	〃	SX89	SX4305	2類 0.90×0.68×0.08	遺物なし		
49	－	〃	SX90	SX4306	2類 1.18×0.91×0.08	土師器－坏・皿、瓦器－碗、陶器－壺		
－	－	〃	SX91	SX4310	8類 5.47×1.41×0.68	土師器－皿、土師質土鍋		
50	35	〃	SX92	SX4311	8類 4.63×1.83×0.13	(4311～4309) 白磁－皿（Ⅷ）、青磁－碗（同安Ⅱ）・碗（龍泉Ⅰ，Ⅱ）、土師器－坏・皿、瓦器－碗、土師質－土鍋、須恵質－捏鉢、合子蓋片、擂鉢、甕、輸入壺、瓦質擂鉢	82-566-567	690
－	－	〃	SX93	SX4332	6類 3.18×2.01×0.15	遺物なし		
50	－	〃	SX94	SX4333	3類 1.40×1.07×0.16	遺物なし		692
－	－	〃	SX95	SX4340	8類 6.36×2.08×0.27	青磁－碗（龍泉Ⅰ）、土師器－坏・皿、瓦器－碗 土師質土鍋、須恵質捏鉢、輸入陶器、炭		
－	－	〃	SX96	SX4349	6類 3.62×2.14×0.22	白磁－皿（Ⅱ）、土師器－坏・皿、瓦器－碗、土師質土鍋、須恵質捏鉢		
－	－	〃	SX97	SX4298 (東側)	4類 1.28×1.00×0.40	土師質土鍋、土師器－小片		
50	－	〃	SX98	SX4415	4類 2.08×1.53×0.17	土師器－坏、土師質土鍋		698
50	－	〃	SX99	SX4416	4類 1.53×0.95×0.12	土師器－皿、瓦器－小片		699
50	－	〃	SX100	SX4420	1類 2.75×0.85×0.14	土師器－坏		

（備考欄の数字は原図番号）

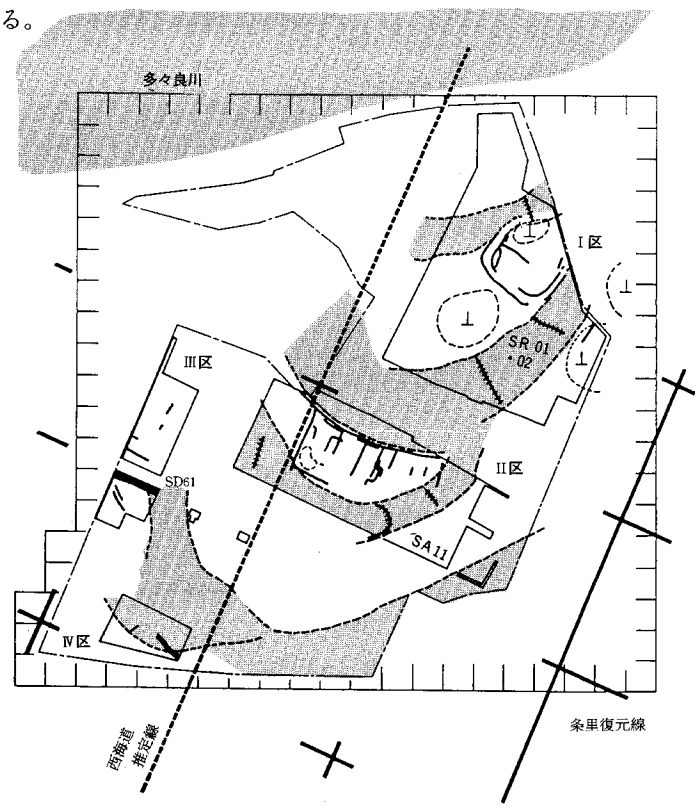
Tab. 10 第Ⅱ区竪穴遺構所見一覧表（その3）

7）水田址（Fig,11、PL,36･37）

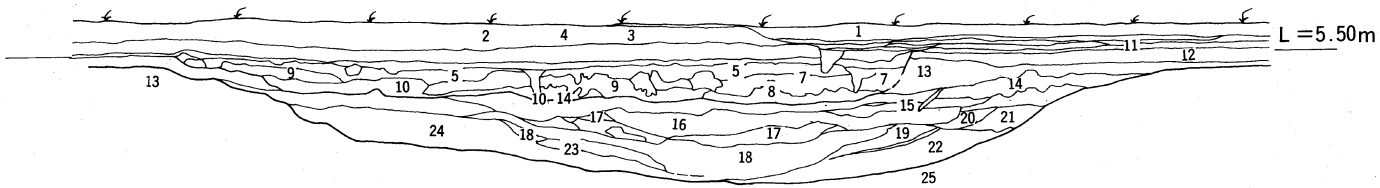
第II区では畦畔と認められるものが各小区でみられた。平面形が全面的に確認された例はないが、溝状遺構の項で述べたように、SD27～29・39・43～44・56～59が、水田に伴う畦溝、あるいは畝状遺構と思われるものである。これらは屋敷地形成と廃棄の時期に相前後している。遺存状況は南北に残っているものが多い。SD43・44・49以外は、いずれも屋敷地に伴う遺構を切っており、屋敷が放棄された後の土地利用が、水田もしくは畑だったといえる。

なおこれらの溝で区画されている田圃の形状は、条里の一坪の北半分に、南北に長い6列の区画の大きい水田（南北に約50mの長さ、東西に15～17mの幅）で構成されていることがまずわかるが、さらにこれらの区画内において田圃が小区分されていたことを示す畦畔が調査区東南部（第IId区・PL,36･37）で確認された。小区画の水田はSX93に重複するものが約42.5～50㎡（東西に15～17m、南北に6.5m）ほどで、SX98・99や、水田に伴うと考えられるSX95に重複している水田が、約210㎡ほどの面積である。平面形は正確な矩形ではないが、基本的には坪並、さらには条里に合わせた形状を取ることが図られたようであり、屋敷地の配置と水田の構成が、一定の計画の下で行なわれたことは否めないであろう。屋敷地の展開は、コの字型になるSD22周辺の切り合い関係をみると、SD24→SD22、SD23→SD22→SD33→SE13、SD33→SE09、SD22→SB126、SD30→SE12であるが、井戸や建物が屋敷地の東を画していたSD22を切って展開していることが明らかであり、隣接していた水田ないし畑を整地（第27層）して居住区を東に拡げたことが予想される。

8）旧河川（Fig,5、PL37）旧河川については、杭列の項で若干述べたが、第I区で確認された、SR01・02の延長部が第II区の東側で確認された。この旧河川内にはSA11他2条の井堰が検出されている。平安時代後期～末までは、埋没もしくは淀み状を呈していたと思われるものである。調査区東南隅部に遺構が希少であることとなんらかの関係があるかも知れないが、直接の関係はないものと思われる。



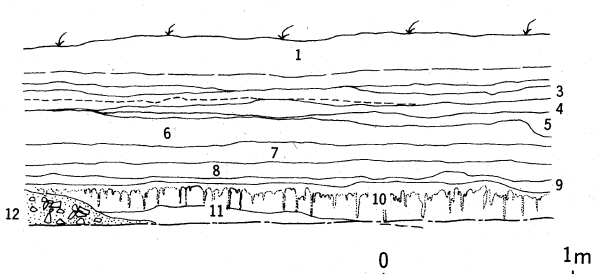
Fig,51　戸原麦尾遺跡旧河川分布概要模式図（1/5000）



第IIｃ・ｄ区検出旧河川土層所見

第１層：１～６層に細分できるが、いずれも耕作土およびその床土である。
第２層：耕作土１～４層に細分できる。１層同様耕作土および床土である。
第３層：この層も旧水田耕作土と思われる。
第４層：旧水田の床土か。黄灰色粘質土。
第５層：灰色～暗黄灰色粘質土
第６層：黄褐色粘土ブロック
第７層：灰褐色粘質土
第８層：暗灰～灰黄色粘質土
第９層：灰黄褐色粘質土
第10層：暗灰～灰黄色粘質土（砂質）
第5～10層は13層を切る段落ちもしくは整地層で、水平堆積ではなくブロック状に堆積している。
第11層：黄灰褐色粘質土（砂質）
第12層：暗灰色～暗灰褐色粘質土（遺物包含層、下図の第６層と同じ）
第13層：黄褐色粘質土層（鉄分の沈着が顕著）
第14層：灰色粘質土
第15層：暗灰色粘質土（微砂～細砂混り）
第16層：暗灰色細砂層
第17層：暗灰色粘質土
第18層：暗黒灰色粘土層
（細砂～粗砂が縞状に水平堆積している。）
第19層：明灰白色粗砂層
第20層：黒灰褐色粘土層
第21層：暗灰色砂層
20～21層上綿から下部の土層は、還元によって全体の色調が青っぽくなっている。
第22層：暗灰色粗砂層
第23層：青灰色粗砂層
第24層：黒灰色粘質土層（粗砂、細砂含む）
第25層：灰色砂礫層

0　3m



第IIｂ区南壁土層断面部分所見

第１層：現耕作土（暗灰褐色土、砂混入）
第２～５層：耕作土の床土である。黄褐色～灰黄褐色の砂混じりの粘質土で、鉄分の沈着が顕著である。縞状に黄色味が強い層が数枚堆積している。
第６層：暗褐色粘質土。木炭片を多く含む遺物包含層である。第II区の中央～北側にかけてはこの層はみられない。
第７層：明灰褐色粘質土層
第８層：灰褐色粘質土層
第９層：灰褐色粘質土層（砂混入）
第10層：灰褐色粘質土層
第11層：暗灰色粘土層
第12層：明灰色砂礫層

0　1m

Fig,52　旧河川（第Ⅱｃ・ｄ区）内土層断面図（1/80）および第Ⅱｂ区南壁土層断面図（1/40）

(2) 遺物各説

概要 第II区からは、土師器（皿・坏）を主として、土師器（土鍋）、土師質土器（捏鉢・擂鉢）、瓦器（碗）、瓦質土器（羽釜）、須恵質土器（捏鉢、甕）、陶器（常滑系甕）、等の国産の土器・陶器類のほか、白磁（碗・皿・四耳壺）、青磁（碗・皿）、青白磁（合子、水滴、皿）、褐釉陶器（四耳壺・鉢・水注）などの輸入陶磁器が出土している。その他に、管状土錘、滑石製石鍋、砥石、鉄滓、木製櫛、銅銭などが出土している。これらの遺物はほとんどが鎌倉時代に編年上位置付けられるものである。

これらの遺物の出土状況は、主として井戸、竪穴遺構、溝状遺構などから二次的な堆積の状況で出土したものが多く、ほとんどが破片である。一括埋納・投棄などの状況で出土したものは、柱穴や井戸などのわずかな例しかない。溝状遺構からの遺物の出土状況は、溝状遺構の屋敷内における位置の違いによって量的な異なりがあるようである。現耕作土の床土直下の包含層からは、多くの土器類が出土している。後世の地形改変や営田等により、かなりの遺構・遺物が攪乱・削平を受けたことが考えられる。

土器類のうち出土量が最も多いのは、供膳用の土師器皿・坏で、細かな時期区分を無視すると、出土遺物総量（破片数）の73.32%を占める。また、輸入陶磁器の総量比は第I区の7.9%と比べ、11.79%と高くなっており出土量が多くなっている。また青磁と白磁の組成比では、白磁がかなり減っているという特徴がある（169頁、Tab,20）。

以下では図示できた遺物について説明する。各遺物の出土遺構名、遺構ごとの遺物の出土状況、土師器（皿・坏）の法量などは各一覧表を参照されたい。なお輸入陶磁器の分類は、森本朝子編『博多貿易陶磁分類表』福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集別冊 1984に依拠した。

1) 柱穴出土の遺物（Fig,53～62、PL,57、Tab,11～12）

柱穴からは遺物の出土量は少ないが、柱根痕跡もしくは掘り方内に1～3点ほどの土師器（皿・坏）または青磁（碗・皿）を完形のまま、あるいは半割して埋置している例がみられた。図示したものは主にそういった出土状況のものを掲載した。なおFig,53～58は、各柱穴から1点ずつ抽出したもので、Fig,59～62は共伴関係がわかるものを図示した。

土師器 皿（1～48・52～58）器面が粗れ、調整痕が不明なものを除いて、いずれも回転糸切り離し底（以下糸切底と略す）である。口径・器高は、大きく4グループに分けられる。8.1・1,0～1.2cm前後のものと、8.4～8.8・1.1～1.3cmのもの、9.0～9.3・1.0～1.3cmのもの、そして9.5～9.9・0.9～1.3cmのものである。またまれに口径が10.0cmを超すものがある。包含層および他の遺構から出土した土師器皿の傾向をみると、数量からは、口径が約8.7cmと9.2cm前後のものが最も多く、柱穴出土の土師器皿もその傾向に沿っている。8.1cm台と9.6～9.7cm

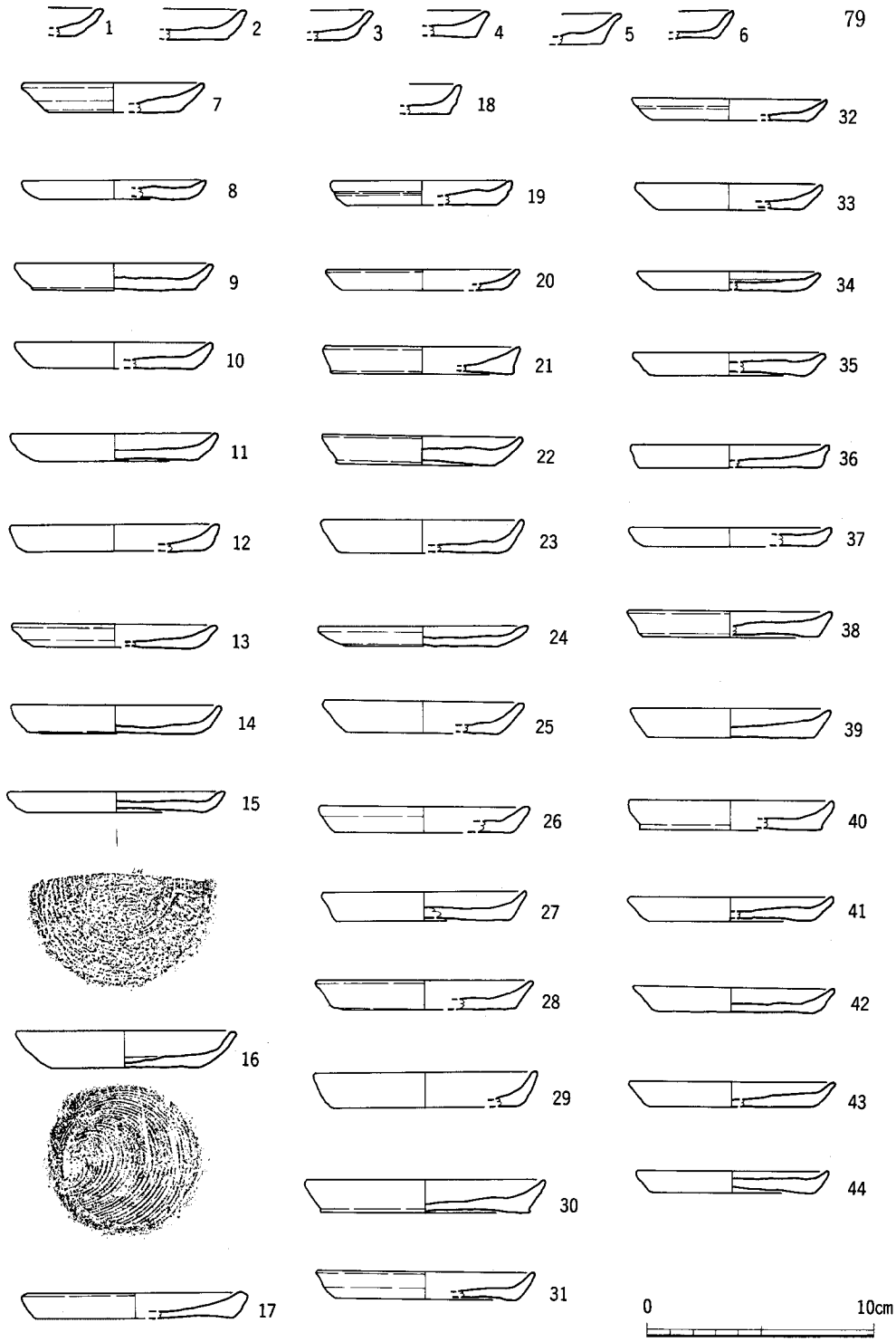
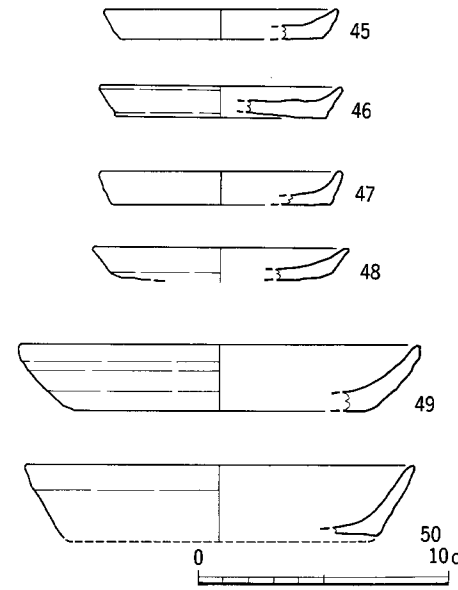


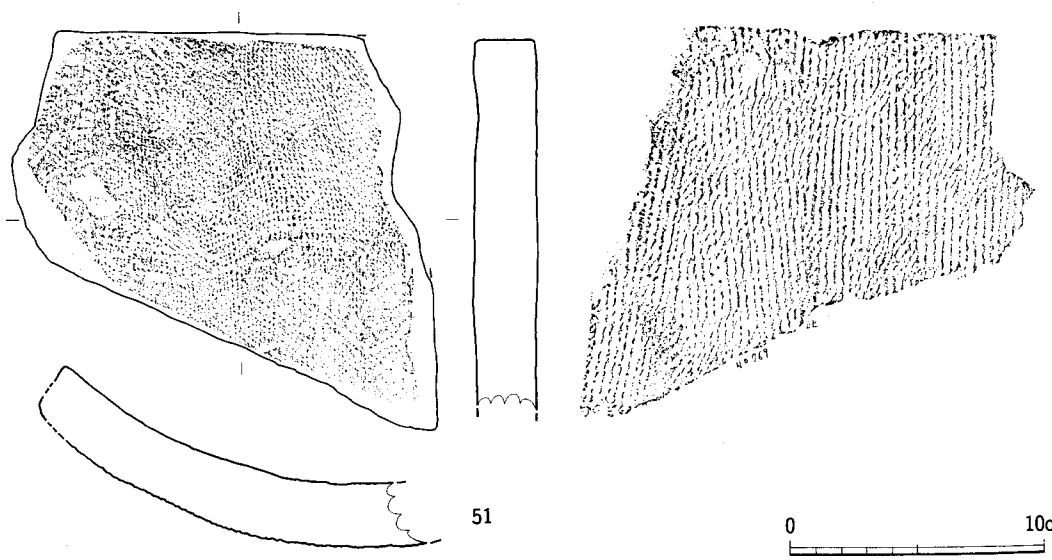
Fig.53　第Ⅱ区柱穴出土遺物実測図（1/3）その1

台はきわめて少ない。調整はほとんどが回転水挽き痕をそのまま留めているが、24・36・42などは内底にヨコナデ、外底に板目圧痕がみられる。焼成は15・16・24・35等が比較的よく焼き締まっているのに対して、他はもろい。全般に厚ぼったい作りである。色調は褐色～明褐白色。ほとんどのものに赤褐色の細かな粒子がみられる。形態的特徴については後述する。

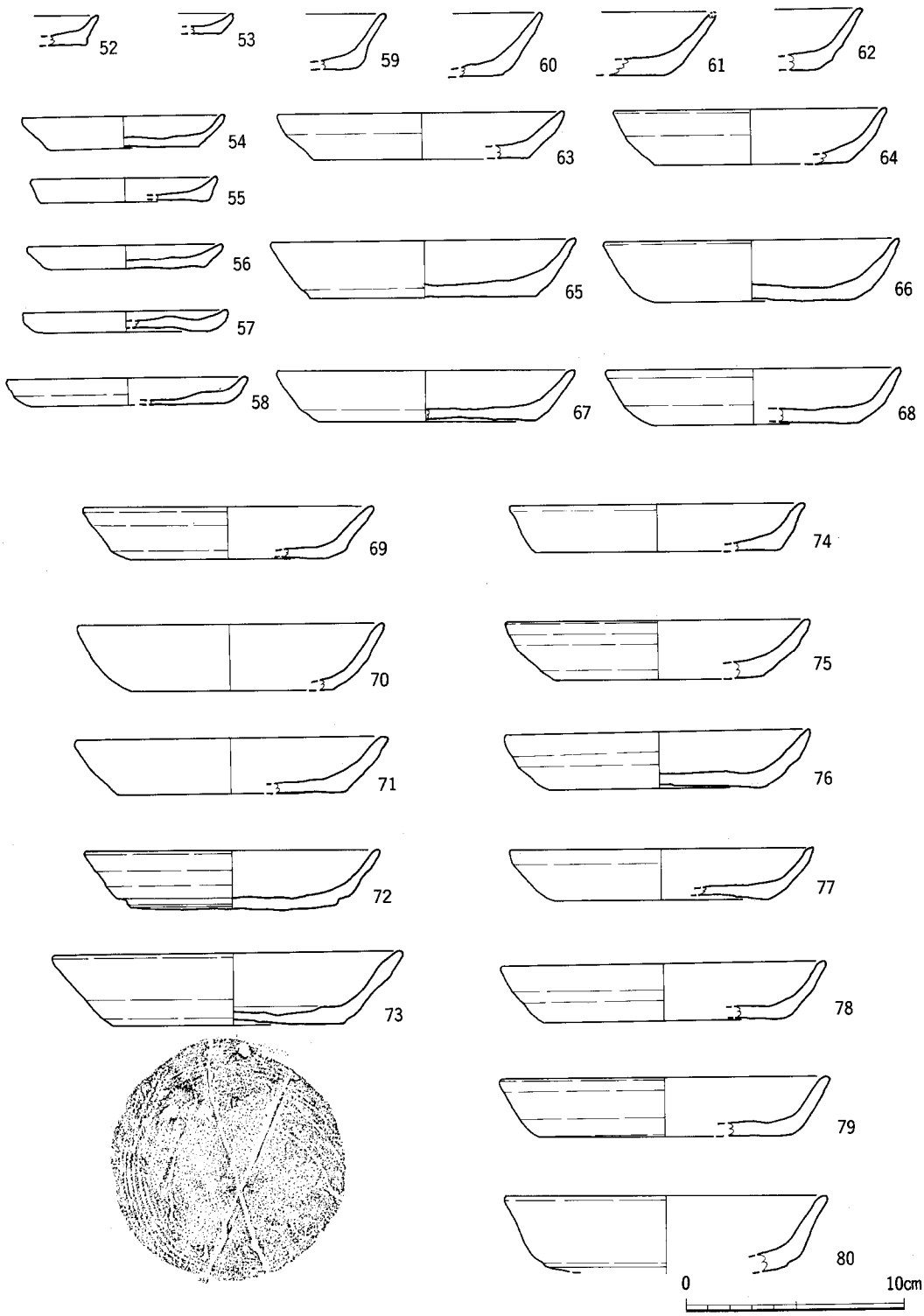
土師器　坏（49・50・59～80）いずれも糸切底である。口径は13cm台のものと、15cm台のものとに大きく分けられる。12cmまたは15～16cm台のものは数量的には少なく、13.6cm前後のものが主体を占める。作りは全体に厚手で、鋭さがない。これは全般的に他の遺構出土の坏の特徴と同様である。形態的には、やや厚手の底部から体部をわずかに内湾気味に(66や75、76など)、あるいは弱く屈曲させて(63・64)立ち上げ、口縁部を丸くおさめ、少し端部を外反させるものが主体を占める。72・73のように口縁部径に比して、底部径が小さく、体部が直線的に立ち上がるものがあるが、数は少ない。72・73が褐白色を呈し、よく焼き締まっているのに対して、他は焼成はあまく、もろい。色調は概ね褐色～明褐色。内外面の調整はほとんどが回転水挽き痕をそのまま残しているが、66・72・73等は内底にヨコナ



Fig,54　第Ⅱ区柱穴出土遺物実測図（1/3）その2



Fig,55　第Ⅱ区柱穴出土遺物実測図（1/3）その3



Fig, 56　第Ⅱ区柱穴出土遺物実測図（1/3）その４

デ、外底に板目圧痕を残している。

土師質土器　鉢（81・87）81は外径約39cm、87は外径約36cm。いずれも器高は不明。胎土は砂粒を多く含み、やや粗い。比較的よく焼き締まっている。調整痕は、81が内外面とも目の細かな縦ハケ目で、口縁部上面の叩き目を軽くナデ消している。87は、口縁部上面に叩き目を残し、体部外面は目の細かな縦ハケ目、内面はカキ目に近い横ハケ目。色調は褐色～暗褐色。

土師質土器　有鍔羽釜（82）口径18.4cm、胴部最大径20cm、鍔外径23cm、器高8.7～9.0cm程を測る。内外面ともに、目の粗いハケ目調整後ヨコナデ仕上げ。底部は火を受け脆くなっている。三足が付く可能性がある。胎土は砂粒を多く含み、やや締まりが悪い。外面は鍔の下部までススが付着し黒灰褐色、内面は褐色。

陶器　無頸大壺（83）口径約26cmほど。器表面には非常に薄く褐色（一部暗赤褐色）の不透明釉がかかる。内外面とも平行叩きの後、軽くナデ消している。胎土は目が粗い。灰色の生地に赤紫、黒色の砂粒を含む。焼成堅緻。中国製陶器か。

管状土錘（88～100）土錘は第II区全体から250点出土している。そのうち柱穴からは40点が出土している。ここではその一部を図示した。形態的には97・99・100のような、長さが3cm前後で、重さが3.5ｇほどの丸みのある小型のもの、88・89・93のような、長さが4cm前後で5.5ｇほどのやや小型のもの、また91・94・96のような長さが5～6cmで、10ｇ前後の中型のもの、98のような長さが６cmほどで６ｇ前後の細中型のものと、Fig,85の609のような7.5cm前後で、30ｇ以上の大型のものとに分かれる。ただし柱穴からは大型品は出土していない。孔径はほとんどが0.3～0.5cmにおさまる。焼成は比較的良好でよく焼き締まっている。褐色～明褐色。表面はナデ仕上げで、滑らかである。

滑石製石鍋（84～86）滑石製石鍋は柱穴からは、19点出土している。そのうちの3点を図示した。いずれも、鍔が口縁に平行してめぐるもので、口縁内径は、84が24.8cm、85が29.5cm、86が29cm。器高は85が11.7cmでやや低い器形のものである。84・86はケズリ成形の後、器表面を磨研し仕上げている。85はケズリ成形痕をそのまま留めている。外面には厚くススが付着している。素材は灰色～灰白色の良質の滑石を用いている。

青磁　皿（101～103・106）同安窯系の皿である（皿Ｉ類）。口径・器高・底径は101が10.6・2.2・5.1cm、102が9・2・4.1cm、103が10.4・2.2・3.6cm、106が10・2.1・5cm。いずれも底には櫛描文が施されている。釉の発色は良好で、透明な釉に青緑色が薄くかかっている。底部は釉薬を施釉後掻き取っている。106の外底部には花押が書かれている。

青磁　碗（104・105、107～112）104・105・108は同安窯系碗である（碗II類）。口径は104が15.6cm、105が15.1cm。いずれも外面に平行櫛描線文、内面に刻花文と櫛刺突雷光文を施す。105は内面口縁下に沈線を巡らしている。釉色は灰色がかった透明なオリーブ色。108は口縁部の形状が特徴的な碗で、内面にヘラ片彫による雲文を施文。透明な明るい青緑色。口径12.1cm。

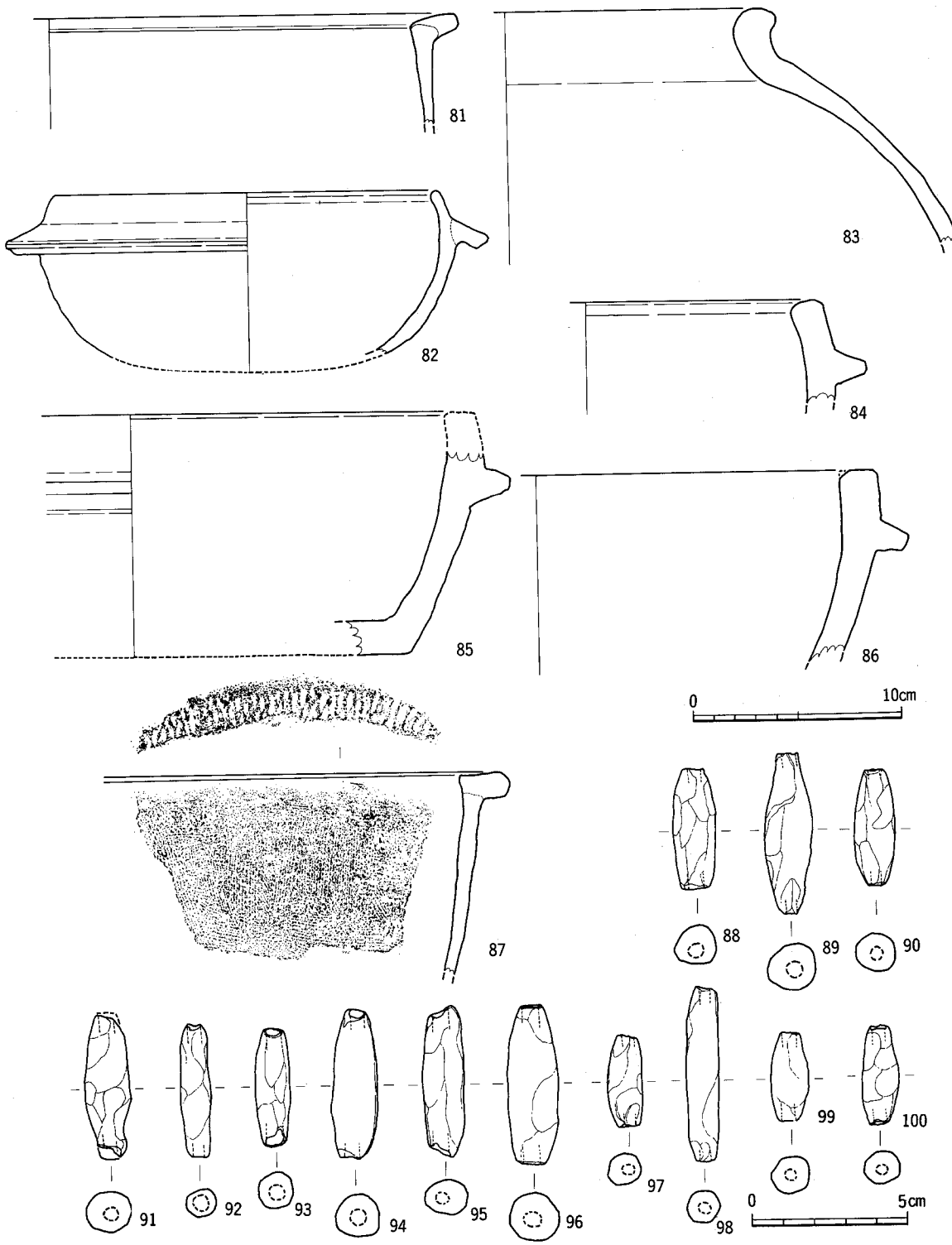


Fig.57　第Ⅱ区柱穴出土遺物実測図（1/3・1/2）その5

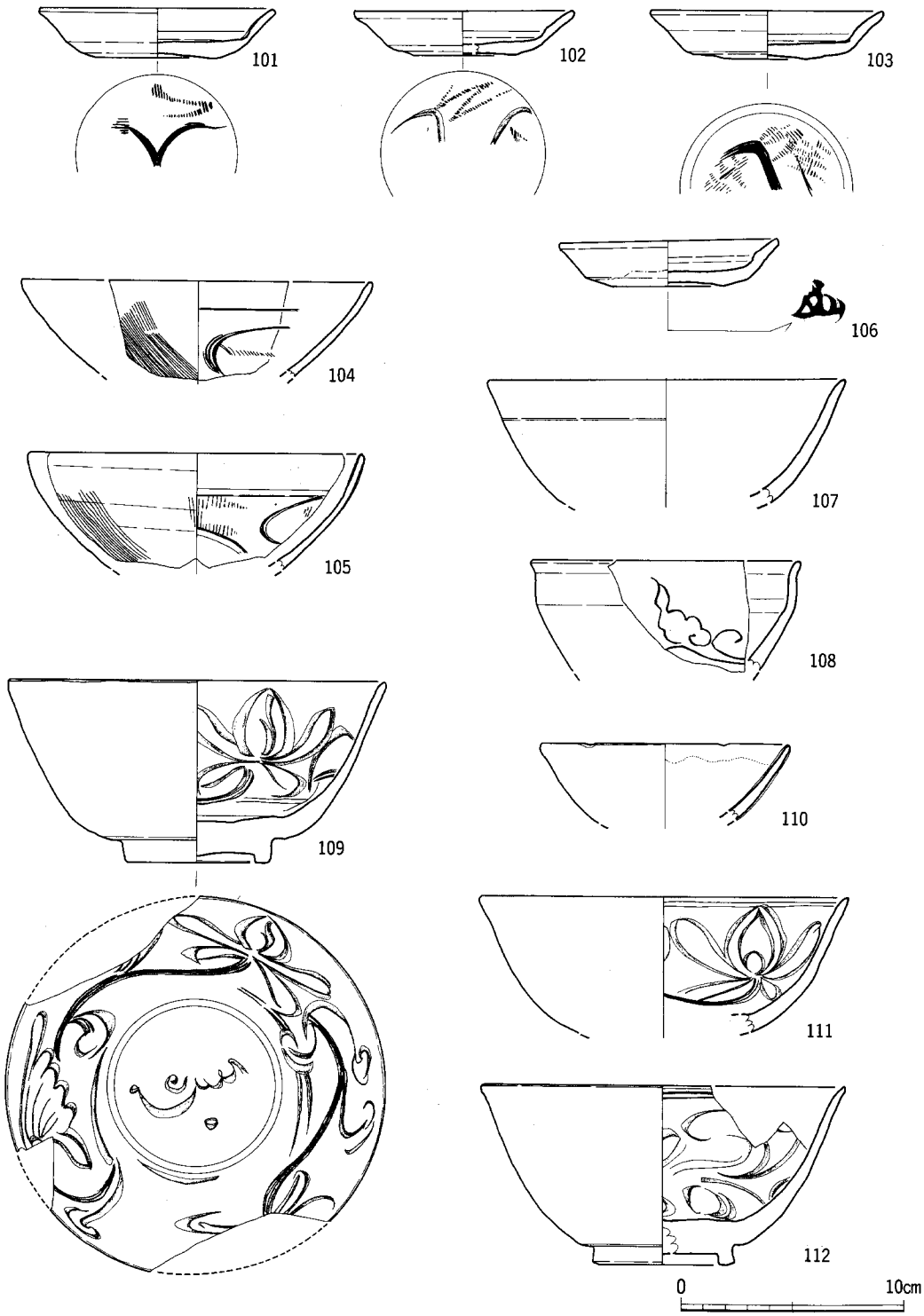


Fig.58　第Ⅱ区柱穴出土遺物実測図（1/3）その6

107・109～112は龍泉窯系碗である。107・110は無文（碗Ⅰ類）で、釉は発色が良くなく、くすんだ緑灰色。口径16cm。110は内外面とも無文で、五ないし六弁をかたどった輪花碗である。口径11.2cm。109・111・112は内面に蓮花折枝文が施されている。口径・器高は109が17・8.1cm、111が16.6・？cm。112が16.4・8.0cm。釉はやや厚い。発色は良好で透明な青緑色。

SP719出土遺物（Fig,59）

土師器　皿（113～128）いずれも糸切底である。口径・器高は、最小が122で8.4・1.0cm、最大が126で9.7・0.9cm、平均値は9.1・1.09cmである。焼成はいずれもあまくもろい。色調は褐色～明褐色。

土師器　坏（129）糸切底である。やや小片のため不正確であるが、口径・器高は12.0・2.0cm。内外面の調整痕は、器面が粗れており不明。

青磁　皿（130）同安窯系。口径・器高・底径は10.8・3.3・4.3cm。内底には櫛描文。青灰色。

白磁　皿（131）釉色は薄く青緑色がかった白色で、底部は掻き取っている。口径・器高・底径は10・1.8・6.1cm。形態的にはいわゆる口禿の白磁皿に類似。

陶器　無頸長壺（133）自然釉が内面に薄くかかる。外面は無釉。体部外面～底部はロクロ回転ケズリによる整形。底部径は5.8cm。色調はくすんだ灰～灰褐色。焼成堅緻。

管状土錘（132）長さ4.5cm、径1.7cm、重さ11.0g。中型の土錘である。

SP775出土遺物（Fig,59）

土師器　皿（134・136）口径8.4～9.0cm、器高0.9～1.1cmを測る。いずれも糸切底で、焼成不良。色調はおおむね褐色～明褐色。

土師器　坏（137）糸切底で、体部中央で少し外反する。口径・器高は14.1・2.2cm。

SP778出土遺物（Fig,60）

土師器　皿（138～140）口径・器高・底径の各平均値は9.0・1.3・7.3cm。焼成不良。

土師器　坏（141）糸切底で板目圧痕がつく。口径・器高・底径は14.4・2.3・11.0cm。

瓦器　碗（142）口径・器高・高台径は17.1・6.7・7.0cm。体部中位でわずかに屈曲するが、ほとんど球形に近い。体部外面下半には指頭圧痕がつく。高台は高さ1.2cmほどでやや高い。内面はヘラミガキと思われるが、器面が粗れており不明。部分的に銀灰色。

SP782出土遺物（Fig,60）

土師器　皿（143～145）口径・器高・底径の平均値は9.2・1.2・8.1cm。いずれも糸切底。色調は明褐色。

土師器　坏（146）底径に比して、器高が高い。他の坏とはやや形態的に異なる。口縁部下の沈線は意図的にロクロ回転により施文したもの。胎土は精良で、焼成良好。

SP788出土遺物（Fig,60）

土師器　皿（147～154）口径・器高・底径の平均値は9.1・1.2・7.6cm。いずれも糸切底。150の内面、151の外面にはススが付着。焼成はあまくややもろい。褐～明褐色。

土師器　坏（155・156）推定口径・器高・底径は15・2.8・11.6cm。155は口径が16cm程になる可能性がある。いずれも糸切底で、焼成はあまくもろい。褐色。

SP 860出土遺物

(Fig,60)

土師器　皿（157～160）口径・器高・底径の平均値は8.7・1.1・7.4cm。いずれも糸切底である。

SP 890出土遺物

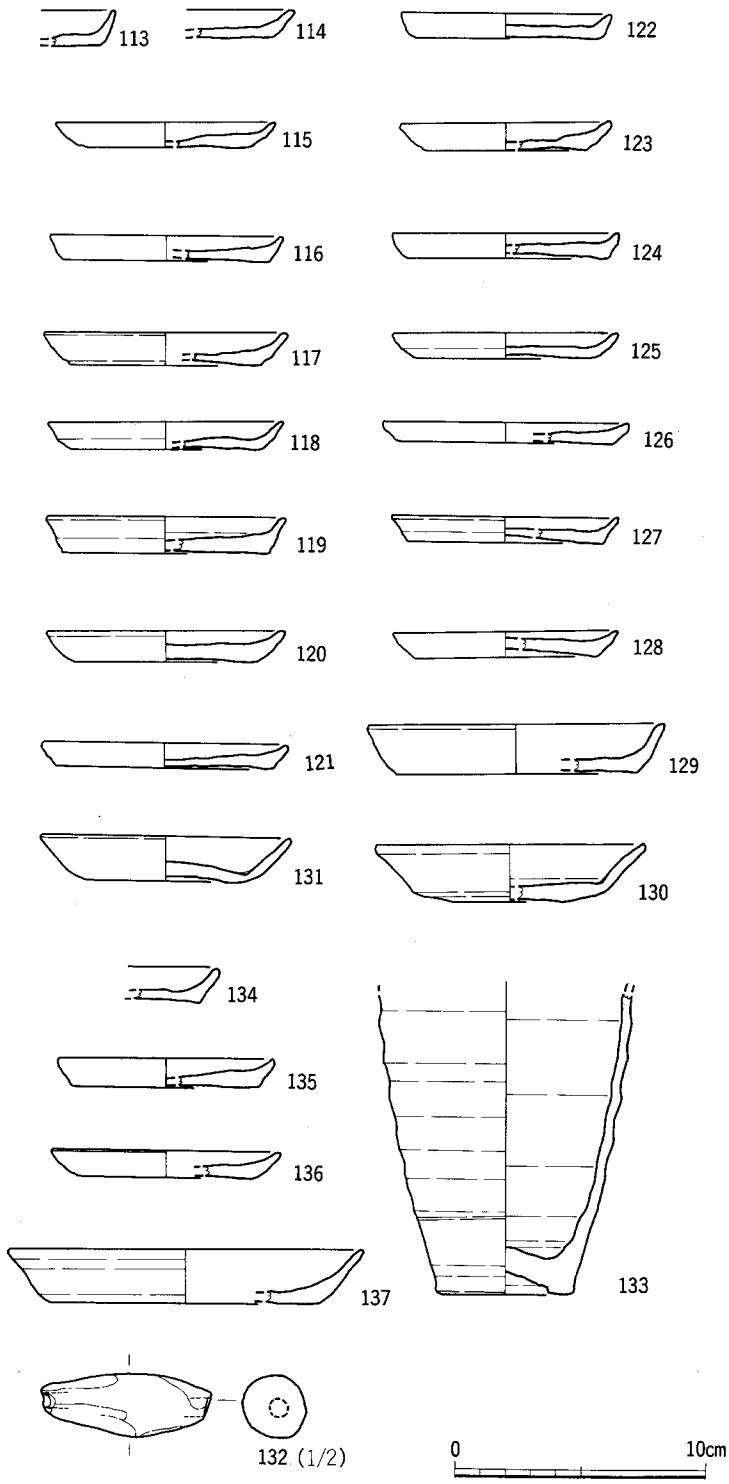
(Fig,60)

土師器　皿（161・162）口径・器高・底径は不明。器形からみて、8.6～8cmほどの口径のものと思われる。焼成は良くなく、もろい。糸切底か。

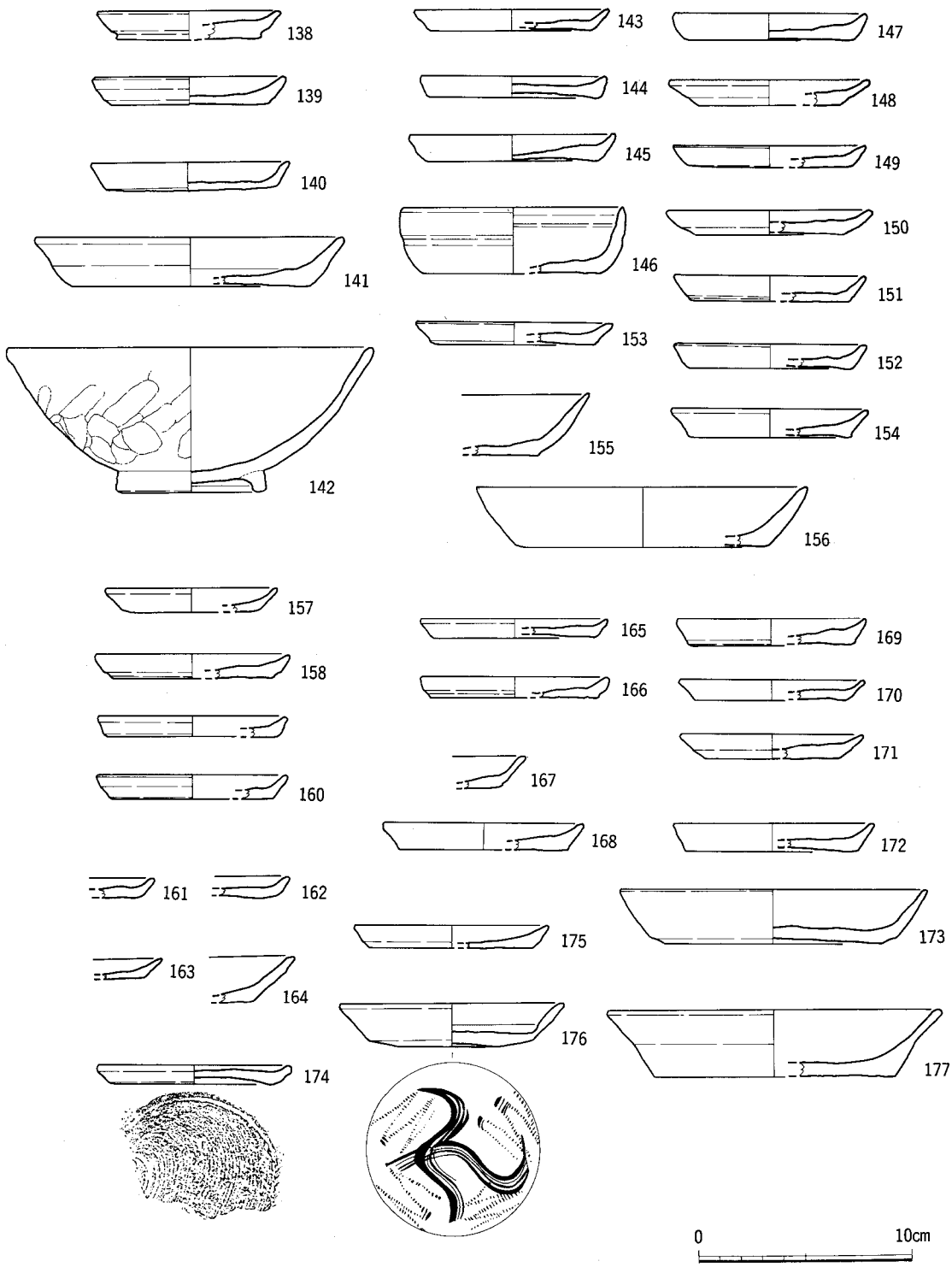
SP 926出土遺物

(Fig,60)

土師器　皿（163）



Fig,59　第Ⅱ区柱穴出土遺物実測図（1/3・1/2）その7



Fig,60　第Ⅱ区柱穴出土遺物実測図（1/3）その８

口径・器高は器形からみて9.5・0.9cmほど。焼成良好。色調は明褐色。

土師器　坏（164）

口径・器高は器形からみて14.3・2.2cmほど。焼成良好。色調明褐色。

SP 978出土遺物（Fig,60）

土師器　皿（165・166）口径・器高・底径の平均値は8.8・1.0・7.8cm。いずれも糸切底。

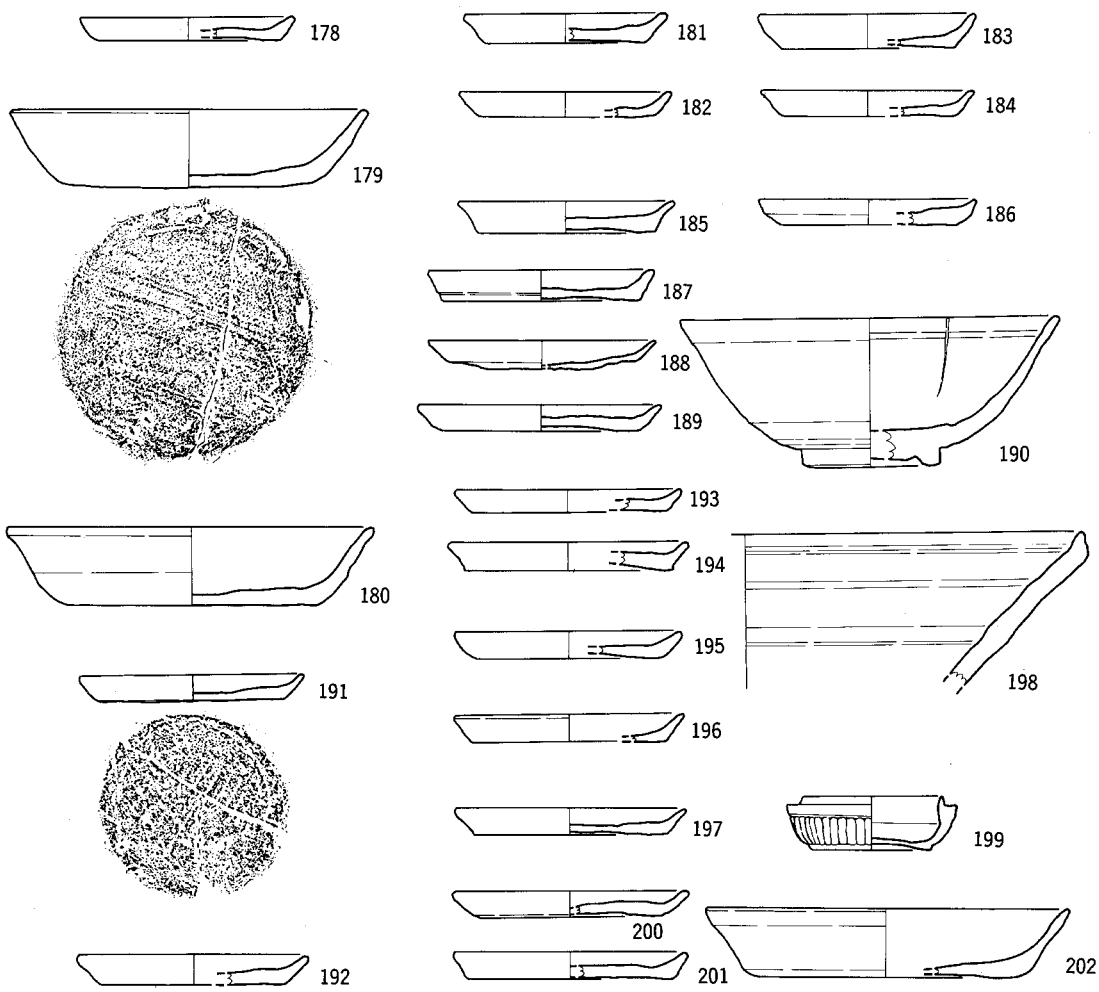
SP 979出土遺物（Fig,60）

土師器　皿（167・168）いずれも糸切底。焼成良好、良く焼き締まっている。明褐白色。

SP 980出土遺物（Fig,60）

土師器　皿（169～171）いずれも糸切底。口径・器高・底径の平均値は8.6・1.1・7.4cm。

SP 1009出土遺物（Fig,60）



Fig,61　第Ⅱ区柱穴出土遺物実測図（1/3）その9

土師器　皿（172）焼成良好。やや締まり悪い。内外面とも回転ナデ。糸切底。

土師器　坏（173）焼成はやや悪くもろい。内底はヨコナデ。外底板目圧痕の有無は不明。

SP 1155出土遺物（Fig,60）

土師器　皿（174・175）口径・器高・底径の平均値は9.0・0.9・7.6cm。焼成・胎土良好。

SP 1170出土遺物（Fig,60）

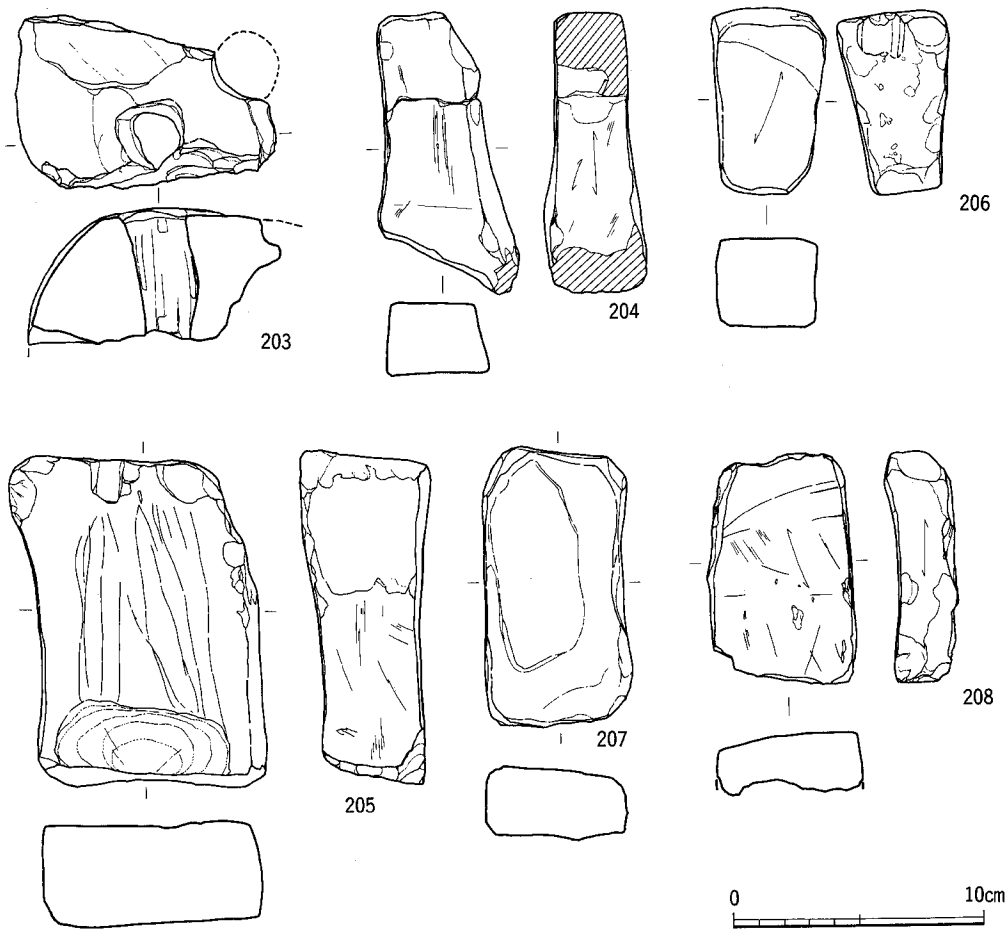
土師器　坏（177）口径は底部からの復元のためやや不正確。焼成不良。体部中位で屈曲。

青磁皿（176）同安窯系である。口径・器高・底径は10.4・2.0・4.2cm。透明な緑灰色。

SP 1260出土遺物（Fig,61）

土師器　皿（178）糸切底である。作りはやや厚手。焼成は良くなくもろい。明褐色。

土師器　坏（179・180）口径・器高・底径の平均値は14.4・3.1・9.9cm。いずれも糸切底で、板目圧痕がつくが、180は不明確。焼成は不良でもろい。



Fig,62　第Ⅱ区柱穴および溝状遺構出土遺物実測図（SD01・18・19）（1/3）

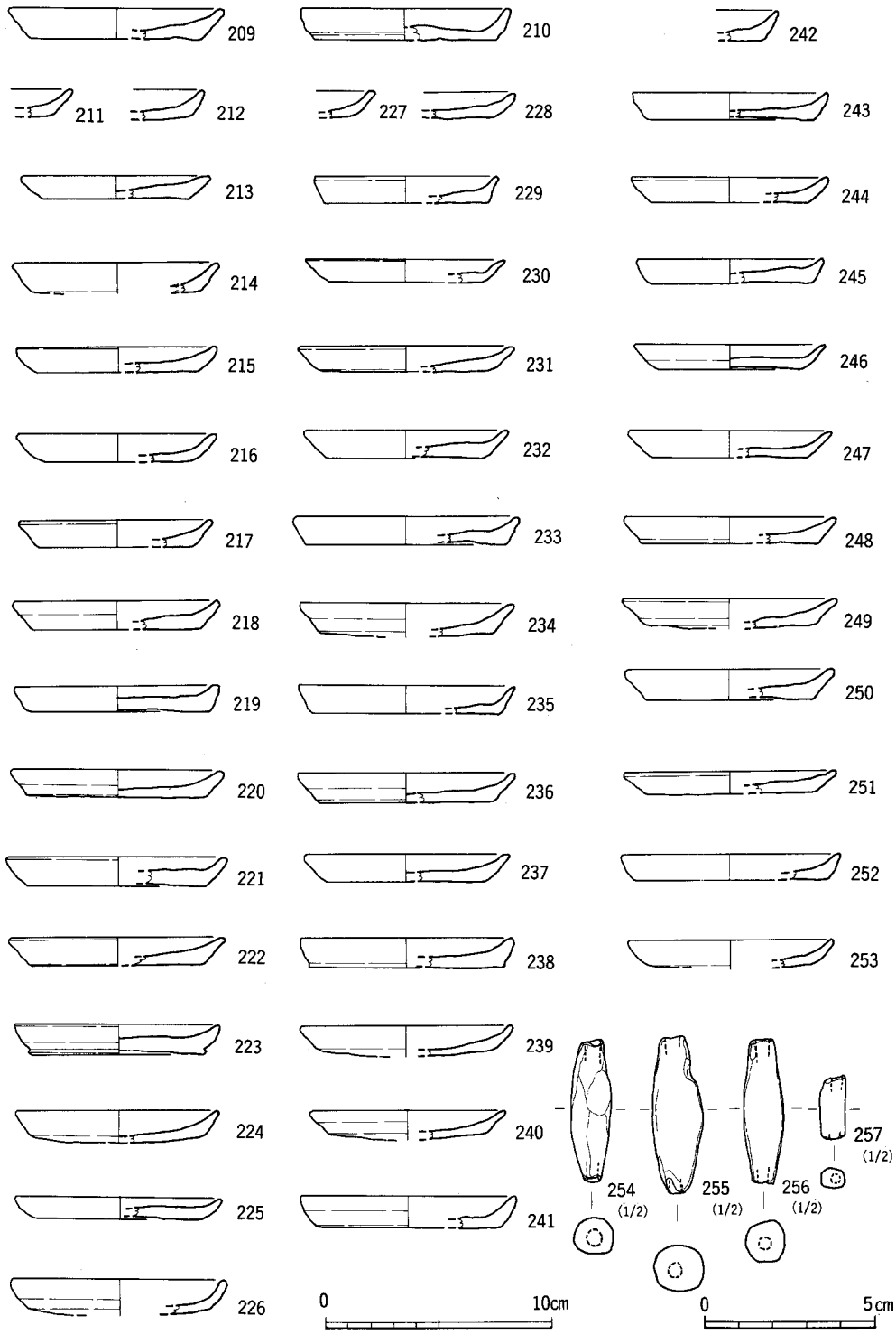


Fig.63　第Ⅱ区溝状遺構出土遺物実測図（SD04・11）（1/3・1/2）その1

SP 1297出土遺物（Fig,61）

土師器　皿（181～184）口径・器高・底径の平均値は8.5・1.2・6.8cm。いずれも糸切底。焼成やや不良。褐色～明褐色。

SP 1299出土遺物（Fig,61）

土師器　皿（185・186）口径・器高・底径の平均値は8.6・1.2・7.0cm。いずれも糸切底。

SP 1305出土遺物（Fig,61）

土師器　皿（187～189）口径・器高・底径の平均値は9.3・1.2・7.8cm。いずれも糸切底で、188は板目圧痕がつく。焼成は良好。よく締まっている。褐白色～明褐色。

青磁　碗（190）龍泉窯系碗Ⅰ類。口径・器高・高台径は15.3・5.9・5.5cm。内面に白堆線を施文。口縁下内面および見込み内底にヘラ沈線。高台畳付に5～6ケ所の砂目跡。薄い褐緑色。

SP 1616出土遺物（Fig,61）

土師器　皿（191～194）口径・器高・底径の平均値は9.1・1.0・7.6cm。焼成はやや良好。

SP 1643出土遺物（Fig,61）

土師器　皿（195～197）口径・器高・底径の平均値は9.0・1.1・7.6cm。焼成は良好。色調は褐色。なお図示しなかったが、口径13.5～8cmの土師器坏（糸切底）も共伴している。

須恵質土器　捏鉢（198）東播磨系捏鉢である。口径は約27cm。器高等は不明。胎土精良、白砂が混入。焼成堅緻。わずかに青みがかった明灰色。内外面にはロクロ水挽き痕が残る。

青白磁　合子身（199）口径・器高・体部最大径・底径は5.4・2.2・6.8・4.8cm。型起しによる成形。蓋受け部、外底以外は薄く青緑がかった透明釉が施釉されている。焼成堅緻。

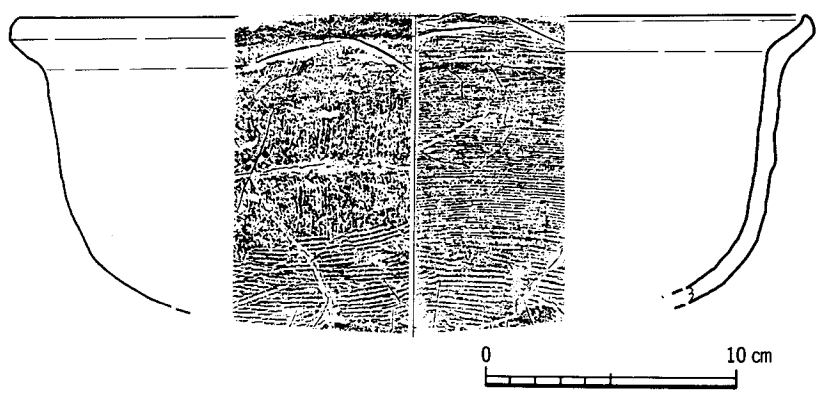
SP 1645出土遺物（Fig,61）

土師器　皿（200・201）口径・器高・底径の平均値は9.2・1.0・7.6cm。いずれも内底にヨコナデ、外底には糸切り後の板目圧痕がある。焼成良。暗褐色～褐色。

土師器　坏（202）内外面とも回転ナデ仕上げ。口縁部はわずかに肥厚。焼成良。褐色。

以下は各柱穴から出土した石製品である。

203は滑石製錘である。SP 636から出土。平面形は一辺が15cmほどの隅丸の矩形で、断面形は台形になる



Fig,64　第Ⅱ区溝状遺構出土遺物実測図（SD11）（1/3）その2

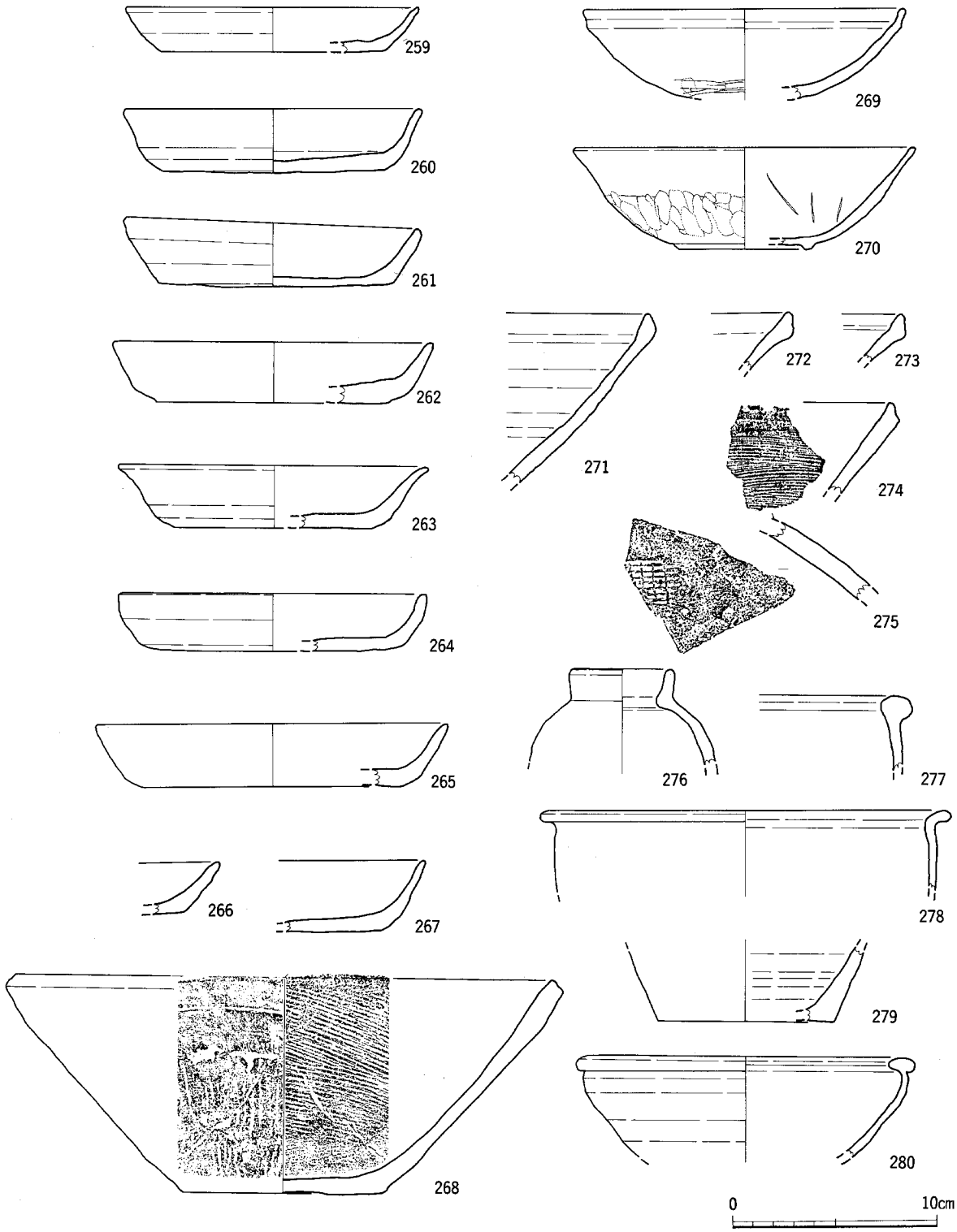


Fig.65　第Ⅱ区溝状遺構出土遺物実測図（SD11）（1/3）その3

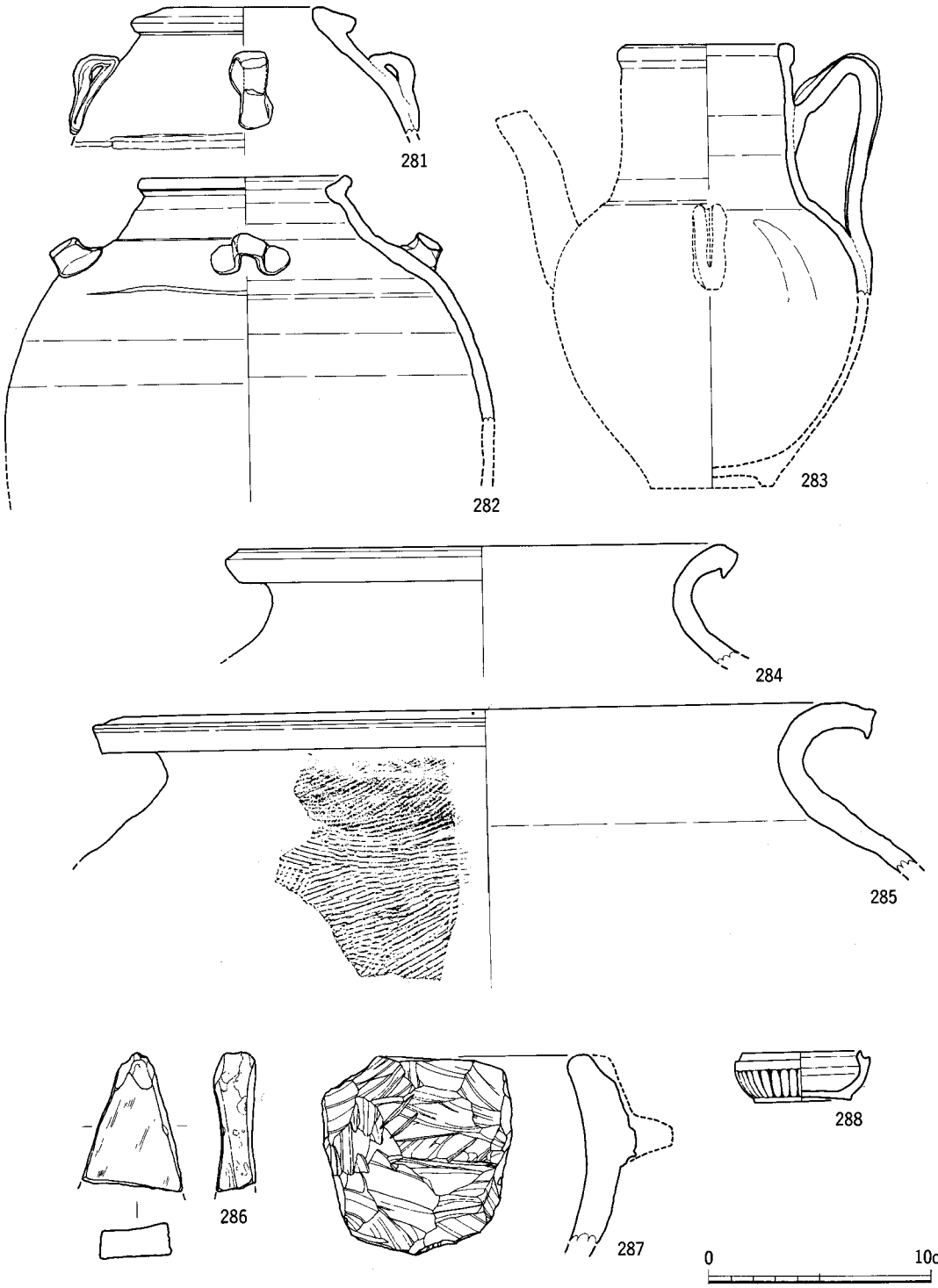


Fig.66　第Ⅱ区溝状遺構出土遺物実測図（SD11）（1/3）その4

と思われる。素材は良質の灰白色の滑石を用いている。204・205はキメの細かな砂岩製の砥石（中砥用か）である。長さ・幅・厚さは204が11.3・5.5・4.0cm、205が13.2・10.4・5.3cm。

2）溝状遺構出土の遺物（Fig,62～72）

SD01出土遺物（Fig,62）

砂岩製砥石（206）長さ・幅・厚さは7.4・4.6・4.3cm。キメが細かい砂岩製。中砥用か。

SD04出土遺物（Fig,63）

土師器　皿（209・210）口径・器高・底径の平均値は9.3・1.3・7.7cm。焼成やや良好。

SD11出土遺物（Fig,63～68）

土師器　皿（211～253）口径・器高・底径の平均値は9.0・1.2・7.3cm。回転ヘラ切り離し底（以下ヘラ切底と略す）のものは211・214・224・(225)・226・227・228・(231)・234・239・240・249・(251)で、他は糸切底である。焼成はヘラ切底のものが比較的良好で、他はもろい。おおむね褐色～明褐色である。法量および形態的な特徴から、３つのグループに分類が可能である。１類はヘラ切底で、口径が9.5cm前後のもの。２類は糸切底で口径が9.2cm前後のもの、３類は糸切底で口径が8.6cmほどのものである。数量的には２類がSD11では最も多く、次に３類、１類の順である。おそらくこれはSD11の存続期間の上限と下限を示唆しているものと思われる。

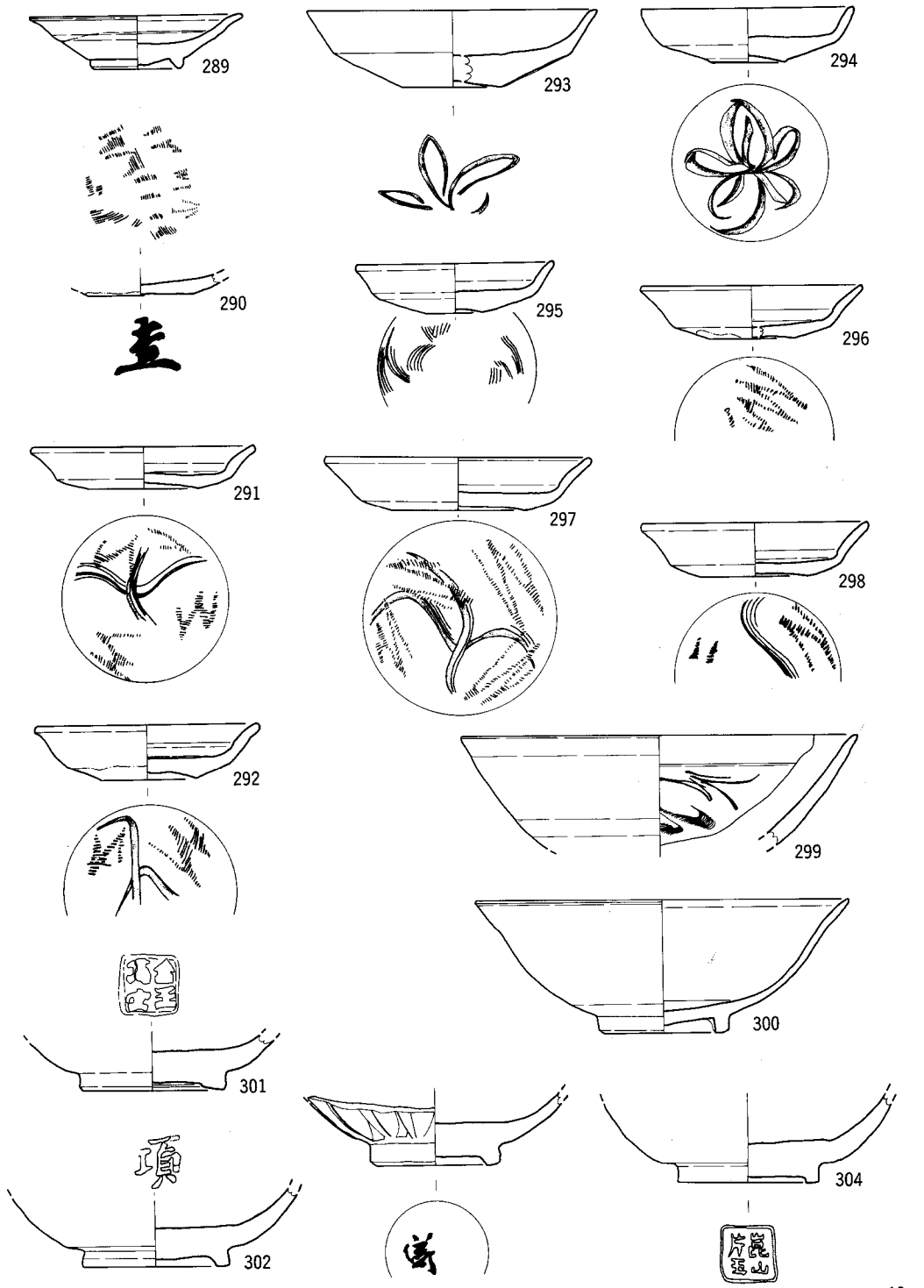
土師器　坏（259～267）口径・器高・底径の平均値は15.1・2.9・11.3cm。263は口縁部が強く外反して開く器形であるが、それ以外はいずれも厚手で、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁を丸く収めている。焼成はいずれもあまり良くなくもろい。色調は褐色～明褐色である。

土師質土器　土鍋（258）口径（外径）・器高・底径は32（32.8）・13.1・26cm。口縁部はやや強く外反し、内面に蓋受け用と思われる段がある。口縁端部はわずかに摘み出されている。内外面ともヨコハケによる調整仕上げであるが、底部と体部のハケ目の目の粗さが違う。

土師質土器　捏鉢（268・274）口径・器高・底径は268が26.1・10.5・9.6cm、274は不明。268の口縁部は肥厚している。内面は目の粗いハケ目で、内底から体部下半部までは使用によって磨耗している。外面は叩き調整後、軽いナデ仕上げ。胎土は砂を多く含む。焼成はやや堅緻。淡い灰褐色～褐色。274は東播磨系の捏鉢に似る。内面が目の粗いハケ目。口縁端部は少し引き出されている。黒灰色で、焼成はややあまく、もろい。

瓦器　碗（269・270）269の口径は15.6cm。浅い器形で、口縁端部は丸く引き出され、内側にわずかに屈曲している。内外面とも丁寧なヘラミガキで、外面下半には指頭圧痕が残る。270は細い高台を貼付した、浅い器形のもので、口径・器高・高台高・高台径は16.6・5.0・0.3・6.4cm。体部下半には指頭圧痕が、また内面にはヘラ当て痕が残る。焼成堅緻。暗灰色。

須恵質土器　捏鉢（271～273）いずれも東播磨系捏鉢。口縁部断面形は三角形状で、わずか



Fig, 67　第Ⅱ区溝状遺構出土遺物実測図（SD11）（1/3）その5

に玉縁状に近い。口径は約27～30cmほどか。胎土精良、白砂が混入。焼成やや堅緻。わずかに青みがかった明灰色。内外面にはロクロ水挽き痕が残る。口縁部は黒灰色。

須恵質土器　甕（284・285）口径は、284が22cm（外径23.2cm）、285が35.8cm。口縁部はかなり強く外反している。口縁端部は頸部側に引き出されており、端部には、浅い凹線が巡っている。285は頸部から肩にかけて平行叩きが、284の頸部は叩き調整の後ナデ消している。焼成は、284はあまくもろい。黒褐色。285は良く焼き締まっている。明灰色。285は東播磨系と思われるが、284は形態的に良く似るものの焼成、技法的にやや異なっている。

陶器　甕（275）常滑窯系の甕と思われる。肩部破片。格子目の印文がみられる。灰色で良く焼き締まっている。

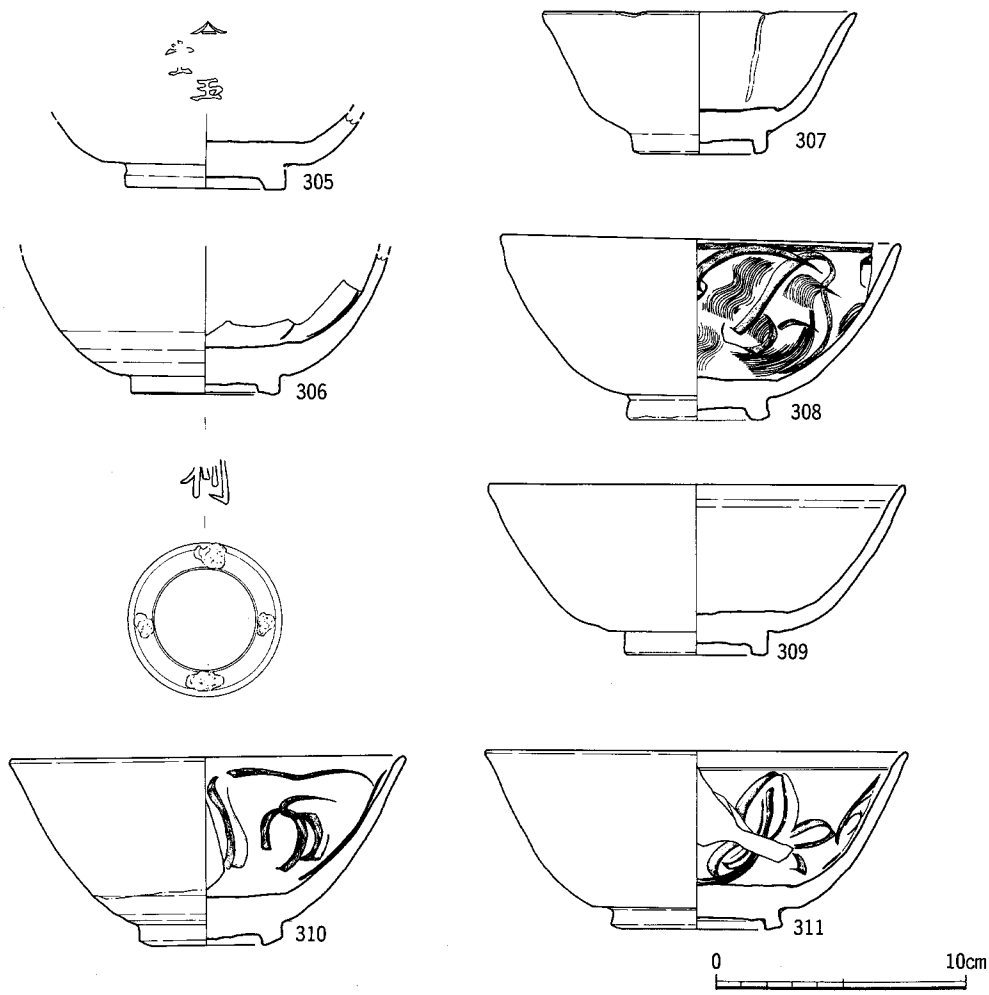


Fig.68　第Ⅱ区溝状遺構出土遺物実測図（SD11）（1/3）その6

陶器　瓶（276・279）276は口径は5.0cm。薄く灰緑釉が内外面にかかっている。焼成堅緻。279は壺もしくは瓶の底部と思われる。左回転のロクロによるケズリ整形で、灰緑釉が非常に薄くかかっている。胎土はややきめ粗いがよく焼き締まっている。

陶器　甕（277・278）277は、玉縁口縁の甕である。口径は21cm前後のもの。278は口径20cm。口縁部が逆L字形に屈曲する。277と同様全面に褐釉が薄くかかっている。焼成堅緻。

陶器　鉢（280）口径・器高・底径は16.6・(6)・(7.2)cm。褐釉が薄くかかる。口縁部は玉縁状に折り返している。口縁内側には目跡がみられる。

陶器　四耳壺（281・282）いずれも褐釉が施釉。281は無頸で、口径は内径6.1cm。282はやや肩が張った、太めの作りになっている。胎土は精良で、焼成堅緻。

陶器　耳付き水注（283）博多遺跡群出土資料を参考に復元したが、底部はもう少し上げ底になるか。口径は8cm。器高は20cmほどである。全面に褐釉を薄く施釉。焼成・堅緻。

青白磁　合子身（288）口径・器高・体部最大径・底径は5.4・2.2・6.2・4.5cm。薄く青みのある透明釉が、底部、蓋受け部以外に施釉。体部は下半部は露胎。黒褐色の顔料が内面に付着。

白磁　碗（299・300）299は口径17.9cm。内面には櫛描とヘラ片切彫により草花文を施文。300の口径・器高・高台径は17.0・6.0・6.0cm。口禿の白磁。釉色はいずれも明灰白色。

白磁　皿（289・290）289は高台付きで、口径・器高・高台径・高台高は9.6・2.4・4.7・0.45cm。ヘラケズリによる整形。口縁下内面には沈線を巡らしている。体部外面下半は露胎である。釉は明灰白色。290は内底に櫛描文を施文している。外底には花押が墨書されている。

青磁　皿（291～298）293～295は龍泉窯系、その他は同安窯系である。293の口径・器高・底径は13.2・3.5・4.6cm。内底にヘラ片切彫による草花文を施文。294の口径・器高・底径は9.8・2.5・3.2cm。内底にヘラ片切彫による蓮花文。底部には目跡。295の口径・器高・底径は9.0・2.3・2.6cm。内底には櫛描文。いずれも青緑色の不透明釉。同安窯系皿は、297が口径・器高・底径が11.3・2.3・3.1cmで少し大きい他は、口径は10.3cm前後である。いずれも内底に草花文と櫛描文を施文している。青みがかった透明な緑灰色。焼成堅緻。

青磁　碗（301～311）いずれも龍泉窯系青磁碗である。303（碗II類）、307（碗III類）以外はI類に含まれる。306・302・3・4～306・309は内外面とも無文で、内部に「金玉満堂」・「項」・「利」などの印文があるものがある。釉の発色はあまり良くなく、くすんだ緑灰色。308は内面に劃花文を施文。310・311はヘラ片切彫による劃花文、蓮花折枝文施文。

管状土錘（254～257）ＳＤ11からは９個出土した。図示したのは中型のもの（254～256）、小型のものである。長さ・径・重さは、255が5.4cm・1.5cm・12.8ｇ。外面は丁寧なナデ仕上げ。

砂岩製砥石（286）現存長6.3・4.6・1.9cm。３面が砥面である。中砥用か。

滑石製石鍋転用品（287）現存長・幅・厚さは9.0・8.6・3.0cm。側辺は二次的加工を施し全

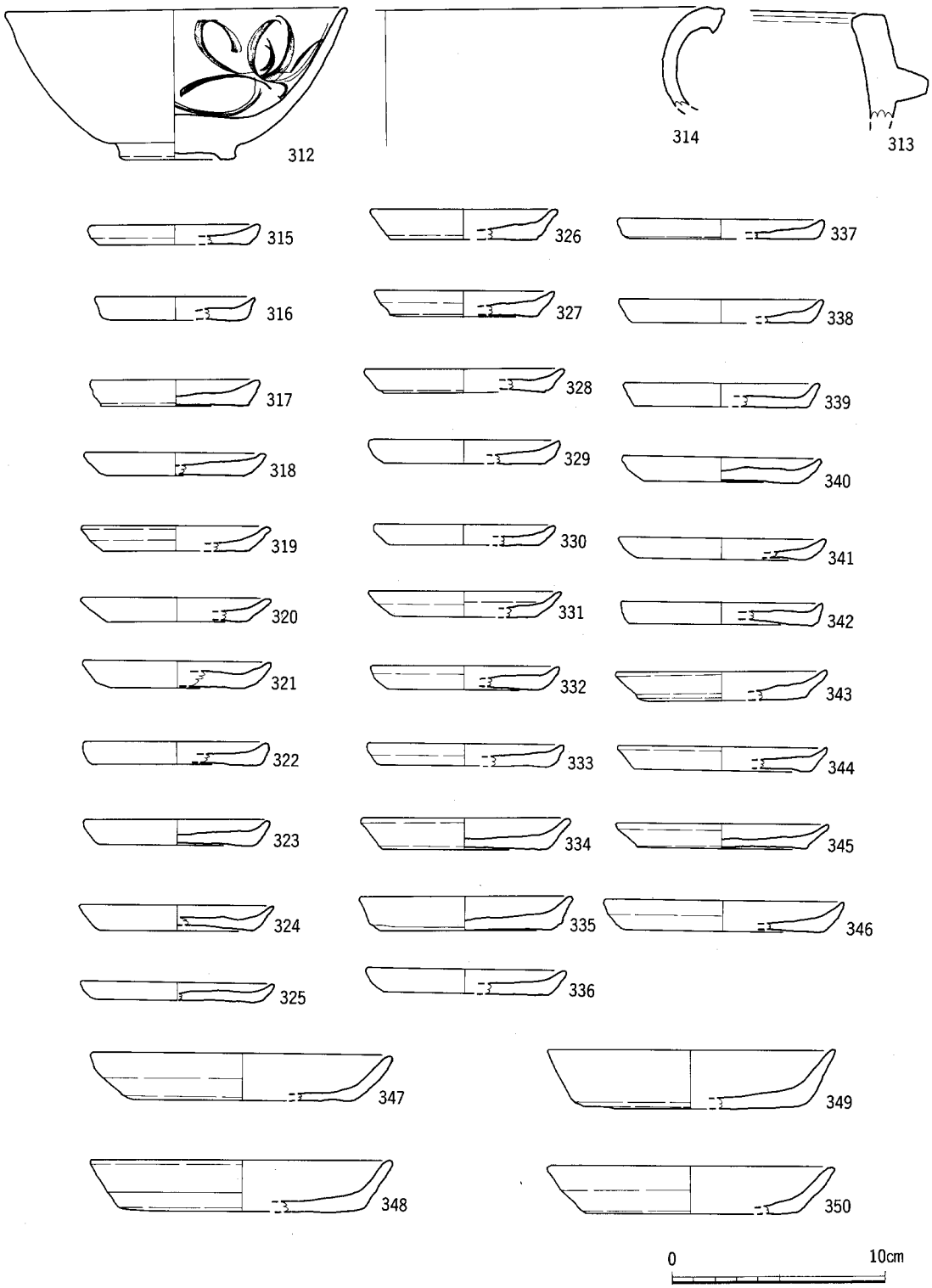


Fig.69　第Ⅱ区溝状遺構出土遺物実測図（SD12・13・16・22）（1/3）その7

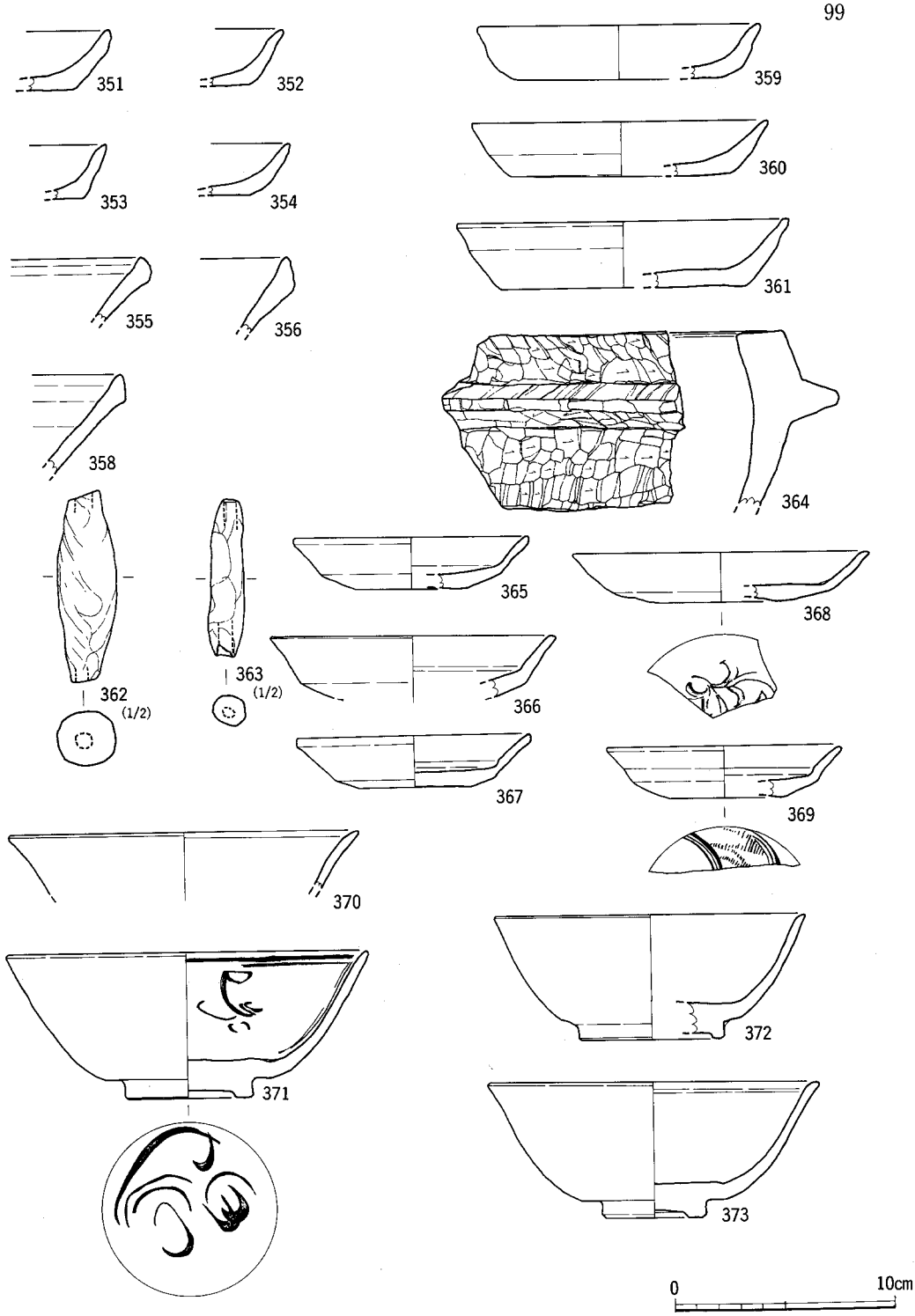


Fig.70　第Ⅱ区溝状遺構出土遺物実測図（SD22）（1/3）その8（357は欠番）

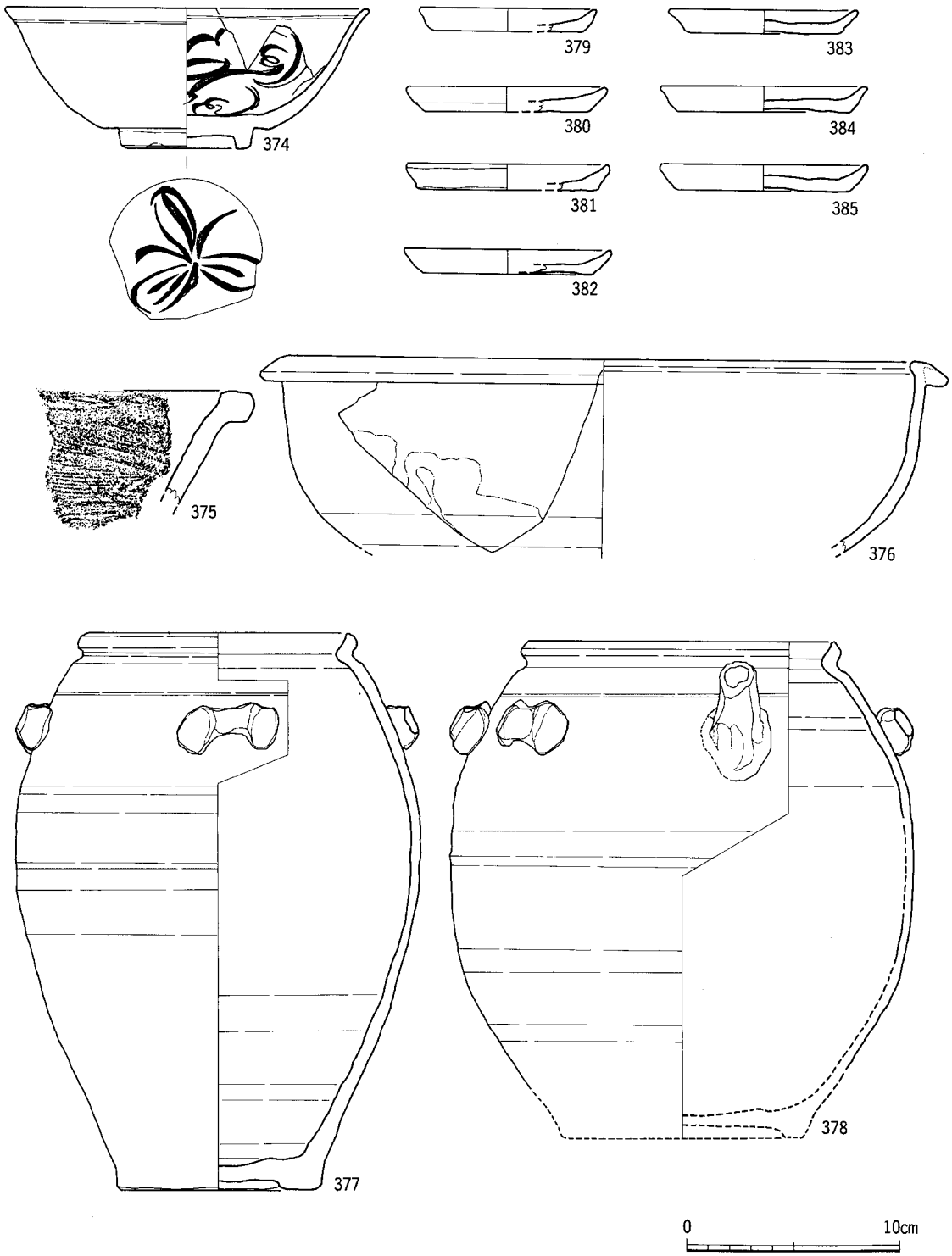


Fig.71　第Ⅱ区溝状遺構出土遺物実測図（SD22・25・33）(1/3) その9

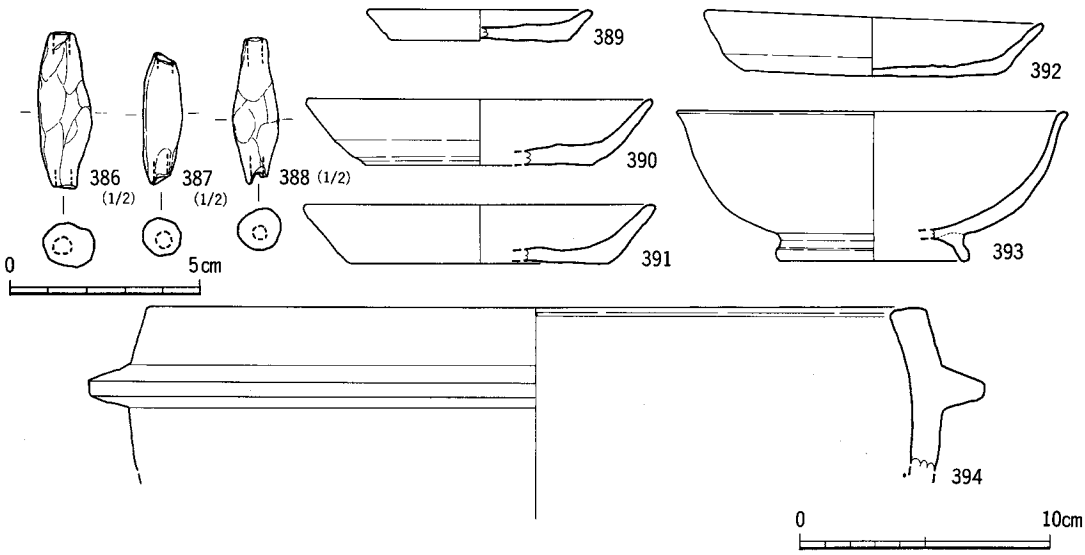


Fig.72　第Ⅱ区溝状遺構出土遺物実測図（SD47・52・53・55・58・59）（1/3・1/4）その10

体に丸みのある隅丸矩形に仕上げている。用途は不明。

SD12出土遺物（Fig,69）

青磁　碗（312）龍泉窯系碗Ⅰ類。口径・器高・高台径・高台高は16.0・7.0・5.4・0.7cm。内面には蓮花折枝文をヘラ片切彫により施文。内底は無文。薄く褐色がかった透明な緑灰色。

SD13出土遺物（Fig,69）

滑石製石鍋（313）口縁部片。口径は25cmほど。表面の仕上げは粗い。内面は磨研。灰色。

SD16出土遺物（Fig,69）

須恵質土器　甕（314）284・285と形態的に良く似ている。かなり強く口縁部は外反する。頸部外面は叩き成形の後、軽くヨコナデ仕上げ。焼成は軟質で、もろい、灰褐色を呈する。

SD18出土遺物（Fig,62）

砂岩製砥石（207）長さ・幅・厚さは11.2・6.0・2.8cm。側辺と正面に一部研面として用いた痕跡が残る。中砥用か。

SD22出土遺物（Fig,69～71）

土師器　皿（315～345）口径・器高・底径の平均値は9.0・1.1・7.4cm。口径の最小のものは316で7.4cm、最大のものは346で11.2cmある。SD11と比べ全体的に法量が小さくなっている。このSD22では9.2cm前後のものと8.7cmほどのものが量的に多い。ヘラ切りと明確にわかるものは343だけである。焼成はいずれもあまり良くなくもろい。褐色～明褐色を呈す。

土師器　坏（347～354・359～361）口径・器高・底径の平均値は13.7・2.5・10.5cm。最小は359で口径12.8cm。最大は361で15cm。図示したもので半径が不明なものも器形的にはほとんど同じである。いずれも焼成は良くなくもろい。明褐色～褐色。

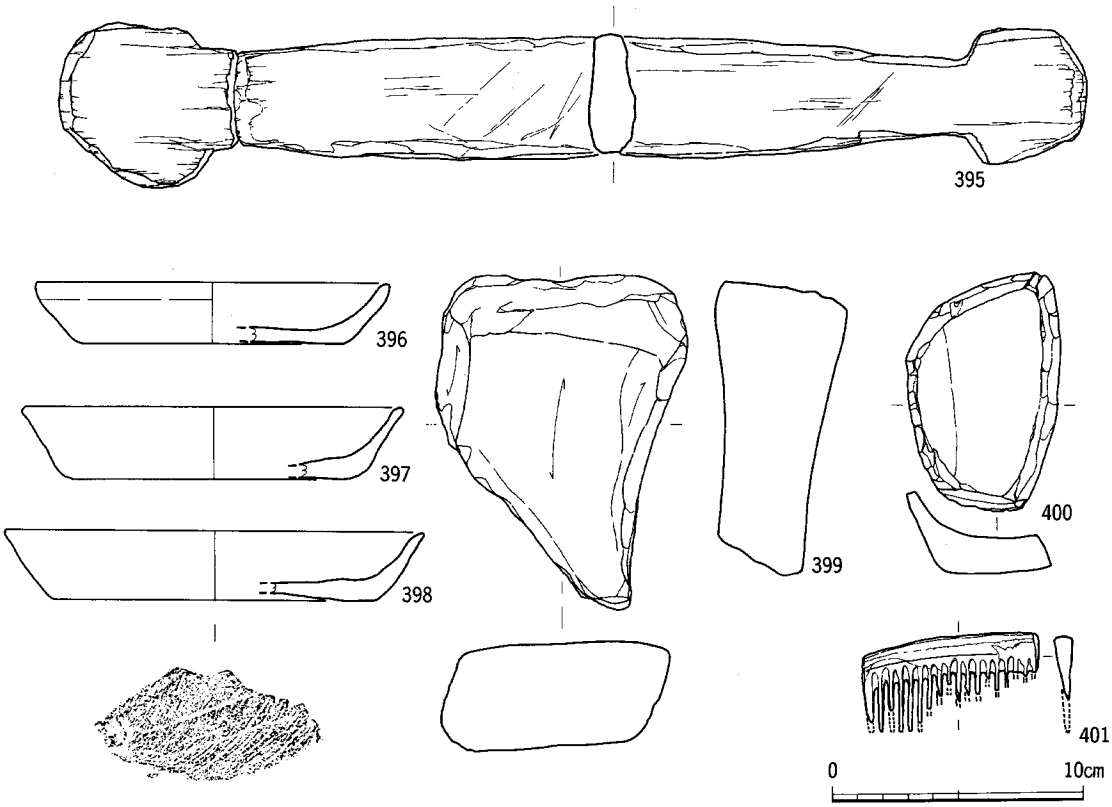


Fig. 73　第Ⅱ区井戸出土遺物実測図（SE 03・07・09）（1/3）その1

須恵質土器　捏鉢（355～358）口径は推定で25cm前後。玉縁状に口縁部外面が丸みをもつものと、断面が三角形になるものがある。焼成は比較的良好。灰白色～灰色。口縁は黒灰色。

土師質土器　土鍋（375）口径は不明。内面はハケ目、外面はナデ仕上げ。暗褐色。

管状土錘（362・363）SD22からは19点出土している。長さ・径・重さは362が5.7・1.8cm・18.10g。363が4.7・1.0・0.4cm・4.85g。362の両端は平坦に切り落とされている。

滑石製石鍋（364）口径が30cmほどの低い器高のものと思われる。口縁部は内傾している。内外面とも丁寧なケズリによって整形されている。素材は灰色の良質な滑石。

白磁　皿（368）口径・器高・底径は13.4・(2.3)・6.3cm。内底はヘラによる草花文を施文。不透明な明灰白色の釉が全面にかかる。外底は施釉後掻き取っている。

白磁　碗（370）口禿の白磁である。口径は15.6cm。胎土は精良。焼成堅緻。灰白色。

青磁　皿（365～367・369）366は龍泉窯系で、他は同安窯系。口径・器高・底径は366以外はいずれも10.6・2.3・5.1cmでほとんど同じ大きさである。焼成堅緻。薄く青灰色がかった透明

な緑色。365・367は無文。366が13・（2.4）・5.2cm。

青磁　碗（371～374）いずれも龍泉窯系である。372・373はやや小型。口径・器高・高台径は371が16.6・6.5・5.7cm、372が14・5.6・6.6cm、373が15.0・7.2・4.8cm、374が17.0・6.6・6.0cm。371はヘラ片切彫による劃花文、374は同様に蓮花折枝文。373は口縁下に沈線。

陶器　鉢（376）口径29.0cm。内面から体部外面の上半分に薄く褐釉を施釉。口縁部上面は露胎。体部下半は回転ヘラ削り整形。器高は10cm。胎土は赤褐色。焼成堅緻。

陶器　壺（377・378）377は四耳壺、378は耳がつく注口付壺。口径・器高・胴部最大径・底径は377が13.0・22.75・19.0・9.5～10.1cm。378は15.0・23.4・21.0・11.0cm。口縁部は「く」の字に屈曲。体部下半はヘラケズリ。内面は水挽き痕が残る。いずれも褐釉が薄くかかる。

SD25出土遺物（Fig,71）

土師器　皿（379～382）口径・器高・底径の平均値は9.1・1.2・7.8cm。いずれも糸切底。器形はほとんど同じである。胎土精良。焼成はあまり良くなく、もろい。褐色～明褐色。

SD33出土遺物（Fig,62・71・72）

土師器　皿（383～385）口径・器高・底径の平均値は9.4・1.2・7.8cm。385はヘラ切底の可能性があるが、他は糸切底。胎土精良。焼成はやや締まりなくもろい。暗褐色～明褐色。

花崗岩製砥石（208）長さ・幅・厚さは9.1・5.8・2.8cm。研面は正面と、両側辺で、裏面および他の面は加工痕が残っている。キメは細かく中砥用か。

管状土錘（387）長さ・径・重さは3.4・1.0cm・3.15g。やや小型のものである。焼成良好。

SD47出土遺物（Fig,72）

土師器　皿（389）口径・器高・底径は9.0・1.2・7.0cm。糸切底。焼成不良でもろい。

SD52出土遺物（Fig,72）

土師器　坏（391）口径・器高・底径は9.0・1.2・7.0cm。糸切底。内底はヨコナデ。

滑石製石鍋（394）口径は31.4cm、鍔外径は31.3cm。器表面はヘラケズリ整形後磨研。素材は良質な灰色の滑石を用いている。

SD53出土遺物（Fig,72）

土師器　坏（390・392）口径・器高・底径の平均値は13.7・2.5・9.6cm。いずれも糸切底。392の内底にはヨコナデ、外底には板目圧痕が残る。焼成は良くなくもろい。色調は褐色。

SD59出土遺物（Fig,72）

黒色土器　碗（393）口径・器高・高台径・高台高は16.1・5.9・7.8・1.0cm。内外面はヘラミガキ仕上げ。黒色である。体部外面下半は、手持ちヘラケズリ。高台は「ハ」の字形に開く。

3）井戸出土の遺物（Fig,73～77）

SE01出土遺物（Fig,73）

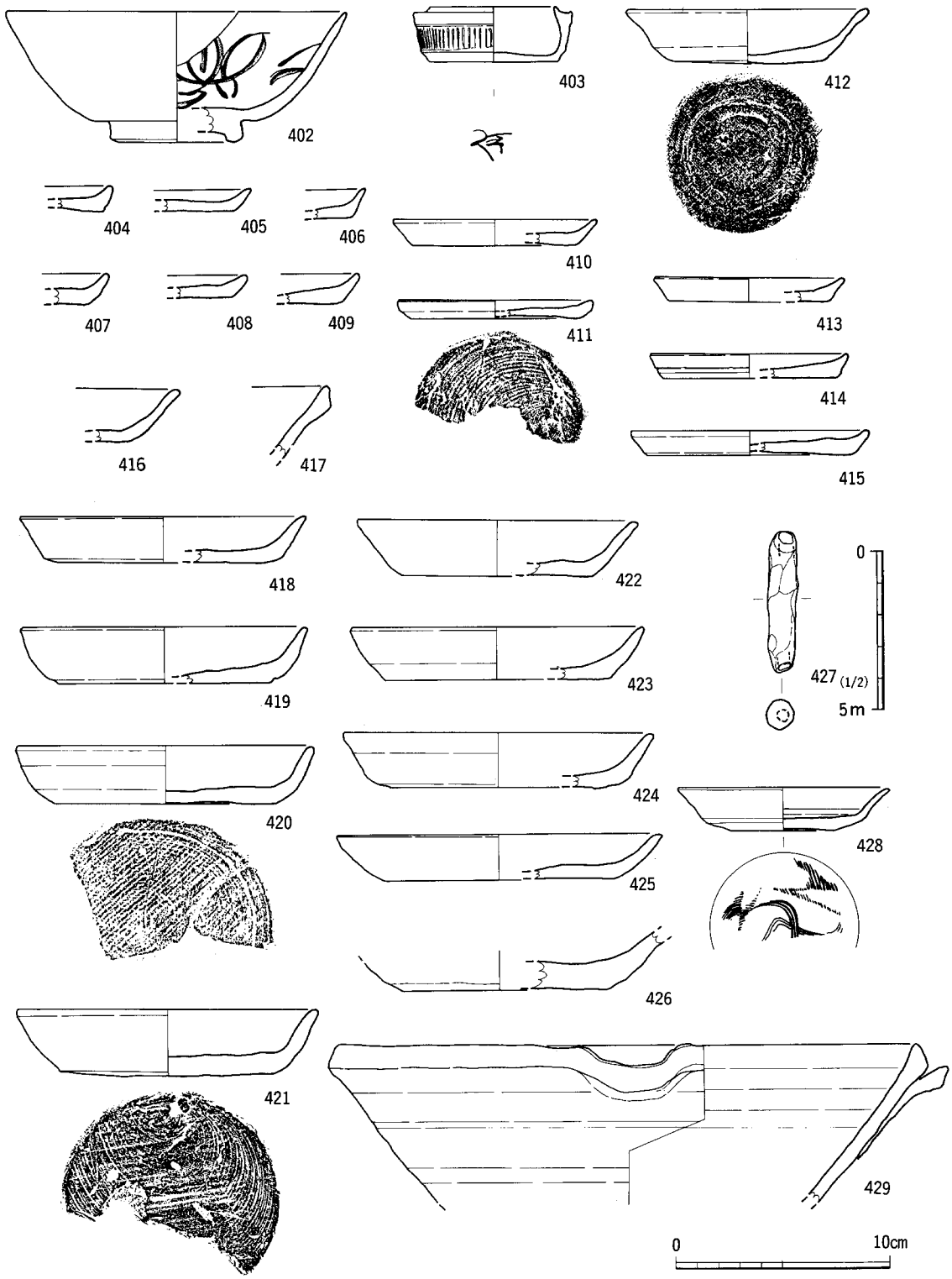


Fig.74　第Ⅱ区井戸出土遺物実測図（SE05・06・09）(1/3) その2

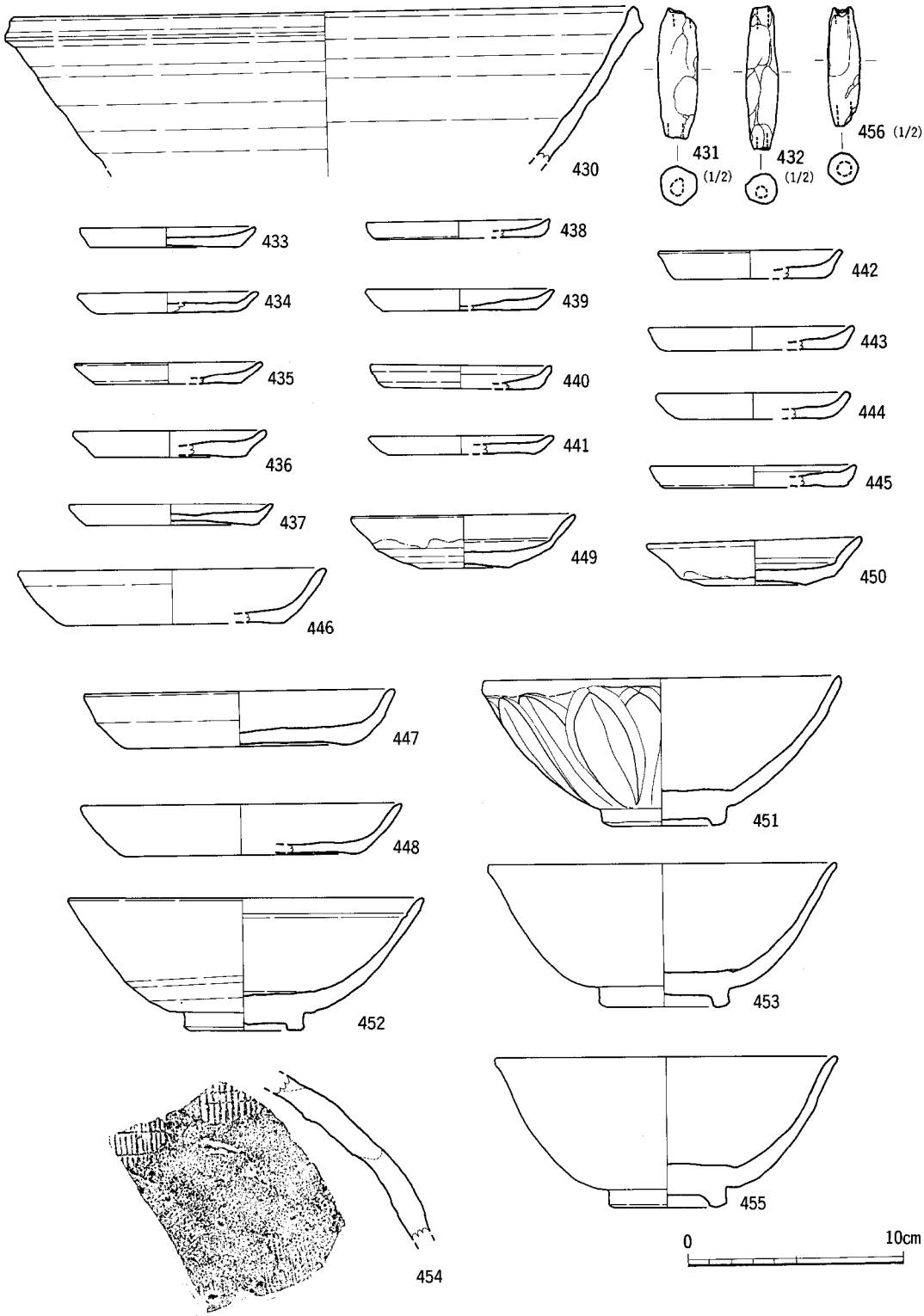


Fig.75　第Ⅱ区井戸出土遺物実測図（SE 09・11～13）（1/3）その3

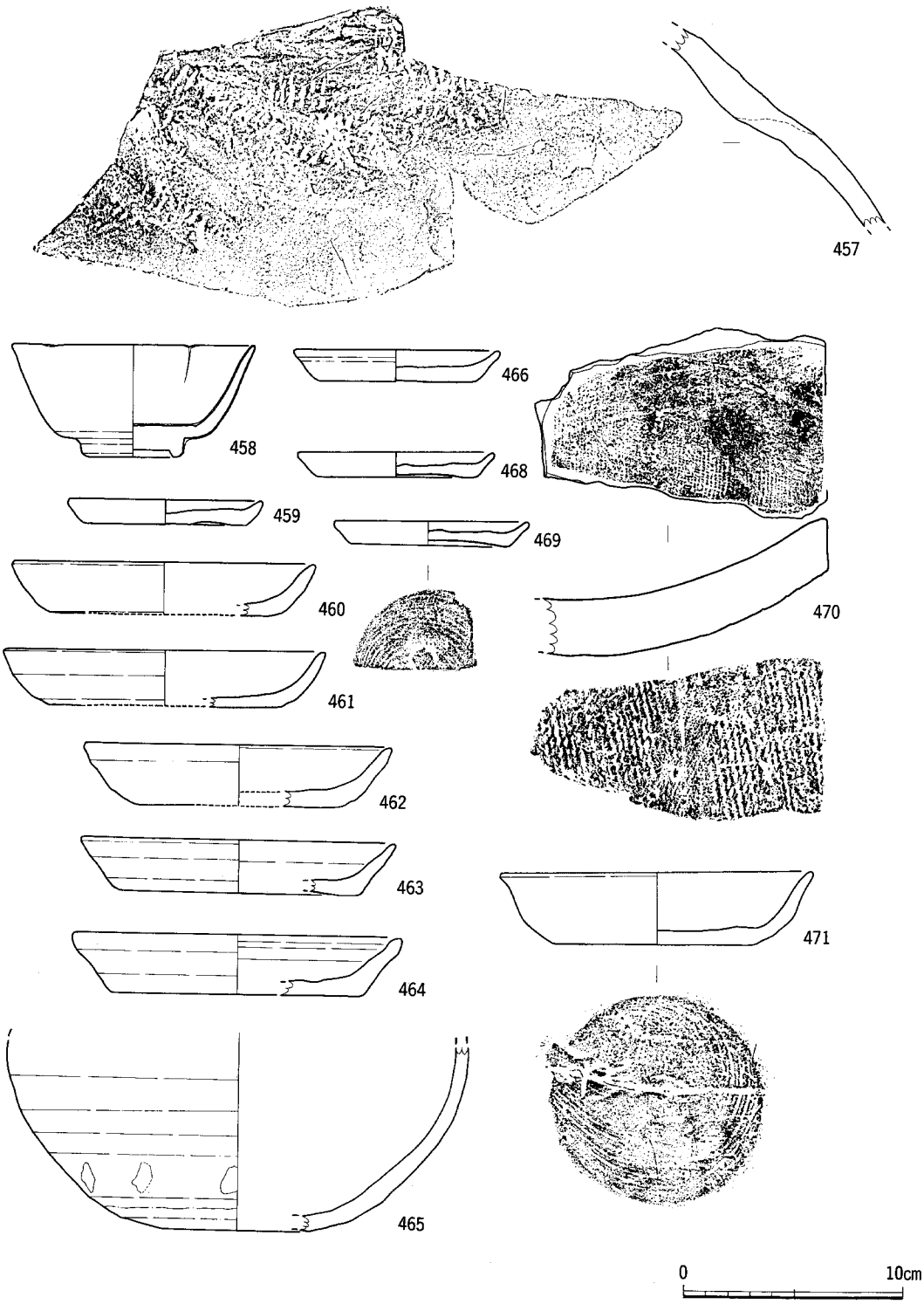


Fig.76　第Ⅱ区井戸出土遺物実測図（SE 12～15・17・19）(1/3) その4（467は欠番）

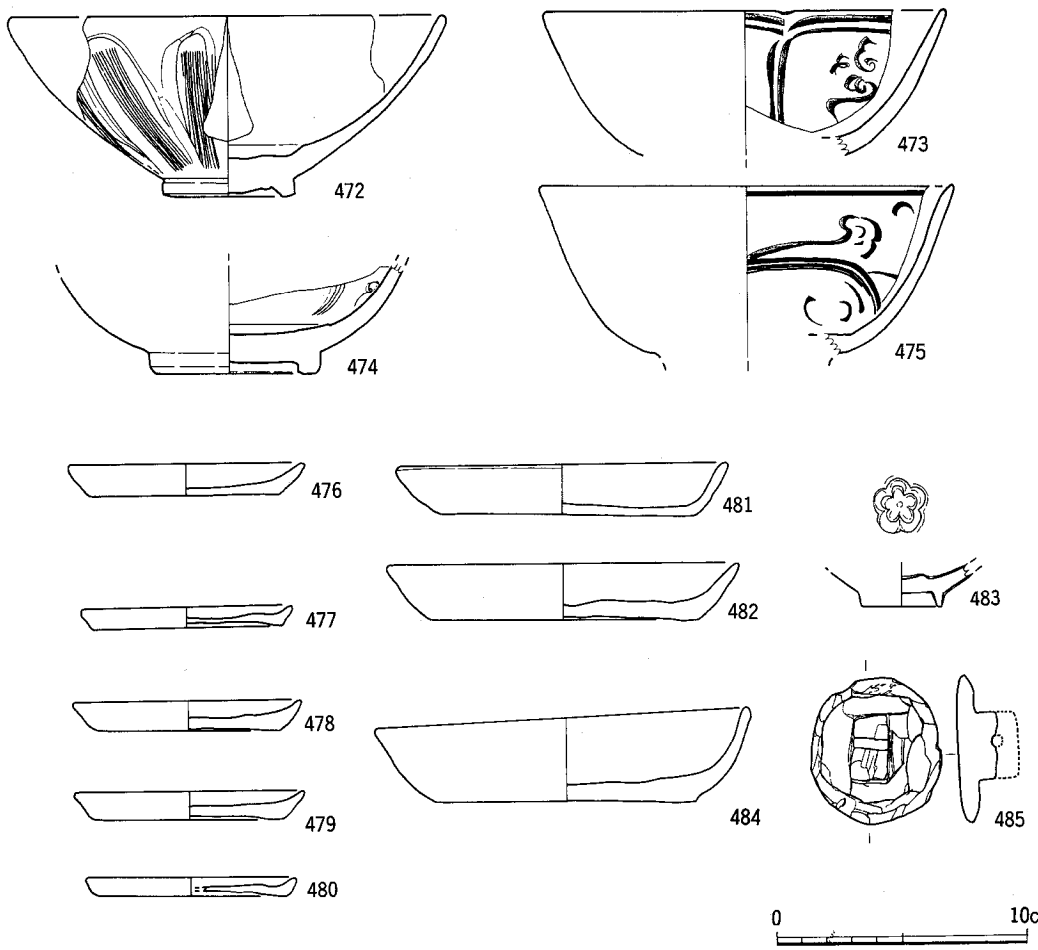
木製品　不明（395）長さ・中央部幅・最大幅・厚さは41・4.8・6.7・2cm。長方形の板目材を素材に用い、端から5cmほどのところを抉って、両端を瘤状に作り出している。紐掛けのための作りだしとも思われるが用途は不明確。曲物等の容器の枠木とする考えもある。（註1）

（註1　奈良国立文化財研究所 木器集成図録近畿古代篇 1985）

SE03出土遺物（Fig,73）

土師器　坏（396～398）口径・器高・底径の平均値は15.2・2.7・11.3cm。いずれも糸切底で、厚手である。焼成はあまり良くなくもろい。灰褐色～明褐色。

SE04出土遺物（Fig,73）



Fig,77　第Ⅱ区井戸出土遺物実測図（SE17・21・28・32）（1/3）その5

木製品　横櫛

(401) 長さ・幅・厚さは3.9・7.1・0.7cm。表裏から作り出された櫛歯の間隔は1.5mm前後である。素材は木目の非常に細かな板目材を用いている。樹種は不明。

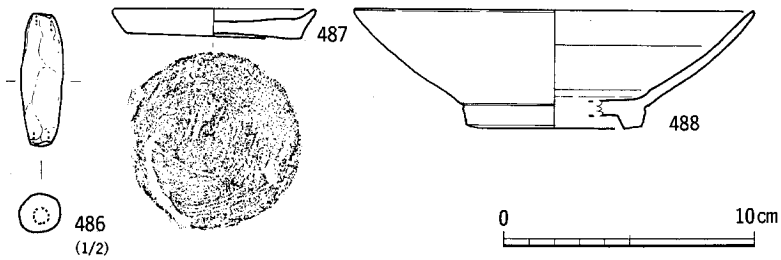


Fig. 78　第Ⅱ区土壙出土遺物実測図（SK02・06）(1/3・1/2)

SE05出土遺物 (Fig,74)

青磁　碗 (402) 口径・器高・高台径は16.1・6.2・6.2cm。内面にはヘラ片切彫による蓮花折枝文を施文。焼成堅緻。薄く褐色がかった透明な緑色。龍泉窯系碗Ⅰ類。

SE07出土遺物 (Fig,73・74)

陶器　合子身 (403) 褐釉が内面および体部外面にかかる。受け部・外底は露胎。外底には花押と思われる墨書がみられる。口径・器高・体部最大径・底径は5.8・2.6・7.4・6.0cm。

砂岩製砥石 (399) 現存長・幅・厚さは13.4・10.1・5.1cm。ほぼ中央で欠損している。左右上下の面を研面としている。研面は使い込まれて滑らかである。中砥用か。

SE09出土遺物 (Fig,73・74)

土師器　皿 (404～411・413～415) 測定可能なものの口径・器高・底径の平均値は9.6・1.1・8.3cm。破片では口径9cm前後のものが多い。すべて糸切底である。焼成は良くなくもろい。褐色～明褐色。

土師器　坏 (412・416・418・425) 412はヘラ切底である。その他はすべて糸切底。412以外の口径・器高・底径の平均値は13.8・2.5・10.3cm。いずれも厚手である。419・420の外底には板目圧痕がつく。422の体部は直線的に立ち上がり、他と比べ、器高もやや高くなっている。焼成良好。他は焼成はいずれもあまり良くなくもろい。灰褐色～明褐色。

須恵質土器　捏鉢 (417・426・429・430) いずれも東播磨系のものである。口径は429が28.4cm、430が29.5cm。口縁部はいずれも黒灰色。429・430の体部はわずかに膨らみがある。底部破片の426は、使用によって内底がなめらかに磨耗している。外底は回転糸切りの後軽くナデ消している。胎土は白砂・黒色砂を含み、良く締まっている。灰白色～(青)灰色。

青磁　皿 (428) 同安窯系である。口径・器高・底径は10・2.1・4.8cm。内底には櫛描文とヘラ片切彫の草花文を施文。淡く青みがかった透明な緑灰色。

滑石製石鍋転用品 (400) 石鍋の底部の破片の周囲を丁寧に再加工している。現存長・幅は9・8.5cm。素材は灰白色の良質な滑石で、石鍋として利用していた際に付着したススが残る。

SE11出土遺物 (Fig,75)

管状土錘（431）長さ・径・重さは3.9・1.2cm・5.0g。やや小型である。焼成良好。

SE 12出土遺物（Fig,75・76・77）

土師器　皿（433～445・467）いずれも糸切底である。口径・器高・底径の平均値は8.8・1.0・7.2cm。全体に作りが小さくなっている。特に体部の引き出しが短い。433は内底は軽くヨコナデ、外底に板目圧痕がある。焼成は良くなくもろい。褐色～明褐色。

土師器　坏（446～448）いずれも糸切底である。口径・器高・底径の平均値は14.4・2.5・10.5cm。447は内底に強い押しナデが、外底には板目圧痕が残る。胎土精良。褐～暗褐色。

陶器　甕（454・457）いずれも常滑窯の大甕の肩部の破片である。胎土・焼成ともに須恵器に良く似るが良く焼き締まっており堅緻である。肩部には格子の叩き印文が施文されている。法量は不明。

青磁　皿（449・450）いずれも同安窯系で内外面とも無文である。口径・器高・底径は449が10.4・2.4・4.1cm、450が9.1・2.1・4.8cm。透明な緑灰～青灰色。

青磁　碗（451～453・455）龍泉窯系である。451は外面に鎬蓮弁文を施文（碗II類）、また452・453は内外面ともに無文である（碗I類）。口径・器高・高台径は451が16.8・7.0・6.1cm、452が16.4・6.0・5.6cm、453が16.1・6.5・6.1cm。455が16.0・6.2・5.6cm。焼成は堅緻。青緑～緑灰色。

SE 13出土遺物（Fig,75・76）

土師器　皿（459）糸切底である。口径・器高・底径は8.8・1.1・8.4cm。焼成良好。

土師器　坏（461～464）すべて糸切底である。板目圧痕を残すもの（461）がある。口径・器高・底径の平均値は14.3・2.5・10.6cm。焼成はあまり良くない。器形はほとんど同じで、全体に厚い作りであるが、463・464は体部がやや直線的な形態である。褐色～明褐色。

青磁　碗（458）龍泉窯系の小碗である（碗I類）。口縁部には5ないし6弁をあしらって、刻みを入れ、内面には白堆線を入れる。口径・器高・高台径は11.0・5.1・4.6cm。深緑灰色。

陶器　鉢（465）褐釉の鉢底部である。底部はわずかに上げ底気味になる。胴部径は20.6cm。体部下半～底部はヘラケズリによる整形。底部近くには目跡がつく。

管状土錘（456）長さ・径・重さは3.7・1.0cm・3.3g。焼成良好。明褐色。丁寧なナデ仕上。

SE 14出土遺物（Fig,76）

土師器　皿（466）切り離し痕跡は不明。ヘラ切り底か。作りは厚手である。口径・器高・底径は9.4・1.3・7.2cm。焼成やや不良。褐色。

SE 15出土遺物（Fig,76・77）

土師器　坏（471）糸切底である。板目圧痕が残る。口径・器高・底径は14.4・3.3・9.3cm。口縁はかなり歪んでいる。焼成はあまり良くない。体部外面にはススが付着。明褐色。

青磁　碗（472～475）473～475は龍泉窯系、472は同安窯系と思われるが、類例の検討が必

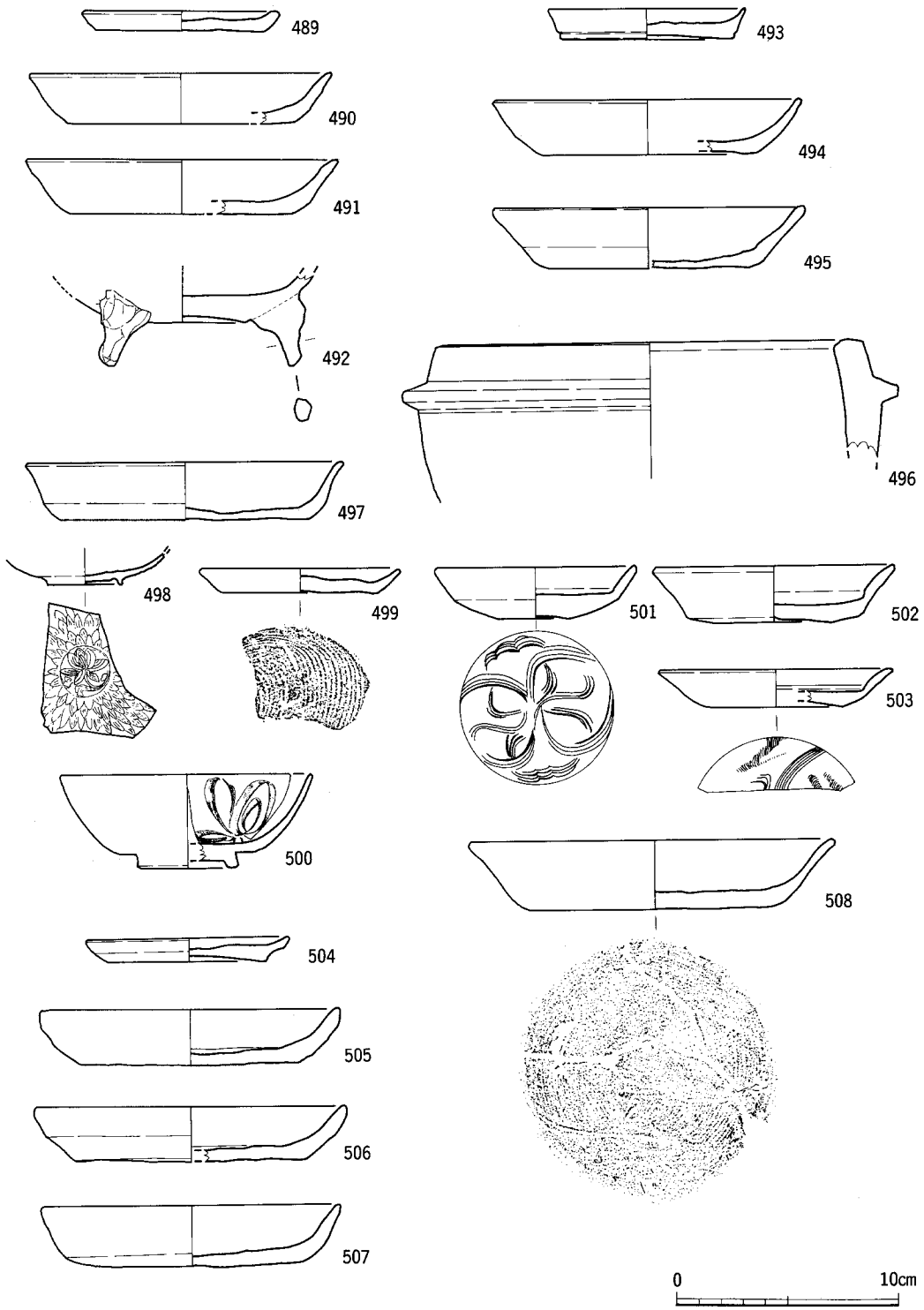


Fig.79　第Ⅱ区竪穴遺構出土遺物実測図（SX01・03・06・08・18・23・26・33・37・38）(1/3) その1

要である。口径・器高・高台径は472が17.6・7.1・5.4cm、473が16.1cm（口径）、474が7.2cm（高台）、475が16.6cm（口径）。472は外面にはヘラ片切彫による蓮弁文をかたどった後、その上に櫛描線文を施文。薄く青緑がかった透明釉。473～475は雲文・蓮花折枝文等を施文する。

SE17出土遺物（Fig,77）

土師器　皿（476）糸切底。口径・器高・底径は9.4・1.3・7.2cm。焼成不良。明褐色。

瓦　平瓦（470）表面には布目圧痕が、裏面には縄目叩き痕が残る。側縁はヘラ切り。

SE19出土遺物（Fig,76）

土師器　皿（468・469）口径・器高・底径の平均値は9.0・1.1・7.3cm。いずれも糸切底。焼成良好。褐色～明褐色。

SE21出土遺物（Fig,77）

土師器　皿（477・480）口径・器高・底径の平均値は8.7・0.9・7.4cm。いずれも糸切底で、内底にヨコナデ、外底には板目圧痕がつく。焼成はやや良好。褐色～明褐色。

土師器　坏（481・482）いずれも糸切底で、板目圧痕が残る。口径・器高・底径の平均値は13.6・2.2・10.4cm。481の内面にはススが付着している。いずれも焼成はあまり良くない。

青磁　小碗（483）高台径は3.2cm。見込み内底に印花文を施文。施釉は高台畳付のみ露胎で、全面にかかる。深いモスグリーンで、小さな氷裂が全面に入る。龍泉窯系Ⅰ類。

SE28出土遺物（Fig,77）

土師器　坏（484）口径・器高・底径は14.4・3.3・10.4cm。糸切底で、板目圧痕が残る。口縁は焼き歪みがあるが焼成良好。褐色。

SE32出土遺物（Fig,77）

滑石製品　用途不明（485）長さ・幅・厚さは5.8・5.3・1.6（2.5）cm。素材は石鍋の破片を転用したものである。小容器の蓋、もしくは模造鏡の可能性がある。

4）　**土壙出土の遺物**（Fig,78、Tab,7）

SK02出土遺物（Fig,78）

管状土錘（486）長さ・径・重さは3.5・1.1・4.55g。褐白色。表面は丁寧なナデ仕上げ。

白磁　碗（488）口径・器高・高台径は15.9・7.4・7.0cm。体部下半は露胎。見込み内底は施釉後、輪状に掻き取っている。焼成は堅緻。不透明な灰白色。

SK06出土遺物（Fig,78）

土師器　皿（487）口径・器高・底径8.1・1.0・7.1cm。糸切底で、内底にヨコナデ、外底には板目圧痕がつく。焼成はやや良好。褐色～暗褐色。

5）**竪穴遺構出土の遺物**（Fig,79、Tab,7）

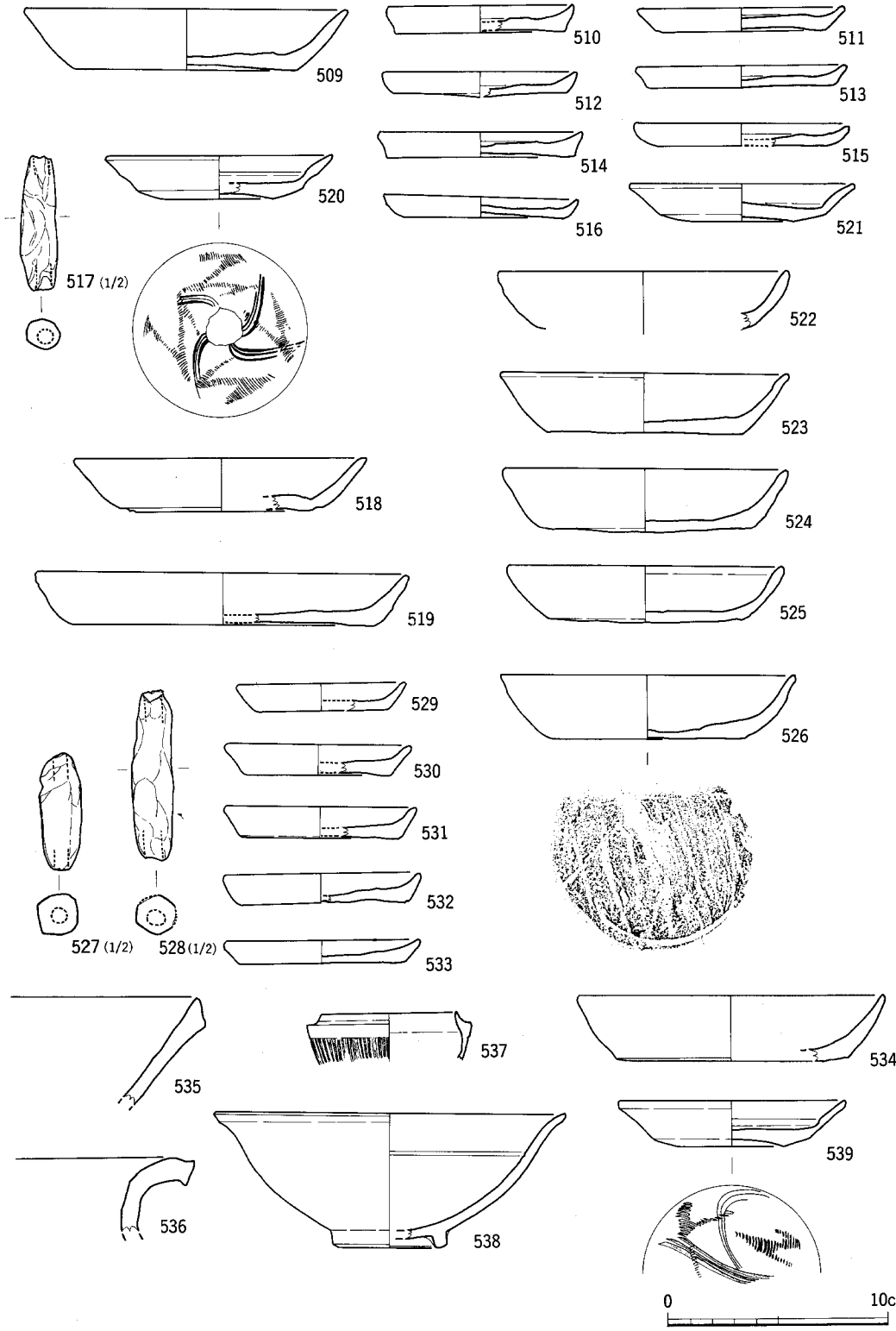


Fig.80　第Ⅱ区竪穴遺構出土遺物実測図（SX40・52・53）(1/3・1/2) その2

SX01出土遺物（Fig,79）

土師器　皿（489）口径・器高・底径は9.1・1.2・7.6cm。焼成はあまり良くない。

土師器　坏（490・491）口径・器高・底径の平均値は13.8・2.4・10.1cm。焼成はあまり良くなく、もろい。やや赤みがかった褐色。器表面は粗れ、調整痕は不明。

青白磁　香炉（492）脚部破片である。三脚と思われる。脚部および体部外面は薄く青みがかった透明釉を施釉。外底は施釉後掻き取り。脚は型起しによる獣脚である。脚の高さ2.0cm。

SX03出土遺物（Fig,79）

土師器　皿（493）口径・器高・底径は8.8・1.3・7.8cm。焼成は不良。褐色。

土師器　坏（494）口径・器高・底径は13.9・2.5・9.6cm。焼成はあまり良くなく、もろい。やや赤みがかった褐色。内面には炭化物が付着。

SX06出土遺物（Fig,79）

土師器　坏（495）口径・器高・底径は14.1・2.8・9.1cm。焼成はあまり良くなく、もろい。褐色。底径は口径に比してやや小さく、体部は直線的に立ち上がる。

SX08出土遺物（Fig,79）

滑石製石鍋（496）口径・鍔部外径は19.4・22.6cm。器高は不明。内外面ともヘラケズリによる整形の後、滑らかに磨研し仕上げている。素材は良質の滑石。灰色。

SX18出土遺物（Fig,79）

土師器　坏（497）口径・器高・底径は14.3・2.7・11.1cm。焼成はあまり良くなく、もろい。明褐色。作りは他と比べやや薄手である。口縁部はわずかに外反する。

白磁　皿（498）高台径は3.4cm。焼成良好で堅緻。釉は薄い明白色。内面には型起しによる蓮花文が全体に施されている。

SX23出土遺物（Fig,79）

土師器　皿（499）口径・器高・底径は9.1・1.1・7.1cm。焼成は良好。明褐色。

青磁　小碗（500）口径・器高・高台径は11.4・4.3・4.6cm。小碗Ⅰ類。焼成良好。釉の発色は良好で、透明な青緑色。釉の厚さは0.3mm。内面はヘラ片切彫による蓮花折枝文を施文。

SX26出土遺物（Fig,79）

青磁　皿（501）口径・器高・底径は9.1・2.3・3.0cm。龍泉窯系皿Ⅰ類。薄い緑灰色。

SX33出土遺物（Fig,79）

青磁　皿（502）口径・器高・底径は11.0・2.7・5.0cm。同安窯系皿Ⅰ類。発色不良。

SX37出土遺物（Fig,79）

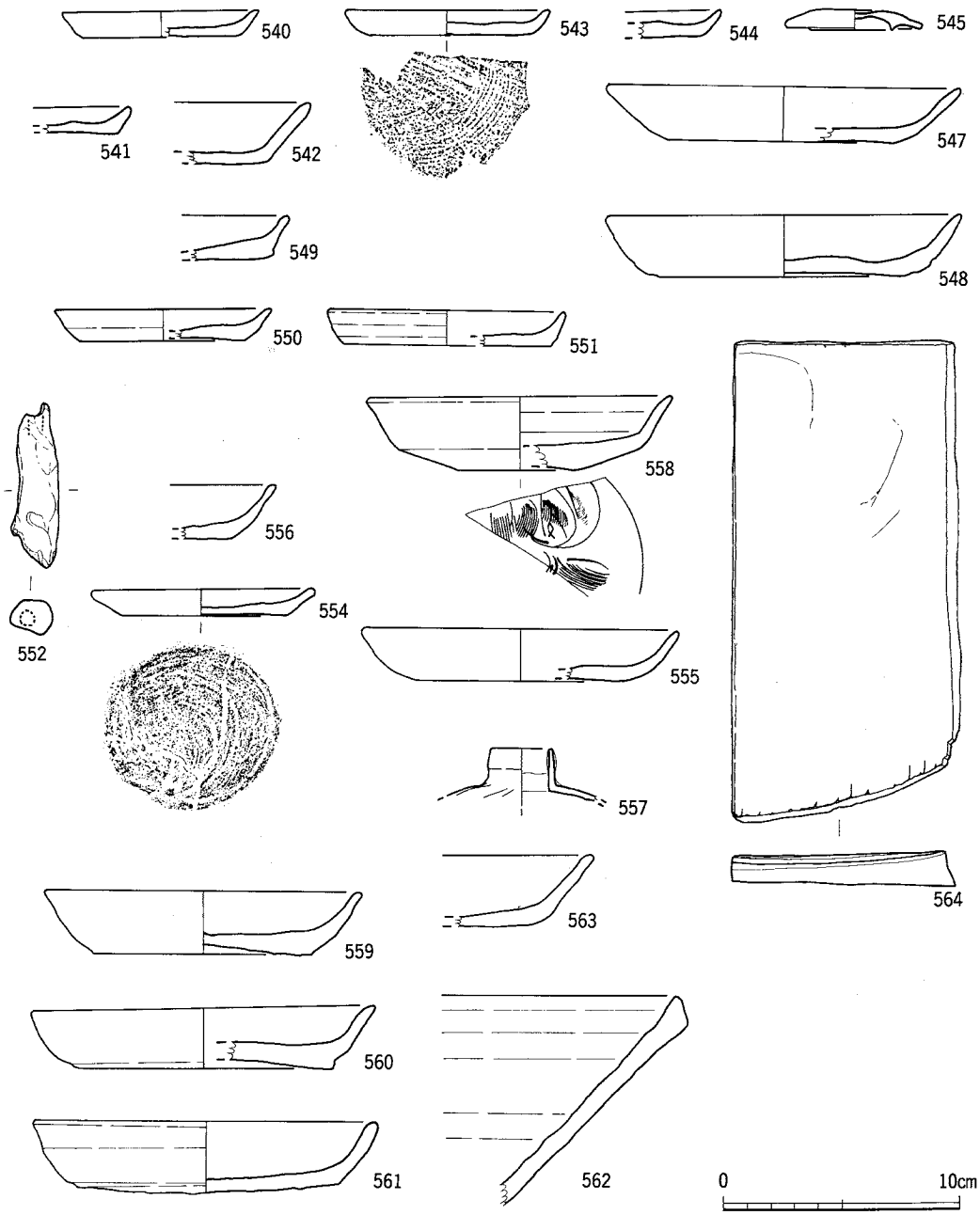
土師器　皿（499）口径・器高・底径は9.0・1.1・7.6cm。糸切り離し後ナデ消し。赤褐色。

土師器　坏（505～507）口径・器高・底径の平均値は13.6・2.6・9.8cm。焼成はあまり良くなく、非常にもろい。やや赤みがかった褐色。作りはいずれも厚手造り。

青磁　皿（503）口径・器高・底径は10.6・2.3・6.0cm。同安窯系皿Ⅰ類。透明な青緑色。

ＳＸ38出土遺物（Fig,79）

土師器　坏（508）口径・器高・底径は16.5・3.1・11.0cm。焼成は良く締まっている。明褐色。作りは丁寧で薄手である。内底は軽くヨコナデ。口縁部はわずかに外反する。糸切底。

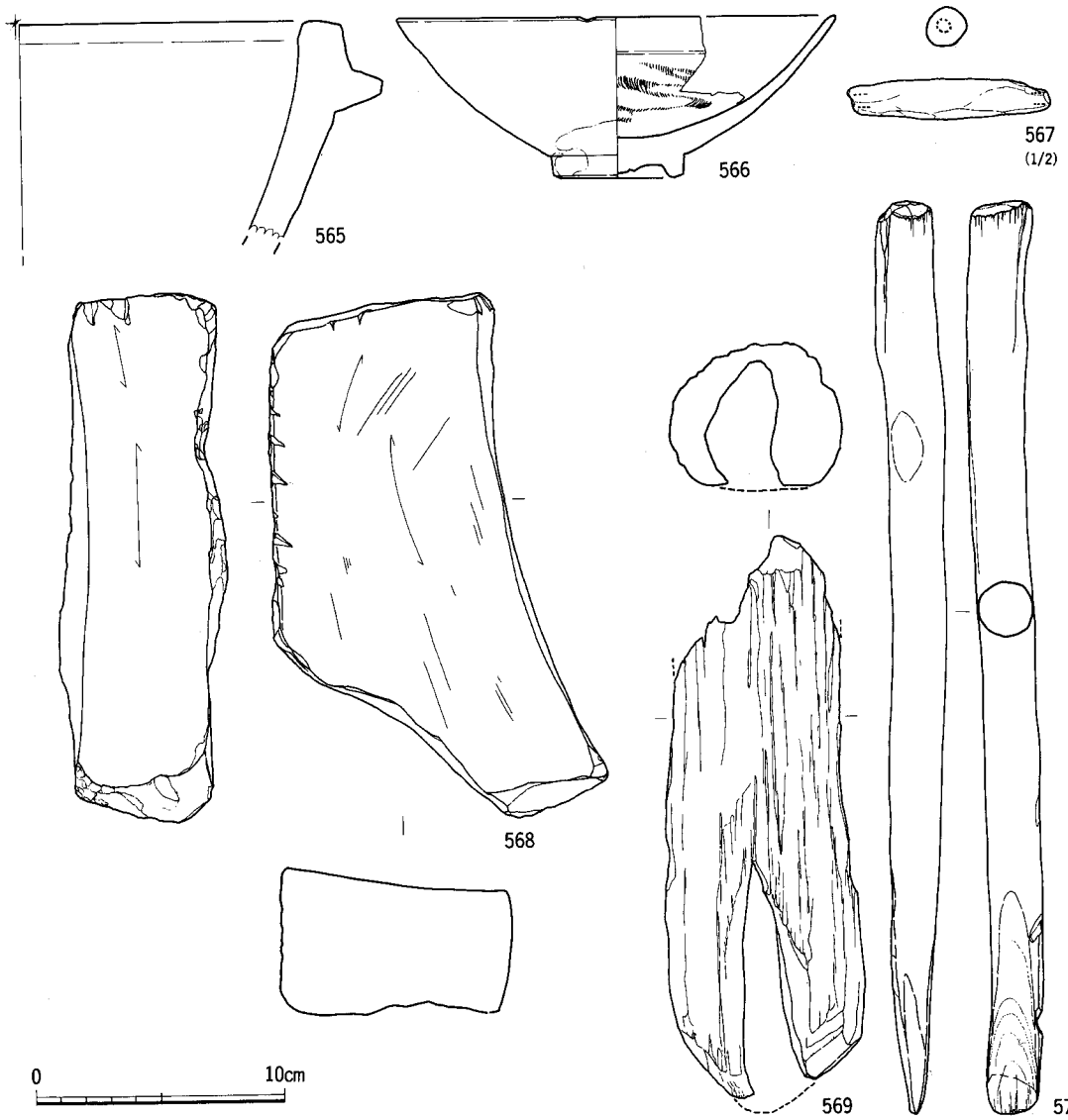


Fig,81　第Ⅱ区竪穴遺構出土遺物実測図（ＳＸ54～56・58・62・66～68・71～73・78・84）(1/3・1/2)その３
（546・553は欠番）

ＳＸ40出土遺物（Fig,80）

土師器　坏（509）口径・器高・底径は14.9・2.8・10.1cm。焼成はやや良好。内底はヨコナデ。外底は糸切り離し後、軽くナデ消している。明褐色。体部は直線的である。

ＳＸ52出土遺物（Fig,80）



Fig,82　第Ⅱ区竪穴遺構出土遺物実測図（ＳＸ78・84・92）（1/3）その４

土師器　皿（510～516）口径・器高・底径の平均値は9.3・1.1・8.2cm。515以外はすべて糸切底。焼成はやや良好。良く焼き締まっている。褐色～明褐色。

土師器　坏（518・519・522～526）口径・器高・底径の平均値は13.8(13.3)・2.7・8.6cm。いずれも糸切底で、524・526には板目圧痕がつく。焼成は良くなくもろい。いずれもやや厚手造り。暗褐色～褐色。519は復元口径がやや大きいかもしれない。

青磁　皿（520・521）同安窯系皿Ⅰ類である。520は内底にヘラと櫛による施文。521は無文。いずれも外底は全面施釉後掻き取っている。口径・器高・底径は520が10.4・2.0・5.0cm、521が10.4・1.8・4.8cm。薄く緑がかった透明な灰色。

管状土錘（517）長さ・径・重さは4.1・1.1cm・7.85ｇ。やや小型のものである。赤褐色。

ＳＸ53出土遺物（Fig,80）

土師器　皿（529～533）口径・器高・底径の平均値は8.6・1.3・7.2cm。すべて糸切底。焼成は良好。良く焼き締まっている。褐色～明褐色。

土師器　坏（534）口径・器高・底径は14.0・3.1・10.8cm。焼成は不良でもろい。

須恵質土器　捏鉢（535）東播磨系のものと思われる。口径は27～30cmほどか。焼成は良好。体部は灰白色で、口縁部外面は銀灰色。

須恵質土器　甕（536）東播磨系のものと思われる。口径は不明。既述した284・285・314などと同一の形態、製作手法のもの。焼成はややあまい。灰色～黒灰色。

陶器　合子身（537）内面および外面に褐釉を薄く施釉。焼成は良好。口径は6.7cm。体部最大径は7.4cm。体部には型起しによる櫛歯状の文様を入れている。

白磁　碗（538）明白色の釉を全面にかけた後、口縁端部内外面を掻き取った、口禿の白磁である。口径・器高・高台径・高台高は16.2・6.3・5.2・0.8cm。

青磁　皿（539）同安窯系皿Ⅰ類。口径・器高・底径は10.4・2.1・4.8cm。透明な緑灰色。

管状土錘（527・528）長さ・径・重さは527が3.7・1.3cm・6.65ｇ。やや小型のものである。528が5.7・1.3cm・8.55ｇで中型のもの。焼成は良好。良く焼き締まっている。

ＳＸ54出土遺物（Fig,81）

土師器　皿（540）口径・器高・底径は8.2・1.1・6.4cm。糸切底で板目圧痕がついている。焼成はやや良好。内面にススが付着。褐色～明褐色。

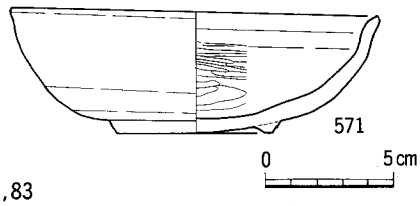
ＳＸ55出土遺物（Fig,81）

土師器　皿（541）口径・器高・底径は9.2・1.1cmほどか。糸切底である。焼成はやや良好。内面にはススが付着。褐色～明褐色。

土師器　坏（542）口径・器高は14.0・2.6cmほどか。焼成は不良でもろい。糸切底か。

ＳＸ56出土遺物（Fig,81）

土師器　皿（543・544）543の口径・器高・底径は8.8・1.0・7.4cmほどか。糸切底で板目圧



Fig,83
第Ⅱ区旧河川出土遺物実測図（SR03）（1/3）

痕がつく。焼成はやや良好。544は口径が8.6cmほどである。褐色～明褐色。

土師器　坏（547・548）口径・器高・底径の平均値は15・2.4・9.9cm。焼成はやや良好。いずれも糸切底。548には板目圧痕がつく。明褐白色～明褐色。

青白磁　合子蓋（545）直径・器高・合わせ部径は5.8・0.9・3.2cm。型押しによる菊花文を蓋上面に施文。釉薬は蓋上面のみに施釉している。内面は露胎。透明な青白色。

SX58出土遺物（Fig,81）

管状土錘（552）長さ・径・重さは5.4・1.8cm・5.70g。中型である。灰白色で焼成良好。

SX62出土遺物（Fig,81）

土師器　皿（549～551）550と551の口径・器高・底径の平均値は9.6・1.4・8.3cm。549は口径が9.6cmほどで、器高は1.8cm。いずれも糸切底である。焼成はやや良好。褐色～暗褐色。

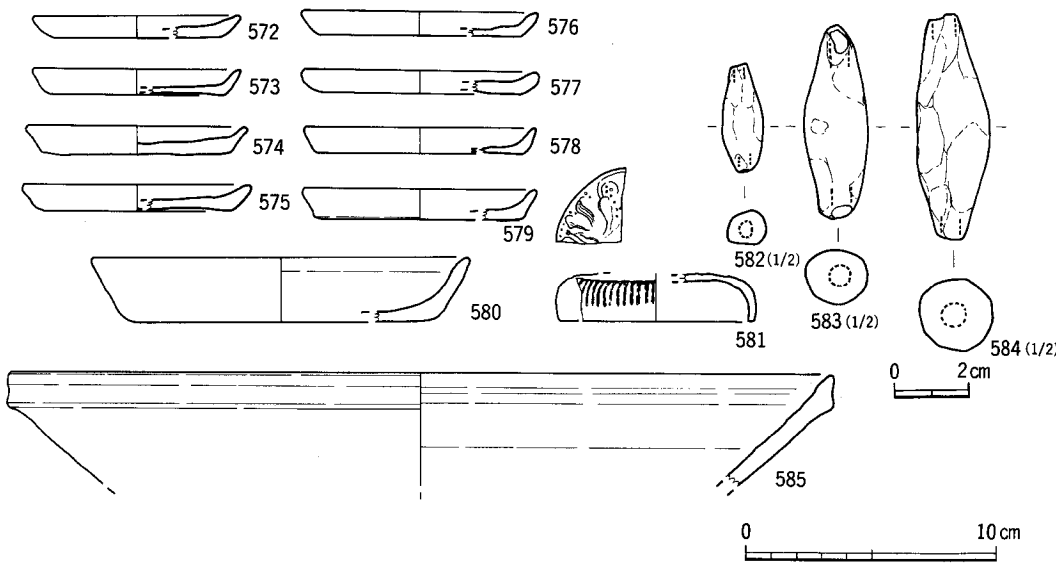
SX65出土遺物（Fig,81）

木製品　柾目材（564）曲物の蓋もしくは底板を転用した板材と思われるが、何に使ったかは不明。杉材。長さ・幅・厚さは20.1・9.2・2.8cm。

SX67出土遺物（Fig,81）

土師器　皿（554）口径・器高・底径は9.4・1.1・6.9cm。糸切底である。焼成はやや良好。内底はヨコナデ。褐色～明褐色。

SX68出土遺物（Fig,81）



Fig,84　第Ⅱb区整地層出土遺物実測図（1/3・1/2）

土師器　坏（555）口径・器高・底径は13.5・2.2・8.8cm。糸切底。焼成良好。暗褐色。

ＳＸ71出土遺物（Fig,81）

土師器　坏（556）口径は14cmほどで、器高は2.3cm。糸切底。焼成やや良好。明褐色。

ＳＸ72出土遺物（Fig,81）

青白磁　小壺（557）口径は2.6cm。口縁内面から体部外面にかけて青みがかった透明釉がかかる。耳もしくは注口がつく可能性がある。胎土は明白色で堅緻。

ＳＸ73出土遺物（Fig,81）

白磁　皿（558）口径・器高・底径12.8・3.2・4.4cm。内底に劃花文と櫛描文を施文。釉の発色は良好。透明な薄い緑白色の釉薬が厚くかかっている。外底は施釉の後掻き取っている。

ＳＸ78出土遺物（Fig,81）

土師器　坏（559～561）口径・器高・底径の平均値は14.1・2.8・10.5cm。焼成はやや良好。いずれも糸切底。561は内底にヨコナデ、外底に板目圧痕がつく。明褐白色～明褐色。

須恵質土器　捏鉢（562）口径は28cmほどか。内外面にはロクロ水挽き痕をそのまま残している。内面下半は磨耗し滑らかになっている。口縁部は断面三角形で、暗灰色を呈す。

砂岩製砥石（568）長さ・幅・厚さは21.3・13.6・6.3cm。中砥用か。

ＳＸ81出土遺物（Fig,81）

土師器　坏（563）口径は13.8～14.2cmほどで、器高は3.0cm。糸切底で、板目圧痕がつく。焼成やや良好。褐色。

ＳＸ84出土遺物（Fig,82）

滑石製石鍋（565）口径は25.6cm。鍔の外径は29cm。外面は粗いケズリ成形痕をそのまま残す。内面は丁寧に磨研し滑らかである。鍔の下部から底部にかけてススが付着している。

木製品　杭（569）杭または柱材の一部か。現存長・直径は21.8cm。

木製品　杭（570）現存長・直径は36.8・2.2cm。丸木材の先端の一方を両面から切り落とし尖らせている。先端はわずかに磨耗。他方の端は中央に長さ約6cmの細い裂目を入れている。

ＳＸ92出土遺物（Fig,82）

白磁　碗（566）口径・器高・高台径・高台高は17.8・6.4・5.3・0.8cm。口縁端部は刻みが入れられ輪花となっている。内面には口縁下に沈線を入れ櫛描文を施文。体部下半部は露胎。焼成堅緻。釉は透明な灰白色（白磁碗０－類）。

管状土錘（567）長さ・径・重さは5.4・1.1cm・6.80ｇ。焼成良く、堅く焼き締まっている。

6）旧河川出土の遺物（Fig,83、PL,58）

第Ｉ区から延びてくる旧河川からは、第Ｉ区では黒色土器、白磁（II－1類）などの11世紀代前後の遺物が出土しているが、第II区からは図示できるものは571のみである。

黒色土器　碗（571）口径・器高・高台径・高台高は14.7・4.6～5.0・5.3・0.5cm。高台部から球状に外湾しながら立ち上がった体部はわずかに屈曲して口縁へと続いている。口縁部はわずかに外反している。高台は断面三角形でやや小さい。内外面とも丁寧なヨコ方向のヘラミガキで仕上げている。

7）包含層・整地層・表土出土の遺物（Fig,84～88、PL,59～60）

包含層・整地層からは多量の遺物が出土している。ここではそれらのうちのごく一部について図示し、説明する。

整地層出土遺物（Fig,84）（整地層は、Fig,52Ⅱb区第6層に相当）

土師器　皿（572～579）口径・器高・底径の平均値は9.0・1.1・7.7cm。いずれも糸切底。574・575・579には板目圧痕がつく。焼成は良くなく、締まり悪い。褐色～明褐色。

土師器　坏（580）口径・器高・底径は15・2.7・12cm。糸切底。口縁部内面に弱い段がある。

須恵質土器　捏鉢（585）東播磨系か。口径約28cm。焼成は良好。ややもろい。灰白色。

管状土錘（582～584）長さ・径・重さは、582が2.9・1.2cm・2.60g。583が5.0・1.7cm・12.7g。584が4.1・1.8cm・18.40g。表面には、指圧痕が残っている。

青白磁　合子蓋（581）口径・器高・天井部径は7.9・1.9・7.8cm。型起し造り。青白色。

包含層出土遺物（Fig,85～88）（包含層は、Fig,52Ⅱc・d区第12～13層上部）

土師器　皿（592）口径・器高・底径は8.1・1.1・6.2cm。糸切底。軽くナデ消している。

土師器　脚付皿（593）口径・器高・底径・脚径は10.4・1.4・9.2・6.9cm。焼成良好。良く締まっている。灰褐白色。

土師器　坏（594）口径・器高・底径は13.5・2.5・9.8cm。糸切底。板目圧痕がつく。軽くナデ消している。焼成良好。明褐色。体部中央に弱い稜がつき、口縁部はわずかに外反。

土師質土器　土鍋（590）口縁は逆L字形。口径は不明。焼成良好。焼き締まっている。

須恵質土器　捏鉢（597～601）いずれも東播磨系のものである。全器形がわかる例はない。口径は28～31cmほどである。口縁部は断面形が三角形のもので、口縁端部がわずかに引き出されるもの、口縁部外面下端が少し張りだすもの、そして丸味があり、玉縁状もしくは袋状になるもの、の3つに大きく分けられる。焼成はいずれも良く焼き締まっている。灰白～灰色。

瓦質土器　擂鉢（586～589・602）いずれも口縁部破片。口縁部は肥厚している。内面は横もしくは斜位のハケ目。下ろし目は破片にはみられない。灰白色～黒灰色。焼成堅緻。

陶器　大甕（595・596）常滑窯系の甕の破片と思われる。いずれも格子目の印文を肩部に施文している。印文の位置は粘土紐の継目か。焼成は良好。堅く焼き締まっている。灰白～灰色。

滑石製石鍋（603～605）口径・鍔外径は603が24.8・27cm、604は30.8・37.6cm、605は24.4・28.2cm。調整はいずれもケズリ出し成形。605の内面は磨研仕上げ。灰色の良質な滑石を素材

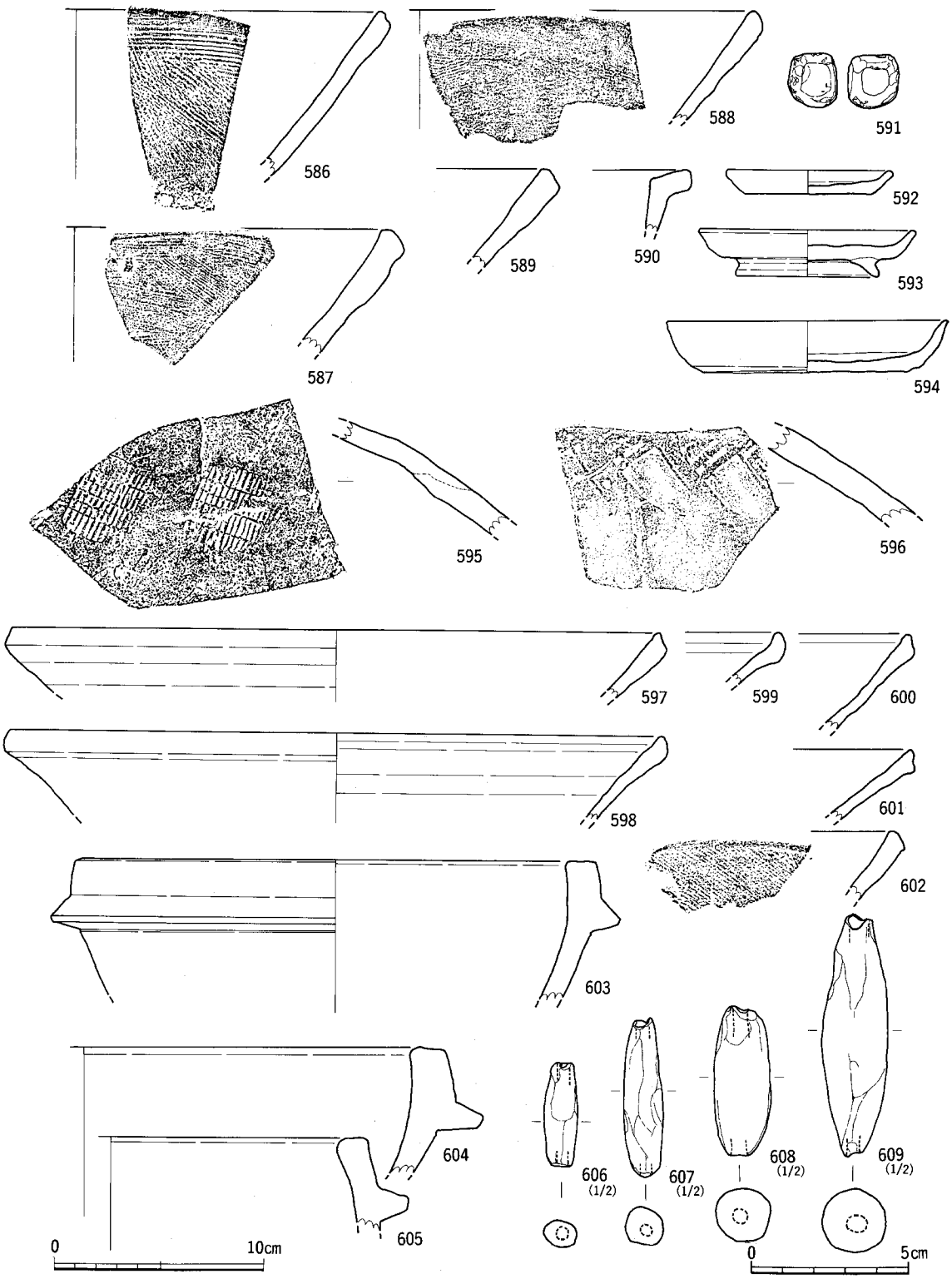


Fig.85　第Ⅱ区包含層出土遺物実測図（1/3・1/2）その1

とする。

管状土錘（606～609）長さ・径・重さは606が3.4・1.1cm・3.40g。607が5.1・1.3cm・7.5g。608が4.8・1.8cm・14.15g。609が7.7・2.1cm・30.15g。いずれも焼成良好。丁寧なナデ。

白磁　皿（610～612・614・615）610～612は口禿の白磁である。610・611は法量がほぼ等しく器形も良く似る。外底釉は拭き取っている。615は底部～体部下半部は露胎。青白色～灰白色。614・615は口径・器高・底径が14.4・3.0・5.2cm、10.3・3.1・4.8cmで内底にヘラ描きにより草花文を施文。釉は薄く青緑がかった灰白色（白磁皿Ⅶ類）。

白磁　碗（627）高台径は5.8cm。白磁Ⅸ類。外底に「五」もしくは花押が墨書されている。焼成堅緻。釉は不透明な灰白色。

青磁　皿（613・616～619）613は龍泉窯系皿Ⅰ類。616・617は同安窯系皿Ⅰ類。618・619は同安窯系皿Ⅱ類。617の外底には「元」が、618には花押がそれぞれ墨書されている。口径・器高・底径は613が11.0・2.5・3.8cm。616が10.8・2.3・4.7cm。617が10.8・2.3・6.0cm。618が11.1・2.4・4.8cm。619が11.0・2.3・4.9cm。いずれも焼成良好。透明な青灰色～青緑灰色。

青磁　碗（620～626・628・635）口径・器高・高台径は622が13.3cm（口径）、624が16.2・6.7・6.1cm、626が6.0cm（高台）、628が6.2cm（高台）。626と628の内底には印文が施文されている。以上は龍泉窯系碗Ⅰ類。623は口径・器高は10.8・3.6cmで龍泉窯系小碗Ⅰ類。621は高麗青磁碗もしくは壺。青緑色の生地に、明灰白色のスリップを象眼している。脚部径は6.0cm。635は越州窯系青磁碗。底部はやや上げ底のベタ高台で、直径7.8cm。胎土はくすんだ薄い小豆色。

青磁　鉢もしくは高台付皿（620・625）口径・器高・高台径は620が10.8・3.6・6.0cm。625が14.6・3.9・5.8cm。625は外面に鎬蓮弁文を施文。

青白磁　合子身（630・632）口径・器高・体部最大径・底径は630が(4.8)・(1.9)・6.0・4.0cm、632が(7.3)・1.7・8.0・7.4cm。内面と、体部外面に青緑色がかった透明釉を施釉。

青白磁　合子蓋（629・631・633・634）口径・器高は629が6.5・1.3cm、631が8.1・2.1cm、633が6.4・2.7cm、634が6.2・1.5cm。いずれも型押しによるもの。天井部から体部外面に、青～青緑色がかった透明釉を薄く施釉、629は天井部のみに蓮花文を施文。

青白磁　小壺（636）胴部径は9.0cm。型起しによるもの。胴部内面下半は露胎。他は全面に薄く青みがかった透明釉を施釉。文様は頸部直下に蓮花文、肩部に草花文を施文。

陶器　甕（637・639・640）推定口縁径は、637が28cm、639が27cm、640が28cmほどである。いずれも、黒褐色～暗褐色の釉薬が体部外面(637)もしくは内面(639・640)に非常に薄くかかっている。胎土は赤褐色～赤紫がかった褐色で、堅く焼き締まっている。

陶器　鉢（638・642・645）638は口径が30cmほどで、642の口径・器高・底径は24.6・9.8・10cm。638は（緑）褐色の釉が非常に薄くかかっているが部分的に剝落。胎土は粗いが良く焼き締まっている。642は8条単位の下ろし目がつく擂鉢である。口縁部の内外面のみに褐釉を施

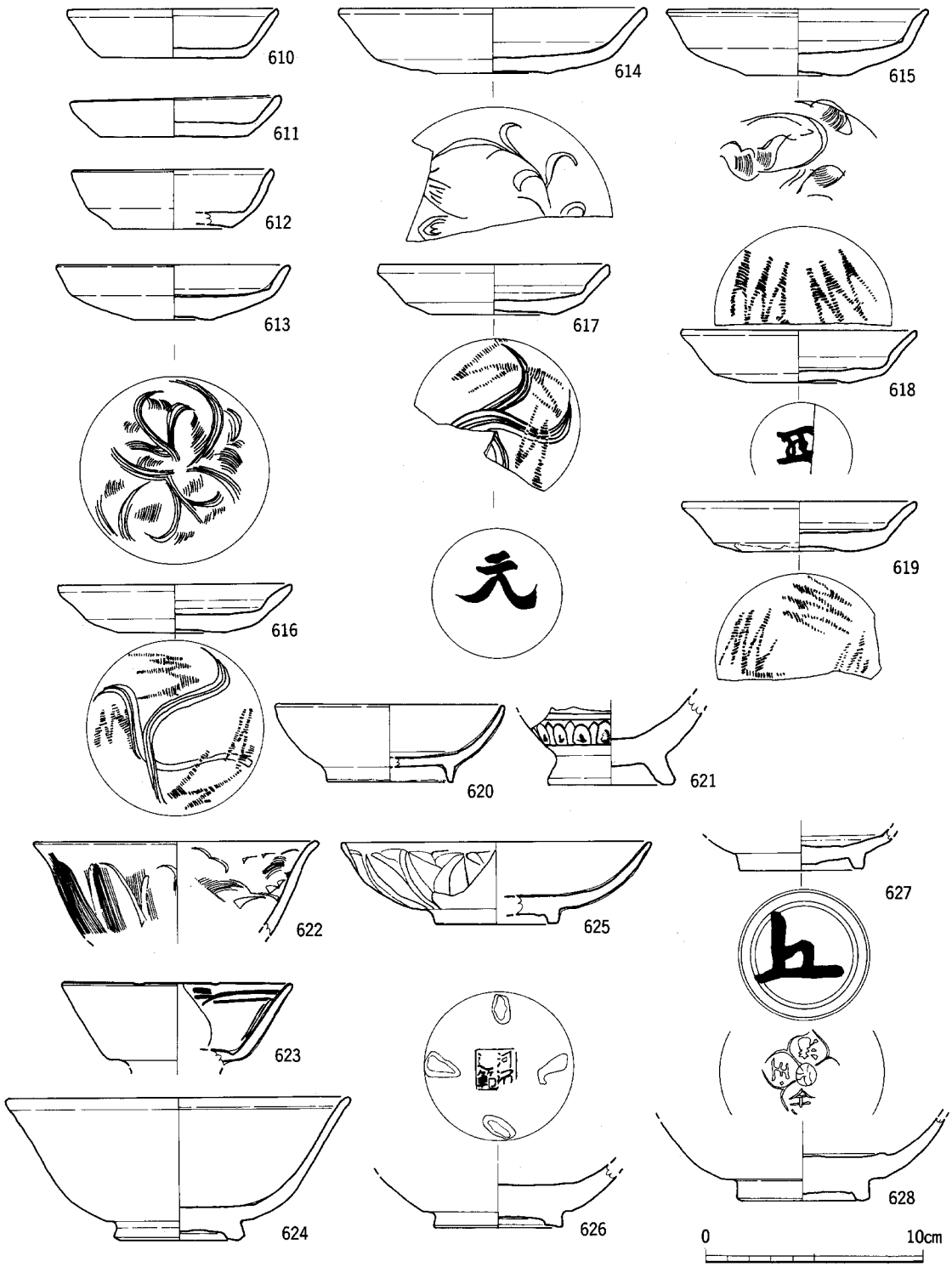


Fig.86　第Ⅱ区包含層出土遺物実測図（1/3）その2

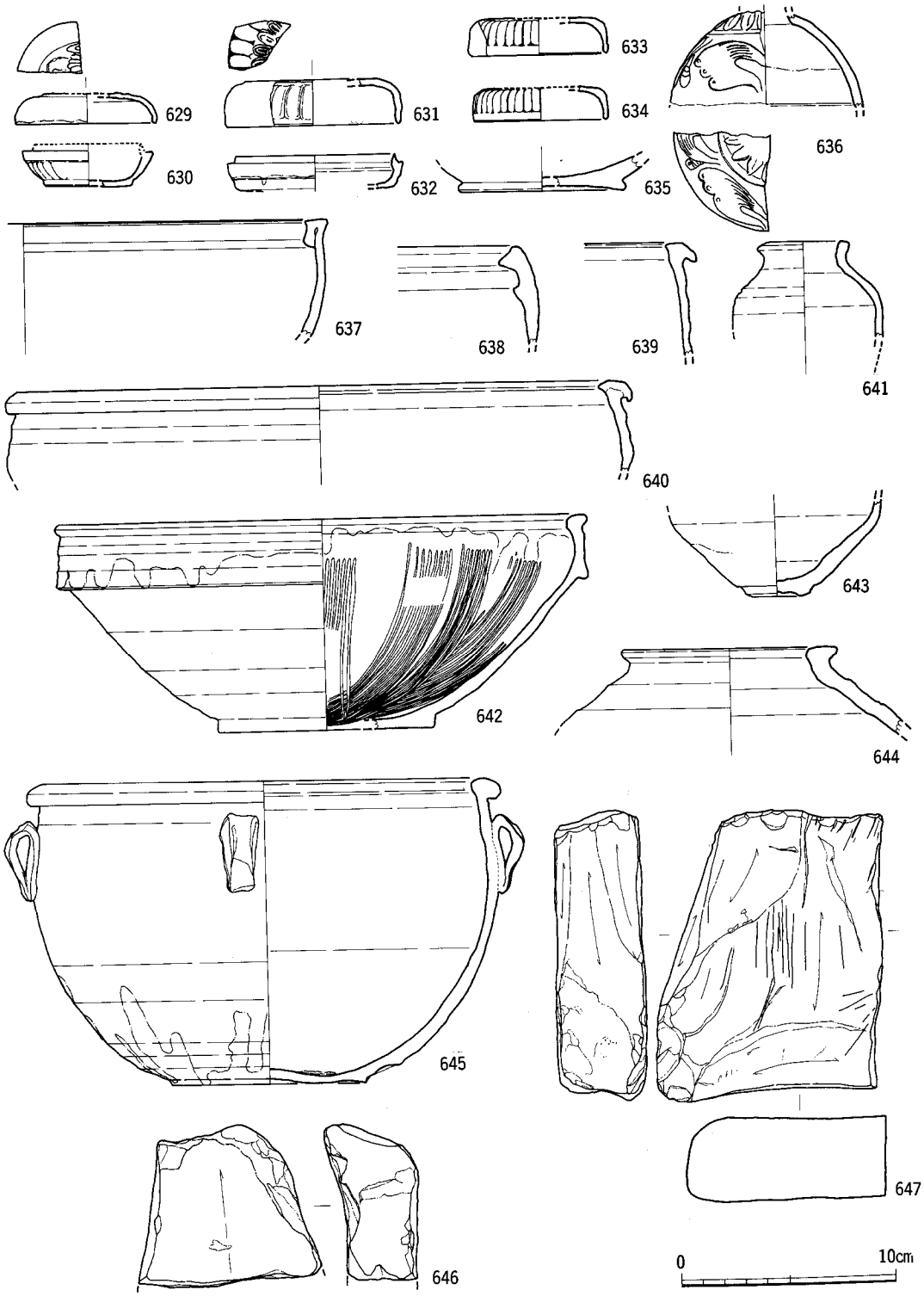


Fig.87　第Ⅱ区包含層出土遺物実測図（1/3）その3

釉している。体部下半のヘラケズリ整形の手法は645と共通するものである。ロクロ回転は左回転。645は四耳付の鉢。体部下半はヘラケズリ整形。内外面には褐釉が施釉されている。口径・器高・胴部最大径・底径は21.8・14.0・21.4・9.0cm。胎土は赤紫がかった暗褐色。

陶器　壺（641・644）641は口径4.2cm。灰緑釉が外面および口頸部内面に施釉。644は褐釉の四耳壺の口頸部破片。口径は10cm。胎土は灰色で精良。口縁部上面には目跡がつく。

陶器　天目碗（643）高台径は3.0cm。体部上半に黒釉が厚くかかる。胎土は精良で灰色。

砂岩製　砥石（646・647）646の現存長・幅・厚さは7.4・8.6・4.3cm。上側縁は加工面。中砥用か。647の現存長・幅・厚さは13.5・10.5・4.1cm。キメの細かな砂岩製。中砥用か。

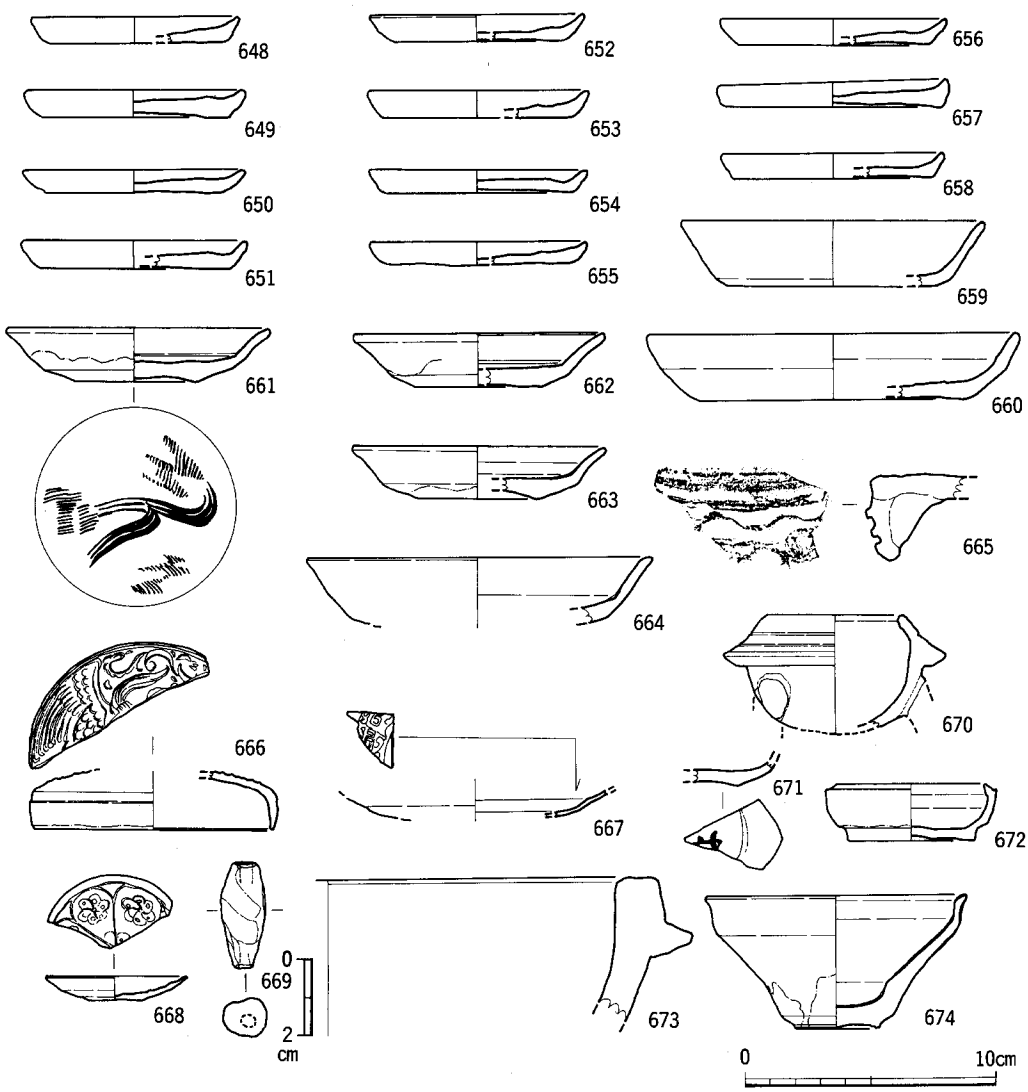


Fig.88　第Ⅱ区包含層出土遺物実測図（1/3・1/2）その4

軽石製品　不明（591）一辺が2.6cm前後の立方体に面取りしている。面は粗い。賽子か。

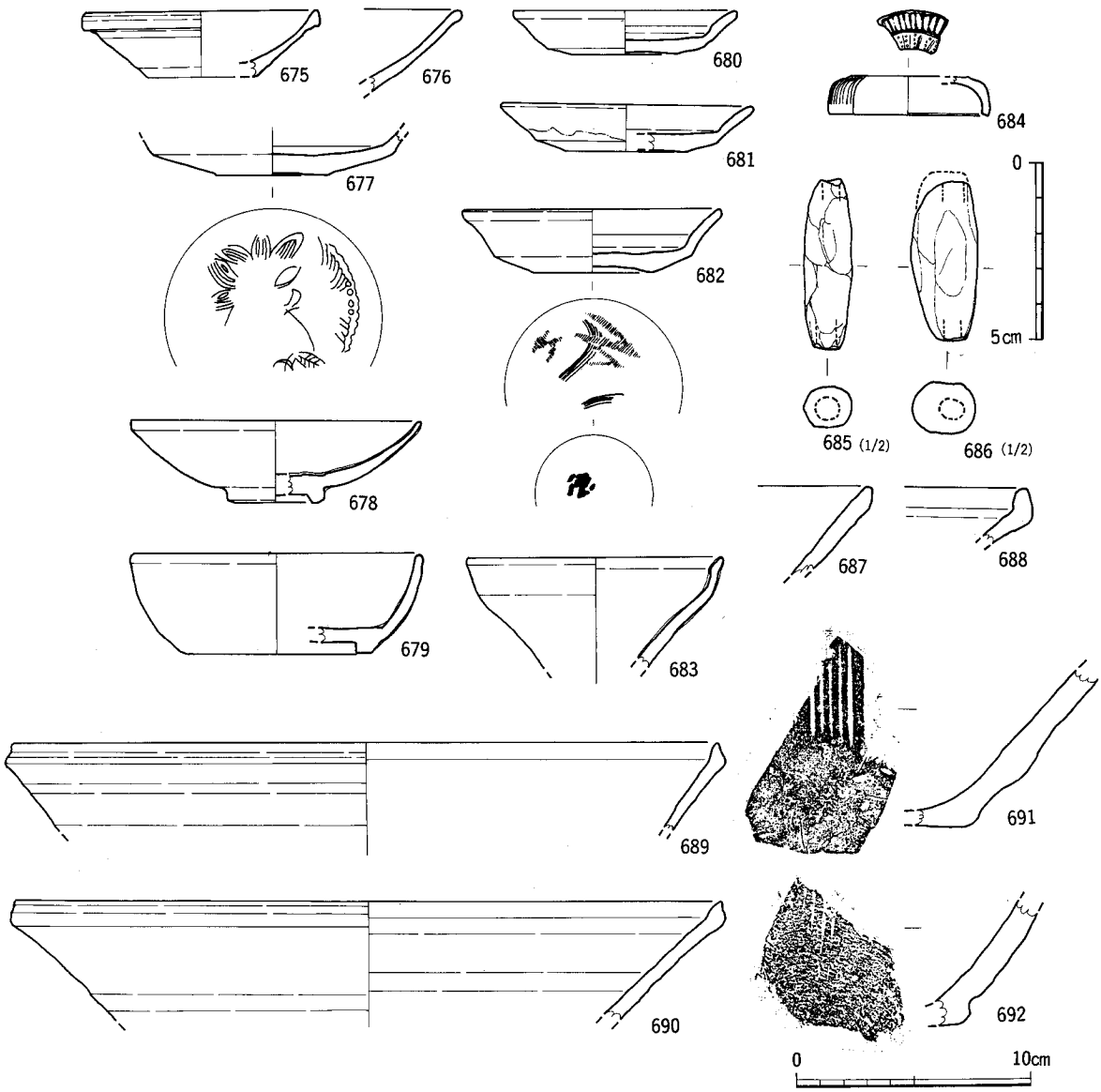
第II区東側第27層出土遺物（Fig,88）

土師器　皿（648～658）口径・器高・底径の平均値は8.8・1.0・7.5cm。褐色～明褐色。

土師器　坏（659・660）口径・器高・底径の平均値は13.5・2.6・10.3cm。糸切底。

瓦質土器　足釜模造品（670）口径・器高・鍔外径は5.2・4.6・10.8cm。内外面ともヘラミガキ仕上げ。三足か。

陶器　天目碗（674）口径・器高・高台径は10.5・5.3・3.2cm。黒色釉が厚くかかる。胎土はきめ細かな明灰色。



Fig,89　第II区表土出土遺物実測図（1/3・1/2）

白磁　皿（664）白磁皿Ⅶ類。口径は13.8cm。半透明の灰白色。

青磁　皿（661～663・671）いずれも同安窯系皿である。口径は10cmほど。671外底にはひらがなの「よ」に近い字が墨書されている。662の内底は無文。

青白磁　合子身（672）・**蓋**（666）・**小皿**（667・668）672の口径・器高・底径は9.1・1.2・7.6cm。無文。666は天井部に鳳凰文を描いている。口径9.6cm。667・668はそれぞれ雷文・瑞雲文・花文をあしらっている。焼成良好。以上の釉はいずれも青みのある透明な明白色。

瓦　軒平瓦（665）北方系の瓦である。焼成良好。灰色。(註1)

（註1　常松幹雄「博多出土の北方系瓦のルーツを求めて」Museum Kyushu 19　1986）

表土出土の遺物（Fig,89）

土師質土器　捏鉢（687）・**擂鉢**（691・692）いずれも暗褐色。ハケ目調整後下ろし目を施す。

須恵質土器　捏鉢（688～690）いずれも東播磨系である。口径は28～30cmほど。灰色。

管状土錘（685・686）685が4.8・1.3cm・6.75g。607が4.2・1.2cm・6.0g。焼成良好。

陶器　天目碗（683）黒褐色釉をたっぷり施釉。外面下半部は露胎。口径は11.1cm。胎土は、きめ細かな灰色。

白磁　碗・皿（675～677）いずれも明白色の透明釉を施釉。675は高台付皿Ⅰ類。口径・器高・底径は10.1・2.8・4.6cm。677は皿Ⅶ類。碗676は小玉縁口縁となるもの。焼成良好。うすく青みがかった白色。

青磁　鉢・皿（678～682）678・679は龍泉窯系である。他は同安窯系。678の内底には印文があるが内容は不明。682外底には「徳」の墨書がある。

青白磁　合子蓋（684）口径・器高・天井部径は6.8・1.6・5.1cm。釉は薄い緑灰色。

遺物No	名称	切り離しの区分 ヘラ切り	切り離しの区分 糸切り	内底横ナデの有無	法量(cm) 口径・器高・底径	調整その他の特徴 色調	調整その他の特徴 底部敷目の有無	出土遺構名	Fig,No	PL,No	遺物登録番号(8403は省略)
1	皿		○		不明	褐(橙)色		SP452	Fig.53		1180
2	〃		○		8.8・1.3・7.6	褐色		SP693a	〃		1196
3	〃		○		8.6・1.25・	〃		SP694	〃		1197
4	〃		○		9.2・1.1・	〃		SP837	〃		1345
5	〃		○		9.2・1.35・	〃		SP1138	〃		1269
6	〃		○		8.3・1.25・	〃		SP815	〃		1342
7	〃		○		8.1・1.25・5.85	〃		SP573	〃		1338
8	〃		○		8.05・0.85・6.6	〃		SP752	〃		1306
9	〃		○		8.6・1.15・7.2	〃		SP671	〃		1195
10	〃		○		8.75・1.15・7.0	茶褐色		SP450	〃		1181
11	〃		○		9.0・1.25・7.0	明褐色		SP784	〃		1318
12	〃		○		9.1・1.1・8.0	褐色		SP479	〃		1183
13	〃	(?)	○		8.95・1.0・7.2	明褐色		SP799	〃		1336
14	〃		○		9.25・1.25・7.1	褐色		SP861	〃		1357
15	〃		○		9.55・0.9・7.8	明褐色		SP726	〃		1307
16	〃		○		9.65・1.6・6.8	褐白色		SP1123	〃		1266
17	〃		○		9.8・1.1・8.8	淡褐色		SP895	〃		1369
18	〃		○		9.0・1.3・	暗灰色		SP722	〃		1329
19	〃		○		8.0・1.1・6.6	明褐色		SP941	〃		1377
20	〃				8.45・0.9・7.0	灰褐色		SP825	〃		1346
21	〃		○		8.8・1.15・8.0	褐色		SP800	〃		1339
22	〃		○		8.8・1.25・6.45	〃		SP803	〃		1340
23	〃		○		8.85・1.35・7.6	〃		SP943	〃		1376
24	〃		○	○	9.15・0.9・6.6	褐白色	○	SP856	〃		1352
25	〃				8.8・1.35・6.7	褐色		SP822	〃		1343
26	〃		○		9.2・1.1・7.8	茶褐色		SP898	〃		1370
27	〃				9.0・1.3・7.7	明褐色		SP875	〃		1360
28	〃				9.5・1.25・8.0	褐色		SP851	〃		1344
29	〃				9.8・1.45・8.2	〃		SP943	〃		1379
30	〃		○		10.4・1.4・9.2	〃		SP1011	〃		1265
31	〃		○		9.55・1.25・7.95	明褐色		SP1032	〃		1262
32	〃		○		8.4・0.9・7.0	〃		SP828	〃		1348
33	〃		○		8.2・1.15・6.3	褐色		SP1169	〃		1277
34	〃		○		8.1・0.8・6.6	明褐色		SP1202	〃		1389
35	〃		○		8.5・1.0・6.8	褐白色		SP1220	〃		1388
36	〃		○		8.8・1.0・8.0	褐色	○	SP1138	〃		1270
37	〃		○		8.9・0.75・7.6	〃		SP1215	〃		1387
38	〃		○		9.0・1.05・7.8	(赤)褐色		SP1210	〃		1386
39	〃		○		8.8・1.3・6.4	明褐色		SP1259	〃		1390
40	〃		○		9.0・1.25・8.0	褐色		SP1285	Fig.53		1394
41	〃		○		9.0・1.1・7.2	〃		SP1290	〃		1396
42	〃		○	○	8.85・1.2・7.1	(赤)褐色	○	SP1148	〃		1272
43	〃		○		8.95・1.05・7.8	明茶褐色		SP1156	〃		1275
44	〃		○		8.45・0.9・7.2	明褐白色	○	SP1157	〃		1276
45	〃		○		9.2・1.15・7.85	褐色		SP850	Fig.54		1351
46	〃		○		9.5・1.2・8.4	〃		SP775	〃		1310
47	〃		○		9.55・1.15・8.65	〃		SP558	〃		1186
48	〃		○		10.15・1.3・9.0	明褐色		SP698	〃		1198
49	坏		○		15.9・2.6・11.6	褐色		SP1208	〃		1385
50	〃				15.4・3.0・12.0	〃		SP1138	〃		1267
52	皿		○		・1.3・	明褐色		SP1315	Fig.56		1409
53	〃		○		9.0・0.9・	褐色		SP1616	〃		1418
54	〃		○		・1.35・	灰褐色		SP1305	〃		1404
55	〃		○		9.35・1.1・7.8	明褐色		SP1646	〃		1428
56	〃		○	○	8.9・1.05・7.2	褐白色	○	SP1316	〃		1413
57	〃		○		9.3・0.95・7.6	褐色		SP1654	〃		1429
58	〃		○		11.0・1.25・9.0	明褐色		SP1692	〃		1431
59	坏		○		・	〃		SP727	〃		1308
60	〃				14.5・2.8・	褐色		SP804	〃		1341
61	〃		○		・2.9・	〃		SP1138	〃		1268
62	〃		○		13.5・2.6・	〃		SP1441	〃		1411
63	〃		○		13.5・2.1・9.8	明褐色		SP517	〃		1185
64	〃		○		13.5・2.5・9.8	〃		SP929	〃		1374
65	〃		○		13.9・2.05・5.2	(赤)褐色		SP772	〃		1331
66	〃		○	○	13.4・2.8・9.2	褐色	○	SP835	〃		1350
67	〃		○		13.6・2.3・10.0	(赤)褐色		SP865	〃		1358
68	〃		○		13.4・2.5・9.4	褐色		SP828	〃		1349
69	〃		○		13.3・2.4・9.0	〃		SP1326	〃		1410
70	〃		○		14.0・2.95・9.4	暗褐色		SP1294	〃		1397
71	〃		○		14.1・2.4・10.15	褐色		SP1289	〃		1395
72	〃		○	○	13.4・2.6・9.6	〃	○	SP1004	〃		1263
73	〃		○	○	15.5・3.3・10.8	明褐色	○	SP661	〃		1283
74	〃		○		13.4・2.15・11.2	〃		SP872	〃		1371
75	〃				13.8・2.7・9.6	(黄)明褐色		SP893	〃		1368
76	〃		○	○	13.8・2.6・9.9	褐色	○	SP1059	〃		1264
77	〃		○		・	〃		SP1642	〃		1420
78	〃		○		15.4・2.55・9.8	明褐色		SP1642	〃		1420
79	〃		○		15.0・2.6・11.6	〃	○	SP879	〃		1361
80	〃		○		14.6・3.5・11.0	淡褐色		SP886	〃		1362
113	皿		○		8.8・1.35・	明褐色		SP719	Fig.59		1298
114	〃		○		9.0・1.05・	〃		〃	〃		1293
115	〃		○		8.75・1.0・7.0	〃		〃	〃		1299
116	〃		○		9.2・1.0・8.2	〃		〃	〃		1289
117	〃	(?)	○		9.6・1.25・7.6	褐色		〃	〃		1295
118	〃		○		9.3・1.05・7.6	茶褐色		〃	〃		1288
119	〃		○		9.55・1.35・8.4	褐色		〃	〃		1296
120	〃		○		9.4・1.25・7.25	明褐色		〃	〃		1285
121	〃		○	○	9.75・0.9・8.6	褐色	○	〃	〃		1286
122	〃		○		8.35・1.0・7.45	明褐色		〃	〃		1297
123	〃		○		8.5・1.2・6.4	褐色		〃	〃		1294
124	〃		○	○	9.05・1.0・8.0	〃		〃	〃		1290
125	〃		○		8.95・1.0・7.4	(赤)褐色		〃	〃		1292
126	〃		○		9.75・0.85・8.6	灰褐色		〃	〃		1300
127	〃		○		8.95・0.95・7.95	明褐色		〃	〃		1291
128	〃		○		8.95・1.05・7.4	明褐白色		〃	〃		1287
129	坏		○		11.9・2.0・9.6	褐色		〃	〃		1301
134	皿		○		9.0・1.3・	〃		SP775	〃		1309
135	〃		○		8.6・1.15・7.4	〃		〃	〃		1312
136	〃		○		9.1・1.0・7.0	明褐色		〃	〃		1311
137	坏		○		14.1・2.15・10.6	〃		〃	〃		1313
138	皿		○		8.6・1.25・6.65	明褐白色		SP778	Fig.60		1333
139	〃		○		9.0・1.15・7.4	〃		〃	〃		1332
140	〃		○	○	9.35・1.25・8.2	褐色	○	〃	〃		1334
141	坏		○		14.4・2.25・11.0	〃	○	〃	〃		1335

(?) は可能性有り

Tab. 11　第II～IV区出土土師器（皿・坏）法量一覧表（その1）

遺物No	名称	切り離しの区分 ヘラ切り	糸切り	内底横ナデの有無	法量(cm) 口径・器高・底径	調整その他の特徴 色調	底部板目の有無	出土遺構名	Fig,No	PL,No	遺物登録番号(8403は省略)
143	皿		○		9.0 ・0.95・	明褐白色		S P 782	Fig.60		1314
144	〃		○		8.95・0.95・8.1	(灰)褐色		〃	〃		1316
145	〃		○		9.6 ・1.15・8.2	明褐色		〃	〃		1315
146	坏		○		10.45・3.1・8.6	暗灰褐色		〃	〃		1317
147	皿		○		9.0 ・1.25・8.0	褐色		S P 788	〃		1326
148	〃		○		9.35・1.15・6.8	明褐色		〃	〃		1322
149	〃		○		8.95・1.0 ・7.4	褐色		〃	〃		1323
150	〃		○		9.4 ・1.15・7.0	〃		〃	〃		1319
151	〃		○		8.95・1.15・7.45	明褐色		〃	〃		1321
152	〃		○		9.0 ・1.1 ・7.6	褐色		〃	〃		1320
153	〃		○		9.05・1.0 ・7.8	明褐色		〃	〃		1325
154	〃		○		9.0 ・1.25・7.6	褐色		〃	〃		1324
155	坏		○		・2.8 ・	明褐色		〃	〃		1328
156	〃		(?)		15.2・2.8 ・11.6	暗灰褐色		〃	〃		1327
157	皿		○		8.05・1.15・6.6	褐色		S P 860	〃		1356
158	〃		(?)		9.0 ・1.15・7.4	〃		〃	〃		1353
159	〃		○		8.8 ・0.9 ・7.8	〃		〃	〃		1355
160	〃		(?)		8.95・1.1 ・3.7	(赤) 〃		〃	〃		1354
161	〃		(?)		・ ・	淡褐色		S P 890	〃		1364
162	〃		(?)		・ ・	暗褐色		〃	〃		1363
163	〃		○		9.6 ・0.9 ・	褐色		S P 926	〃		1372
164	坏		(?)		14.3・2.1 ・	明褐色		〃	〃		1373
165	皿		○		8.8 ・0.9 ・7.6	〃		S P 978	〃		1378
166	〃		○		8.75・1.0 ・8.0	褐色		〃	〃		1379
167	〃		○		・1.45・	明褐色		S P 979	〃		1381
168	〃		○		9.4 ・1.2 ・8.0	明褐白色		〃	〃		1380
169	〃		○		8.8 ・1.15・7.8	明褐色		S P 980	〃		1382
170	〃		(?)		8.6 ・1.0 ・7.0	(赤)褐色		〃	〃		1383
171	〃		○		8.55・1.15・6.2	褐色		〃	〃		1384
172	〃		○		9.3 ・1.25・8.05	〃		S P 1009	〃		1260
173	坏		○	○	14.4・2.5 ・10.5	〃		〃	〃		1261
174	皿		○		9.0 ・0.9 ・7.75	〃		S P 1155	〃		1274
175	〃		○		9.0 ・1.0 ・7.6	〃		〃	〃		1273
177	坏		○		15.6・3.1 ・11.0	〃		S P 1170	〃		1278
178	皿		○		8.4 ・0.9 ・7.4	明褐色		S P 1260	Fig.61		1393
179	坏		○	○	14.2・3.1 ・10.0	褐色	○	〃	〃		1392
180	〃		○	○	14.6・3.1 ・9.8	明褐色		〃	〃		1391
181	皿		○		8.0 ・1.2 ・6.4	褐色		S P 1297	〃		1399
182	〃		○		8.4 ・1.0 ・7.2	明褐色		〃	〃		1401
183	〃		○		8.6 ・1.35・7.0	褐色		〃	〃		1398
184	〃		○		8.6 ・1.05・6.8	〃		〃	〃		1400
185	〃		○		8.6 ・1.25・7.0	明褐色		S P 1299	〃		1403
186	〃		○		8.65・1.05・7.0	〃		〃	〃		1402
187	〃		○		9.0 ・1.25・7.8	〃		S P 1305	〃		1406
188	〃		○	○	9.05・1.25・7.6	褐白色		〃	〃		1405
189	〃		○		9.6 ・1.0 ・7.8	褐色		〃	〃		1204
191	〃		○		8.85・1.0 ・7.2	〃		S P 1616	〃		1414
192	〃		○		9.0 ・1.1 ・7.1	〃		〃	〃		1417
193	〃		○		8.95・0.9 ・7.8	〃		〃	〃		1415
194	〃		○		9.6 ・1.15・8.2	〃		〃	〃		1416
195	〃		○		9.0 ・1.05・7.4	〃		S P 1643	〃		1422
196	〃		○		9.0 ・1.05・7.6	〃		〃	〃		1421
197	〃		○		9.2 ・1.05・7.65	〃		〃	〃		1423
200	〃		○	○	9.35・1.0 ・7.2	暗褐色		S P 1645	〃		1426
201	〃		○	○	9.2 ・1.05・8.0	褐色		〃	〃		1425
202	坏		○		14.3・2.7 ・10.7	〃		〃	〃		1427
209	皿		○		9.35・1.25・7.4	灰褐色		S D 04	Fig.63		1048
210	〃	(?)	○		9.25・1.35・8.1	(赤)明褐色		〃	〃		1049
211	〃		○		9.2 ・1.3 ・	明褐色		S D 11	〃		1088
212	〃		○		9.45・1.2 ・	褐色		〃	〃		1085
213	〃		○		8.2 ・1.0 ・6.4	〃		〃	〃		1057
214	〃		○		9.2 ・1.4 ・7.2	〃		〃	〃		1081
215	〃		○		8.8 ・1.1 ・7.0	〃		〃	〃		1075
216	〃		(?)		8.8 ・1.15・6.4	明褐色		〃	〃		1059
217	〃		○		8.5 ・1.2 ・6.6	褐色		〃	〃		1086
218	〃		(?)		8.8 ・1.2 ・7.4	明褐色		〃	〃		1056
219	〃		○		9.05・1.05・8.05	〃	○	〃	〃		1052
220	〃		○		9.15・1.15・7.8	褐色	○	〃	〃		1053
221	〃	○			9.35・1.15・7.8	明褐色		〃	〃		1054
222	〃		○		9.4 ・1.15・7.2	〃		〃	〃		1055
223	〃		○	○	9.0 ・1.2 ・7.8	〃		〃	〃		1205
224	〃	○			8.8 ・1.25・7.6	褐色		〃	〃		1077
225	〃	○			9.0 ・0.9 ・7.2	明褐色		〃	〃		1082
226	〃	○			9.6 ・1.7 ・8.0	〃		〃	〃		1080
227	〃	○			9.1 ・1.2 ・	〃		〃	〃		1090
228	〃	○			9.0 ・1.15・	褐色		〃	〃		1091
229	〃		○		8.2 ・1.2 ・7.4	〃		〃	〃		1066
230	〃		○		8.75・1.0 ・6.4	〃		〃	〃		1064
231	〃	○			9.55・1.1 ・7.8	灰褐色	○	〃	〃		1062
232	〃				8.85・1.15・6.8	明褐色		〃	〃		1206
233	〃	(?)	○		9.8 ・1.25・8.8	〃		〃	〃		1061
234	〃	○			9.45・1.25・7.6	褐色		〃	〃		1063
235	〃		○		9.5 ・1.15・8.3	明褐色		〃	〃		1065
236	〃	(?)	○		9.35・1.25・7.6	褐色		〃	〃		1067
237	〃		○		9.1 ・1.2 ・6.8	〃		〃	〃		1060
238	〃	(?)	○		9.4 ・1.2 ・8.6	〃		〃	〃		1058
239	〃	○			9.4 ・1.4 ・8.0	〃		〃	〃		1083
240	〃	○			8.8 ・1.25・7.0	〃		〃	〃		1076
241	〃	○			9.6 ・1.35・8.0	暗赤褐色		〃	〃		1087
242	〃				9.0 ・1.35・	褐色		〃	〃		1092
243	〃		○		8.6 ・1.2 ・7.4	(橙)明褐色		〃	〃		1079
244	〃		○		8.8 ・1.1 ・7.0	褐色		〃	〃		1078
245	〃		○		8.25・1.05・7.2	明褐色		〃	〃		1072
246	〃		○		8.45・1.1 ・6.4	〃		〃	〃		1070
247	〃		○		9.0 ・1.15・6.8	明赤褐色		〃	〃		1071
248	〃		○		9.25・1.2 ・7.8	褐色		〃	〃		1068
249	〃	○			9.45・1.3 ・7.6	褐白色		〃	〃		1074
250	〃		○		・1.25・7.4	(赤)褐色		〃	〃		1069
251	〃	○			8.45・1.0 ・7.6	(褐)灰褐色		〃	〃		1073
252	〃				9.6 ・1.1 ・8.6	褐色		〃	〃		1084
253	〃				9.0 ・1.3 ・7.2	〃		〃	〃		1089
259	坏		○		14.2・2.2 ・11.0	明褐色		〃	Fig.65		1098
260	〃	○		○	14.4・3.1 ・10.8	褐色	○	〃	〃		1093
261	〃		○	○	14.8・3.1 ・11.4	〃	○	〃	〃		1281

Tab, 12　第II～IV区土師器（皿・坏）法量一覧表（その2）

遺物No	名称	切り離しの区分 ヘラ切り	糸切り	内底横ナデの有無	法量(cm) 口径・器高・底径	調整その他の特徴 色調	底部敷目の有無	出土遺構名	Fig,No	PL,No	遺物登録番号(8403は省略)
262	坏		○		15.4・3.0・11.4	褐色		SD11	Fig.65		1209
263	〃		○		15.1・3.1・9.6	(黄橙)褐色		〃	〃		1094
264	〃		○		15.0・2.9・12.8	褐色		〃	〃		1096
265	〃		○		17.0・3.1・12.6	明褐色		〃	〃		1208
266	〃		○		15.0・2.55・	褐色		〃	〃		1097
267	〃	○			15.0・3.45・	明褐色		〃	〃		1095
315	皿		○		9.0・1.0・7.05	褐色		SD22	Fig.69		1009
316	〃		○		7.4・1.1・6.65	〃		〃	〃		1031
317	〃		○		8.9・1.15・8.0	〃		〃	〃		1011
318	〃		○	○	8.6・1.15・6.6	明褐色	○	〃	〃		1007
319	〃		○		8.8・1.2・6.8	〃		〃	〃		1014
320	〃		○		8.8・1.15・6.6	〃		〃	〃		1004
321	〃		○		8.85・1.1・6.25	褐色		〃	〃		1028
322	〃		○		8.55・1.0・7.8	〃		〃	〃		1030
323	〃		○		8.65・1.1・7.4	〃		〃	〃		1029
324	〃		○	○	9.2・1.2・7.1	明褐色		〃	〃		1001
325	〃		○	○	9.0・0.95・8.0	〃		〃	〃		1005
326	〃		○		8.85・1.4・7.0	褐色		〃	〃		1008
327	〃		○		8.45・1.15・7.0	〃		〃	〃		1018
328	〃		○		9.6・1.15・7.6	明褐色		〃	〃		1003
329	〃		○		9.0・1.1・7.4	〃		検	〃		1020
330	〃		○		8.35・0.9・7.0	褐色		SD22	〃		1032
331	〃		(?)		9.0・1.15・6.6	灰白褐色		〃	〃		1024
332	〃		○		8.8・1.05・7.2	明褐色		〃	〃		1025
333	〃		○		9.2・1.0・7.6	〃		〃	〃		1026
334	〃		○	○	9.8・1.4・7.8	〃	○	〃	〃		1006
335	〃		○	○	9.8・1.35・8.15	〃		〃	〃		1002
336	〃		○		9.4・1.2・7.8	褐色		〃	〃		1027
337	〃	(?)	○		9.6・0.95・9.0	〃		〃	〃		1012
338	〃	○			8.6・1.1・8.2	暗褐色		〃	〃		1016
339	〃	(?)	○		9.2・1.15・8.0	明褐色		〃	〃		1015
340	〃				9.25・1.15・7.2	〃		〃	〃		1023
341	〃				9.75・1.0・7.8	〃		〃	〃		1022
342	〃	○	(?)		9.4・1.0・8.8	褐色		〃	〃		1017
343	〃	○			9.85・1.25・8.0	〃		〃	〃		1013
344	〃				9.8・1.05・8.4	明褐色		〃	〃		1019
345	〃		○	○	10.0・1.2・8.0	〃		〃	〃		1010
346	〃				11.15・1.35・9.2	〃		〃	〃		1021
347	〃		○		14.0・2.15・10.6	〃		〃	〃		1033
348	〃		○	○	14.0・2.4・11.4	〃		〃	〃		1034
349	〃				13.4・2.7・10.0	赤褐色		〃	〃		1035
350	〃				13.4・2.25・10.0	(橙)褐色		〃	〃		1038
351	〃				13.25・2.6・10.0	明褐色		〃	Fig.70		1041
352	〃				13.5・2.6・10.0	褐色		〃	〃		1040
353	〃		○		13.2・2.4・10.0	明褐色		〃	〃		1042
354	〃		○		13.75・2.4・11.0	〃		〃	〃		1043
359	〃				12.8・2.4・9.4	〃		〃	〃		1039
360	〃		○		13.4・2.5・9.8	赤褐色		〃	〃		1037
361	〃				15.0・3.0・11.0	〃		SP1643	〃		1036
379	皿		○		8.3・1.1・7.6	明褐色		SD25	Fig.71		1047
380	〃		○		9.5・1.2・7.8	〃		〃	〃		1046
381	〃		○	○	9.6・1.15・8.6	〃		〃	〃		1045
382	〃		○	○	9.6・1.1・8.0	〃		〃	〃		1044
383	〃		○		9.0・1.05・7.3	暗褐色		SD33	〃		1242
384	〃		○		9.55・1.2・8.0	明灰褐色		〃	〃		1050
385	〃	(?)	○		9.6・1.25・8.1	明褐色		〃	〃		1051
389	〃		○		9.0・1.25・7.0	〃		SD47	Fig.72		1471
390	坏		○		13.8・2.6・9.1	〃		SD53	〃		1467
391	〃		○	○	14.0・2.3・	〃		SD52	〃		1444
392	〃		○	○	13.5・2.3・10.15	〃	○	SD53	〃		1468
396	〃		○		14.0・2.45・10.1	明黄褐色		SE03	Fig.73		1450
397	〃		○		15.0・2.85・11.0	明灰褐色		〃	〃		1449
398	〃		○	○	16.6・2.75・12.8	〃	○	〃	〃		1451
404	皿		○		・ ・	淡褐色		SE09	Fig.74		1143
405	〃				・ ・	〃		〃	〃		1144
406	〃				・ ・	褐色		〃	〃		1145
407	〃				・ ・	白褐色		〃	〃		1141
408	〃		○		・ ・	暗褐色		〃	〃		1142
409	〃		○		・ ・	淡黄褐色		〃	〃		1146
410	〃				9.6・1.2・7.8	明褐色		〃	〃		1138
411	〃		○		9.0・0.9・8.0	淡褐色		〃	〃		1137
412	坏	○		○	11.2・2.6・12.1	〃		〃	〃		1135
413	皿		○		9.0・1.1・7.7	明褐色		〃	〃		1161
414	〃				9.4・1.2・8.4	白褐色		〃	〃		1140
415	〃		○		11.2・1.2・7.6	〃		〃	〃		1139
416	坏				・ ・			〃	〃		1157
418	〃		○	○	13.4・2.2・11.0	褐色	○	〃	〃		1156
419	〃		○	○	13.45・2.55・10.0	明褐色	○	〃	〃		1154
420	〃		○	○	14.1・2.7・10.4	〃	○	〃	〃		1162
421	〃		○	○	12.0・3.1・10.0	〃	○	〃	〃		1134
422	〃		○		13.2・2.65・9.0	暗褐色		〃	〃		1153
423	〃		○	○	13.9・2.4・10.8	明褐色	○	〃	〃		1152
424	〃		○		14.75・2.45・10.5	〃		〃	〃		1155
425	〃		○		15.4・2.15・10.6	〃		〃	〃		1158
433	皿		○		9.0・0.95・	暗灰褐色	○	SE12	Fig.75		1173
434	〃		○		8.4・0.9・6.4	明褐白色		〃	〃		1168
435	〃		○		8.6・1.0・6.8	〃		〃	〃		1169
436	〃		○		8.95・1.15・7.0	褐色		〃	〃		1133
437	〃		○		8.45・0.95・8.0	〃		〃	〃		1132
438	〃		○		8.55・0.7・7.2	〃		〃	〃		1167
439	〃		○		8.8・0.9・7.1	明褐色		〃	〃		1170
440	〃		○		8.45・1.05・7.0	暗灰褐色		〃	〃		1165
441	〃		○		8.45・0.9・6.8	明褐色		〃	〃		1166
442	〃		○		8.5・1.25・7.0	褐色		〃	〃		1148
443	〃		○		9.6・1.05・8.6	〃		〃	〃		1149
444	〃		○		8.95・1.2・7.0	〃		〃	〃		1150
445	〃		○		8.6・1.0・8.4	〃		〃	〃		1131
446	坏		○		14.1・2.5・10.2	〃		〃	〃		1147
447	〃		○	○	14.3・2.5・10.5	〃	○	〃	〃		1172
448	〃		○	○	14.8・2.35・10.8	暗褐色		〃	〃		1171
459	皿		○		8.8・1.1・8.4	〃		SE13	Fig.76		1250
460	坏		○		13.85・2.35・10.3	明褐色		〃	〃		1254
461	〃		○	○	14.5・2.5・10.6	褐色	○	〃	〃		1251
462	〃		○	○	14.05・2.7・9.6	明褐色	○	〃	〃		1252

Tab, 13　第II～IV区土師器（皿・坏）法量一覧表（その3）

遺物No	名称	切り離しの区分 ヘラ切り	糸切り	内底横ナデの有無	法量(cm) 口径・器高・底径	調整その他の特徴 色調	底部板目の有無	出土遺構名	Fig,No	PL,No	遺物登録番号(8403は省略)
463	坏		○		14.3・2.4・10.8	褐色		SE13	Fig.76		1253
464	〃		○		15.1・2.7・11.6	明褐色		〃	〃		1255
466	皿	○			9.4・1.35・7.2	〃		SE14	〃		1258
467	〃		○		8.65・1.1・	褐白色		SE12	〃		1246
468	〃		○		9.0・1.1・7.4	褐色		SE19	〃		1490
469	〃		○		8.85・1.05・7.1	〃		〃	〃		1502
471	坏		○	○	14.35・3.3・9.3	〃	○	SE15	〃		1481
476	皿		○		9.35・1.3・7.2	明褐色		SE17	Fig.77		1434
477	〃		○	○	8.35・0.8・7.6	褐色	○	SE21	〃		1435
478	〃		○	○	9.05・1.15・7.2	明褐色	○	〃	〃		1245
479	〃		○		9.2・1.05・7.4	〃	○	〃	〃		1433
480	〃		○	○	8.35・0.8・7.4	褐色	○	〃	〃		1210
481	坏		○	○	13.15・2.0・10.1	明褐色	○	〃	〃		1211
482	〃		○		14.0・2.3・10.6	暗灰褐色		〃	〃		1212
484	〃		○		14.4・3.3・10.4	褐色	○	SE28	〃		1491
487	皿		○		8.1・1.0・7.1	〃	○	SX06	Fig.78		1441
489	〃		○		8.8・0.9・7.5	暗褐色		SX01	Fig.79		1440
490	坏	(?)	○	○	13.6・2.3・10.3	褐色		〃	〃		1442
491	〃		○		13.95・2.45・9.8	明褐色		〃	〃		1446
493	皿		○		8.8・1.35・7.8	褐色		SX03	〃		1445
494	坏		○		13.95・2.5・9.6	黒褐色		〃	〃		1447
495	〃		○		14.05・2.75・9.1	褐色		SX06	〃		1448
497	〃		○		14.3・2.65・11.1	明褐色		SX18	〃		1452
499	皿		○		9.1・1.15・7.1	〃		SX23	〃		1136
504	〃				9.0・1.1・7.6	淡赤褐色		SX37	〃		1214
505	坏		○		13.6・2.6・9.8	(赤)褐色		〃	〃		1213
506	〃		○		13.95・2.5・10.4	(赤)明褐色		〃	〃		1459
507	〃		○	○	13.4・2.7・10.0	褐色	○	〃	〃		1460
508	〃		○	○	16.5・3.05・11.0	明褐色		SX38	〃		1305
509	〃		○	○	14.9・2.8・10.15	〃		SX40	Fig.80		1215
510	皿		○		8.4・1.25・7.8	褐色		SX52	〃		1220
511	〃		○		9.7・1.15・7.8	明褐色		〃	〃		1216
512	〃		○		8.95・1.05・8.0	褐色		〃	〃		1217
513	〃				9.85・1.0・8.6	(灰)褐色		〃	〃		1218
514	〃		○		9.25・1.15・8.8	褐色		〃	〃		1219
515	〃	○			9.95・1.1・7.8	明褐色		〃	〃		1461
516	〃		○	○	8.95・1.0・7.4	褐色		〃	〃		1463
518	坏		○		13.5・2.55・8.4	暗褐色		〃	〃		1223
519	〃		○	○	17.15・2.35・14.0	褐色		〃	〃		1221
522	〃				13.6・2.75・	(灰)褐色		〃	〃		1316
523	〃		○		13.2・2.8・9.0	暗褐色		SX52	Fig.80		1222
524	〃		○		13.25・2.7・0.6	褐色	○	〃	〃		1224
525	〃		○	○	12.8・2.7・9.0	明褐色	○	〃	〃		1464
526	〃		○	○	13.6・3.0・7.05	暗褐色	○	〃	〃		1462
529	皿		○		7.65・1.25・6.2	白褐色		SX53	〃		1227
530	〃		○		8.65・1.35・6.8	明褐色		〃	〃		1229
531	〃		○		8.8・1.45・7.0	(白)褐色		〃	〃		1228
532	〃		○		9.0・1.25・8.2	褐色		〃	〃		1226
533	〃		○		8.8・1.1・7.8	明褐色		〃	〃		1225
534	坏				14.0・3.1・10.8	〃		〃	〃		1231
540	皿		○	○	8.2・1.1・6.4	褐色	○	SX54	Fig.81		1469
541	〃		○		9.3・1.15・	〃		SX55	〃		1473
542	坏		○		14.0・2.6・	〃		〃	〃		1472
543	皿		○	○	8.75・1.0・7.4	〃	○	SX56	〃		1475
544	〃		○		8.6・1.1・	〃		〃	〃		1474
547	坏		○		15.0・2.3・9.2	明褐白色		〃	〃		1476
548	〃		○	○	15.0・2.6・10.5	明褐色	○	〃	〃		1477
549	皿		○		・・	暗赤褐色		SX62	〃		1367
550	〃		○		9.2・1.3・7.0	(淡)暗褐色		〃	〃		1366
551	〃		○		10.0・1.5・9.0	暗褐色		〃	〃		1365
554	〃		○	○	9.35・1.15・6.9	明褐色		SX67	〃		1482
555	坏		○		13.45・2.2・8.8	暗褐色		SX68	〃		1483
556	〃		○		14.0・2.3・	明褐色		SX71	〃		1485
559	〃		○		13.3・2.55・9.2	暗褐色		SX78	〃		1487
560	〃		○		14.35・2.45・10.8	明褐色		〃	〃		1488
561	〃		○	○	14.55・3.1・11.4	暗褐色	○	〃	〃		1236
563	〃		○		14.0・3.0・	褐色	○	SX81	〃		1489
572	皿		○		8.25・0.85・6.8	〃		整地層	Fig.84		1558
573	〃		○		8.2・0.95・7.0	明褐色		焼土層	〃		1567
574	〃		○	○	8.7・1.05・7.6	褐色	○	整地層	〃		1553
575	〃		○		9.0・1.05・7.6	〃	○	乞含層	〃		1559
576	〃		○		9.35・0.9・8.0	〃		整地層	〃		1556
577	〃				9.4・0.9・8.0	〃		〃	〃		1554
578	〃				9.25・1.0・8.2	明褐色		〃	〃		1555
579	〃		○		9.25・1.15・8.4	〃	○	焼土層	〃		1561
580	坏		○		15.0・2.65・12.0	〃		整地層	〃		1575
592	皿		○	○	8.05・1.05・6.2	〃		検出面	Fig.85		1552
593	脚付皿				10.4・2.2・脚6.45	灰褐白色		〃	〃		1576
594	坏		○		13.5・2.5・9.8	明褐色		乞含層	〃		1202
648	皿		○		8.2・1.05・7.0	褐色		〃	Fig.88		1102
649	〃		○		8.8・1.15・7.6	暗褐色		〃	〃		1099
650	〃		○		8.8・0.9・7.0	褐色		〃	〃		1100
651	〃		○		9.0・1.05・7.6	明褐色	○	〃	〃		1101
652	〃		○		8.6・1.1・6.6	明褐白色		〃	〃		1107
653	〃				8.8・1.05・7.6	褐色		〃	〃		1104
654	〃		○		8.6・0.85・7.4	明褐色		〃	〃		1105
655	〃		○		8.55・1.0・7.3	〃		〃	〃		1108
656	〃		○		9.0・1.05・7.6	褐色		〃	〃		1103
657	〃		○		9.2・1.0・8.8	明褐色		〃	〃		1106
658	〃		○		8.8・1.0・8.0	褐色		〃	〃		1109
659	坏		○		12.2・2.6・10.45	明褐色		〃	〃		1113
660	〃		○		14.8・2.65・10.2	褐色		〃	〃		1112
694	皿				9.0・1.15・7.4	〃		SP605	Fig.108		1188
695	〃		○		9.45・1.15・8.0	〃		〃	〃		1189
696	坏		○		15.2・2.4・12.0	暗褐色		〃	〃		1190
697	皿		○		10.1・1.15・8.6	褐色		SP608	〃		1191
698	坏		○		12.6・2.4・8.8	〃		〃	〃		1192
703	皿		○		8.5・1.1・6.8	明褐白色		SK12	〃		1695
739	坏	○			14.8・3.35・	〃		SD70	Fig.114		1439

Tab, 14　第II～IV区土師器（皿・坏）法量一覧表（その4）

（アミ部分は、最近の瓦用粘土採堀坑）

Fig,90　第Ⅲａ・ｃ区遺構分布全体図（1/200）

Fig.91　第Ⅲｂ区遺構分布全体図（1/200）

V　第III区の調査

概要　第III区は、浄水場敷地の最も西側に位置している。現在の広田の集落の範囲に含まれる地点である。多々良川左岸からは南へ約200m離れた、砂礫層を基盤とする旧自然堤防上に立地している。遺構検出面の標高は約5.1m前後（現地表面は5.4～5.5m）で、第II区と比べると約10～15cmほど低い。

検出された遺構は杭列（SA10)、掘立柱建物（SB101～120)、溝状遺構（SD05・10・19・21・61～67)、井戸（SE31)、土壙（SK10～21)、竪穴遺構（SX101～155、埋甕・石組遺構も含む）などがある。

これらの遺構の年代はSA10が古代後期で、掘立柱建物やSX106等の埋甕、SX120や126などの竪穴遺構は近世江戸時代後期のものである。

(1)　遺構各説

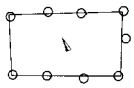
1) 杭列（Fig,90、PL,50付図）

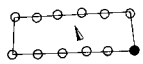
SA10　第III c 区の調査区北側に位置する、溝状遺構SD61内で検出された。調査区西壁からSD61の途切れる東側まで約24mの長さにわたって、85本の杭がSD61の南壁に平行して打たれている。少なくとも杭列の並びは3列あったものと思われる。先後関係は不明であるが、溝状遺構の壁の傾斜に沿って、杭列の並びを少しづつずらしながら打たれているようである。これらの杭の層位的関係は、溝状遺構SD61の中位から下部にかけて堆積している暗灰～黒灰色粘質土層を切っていることから（Fig, 97)、SD61内の土壌堆積がある程度進んだ段階で打たれたものと思われる。またこの黒灰色土を覆う灰～(青)灰色粘質土の途中に一部の残りのよい杭の頭が位置しているものがあることから、この土層が堆積してゆく過程において杭が打たれたことが考えられる。この灰色粘質土下層から出土している板絵、土師器皿（ヘラ切り底)、土師器丸底坏等からみて、平安時代後期頃の所産かと思われる。護岸用の杭列か。

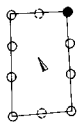
2) 掘立柱建物（Fig,92～96、PL,42・43、Tab,15)

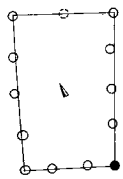
概要　第III区では調査現場、および図上の操作によって確認された掘立柱建物は、20棟である。建物の柱間取りからみた種類は1×2間が1棟、1×3間が3棟、1×4間が1棟、1×5間が1棟、2×3間が10棟、2×4間が3棟、3×4間が1棟である。

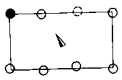
これらの掘立柱建物の分布は、調査範囲が狭いため全体的な傾向は明確ではないが、SD07～10などの小さな溝状遺構で区画された範囲において、数回建変わっている傾向が窺える。さらに小区画の屋敷地がいくつか集まって大きな集落を形成していることが予想される。

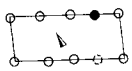

SB 101

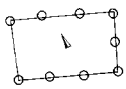

SB 102


SB 103

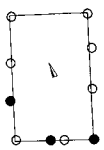

SB 104

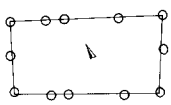

SB 105

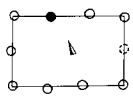

SB 106


SB 107

SB 108


S


SB 110


SB 111

SB101　調査区の北側に位置する。2×3間の東西棟である。平面形は北東隅柱が張り出した長方形。棟方向はN－68°－W。柱の配列は対称的で、ほぼ等間隔である。東西両妻の棟柱は未確認。柱穴は径21～32cm、深さは15～25cm。埋土は暗褐色粘質土。

SB102　SB104の南側に隣接する。1×5間の東西棟である。平面形は南東・南西隅柱が張り出した長方形。棟方向はN－73°－W。柱の配列はほぼ対称的で、柱間隔はやや不規則である。東西両妻の棟柱は未確認。柱穴は径21～40cm、深さは15～35cm。

SB103　SB104の西隣に位置する。1×3間の南北棟である。平面形は西南隅柱がわずかに張り出した長方形。棟方向はN－26°－E。柱の配列は対称的。間隔はややばらつきがある。東西両妻の棟柱は未確認。柱穴は径25～63cm、深さは15～47cm。埋土は暗褐色粘質土。

SB104　2×4間を基本形とする3×4間の南北棟である。棟方向はN－25°30′－E。柱の配列は対称的。間隔はややばらつきがある。南側妻の棟柱は2本。北側妻は未確認。柱穴は径25～38cm。深さは15～30cm。埋土は木炭をわずかに含む暗褐色粘質土。

SB105　1×3間の東西棟である。平面形は端正な長方形。棟方向はN－62°－W。柱の配列は対称的。間隔はややばらつきがある。東西両妻の棟柱は未確認。柱穴は径27～58cm、深さは16～35cm。

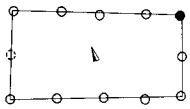
SB106　1×4間の東西棟である。平面形は北西側に歪んだ長方形。棟方向はN－59°30′－W。側柱の配列は対称的。間隔は狭くややばらつきがある。東西両妻の棟柱は未確認。柱穴は径22～42cm、深さ16～35cm。

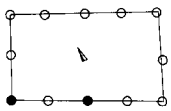
SB107　2×3間の東西棟である。平面形は端正な長方形。棟方向はN－65°30′－W。柱の配列は対称的。間隔は狭くややばらつきがある。西側妻の棟柱は未確認。柱穴は径27～35cm、深さは20～35cm。

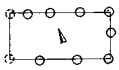
SB108　1×2間の南北棟である。平面形は端正な長方形。南東隅柱はSX108から切られている。棟方向はN－20°－E。柱の配列は対称的。間隔はほぼ均等。東西両妻の棟柱は未確認。柱穴は径22～35cm。

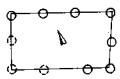
SB109　2×3間の南北棟である。平面形は端正な長方形。棟方向はN－24°－E。北東隅柱はSD21から切られている。柱の配列はほぼ対称に配されている。平面形は端正な長方形。北側妻の棟柱は未確認である。

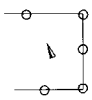
SB110　2×3間の東西棟である。平面形は南東隅柱がやや張り出

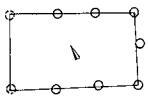

SB112

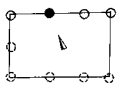

SB113

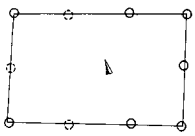

SB114

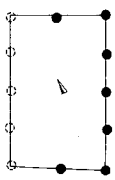

SB115


SB116


SB117


SB118


SB119


SB120

した長方形。棟方向はN－65°－W。南北の側柱のうち、西側妻側の柱はそれぞれ2本寄せている。柱の配列はほぼ対称である。柱穴は径26～42cm、深さ10～28cm。柱根痕跡は10cm。

SB111　2×3間の東西棟である。平面形は端正な長方形で、規模は小さい。棟方向はN－70°－W。竪穴遺構SX103・104を切っている。東側妻の棟柱は未確認である。側柱の配列は対称的である。柱穴は径25～45cm、深さ10～35cm。柱根痕跡は15cm。

SB112　2×4間の東西棟である。平面形は西側梁行が49cmほど長い長方形。棟方向はN－73°－W。Ⅲ区ではSB104・113などとともに規模が大きい建物である。西側妻の棟柱は未確認である。柱の配列は対称。

SB113　2×4間の東西棟である。平面形は東側妻がわずかに長く、東南隅柱が若干張りだした端正な長方形。棟方向はN－64°－W。SB104・112等とともに規模の大きい建物である。溝状遺構SD11・竪穴遺構SX120を切っている。柱の配置は対称的で、柱間隔は均等に配されている。東側妻には2本の柱が配されている。

SB114　1×3間もしくは2×3間の東西棟である。調査区の壁にかかって検出された。平面形は端正な長方形である。規模は小さい。棟方向はN－63°－W。東妻側の棟柱は未確認。その位置に浅い竪穴があるが棟柱の掘り方かどうか不明。柱穴は径30～35cm、深さ13～27cm。

SB115　2×3間の東西棟である。平面形は東南隅柱が内側にはいった長方形。棟方向はN－60°－W。柱の配列は北側柱が平均184cm程の間隔でほぼ均等に配されているが、南側柱はやや不規則である。西南隅柱は竪穴遺構SX　に切られ不明。柱穴の大きさは径30～35cm、深さ15～28cm。

SB116　調査区西壁にかかって検出された。2×3間と考えられる東西棟である。棟方向はN－62°－W。柱の配列は不明。東側妻の棟柱は北側にわずかに寄っている。柱穴の大きさは径30～35cm。

SB117　調査区西壁にかかって検出された。2×3間もしくは2×4間と考えられる東西棟である。棟方向はN－67°－W。柱の配列は対称的で、均等な距離である。東側妻の棟柱は北側にわずかに寄っている。柱穴の大きさは径30～55cm。SK13によって切られている。

SB118　調査区南壁にかかって検出された。2×3間あるいは2×4間の建物または柵の可能性がある。棟方向はN－67°－W。平面形は

長方形。東側柱は溝状遺構 SD75から切られている。柱穴の大きさは径25～35cm。

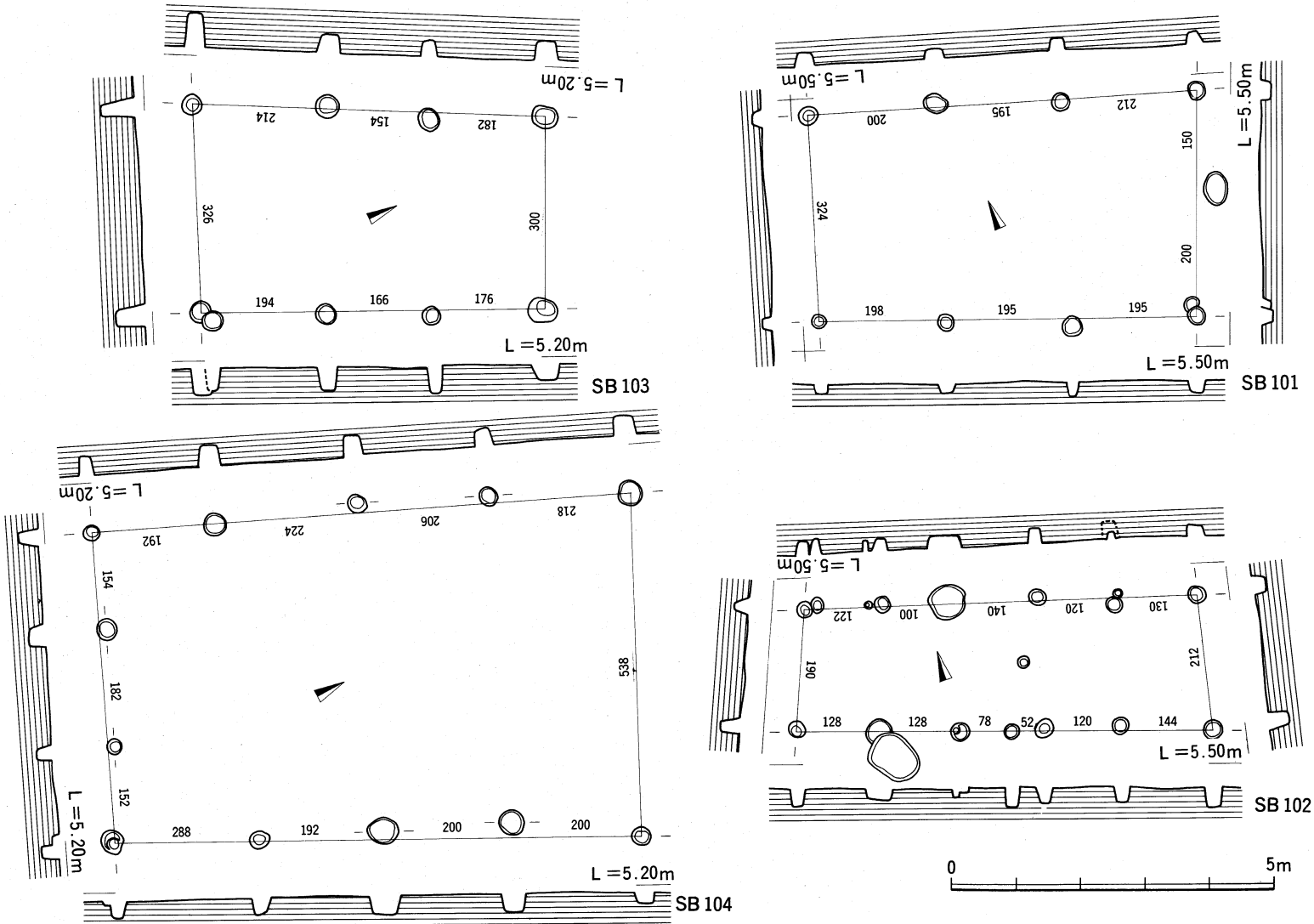
SB119　調査区の南側に位置する。柱穴はすべて検出しておらずやや不正確であるが、2×3間を基本形とする建物と思われる。平面形は南西隅柱がやや張り出した長方形である。竪穴遺構 SX109・119・120と重複している。先後関係は不明。柱穴の大きさは径25～40cm。

SB120　調査区西壁にかかって検出された。2×4間の南北棟である。規模はSB104、112、113などとほぼ同じである。棟方向はN－67°－W。東側柱はほぼ均等な距離で配されている。棟柱の位置からみて、側柱の配置は対称的であると思われる。柱穴は径28～40cm、深さ25～32cm。

建物番号	規模	長軸(cm) 桁行	短軸(cm) 梁行	長軸基軸の方位	床面積(㎡)	柱穴数	備考
SB 101	2×3	北 607 598 南 588	西 東 337 324 | 350	N－68°－W	20.15	9	
102	1×5	北 612 631 南 650	西 東 201 190 | 212	N－73°30′－W	12.79	13	SP598
103	1×3	西 東 543 550 | 536	北 300 313 南 326	N－26°－E	17.05	8	
104	3×4	西 東 830 840 | 820	北 538 513 南 488	N－25°30′－E	42.66	12	
105	1×3	北 552 551 南 550	西 東 298 296 | 300	N－62°－W	26.38	(8)	
106	1×4	北 581 579 南 576	西 東 241 242 | 240	N－59°30′－W	13.74	(10)	
107	2×3	北 505 469 南 432	西 東 326 330 | 322	N－65°30′－W	17.64	9	SP590
108	1×2	西 東 381 382 | 380	北 326 326 南 325	N－20°－E	12.45	6	SP461
109	2×3	西 東 668 668 | 668	北 424 425 南 426	N－24°－E	28.48	9	
110	2×3	北 806 785 南 764	西 東 403 390 | 416	N－65°－W	31.51	10	
111	2×3	北 586 588 南 590	西 東 374 378 | 370	N－70°－W	23.09	9	SP464、588
112	2×4	北 898 906 南 914	西 東 466 490 | 441	N－73°－W	51.91	11	SP462、463、465、468
113	2×4	北 792 802 南 812	西 東 475 464 | 486	N－64°－W	38.23	13	SP457、466
114	1×3	北 (534) 535 南 (536)	西 東 250 (250) | 250	N－63°－W	(13.45)	(10)	SP467、469
115	2×3	北 500 514 南 528	西 東 302 300 | 304	N－60°－W	16.35	(9)	SP595
116	2×3		東 | 408	(N－62°－W)		6(10)	SP456 SB113と同程度の大きさか。
117	2×3	北 6.70 6.77 南 6.84	西 東 4.03 4.12 | 3.94	N－67°－W	27.12	8(10)	
118	2×3	北 5.32 5.31 南 5.30	西 東 3.47 (3.46) | (3.48)	N－67°－W	18.36	6(11)	
119	2×3	北 920 930 南 940	西 東 590 580 | 600	N－70°30′－W	54.32	7(10)	
120	2×4	848	(560)	(N－67°－W)	(47)	(12)	

（　）内の数字は推定値

Tab. 15　第Ⅲ区掘立柱建物計測値表



Fig,92　第Ⅲ区掘立柱建物平面および断面図（SB 101～104）（1/100）その 1

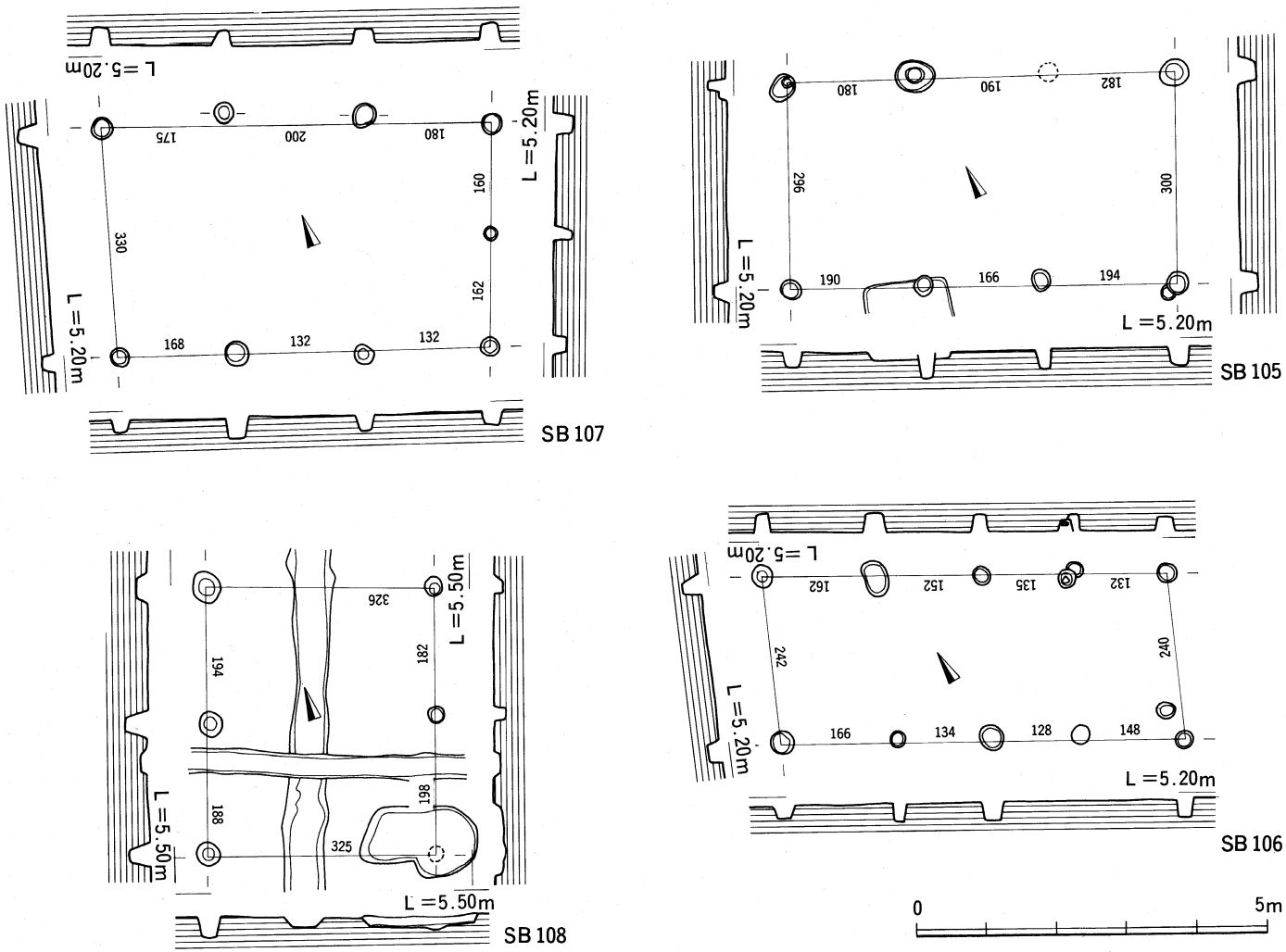


Fig.93　第Ⅲ区掘立柱建物平面および断面図（SB 105～108）（1/100）その 2

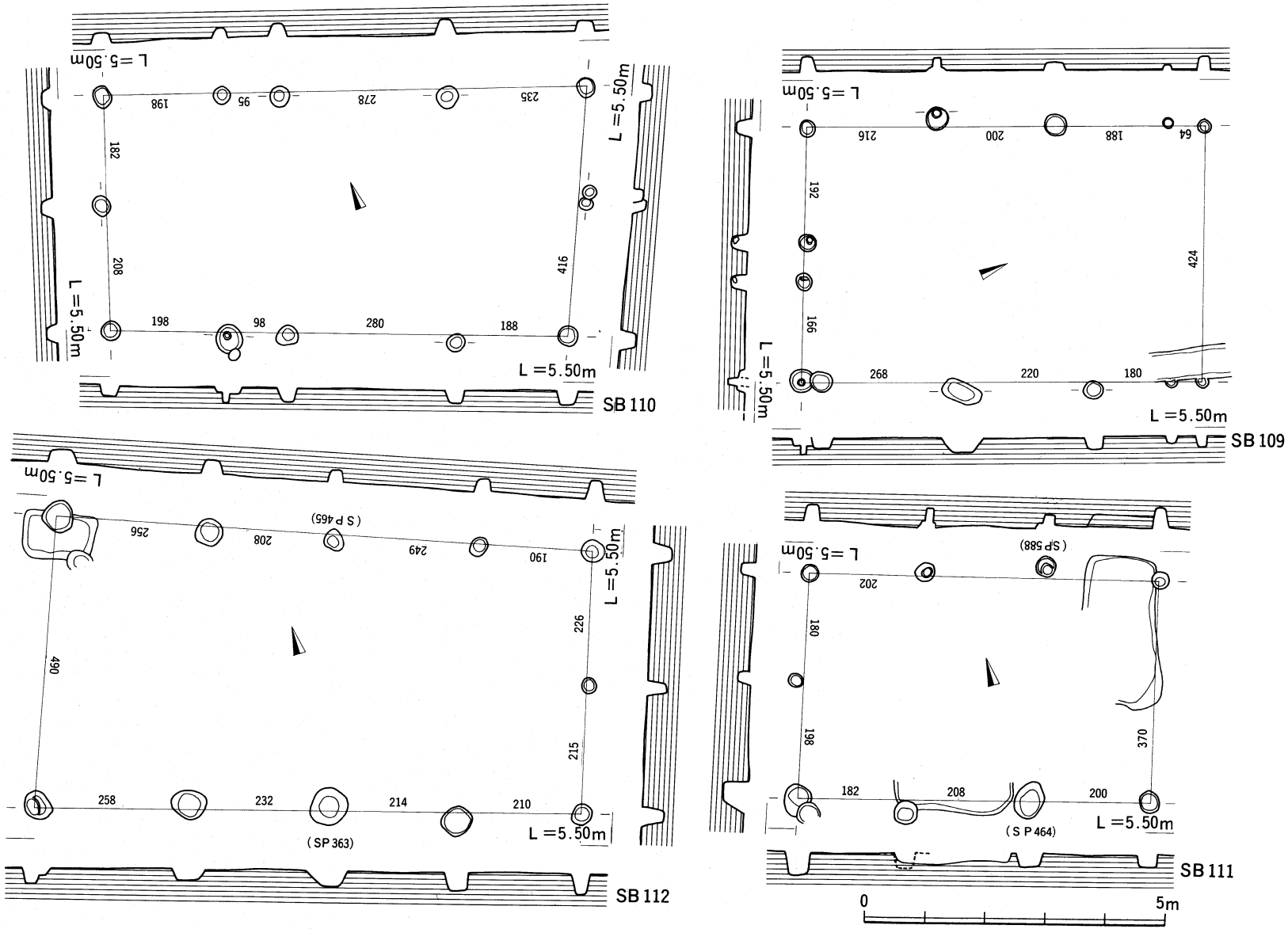


Fig.94　第Ⅲ区掘立柱建物平面および断面図（SB 109～112）（1/100）その3

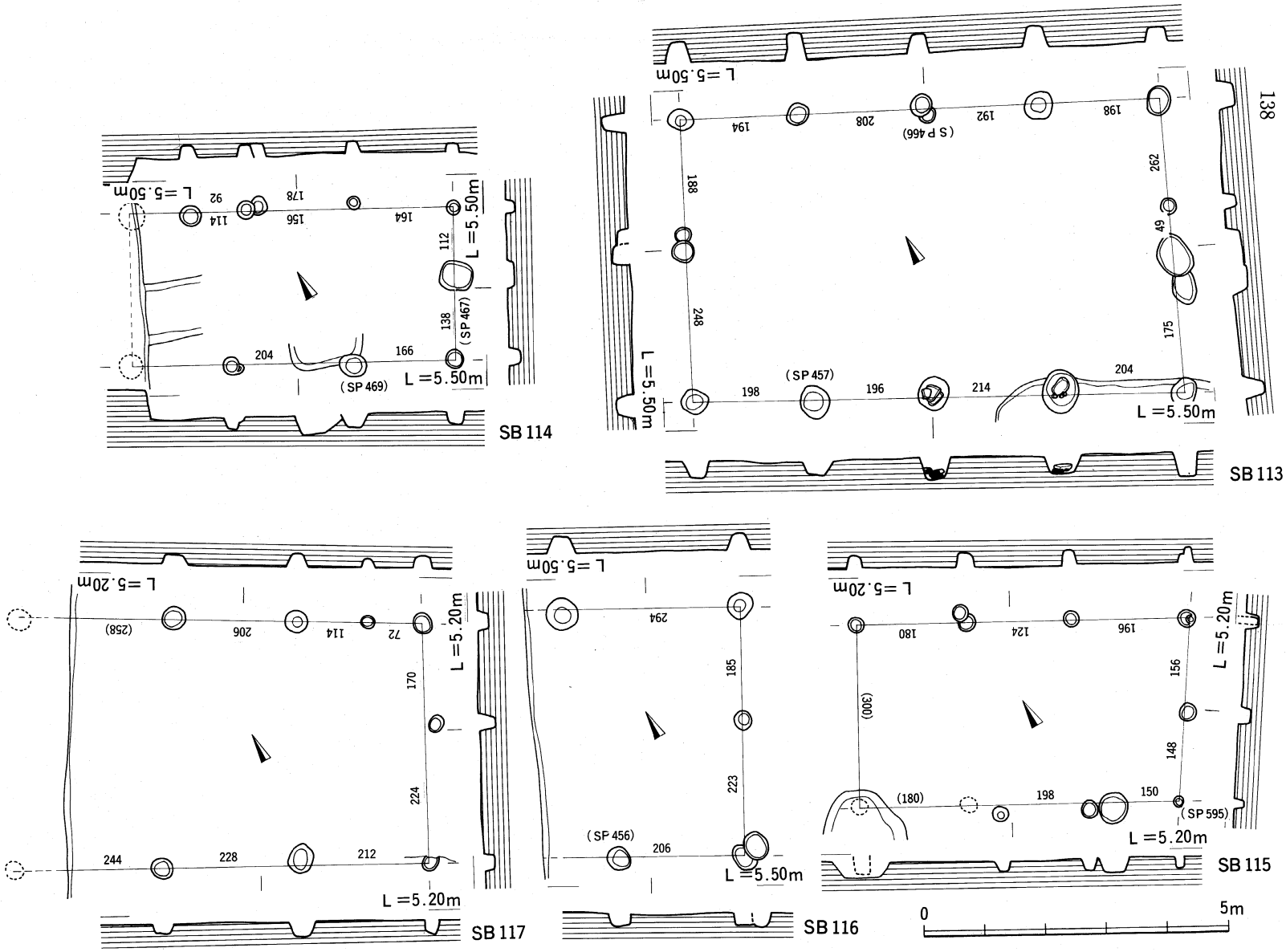


Fig. 95　第Ⅲ区掘立柱建物平面および断面図（SB 113～117）（1/100）その 4

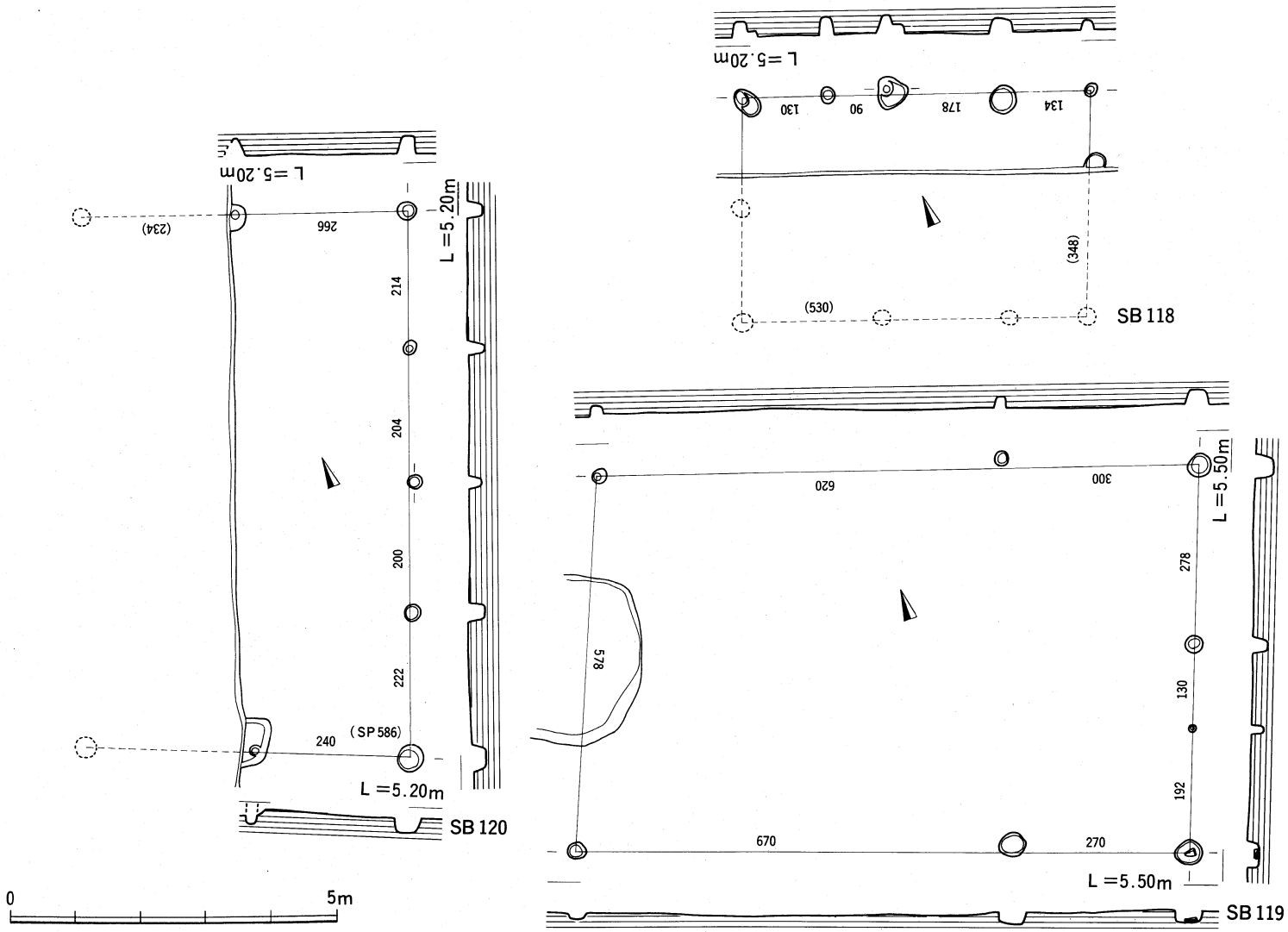
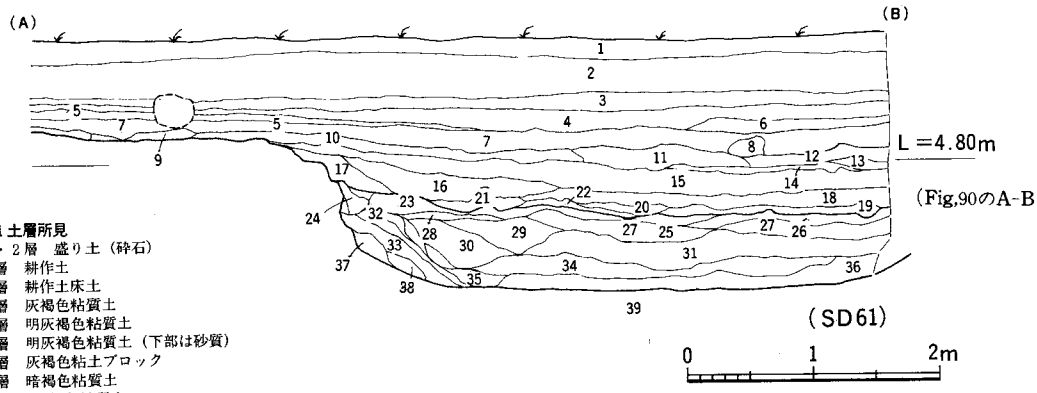


Fig.96　第Ⅲ区掘立柱建物平面および断面図（SB 118～120）（1/100）その5

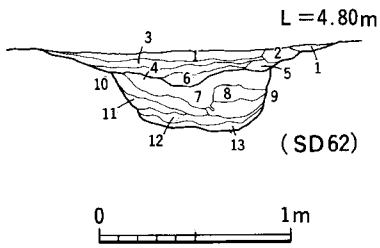
3) 溝状遺構（Fig,97、Tab,16）

概要　第III区では溝状遺構はSD05～10・19・21・SD61～67・75の16条が検出された。遺物の出土量が少ないため時期の比定が難しいが、SD05～09・19・75の6条は近世江戸時代の溝状遺構である。平安時代後期以降と考えられるものは、第IIIｃ区のSD61～67で、そのうちSD61はさらに平安時代の早い時期まで遡る可能性がある。SD10・21は鎌倉時代と思われるが明確でない。江戸時代まで下がる可能性がある。掘立柱建物・井戸等を取り囲んで小さな区画を形成している溝はSD05～08・10・21で、SD62～67は水田に伴う溝状遺構と考えられる。SD61は、現存条里の坪境に沿う大溝であるが、東側は途中で消滅しており、その性格は明確ではない。

以下、個別の溝状遺構について個別に説明するが、遺物の出土状況などの詳細はTab,16を



SD61 土層所見
第１・２層　盛り土（砕石）
第３層　耕作土
第４層　耕作土床土
第５層　灰褐色粘質土
第６層　明灰褐色粘質土
第７層　明灰褐色粘質土（下部は砂質）
第８層　灰褐色粘土ブロック
第９層　暗褐色粘質土
第10層　灰褐色粘質土
第11層　褐色粘質土
第12層　灰褐色砂質土
第13層　灰褐色粘質土
第14層　灰褐色砂質土
第15層　明灰褐色粘質土（細砂を含む）
第16層　暗灰褐色粘質土
第17層　灰褐色砂質土
第18層　灰褐色砂質土（砂の粒子が大きい）
第19層　青灰色粘土混じり灰黄褐色砂質土
この層から板絵出土
第20層　灰褐色砂層
第21層　暗黄褐色粘質土
第22層　灰褐色粘質土
（青灰色粘土混入）
第23層　青灰色粘土層
第24層　暗褐色粘質土
第25層　青灰色砂質土
第27層　青灰色粘土
第28層　青灰色粘土
第29層　暗青灰色粘土
第30層　暗青灰色粘土
第31層　青灰色粘土
第32層　青灰色粘土
第33層　黒褐色粘質土
第34層　暗青灰色粘質土
第35層　青灰色粘土
第36層　黒褐色～暗褐色粘土
第37層　黒褐色粘質土
第38層　青灰色粘質土
第39層　青灰色砂礫層



SD62 土層所見
第１層　薄く青みがかった灰色粘質土
第２層　黄灰色砂層
第３層　灰色砂層
第４層　黄灰色砂層
第５層　黄灰色砂層
第６層　明灰褐色砂層
第７層　明灰色混砂粘質土
第８層　灰色粗砂層
第９層　灰色粘土
第10層　灰色砂層
第11層　灰褐色粘質土と黒褐色粘質土
第12層　青灰色砂層
第13層　青灰色粘土層

Fig,97　第III区溝状遺構（SD61・62）土層断面図（1/60）

参照されたい。

SD05　調査区西壁にかかっている。幅１m、深さ30cm。東端はわずかに北に屈曲している。北側のSD06の東壁とこの溝状遺構の東端の面が合うことからなんらかの関係があると思われる。断面形は逆台形である。埋土は暗褐色粘質土で砂礫が混入する。主軸方位はSB112・119などの棟方向とおおよそ平行である。

SD06　調査区西壁に平行に沿って検出された。SD19から切られている。SD05とは連続していないが、屋敷地を画する溝状遺構の可能性がある。埋土は暗褐色粘質土。

SD07　調査区の北側に位置する。SD07と08は同一の溝状遺構かもしくは、SD08が07を切っている可能性がある。幅は30～40cm、深さは20～25cmである。埋土は暗灰色。水田に伴う溝状遺構の可能性がある。

SD08　SD07の南端近くに位置している。L字型に屈曲している。おそらく、SB103・105を取込んで、小区画を形成しているものと思われる。南西方向に約３m延びるが途中で消滅している。方向を同じくして柵列がやや南側に続いている。

SD09　調査区の中央からやや南に位置している。掘立柱建物SB113、SX110に切られている。またSB112・SD10を切っている。幅40～45cm、深さ15～20cm。東側で自然消滅している。埋土は暗灰色。断面形は浅いU字型。水田に伴う畦溝か。

SD10　調査区の中央からやや南寄りの地点に位置している。SD09・SX107によって切ら

Fig.No	PLNo	調査区	遺溝No	調査時No	出土遺物	出土遺物 Fig.No	備考
		Ⅲb	SD05	SD19	土師器―皿 輸入陶器、甕 近世染付		
		〃	SD06	SD20	遺物なし		
108		〃	SD07	SD21	青磁―皿（同安）	108－700	
		〃	SD08	SD22	遺物なし		
		〃	SD09	SD23	遺物なし		
		〃	SD10	SD24	土師器―坏、小片　粘土塊 土師質土鍋 陶器――鉢、小片 白磁――不明小片		
98		Ⅲb	SD19	SD33	青磁――(龍泉)碗Ⅰ　土師器―坏、皿Ⅱ 須恵質―捏鉢　弥生土器　近世擂鉢、染付　粘土塊 国産陶器　近代陶器　炭	62－208	
		〃	SD21	SD35	青磁―(龍泉)碗Ⅰ　白磁―碗Ⅵ 皿Ⅱ		
					須恵器―坏　瓦質土器―甕　土師匠質土器―甕		
97		Ⅲc	SD61	SD3802	土師器―坏、不明小片　陶器―小片 弥生土器　瓦　黒曜石	107－693	
97		〃	SD62	SB3803	土師器不明小片		
		〃	SD63	SB3804	遺物なし		
		〃	SD64	SD3805	弥生その他　土師器―坏　高台付坏・皿		
		〃	SD65	SD3806	須恵器―坏　土師器―坏　サヌカイド製剝片		
		〃	SD66	SD3828	土師器不明小片		
		〃	SD67	SD4144	土師器不明小片		
		〃	SD68	SD61	遺物なし		
		Ⅳ	SD69	4246	遺物なし		
		〃	SD70	4255	遺物なし		
		〃	SD71	4261	土師―丸底坏	115－739	
		〃	SD72	4262	須恵―小片　瓦質―小片　弥生土器 土師器―高台付底部、皿、小片		
		〃	SD73	4279	陶器片		
		〃	SD74	4281	陶器―小片　須恵―口縁　土師―坏、口縁		
		Ⅲb	SD75				

Tab, 16　第Ⅲ・Ⅳ区溝状遺構所見一覧表

れている。この溝状遺構から東側は遺構が少なくなっており、この溝が屋敷地の東限を画する溝状遺構の一つになっている可能性がある。幅0.5～0.65m、深さ25cm前後で断面形はU字型である。

SD19　後述する石組遺構と一緒になって機能していたか、または埋め立てられてその後石組が作られたものなのかについては不明確である。SD06を切っている。幅は1m。深さ40cm。断面形は逆台形。埋土中位に薄く木炭層がある。SB111・112等と方向は同じである。

SD21　SK10・13に切られ、SB109を切っている。SD10と方向性は一致する。幅は50～55cm。深さは37cm。

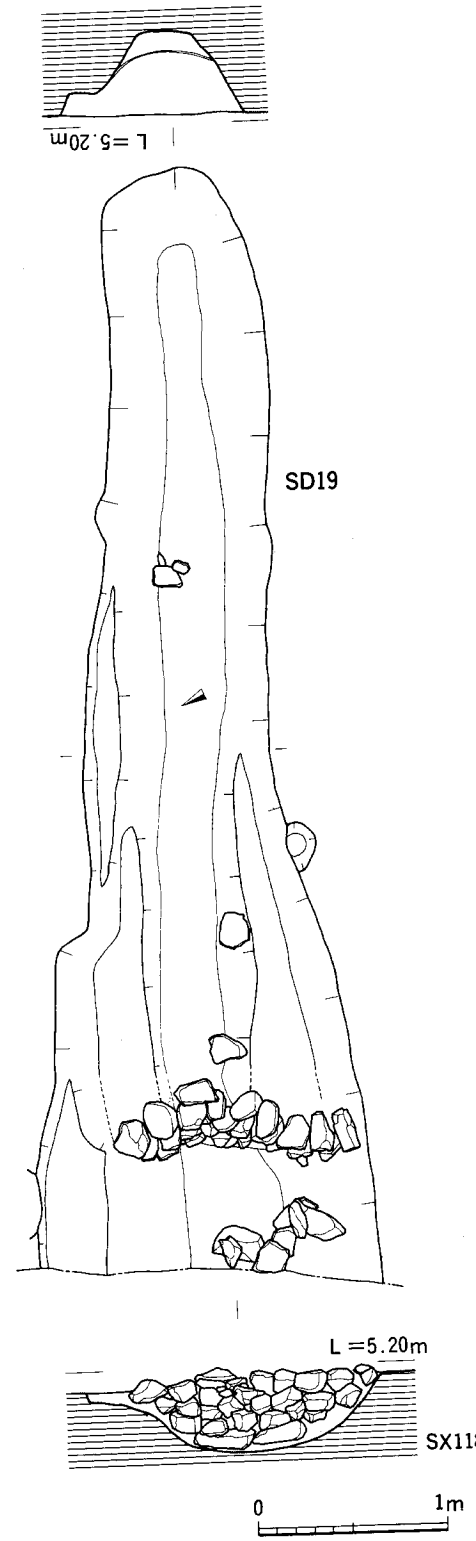
SD61　第Ⅲc区の北側で検出された。幅は約5m、長さは約28mにわたって確認されたがその東側延長部で自然消滅している。また幅も不正確である。断面形は逆台形である。埋土は大きく3層に分かれる。上から2層と3層の境で板絵が出土(Fig,97)。

SD62　SD61にある時期に流れこんでいた溝状遺構と思われる。掘り方は明確だが、断面形は三角形である。この溝状遺構の埋土は第Ⅳ区の溝と類似している。状遺構平安期の資料が出土。

SD63～67　これらの埋土はいずれも、明灰色～灰色(砂混入)土である。堆積は一時的に埋没したものである。平面形はやや不規則なものが多く、一定しない。深さは5～10cmである。方向は残存条里とは必ずしも合致しておらず当該地域では、これらの溝よりも新しい段階に条里が施行されたと思われる。

4) **井戸**　(Fig,99、PL,44、Tab,6)

第Ⅲ区では井戸はSE31の一基しか確認されていない。井戸の可能性のあるものは、SX113・124・125があるが、井側などの痕跡がなく明確ではない。



Fig,98　第Ⅲ区溝状遺構(SD19)、石組遺構(SX118)平面および断面図(1/40)

SE31　調査区の中央からやや北側で検出された。掘立柱建物SB105の南に隣接している。検出時は上面に多量の礫が見られた。石組を壊した後埋め戻されたものと思われる。

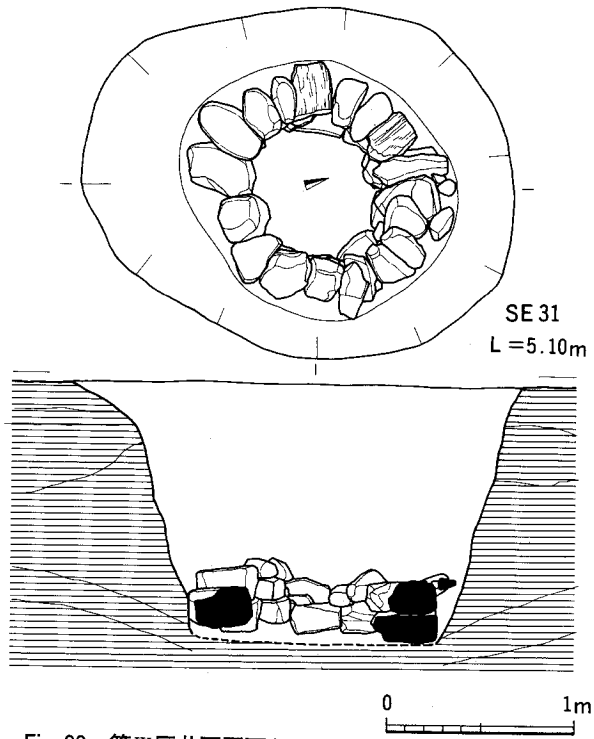
掘り方上面での直径は2.2～2.05mである。深さは1.6mで、第Ⅰ～Ⅲ区で最も深い。井側は井戸埋め戻しの際に抜き取られたと思われる。基底部に残っている石組の直径は60～65cmである。遺物は二次堆積の状況で小片しか出土していないため、時期の比定が難しいが、江戸時代後期以降のものと思われる。

5）土壙（Fig,100～101、PL,45、Tab,17）

概要　第Ⅲ区では、竪穴遺構が67基確認された。そのうち、出土遺物や形態的な特徴から、墓址または地鎮などに関する掘り方と思われるものについては、第Ⅱ区と同様土壙(SK)としたが、竪穴遺構中にも平面形など土壙と共通する要素をもつものもある（SX104・109・115)。67基に関する分類については、6）竪穴遺構(58～68頁・142～152頁)を参照されたい。ここでは土壙とした12基について説明する。なお第Ⅱ区と同様に、これらの土壙の遺物の出土状況は、副葬または供献と思われるような出土例がなく、その性格づけにはやや無理があるかもしれない。時期は、江戸時代のものとわかるものが、SK10・12で、他は出土遺物がきわめて少ないため明確でない。埋土の同質性からほとんどのものが江戸時代のものと思われるが、SK14は鎌倉時代のものと思われる。法量や出土遺物の詳細についてはTab,17を参照されたい。

SK10　SE31の西側に隣接している。平面形は隅丸の長方形で、北辺が二段掘となっている。断面形は逆台形で、床面は中央がわずかに窪んでいる。埋土は一時に埋め戻されたもので、暗褐色～灰褐色粘質土が大きなブロックで堆積している。遺物の出土量は少ない。

SK11　SE31の西側にほとんど接している。平面形は隅丸の長方形でSK10と同様南辺が二段掘りとなっている。床面は平坦で、ほぼ垂直に壁は立ち上がっている。壁の上半分は一部崩落している。木炭片をわずかに含む暗灰褐色の粘質土が一時的に埋め戻されている。



Fig,99　第Ⅲ区井戸平面および断面図（SE 31）(1/40)

SK12　SE31の北側に隣接している。平面形は隅丸の長方形で、形態的にはSK10・11とよく似ているが、掘り方は一回り大きい。床面は平坦。

SK13　平面形はやや不整な隅丸の長方形である。ST10の西側に隣接している。SK10との切り合い関係は不明。掘立柱建物SB117・溝状遺構SD21を切っている。床面は平坦である。壁の立ち上がりはやや緩やかである。

SK14　調査区の北側に位置する。平面形は隅丸の端正な長方形である。床面は中央がわずかに窪んでいるが、ほぼ平坦である。木炭片をわずかに含む暗褐色粘質土が、一時的に埋め戻された状況で堆積している。遺物は土師器破片が出土しているのみ。

SK15　調査区中央のやや東寄りに位置している。平面形は隅丸の長方形である。床面は平坦で、断面形は逆台形である。壁の立ち上がりは緩やかである。上部はかなり削平を受けている。埋土は灰褐色粘質土。一時的に埋め戻されている。

SK16　SX120の東側に隣接している。平面形はSK15によく似ており、隅丸の長方形である。床面は平坦。壁の立ち上がりは緩やか。埋土は木炭片がわずかに混入する灰褐色粘質土。

SK17　SK16・SX120の南側に隣接している。平面形はSK15・16とよく似ており、隅丸の長方形である。床面は平坦。壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は砂を多く含む暗褐色粘質土。

SK18　SK12とSE31の間に位置する。平面形は東辺がやや短い端正な長方形。灰褐色粘質土を埋土とする。床面は平坦。ＳＢ105から切られている。

SK19　第Ⅲｃ区のほぼ中央に位置する。平面形は北辺が長い台形である。残りは非常に悪く、壁が5～7cm程しか残っていない。暗褐色粘質土を埋土とする。

SK20　第Ⅲｃ区南側に位置する。平面形は北東側がやや張り出した隅丸の長方形である。床面は平坦。褐～暗褐色粘土を埋め土とする。硬く締まっている。

SK21　SK19の北東部に位置する。隅丸の長方形である。残りは悪い。床面は平坦である。硬く締まった暗褐色粘質土を埋土とする。

6) 竪穴遺構 (Fig,102～106、ＰＬ,46・47・52、Tab,18)

概要　第Ⅲ区からは竪穴遺構が67基検出された。そのうち、すでに述べた井戸１基、土壙11基以外の55基は、その性格が不明確なものである。これらは形態、規模において多様であり、平面形は方形、長方形、円形、楕円形、あるいは不定形で、掘り方の断面形は浅皿状、船底状、逆台形状などである。また規模はおおよそ長さが１ｍ前後から約３ｍほど、幅が0,5mほどから２ｍ前後ほどを測る。

これらの竪穴遺構の分布は、遺構間の時期の厳密な時期比定が要求されるが、先述した掘立柱建物のまわりに散在、あるいは建物に付属するかのような位置関係(側柱筋や、側柱内)にあるものなど、多様である。これらの分布の形成過程、竪穴遺構間、および他の遺構との関連

については項を改めて述べる。

ここでは67基の竪穴の形態的な特徴や遺物の出土状況等から、第Ⅰ区の報告時に行なった分類基準に沿って以下のように分類を行い、性格づけにあたっての目安とし,遺構所見については種類ごとに概括的に述べてゆく。種類で、抜けているものはその種類に該当するものがないことを意味する。なお個別の遺構所見、遺物の出土状況、他の遺構との切り合い関係などの詳細についてはTab. 18を参照されたい。図示していない番号のものは微地形の土層だまりと判断されたものである。

1類　(Fig,103)

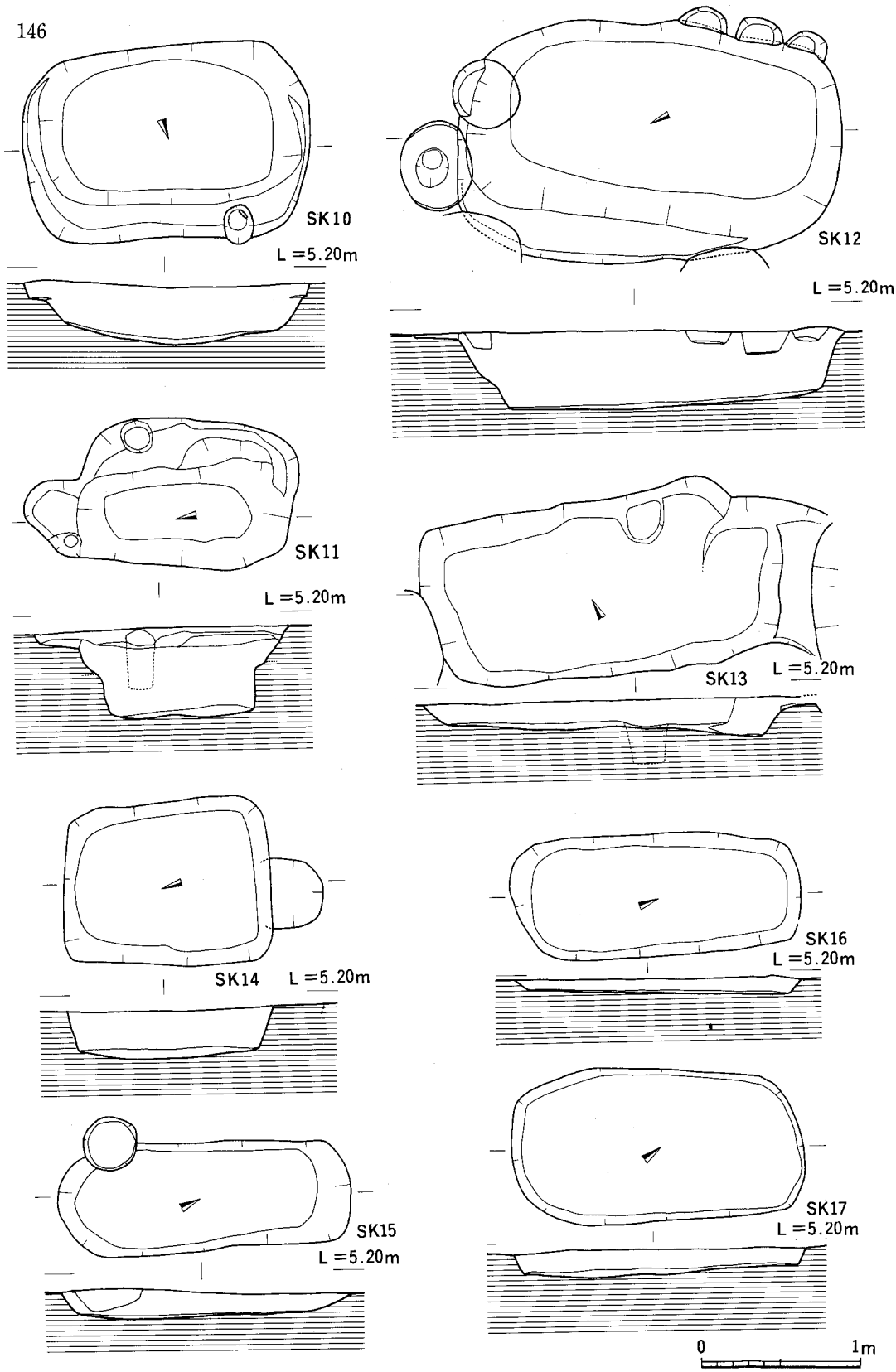
SX114のみである。平面形は長楕円形で、断面形は浅皿状である。長さは2m前後で幅は狭い。第Ⅰ区では遺物が多量に出土するものと、少ないものとがあったが、第Ⅲ区の場合遺物の出土は少なく、出土状況は二次的な流れ込みによるものである。溝状遺構が部分的に残存したものとも考えられる。SD06と方向性がほぼ同一であり屋敷地を画す性格のものかもしれない。

3類 (Fig,102～106、PL,52)

土壙SK10～21の12例と、SX104・109・115・138・155の5例がある。第Ⅱ区の項でも述べたように、平面形は、長辺がやや短な寸づまりの長方形、もしくはやや長めの長方形である。いずれも明確な掘り方を持ち、壁は床面からほぼ垂直近くに立ち上がる。長さが1,2～1,7m前

Fig.No	PLNo	調査区	遺構No	調査時No	寸法(長×幅×深さ)	出土遺物	出土遺物Fig.No	備考
100	45	Ⅲb	SK10	SK35	1.83×1.29×0.42	土師質土鍋、陶器－小片、土師器－不明小片		
100	－	〃	SK11	SK36	1.95×0.97×0.59	土師－坏、陶器		
100	－	〃	SK12	SK37	2.42×1.57×0.51	青磁－碗（龍泉Ⅰ）、白磁－小片、その他の白磁陶器－小片、陶器（備前）擂鉢、土師質－鉢・土鍋、土師器－坏又は皿		
100	－	〃	SK13	SK38	2.32×1.32×0.25	土師－小片		
100	－	〃	SK14	SK43	1.34×1.08×0.33	遺物なし		
100	45	〃	SK15	SK44	1.88×0.74×0.20	遺物なし		
100	－	〃	SK16	SK48	1.88×0.84×0.13	遺物なし		
100	－	〃	SK17	SK50	1.89×1.02×0.18	遺物なし		
101	－	〃	SK18	SK00A	1.27×0.93×0.22	遺物なし		
101	－	Ⅲc	SK19	3824 (SX)	0.96×0.84×？	遺物なし		
101	－	〃	SK20	3816 (SX)	1.36×1.10×0.13	遺物なし		
101	－	〃	SK21	3818 (SX)	1.33×0.96×0.17	遺物なし		

Tab, 17　第Ⅲ区土壙所見一覧表



Fig,100　第Ⅲ区土壙平面および断面図（SK 10～17）（1/40）その 1

後、幅が0,7～1,0mを測る一群と、長さが1,8～2,1m前後、幅が1,2～1,5mほどのやや大きなものとがある。この類は、第Ⅰ区での遺物の出土状況からみて、木棺墓または土壙墓などの墓址、あるいは地鎮などの祭祀用竪穴と推定されるものである。しかし第Ⅱ・Ⅲ区では、副葬品もしくは供献と考えられるような遺物の出土例がないために、土壙墓・木棺墓などの墓址かどうか積極的に断定できない面がある。しかし4類とは、掘り方、土層の堆積状況が異なっていることが指摘できる。

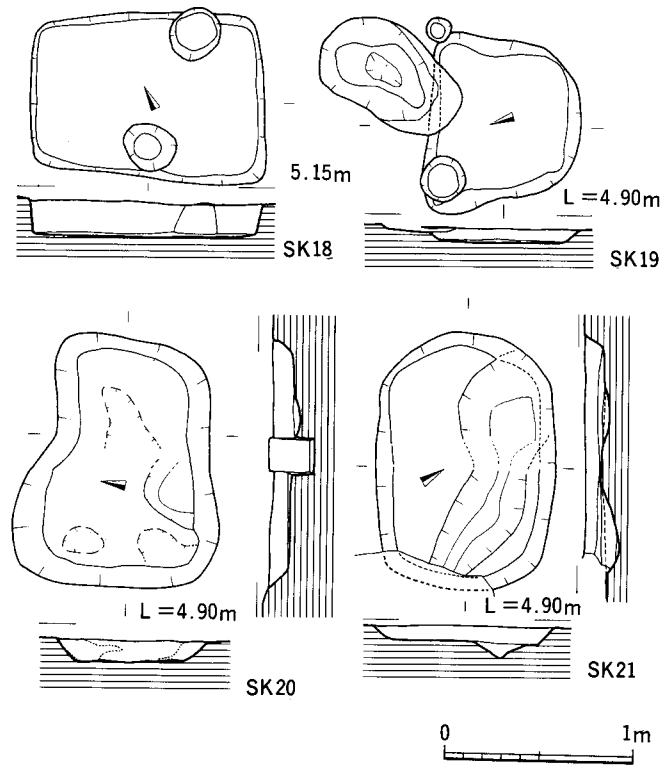


Fig.101　第Ⅲ区土壙平面および断面図（SK 18～21）（1/40）その2

4類　(Fig,102～106)

SX102・105・112・113・116・117・122～125・127・132・133・135の14基ある。

平面形が不整な円形または楕円形になる。これらはいずれも、生活残滓物の廃棄用の穴として掘られたものと考えられるもので、埋土埋土中には炭化した木片、焼けた礫石、焼土等が出土する。ただしそれらの出土量は多くはなく、二次的な流れ込みによる出土例がほとんどである。また礫のみが多量に出土しているものもある。なお4類とした中で、井戸と考えられるものが数例ある(SX113・124・125)。井戸の項で述べたように、これらは、井戸と確定できるものではないが、平面および断面形態や、土層断面などの共通性から井戸と推定される。

5類　(Fig,102～106)

SX101・103・108・119・121・126・128・146の8例がある。平面形は不整な方形や長方形が主で、やや不整な楕円形のものもある。規模はやや大きく、長さが2～3m、幅は1,7～2,5mを測る。比較的明確な掘り方を持ち、床面は平坦で壁はほぼ垂直または斜めに立ち上がる。拳大ほどの礫石が床面にみられたSX119や、木炭が薄く層をなしているもの(SX126)などがある。分布についてみると第Ⅲ区の場合は、建物のまわりに比較的多くまとまる傾向がある。

7類　(Fig,104)

SX120の1例のみである。平面形は隅丸の長方形で、長さは5.7m、幅は3.5mの長大な竪

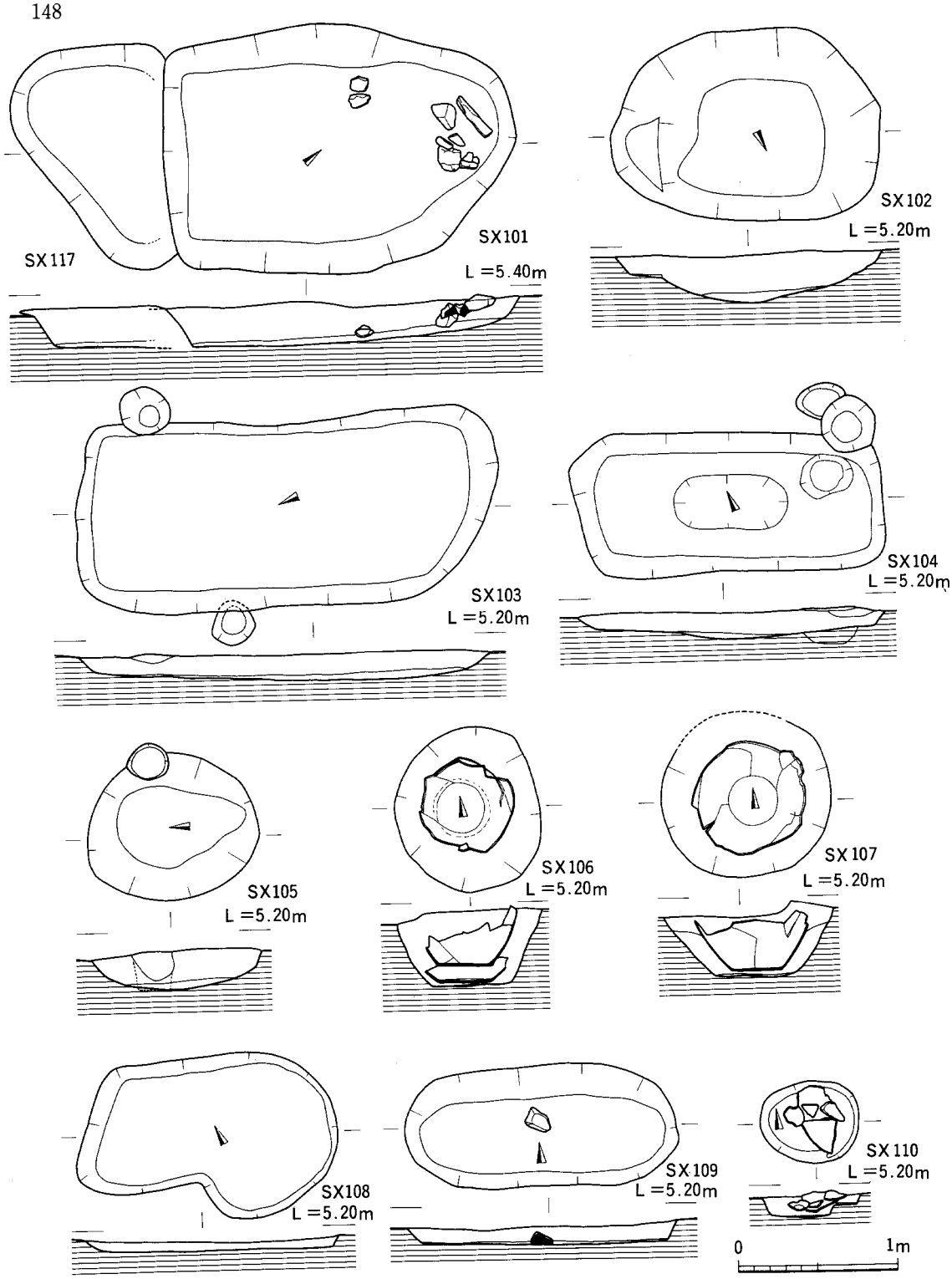


Fig.102　第Ⅲ区竪穴遺構平面および断面図（SX 101～110・117）（1/40）その1

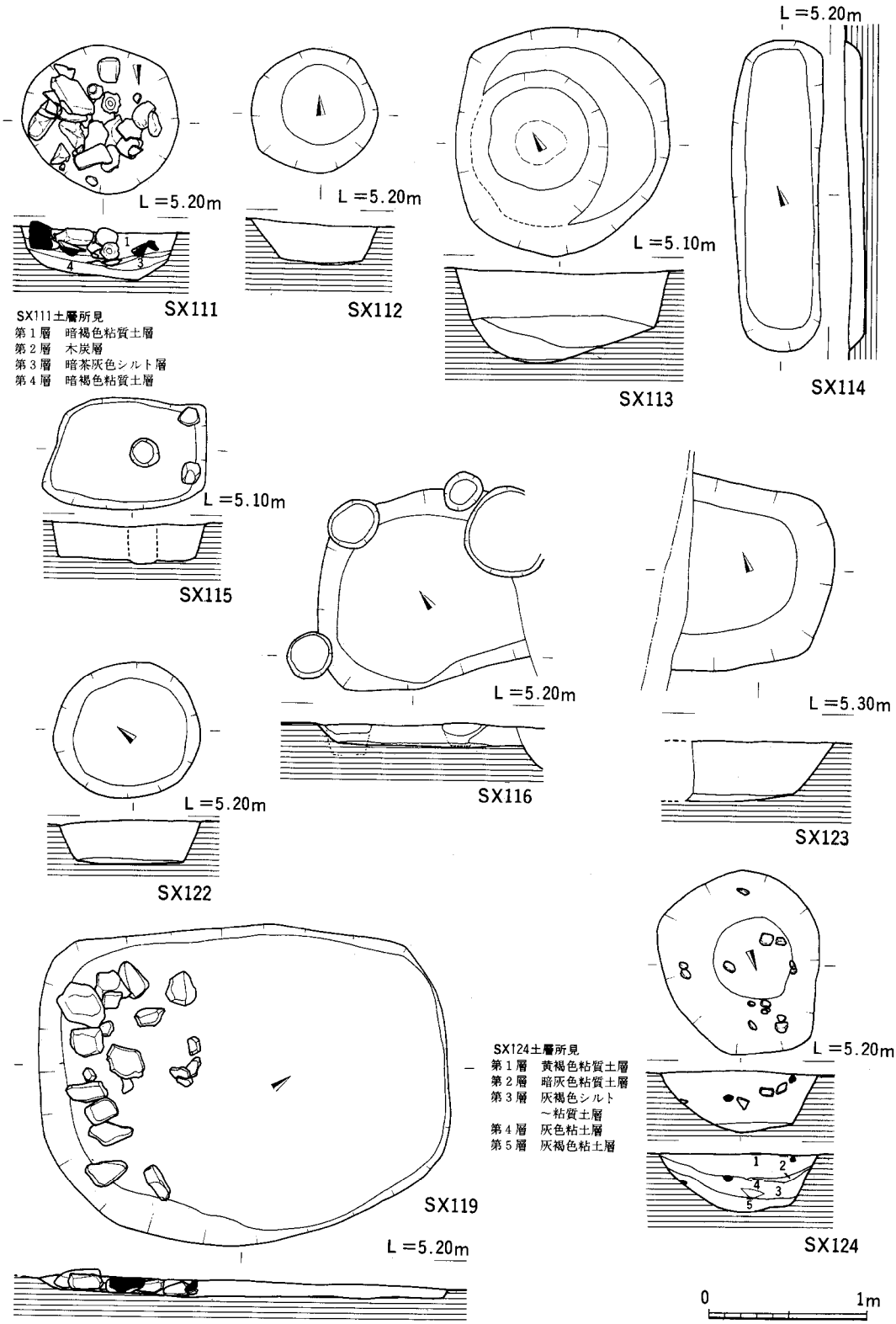
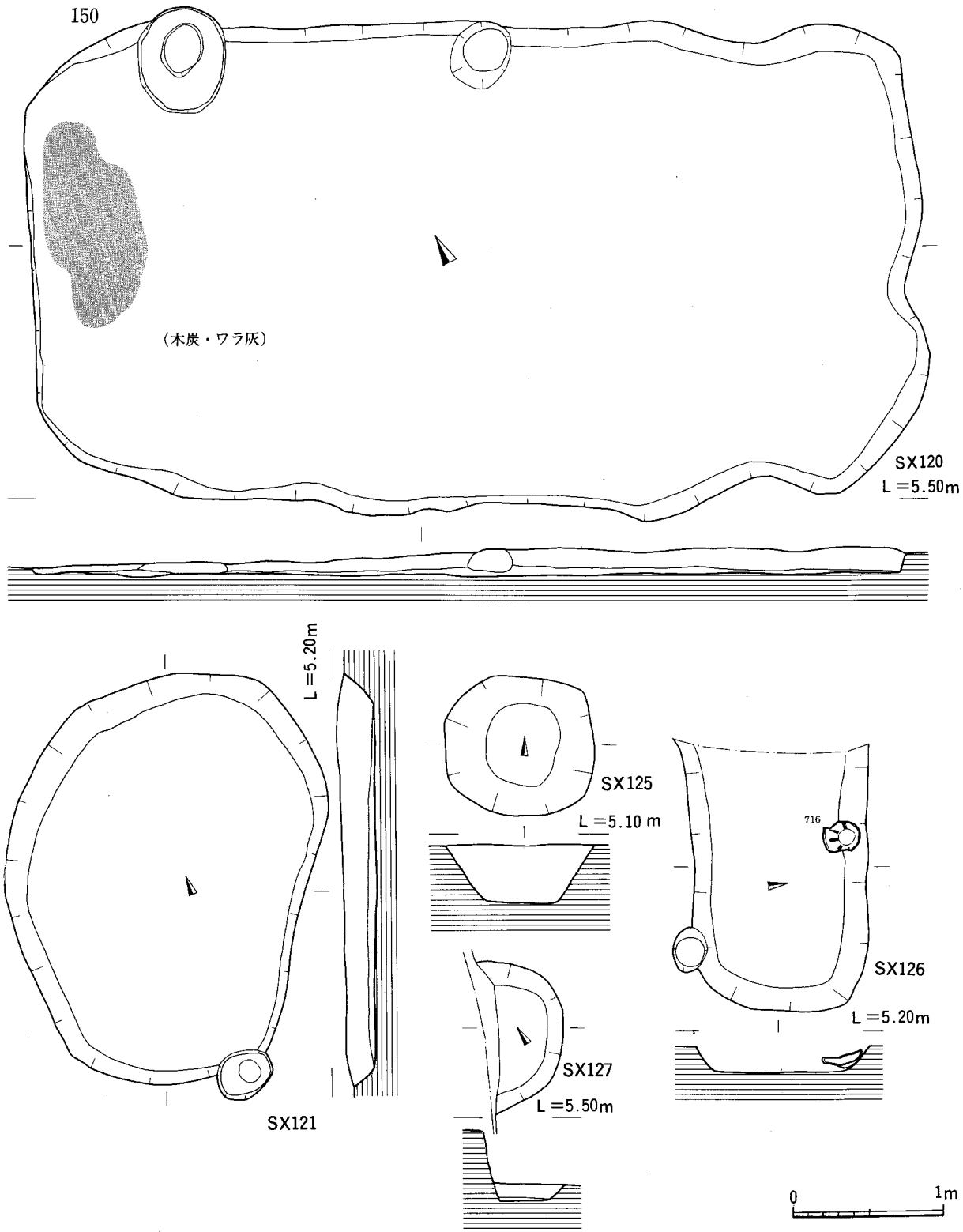
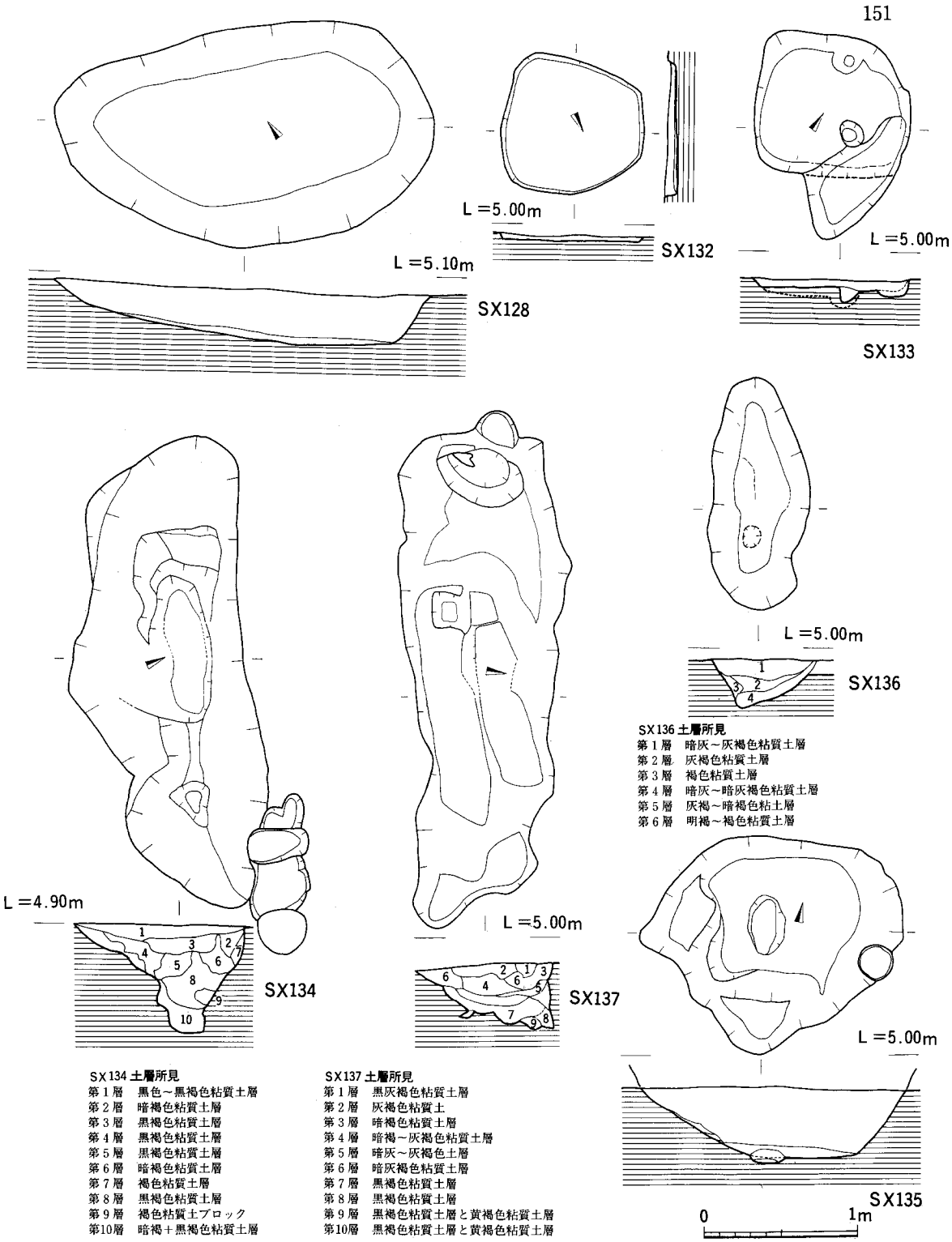


Fig.103　第Ⅲ区竪穴遺構平面および断面図（SX 111～116・119・122～124）（1/40）その2



Fig,104　第Ⅲ区竪穴遺構平面および断面図（SX 120・121・125～127）(1/40) その3



SX136 土層所見
第1層　暗灰～灰褐色粘質土層
第2層　灰褐色粘質土層
第3層　褐色粘質土層
第4層　暗灰～暗灰褐色粘質土層
第5層　灰褐～暗褐色粘土層
第6層　明褐～褐色粘質土層

SX134 土層所見
第1層　黒色～黒褐色粘質土層
第2層　暗褐色粘質土層
第3層　黒褐色粘質土層
第4層　黒褐色粘質土層
第5層　黒褐色粘質土層
第6層　暗褐色粘質土層
第7層　褐色粘質土層
第8層　黒褐色粘質土層
第9層　褐色粘質土ブロック
第10層　暗褐＋黒褐色粘質土層

SX137 土層所見
第1層　黒灰褐色粘質土層
第2層　灰褐色粘質土
第3層　暗褐色粘質土層
第4層　暗褐～灰褐色粘質土層
第5層　暗灰～灰褐色土層
第6層　暗灰褐色粘質土層
第7層　黒褐色粘質土層
第8層　黒褐色粘質土層
第9層　黒褐色粘質土層と黄褐色粘質土層
第10層　黒褐色粘質土層と黄褐色粘質土層

Fig,105　第Ⅲ区竪穴遺構平面および断面図（SX 128・132～137）（1/40）その4

穴である。床面は平坦で、断面形は逆台形。遺物は比較的多く出土するが、ほとんどが破片で投棄または二次混入によるもので,細片が多い。

9類　(Fig,102・103、PL,47)

SX106・107・110・111の4例である。いずれも瓦質土器の焼成のあまい大甕を床面に据えている。甕はやや目の粗い砂で固定されている。おそらく湿気抜きの目的もあったと思われる。この埋甕は、米などの貯蔵用のものと考えられるが、あるいは墓址だった可能性もある。

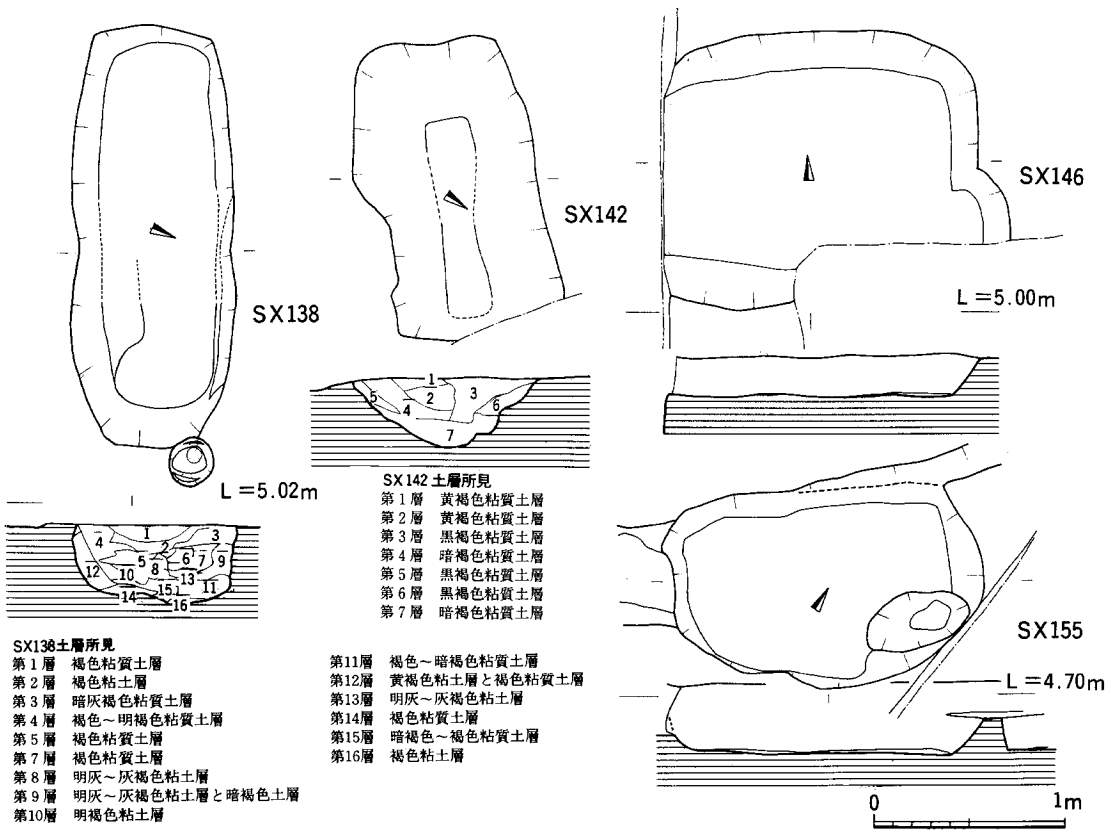
10類　(Fig,98)

SX118の1例である。石組遺構である。厠の可能性がある。

11類　(Fig,105・106)

SX134・136・137・142の4例がある。平面形は不定形のものが多い。土層は非常に乱れた状況を呈しており、掘り方の壁は不明確で凹凸が激しい。人為的な遺構かどうか不明である。

その他、遺構番号を付したもので微地形の凹凸の窪み内の堆積と考えられるものは、SX129〜131・139〜141・143〜145・147〜154の17例で、第Ⅲc区に多い。



Fig,106　第Ⅲ区竪穴遺構平面および断面図（SX138・142・146・155）(1/40) その5

Fig.No	PLNo	調査区	遺構No	調査時No	形状・寸法(長×幅×深さ)	出土遺物	出土遺物Fig.No	備考
102	—	Ⅲb	SX101	SK34	5類 2.23×1.59×0.28	土師器－坏・皿、瓦質捏鉢片、陶器片、弥生土器		
102	46	〃	SX102	SK30	4類 1.70×1.22×0.32	土師器－坏	109-706	
102	—	〃	SX103	SK40	5類 2.67×1.25×0.18	陶器捏鉢、土師器－小片	109-709	
102	46	〃	SX104	SK41	1類 1.98×0.92×0.18	土師器－小片、近世染付		
102	—	〃	SX105	SK42	4類 1.08×0.93×0.24	土師質土鍋	109-710	
102	—	〃	SX106	SK45	9類 1.05×0.92×0.49	瓦質－甕、小片（埋甕）	110-717, 718	
102	47	〃	SX107	SK46	9類 1.08×1.05×0.43	瓦質－甕（埋甕）、土師－小片、木片、陶器－擂鉢、小片	110-719	
102	—	〃	SX108	SK47	5類 1.67×1.26×0.10	近世陶器、瓦器－碗、土師－小片		
102	—	〃	SX109	SK49	1類 1.75×0.80×0.16	近世陶器、弥生土器		
102	—	〃	SX110	SK51	9類 0.62×0.53×0.17	染付小碗	109-707, 708	
103	47	〃	SX111	SK52	9類 0.98×0.94×0.34	土師質－甕、近世陶器、木炭、近世唐津片	110-720, 721	
103	—	〃	SX112	SK00	4類 0.80×0.77×0.26	遺物なし		
103	—	〃	SX113	SX48	4類 1.44×1.35×0.60	近世陶器、土師器－小片・坏、白磁－小片		
103	—	〃	SX114	SX49	1類 1.99×0.59×0.12	陶器－碗・擂鉢		
103	—	〃	SX115	SX50	1類 1.04×0.71×0.25	瓦質捏鉢、土師不明小片		
103	—	〃	SX116	SX51	4類 1.36×1.28×0.17	土師器－坏・小片		
102	—	〃	SX117	SX52	4類 1.43×1.03×0.27	遺物なし		
98	—	〃	SX118	SX53	10類 1.31×1.03×0.45	遺物なし		
103	—	〃	SX119	SX54	5類 2.61×2.04×0.14	近世陶器、染付、輸入陶器、土師－小片		
104	—	〃	SX120	SX55	6.11×3.36×0.22	陶器片、土師器－小片、土師質－甕、須恵器－小片、粘土塊、青白磁紅皿、近世染付、弥生土器他 ニワトリ人形	109-714, 715	
104	—	〃	SX121	SX56	5類 2.80×2.18×0.28	土師器－坏・小片、白磁－碗（VI）、陶器－鉢・擂鉢・壷	109-711	
103	—	〃	SX122	SX57	4類 0.93×0.86×0.28	土師器－擂鉢・小片	109-712	
103	—	〃	SX123	SX58	4類 1.25×1.04×0.40	土師器－小片、近世陶器	109-713	
103	—	〃	SX124	SX68	4類 1.16×1.04×0.38	土師質－甕		
104	—	〃	SX125	SX69	4類 1.00×0.94×0.39	陶器－壷、瓦質－甕、須恵－小片、土師－小片		
104	47	〃	SX126	SX70	5類 1.84×1.36×？	遺物なし	109-716	
104	—	〃	SX127	SX71	4類 1.04×0.60×0.13	遺物なし		
105	—	〃	SX128	SX00B	5類 2.50×1.51×0.40	遺物なし		
—	—	Ⅲc	SX129	SX3807	4.32×2.13×0.26	遺物なし		

Tab, 18　第Ⅲ区竪穴遺構所見一覧表（その１）

Fig.No	PL,No	調査区	遺構No	調査時No	形状・寸法(長×幅×深さ)	出土遺物	出土遺物Fig.No	備考
—	—	Ⅲc	SX130	SK3808	1.48×0.50×0.28	遺物なし		
—	—	〃	SX131	SK3819		遺物なし	109-706	
105	—	〃	SX132	SK3820	4類 0.95×0.92×0.08	遺物なし	109-709	
105	—	〃	SX133	SK3821	4類 1.37×1.03×0.15	遺物なし		
105	—	〃	SX134	SK3822	11類 1.30×3.08×0.71	遺物なし	109-710	
105	—	〃	SX135	SK3823	4類 1.72×1.43×0.50	遺物なし	110-717, 718	
105	—	〃	SX136	SK3825	11類 1.51×0.67×0.32	遺物なし	110-719	
106	—	〃	SX137	SK3826	11類 3.39×1.28×0.44	遺物なし		
—	52	〃	SX138	SK3827	1類 2.24×0.88×0.69	土師器一小片		
—	—	〃	SX139	SK4183	4.34×3.20×0.28	遺物なし	109-707, 708	
—	—	〃	SX140	SK4184	2.29×2.14×0.33	遺物なし	110-720, 721	
106	—	〃	SX141	SK4185	1.75×1.71×？	遺物なし		
—	—	〃	SX142	SX4186	11類 1.62×1.12×0.45	遺物なし		
—	—	〃	SX143	SX3905	0.65×0.52×0.20	遺物なし		
—	—	〃	SX144	SX3965	測定不可 浅いたまりか？	遺物なし		
106	—	〃	SX145	SX4027	1.66×1.00×0.43	土師器一小片		
—	—	〃	SX146	SX4028	5類 1.86×1.49×0.24	弥生土器		
—	—	〃	SX147	SX4051	1.01×0.83×0.25	遺物なし		
—	—	〃	SX148	SX4070	2.73×1.68×0.18	遺物なし		
—	—	〃	SX149	SX4072	1.05×0.72×0.09	遺物なし	109-714, 715	
—	—	〃	SX150	SX4074	0.75×0.73×？	遺物なし	109-711	
—	—	〃	SX151	SX4101	測定不可	遺物なし	109-712	
—	—	〃	SX152	SX4164	実測図なし 測定不可 浅いたまり	遺物なし	109-713	
—	52	〃	SX153	SX4140	1.55×1.30×0.15	遺物なし		
—	52	〃	SX154	SX4141	2.24×2.18×0.46	遺物なし		
106	52	〃	SX155	SX4144	1類 1.71×1.08×0.39	土師器一小片	109-716	
113	54	Ⅳb	SX156	SX4244	1.39×1.42×0.39	遺物なし		
113	54	〃	SX157	SX4245	1.58×1.51×0.60	黒曜石砕片		
113	54	〃	SX158	SX4248	0.98×0.92×？	遺物なし		

Tab. 19 第Ⅲ区竪穴遺構所見一覧表（その2）

(2) 遺物各説

概要 第Ⅲ区からは第Ⅰ区・第Ⅱ区と比べて、遺物の種類、出土量はかなり少ない。

遺物の種類には、土師器(皿・坏)を主として、土師質土器(土鍋・擂鉢)、瓦質土器(羽釜)、須恵質土器(捏鉢)、陶器(備前窯擂鉢)等の国産の土器・陶器類のほか、白磁(碗、皿)、青磁(碗皿)、青白磁(合子皿)、などの輸入陶器が出土している。その他に、管状土錘、滑石製石鍋、砥石、鉄滓、板絵、木製鋤などが出土している。これらの遺物は鎌倉時代および江戸時代のものと考えられるものである。

これらの遺物の出土状況は、主として井戸、竪穴遺構、溝状遺構などから二次的な堆積の状況で出土したものが多い。一括埋納・投棄などの状況で出土したものはわずかである。出土品のなかで注意されるのは、溝状遺構(ＳＤ61)から出土した板絵(693)である。これについては付論２で詳細に述べる。

以下では図示できた遺物について説明する。各遺物の出土遺構名、遺構ごとの遺物の出土状況、土師器(皿・坏)の法量などは各一覧表を参照されたい。

1) 柱穴出土の遺物 (Fig,108)

柱穴からは遺物の出土量は少ない。第Ⅱ区では柱根痕跡もしくは掘り方内に１～３点ほどの土師器(皿・坏)または青磁(碗・皿)を完形のまま、あるいは半割して埋置している例がみられたが、第Ⅲ区ではその例はみられなかった。

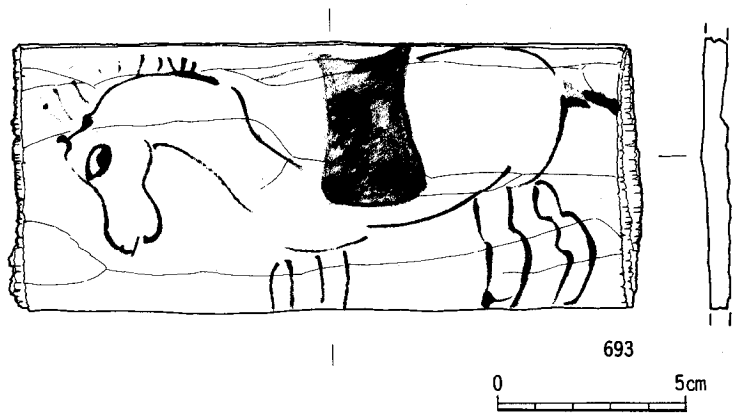
ＳＰ605出土遺物 (Fig,108)

土師器　皿 (694・695)　口径・器高・底径の平均値は9.2・1.2・7.8cm。いずれも糸切底。焼成あまくもろい。褐色。

土師器　坏 (696)
口径・器高・底径は15.2・2.4・12.0cm。糸切底。暗褐色。

ＳＰ605出土遺物 (Fig,108)

土師器　皿 (697)
口径・器高・底径はやや不性格であるが10.1・1.2・8.6cm。糸切底。焼成不良で



Fig,107　第Ⅲ区溝状遺構出土遺物実測図（ＳＤ61）(2/3)

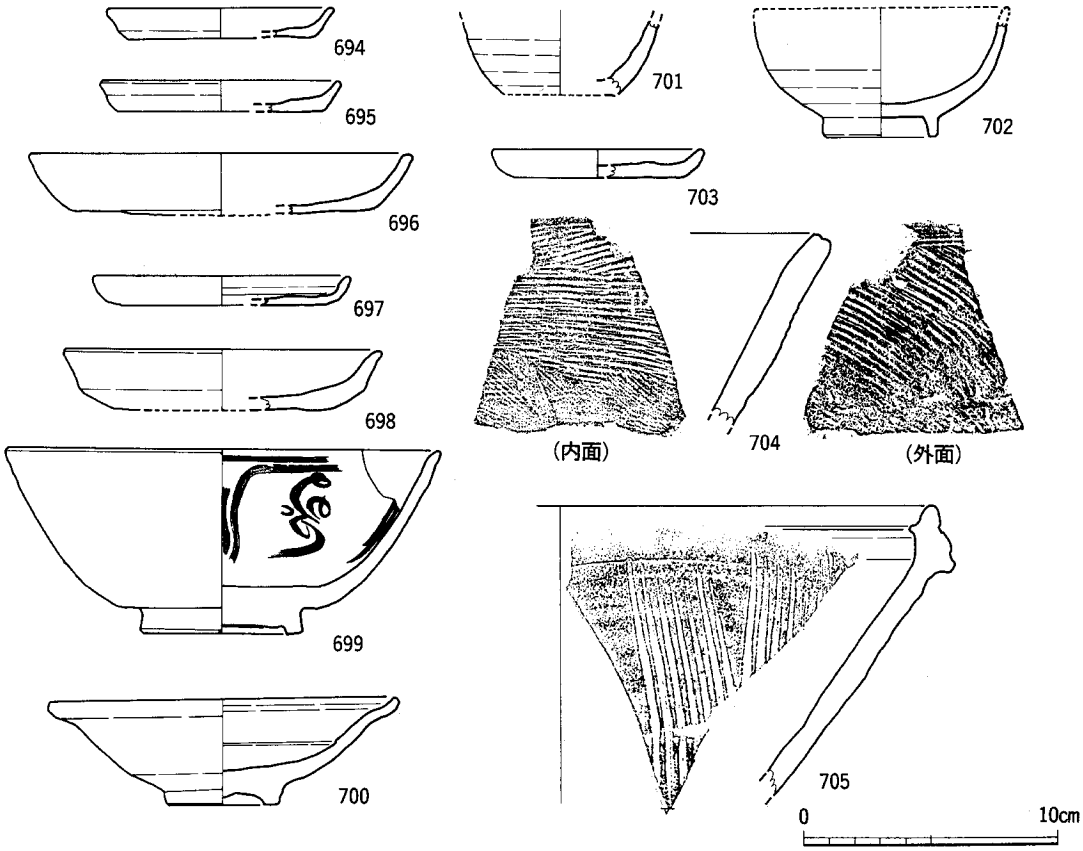


Fig.108　第Ⅲ区柱穴、溝状遺構(SD07)、井戸(SE31)、土壙(SK12)出土遺物実測図(1/3)

もろい。

土師器　坏（698）　口径・器高・底径は12.6・2.4・8.8cm。やや小型である。糸切底で軽くナデ消している。焼成不良で、もろい。褐色。

青磁　碗（699）　龍泉窯系碗Ⅰ類。口径・器高・高台径は17.4・7.3・6.4cm。ヘラ片切彫による区画線・雲文を体部内面に施文している。釉はやや発色が良くなく薄い灰緑色。

2）溝状遺構出土の遺物（Fig,108）

SD07出土遺物（Fig,108）

陶器　皿（700）　唐津系陶器。体部はヘラケズリ成形。ロクロ回転は右回転である。口径・器高・高台径は14.6・4.1～5.4・4.4cm。釉は不透明な灰白色で、胎土は赤褐色陶土。

SD61出土遺物（Fig,108）

木製品　板絵（693）　現存の長さ・幅・厚さは14.1・6.0・0.6cm。スギ（板目材）を素材と

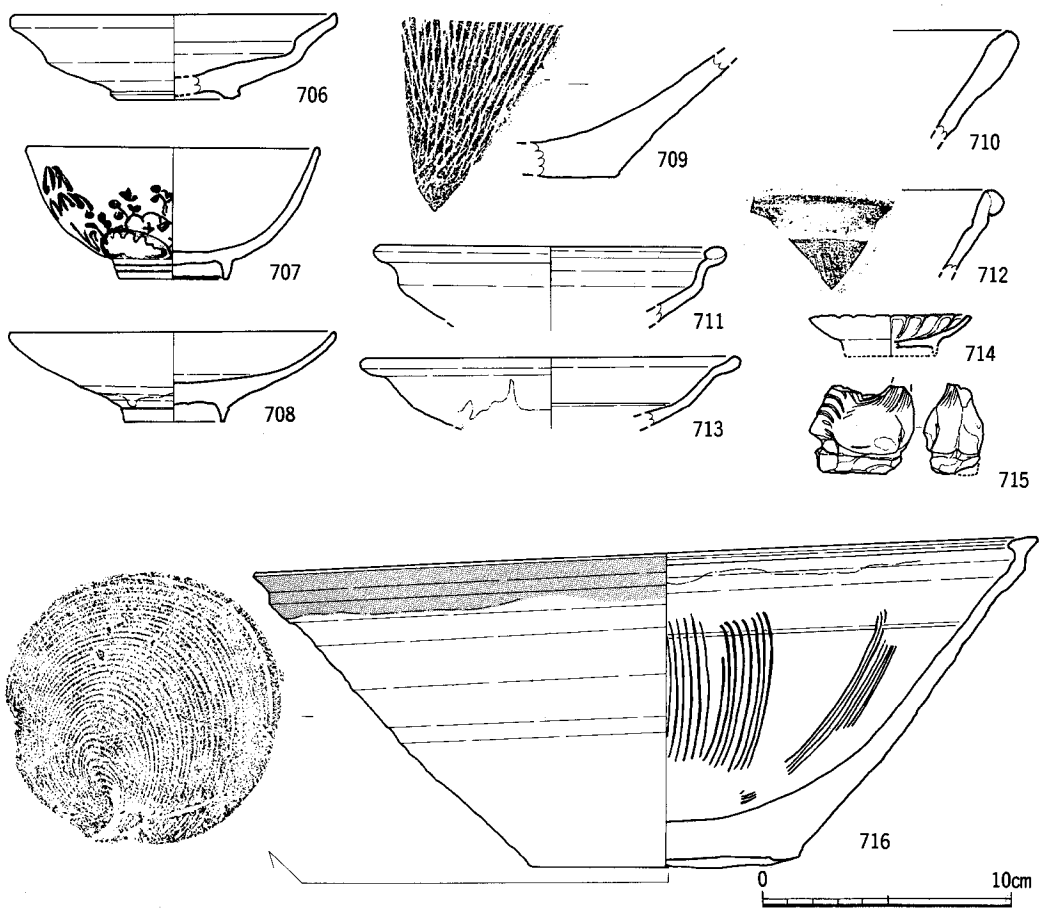
している。板材はおそらく刀子もしくは鑓鉋によるものと思われるが、絵が描かれた面を丁寧に削り面取りしている。裏面は切り出したままの状態である。平坦にされた面に、墨書によって、鞍をつけ、たてがみを編んだ馬を、左向きにして、描いている。馬の腰の部分、尾、足の先は途中で切れていることから、上下および図の右側縁は欠けているものと思われる。絵の遺存状況はあまり良くない。たてがみと鞍の部分は消滅している。筆の運びからみてかなり手慣れた描き方という感じがする。この板絵については付論2を参照されたい。

3) 井戸出土の遺物 (Fig,108)

SE 31出土遺物 (Fig,108)

陶器　小壺 (701)　底部の破片。備前焼である。胎土はキメ粗く、細かい白砂を含む。焼成良好でよく焼き締まっている。赤褐色～灰褐色。

白磁　碗 (702)　伊万里系の白磁。口径・器高・高台径は(10.3)・5.2・4.6cm。体部下半はヘラケズリ成形。高台畳付には目跡が付着。釉は半透明の灰白～明灰白色。



Fig,109　第Ⅲ区竪穴遺構出土遺物実測図(SX 102・103・105・110・120～123・126)(1/3)

4) **土壙出土遺物** (Fig,108、Tab,11～12)

SK 12出土遺物 (Fig,108)

土師器　皿 (703)　口径・器高・底径は8.5・1.1・6.8cm。糸切底。焼き締まっている。

土師質土器　土鍋 (704)　口径不明。内外面ともにヨコハケ仕上げ。明灰褐色。やや脆い。

陶器　擂鉢 (705)　口径は約30cm。口縁部は段を有し外面に2条の沈線を巡らしている。端部は内側に引き出されている。下ろし目は7条が一単位である。焼成は堅緻。赤褐色。

5) **竪穴遺構出土遺物** (Fig,109)

SX 102出土遺物 (Fig,109)

陶器　皿 (706)　口径・器高・高台径は13.0・3.4・5.2cm。胎土はややキメ粗い陶土である。釉は薄く緑がかった灰色で、内面から外面上半分にやや厚くかかっている。

SX 103出土遺物 (Fig,109)

陶器　擂鉢 (709)　胎土は赤褐色の陶土できめ細かい。堅く焼き締まっている。下ろし目の単位は不明であるが、かなり密に内面全体に入れられている。底部は糸切底で軽くナデ消し。

SX 105出土遺物 (Fig,109)

土師質土器　土鍋 (710)　口縁部は肥厚。内面はハケ目調整。外面はナデ仕上げ。焼成良。

SX 106出土遺物 (Fig,109)

瓦質土器　甕 (717)　底部径は34.4cm。底部の厚さは0.9～1cm。4～5cm幅の単位で粘土の継目がわかる。継目部分で内外面ともハケ目調整が丁寧に行なわれている。焼成は非常に悪くもろい。胎土はややキメ粗い。灰白～灰色。

SX 107出土遺物 (Fig,110)

瓦質土器　甕 (719)　底部径は36.0cm。底部の厚さは0.9～1cm。717と同様4～5cm幅の単位で粘土を継いでいる。継目部分で内外面ともハケ目調整が丁寧に行なわれている。特に外面はその部分にのみヨコハケを巡らしている。胎土はやや粗くもろい。焼成不良。灰褐～灰色

SX 110出土遺物 (Fig,109)

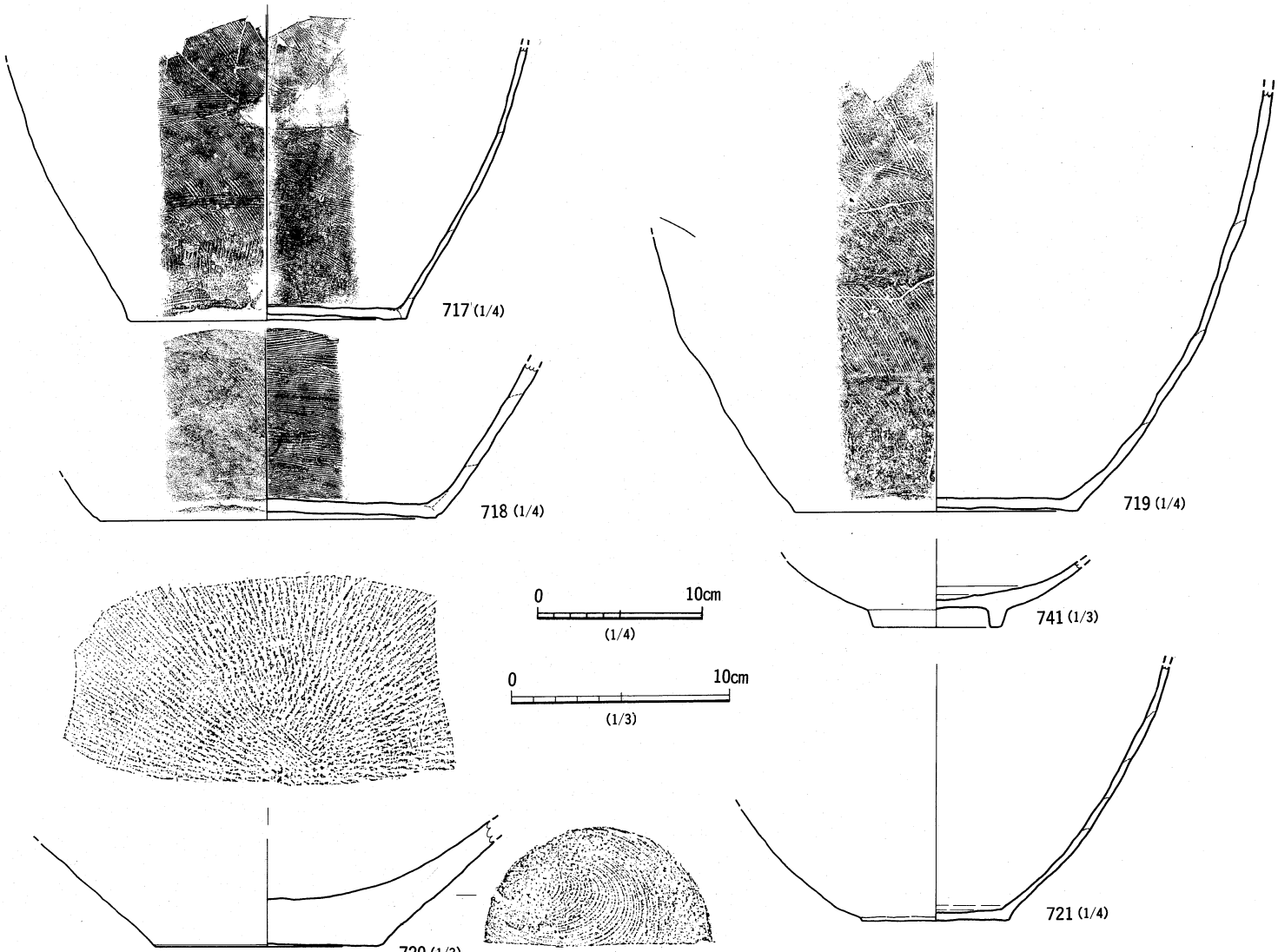
磁器　染付碗 (707)　口径・器高・高台径は11.6・5.2・4.4cm。素地は薄く青みがかった白色。くすんだ(緑)青色で絵付けしている。高台畳付には白色珪砂が帯状についている。

陶器　皿 (708)　唐津系陶器である。釉は高台以外は全面施釉。ただし内底の釉は施釉後、輪状に掻き取り、砂目が残る。高台にも砂目が残る。釉色は茶褐色で、刷毛目手の施文。

SX 111出土遺物 (Fig,110)

陶器　皿 (741)　唐津系陶器である。高台径は6.0cm。透明釉が全面に薄くかかっている。

陶器　擂鉢 (720)　大型の擂鉢である。底部径は10.8cm。下ろし目の単位は不明だが、内面全体に付けてある。胎土は精良、焼成堅緻。赤褐色。



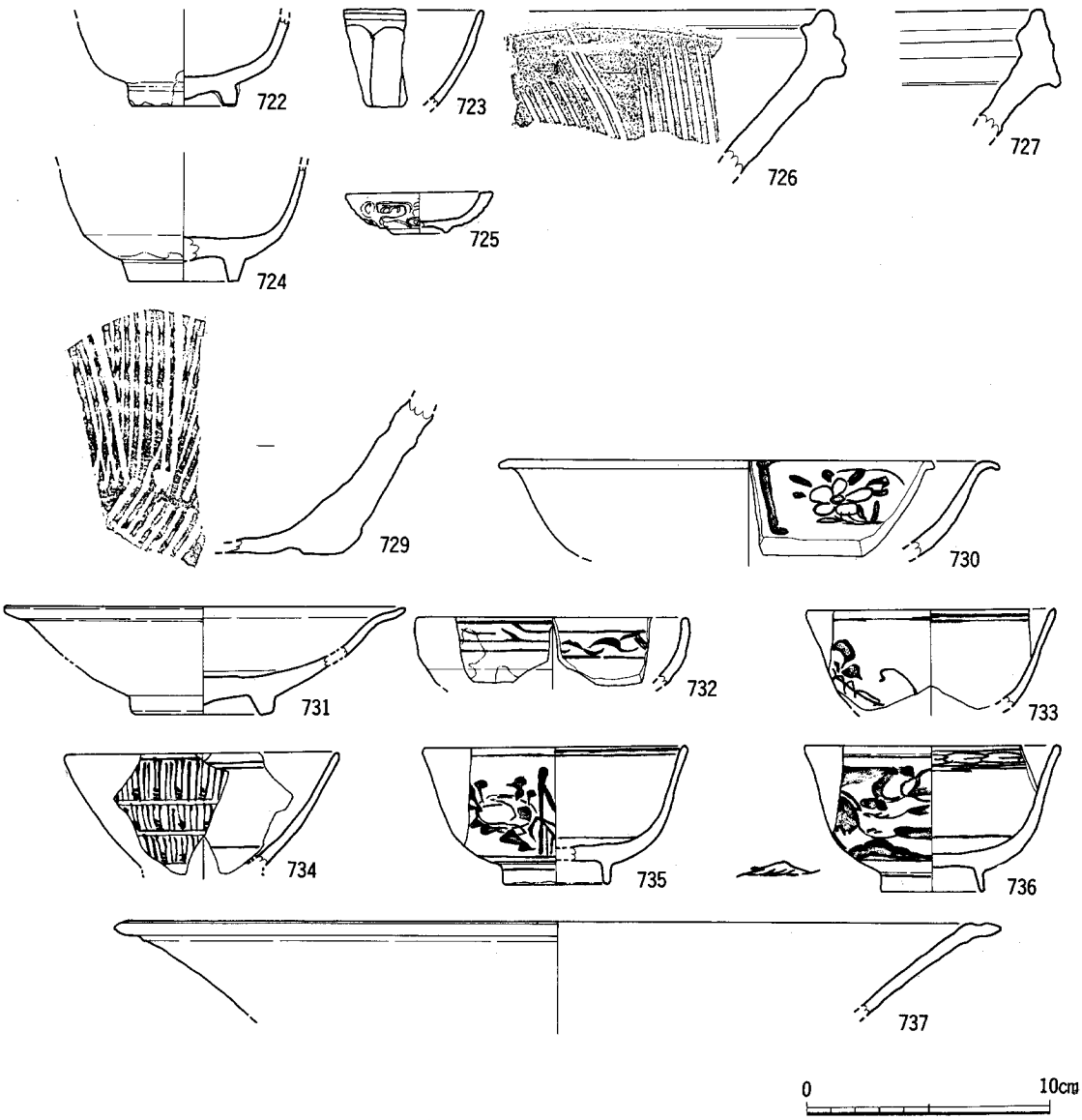
Fig,110　第Ⅲ区竪穴遺構出土遺物実測図（ＳＸ106・107・111）（1/4・1/3）

瓦質土器　甕（721）　底部径は18.3cm。717・719と同様に叩きの後、継目部分を丁寧にハケ目仕上げ。焼成悪く、もろい。灰白～灰色。

SX120出土遺物（Fig,109）

白磁　小皿（714）　口径・器高・高台径は6.5・1.5・3.8cm。型押し造り。菊花文または蓮花文をあしらっている。釉は透明な明灰白色。伊万里系か。

土製品　鶏形土人形（715）　頭部、尾の部分は欠損。焼成はやや不良。褐白色。現存高4cm



Fig,111　第Ⅲ区表土出土遺物実測図（1/3）（728は欠番）

SX121出土遺物（Fig,109）

陶器　鉢（711）　口径14cm。体部中位よりやや上で屈曲。口縁は丸く成形されている。焼成堅緻。口縁部内面から体部屈曲部外面まで黒褐色の釉を施釉。

SX122出土遺物（Fig,109）

陶器　擂鉢（712）　目の細かい下ろし目が内面全面に付く。口縁部のみ鉄釉を施釉。

SX122出土遺物（Fig,109）

陶器　皿（713）　唐津系陶器。緑～緑灰色の半透明釉を施釉。口径は15cm。

SX126出土遺物（Fig,109）

陶器　擂鉢（716）　8条1単位の下ろし目がつく擂鉢である。口縁部は屈曲し内側に少し引き出されている。褐色釉が口縁部のみに施釉されている。他は露胎。口径・器高・底径は32.0・11.6～13.3・10.8cm。

6）表土出土遺物（Fig,111）

陶器　碗（722・724・732）　722・724は唐津系の碗。高台径は722が4.2cm、724が4.6cm。釉は722が半透明の灰白色、724が外面に黒(褐)色の釉を施釉。高台部は露胎である。732は高取系と思われる。灰色の素地に白色の粘土を象眼している。口径は10cm。

陶器　擂鉢（726・727・729）　726・727は備前焼。口径はいずれも30cm前後。下ろし目は7～8条が1単位。焼成堅緻。胎土色調は赤褐色。729はやや焼きのあまい、明褐色の胎土。下ろし目はかなり粗い。産地は不明。

陶器　皿（731・737）　731は唐津系緑釉皿。口径・器高・高台径は16.6・4.4・5.8cm。施釉後内底は輪状に掻き取っている。緑釉は内面から口縁部外面まで施釉。737は同じく唐津系二彩大鉢。口径37cm。部分的だが、口縁部に、緑釉がかけられている。

磁器　碗（723・733～736）　いずれも伊万里系磁器である。口径はおおむね10～11cm程で、やや小振である。素地は薄く青みのある白色。くすんだコバルトブルーで絵付けを行なっている。734は大山新窯出土例に類似する。いずれも18世紀後半から19世紀にかけてのものか。(註1)

磁器　皿（730）　伊万里系絵付皿。口径は20.4cm。内面にくすんだ藍色で絵付けしている。

磁器　小皿（725）　伊万里系磁器。紅皿。型押しによるもの。口径・器高・高台径は6.0・1.8・2.4cm。外面は露体。絹目がつく。内面に明白色釉を施釉。

（註1）　九州陶磁文化館「国内出土の肥前陶磁」　1984

VI　第IV区の調査

概要　第IV区は浄水場敷地の西南部に位置する。多々良川左岸からは南へ約350～400mほど離れた地点に位置する。第Ⅰ～Ⅲ区の集落関連の遺構群がそれぞれ、旧自然堤防と考えられる微高地上に位置していたのに対して、第IV区は旧河川の川道内にあたっている。現地表面の標高は5.2～5.3mで、遺構検出面はおおむね4.9m前後の高さである。遺構検出面はよく締まった明るい褐色粘質土で、北東から南西に向かって緩やかに低くなっている。調査区の北西部には、黒色粘質～粘土層がこの明褐色粘質土の下部に厚く堆積している。土層断面の分布範囲は、この地点周辺からさらに西側へ、おそらく三日月状に、延びるものと思われる。形成された時期は不明である。おそらく古い時期に形成された、多々良川の後背湿地であろうと思われる。出土した遺構・遺物はきわめて少ない。西側に井戸と思われる円形の竪穴、南西隅に性格不明の円形～楕円形の竪穴が確認された以外は、水田に伴う溝状遺構が４～５条認められたのみである。なお遺構の上面には共通して灰白(褐)色シルトまたは砂層が覆っており、ある時期に一時的に埋没した状況である。

(1)　遺構各説

1)　溝状遺構（Fig,112・114、ＰＬ,53）

溝状遺構は５条検出された。いずれも埋土は、灰白(褐)色シルト～砂層である。一時的に埋没したものと思われ、これらに伴う水田址の有無が注目されたが、全体的に削平されており水田址については確認することができなかった。ただし溝状遺構周辺では、足跡と思われる小さな凹凸があることが観察された。溝状遺構の遺存状況は悪く、深さは約10cm前後である。

ＳＤ70　調査区の北側に位置する。南東から北側に緩く弧を描いて続いている。長さ約5.8m、幅20cm。床面は凹凸が激しい。

ＳＤ71・72　調査区の南東部から北西にかけてほぼ平行して続いている。溝間の幅は0.3～1mで、一定の幅ではない。ＳＤ71は最大幅が0.8mで、深さが15～20cm。ＳＤ72は最大幅が0.5mで、深さが10～15cm。ＳＤ71は途中で部分的に幅が広くなっているところがある。第Ⅲｃ区のＳＤ63～65と直接連なるものではないが、方向性や埋土の状況からみて同一時期の水田に伴う溝状遺構であったと考えられる。その場合、条里の方向性とはまったく異なった区画が、ある時期(当該調査区では11世紀ごろ)に部分的にあったということになる。

ＳＤ73・74　調査区の南側に位置する。方向は不定方向でまた掘り方の壁も明確ではない。床面は凹凸が激しい。埋土は粗砂が堆積。土師器の小片がわずかに出土しているのみである。

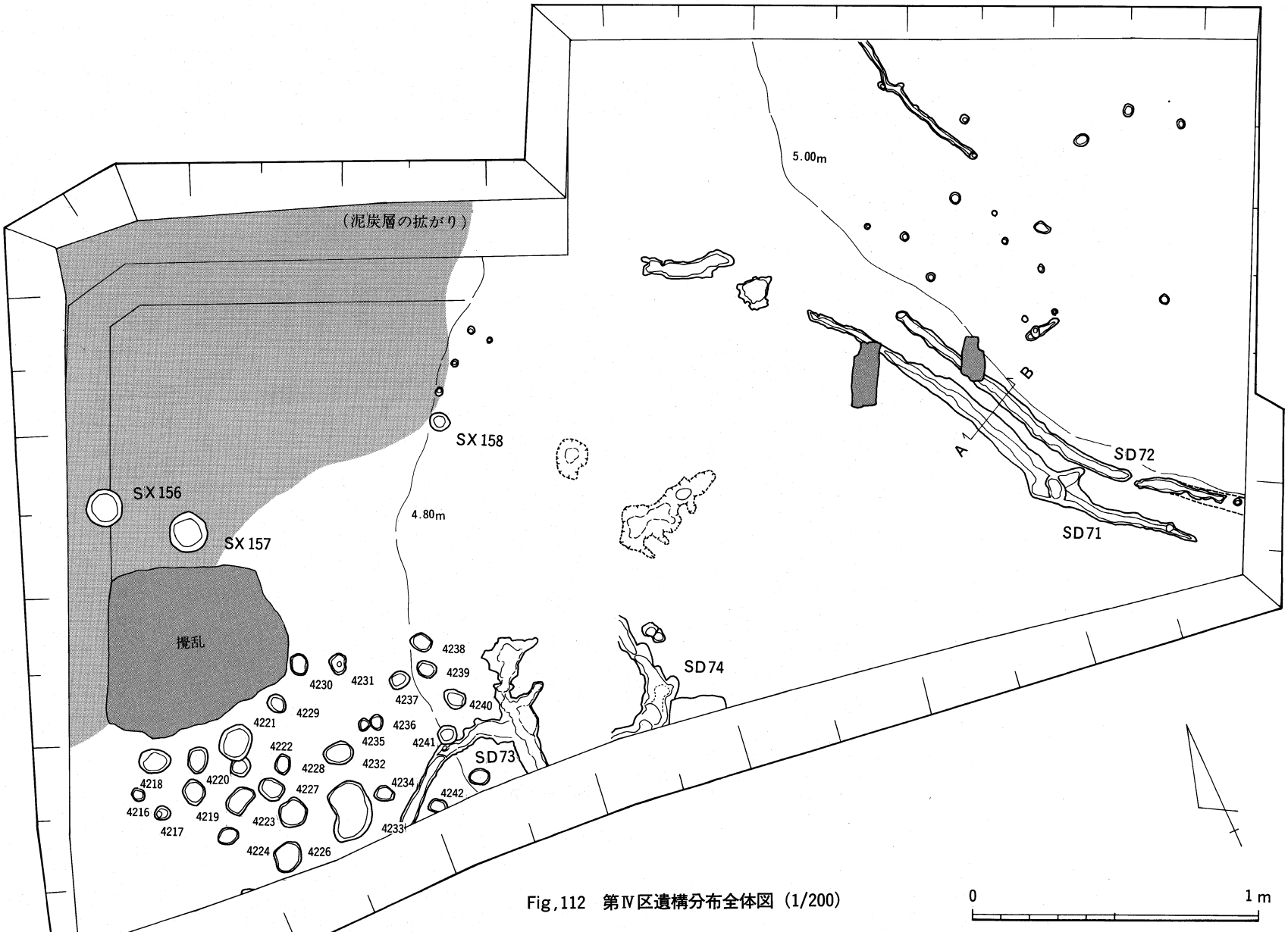


Fig.112　第Ⅳ区遺構分布全体図（1/200）

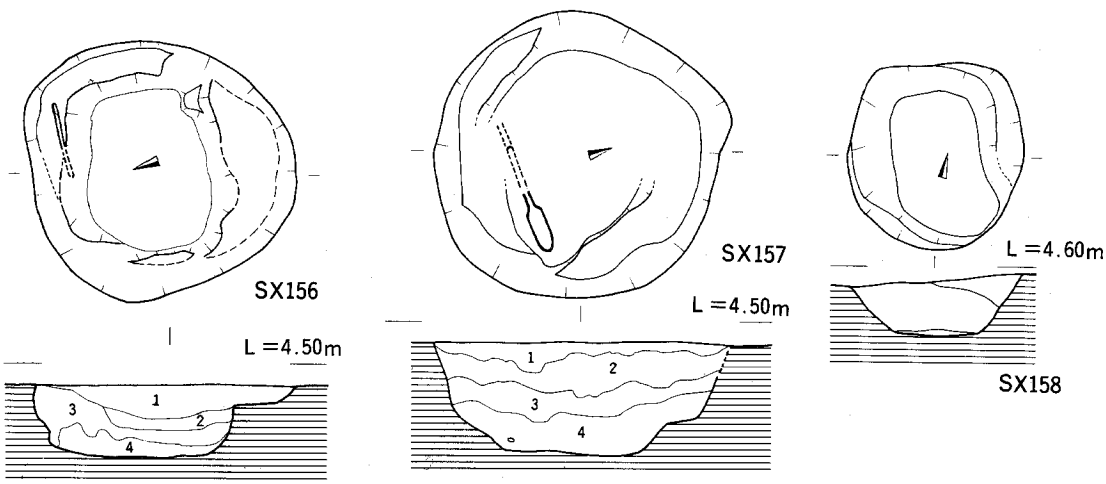
2) **竪穴遺構** (Fig,113、PL,54)

竪穴遺構は、第Ⅳ区から32基検出された。調査区の南西側に特に集中する1群(29基)と、西側に点在するもの(3基)とがある。

4類 西～西北側に分布する3基である。いずれも平面形は円形である。掘り方断面形は逆台形で、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。西壁近くに位置するSX156・157は、掘り方の形態などからみて井戸の可能性がある。SX156の床面近くには鋤状木製品が出土した。他に出土遺物はない。埋土はSX158黒褐色粘土。他は灰～暗灰色の粘土が堆積している。

12類 南西側の29基である。平面形はやや不整な円形もしくは楕円形で、平面形からは4類に共通している。しかし埋土の堆積が明らかに第Ⅰ区から第Ⅲ区までの4類とは異なっている。すなわち、先の4類が、廃棄用の竪穴であり、木炭片や焼土・礫を含みながら徐々に埋没して行く状況であったのに対して、第Ⅳ区の竪穴は掘削後一時的に埋没している状況である。これはほぼ共通した堆積の仕方である。また遺物はまったく出土しておらず、時期比定は難しい。断面形は逆台形で、床面は平坦なものと凹凸に富むものとがある。掘り方は良質の青灰～暗青灰色粘土を掘こんでおり、砂礫層までは達してはいない。法量は最大のもので1.2m前後削平されているので本来の深さは、深さは30～55cmほどで深さはあまりない。

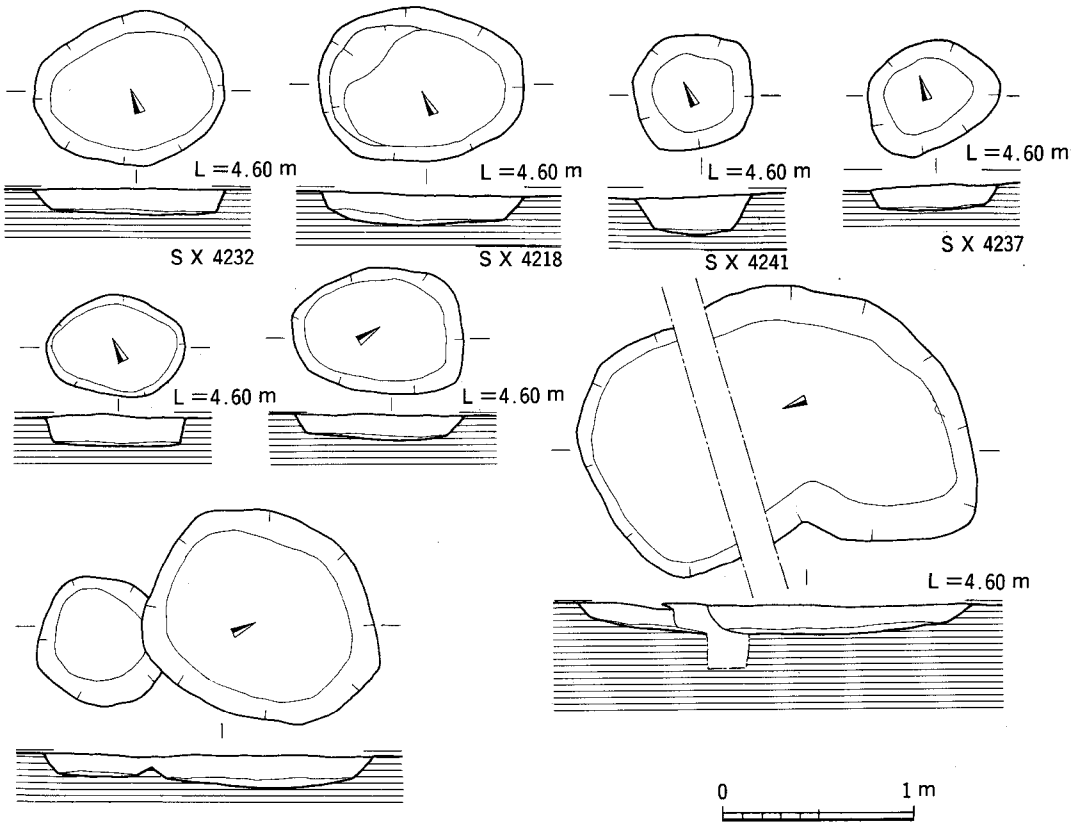
鋤状の木製品や掘り方の深度、埋まり方からみて、やや飛躍するが、粘土採掘を行なった穴の可能性もある。



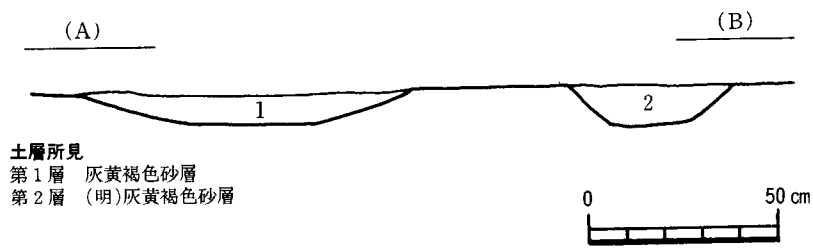
SX156 土層所見
第1層　明灰～灰色粘質土層
第2層　明灰褐色粘質土層
第3層　灰色～暗灰色粘土層
第4層　暗灰～暗灰褐色粘土層
第5層　黒色～黒灰色粘土層

SX157 土層所見
第1層　灰(白)色シルト層
第2層　明青灰色シルト層
第3層　暗灰色粘土層
第4層　青灰色粘土層

Fig,113　第Ⅳ区竪穴遺構平面および断面図（SX156～158）(1/40) その1



Fig,114　第Ⅳ区竪穴遺構平面および断面図（1/40）その２



Fig,115　第Ⅳ区溝状遺構断面図（1/20）

(2) 遺物各説

概要 第Ⅳ区では遺物はほとんど出土していない。

縄文時代の早期のものと思われる黒曜石製石鏃、土師器（皿・坏）破片、瓦器破片など数えるほどである。

以下では図示し得たものについて説明する。

1) **溝状遺構出土の遺物**（Fig,116）

ＳＤ70出土遺物　（Fig,116）

土師器　丸底坏（739）　口径・器高・底径は14.8・3.4・（8.2）cm。外底は手持ちヘラケズリ。内面から口縁部外面にかけては回転ナデ仕上げ。胎土は精良。焼成良好。明褐白色。

2) **竪穴遺構出土遺物**（Fig,116）

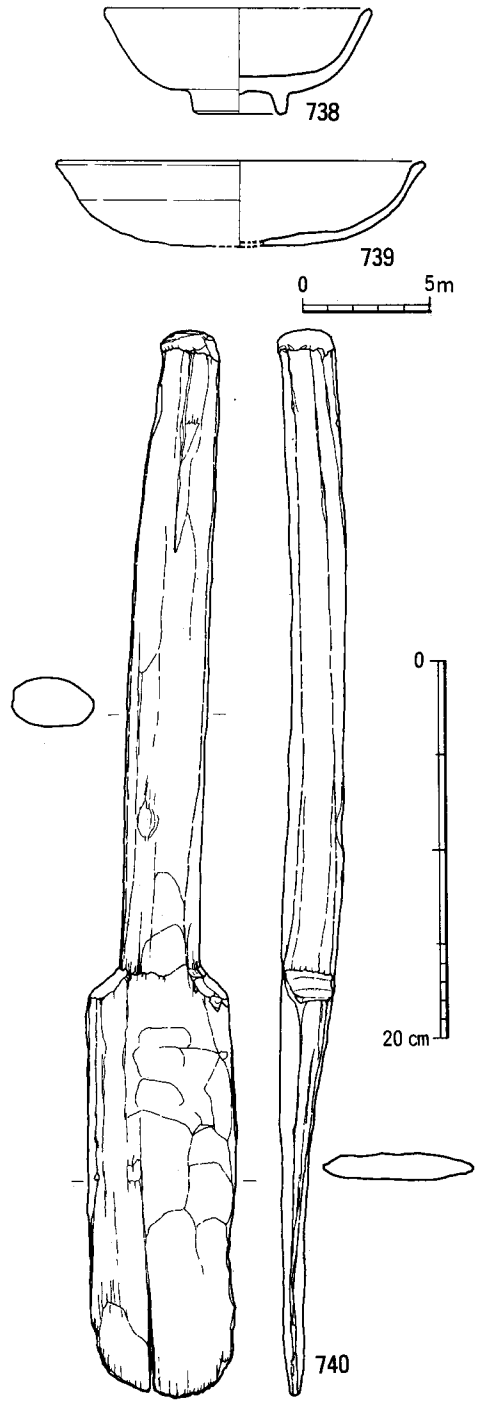
ＳＸ157出土遺物　（Fig,116）

木製品　鋤（740）　樫製。現存長・柄の長さ・柄の直径・身の長さ・身の幅・身の厚さは順に、56・33・3.8・22.5・8.0・1.3cm。

柄の末端部は潰れている。鋤先はわずかに丸く作ってある。鋤身はわずかに内湾している。

3) **表土出土遺物**（Fig,116）

磁器　碗（738）　口径・器高・高台径は10.7・4.3・3.8cm。伊万里系磁器である。内底は輪状に掻き取っている。外面に茶褐色の釉がかかる、焼成は堅緻。



Fig,116　第Ⅳ区表土・溝状遺構（ＳＤ71）、竪穴遺構（ＳＸ157）出土遺物実測図（1/4・1/3）

Ⅶ　おわりに

以上調査の所見について述べてきたが、ここでは第Ⅰ区から第Ⅳ区までの調査の成果について概観し、遺物、遺構および屋敷地について、若干の問題点を提示して足掛け3年にわたった戸原麦尾遺跡の調査のまとめとしたい。

（1）遺跡の概観

戸原麦尾遺跡は、多々良側左岸に形成された、3つの屋敷地跡、水田址、墓址などから構成される遺跡である。時期は中世前期、鎌倉時代を主要な構成時期とするもので、平安時代後期まで遡る堰、条里地割りに沿う溝状遺構等も検出されている(Fig,51)。

当該時期における本遺跡周辺は、筥崎宮が所領していた荘園であり、本遺跡の調査においては少なくとも、当時の荘園内における屋敷地の分布、屋敷地と水田との関係、また屋敷地内の具体的な構成などの一端を知ることができた。

約33000㎡の調査区のうち北東部に位置する第1区においては、方形に区画された屋敷地跡が確認された(正確には、コの字形)。屋敷地は一辺が半町規模で、2条の溝状遺構が並行して建物・井戸等の遺構の周囲をめぐっている(付図1・2)。なお、2条の溝状遺構の間には基底部の最大幅が3m前後、最小幅が2mほどの土塁が存在した可能性が考えられた。遺物からみると土塁の形成時期は13世紀後半以降になってからと思われる。また屋敷地とほぼ同時期あるいは前後する時期の墓址も、調査区東端部、中央部、屋敷地内などに認められ、湖州六花鏡とガラス小玉、また高麗鏡等を副葬する墓址が検出された(付図1, Fig,6)。

これらの南西部に位置する第Ⅱ区においても、第Ⅰ区の屋敷地と比べ、やや形成時期が新しいと思われる屋敷地が検出された。この地点では、日野尚志氏が復元された、多々川下流域に展開する粕屋条里区の坪並に合致して屋敷地が区画されており、日野氏の坪並の復元案に従うと、屋敷地は粕屋西郷北六図八里11坪に位置していることになる(Fig,118･119)。屋敷地は遺構の先後関係、出土遺物の新旧関係からみて、その形成初期(13世紀半ば)は第Ⅰ区と同様に半町四方の規模であったものが、おおよそ13世紀後半ころに、東側を画する溝状遺構を埋め立て、東西1町、南北半町の規模の敷地に拡張したことが推定された。また拡張にあたっては、いわゆる半折型の水田区画に合わせていることが認められ、屋敷地に隣接する水田の形状と規模がある程度推定できた(p39～42、p76)。なお遺構面を覆う焼土層からの出土遺物からみて13世紀末から14世紀前半の時期にこの屋敷地は廃絶されるようである。廃絶される契機が興味あるところである。

第Ⅲ区調査区の西側においては、現在の広田集落に関連すると見られる近世の屋敷地がある。遺構の分布状況から見て屋敷地の一隅と思われる（Fig,91）。出土遺物から見て18世紀から

19世紀頃の時期が想定できるが、建物はすべて掘立柱建物であり、溝状遺構により敷地が小区画化されている。第III c 区からは、条里地割りに沿う大溝が検出され、西端部の埋土中位から板絵が出土している。全国的にみても出土例は希少であり、また古代から近世の絵馬資料の欠を埋める好資料である。この資料については、付論２で詳しく論じているので参照されたい。第IV区では古代末の水田に伴うと思われる溝状遺構が検出されている。現存条里の方向とは一致せず、多々良川の氾濫によって形成された微地形に沿う水田の区画も、一時期存在したことが予想された。

以下では、主に第Ｉ区と第II区の出土遺物と遺構について見て行きたい。

（２）出土遺物について

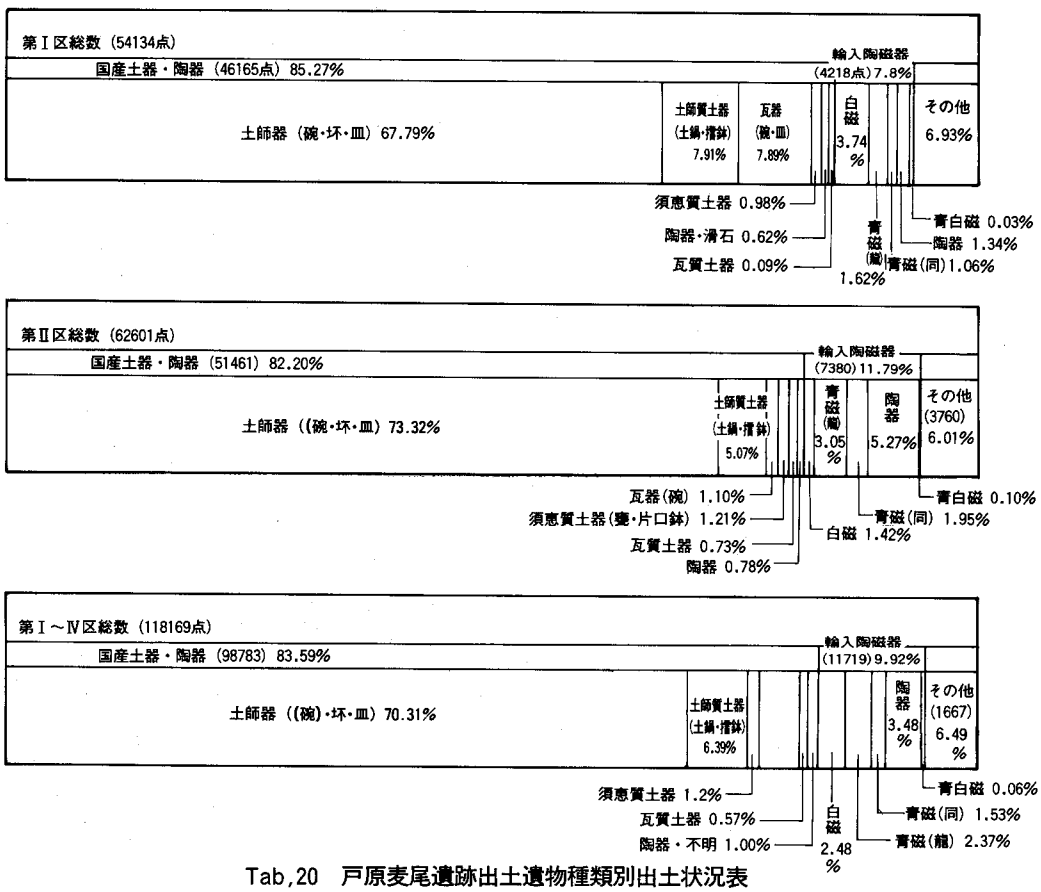
本遺跡から出土した遺物は、土師器（皿・坏・碗）、土師質土器（土鍋・擂鉢）須恵質土器（甕・片口鉢）、瓦器（碗・皿）、瓦質土器（釜・三足釜・鉢）、近世陶磁器（染付・備前擂鉢）等の国産土器、陶磁器類を始めとして、白磁（碗・皿）、青磁（碗・皿）、青白磁（皿・合子）、陶器（甕・壺・四耳壺・水注・鉢）、天目碗等の中国産輸入陶磁器の類、また滑石製品（石鍋・転用品）、鉄製品（釘・刀子・紡錘車・鉄滓）、土製品（土錘、土人形）、銅銭、青銅製鏡（鳳凰文柄鏡・湖州六花鏡）、木製品（櫛・曲物）などである。これらは当時の生活資材のごく一部にしかすぎないであろうが、破片による総点数は118,169点を数える（以下点数表記の場合いずれも破片数）。遺物は第III区を除いて、ほとんどが中世前期、鎌倉時代に属するもので、太宰府編年を参考とすると、ほぼ13世紀～14世紀初め頃を主要な時期とする。一部に11世紀まで遡るものや、15世紀頃までに含まれるものがあるが、数量はわずかである。

これらの遺物の器種構成を見ると、主体を占めるのは土師器、土師質土器などの供膳、調理形態のものである。破片数の占める割合からみた供膳調理形態の器種が、出土遺物総量に占める割合は83.59％である。これに対して輸入陶磁器は9.92％の量で、比較的高い割合を占めている。なるべく個対数の抽出に努めながら分類作業を行なったが、時間的な制約もあり数量の確認は難しかった。したがって破片数であるので、使用された器物の実態をどこまで反映しているかは、いくつかの前提条件が必要であろうが、中世前期の本遺跡における遺物の数量的な内容の大まかな傾向は窺えると考えられる。今後の課題としては、より細かな時期毎の組成比がどのように変化していくのかが問題となるが、現段階では編年作業が不十分なため明確にし得ない恨みがある。

第Ｉ区と第II区および遺跡全体の遺物の出土状況を見ると、第Ｉ区で多かった白磁・瓦器が第II区では少なくなっている。白磁は分類の上では、森田分類によるIII類（第Ｉ区596点、第II区32点）・Ｖ類（第Ｉ区399点、第II区222点）といった12世紀代に位置付けられるものが大幅に減り、より新しい時期のいわゆる口禿の白磁（皿）・青白磁がやや目立つようになる。土師器の法

量や、その他の遺物の出土傾向からも同様にいえるが、時期的に古く遡り得る遺物の出土頻度は第Ⅰ区の方が高い。おそらくこれは、屋敷地の成立が第Ⅱ区よりもやや古いことによると考えられる。輸入陶磁器のなかで比較的割合が高いのは、褐釉、黄釉の陶器で、しかも調理形態の擂鉢・鉢の類や甕がやや目立つことである(第Ⅰ区726点・第Ⅱ区3297点)。しかし、須恵質とした東播磨系の土器(捏鉢)の量は減ってはおらずむしろ増えており(第Ⅰ区531点、第Ⅱ区755点)、ほぼ同時期に本遺跡では国産品と輸入品で、器種を補完しながら調理具・貯蔵具を用いていたことが考えられる。またこのことは13世紀半ばから後半の内外の物質的な流通がかなり煩雑であったことが想像できよう。

青磁では圧倒的に龍泉窯系の碗(第Ⅰ区881点、第Ⅱ区1908点)と同安窯系の碗・皿(第Ⅰ区574点、第Ⅱ区1222)が主体である。越州窯系青磁、高麗青磁などもあるが、わずか数点で少ない。龍泉窯系の中では、碗Ⅰ類のうち、見込み内底に「金玉満堂」等の印文を施している例が、第Ⅱ区で目立った。しかしいずれも出土品は、釉の発色の悪いいわゆる下手物の類で、品質は良くないものが多い。



Tab,20　戸原麦尾遺跡出土遺物種類別出土状況表

これらの輸入陶磁器の占める割合は先述したように、9.92%を占めている。この割合について、数例の他の遺跡における出土傾向と比較してみる。

博多遺跡群冷泉7-1地点（福岡市博多区冷泉7-1、博多遺跡群第４次）では土師器（碗・皿）の69.5%に対して輸入陶磁器は23.9%を占める。同じく冷泉474-9地点（博多区冷泉474-9　博多遺跡群第10次）では、土師器などの国産品の61.3%に対して38.7%という高い比率を占めている。これらの数値は、貿易港という遺跡の性格からくるものであることを示している。戸原麦尾遺跡とほぼ同時期の、南区柏原遺跡Ｋ区で確認された、入来文書に記載ある屋敷地に考えられている居館跡からの出土遺物の構成は、土師器、土師質土器が99.2%、輸入陶磁器が0.62%、陶器が0.18%である。陶磁器の類は個体数抽出によって、破片数が必然的に減っているので全体に占める割合はかなり低いものになっている。固体識別が可能だったものは、土師質土器が堝15、鉢4、火鉢１の20点、陶器が擂鉢25、黄釉盤２、鉢１で、龍泉窯系青磁58、同安窯系青磁３、越州窯系青磁１、白磁46が数えられている。

南区五十川高木遺跡は、中世集落遺跡と考えられているが、全出土遺物の約38%というかなり高い比率で輸入陶磁器が出土している。

数値の扱い方が均一でないために、ある一定の傾向を看取するのは難しいが、最後に示した福岡市域内における中世の遺跡からの輸入陶磁器の出土状況は、一般的にいって、高い比率を示している。これは、北部九州、特に博多湾周辺においては、地理的な有利性によって、輸入陶磁器の需要層の底辺が広かったものと考えられる。このことは西日本のその他の遺跡について見れば明らかである。例えば時期はやや新しくなるが、鎌倉～江戸時代にかかる広島県草戸千軒町遺跡では、土師器(碗・皿)が45%、国産陶器が23%に対して、輸入陶磁器は全体の１%ほどである。また広島県尾道遺跡群では、土師器(碗・皿)が86.4%、国産陶磁器が10%に対して、輸入陶磁器が5.7%を示している。また大阪府高槻市内の平均的な輸入陶磁器の占める割合は1.3%ほどでそれぞれ低い傾向を示している。

残された問題としては、需要層の底辺がどういった社会的階層なのかということであるが、北部九州の場合、一つの見通しとしていえば、この時期に、各荘園を基盤に成長し御家人化していた在地名主層や自立農民層まで、及んでいた可能性があることを指摘しておきたい。

・高槻市教育委員会「上牧遺跡調査報告書」　1980
・松下正司「草戸千軒出土の日本陶磁」草戸千軒42　1976
・福岡市教育委員会　博多Ⅰ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第66集　1981
・福岡市教育委員会五十川高木遺跡福岡市埋蔵文化財調査報告書第32集　1975
・福岡市教育委員会　柏原遺跡群Ⅲ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第157集　1987

次に国産の土器類のうち土師器についてみてゆく。

遺構毎に出土した皿、坏について法量の計測を行い、皿と坏の法量変化を遺構単位の平均値の変化をとおして見てみた。その結果では、まず全体の出土傾向でみると、第Ⅰ区では、土師

器皿の場合、口径平均値が8,5〜8,8cm、器高が1,2〜1,3cmの皿を出土する遺構が最も多く、次に9,4cm、器高が1,0〜1,2cmのものが次に多い。次に口径9,2cmで、器高1,0cmのもの、次に8,0〜8,3cmで、1,1〜1,2cmのもの、次に9,6cm、1,1〜1,2cmのものとなり、全体の平均値では口径が9.1cm、器高が1.14cmである(個体数257個)。坏の場合では、口径平均値が13,6〜15cm、器高が2,6〜2,8cmのものが最も多い。口径が11cm〜12cm弱の小型のものも見られる。全体の平均値では口径が14.16cm、器高が2.64cmである(個体数107個)。次に第II区では、皿の場合、全体の口径平均値は9.03cm、器高が1.2cmで(個体数293個)、口径が8.8cm〜9.0cmのものを出土する遺構が最も多い。土師器坏では口径平均値は14.1cm、器高が2.6cmで(個体数124個)、口径が13.6cmのものが最も多く、次に14.0cmのものを出土する遺構が多い。土師器の法量数値から見た場合、第1区と第II区とは、全体的にほとんど変わらない時期のものという結果が出ている。次に遺構の切り合い関係から見た法量の変化を見ると、第1区の報告時に区分したように、皿の場合は時期が新しくなるにつれて、口径法量が減少する傾向が認められ、便宜的に1〜9期に区分した(Tab,22)。坏の場合は時期の違うものの混入例が多いために明確でないが、16〜17cm大のものは皿の3〜5期にかけて特に顕著に見られる。12〜13cm大のものは6期以降に見られるようになり、11〜12cmの小型のものは9期以降に見られるようである。年代観は大宰府における編年を参考にすると、1期が11世紀半ば頃、4期が12世紀末〜13世紀初め、5〜8期が13世紀半ば〜後半頃と考えている。これを参考にすると第1区は4〜9期にかけて、また第II区は5〜8期にかかる遺構群(屋敷地)といえる。なおTab,22では該当する時期に遺構を置いてみたが、遺構間の切り合い関係等で、遺構が包含していた皿の口径よりも大きな口径値のところに位置付けしたものもある。

その他の国産土器のなかでは、須恵質土器とした東播磨系捏鉢・甕が注意される。

本遺跡出土の擂鉢・捏鉢は大きく分けて国産品と、輸入品とに分けられるが、東播系須恵器捏鉢および甕はTab,20に示した比率を占める。破片数にすると、第I区で531点、第II区で755点、第III区で21点、計1307点出土している。

これらの捏鉢の、形態的な諸特徴は以下のようになる。

焼成は堅緻で、硬質である。焼成上の個体間の差はあまりない。強いて分けると、硬質のものと、やや焼き締まりのあまい小孔が若干見られるものとがある。胎土は精良で白色と黒色の細砂を含んでいる。黒色又は黒褐色の細かな粒子が目立つものと余り目立たないものとに分かれる。色調は明るい灰色が一般的であるが、灰白色〜薄く青みがかった明灰白色のものなどがある。口縁部は暗灰色〜黒灰色で、残りの良好なものは口縁部の外面に部分的に瓦器特有の銀灰色を呈するものがある。一般的に銀灰色の部分が残っているものは、焼成堅緻で、全体的に良品である。成形はすべて轆轤回転による。底部に残された切り離痕は回転糸切りのものがほとんどである。口縁部・体部・底部、および上記の焼成・胎土・色調・成形上の特徴的な要素

から大きく３種類のタイプに分けられる。

Ⅰ、断面形が稜の鋭い三角形のもので全体に造りが比較的に丁寧な、良品のもの。焼成は堅緻で、薄く青みがかった灰白色～灰色。口径は28～30cmほどか。

II、断面がⅠ類と同様玉縁状に近いものであるが、全体に丸みがあり、焼成はややあまいが、締まりは良好である。明灰色を呈す。数量はこの類が最も多い。

III、口縁部断面は袋状となり、やや粗成のもの。器形はやや小型化しており、焼成はあまくやや脆い。回転糸切り痕を底部にはそのまま残す。

本遺跡での出土状況は、Ⅰ類とした捏鉢が、先に述べた４～５期に、II類が５～７期に、III類が８期に含まれる遺構から出土している。これらの出土時期について、生産地における編年と対比すると、Ⅰ類は12世紀末～13世紀初め、II類は13世紀後半頃に、III類は14世紀前半に考えられており、生産地と消費地との流通関係が、ほぼ同時期のものであることがわかる。また東播磨系捏鉢の、中世前期の全国的な流通の傾向については、13世紀半ばから後半に一つの画期があることが指摘されているが、本遺跡での時期的な変化が、全国的な動向と軌を一にしていることを指摘しておく。また本遺跡では、常滑窯系陶器や畿内系の瓦質土器等は、東播磨系のものよりもやや遅れて（約四半世紀ほどか）出現するようである。

（森田稔『東播系中世須恵器生産の成立と展開』神戸市立博物館研究紀要第３号1986）。

（３）遺構について

第Ⅰ区から第III区まで130棟の掘立柱建物が認められた。これらの内訳は１×２間が２棟、１×３間が４棟、１×４間が１棟、１×５間１棟、２×２間が１棟、２×３間が96棟、２×４間が13棟、２×５間が１棟、３×３間が７棟でで、３×４間が１棟、４×５間が１棟、圧倒的に２×３間が多い。これらのうち庇のあるものは13棟で、その内訳は片面庇のものが６棟、四面庇のものが７棟である。

確認された数から見て、２×３間の間取りの建物が当時の家屋の基本形となっていたと見ることができる。この間取りには、いくつかの変形があり、当時の家屋の構造を知る手掛かりになるものと思われる。本遺跡で確認された２×３間の建物は大きく６つの類型化が可能である。１類は典型的な２×３間のもので、側柱が９本で構成されており、柱が整然と並んでいるもの(Fig,117の1･2)。２類は妻もしくは側面に庇が付くもの(6)。３類は四面に庇が付くもの(3)である。この３類は第II区にしか存在しない。４類は、どちらかの側柱が３間の間取りでなく、２間のものや、柱の無いもの、あるいは補助的な柱をもつもの(4)などがある。５類は側柱の中央２本の柱が、中央によるもの、またまれに隅柱側に寄るものもある(5)。６類は２×３間ではあるが柱間隔が長く延びるもの(7)もある。これらの１～６類は、間仕切り用と思われる補助柱をもつものと持たないものなどがある。補助柱は棟筋に並ぶものや、いずれかの壁へ寄るものな

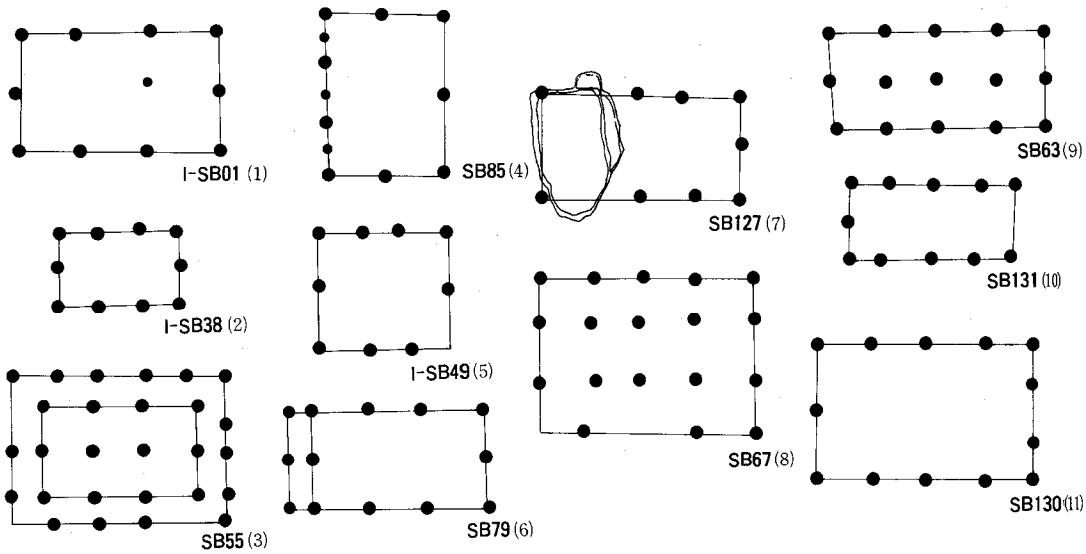


Fig.117　戸原麦尾遺跡掘立柱建物平面図

どがある。3類は四面に庇を持つとしたが、古代の寝殿造り的な庇ではなく、軒をさらに延長した、いわゆる下屋的な構造のものとも思われる。3類は規模も大きく、第II区では母屋的な大きさ、配列をとる。

2×4間のものは数が少ないために類型化は難しいが、基本的には2×3間の分類に近いと思われる。概して規模は大きい。ただし四面に庇が付くものは第I区～III区を通して認められなかった。ただし側柱に庇を付けたと考えられるものがある(8)。

以上の建物の機能と用途については、1類と3類、8～11類は、その規格性と規模から住居用の家屋と考えられ、特に3類は母屋的な建物とすることが出来る。これに対して、小規模な2類などは納屋、倉庫等が想定できる。4・5類は住居としての用途も含んで、比較的多様な用途の建物と思われる。竪穴遺構と重複する例の多い7類は作業用の建物とも思われる。

(4) 屋敷地と条里地割りについて

Tab,21に第I区から第III区までの掘立柱建物の棟方向のグラフを示した。これを見ると形成時期の新しい第II・III区の建物は、条里地割りの方向性ににより合致していることがわかる。第I区は、かなり方向性にバラツキがあり、多分に立地条件に制約されたものとなっている。これはおそらく屋敷地形成の契機と動機がそれぞれ異なっている可能性がある。すなわち第I区の屋敷地は、条里地割りが整備される初期もしくはそれ以前の立地の上での選択がなされたもので、これに対して第II区の屋敷地はかなり計画性のある建物の配置がなされており、条里地割りがある程度整備された段階の占地であると考えられるのである(P76)。

条里の施行がどのような展開をしていったのか興味あるところであるが、多々良川下流域に

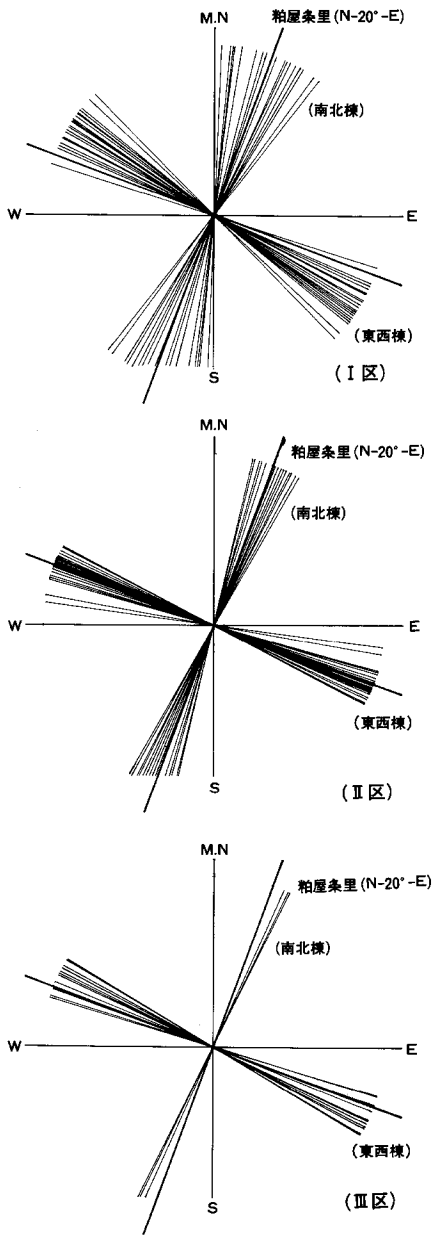
おいては、おそらく多々良込田遺跡周辺でまず条里が整備され、その後の荘園の発達に伴いその周辺（古代官衙域）に展開していったと考えられる。戸原麦尾遺跡の旧河川や遺構の在り方、また遺物の出土状況等の所見では、条里施行は、平安時代後期以降のやや新しい時期までおりるのではないかと考えられるからである。

ここで、Tab, 22をもとに、本遺跡の成立と展開について、第Ⅰ・Ⅱ区における屋敷地の建物やその他の遺構の構成も含めて見てゆきたい（付図1・2）。

本遺跡の形成過程の画期はおおまかに、1、平安時代後期～末、2、鎌倉時代、3、鎌倉末から室町時代初め、4、江戸時代後期の4期に分けられる。

第1期は、本遺跡において遺構が見られ始める時期である。多々良川の氾濫により形成された湿地や支流が、おそらく点々と存在している景観の下で、一定しない河道の治水のためや灌漑用として第Ⅰ区SA01・02にみるように井堰が作られ水路の整備をはじめとする水田の経営が行われだす時期である。第Ⅰ区SK10などの墓跡以外にはこの時期の集落に関わる遺構は未確認である。本遺跡の西側に約700m離れた、多々良込田遺跡は遺構および出土物から官衙的な性格の強い遺跡で、11世紀頃まで営まれた遺跡であるが、この遺跡の廃絶される時期と本遺跡の形成時期が近接していることは注意される。多々良込田遺跡では、奈良時代までに遡り、復元条里に一致する大溝が確認されている。おそらく、多々良込田遺跡周辺に施行された条里を基準とした水田圃場の整備が、その後の荘園の新たな展開に応じて進められたことが考えられる。第Ⅲ区のSD61はそのことを物語っていると思われる。

なお絵馬の出土や、胡州六花鏡を副葬した木棺墓（SK10）の存在は、当該地に入植した最初の人々の証左と考えられる。特に絵馬は本遺跡の立地条件上、多々良川の氾濫を被りやすいということを考慮すると、水田経営にあたって、旱魃のみならず大雨・洪水に対する忌避や、豊作祈願などの祈りが込められたものと



Tab,21　掘立柱建物棟方位グラフ

見ることもできよう。

第２期は、本遺跡へのはじめての入殖から約１世紀を経て、周辺の地盤が安定した時期にあたり、屋敷地が形成される時期である。調査区内では、多々良川にもっとも近い第Ｉb区に半町四方の規模で、幅が約２～2.5m程の溝で周囲を囲った屋敷地がまず見られる（付図２）。２×４、２×５間規模の母屋を中心に、北側ないし、東南側に２×３間の小さな倉庫、また曲げ物を井側とする井戸がこれらの建物の近辺に位置し、さらに屋敷地の北辺には半地下式の建物が位置している。これらの建物および遺構が一組となり屋敷地を構成している。

第Ｉb区の屋敷地の成立とはやや遅れて、第Ｉa区の東側と、第II区の西側（第IIa～b区）に屋敷地が形成される。第Ｉa区では溝の有無は確認できていない。第IIa～b区の屋敷地では当初、第Ｉb区の屋敷地の規模とほぼ等しい半町四方規模であったものが、東辺の溝の形状の変化（直線から近世の城館に見られる「桝形」に似た平面形をなすコの字形）を経て、さらに東へ半町拡張され、面積の上では約２倍の屋敷地となる。おそらくこれとほぼ同時に第Ｉb区の屋敷地では土塁（土塁の内外には幅が１～２mの溝が付属する）が設けられる。暦年ではおおよそ13世紀後半以降と推定される。

この時期に、調査区内において、土塁を持つ屋敷地と、溝で囲った屋敷地、の２つの異なったタイプの屋敷地が至近距離に並存していることが想定でき、土塁の有無は、それぞれの屋敷地の居住者の社会的な身分差を表現しているものとも考えられる。

昭和45年に調査された多々良遺跡でもほぼ同時期の屋敷地が確認されている事も考えると、この時期に、多々良川下流域において半町四方の規模の大きさの屋敷地が点在していたことが考えられる。しかもこれらの屋敷地は条里地割り上に分布しており（Fig, 118）、当該地周辺の営田と灌漑水利等の整備が、これらの条里地割り上に点在する集落・居館を中心に網目状に進められたことは十分考えられるところであり、第Ｉ・II区の屋敷地および多々良遺跡が相互に密接な関係をもって荘園経営の実際を担っていた事が想定できる。

第２区の屋敷地の構成は、先に述べたように半町規模から、東西に１町、南北に半町規模に拡張されている。半町四方の段階では２×３間規模の母屋と考えられる建物が東北隅（SB69～75周辺）、西側（SB89～95）、そして西北隈（SB99～100）にみられ、これらの建物に隣接してSX01･52などの竪穴遺構が見られる。また近接して曲げ物を井側とする井戸がみられる（SX23、SE32･17）。屋敷地の東～南側には水田ないし畑地が展開していた。東西１町の段階では、SB55の位置と、SB124周辺にも母屋と考えられる建物が展開しており、４面庇の建物が見られるようになる。遺構の構成は従前通りで、掘立柱建物と竪穴遺構（７類）、井戸が基本的な構成要素である。なお屋敷地東側の境は柵があった可能性があるが、この時期の柵については確認できていない。

第３期は、第２期まで営まれた屋敷地としての利用が放棄される時期である。当該地周辺は

水田または畑地として土地利用がなされるものと考えられる。この時期の水田は第II区の南東側、第I区でその一部が確認されたが、明確な平面形を確認するまでにはいたっていない。ちょうど中世後期に相当するこの時期には、筥崎宮領粕屋西郷の中に含まれ、12町を数える戸原村の田数には屋敷地が4ケ所あったことや、また水田圃場も零細で、おおむね生産力が低かったことが佐伯弘次氏により付論1において指摘されている。遺跡周辺の字名に「古屋敷」等が散見できるが、屋敷地が他の地点に移ったことも考えられ、当該時期の考古学的な所見は、周辺の今後の調査に期待されるところが大きい。なお屋敷地が廃棄される契機は、建武3年（1336年）の多々良潟の合戦の影響が大きいと考えている。

第4期は第III区で確認された屋敷地である。江戸時代後期の村落と考えられ、現在の広田集落と歴史的に直接つながるものである。建物はいまだに掘立柱建物で、鎌倉期の建物と構造規模ともにほとんど変わらないものの、井戸がかなり大きくなっており、また厠と思われる遺構も存在するなど、生活様式の変化が遺構の上からも読み取ることができる。

以上本遺跡について述べてきたが、当該期の他の遺跡と比較検討し本遺跡の特性を抽出するまでにはいたらなかった。しかし非常にわずかではあるが文献記録が残っている荘園の一隅を調査し得たことは、博多湾沿岸における当該期の荘園経営の実態を考察する上で非常に貴重な資料を得たと言うことができる。最後に福岡市域における古代末から中世の集落関係の主要な報告書の一覧を添え結びとする。

市域内中世関係調査報告書一覧　（福岡市埋蔵文化財調査報告書は福市埋調報と略した）

福岡市教育委員会　多々良遺跡調査報告書　福市埋調報　第20集　1972
同上　牟多田遺跡　福市埋調報　第27集
五十川高木遺跡A・B地点
多々良込田遺跡　山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告
福市埋調報　第32集　1975
同上　蒲田遺跡　九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告
福市埋調報　第33集　1975
同上　板付周辺遺跡調査報告書（6）諸岡G区福市埋調報　第57集　1981
同上　板付周辺遺跡調査報告書（7）－諸岡I・J・K区－
福市埋調報　第65集　1981
同上　三筑遺跡・次郎丸高石遺跡　福市埋調報　第69集　1981
同上　田村遺跡I　福市埋調報　第89集　1982
同上　田村遺跡II　福市埋調報　第104集　1984
同上　麦野下古賀遺跡　福市埋調報　第107集　1984
同上　諸岡遺跡－第14・17次調査報告－　福市埋調報　第108集　1984
同上　博多III　第17・20・22次調査の概要　福市埋調報　第118集　1985
同上　博多V　（第25次調査）　福市埋調報　第120集　1985
同上　那珂久平遺跡　I　福市埋調報　第133集　1986
同上　藤崎遺跡IV第8・10・11次発掘調査報告　福市埋調報　第138集　1986
同上　有田・小田部　第7～10集　福市埋調報　第139集　1986
同上　博多VI　博多遺跡群第26次調査の概要　福市埋調報　第144集　1986
同上　井相田C遺跡I　福市埋調報　第152集　1987
同上　柏原遺跡群III（K区）　福市埋調報　第157集　1987
福岡県教育委員会　箱崎遺跡　福岡市東区箱崎1丁目所在遺跡の調査
福岡県文化財調査報告書　第79集　1987
同上　那珂久平遺跡II　福市埋調報　第163集　1987
同上　下山門乙女田遺跡　福市埋調報　第170集　1987
同上　長峰遺跡　福市埋調報　第185集　1988
同上　田村遺跡V　福市埋調報　第192集　1988
同上　峯遺跡　福市埋調報　第197集　1989
同上　原六次　西部地区II　福市埋調報　第213集　1989

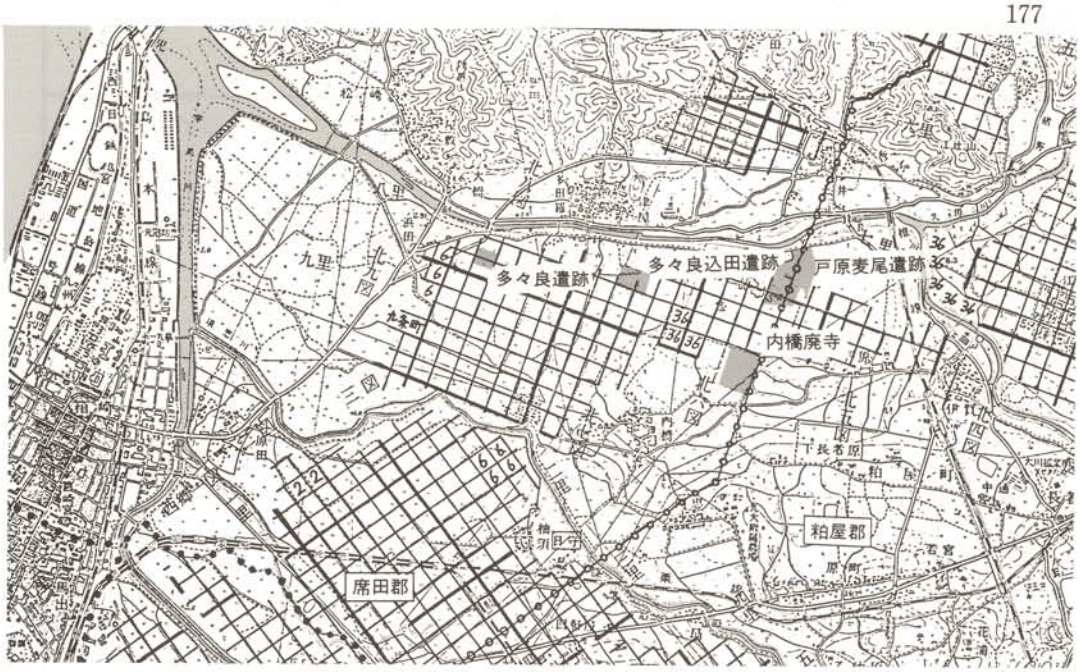


Fig.118　多々良川下流域の条里の復元（1/40000）

○-○-○-○駅路（西海道）　●●●は郡境

日野尚志「筑前国那珂・席田・粕屋・御笠四郡における条里について」

（『佐賀大学教育学部研究論文集24（Ⅰ）』1976）に一部加筆

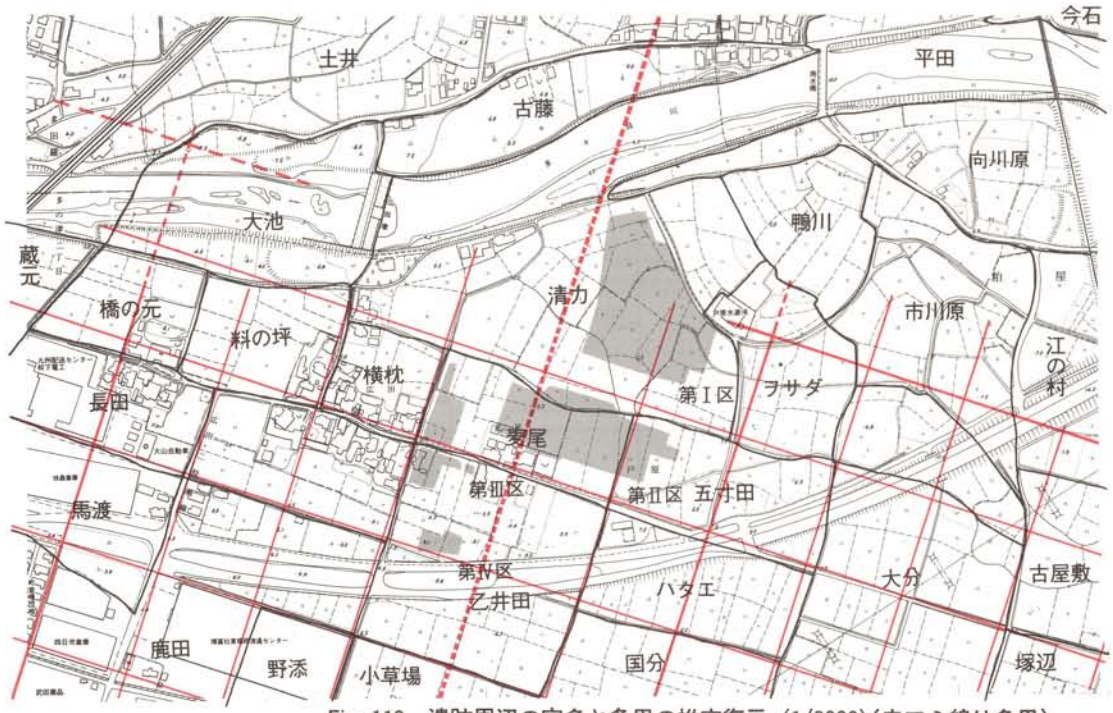


Fig.119　遺跡周辺の字名と条里の推定復元（1/8000）（赤アミ線は条里）

Tab.22 検出遺構時期区分表

(( )内の数字は、土師器皿の口径平均値)

中世の糟屋郡と筥崎宮領

佐伯弘次

はじめに

律令制下の郡郷名を記す「和名抄」は、筑前国糟屋郡の郷名として、香椎・志珂・厨戸・大村・池田・阿曇・柞原・勢門・敷梨の九郷をのせている。寛弘二年（一〇〇五）十一月十五日筑前国符案(内閣文庫所蔵文書／『平安遺文』四四二号)には、文書の宛所に「糟屋西郷司」が見える。したがって、11世紀初頭には、糟屋郡には東郷・西郷の二つの郷が所領の単位として成立していた。(1)

糟屋西郷には、「中原」「戸原村」のほか、「打橋村」「阿恵」「日守」「多々良村」「牛町」「平松」「寺門」「駒形」「ハスワ」「高田」「小松田」などの地名があり（石清水文書／『筥崎宮史料』四六五・四八七号、以下『筥』と略す)、現在の糟屋郡の西部一帯に分布している。これに対して糟屋東郷は、「南里」「和田・津波黒・田中」などの地名があり（石清水文書／『筥』四六六号)、糟屋郡の東南部に分布している。

「和名抄」の郡郷は、十一世紀の四十年代に大きな改編がなされ、中世的所領が形成されることが指摘されている。(2) 中世の糟屋郡関係史料には、「香椎郷」「敷梨郷」「勢戸村」など、「和名抄」郷に由来する名称をもつ地名もあるが、「多々良郷」「蒲田別符」「青柳郷」「八田郷」「三苫郷」など、「和名抄」には見られない郷名も見られる。いわゆる中世的郡郷である。こうした新しい中世的郡郷がいつごろから成立したのかは明らかにしえないが、他地域と同様、平安後期以降に形成されていったと考えられる。

一、糟屋郡内の荘園

糟屋郡内の荘園について、その主なものを『角川地名大辞典』40福岡県などによりながら概観しよう。

① 猪野荘（久山町猪野）

安楽寺（太宰府天満宮）領。観応三年（一三五二)が史料上の初見。足利尊氏が安楽寺に寄進した。

② 植木荘（須恵町植木）

宇美宮領。本家は石清水八幡宮。建久三年(一一九二)が初見。宇美宮六か荘の一つ。鎌倉後

期の正和二年（一三一三）には、沙汰人・名主らが年貢抑留を行なった。

③　宇美荘（宇美町宇美）

宇美宮領。本家は石清水八幡宮。治承二年（一一七八）が初見。石清水八幡宮の祠官によって伝領された。

④　小中荘（篠栗町尾仲）

安楽寺領。成立は早く、延喜十九年（九一九）の寄進という。鎌倉時代には地頭職が設置された。天文九年（一五四〇）、大内氏被官の河津氏が代官職をもつ。

⑤　香椎荘（福岡市東区香椎）

大宰大弐平頼盛が領家職を持つ。蓮華王院に寄進。平家没官領となった後、源頼朝より平頼盛に返却される。のち大宰府領になる。建久八年（一一九七）、香椎宮は石清水八幡宮の支配下に入った。

⑥　酒殿荘（粕屋町酒殿）

安楽寺領。長寛二年（一一六四）、安楽寺の開発によって成立。南北朝期以降は、「酒殿村」と表現される。

⑦　多々良荘（福岡市東区多々良）

安楽寺領。至徳元年（一三八四）が初見。このほか、筥崎宮領糟屋西郷に「多々良村」があり、香椎社領に「多々良郷」がある。多々良は多々良川の河口部に位置するが、有力寺社領が錯綜していたと考えられる。

⑧　田富荘（志免町田富）

宇美宮領。本家は石清水八幡宮。治承二年（一一七八）が初見。宇美宮領を相伝した石清水八幡宮の祠官によって伝領。

⑨　福満荘（宗像郡福間町福間）

福万荘とも書く。中世においては糟屋郡に属した。京都の公家勘解由小路在宗家領があった。ここは、在地領主河津氏の根拠地であり、文明十一年（一四七九）、河津弘業は福万荘内在宗家領の代官職に任命されている。

⑩　吉原荘（志免町吉原）

宇美宮領。建久三年（一一九二）が初見。本家は石清水八幡宮。同宮の祠官によって伝領された。

以上、十の荘園について概観した。宇美宮領と安楽寺領が多いことが特色である。平安末から鎌倉初期以降に見える荘園が多く、特に酒殿荘は安楽寺が自力で開発した唯一の荘園であるという。地方寺社領であっても、荘園制的な関係によって、宇美宮領は石清水八幡宮が、安楽寺領は菅原氏が、香椎社領は平氏や石清水八幡宮が支配をしていた。

二、糟屋郡内の筥崎宮領

粕屋郡内には、香椎社・筥崎宮・宇美宮などの有力な神社があった。その中で郡内に多くの社領を有したのは筥崎宮であった。本節では、糟屋郡内の筥崎宮領について概観したい。

十五世紀中後期の筥崎宮領を示すのが、文明十年（一四七八）十月の「筥崎宮神事用途注文」（石清水文書／『筥』四八七号）である。これには、筥崎宮で古来から行なわれてきた神事とその用途を書き上げているが、当時の状況を反映して、「不納」と注記された用途も多い。この文書は、文明十年十月という年代からみて、神領回復を意図した筥崎宮側が、当時博多に下向中であった守護大内政弘に対して提出したものと考えられる。この注文から、粕屋郡関係の社領を一覧表にしてみよう（表1）。

この表を見ると、「不納」「半分納」がかなり多いことがわかる。特に、郡内でも比較的遠隔地になる久原は全て「不納」であり、当時筥崎宮領としての実質を失っていた。筥崎宮領が危機におちいりつつあったことを示している。しかし、穂波郡や嘉麻郡の遠隔地社領と比べると、収納率は高いといってよい。糟屋郡内の社領は、那珂郡内の社領とともに、筥崎宮にとっては膝下社領であったからであろう。この表から、郡内の筥崎宮領を抽出すると、①粕屋西郷、②粕屋東郷、③久原郷、④青柳郷、⑤乙犬、⑥蒲田別府の六か所が検出される。以下、個別の社領ごとに、その動向を概観しよう。

① 糟屋西郷

文治三年（一一八七）八月三日、源頼朝は、平家のために祈禱をしていた筥崎宮宮司秦親重を宥し、那珂西郷・糟屋西郷などの所領を与えた（『吾妻鏡』）。これに関連して、文治三年八月の日付を持つ「筥崎宮領坪付帳」（田村文書／『筥』八七号）がある。筥崎宮領の糟屋西郷・那珂西郷の坪付である。この史料の年号の部分は、本文の筆蹟とは異なり、明らかに追筆である。他の筥崎宮領の坪付は室町末期から戦国期のものしか伝来しない。したがって、この史料は、文治三年のものではなく、中世後期に成立し、のちに年代の追筆がなされたと考えたい。

前述のように、粕屋西郷には、「中原」「戸原村」「打橋村」「阿恵」「日守」「多々良村」「牛町」「平松」「寺門」「駒形」「ハスワ」「高田」「小松田」などの地名を含んでいる。筥崎宮に近い福岡市東区多々良から粕屋町打橋・戸原・中原にかけての一帯に位置する。

筥崎宮領糟屋西郷は、戦国期の惣田数が百八十町であった（石清水文書／『筥』四六五号）。その中には、座主田三十町、加灯三十町、打橋村三十町、阿恵・日守八町四反、下中原二十三町四反、筥崎御織地二十三町六反、多々良村四町六反などを含んでいる。戦国期には武家被官による代官請負がなされていた。戸原麦尾遺跡は、おそらく糟屋西郷戸原村の中に位置すると考えられる。

神　　事	社　　領	用　途	注　　記
二月十五日六日	糟屋郡西郷牛町役	7斗	加座主田
〃	糟屋西郷牛町四反役	5斗	年不・加座主田
三月三日	糟屋東郷	3石	預所役
四月八日	糟屋西郷平松一町役		近年未納・押領
七月十五日	駒形五反（糟屋西郷）		混座主田内京進役
〃	ハス7四反（　〃　）		〃
八月十五日放生会	久原郷役	3石	不納
〃	青柳郷社家	3石	半分納
〃	地頭分	3石	半分納
九月九日	青柳郷社家	3石	9斗不納闕怠
十月一日	糟屋西郷高田一町役	2石5斗	
〃	〃　アウリャウシ役	1斗	納
〃	〃　七庄司役	2斗5升	納
〃	〃　小松田五反役	1斗5升	納
十月十五日	青柳郷役社家分	1石7斗	
霜月御神楽	青柳郷社家分	1石5斗	
〃	同郷地頭分	1石5斗	近年半分納
十二月十四日	糟屋乙犬役	2斗	納
〃	同郷坂本役瑞応寺	3斗	納
〃	同	2斗	不納
〃	同新高一町役	5斗	納
〃	同ムキ田一町	5斗	神光寺不知地
〃	同ムマワタリ町二反役	5斗	不納
十二月十五日	糟屋四月田	1石5斗	加座主田京進役
潤月	青柳郷役	2斗5升	
〃	蒲田別符役	2斗5升	
〃	久原菊王丸役	1斗	不納
〃	久原益永役	1斗	不納
〃	糟屋東郷役	2斗5升	
〃	同　西郷役	1斗	

表(1)　糟屋郡の筥崎宮領（「筥崎宮神事用途注文」より）

② 糟屋東郷

糟屋東郷がいつ筥崎宮領となったのかはわからない。嘉禎三年（一二三七）五月の宗清処分状（石清水文書／『筥』三三二号）によると、「粕屋東郷筥崎宮領可相伝領掌之由在譲状」が宗清の女少将局に譲られている。鎌倉前期にはすでに筥崎宮領となっており、本家職は石清水八幡宮の祠官によって伝領されていた。この社領も戦国期の惣田数は百八十町であり、南里四十町、和田・津波黒・田中百三町七反を含んでいた（石清水文書／『筥』四六六号）。戦国期には、糟屋西郷同様、武家被官による代官請負がなされていた。

③ 久原郷（久山町久原）

寛元五年（一二四七）の法橋栄舜譲状によれば、久原内牟多田一町は筥崎宮講経免田であった。久原郷には、益永各・菊王丸名などの名が存在した。前述のように、文明十年の段階では、筥崎宮領としては有名無実化していた。

④ 青柳郷（古賀町青柳）

戦国期の田数は、五十町で、納分は十五貫文であった（石清水文書／『筥』四六六号）。嘉禎三年の宗清処分状には、「青柳郷筥崎宮領一期之後、可付本所教清」とあって、宗清の女房に譲られている。応永三十一（一四二四）八月二十二日、良清は、青柳郷下地を一円に、分銭二百貫文で田中融清に沽却した（石清水文書／『筥』四〇八号）。

⑤ 乙犬（篠栗町乙犬）

岩門合戦で武藤景資に味方した筥崎宮執行成直は、乙犬丸を没収され、弘安九年（一二八六）閏十二月二十八日、同地は神田糺らの御家人に給与された。その後、筥崎宮領として復活したと見られる。戦国期の田数は二十町（石清水文書／『筥』四六六号）。室町期には石清水八幡宮田中坊の直務支配となる。戦国期には、同じ筥崎宮領の和田（篠栗町和田）・大隈（粕屋町大隈）とともに、大内氏の筑前守護代杉氏が代官職を得ている。

⑥ 蒲田別府（福岡市東区蒲田）

戦国期の田数は十三町。乙犬名同様、若門合戦後に没収され、御家人に蒲田別府倉永名が与えられた。正平二十一年（一三六六）には預所として宗久為元がいた。

以上の社領のほか、薬王寺村（古賀町薬王寺）（田村文書／『筥』七十五号）、長者原（粕屋町長者原）（田村文書／『筥』一二四号）、大隈村などが筥崎宮領として検出される。以上のように、筥崎宮領は糟屋郡全体に分布していた。

三、筥崎宮領戸原村

次に、本遺跡がある戸原（村）について述べよう。戸原は、筥崎宮領糟屋西郷の中に含まれる。田数は十三町六反。明応三年（一四九四）の坪付によると、戸原村の田数は十二町あり、う

ち年不が一町五反あり、屋敷が四か所あった（田村文書／『筥』一二三号）。田の12.5%が年不となっており、この当時、耕地が不安定であったことを示している。先に、中世後期のものとした「筥崎宮領坪付帳」には、戸原十三町六反の坪付が一筆ごとに書き上げられている。それを一覧表にしてみよう（表2）。[3]

この戸原坪付は合計三十五筆ある。一反に満たないものから、一町規模のものまで多岐にわたるが、概して零細な耕地片が多い。平均すると一筆四反弱となる。斗代は、最も低いものが一斗三升代で、最も高いものが三斗六升代である。二斗代台が大半を占め、平均の斗代は二斗三升弱である。中世の戸原の生産力はさほど高くないと考えられる。ただし、屋敷地に三斗台の斗代が多く見られるため、屋敷の周辺に門田などの比較的生産力の高い耕地が付属していたと考えられる。不作となっているのは四か所のみであり、明応三年の年不一町五反と比べると非常に少ない。この坪付が作成された当時は耕地が安定していたのだろうか。

明応八年（一四九九）十二月二日の「戸原田地坪付」（田村文書／『筥』八七号）にも一筆ごとの耕地の書き上げがあり、作人の名前が記されている。ただしこの史料は錯簡があり、完全なものではない。この坪付には、「宗兵部方被申時付之分」と記されている。こ

場　　所	田　数	不	斗　代
はすいの屋敷	3反半	半不	3斗5升
同　屋敷	1反		3斗5升
はたけ中	大		3斗5升
上屋敷	6反		3斗6升
えかう	1町		2斗
みくりまち	6反		2斗3升
まかり	3反		2斗3升
上つかさ	1町		2斗2升
むろ田	1町		2斗6升
ひわたし	1町		2斗
きしのもと	3反		2斗7升
こくさは	7反	1反年不	2斗3升
つちあな	1町		1斗3升
まえた	3反		2斗3升
おとた	3反		2斗5升
かいそい	7丈		3斗6升
はたけた	4丈		2斗5升
つかわら	3反		2斗3升
みはし	3反	不1反	2斗5升
しまめくり	3反	不大	2斗
ひとせまち	1反		1斗5升
かたひらた	3反		1斗5升
くすはかわら	3反		2斗5升
おおちそい	1反		1斗5升
はらた	2反		1斗6升
いかかはら	2反		2斗5升
かみまかり	大		2斗2升
りうのつほ	1町		1斗6升
ひわのくひ	小		1斗5升
かみくきしは	60分		2斗
大ねん仏てん	半		2斗
わたうのほり	小		1斗5升
はた	1反		1斗5升
已川てんしん田	7反		2斗5升
くすは	7反内	川小	2斗5升

表(2)　戸原坪付

の当時、宗兵部が戸原村を知行していた可能性がある。

おわりに　―中世後期の動向―

中世後期の糟屋郡の動向を、筥崎宮領を中心に簡単に見て、しめくくりとしたい。

南北朝期にはいると、郡内が直接戦乱にまきこまれるようになる。九州に下向した足利尊氏が南朝方に勝利した建武三年（一三三六）三月の多々良川の合戦、菊地武光が九州探題斯波氏経を破った貞治元年(一三六二)九月の長者原の合戦はその代表的なものである。とくに、多々良川の合戦が室町幕府の成立に与えた影響は極めて大きい。

南北朝期には、半済や押領によって、多くの寺社領が武家領化していく。糟屋郡内の所領も当然そのような傾向にあったが、筥崎宮は膝下社領であるだけに、郡内社領の保全に力を注いだと考えられる。室町時代にもこうした傾向は続くが、筥崎宮領で注目されるのは、本家の石清水八幡宮祠官の直務支配の努力である。

応仁・文明の乱後、大内氏の領国支配が強化される。これにともない、筑前国内の所領の武家領化がさらに進展する。筥崎宮領においては、大内氏被官による社領の代官請負が一般化する。これは、寺社領を知行制の中に組みこもうとする大内氏と、社領の年貢確保を図ろうとする筥崎宮の妥協の産物であった。これは筥崎宮領だけの傾向ではない。文明十六年(一四八四)二月十八日、大内政弘は、奉行人杉弘依に対して、糟屋郡内顕孝寺領打橋三十町の代官職を与えた（「永田秘録」所収文書)。多々良顕孝寺の寺領の代官請負である。この大内政弘下文に、「正税者寺納」「余得者給恩」という文言が見える。寺社に契約した正税（年貢）以外は余得分として、大内氏からの給恩となったのである。こうした余得分の給恩は、例えば石清水社領の代官請負をした大内被官杉長忠が、「至余得分者、公事足参拾石地、遂武役」とされているように（石清水文書／『筥』四〇一号)、大内氏の軍役が賦課されたのである。

このような状況の中で、筥崎宮領の土貢をめぐって、武家被官同志が争い、生害に及ぶという事件も起きてくる（田村文書／『筥』一一六号)。また、那珂郡の筥崎宮領堅糟は、半済か収公の対象となり、大内氏からある武士に給与された。この時、「昔者雖為百廿貫之在所、其比被検地、定米八十石に被相定候」ということになった（石清水文書／『筥』四六〇号)。大内氏により完全に知行制の中に組みこまれ、検地さえ行なわれたのである。

天文二十年（一五五一）の大内義隆の滅亡後、筥崎宮領に加えられた武家側の圧迫はさらに強まる。大内義長のもとで筑前守護代となった陶晴賢は、筥崎宮領である那珂西郷や糟屋郡和田・乙犬・大隈などを「公領」としてしまう（石清水文書／『筥』四四五、四五二号)。大内氏の公領すなわち直轄領といっても、実質的には陶氏領となったと考えられる。ここに筥崎宮領は最大の危機をむかえ、社領回復のための種々の努力を強いられることになる。

しかし、筥崎宮領の有名無実化＝武家領化は、上からのみ進んだわけではない。天文五年(一

五三六）の奏禅書状（石清水文書／『筥』四七七号）に、「当時者、地下之儀、悉く守護被官ニ罷成候間、本家不被及御進退候」とある。在地では、守護をはじめとする武士層による小領主・農民層の被官化が広範に進展しつつあった。筥崎宮領は、上下からの板ばさみにあい、その実体を急速に失っていったと考えられる。

（注）

(1) 『角川地名大辞典』40福岡県（角川書店）1988年。なお、本稿で言及する糟屋郡内の地名についての記述は、特にことわらない限り、本書による。

(2) 坂本賞三『荘園制成立と王朝国家』第三章第一節（塙書房）、1985年。

(3) 有川宜博「石清水八幡宮による筥崎宮領の支配」（『九州史学』51号）より作成した。

古代の絵馬小考

久保寿一郎

1．はじめに

粕屋郡粕屋町に位置する戸原麦尾遺跡の第ⅢC区から、馬を描いた板絵が出土した。このような絵馬[注1]は今日までに少数ながら各地からの出土例が知られている。また昨年には平城京跡二条大路の溝から彩色を施した絵馬が出土し、最古にして最大の絵馬として紙面を飾ったことは記憶に新しい。小稿ではこれら遺跡から出土した絵馬を概観し、初期（平安時代末～室町時代初期）の絵馬資料と比較しながら考察を行うこととする。

2．出土絵馬の様相

出土絵馬の類例は戸原麦尾遺跡例を含め、管見にて10遺跡20点を数える(Tab,1)。以下、各資料について表現方法を中心とした特徴を見てゆくことにする(Tab,2)。

払田柵跡[注2]（Fig, 1－1）

1/2以上欠損しており、確定はしえないが表裏に描かれている。飾り馬であろうか。

道伝遺跡[注3]（Fig, 1－2・3）

寛平八年（896年）銘記のある木簡などとともに水路跡から出土している。①は中央部分が不鮮明であるが、左向きの飾り馬を描いたらしく、手綱と思われる表現もある。②も左向きの飾り馬が描かれており、①より小型ながら共通した表現方法がうかがえる。

伊場遺跡[注4]（Fig, 1－4～9）

大溝とそれに注ぐ枝溝より出土した多量の木製品の中から6点の絵馬が確認されている。①は

出土地	数量	時代	出土遺構	備考
秋田県仙北郡仙北町他 払田柵跡	1	平安		
山形県東置賜郡川西町 道伝遺跡	2	奈良～平安	水路跡	木簡等出土。
静岡県浜松市東伊場町他 伊場遺跡	6	奈良～平安前期	大溝・枝溝	斎串、人形、馬形他木製品、木簡、陶馬、土馬 馬骨等出土。
静岡県藤枝市立花 郡遺跡	1	奈良	溝SD26	斎串他木製品、木簡、土馬、桃種子類等出土。
滋賀県長浜市十里町 十里町遺跡	1	奈良・末期	土壙	
奈良県奈良市法華寺町 平城京跡	1	奈良・初期	溝	山水図(板絵)、木簡等出土。
奈良県大和郡山市稗田町他 稗田・若槻遺跡	4	奈良後期～平安前期	河川	斎串、人形、馬形他木製品、木簡、土馬、 人面墨書土器、馬骨、牛骨等出土。
福岡県太宰府市太宰府 大宰府左郭8条9坊推定地	2	鎌倉	溝SD605	墨書木礼他木製品等出土。
福岡県太宰府市観世音寺 推定金光寺跡	1	鎌倉～室町	包含層	什器類他木製品、僧形仏、懸仏他 寺院関係遺物出土
福岡県粕屋郡粕屋町 戸原麦尾遺跡	1	平安・後期	溝SD61	

Tab, 1　絵馬出土遺跡一覧表

曲物側板を利用したもので、角や尾の形状から左向きの牛と思われる。9世紀後半代。②は下半部のみが明らかで、蹄が表現された脚より左向きの馬を描いたと思われる。①と近接して出土し、同じく9世紀後半代とされる。③は上半部が欠損するものの、蹄を有する脚や尾の表現から左向きの馬を描いたと思われる。9世紀後半代。④は角と尾の表現から左向きの牛と思われる。毛並みが誇張して表現されている。8世紀後半～9世紀前半代。⑤は左向きの裸馬で、体部に赤色顔料の痕跡を残す。8世紀後半～9世紀初頭。⑥は曲物側板と思われるものに頭絡、手綱、鞍、障泥などが表現された左向きの飾り馬を描く。8世紀中頃かとされているが、層位的に明確にはしえないようである。これらは③以外いずれも中央上方に円孔を有している。

	長さ(横)	幅(縦)	厚　さ
払田柵跡	14.0	4.0	0.4
道伝遺跡①	15.0	8.0	0.9
②	10.0	8.0	0.6
伊場遺跡①	12.0	9.6	0.5
②	11.8	7.6	0.3
③	14.5	3.3	0.9
④	13.5	5.9	0.7
⑤	8.9	7.3	0.5
⑥	11.4	7.1	0.5
郡遺跡	13.4	7.5	0.4
十里町遺跡	23.7	16.8	1.2
平城京跡	27.0	19.5	0.7
大宰府①	30.2	5.7	0.3
②	15.7	13.5	
推定金光寺跡	4.3	6.6	0.3
戸原麦尾遺跡	14.1	6.0	0.6

Tab, 2 出土絵馬計測表(単位：cm)
※一部実測図より計測

大溝において祭祀関係遺物が盛行するのは8世紀前半～9世紀前半であり、絵馬もこの時期に含まれている。また馬形木製品が衰退した後も、絵馬は存続するようである。

郡遺跡(注5) (Fig.1－10)

奈良時代の溝から木簡などとともに出土している。上半部は腐触しており不明瞭であるが左向きの飾り馬を描いたと思われる。体部には斑毛状の表現があり、手綱も描かれている。木簡の転用材で、裏面には「□六日□牛等胴七月二日丁□」など月日を中心とした記述が見られる。中央上方に円孔を有する。

絵馬が出土した溝のすぐ北側にはそれに先立つ溝が並走しており、両者ともに豊富な祭祀関係遺物が出土している。絵馬などの遺物は溝縁部に沿った中～上層に集中していたという。

十里町遺跡(注6) (Fig.2－1)

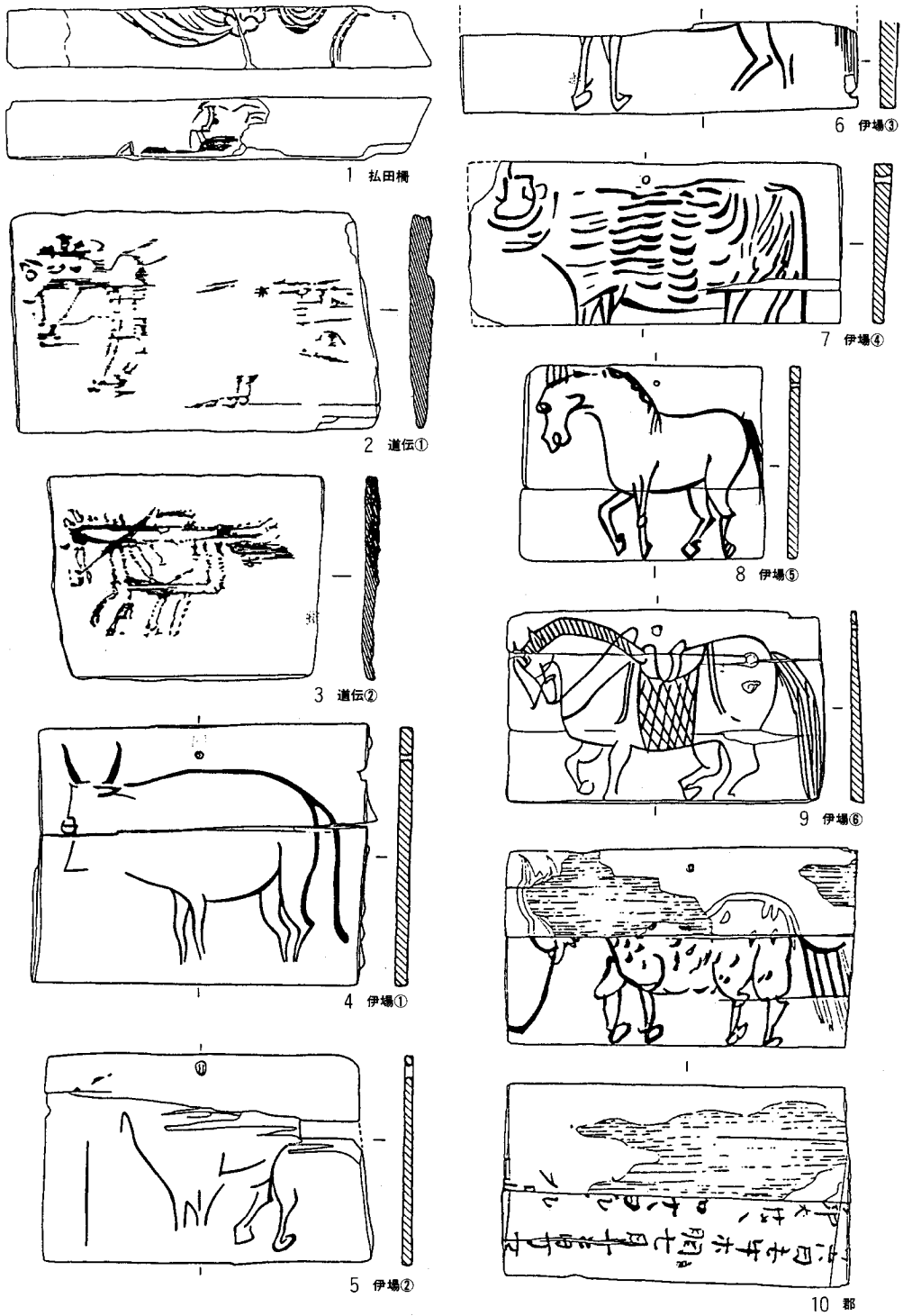
一部不明瞭であるが頭絡、鞍などをつけた左向きの飾り馬が描かれている。中央上方に円孔を有する。復原長径1.2m、短径0.8m、深さ0.65mの土壙の最上層から、奈良時代末期の須恵器の鉢をかぶせた状態で出土している。

平城京跡(注7)

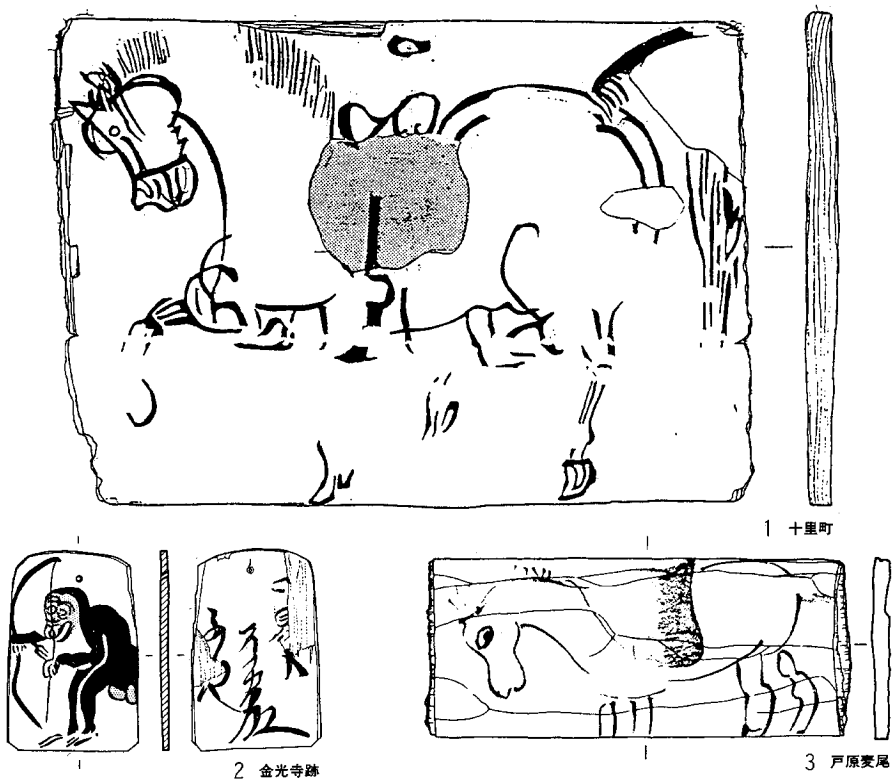
二条大路の溝より出土した。鞍や障泥が表現された右向きの飾り馬が描かれている。馬体に赤色、鞍に白色など彩色の痕跡が残る。伴出した大量の木簡の年代から、天平十年（738年)以前に描かれたのは確実とされ、現存する最古の絵馬に位置づけられる。ヒノキ材。

稗田・若槻遺跡(注8・9)

2回にわたる調査で、平城京造営に伴う人工河川からおびただしい量の祭祀関係遺物が出土し、



Fig, 1　出土絵馬実測図①（2/5）



Fig, 2　出土絵馬実測図②（2/5）

計4点の絵馬が確認されている。個々の詳細は不明であるが、1点は「直径九センチの半円形で半分欠けているが、墨で両耳を立てた馬の姿がはっきりと描かれている」[注10]もので、残り3点はいずれも長方形状のものと思われる[注11]。

河川は幅約10m、深さ約2mを計り、奈良時代の初頭に掘削され、平安時代の前半には廃絶されたと見られる。土馬260以上、ミニチュアカマド160以上、人面墨書土器約70、斎串約100その他多くのものが出土している。

大宰府左郭8条9坊推定地[注12]

13世紀の初めから14世紀前半にかけてのものと思われる溝から2点出土している。①は下半部が欠損するものの、馬の臀部らしきものが描かれている。上辺はゆるい山形に加工され、中央に円孔を有する。②は左半分程が欠損しており、鹿と兎らしきものが描かれている。残存する右端部は杓子状に加工されている。

推定金光寺跡[注13]（Fig.2－2）

寺院関係と思われる建物址付近から出土している。縦長の板に、弓を弾く左向きの猿を描く。面部と尻部に朱を施し、裏面には墨書が見られる。板は上方を幅狭とし、ゆるい山形に成形し、

中央に円孔を有する。

戸原麦尾遺跡（Fig.2－3）

鞍をつけ、たてがみを編んだ左向きの馬を描く。上・下・右端部は欠損しているものと思われる。スギ材。11世紀後半代。

以上、簡単に出土絵馬の特徴を見てきた。少数ではあるが出土地は東北地方から九州地方にわたって分散しており、大宰府・推定金光寺跡例を除きいずれも奈良時代～平安時代に属するものである。ここでこの時期の出土絵馬の特徴をまとめておこう。

1．形状は長方形を基本とし、法量は横10cm内外～15cm、縦6cm内外～10cmが標準である。これに対し十里町・平城京例はほぼ同規模で、縦横ともに通常の約2倍を計り、別格のものとして存在する。

2．描かれた馬は左向き、右向きのものがあり、平城京例以外全て左向きである。

3．飾り馬、裸馬があり、多くは飾り馬である。またすでに馬以外のものが描かれている。

4．墨書を基本とし、彩色を施したものもある。

5．曲物、木簡からの転用材がある。また多くは懸垂用の円孔を有する。

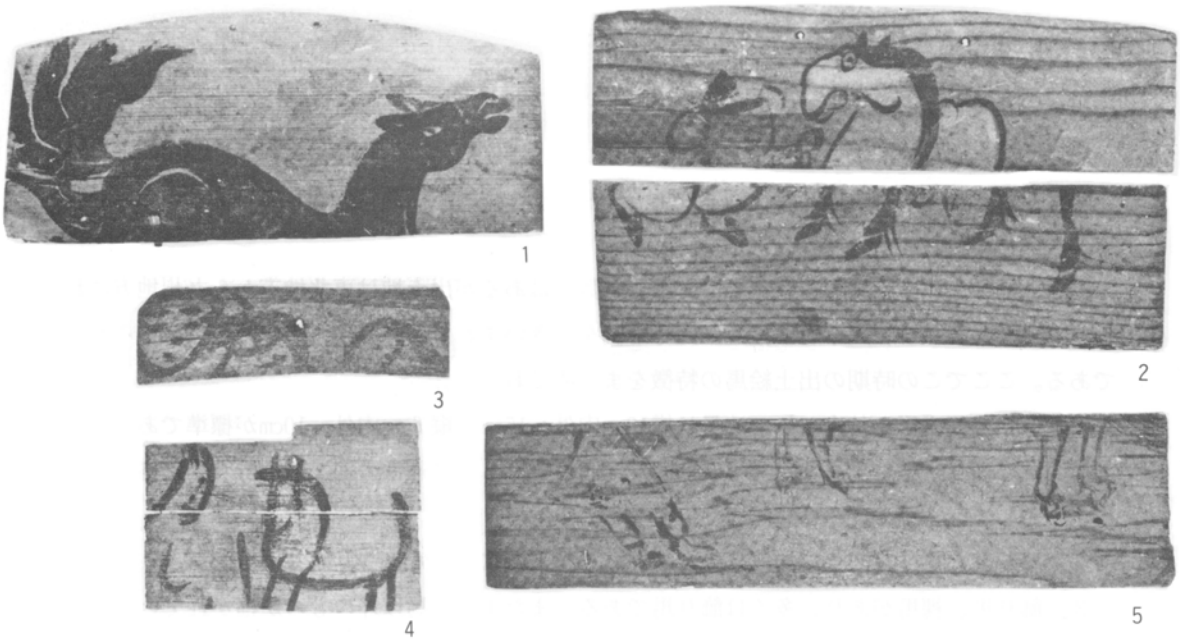
これらに加えて、頭部がやや下向き気味で、いずれかの足を上げ濶歩しているような姿勢が多いのは、筆致の差を越えて構図的な共通性を感じさせるものである。

次に出土遺跡について簡単に見ておきたい。奈良時代～平安時代の絵馬は、対蝦夷城柵、宮都、郡衙など多くが公的性格を有する遺跡から出土している。出土遺構は溝、水路、河川などの流路遺構が多く、他の遺物と混在し、廃棄された状態を示している。その中には、斎串、人形などの木製品を中心とするいわゆる律令期祭祀を特色づけるものが多い。いくつかの遺跡では馬形木製品、土馬、馬骨など他の馬に関わる遺物もあり、絵馬がそれらと共存していたことがうかがえる。このような中で十里町・戸原麦尾例は、前者が土壙内出土、後者が単独出土といった点で異った視点を要する特殊な例と言えるだろう。なお大宰府・推定金光跡例は、年代的にも形態的にもこれらと一線を画するものであり、次節にて検討することにしたい。

3．初期絵馬資料の様相

一般に絵馬は室町時代中期頃を転換期とし、これ以降形状や仕様が多様化し、大型のものも作られ、また馬以外のものも多く描かれるようになるとされている。ここではそれ以前のものを初期の絵馬資料と仮称し、奈良時代～平安時代の出土絵馬に続く絵馬資料を検討してみたい。具体的には少数の伝世絵馬と各種の絵巻物に限られ、それに先述の大宰府・推定金光寺跡からの出土絵馬が加わることになる。

初期の伝世絵馬には奈良県奈良市秋篠寺、同北葛城郡当麻寺にそれぞれ伝わるものがある[注14]。秋篠寺の絵馬は昭和39年の本堂修理の際、天井裏から5個体が発見された（Fig, 3）。1は上半分のみであるが、躍動する右向きの黒馬が描かれている。上辺はゆるい山形に作られ2ケ所に円孔を有す



Fig, 3　秋篠寺本堂発見絵馬

Fig, 4　当麻寺曼荼羅堂発見絵馬

る。裏面に「奉施」の文字と「応永」(1394～1427年)の年紀銘が墨書されており、年紀銘をもつ最古の絵馬とされている。長さ14.6cm、幅6.1cm。2は中央部を欠損するもので、左向きの馬とその左側に人物を描いており、馭者による索馬の図のようである。上辺はゆるい山形とし、2ケ所に円孔を有する。裏面には「秋篠□、薬師□、礼馬、右心□令満足」などの文字と「長録」(1457～1459年)の年紀銘が見られ、薬師如来に対する何らかの祈願と御礼がこめられているものと思われる。長さ14.6cm、幅8.6cm。これ以外の3点はいずれも小片で左向きの馬や人物が描かれており、後述の当麻寺における伝世絵馬に近い筆致をもつものもある。

当麻寺の絵馬は昭和35年の曼荼羅堂解体修理の際、その天井裏から各種の庶民信仰資料とともに5点発見されている(Fig.4)。いずれも長さ7～8cm、幅6cm弱を測り、ごく単純な略画で戯画風に描かれている。全て左向きと思われ、横に人物の顔を描くものもある。上辺が残るものはいずれもゆるい山形に作られ、中央に円孔を有する。年紀銘はみられないが、仕様や図柄あるいは他の庶民信仰資料との関係から鎌倉時代末～室町時代前期を下らないものと見られている。

次に限られた実物資料を補うものとして、平安時代末～室町時代初期にかけての絵巻物を見ておきたい(Tab, 3)。具体的に絵馬が散見されるのは『年中行事絵巻』(注15)『天狗草紙絵巻』(注16)『一遍聖絵』(注17)『春日権現験記絵巻』(注18)『不動利益縁起巻物』(注19)、『慕帰絵詞』(注20)などであり、他にも『絵師草紙』(注21)のように、絵師の子供が紙に筆で馬の絵を描いている光景が見られるようなものもある。これらの絵巻物は成立年代、背景、意図、内容など様々なものがあり、個別の検討を必要としようが、各々の場面にはある程度客観的事実が反映されていると考えられ、当時の絵馬をめぐる状況を読みとることは可能であろう。

このような資料をもとに平安時代末から室町時代初期における絵馬についてまとめてみたい。

Fig, 5
『天狗草紙絵巻』東寺の巻第一段(部分)

まず絵馬自体の特徴について伝世絵馬を中心にまとめると次のようになる。

1．形態は長方形状で上辺をゆるい山形に作るものが多く、1～2ケ所の円孔を有する。
2．馬は左向きで、人物を伴うものが多い。
3．墨書を基本とし、朱を伴うものもある。また略画風のものも多い。

このような特徴は概して絵巻物に見られる絵馬にも共通するものである。筆致については秋篠寺の「黒馬」の写実性、あるいは他の多くに見られる略画風の自由さ、ともに奈良時代～平安時代の出土絵馬と異なるものである。大宰府・推定金光寺跡の出土絵馬3点については、大宰府①は上辺をゆるい山形に作り、この時期の典型的な形態と言える。他の2点

は類例が見られず、絵馬の多様化の萌芽とも考えられるがここでは類似資料としてとらえておきたい。

次に絵馬を取りまく状況について、絵巻物から看取される点を中心にまとめてみよう。

1．神社のみならず、寺院にも奉納されている。また地方の小祠にも見られる。

2．社の扉、壁、柱だけでなく、神木と考えられる樹木、あるいは特別に設けられた祭壇にも掛けられている。

3．2枚1組とするものが多く、また彩色されていることを示すものもある。

4．共同の祭り、あるいは個人的な祈願など様々な場面で見られる。

1については秋篠寺や当麻寺などに絵馬が伝世している事実もあり、加えて『天狗草紙』に描かれたいわば「絵馬堂」とも呼べるものの存在は、絵馬と寺院との強い結びつきを示すものである。また絵馬の地方への波及は、すでに奈良時代～平安時代の出土絵馬の分布が示すとおりである。3については必ずしも左向きの絵馬、右向きの絵馬をもって1組とするとは限らないようであり注意される。また4からは絵馬奉納の主体者ならびに目的の多様化がうかがえよう。

4．絵馬の起源と変遷

各資料をもとに奈良時代から室町時代初期にかけての絵馬のあり方を検討してきた。出土絵馬と伝世絵馬ならびに絵巻物は時代的にも、また資料の性格としても異なるものであり、これらを同列に論じるには問題を残すところである。しかし「板状のものに馬などを描いて懸垂することにより何らかの祭り、祈願に用いる」ことを絵馬の本義であるとするならば、奈良時代の絵馬は

絵巻物	成立	場所	場面	絵馬の場所	特徴
『年中行事絵巻』第十一巻第三段	12C後半	今宮社（京都）	森林に囲まれた境内、三社の神殿の前。巫女、神人、里人による祭礼（疫神の鎮魂）の場。	三社の神殿の各正面、左右の扉や柱付近。鏡とともに2枚1組とする。	馬のみ、索馬図、馬以外のもの？ 長方形で上面はゆるい山形。
『天狗』東寺巻』東寺の巻第一段	13C末	東寺（京都）	中門東側の廻廊の南側に設けられた小堂。堂内に一人の女性、軒端近くに二人の人物を描く。	小堂の内壁や軒先に8～9枚掛ける。	左右に馭者を描く索馬図。 長方形で上面はゆるい山形。
『一遍聖絵』第四巻第四段	14C初め	因幡堂（京都）	堂の南面の様子。夜間の人々の様子を描く。	堂付近の築地壁の扉に2枚1組を掛ける。	不明瞭、索馬図？ 長方形。
『一遍聖絵』第五巻第三段	〃	白河の関（陸奥）	陸奥国に入った一遍が、関の明神を前に、道中安全(?)を祈願してぬかずく。	小さな祠の正面に1枚	索馬図。 長方形。
『春日権現験記絵巻』第八巻第五段	14C初め	熱田の宮（尾張）	興福寺の住僧壱和僧都が参詣する宮の神前の様子。	社殿の柱や戸に2枚1組とする。	馬のみ、索馬図。 長方形で上面はゆるい山形。
『不動利益縁起絵巻』第二段			僧智興の重病回復を願い、庭先に設けられた祭壇の前で祈禱の祭文を読む	御幣や供物を並べた祭壇の正面に、文字を書いた紙とともに3枚。	索馬図。 長方形の紙絵馬。
『慕帰絵詞』第七巻第一段	14C半ば	玉津島明神（紀井）	玉津島明神に参詣した西本願寺覚如上人らが境内の神木の前でぬかずく。	神木の幹や枝に2枚1組で10枚以上か。	馬のみ、索馬図。白毛と黒毛に描き分けるものあり。長方形で上面はゆるい山形。

Tab,3　絵巻物に描かれた絵馬

後世のいわゆる絵馬の祖型であることは疑えないところであり、時代とともにその内容の拡大あるいは変質がなされていったと見るのが妥当であろう。ここでは絵馬の起源と変遷にかかわるいくつかの問題を提起しておきたい。

古来より馬は生産、交通、軍事に重要な役割りを果たしており、人々の生活と密着した存在であったことは幾多の考古資料の存在からも明らかである。その背後に横たわる馬に関わる信仰の問題についてはこれまで文献や土馬を中心とする考古資料をもとに検討されてきた。今回その具体的な内容に立ち入ることはできなかったが、筆者は奥野義雄氏による「馬信仰は水神と漢神の両極の内容を内在させることによって一方では降雨、止雨の祈雨をもとにした水神信仰として、他方では行疫神を主体にした漢神信仰として現れていた」[注22]という立場をとるものである。絵馬というのはそうした馬に関わる信仰が実際の馬に代わるものとして表出されたもののひとつであると言える。現時点で最も古い絵馬は8世紀前半のものであり、馬形木製品や土馬にやや後出するものの、出土遺跡や出土状況を見る限り律令期の祭祀の中で起源し、その拡がりとともに各地へ普及していったと思われる。ここで問題になるのはこれら馬に関わる他のもの同志の差別化であろう。まだ資料数に乏しく、実際の使用状況も含めて不明な点は多いが、福岡県沖ノ島には滑石製の馬形という特殊な存在もあり、今後種類ごとの特質やそれを越えたところにある表現方法の共通性などを検討してゆく必要があるだろう。例えば出土絵馬には左向きに馬を描くものが多いが、沖ノ島の馬形が全て左向きである点[注23]、また各遺物を通じて飾り馬と裸馬が存在する点[注24]などがあげられる。

絵巻物によると、絵馬は鎌倉時代にはすでに多様化してきており、室町時代中期以降への基盤が整っていたように思われるが、その変化の兆しは平安時代の中頃、すなわち律令期の祭祀が衰退してゆく10世紀頃に求められよう。この時期の資料は乏しく具体的な様相は把握できないが、伊場遺跡のように馬形木製品が消滅した後も絵馬は存続していたと見られる状況もあり、恐らく馬形や土馬を含む律令期の祭祀遺物が衰退する時期に、絵馬がその粋からはなれて独自の発展を途げていったと思われる。したがって絵馬の変遷における第1の画期と呼べるのは平安時代の中頃であり、その後鎌倉時代を通じて神社、特に寺院との結びつきを強めながら受け継がれてゆき、国家的な祭祀から個人的な祈願の場へと移行する過渡期を形成していったと思われる。

5．おわりに

最後に戸原麦尾遺跡出土の絵馬について少し触れておこう。本例からは時期的にも、また出土状況からも平安時代後期の過渡期における絵馬の一面がうかがえる。

戸原麦尾遺跡は中世を主体としており、絵馬の時期にあたる古代末期の状況は不明な部分が多い。しかし西側に接する多々良込田遺跡は官衛的性格の強い遺跡であり[注25・26]、本遺跡とその周辺も官衛域に含まれる地域であったと考えられる。またこの両遺跡の調査によって、多々良川は古来より氾濫と蛇行をくり返しており、安定するのは10世紀後半～11世紀以降であろうことが確認さ

れている[注27]。絵馬が出土した東西に走る溝は、多々良川流域における復元条里[注28]に位置、方向ともに一致しており、絵馬は多々良川の流れと同様東から西へ向って流れ着いた状態で出土している。

このような背景の中で出土絵馬を位置づけるなら、それは官衙域における公的な祭祀の中で用いられたもので、他に祭祀関係遺物が出土していない点を重視するなら、すでに絵馬が単独で機能していたことが考えられる。本例は懸垂円孔の有無が確認できず、実際の使用状況も不明であるが、おそらく絵馬を主体とする何らかの祭祀の後に廃棄されたと思われる。その内容については推測の域を出ないが、先述の自然環境という観点からひとつの可能性としてそこに「氾濫する水流」に対する「鎮魂」の場を想定しておきたい。

以上古代の絵馬について、いくつかの問題点を提起したにとどまるが、戸原麦尾遺跡出土の絵馬は過渡期における絵馬の数少ない資料であり、また一方では地方における律令期祭祀の存続という問題についても一視点を与えるものであると言えよう。

(注)

(1) 遺跡から出土する「馬などを描いた板絵」は、後世のいわゆる絵馬に発展してゆくもの、との解釈からすでに「絵馬」と総称されていることが多い。小稿もそれに従うが必要に応じ、遺跡から出土した絵馬を「出土絵馬」、伝世されてきた絵馬を「伝世絵馬」と呼び分けることにする。

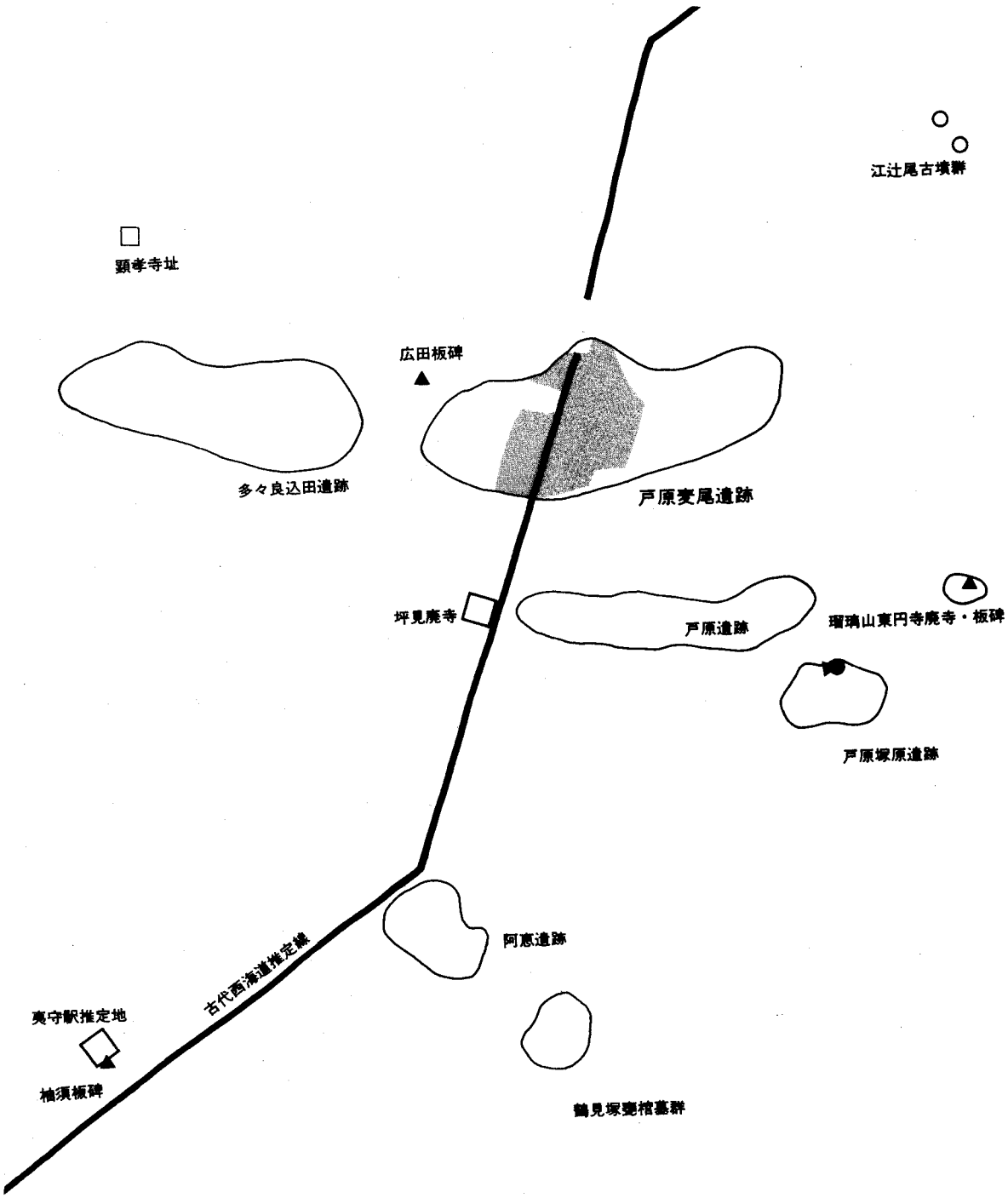
(2) 秋田県教育委員会　払田柵跡調査事務所『払田柵跡第46～52次発掘調査概要』　1983
(3) 川西町教育委員会　『道伝遺跡』　1984
(4) 浜松市教育委員会　『伊場遺跡　遺物編　I』　1978
(5) 藤枝市教育委員会　『郡遺跡発掘調査概報　III』　1986
(6) 財滋賀県文化財保護協会　(『滋賀文化財だより』No.108　1986)
(7) 朝日新聞社　(『アサヒグラフ』　通巻3522号　1989)
(8) 奈良県立橿原考古学研究所　『奈良県遺跡調査概報　1976年度』　1977
(9) 奈良県立橿原考古学研究所　『奈良県遺跡調査概報　1980年度　第二分冊』　1982
(10) 岩井宏美　「絵馬点描」　岩井宏美編　『絵馬秘史』　日本放送出版協会　1979　21頁
(11) 奥野義雄　「祈願絵馬寸論―発生期の絵馬にみる二つの信仰形態によせて―」(『奈良県立民族博物館研究紀要』　第6号　1982　47頁)
(12) 九州歴史資料館　『大宰府史跡　昭和49年度発掘調査概報』　1975
(13) 九州歴史資料館　『大宰府史跡　昭和53年度発掘調査概報』　1979
(14) 根岸競馬記念公苑学芸部　『馬の美術名品展』　1983
(15) 福山敏男編　『新修日本絵巻物全集　第24巻』　角川書店　1978
(16) 梅津次郎編　『新修日本絵巻物全集　第27巻』　角川書店　1978
(17) 望月信成編　『新修日本絵巻物全集　第11巻』　角川書店　1975
(18) 野間清之編　『新修日本絵巻物全集　第16巻』　角川書店　1978
(19) 高崎富士彦　源豊宗編　『新修日本絵巻物全集　第30巻』　角川書店　1980
(20) 渋澤敬三編　『新版絵巻物による日本常民生活絵引　第五巻』　平凡社　1984
(21) 梅津次郎　岡見正雄編　『新修日本絵巻物全集　第18巻』　角川書店　1979
(22) 奥野義雄　注(11)論文　48頁
(23) 宗像神社復興期成会　『宗像沖ノ島　本文』　1979　420頁
(24) 金子裕之編　『律令期祭祀遺物集成』　1988　200～204頁
(25) 福岡市教育委員会　『多々良込田遺跡II』　1980
(26) 福岡市教育委員会　『多々良込田遺跡III』　1985
(27) 福岡市教育委員会　『戸原麦尾田遺跡（1）』　1988
(28) 日野尚志　「筑前那珂・席田・粕屋・御笠四郡における条里について」(『佐賀大学教育学部研究論集』24（I）1976)。

小稿は特に岩井宏美氏の著作・論文に負うところが大きかったことを付記しておく。また192頁の写真図版は根岸競馬記念公苑学芸部、秋篠寺、当麻寺関係各位の御厚意により転載させて頂きました。末尾ながら感謝の意を表します。

図 版

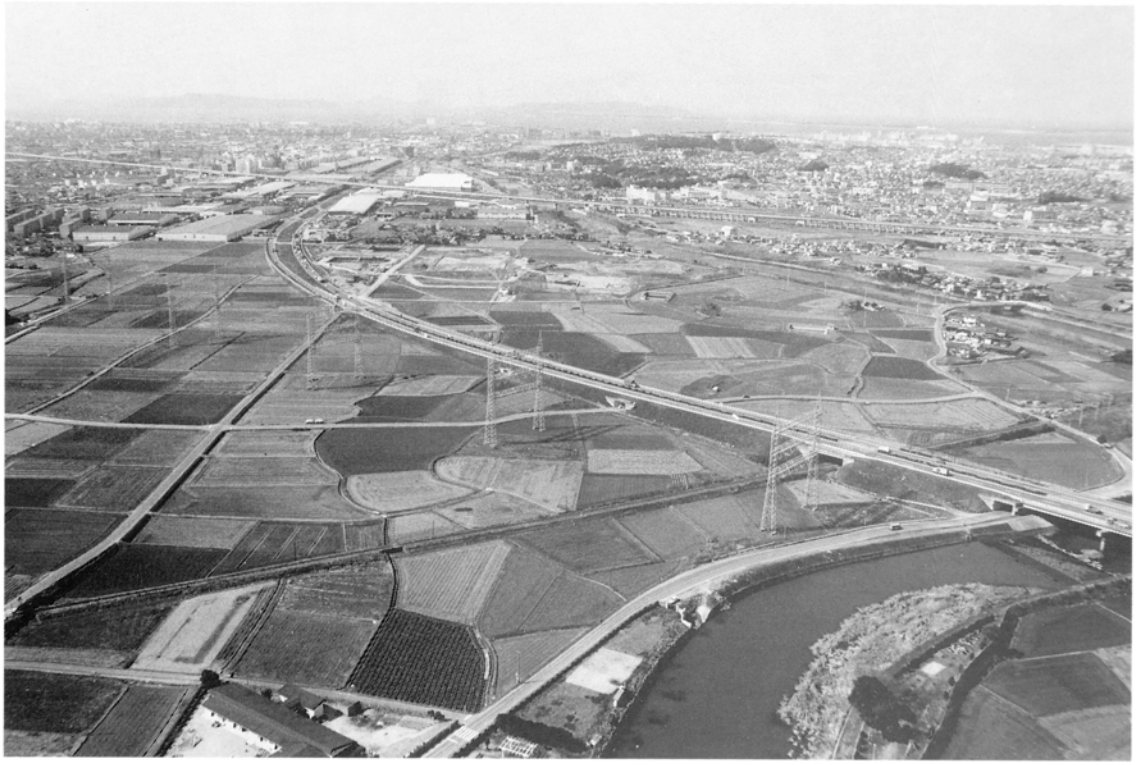
PLATES

第Ⅲｂ区溝状遺構（SD61）調査作業風景（東から）


江辻尾古墳群
願寺寺址
広田板碑
多々良込田遺跡
戸原麦尾遺跡
坪見廃寺
戸原遺跡
瑠璃山東円寺廃寺・板碑
戸原塚原遺跡
阿恵遺跡
古代西海道推定線
奥守駅推定地
植須板碑
鶴見塚甕棺墓群

戸原麦尾遺跡とその周辺遺跡

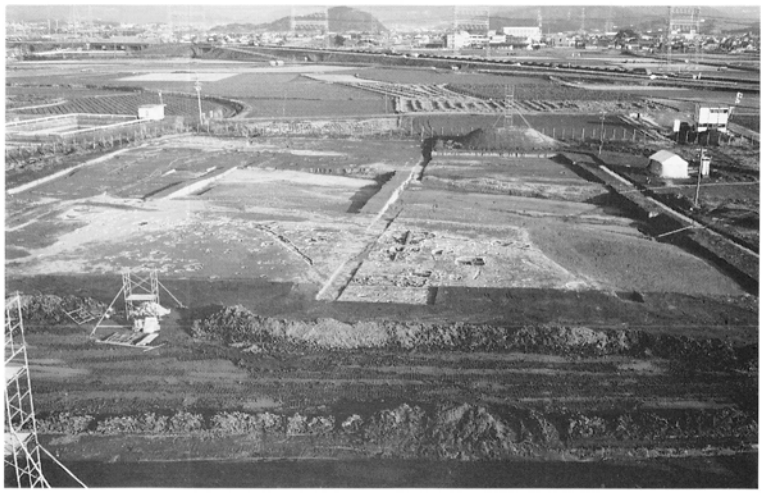
(1) 戸原麦尾遺跡遠景および粕屋平野を臨む（西から）



(2) 戸原麦尾遺跡遠景および多々良川河口を臨む（東南東から）

(1) 第Ⅰｂ区完掘状況
（東から）

(2) 第Ⅰｂ区掘立柱建物検出状況
（東から）

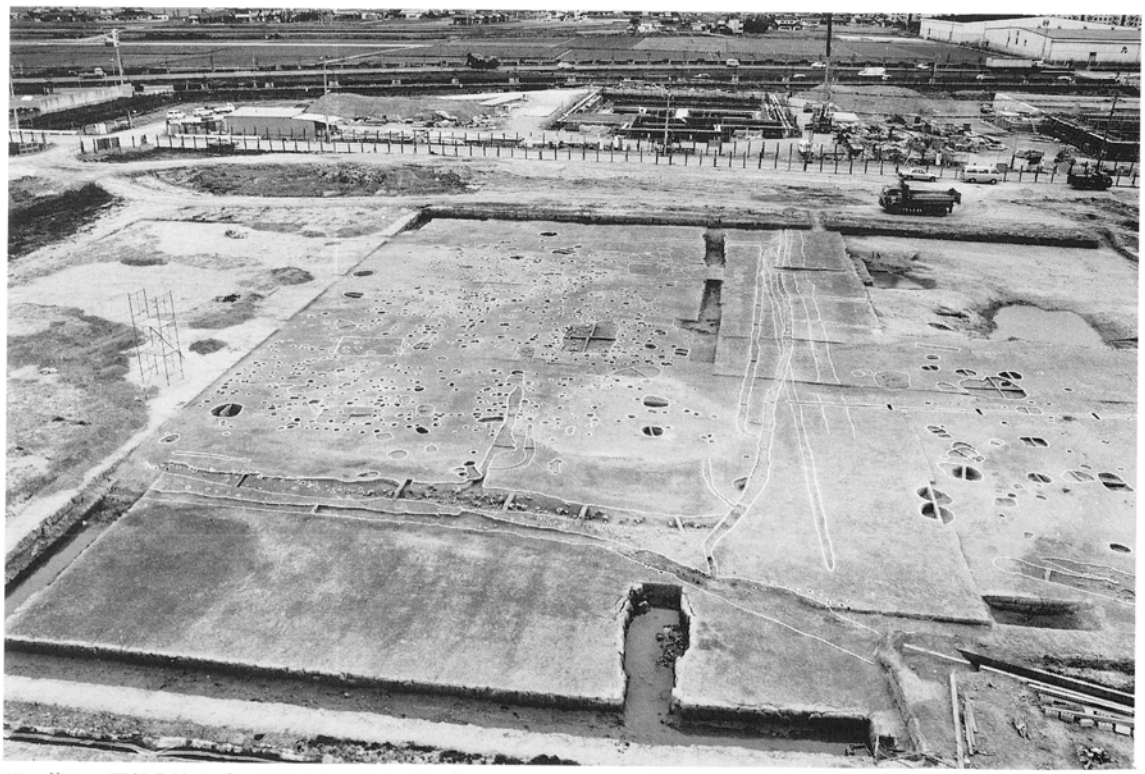


(3) 第Ⅰａ区遠景（西から）

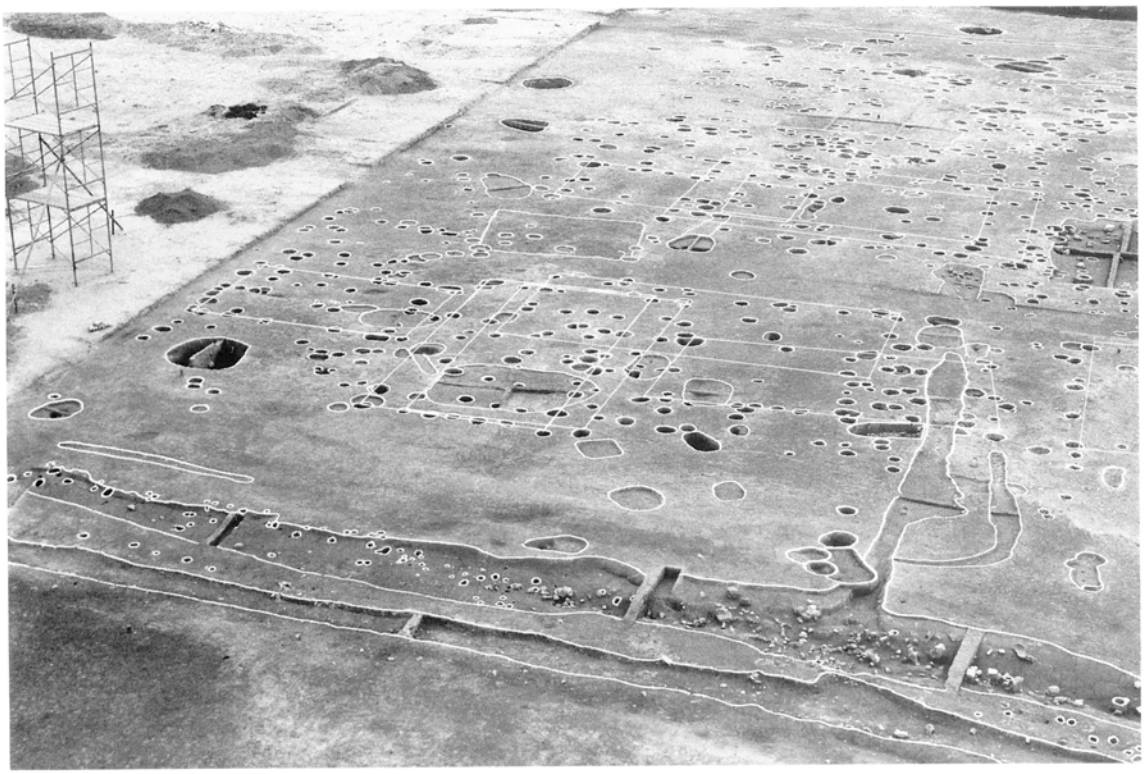
(1) 第II a区完掘状況全景（北から）

(2) 第II a区完掘状況東側部分（北から）

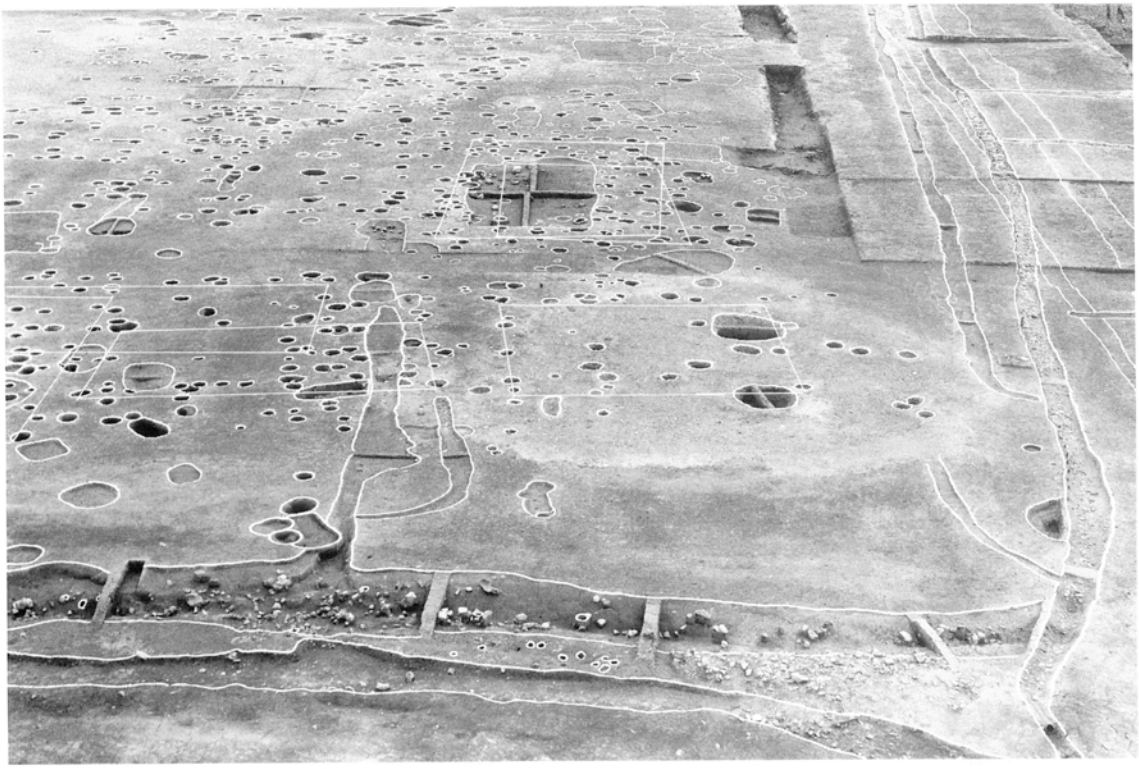
(1) 第II a 区完掘状況西側部分（北から）



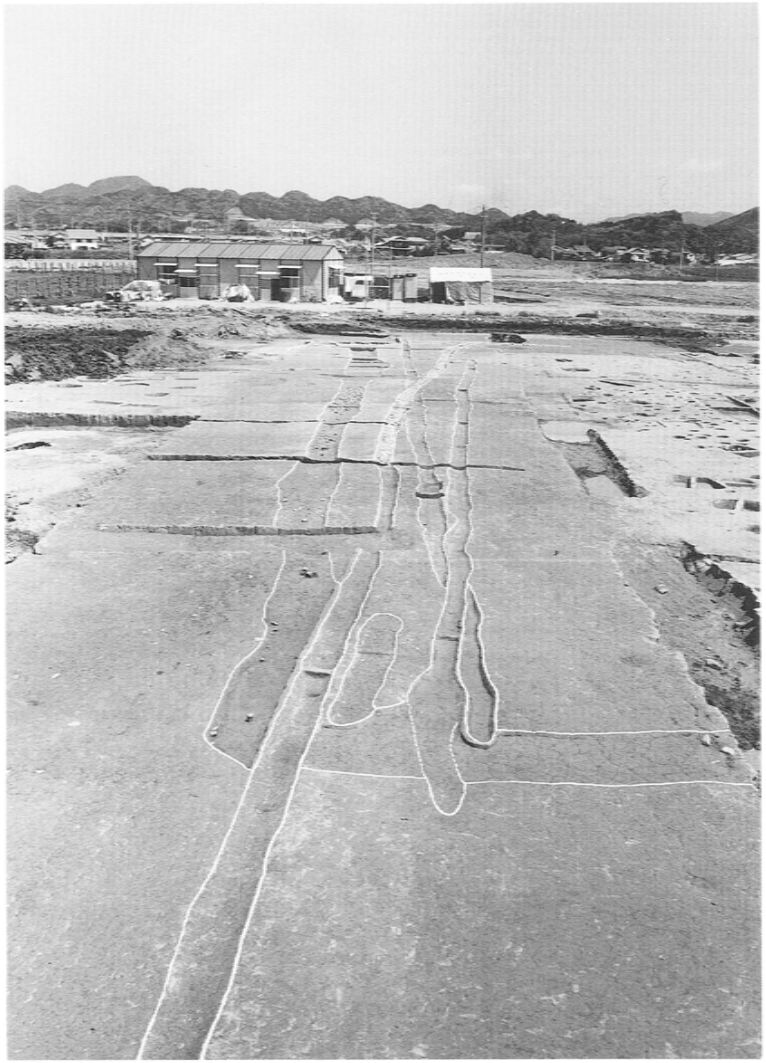
(2) 第II a 区部分拡大（掘立柱建物・柱穴群）



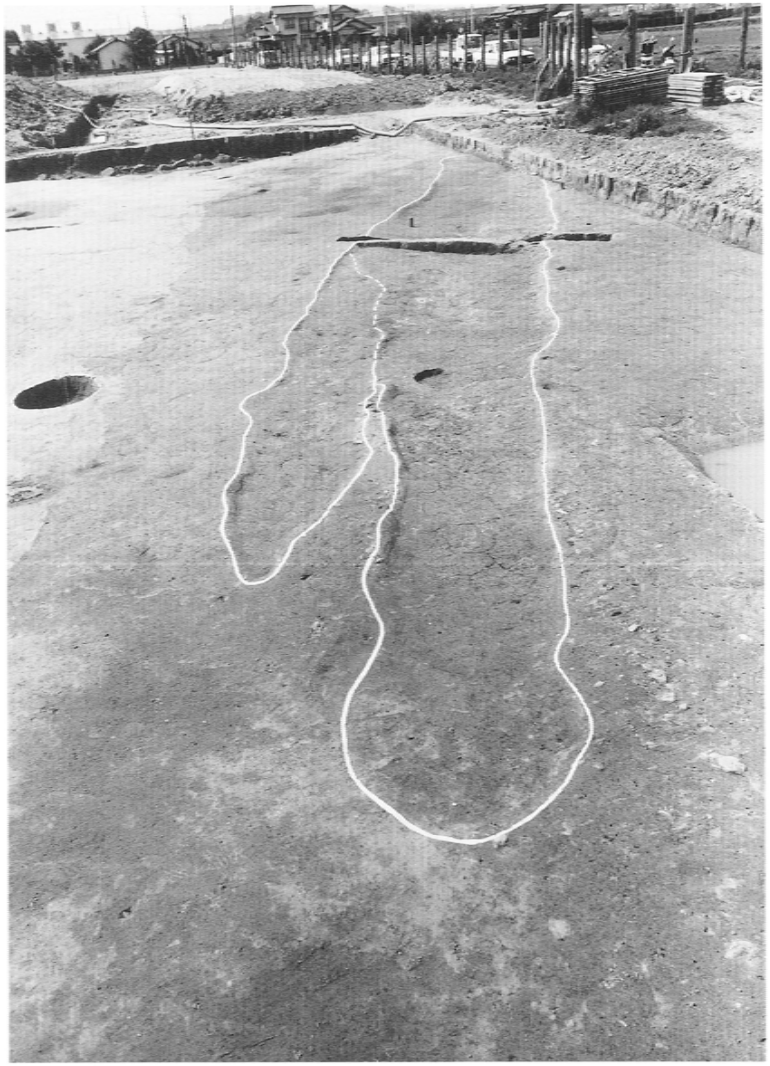
(1) 第II a 区完掘状況部分拡大（掘立柱建物群）



(2) 第II a 区完掘状況部分拡大（掘立柱建物群）



(1) 溝状遺構（SD02・03・16・17）完掘状況（南から）



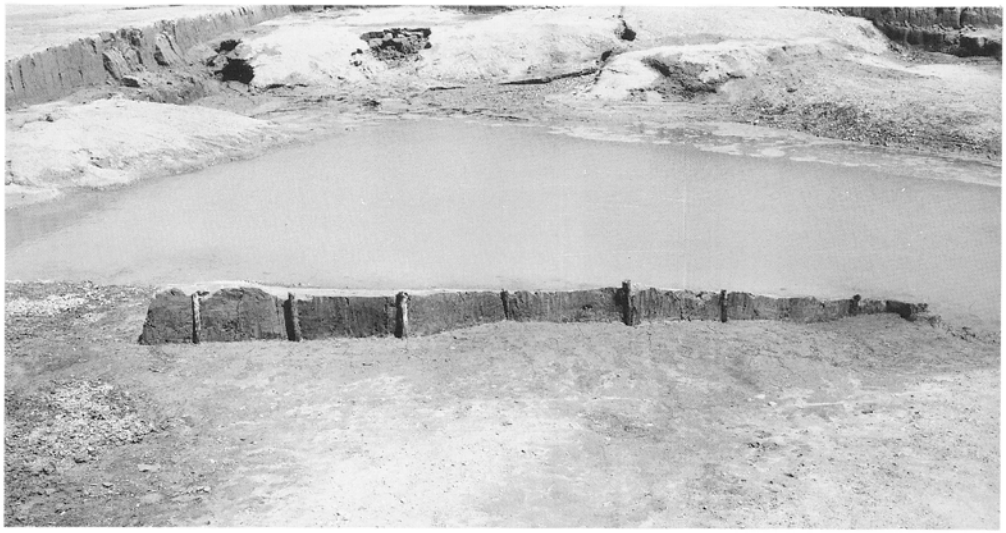
(2) 溝状遺構（SD20）完掘状況（南東から）

(1) 第Ⅱａ区西側溝状遺構
(SD02・03・16・17)
完掘状況（北から）

(2) 第Ⅱａ区北側溝状遺構
完掘状況（西から）

(3) 溝状遺構（SD20）遺物出土状況（西から）

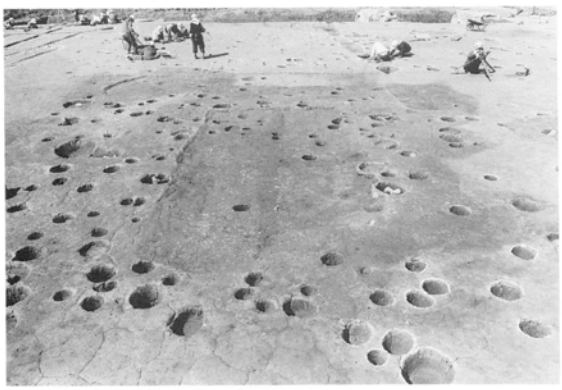
(4) 溝状遺構（SD16）
遺物出土状況（西から）



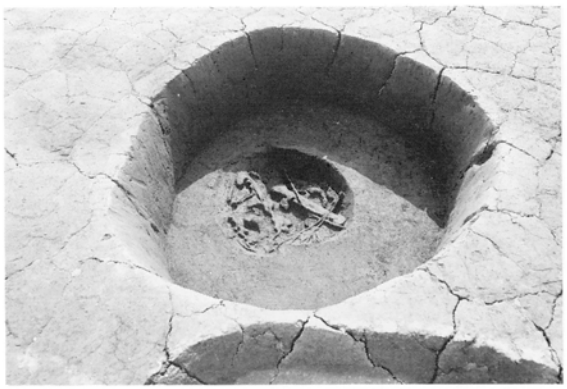
(1) 杭列（SA03）検出状況（北西から）

(2) 杭列（SA04）検出状況（東から）

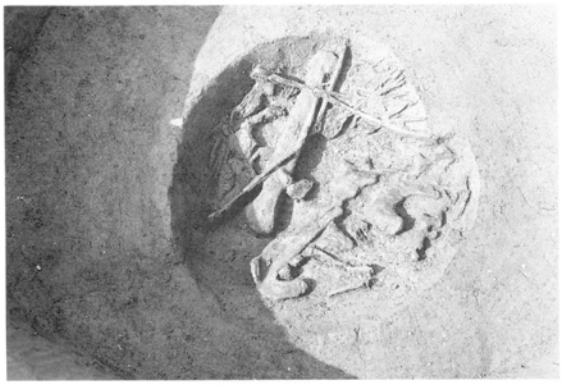
(3) 杭列（SA04）取り上げ作業風景（東から）



(1) 竪穴遺構（SX01）完掘状況（南から）

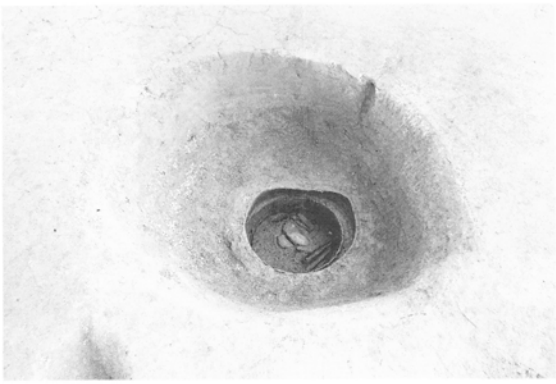


(2) 井戸（SE01）遺物出土状況（北東から）



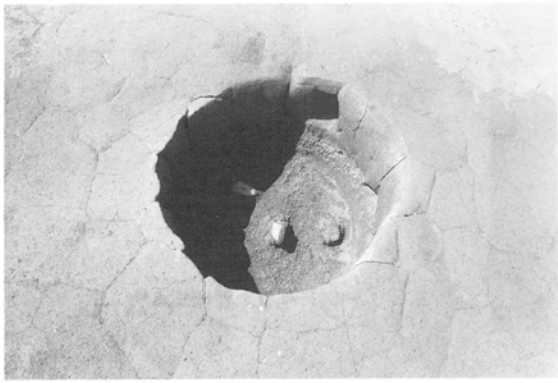
(3) 井戸（SE01）基底面遺物出土状況（北東から）

(4) 井戸（SE02・03）完掘状況（西から）



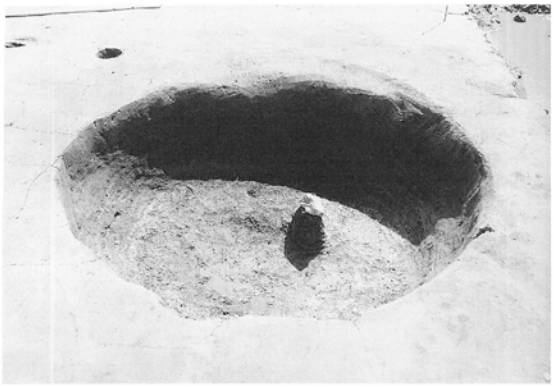
(5) 井戸（SE04）完掘状況（北から）

(6) 井戸（SE04）井筒内遺物出土状況（北から）



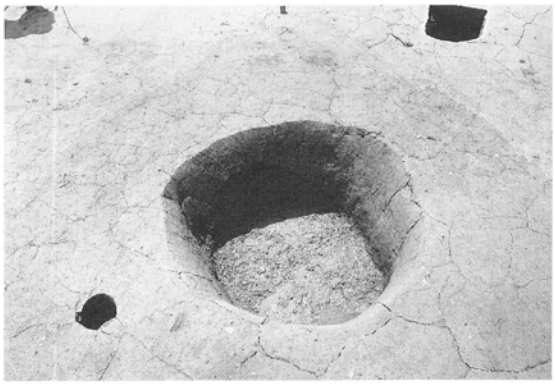
(7) 井戸（SE05）完掘状況（北から）

(8) 井戸（SE15）完掘状況

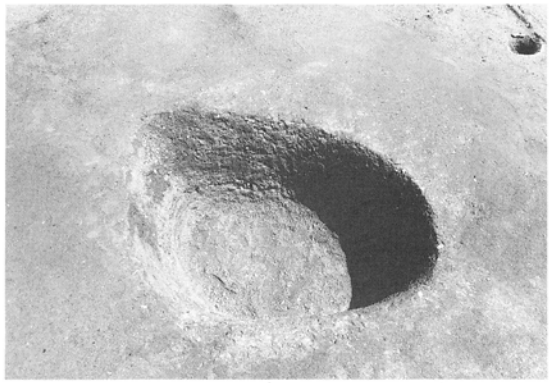


(1) 井戸（SE16）完掘状況（北から）

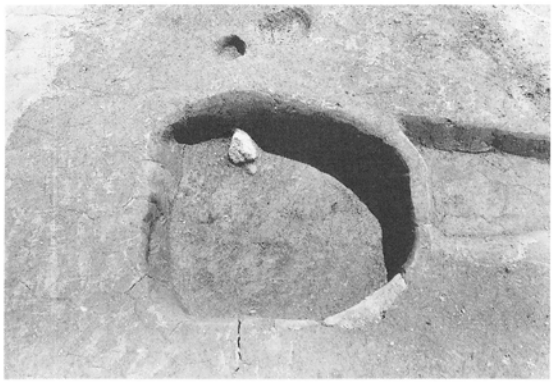
(2) 井戸（SE32）完掘状況（北から）



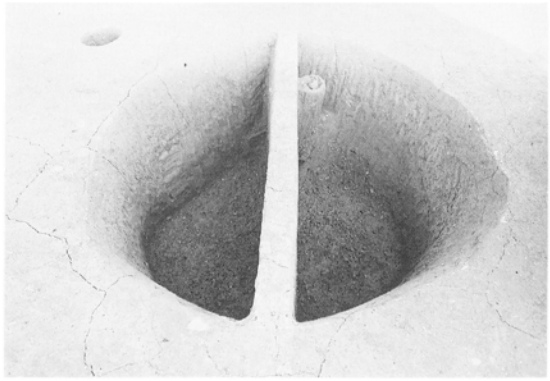
(3) 竪穴遺構（SX03）完掘状況（南から）



(4) 竪穴遺構（SX11）完掘状況（北から）



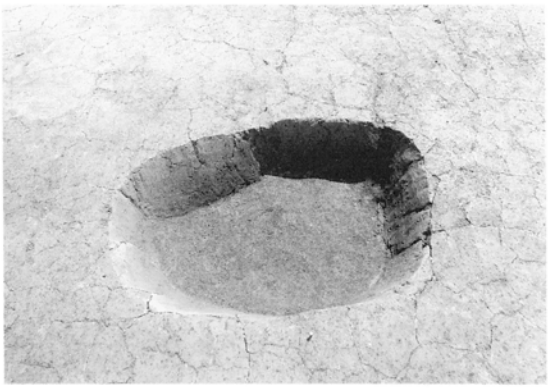
(5) 竪穴遺構（SX12）完掘状況（西から）



(6) 竪穴遺構（SX13）完掘状況（南から）

(7) 竪穴遺構（SX16）完掘状況（南から）

(8) 竪穴遺構（SX18）完掘状況（北から）



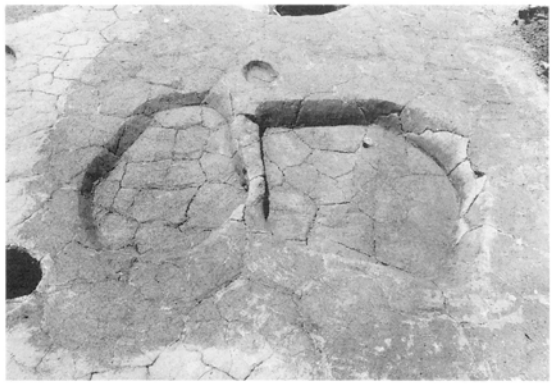
(1) 竪穴遺構（SX19）完掘状況（北から）

(2) 竪穴遺構（SX23）完掘状況（西から）

(3) 竪穴遺構（SX28）完掘状況（西から）

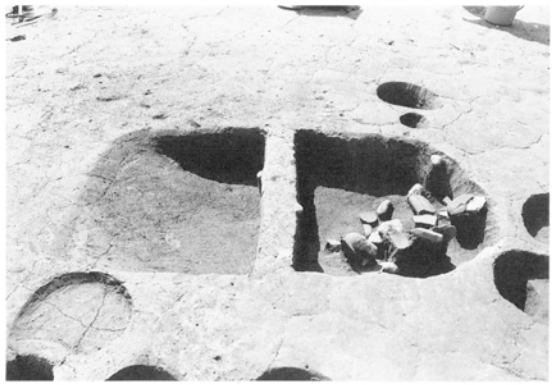
(4) 竪穴遺構（SX32）完掘状況（西から）

(5) 竪穴遺構（SX34）完掘状況

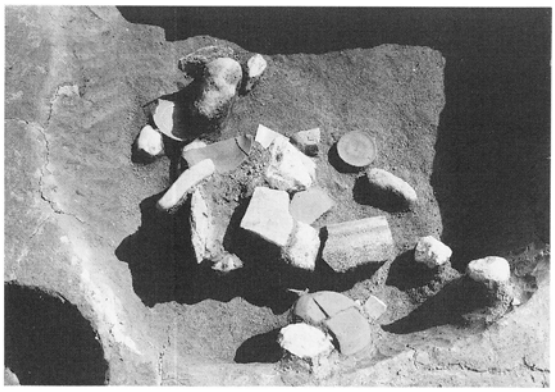


(6) 竪穴遺構（SX36）完掘状況（北から）

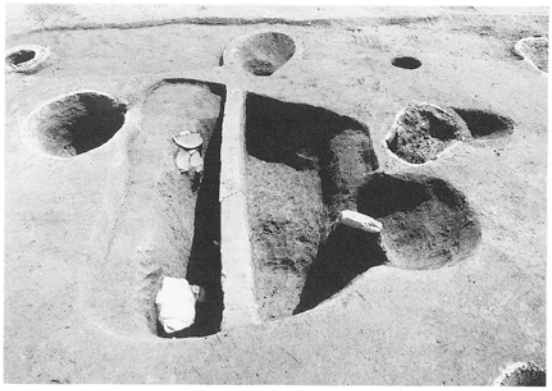
(7) 竪穴遺構（SX37）完掘状況（西から）



(8) 竪穴遺構（SX37）完掘状況（東から）



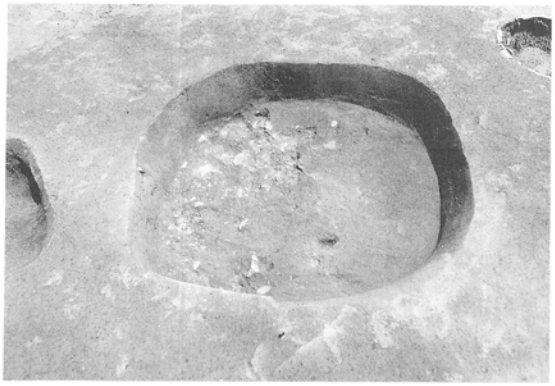
(1) 竪穴遺構（SX37）遺物出土状況



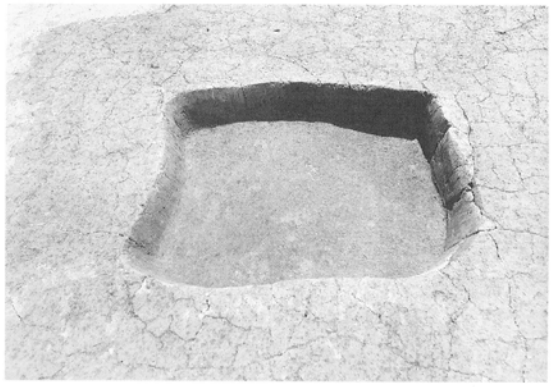
(2) 竪穴遺構（SX38）遺物出土状況（北から）

(3) 竪穴遺構（SX38）完掘状況

(4) 竪穴遺構（SX39）完掘状況（北から）



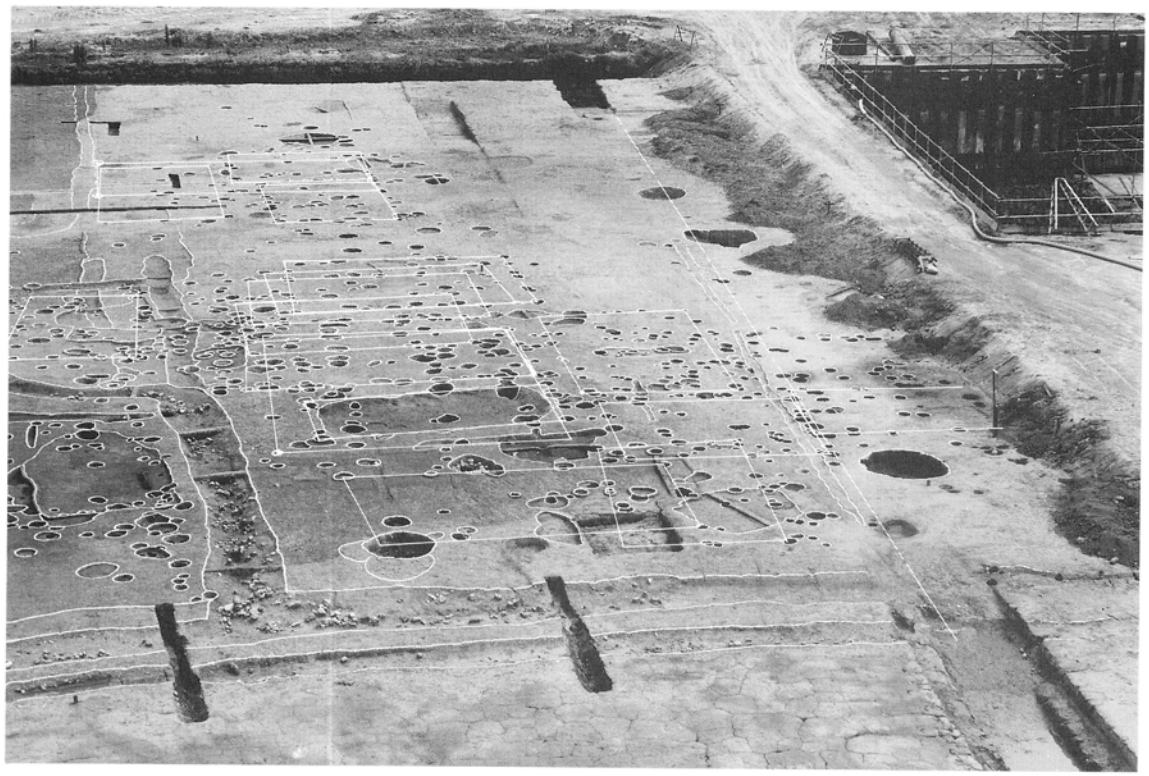
(5) 竪穴遺構（SX40）完掘状況（北西から）



(6) 竪穴遺構（SX41）完掘状況（北から）

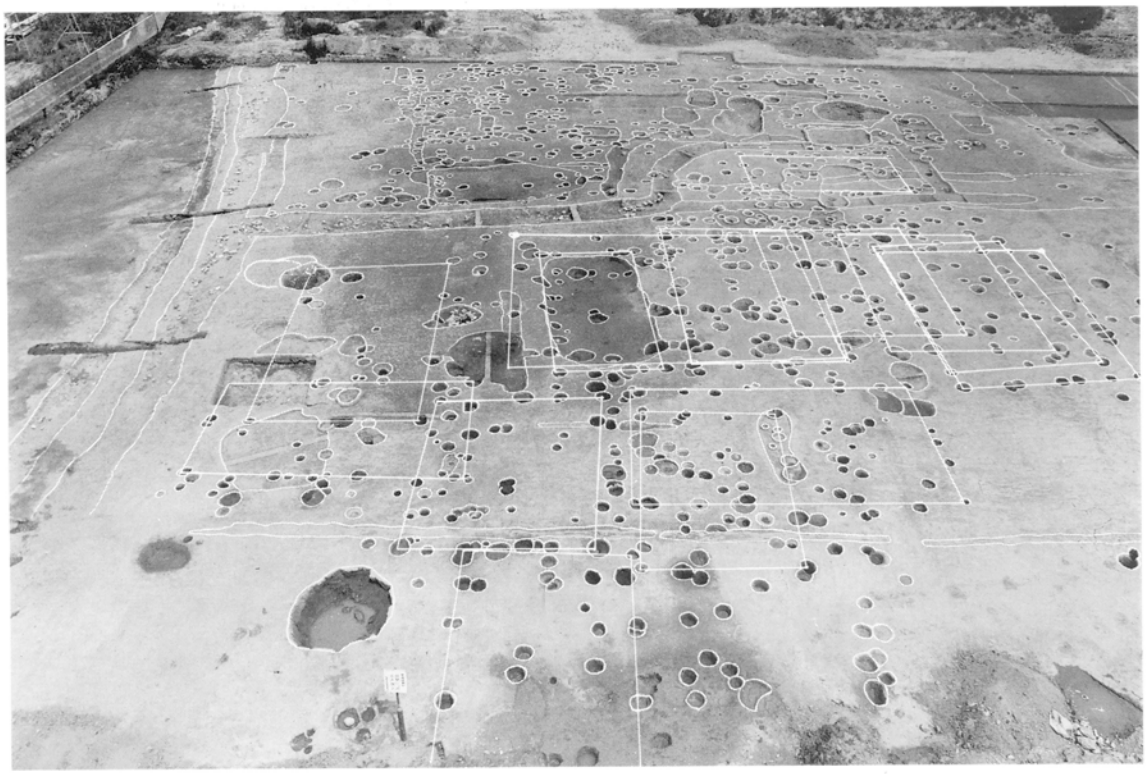
(1) 第II b区完掘状況（北から）

(2) 第II b区完掘状況（北から）

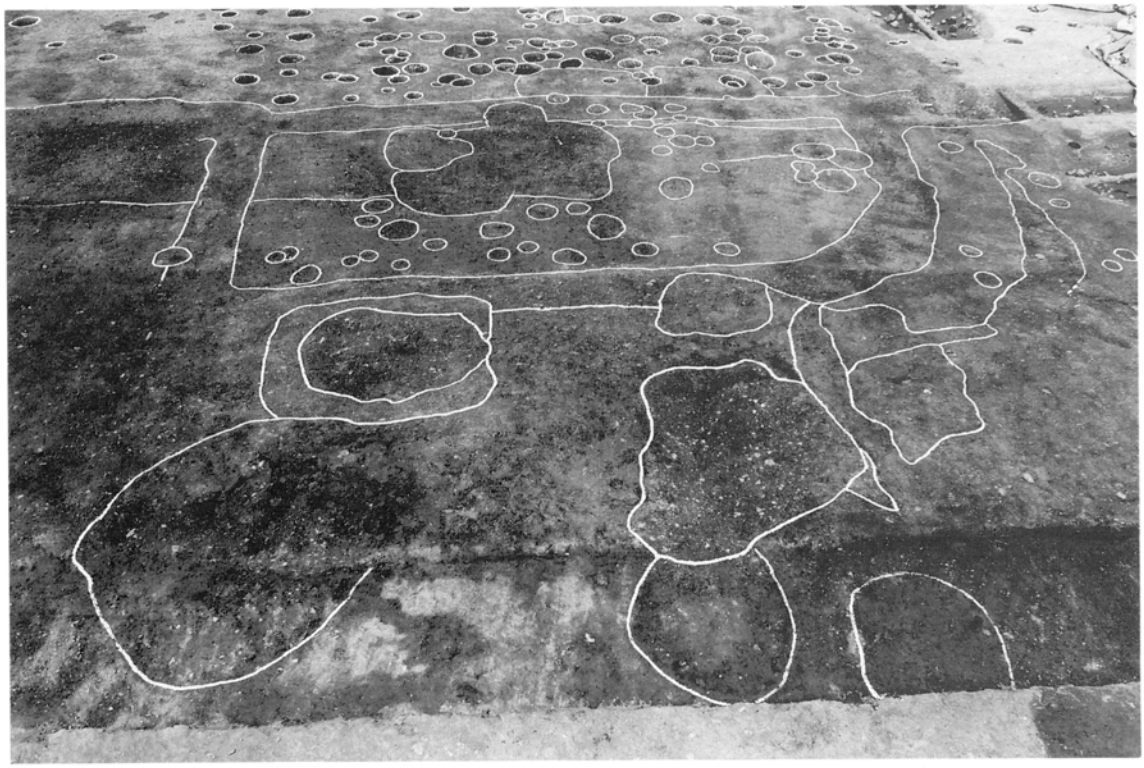


(1) 第II b区西側完掘状況全景（北から）

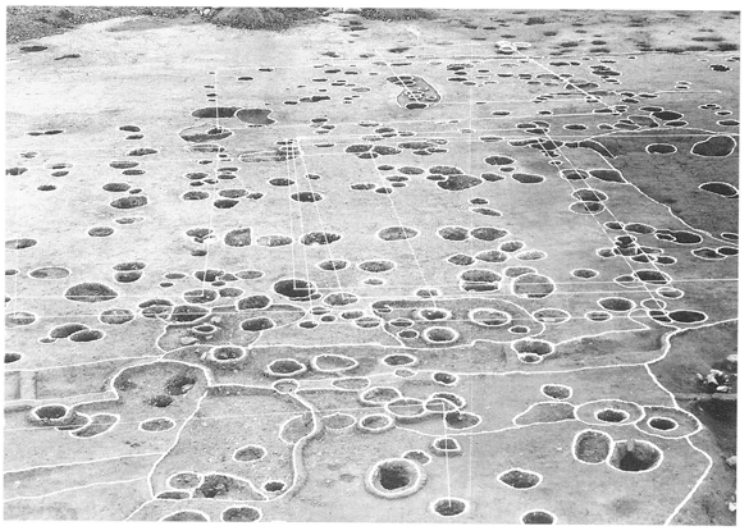
(2) 第II b区完掘状況（西北西から）



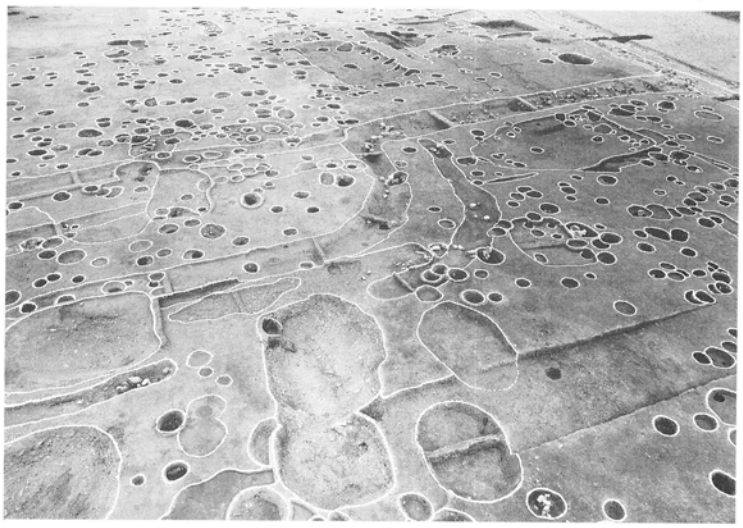
(1) 第II b 区完掘状況（北側部分・西北西から）



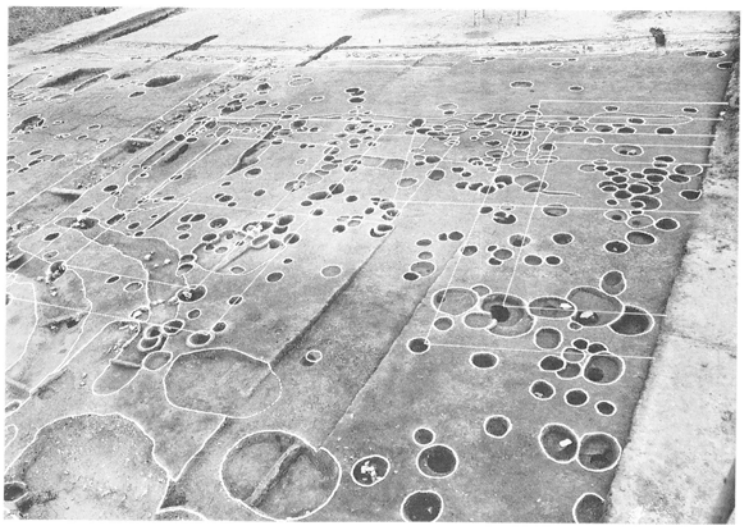
(2) 第II b 区西側遺構検出状況（東から）



(1) 第II b 区中央西側部分掘立柱建物
(東から)

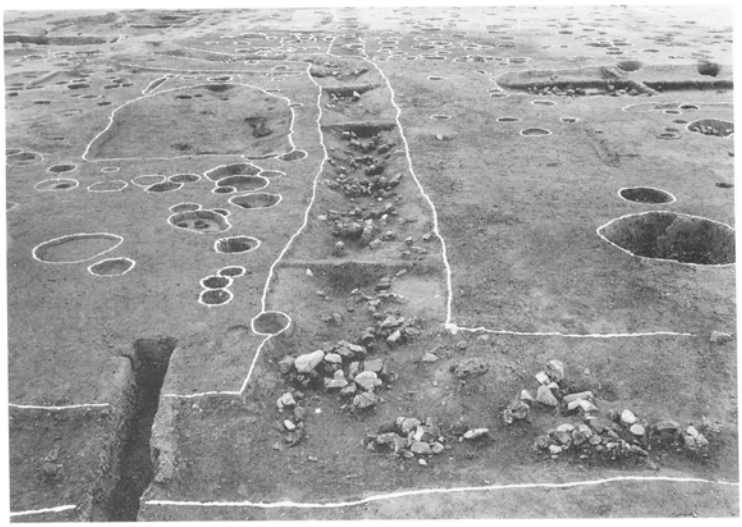


(2) 第II b 区中央部遺構分布状況
(南東から)



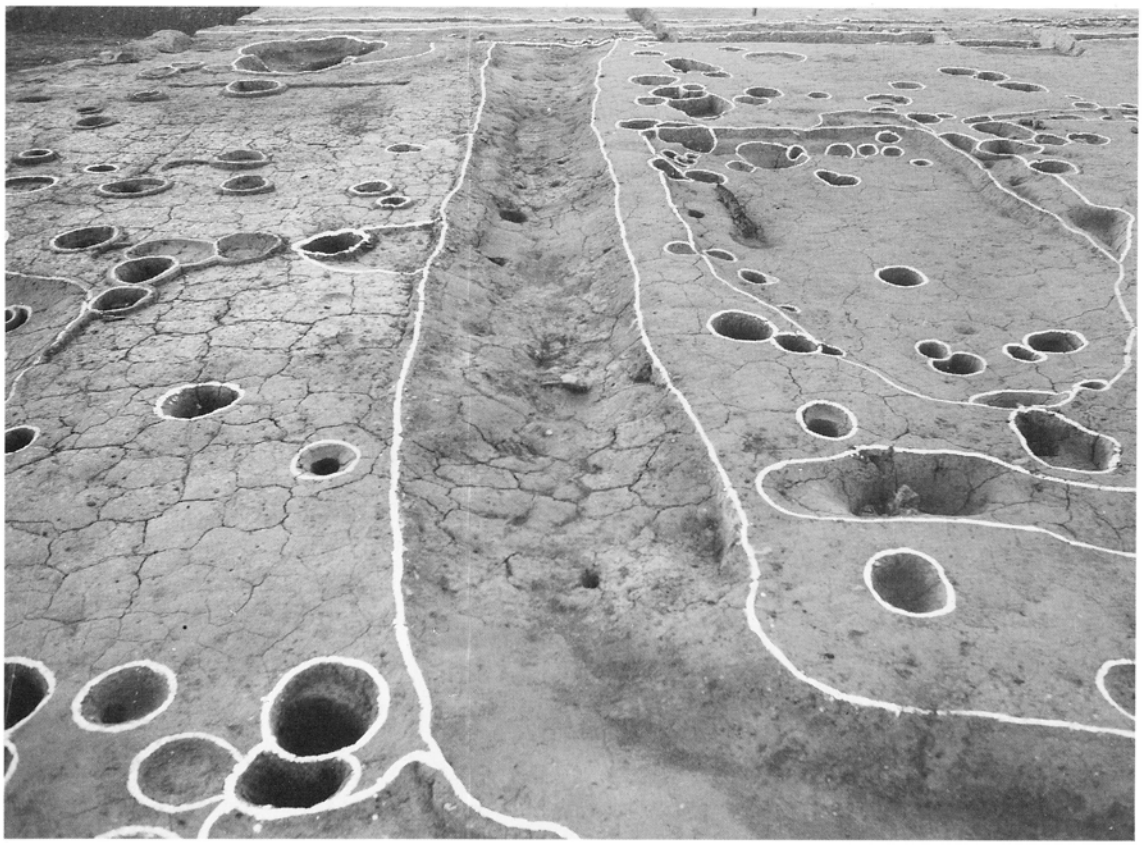
(3) 第II b 区北東部遺構分布状況
(南から)

(1) 第IIｂ区南側掘立柱建物（西から）

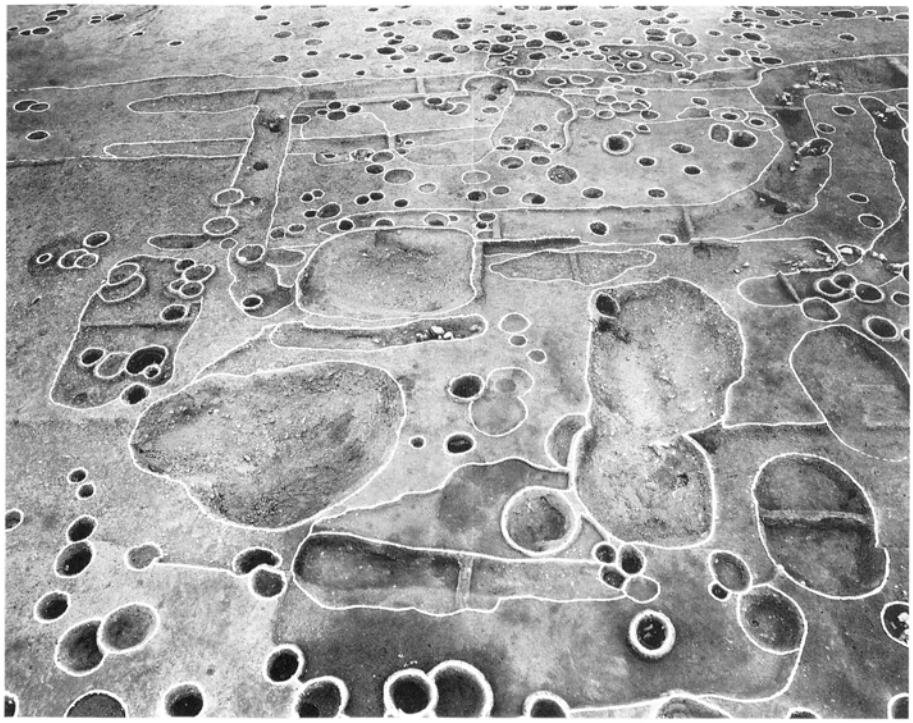


(2) 溝状遺構（SD11、22）
遺物出土状況（北から）

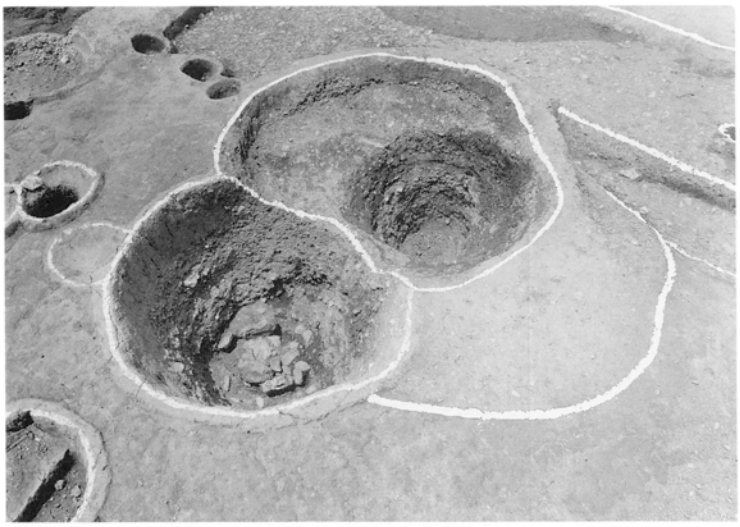
(3) 溝状遺構（SD22）
遺物出土状況（北西から）



(1) 溝状遺構（SD22）完掘状況（南南東から）

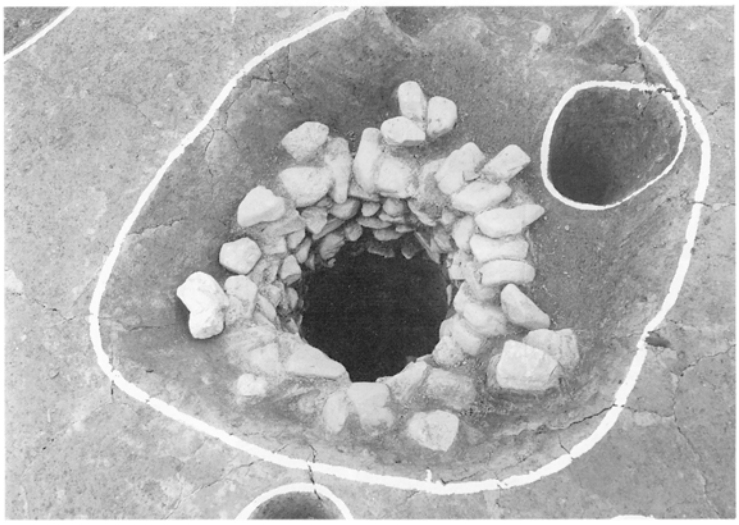


(2) 第IIｂ区東側部分遺構分布状況（東から）

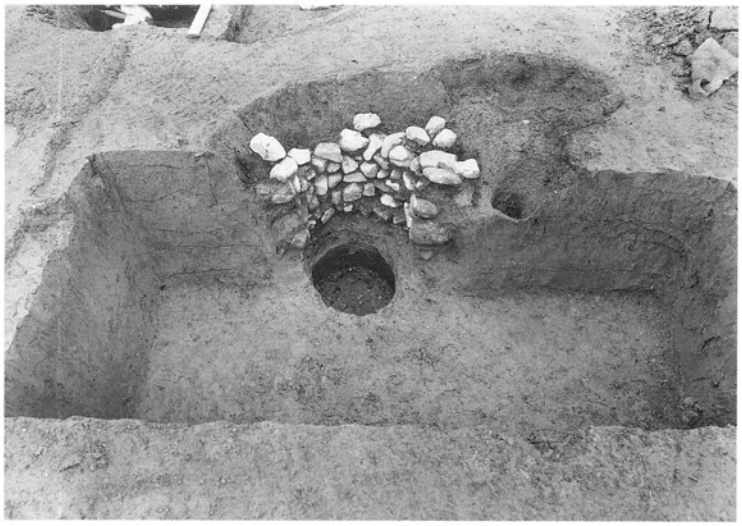


(1) 井戸（SE07・17）完掘状況
（南から）

(2) 井戸（SE07）床面
褐釉合子出土状況（東から）

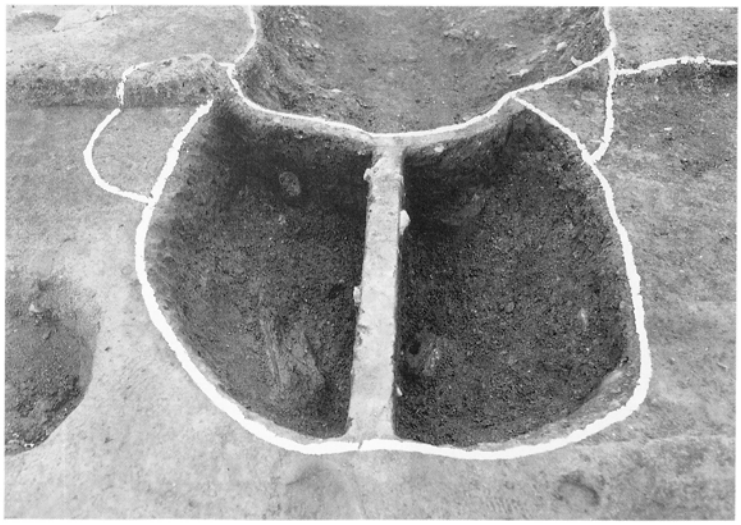


(3) 井戸（SE08）石組状況
（東から）

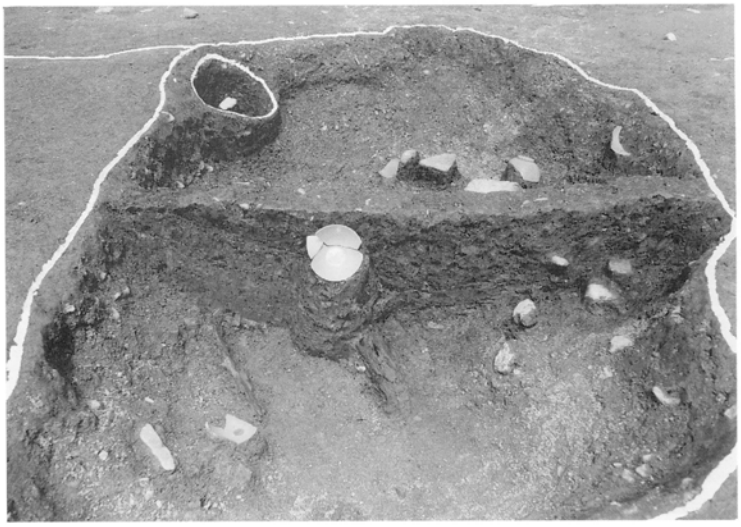


(1) 井戸（SE08）
石組及び井側（曲物）（東から）

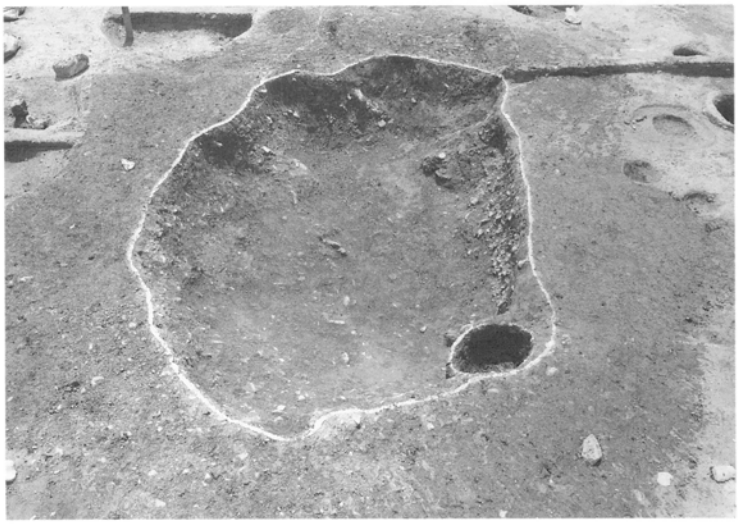
(2) 井戸（SE09）
土層堆積状況（東から）



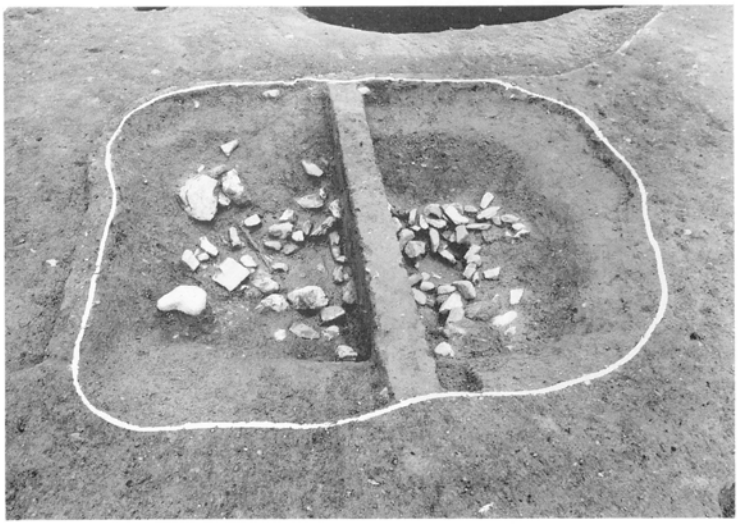
(3) 井戸（SE11）完掘状況
（東から）



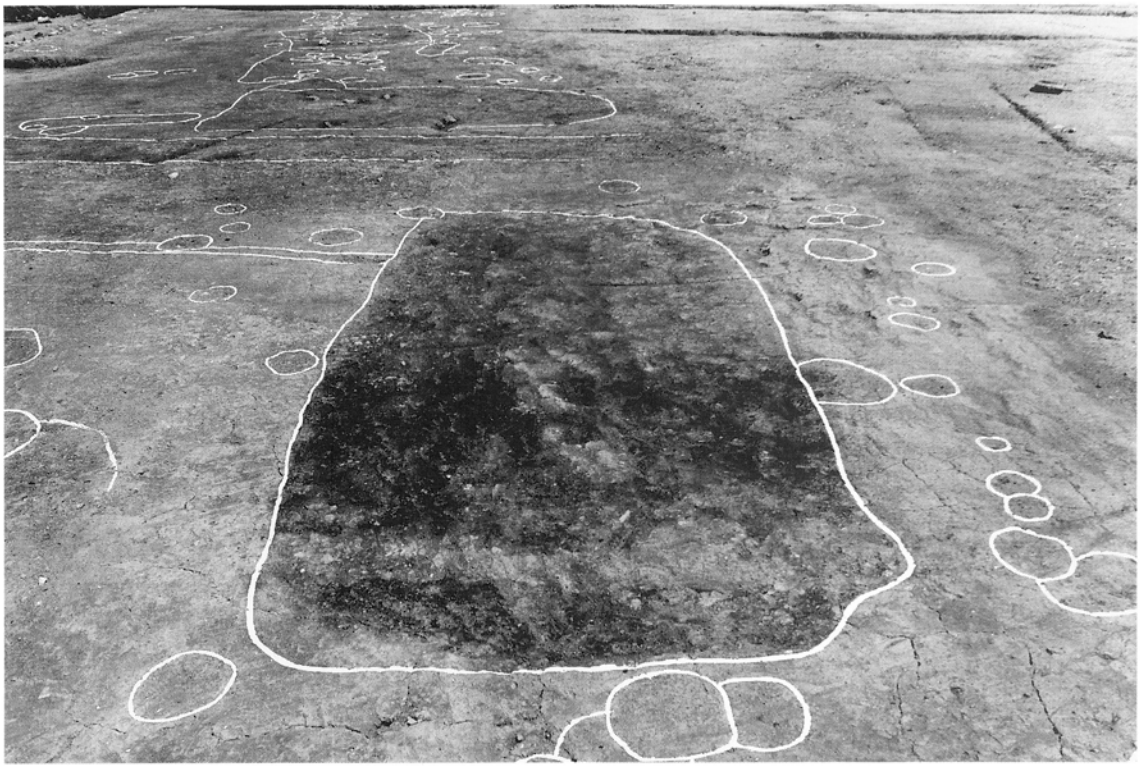
(1) 井戸（SE12）遺物出土状況
（南東から）



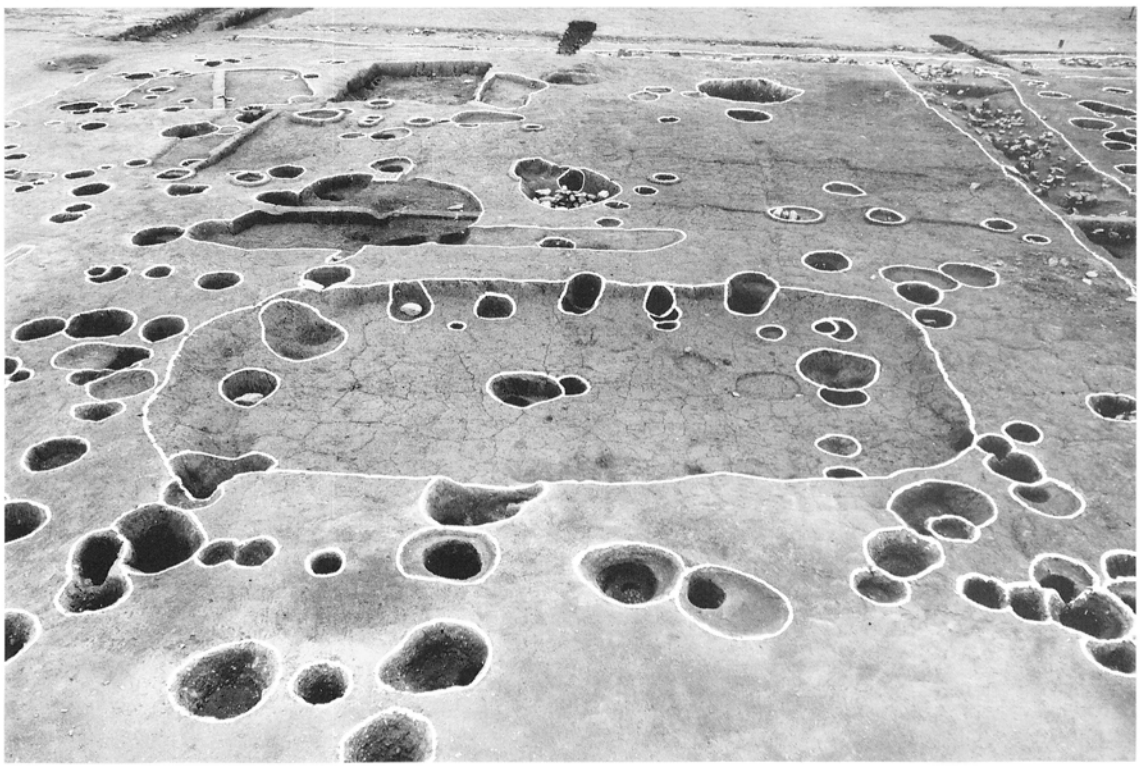
(2) 井戸（SE12）完掘状況
（西から）



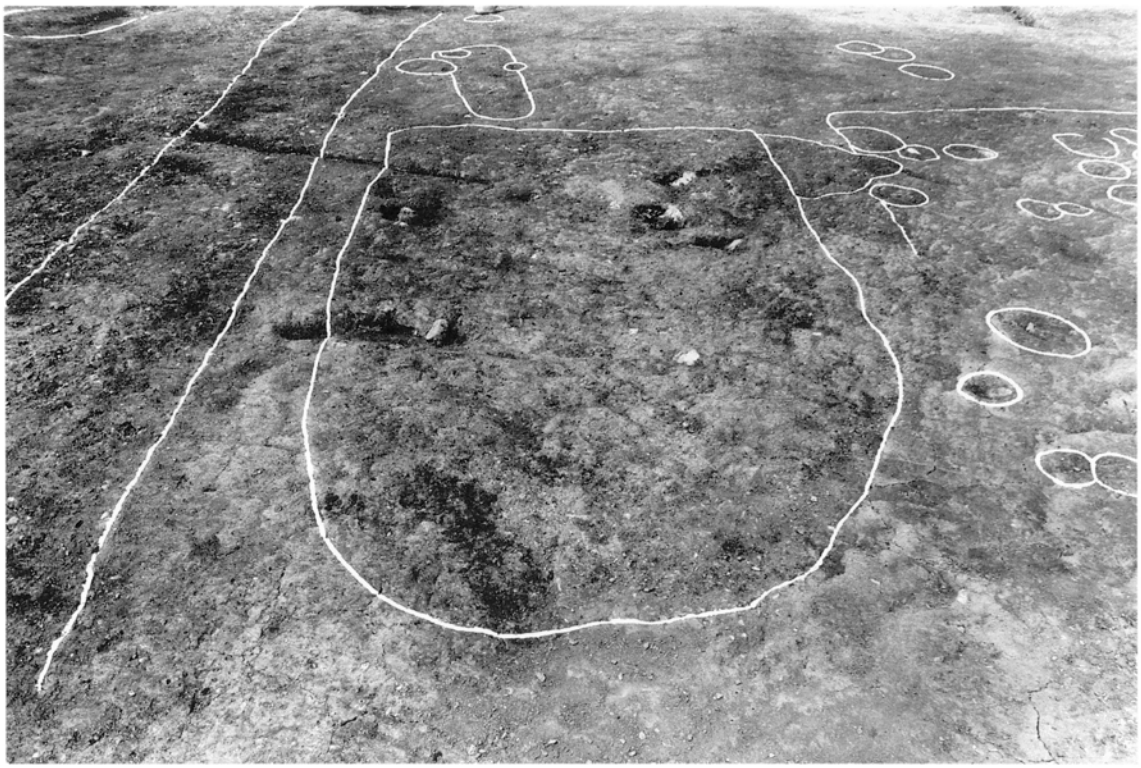
(3) 井戸（SE13）完掘状況
（西から）



(1) 竪穴遺構（SX52）検出状況（西から）（木炭片を多く含む）



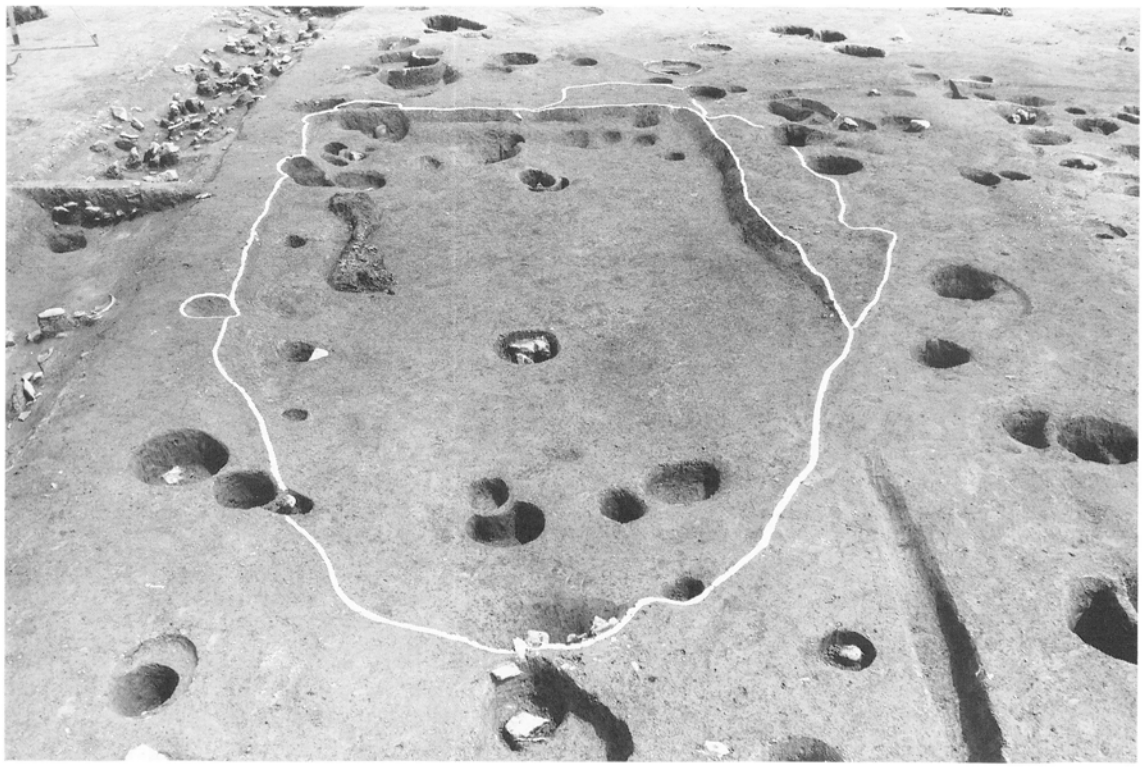
(2) 竪穴遺構（SX52）完掘状況（南から）



(1) 竪穴遺構（SX53）検出状況（南から）

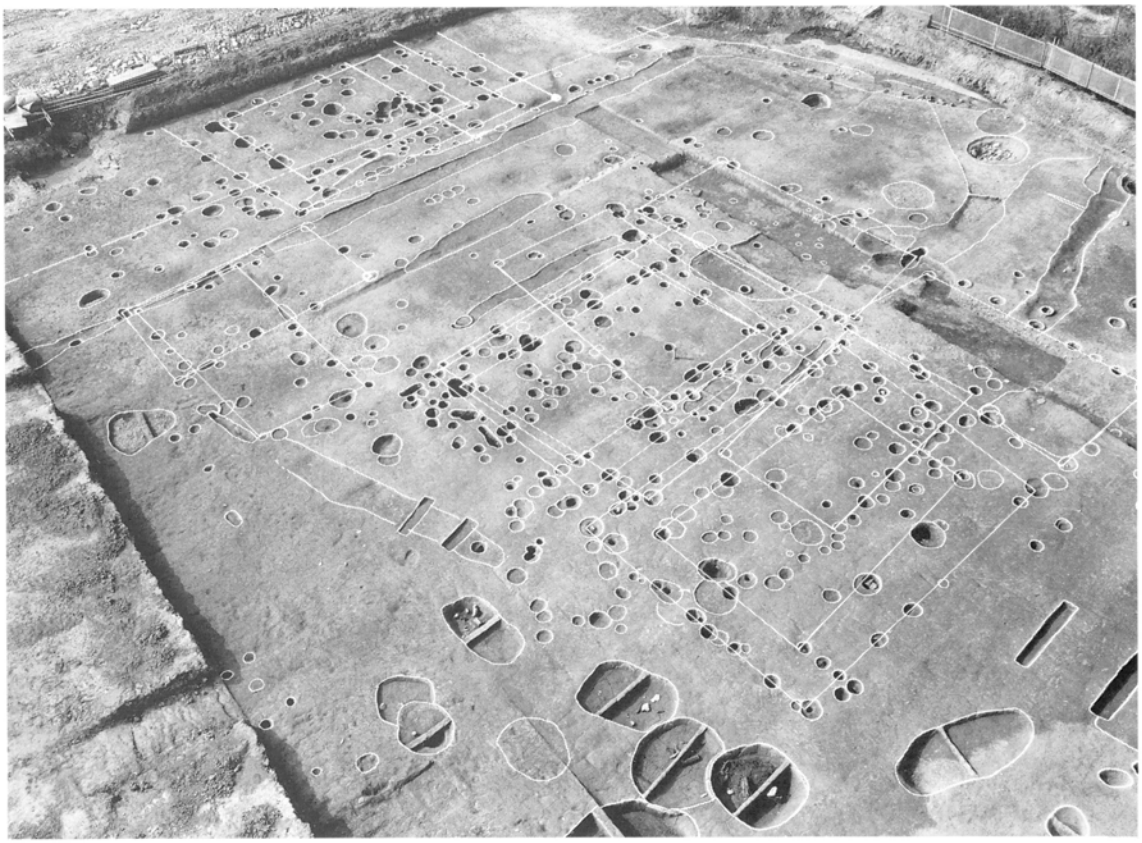
(2) 竪穴遺構（SX53）遺物出土状況（南から）

(1) 竪穴遺構（SX53）西北部炭化木出土状況（南から）

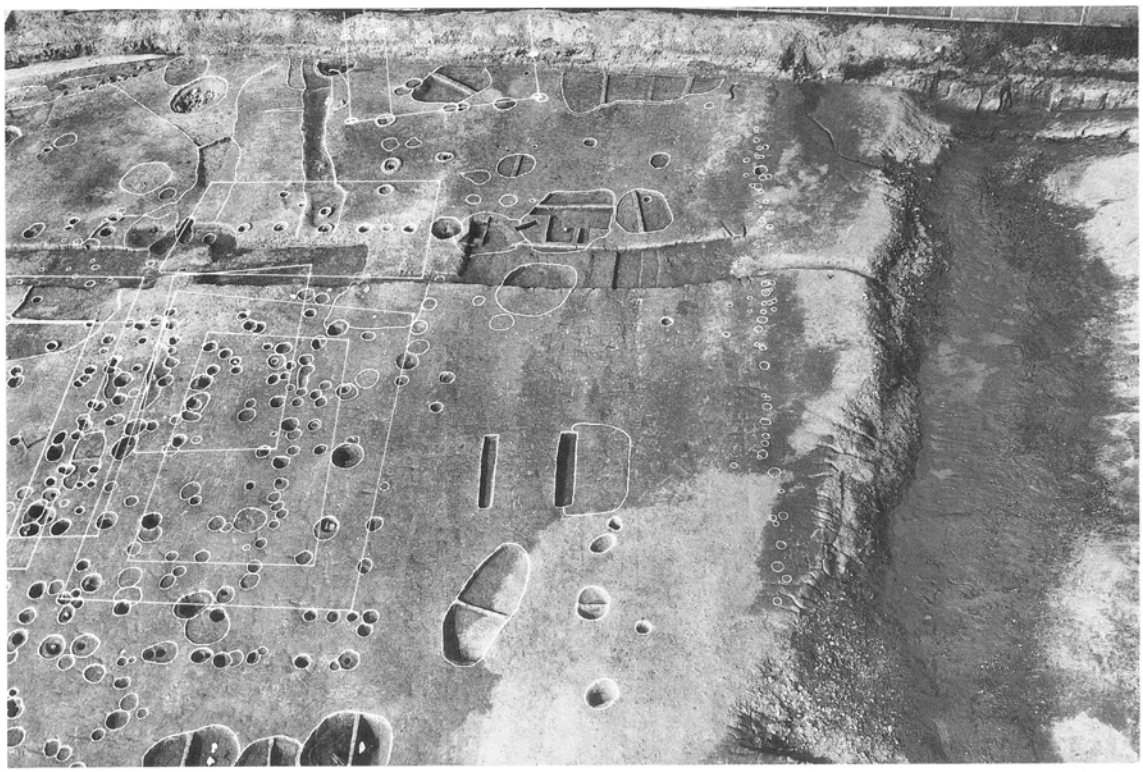


(2) 竪穴遺構（SX53）完掘状況（南から）

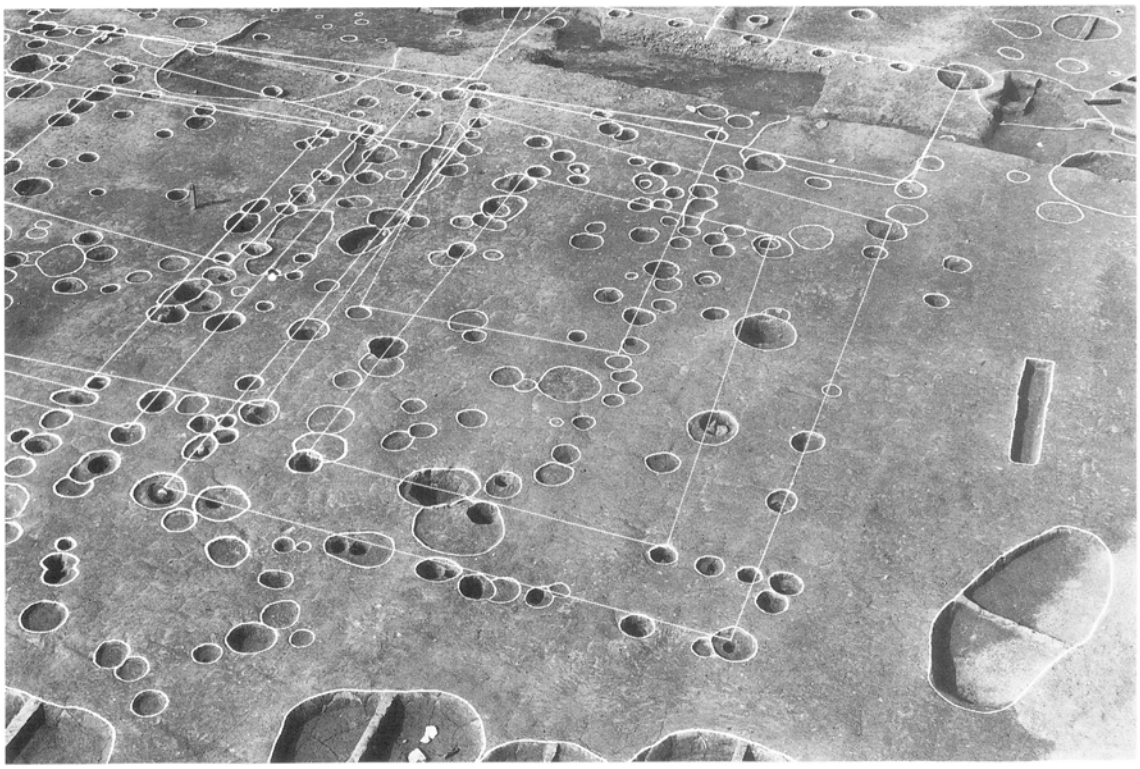
(1) 第II c 区完掘状況（西から）



(2) 第II c 区完掘状況（南東から）



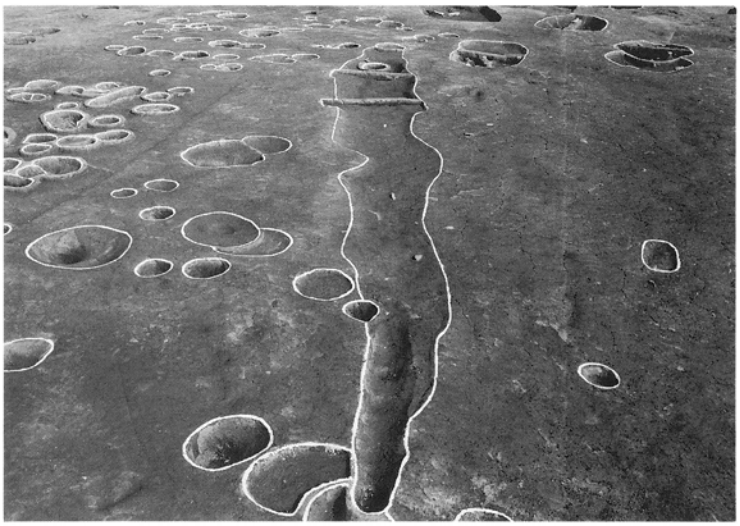
(1) 第II c 区北側部分完掘状況（南から）



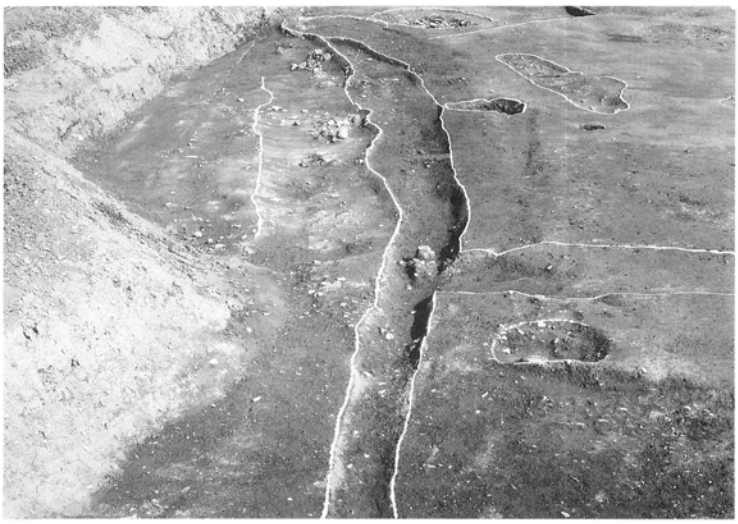
(2) 第II c 区中央～東部分完掘状況（南から）

(1) 柵列（SA01）
完掘状況（南から）

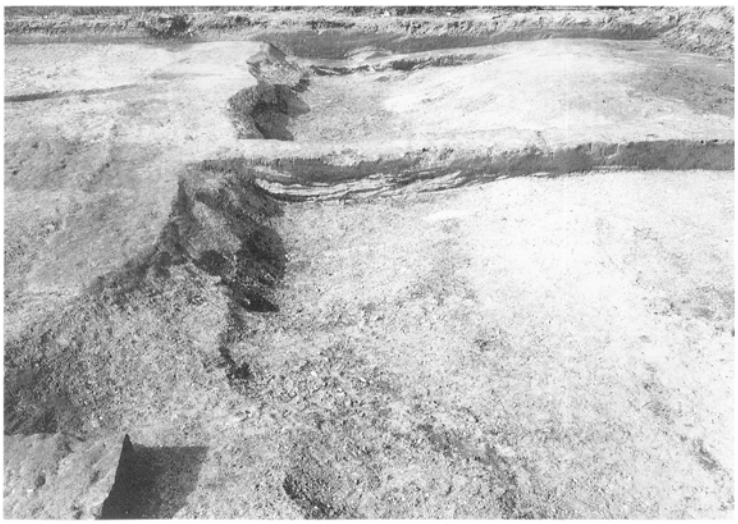
(2) 溝状遺構（SD39）
完掘状況（北から）



(1) 溝状遺構（SD46）
完掘状況（西から）

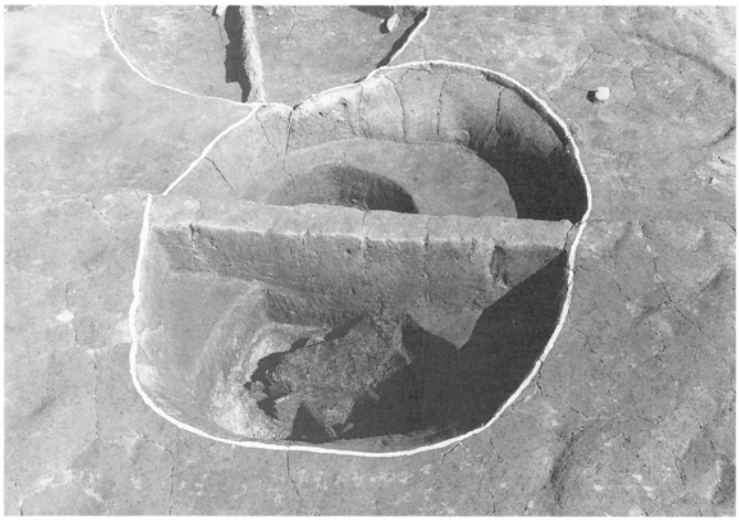


(2) 溝状遺構（SD25）
完掘状況（西から）



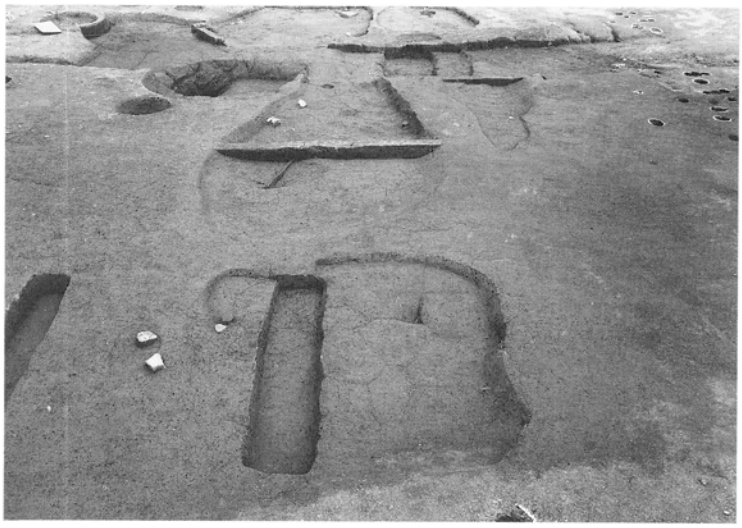
(3) 旧河川露呈状況（南から）

(1) 井戸・竪穴遺構完掘状況
(南東から)



(2) 井戸 (SE18) 土層堆積状況
(南南西から)

(3) 井戸 (SE19) 完掘状況
(北から)

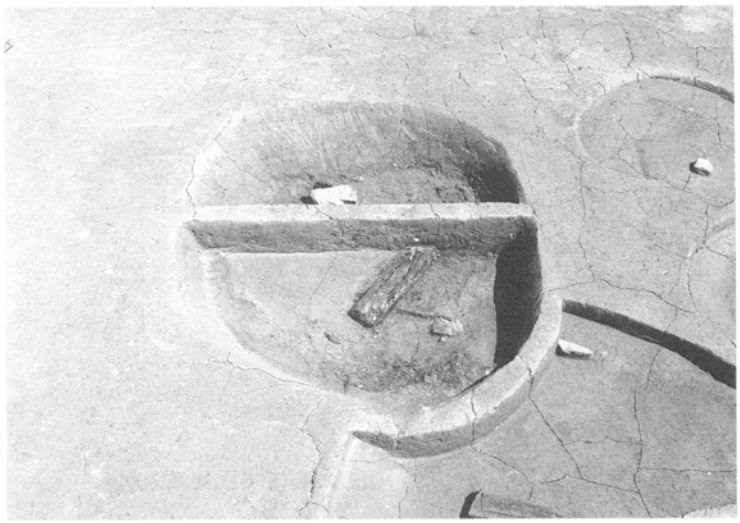


(1) 竪穴遺構（SX83）、土壙（SK06）
完掘状況（南から）

(2) 土壙（SK07）完掘状況
（南から）

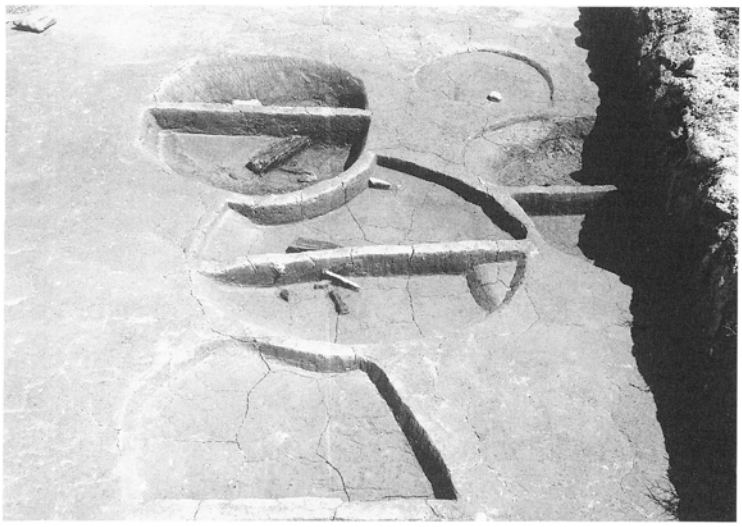
(3) 土壙（SK08）遺物出土状況
（北から）

(1) 竪穴遺構（SX65）
完掘状況（北から）



(2) 竪穴遺構（SX66）
遺物出土状況（西から）

(3) 竪穴遺構（SX68）
完掘状況（西から）

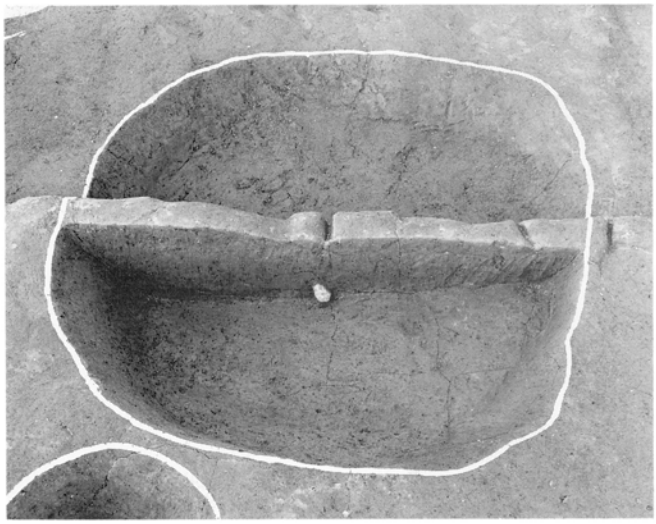


(1) 竪穴遺構（SX66・67）
完掘状況（西から）

(2) 竪穴遺構（SX69）
礫出土状況（南から）

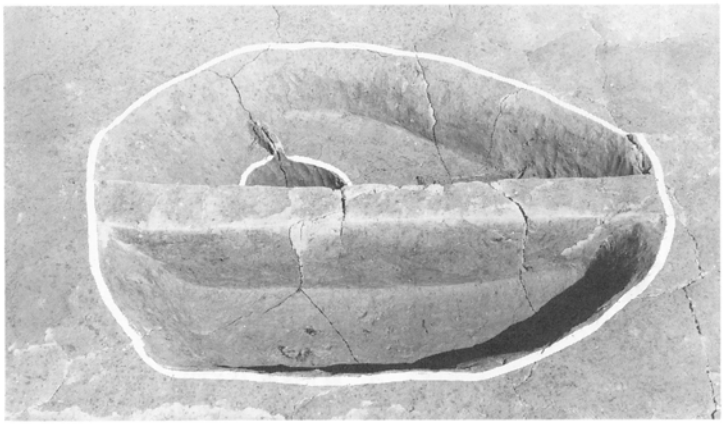
(3) 竪穴遺構（SX70）
完掘状況（南から）

(1) 竪穴遺構（SX71）
遺物出土状況

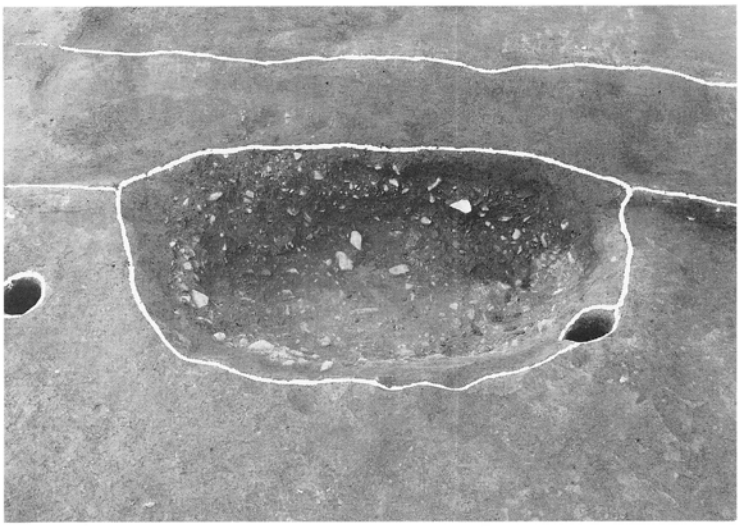


(2) 竪穴遺構（SX75）完掘状況（南から）

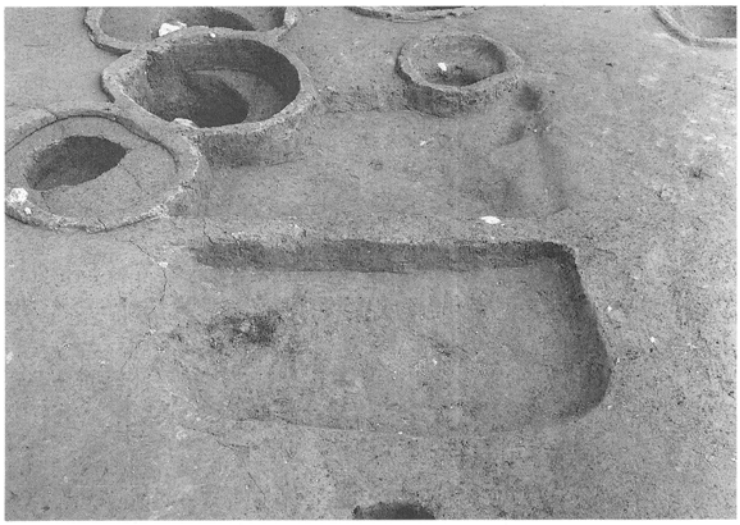
(3) 竪穴遺構（SX78）
完掘状況（東から）



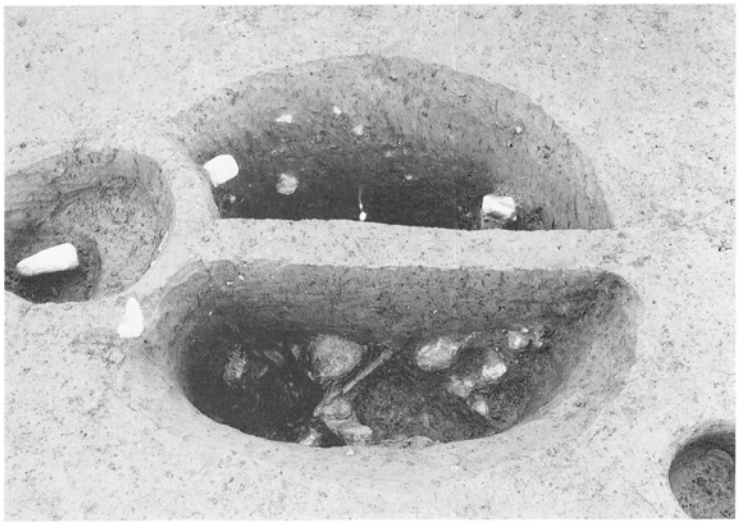
(4) 竪穴遺構（SX79）
完掘状況（南から）



(1) 竪穴遺構（SX81）
完掘状況（東から）



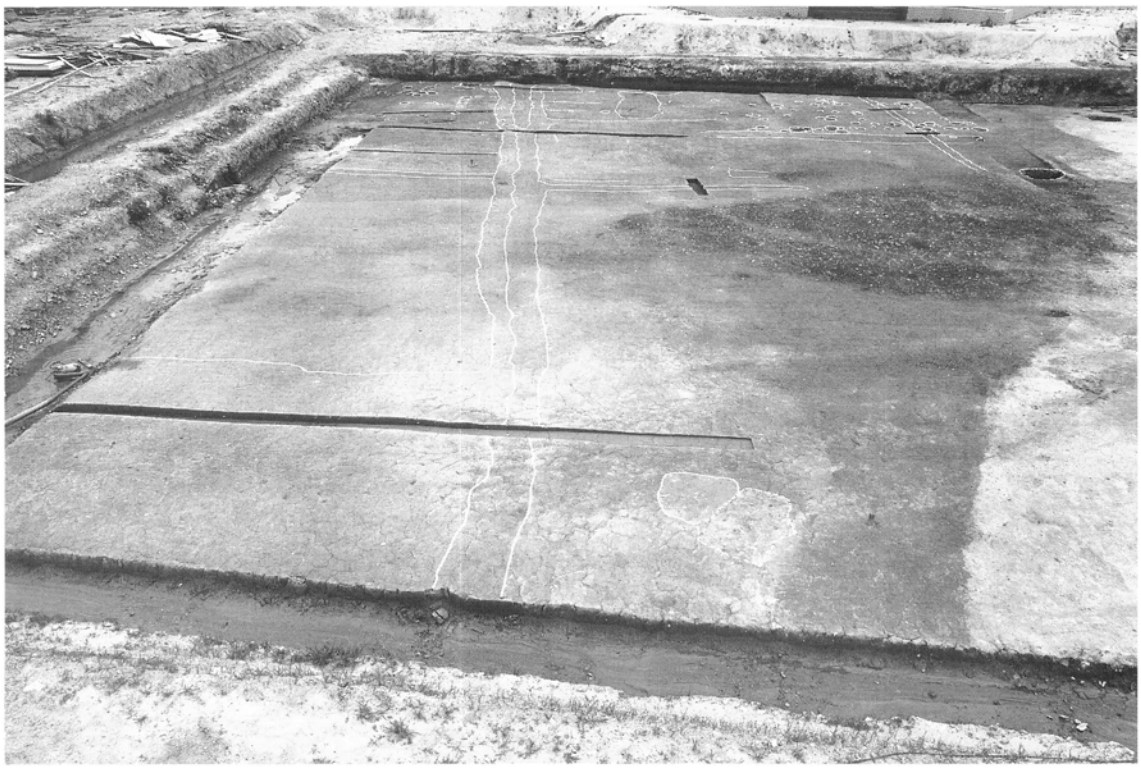
(2) 竪穴遺構（SX82）
完掘状況（南西から）



(3) 竪穴遺構（SX84）
遺物出土状況（北から）

(1) 第II d区完掘状況（南から）

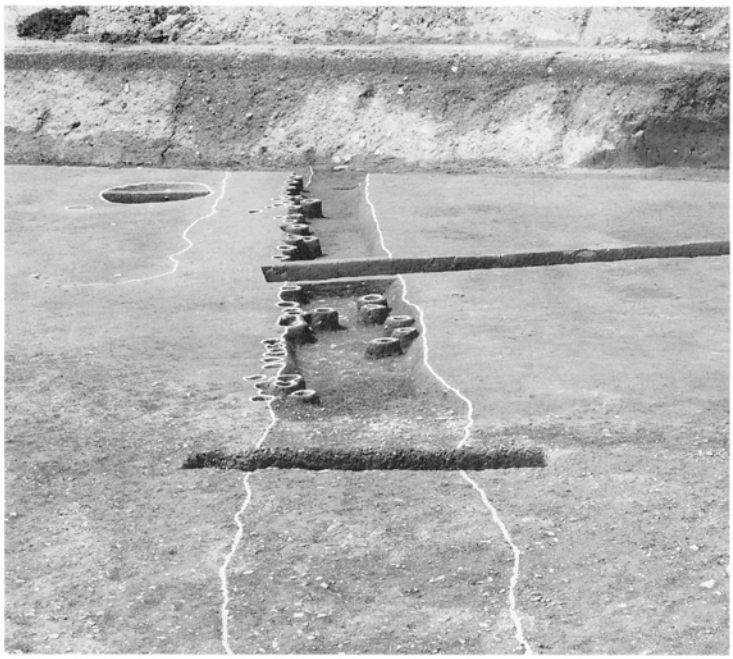
(2) 第II d区完掘状況（東から）



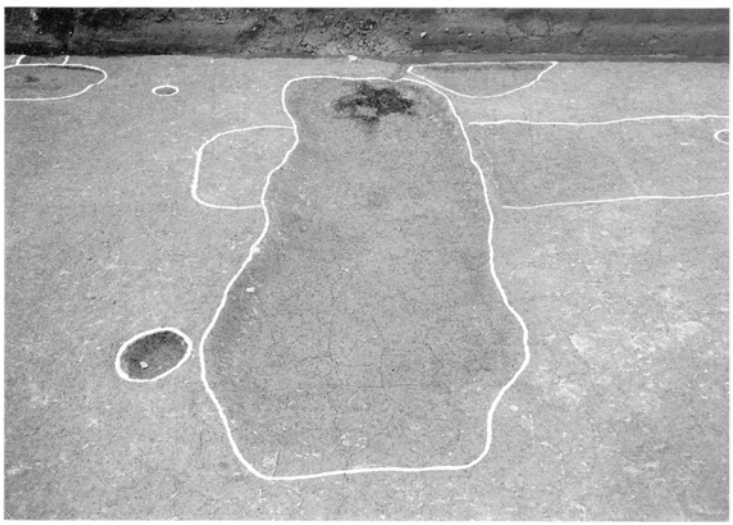
(1) 第II d 区西側畦畔検出状況

(2) 第II d 区遺構検出面下部旧河川露呈状況（東から）

(1) 旧河川内土層堆積状況
(西から)



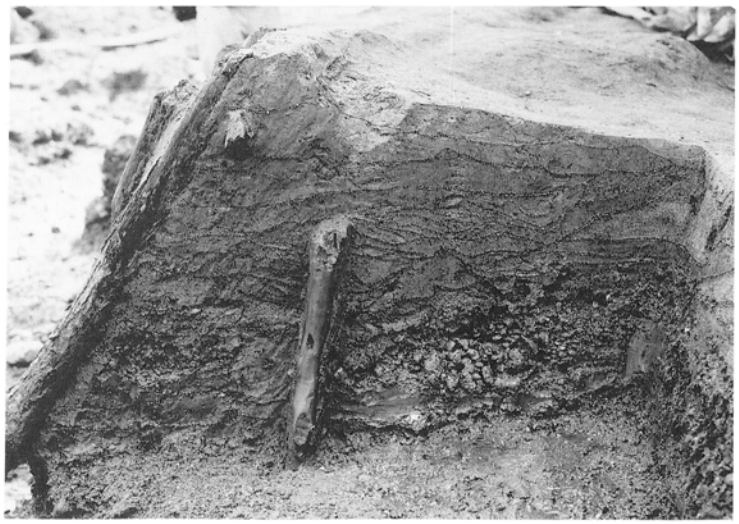
(2) 溝状遺構SD73完掘状況
(南から)



(3) 竪穴遺構 (SX92)
完掘状況 (南から)

(1) 杭列（SA11）検出状況
（東から）

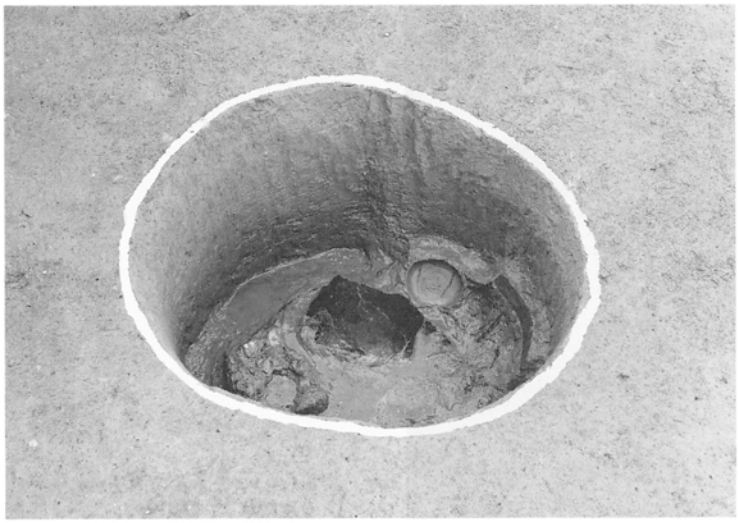
(2) 杭列（SA11）部分拡大
（北東から）



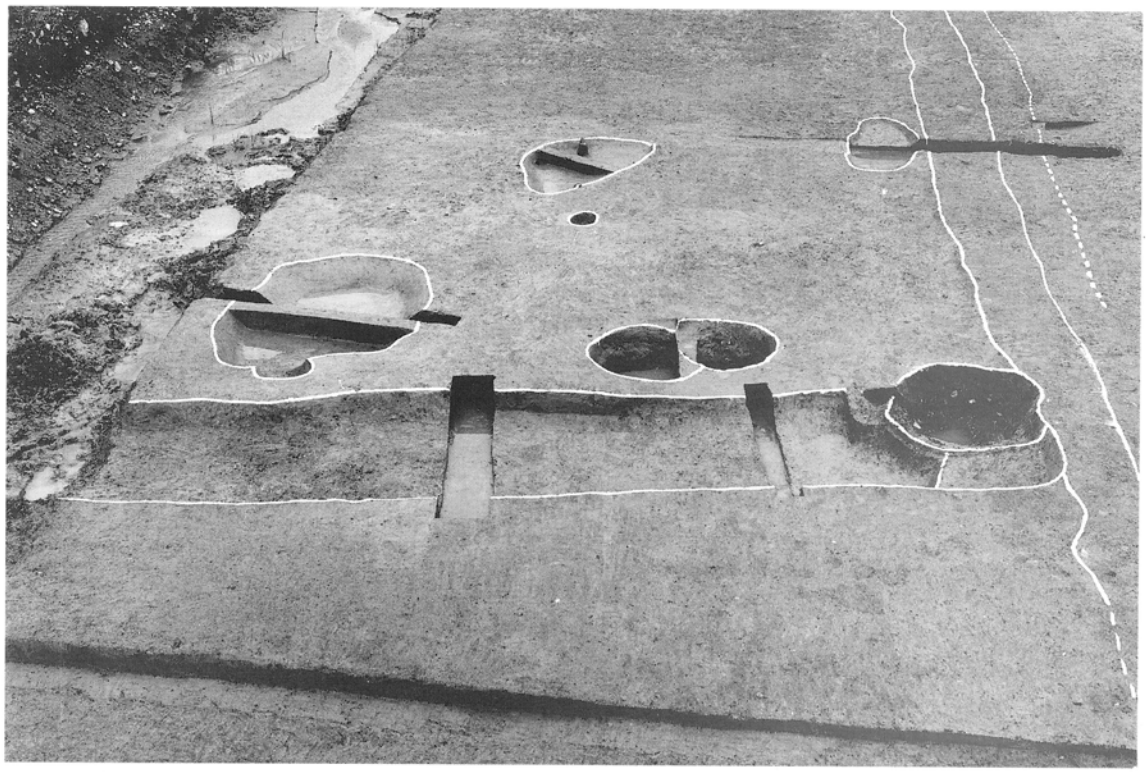
(3) 杭列（SA11）中央部直交軸の
土層堆積状況（北から）

(1) 井戸（SE21）土層堆積状況
（南から）

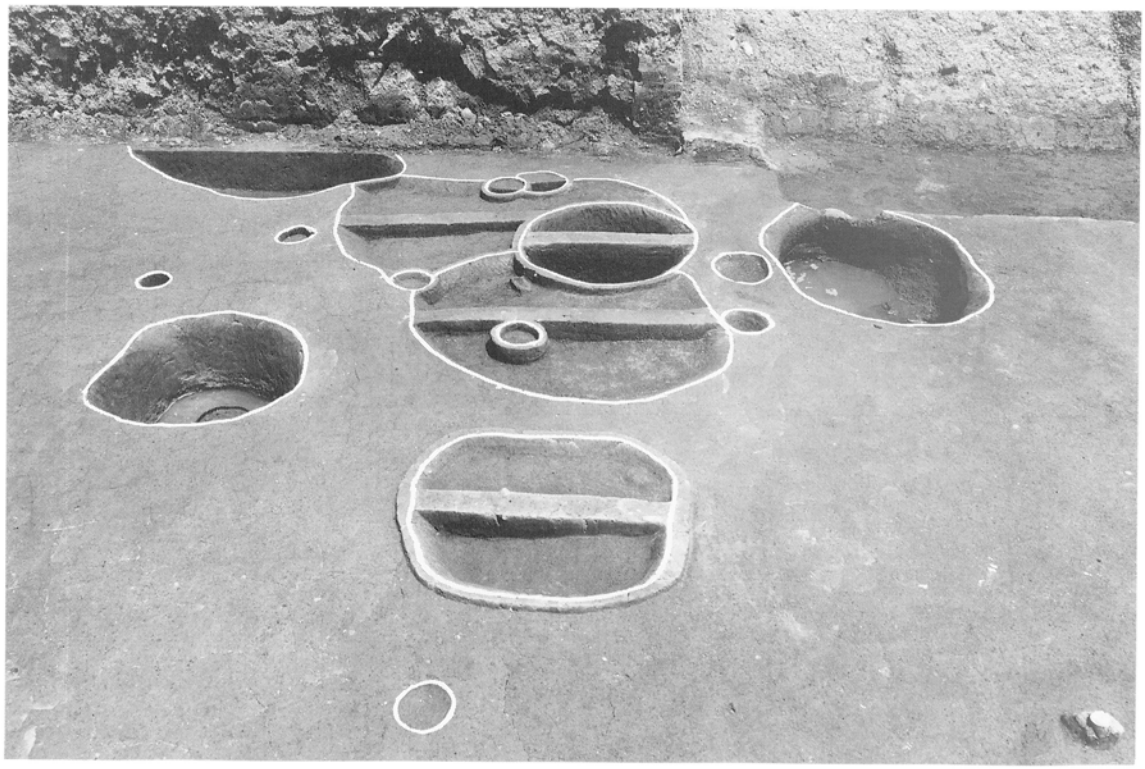
(2) 井戸（SE28）井側検出状況
（南から）



(3) 井戸（SE29）掘り下げ状況
（南から）



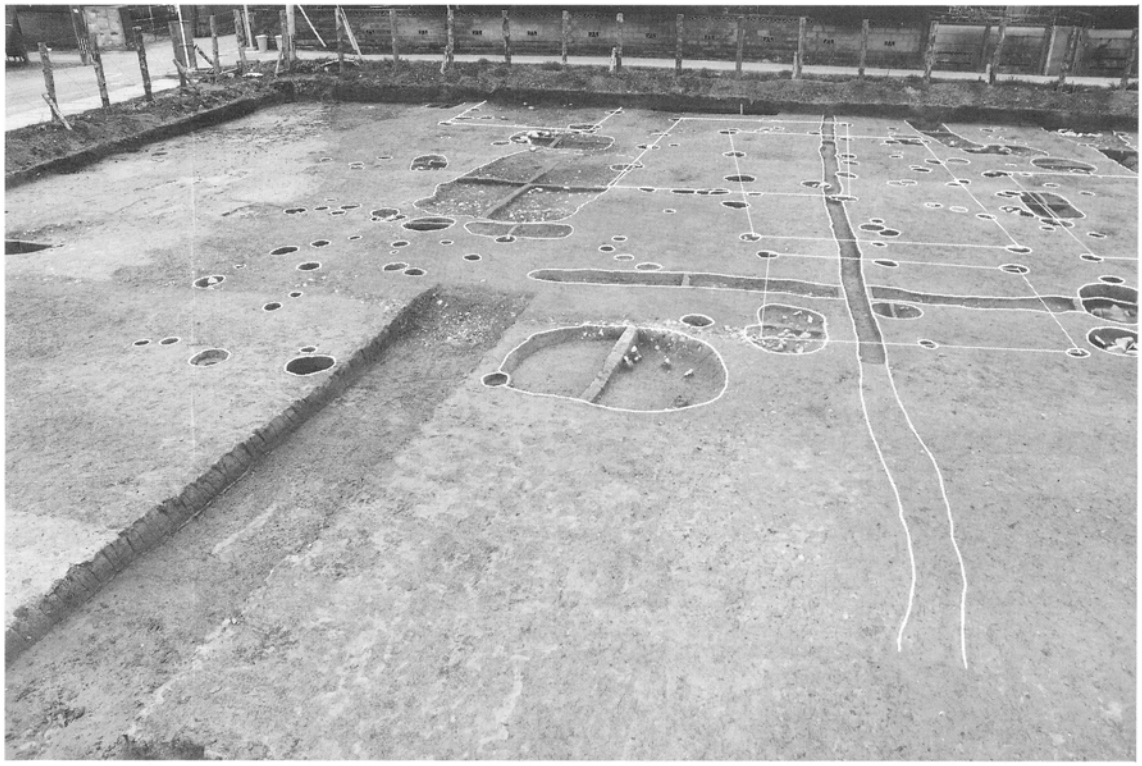
(1) 第IIｄ区西南部遺構分布状況（南から）



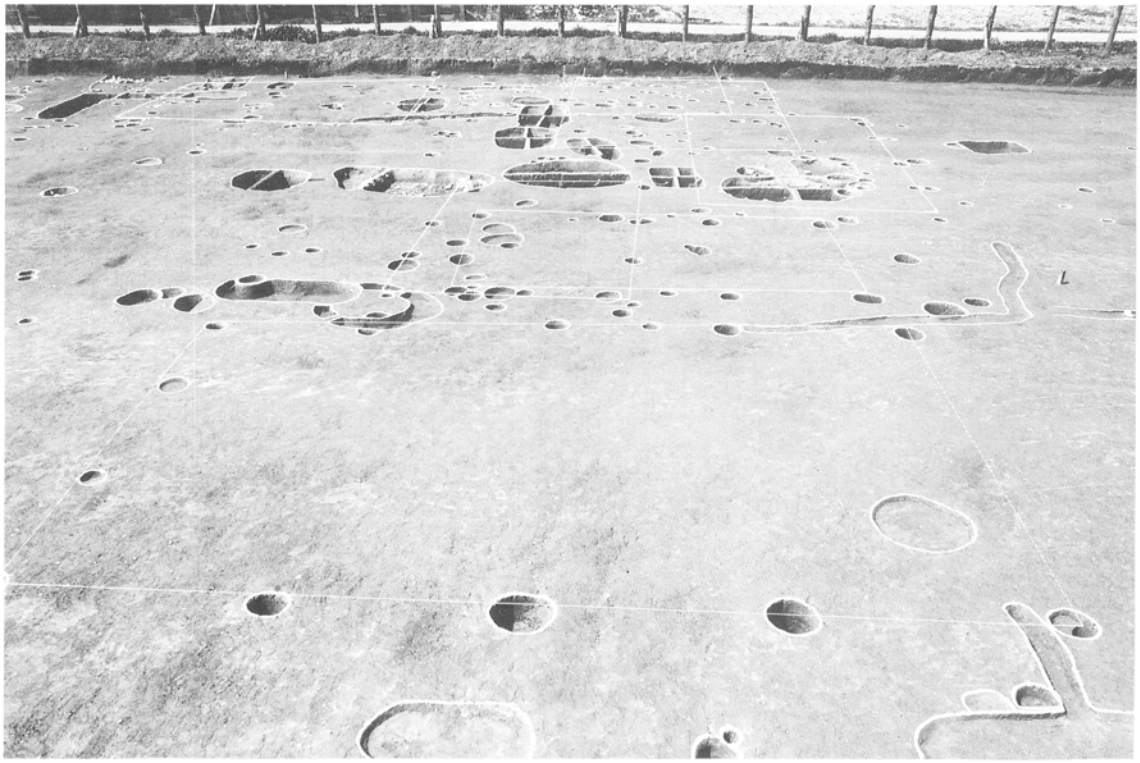
(2) 第IIｄ区北東部遺構分布状況（南から）

(1) 第Ⅲｃ区完掘状況（西から）

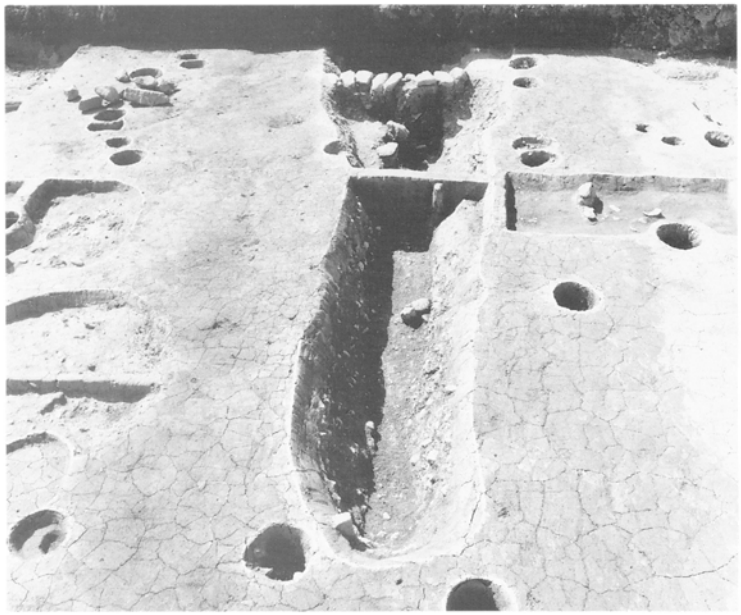
(2) 第Ⅲｂ区完掘状況（東北東から）



(1) 第Ⅲｂ区南側部分完掘状況（東から）



(2) 第Ⅲｂ区中央部分完掘状況（東から）

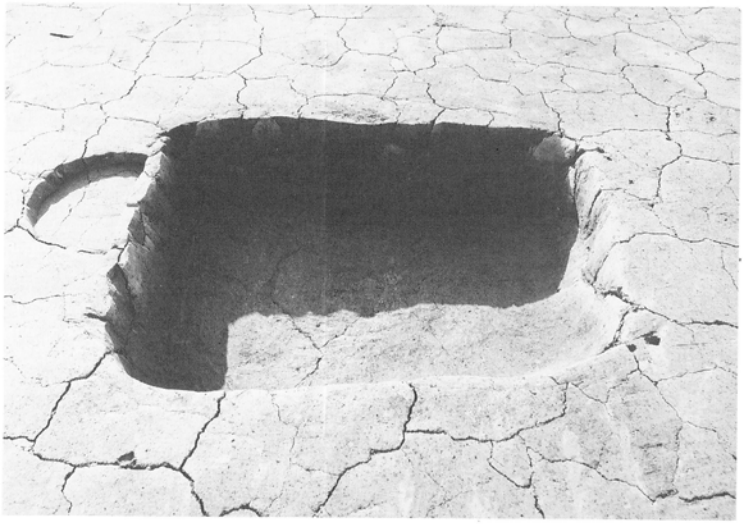


(1) 溝状遺構（SD19）完掘状況
（東から）

(2) 井戸（SE31）完掘状況
（東から）

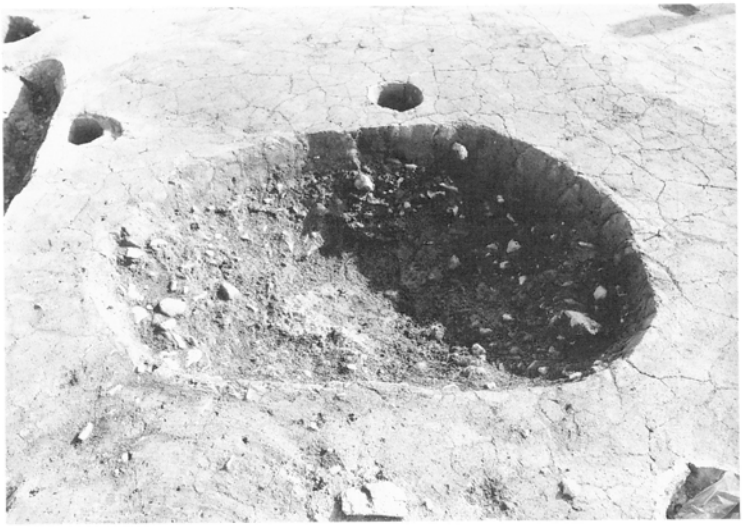
(3) 井戸（SE31）石組み状況
（東から）

(1) 土壙（SK10）完掘状況
（北から）



(2) 土壙（SK14）完掘状況
（東から）

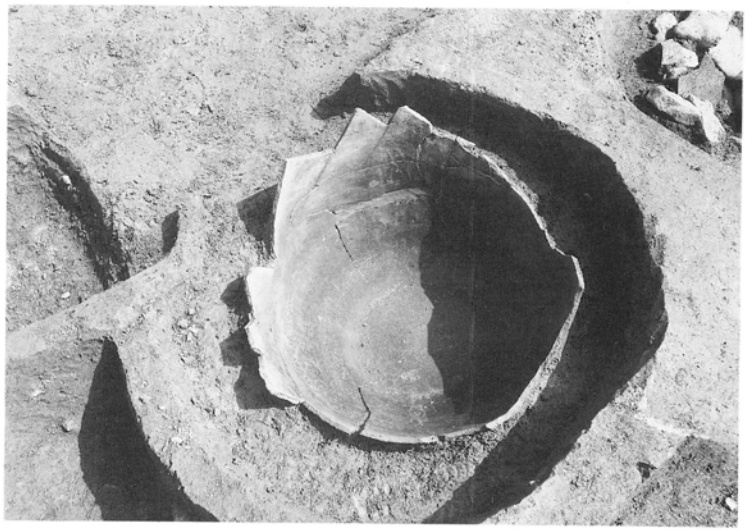
(3) 土壙（SK45）完掘状況
（南から）



(1) 竪穴遺構（SX102）
完掘状況（北から）

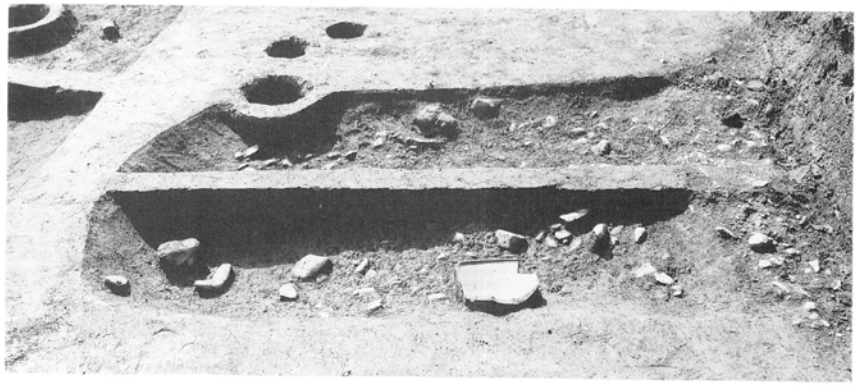
(2) 竪穴遺構（SX104）
完掘状況（北から）

(3) 埋甕（SX106）
完掘状況（西から）

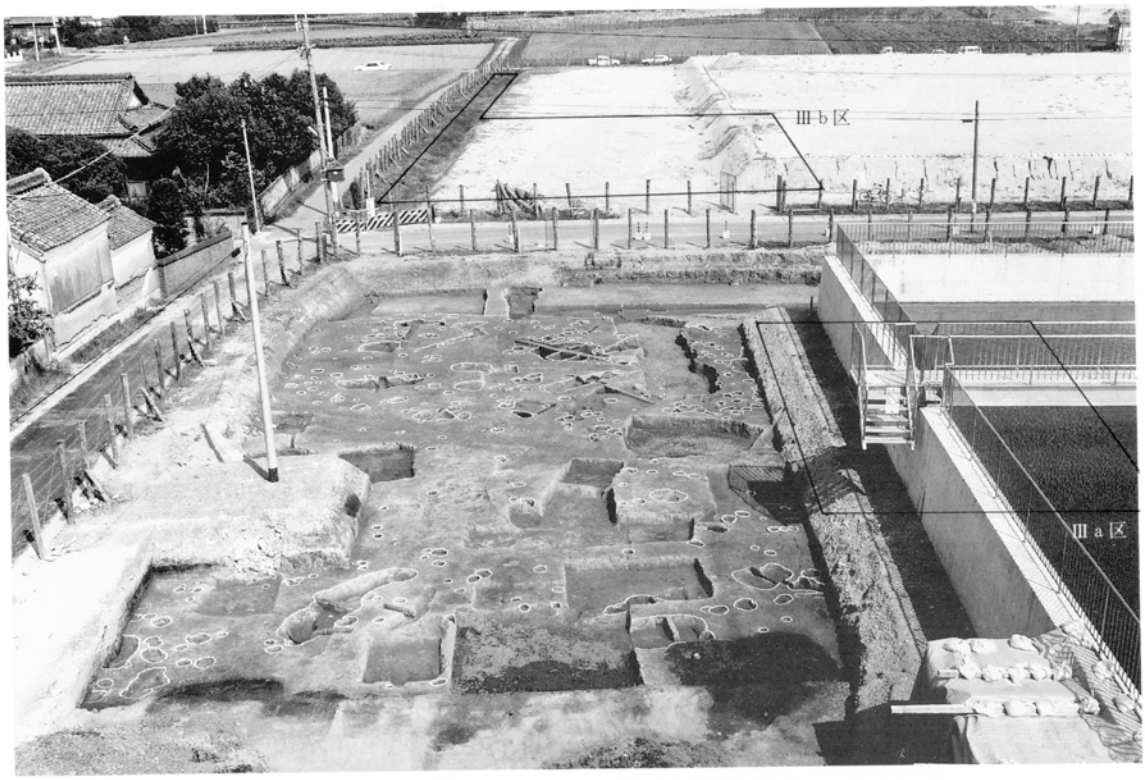


(1) 埋甕（SX107）完掘状況
（南から）

(2) 埋甕（SX111）遺物出土状況
（北から）



(3) 竪穴遺構（SX126）
遺物出土状況



(1) 第Ⅲc区完掘状況（南から）

(2) 第Ⅲc区中央部完掘状況（東から）

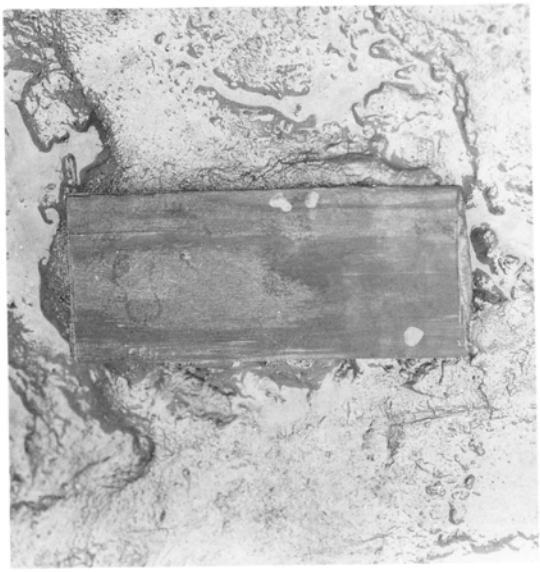
(1) 溝状遺構（SD61）
完掘状況（東から）

(2) 溝状遺構（SD61）
掘り下げ作業風景（東から）

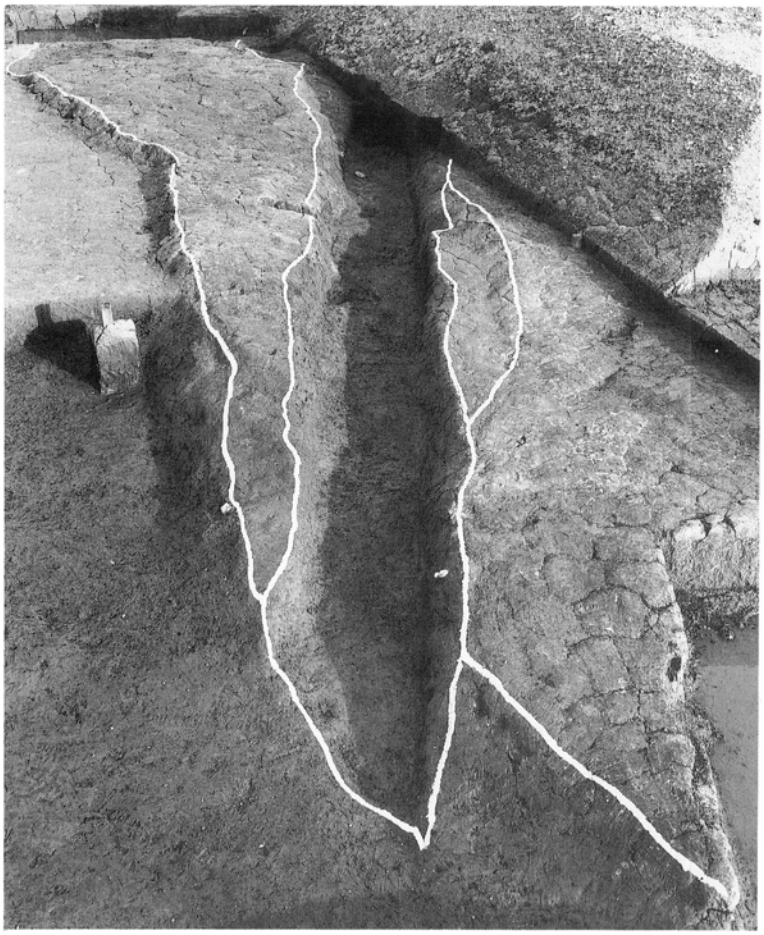
(3) 溝状遺構（SD61）内
土層堆積状況（東から）

(1) 溝状遺構（SD61）内杭列（SA11）
検出状況（東から）

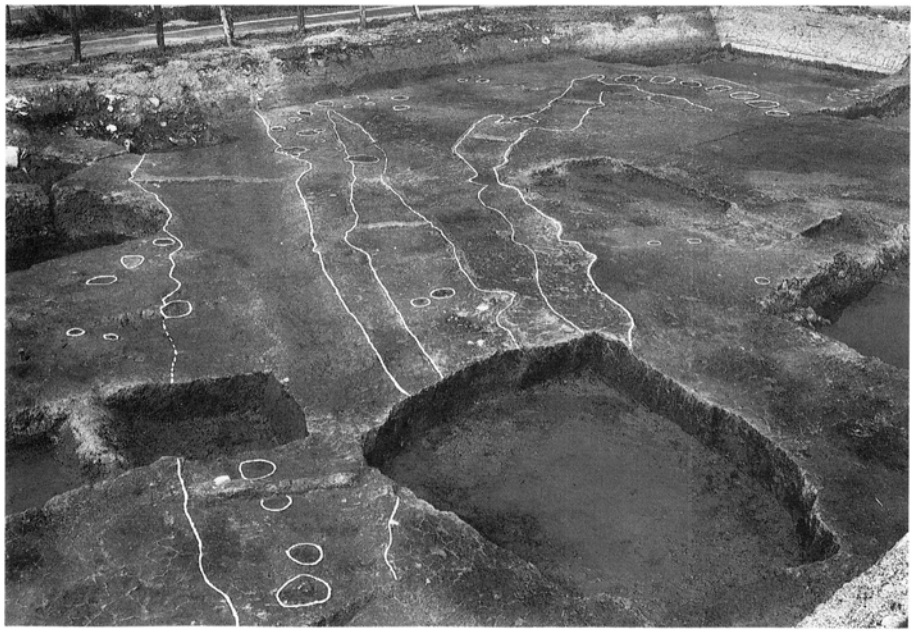
(2) 溝状遺構（SD61）内杭列（SA11）
検出状況（南から）



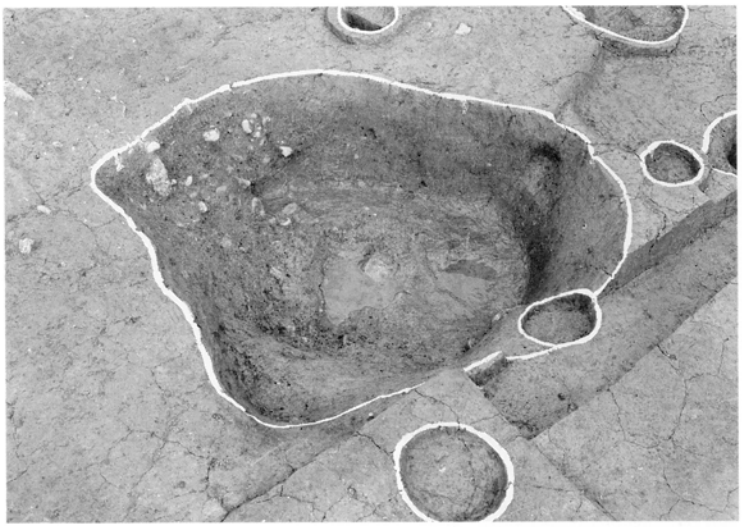
(3) 板絵出土状況（SD61出土）



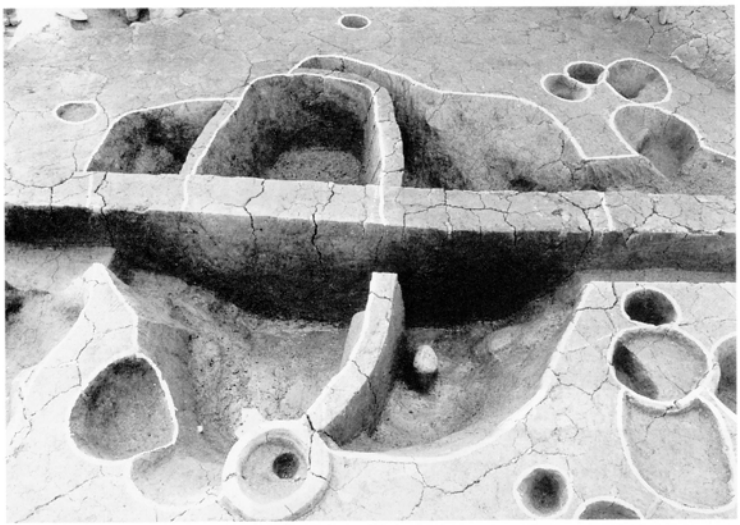
(1) 溝状遺構（SD62）完掘状況
（北西から）



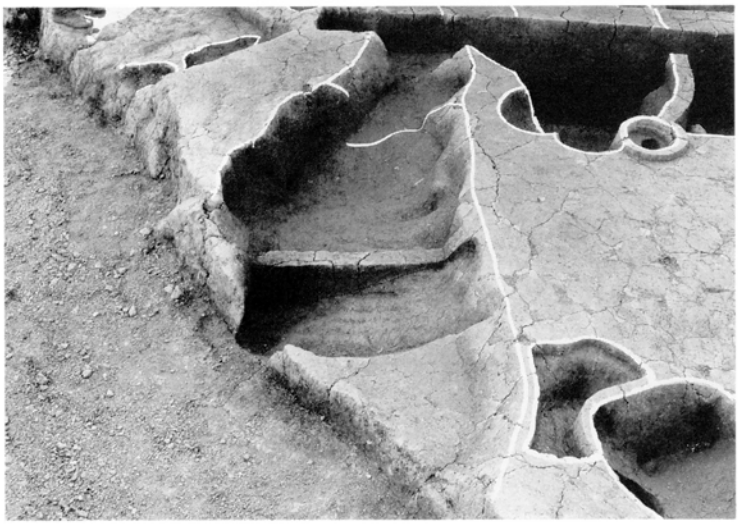
(2) 溝状遺構（SD63～65）完掘状況（南東から）



(1) 竪穴遺構（SX135）
完掘状況（南から）

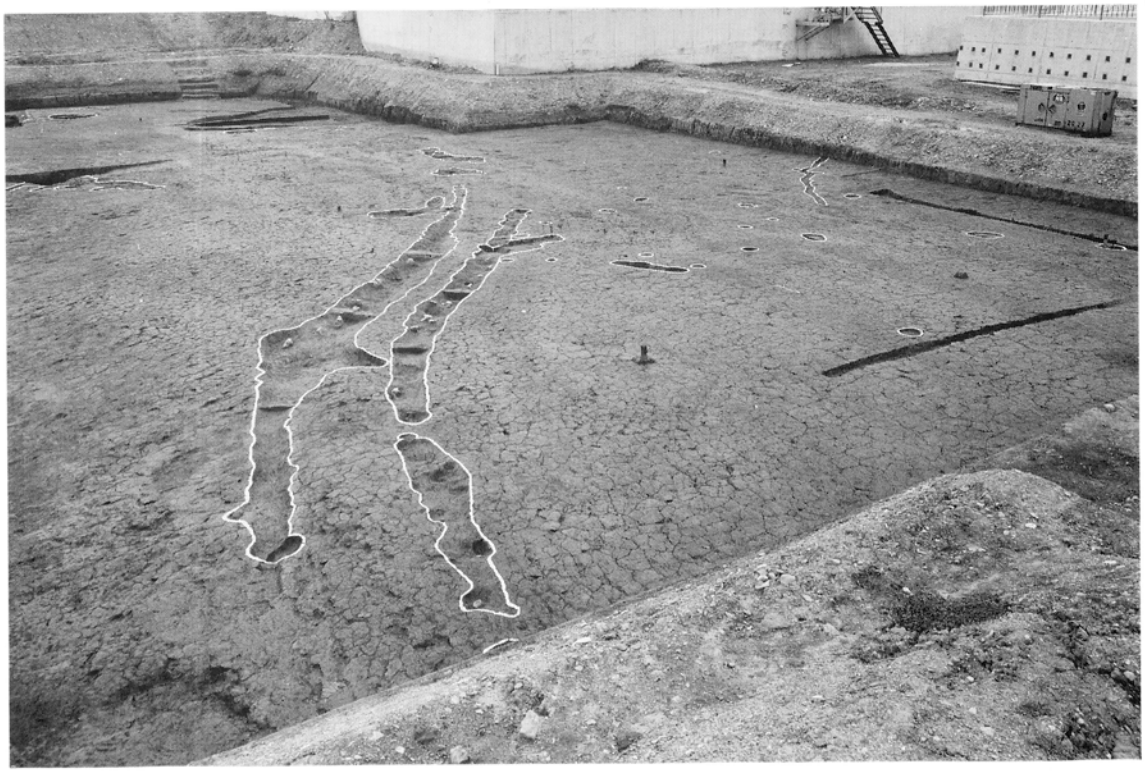


(2) 竪穴遺構（SX138・153・154）
（北東から）

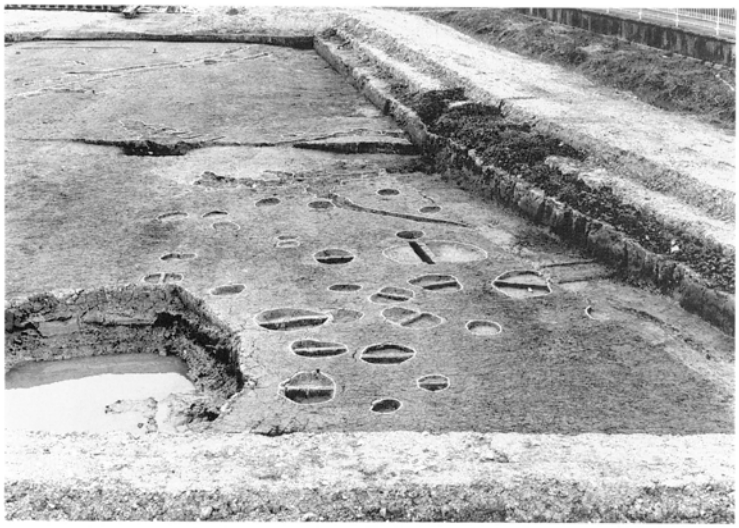


(3) 竪穴遺構（SX155）
完掘状況（北東から）

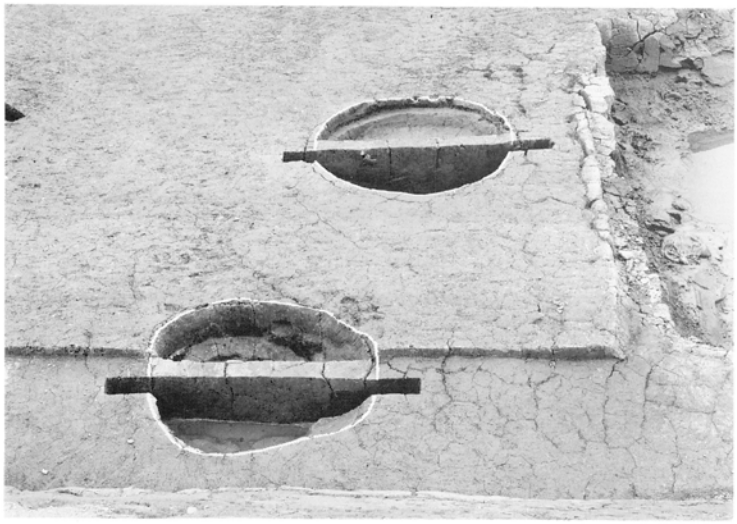
(1) 第Ⅳｂ区完掘状況（東から）



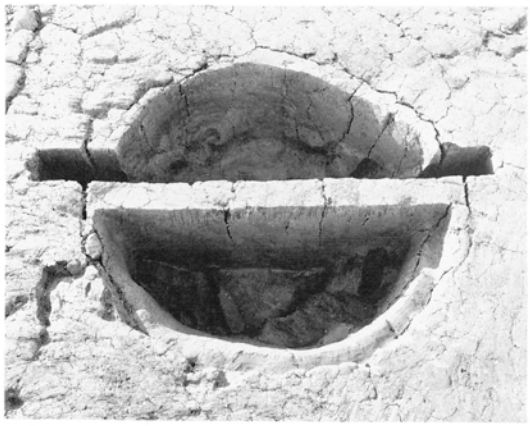
(2) 溝状遺構（SD70・71）完掘状況（南東から）



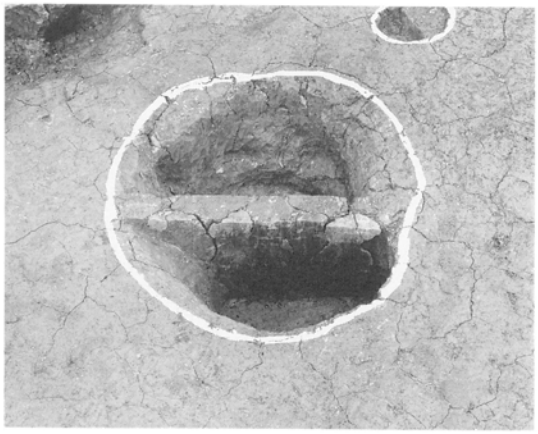
(1) 第Ⅳb区西南部竪穴遺構
分布状況（西から）



(2) 竪穴遺構（SX156・157）
検出状況（西から）

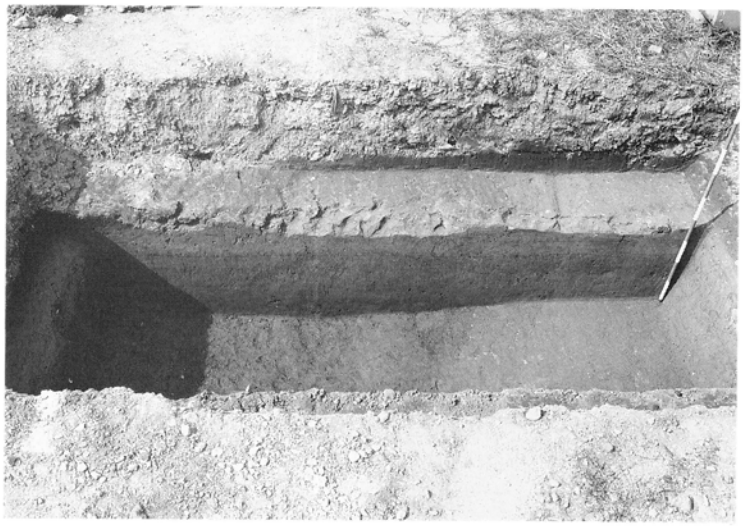


(3) 竪穴遺構（SX157）遺物出土状況（西から）



(4) 竪穴遺構（SX158）土層堆積状況（南東から）

(1)　Aトレンチ完掘状況（南から）

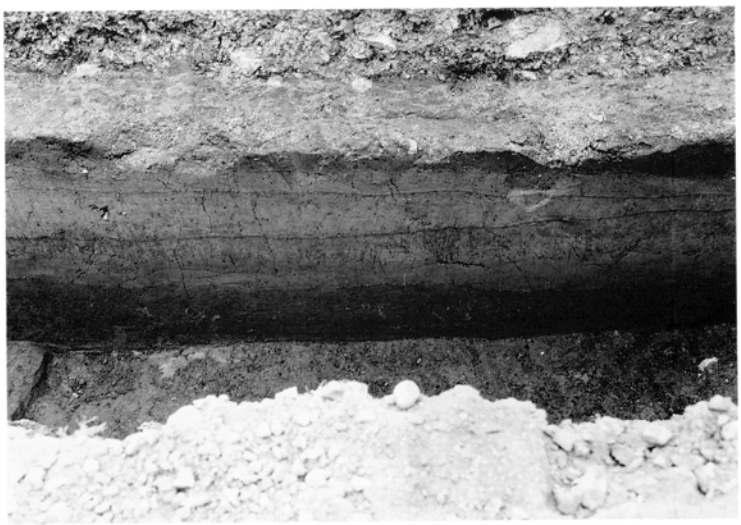


(2)　Aトレンチ西壁土層断面
（東から）

(3)　Bトレンチ完掘状況（南から）

(1) Bトレンチ西壁土層断面
（東から）

(2) Cトレンチ完掘状況（南から）



(3) Dトレンチ東壁土層断面
（西から）

16

42

140

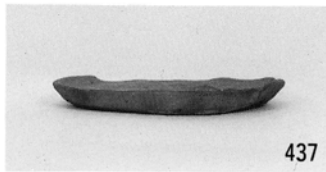
147

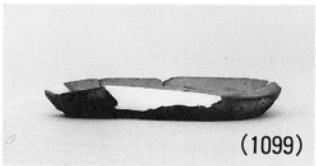
219

223

411

412


437


(1099)

659

(1241)

73

179

260

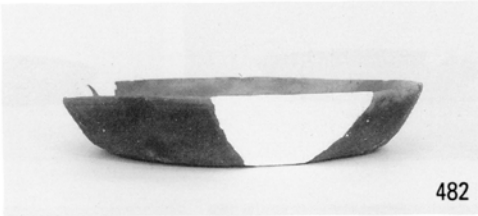
421

471

481

出 土 遺 物（その1）

505


482

484

508

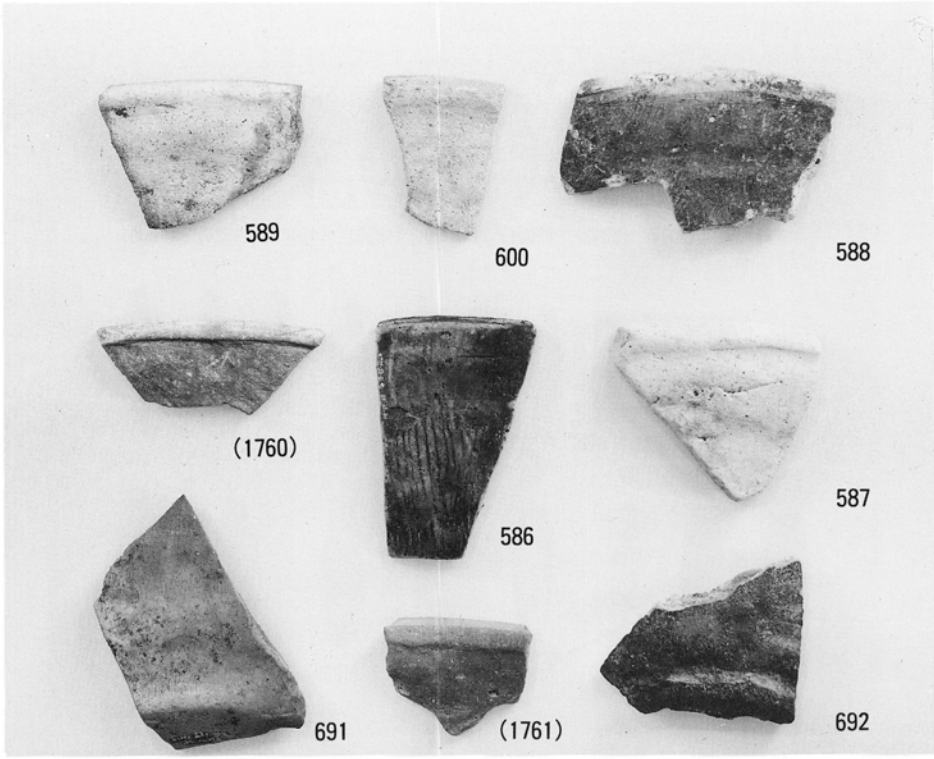
561

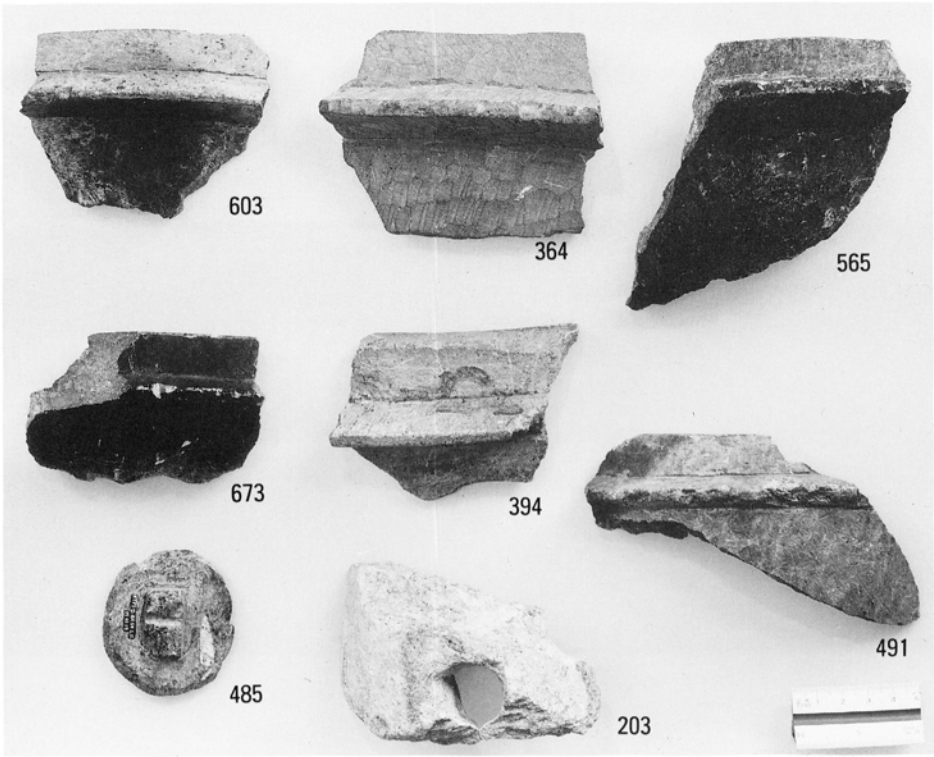
594

571

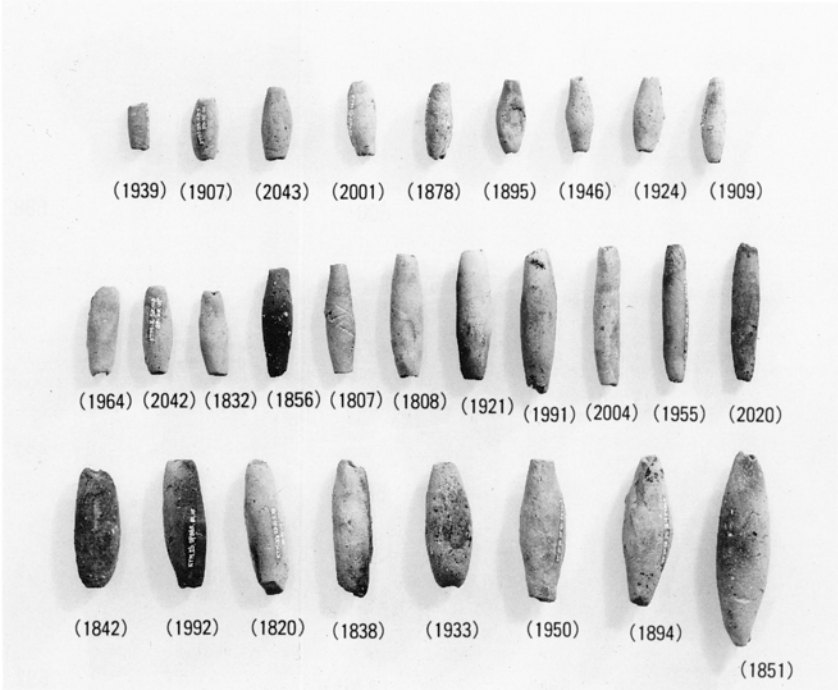
258

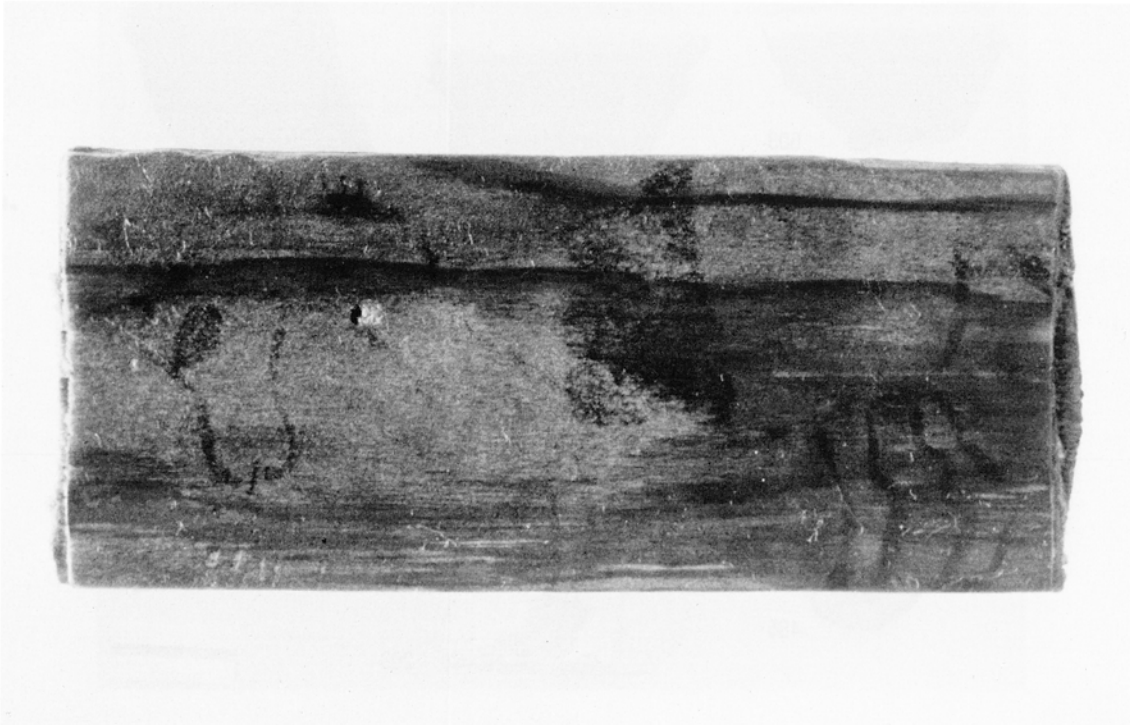
出 土 遺 物（その2）


589
600
588
(1760)
586
587
691
(1761)
692


603
364
565
673
394
491
485
203

出 土 遺 物（その3）


(1939) (1907) (2043) (2001) (1878) (1895) (1946) (1924) (1909)
(1964) (2042) (1832) (1856) (1807) (1808) (1921) (1991) (2004) (1955) (2020)
(1842) (1992) (1820) (1838) (1933) (1950) (1894)
(1851)



出 土 遺 物（その4）

(1203)

(1590)

661

(1598)

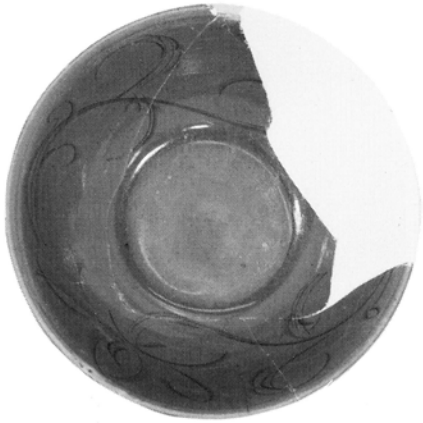
450

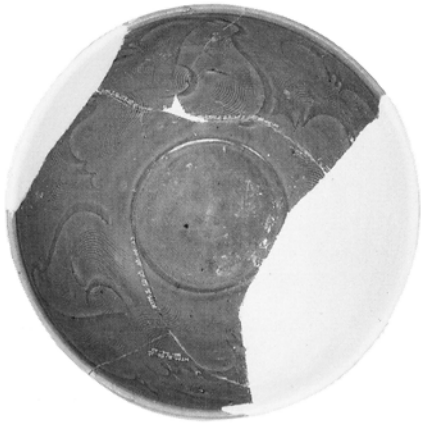
680

678

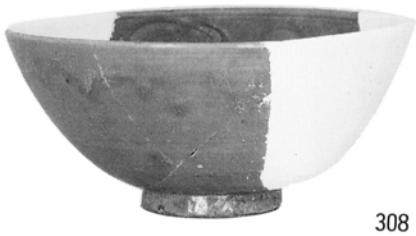
307

453



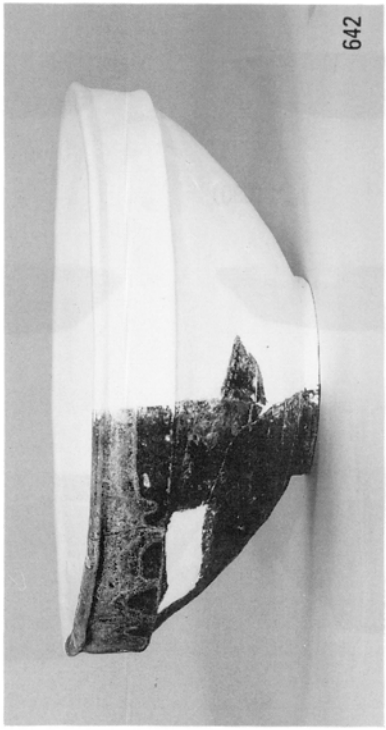


312



308

出 土 遺 物（その5）



出 土 遺 物（その6）

粕屋郡粕屋町

戸原麦尾遺跡(Ⅲ)

－福岡市埋蔵文化財調査報告書第217集－

１９９０年３月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目8-1

粕屋郡粕屋町

to bara mugi o

戸原麦尾遺跡(III)

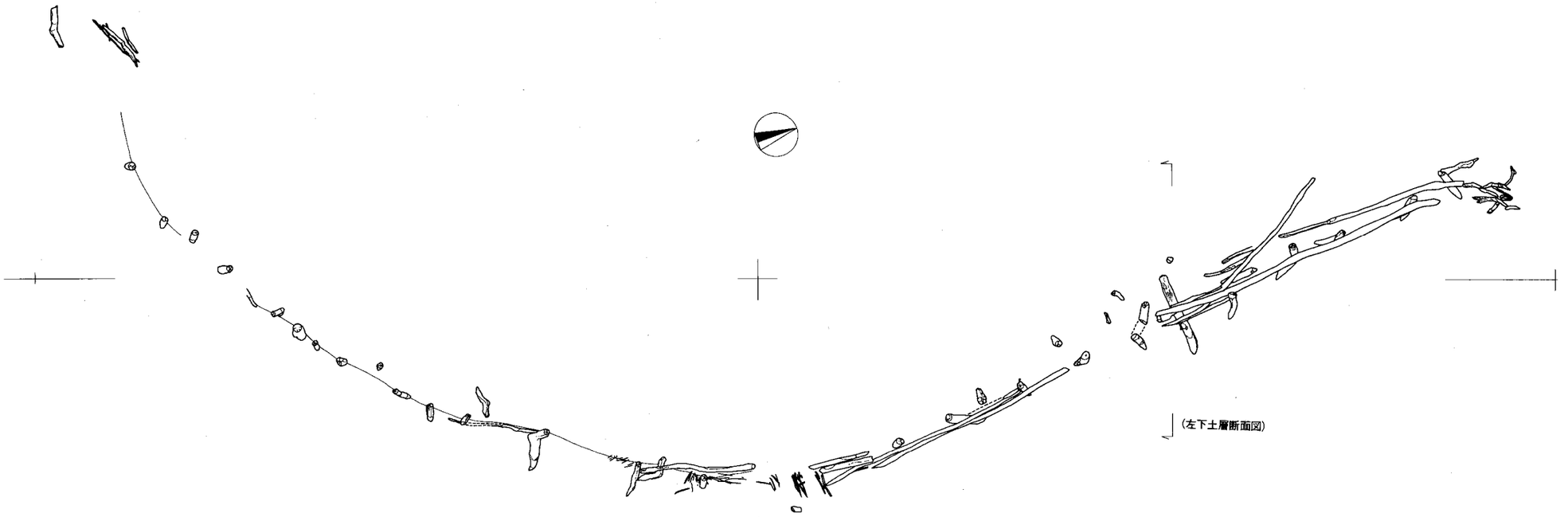
福岡市埋蔵文化財調査報告書第217集

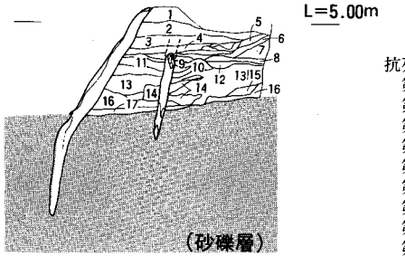
付図

付図1　戸原麦尾遺跡遺構分布全体図(1/500)
付図2　戸原麦尾遺跡第Ⅰ区b区遺構分布部分図(1/200)
付図3　戸原麦尾遺跡第Ⅱ区遺構分布全体図(1/200)
付図4　第Ⅱ区杭列(SA11)平面および見通し図(1/50)
付図5　第Ⅲc区溝(SD61)内杭列平面および見通し図(1/50)

1990

福岡市教育委員会





抗列（SA11）土層面所見

第１層　明灰色シルト
第２層　明灰～灰色シルト
第３層　灰色シルト
第４層　灰色砂層
第５層　明灰色砂層(粘土ブロック含む)
第６層　灰色砂層
第７層　灰～灰褐色砂層(鉄分含む)
第８層　灰色砂層
第９層　灰色砂層
第10層　灰色粘土
第11層　灰色粘土(砂層互層)
第12層　灰色シルト
第13層　灰色～明灰褐色砂層
第14層　明灰～青灰色粘土
第15層　明灰色粘土
第16層　暗灰色粘土
第17層　暗灰色～黒灰色粘土

0　1　2　3m

付図４　第Ⅱ区抗例（SA11）平面および見通し図(1/50)